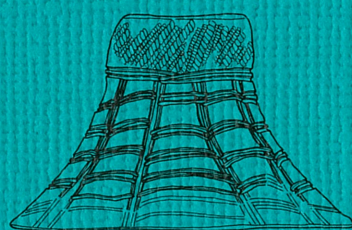


常磐自動車道遺跡調査報告10

白岩堀ノ内遺跡



本文

1997年2月

福島県教育委員会
福島県文化センター
日本道路公団



口絵1 遺跡位置



口絵2 白岩堀ノ内遺跡全景



口絵3 白岩堀ノ内遺跡2・14号住居跡



口絵4 白岩堀ノ内遺跡LⅢ・Ⅳb水田跡



口絵5 白岩堀ノ内遺跡出土弥生土器



口絵6 白岩堀ノ内遺跡出土石器

序 文

福島県では、「新世紀ふくしま」の新しい交通体系の確立をめざし、高速交通網の整備をすすめておりますが、それに伴う開発による発掘調査も増加してまいりました。福島空港関係や、磐越自動車道関係でも多くの遺跡の発掘調査が実施され貴重な埋蔵文化財が記録として保存されております。

常磐自動車道は、昭和63年に埼玉県三郷～いわき中央間まで開通し、現在は、いわき中央～いわき四倉間の建設工事が行われております。

この常磐自動車道いわき中央～いわき四倉間にも、先人が残した数多くの文化遺産が埋蔵されており、いわき市教育委員会が平成元年度に分布調査を実施し、周知の埋蔵文化財包蔵地を含め29遺跡を確認しました。

平成5年度、福島県教育委員会はこれらの埋蔵文化財包蔵地の範囲や性格を確かめるための試掘調査を行い、その結果を基に、日本道路公団東北支社いわき工事事務所と遺跡の保存協議を重ねましたが、現状保存が困難な白岩堀ノ内遺跡については、平成7年度に発掘調査を実施いたしました。

本報告書は、いわき市四倉町に所在する白岩堀ノ内遺跡の発掘調査についての報告書であります。今後この報告書が地域の歴史を解明するための基礎資料として利用されるとともに、生涯学習の研究資料として広く県民の皆様に活用いただければ幸いと存じます。

最後に、発掘調査から報告書刊行まで、ご協力いただいた日本道路公団、(財)福島県文化センターをはじめとする関係機関並びに関係者各位に対し感謝の意を表するものであります。

平成9年2月

福島県教育委員会

教育長

渡 邊 貞 雄

あ い さ つ

磐越自動車道郡山～いわき間の開通により東北自動車道と常磐自動車道が結ばれ、県内の高速交通網はますます充実してまいりました。また常磐自動車道も、いわき中央～いわき四倉間の工事が本格化してまいりました。

財団法人福島県文化センターでは、福島県教育委員会からの委託を受けて、県内の大規模開発に先立ち、対象地域内にある埋蔵文化財の調査を実施しております。平成6年度からは常磐自動車道いわき中央～いわき四倉間にかかる遺跡の発掘調査を開始してまいりました。

本報告書は、平成7年度と8年度の2か年にわたって実施いたしました、いわき市四倉町に所在する白岩堀ノ内遺跡の調査結果をまとめたものです。遺跡からは弥生時代の集落跡や遺物包含層、古墳時代から平安時代の集落跡と水田跡が発見されました。特に、出土しました弥生時代の鉄製銚は本県では最古のものであります。これらの資料は、地域の歴史を解明するため大変貴重な資料でありますので、歴史研究や郷土の理解のために、有効に活用されるよう心から願う次第であります。

最後に、発掘調査にご協力いただきました日本道路公団仙台建設局いわき工事事務所、福島県土木部、福島県土地開発公社、いわき市土木部、いわき市教育委員会、財団法人いわき市教育文化事業団ならびに地元の方々に深く感謝の意を表します。

なお、埋蔵文化財の保護につきまして、今後ともより一層のご理解とご協力を賜りますようお願いいたします。

平成9年2月

財団法人 福島県文化センター

館 長 新 妻 威 男

図171 6号遺物包含層出土弥生土器(7)	238
図172 6号遺物包含層出土弥生土器(8)	239
図173 6号遺物包含層出土弥生土器(9)	240
図174 6号遺物包含層出土弥生土器(10)	241
図175 6号遺物包含層出土弥生土器(11)	242
図176 6号遺物包含層出土弥生土器(12)	243
図177 6号遺物包含層出土弥生土器(13)	244
図178 6号遺物包含層出土弥生土器・ 須恵器	245
図179 6号遺物包含層出土石器(1)	248
図180 6号遺物包含層出土石器(2)	249
図181 1号性格不明遺構, 出土土師器	250
図182 2号性格不明遺構, 出土土師器・須恵器	252
図183 1・2号畑跡	253
図184 遺構外出土縄文土器・弥生土器(1)	254
図185 遺構外出土弥生土器(2)	255
図186 遺構外出土弥生土器(3)	256
図187 遺構外出土弥生土器(4)	257
図188 遺構外出土土師器・須恵器・陶器	259
図189 遺構外出土須恵器・銭貨	260
図190 遺構外出土石器(1)	261

〔表〕

表1 常磐自動車道発掘調査遺跡一覧	5
表2 関連する周辺の遺跡	13
表3 8号住居跡ピット計測表	48

〔付 図〕

白岩堀ノ内遺跡全体図

図191 遺構外出土石器(2)	262
図192 試掘調査出土弥生土器	263
図193 試掘調査出土石器	264
図194 壺形土器(1)	267
図195 壺形土器(2)	268
図196 甕形土器	270
図197 鉢・高杯・蓋・手捏土器	272
図198 III・IV群土器, 底部資料	273
図199 遺物包含層出土弥生土器器種・組成率	274
図200 施文具別比率と器種組成の割合	275
図201 出土石器(1)	279
図202 出土石器(2)	280
図203 出土石器(3)	281
図204 出土石器(4), 鉄製品	282
図205 石器組成率	283
図206 遺構別遺物出土率と土器・石器の組成率	284
図207 弥生時代の遺構配置図	287
図208 古代の土器変遷	291
図209 古代の住居跡の分布と出土遺物, LVIb出土土師器	293
図210 水田跡変遷図	296

表4 土坑一覧	303
表5 出土石器一覧(1)～(5)	304
表6 出土木製品一覧(1)・(2)	307

緒 言

1. 本書は、常磐自動車道（いわき中央～いわき四倉）遺跡発掘調査のうち平成7年度と平成8年度の2か年にわたって実施した白岩堀ノ内遺跡の報告書である。
埋蔵文化財番号；20401025 ^{しらいわほりのうち} 白岩堀ノ内館跡 いわき市四倉町大字中島字三反田ほか
周知の遺跡である白岩堀ノ内館跡のうち、館跡以外を白岩堀ノ内遺跡とした。
2. 本遺跡発掘調査事業は、福島県教育委員会が日本道路公団の協力を得て実施し、調査に係る経費は日本道路公団が負担している。
3. 福島県教育委員会は、発掘調査を財団法人福島県文化センターに委託した。
4. (財)福島県文化センターは、事業第二部遺跡調査課の下記の職員を配して、調査に当たった。

平成7年度（1次調査）

文化財主査	大越 道正	文化財副主査	飯村 均
専門文化財主査	佐久間ふく子	文化財副主査	福島 稔
文化財主査	佐久間芳雄	文化財副主査	本間 宏
文化財主査	岡田 光生	文化財副主査	宮田 安志
文化財主査	石本 弘	文化財副主査	吉田 功
文化財主査	安田 稔	文化財主事	佐藤 祐雄
文化財主査	橋本 幸男	文化財主事	小野田義和
文化財主査	内村 勝男	文化財主事	笹山 恵子
文化財副主査	高村亮一郎	文化財主事	酒井 優
文化財副主査	水谷 勝雄	文化財主事	井 憲治
文化財副主査	渡辺 悦子	嘱 託	戸田 伸夫（平成7年6月まで）
文化財副主査	鈴木 孝秀	嘱 託	石井 洋光（平成7年7月から）

臨時的に、文化財主査中川光衛・寺島文隆・鈴木良一・松本武史・土井昭二・福島雅儀、
文化財副主査本田公成・桑折壮一・山岸英夫、文化財主事阿部孝平・青山博樹の協力を得た。

平成8年度（2次調査）

文化財主査	大越 道正	文化財副主査	菅野 昌弘
文化財主査	松本 武史	文化財副主査	吉田 功
文化財主査	佐久間芳雄	文化財主事	笹山 恵子
文化財主査	安田 稔	文化財主事	井 憲治
文化財主査	須田 尚人	文化財主事	国井 秀紀

文化財副主査	小林 弘子	文化財主事	今野 徹
文化財副主査	福島 稔	文化財主事	青山 博樹
文化財副主査	本間 宏	嘱 託	鈴木 一寿

臨時的に、文化財副主査飯村均・文化財主事阿部孝平の協力を得た。

5. 本書は、佐久間ふく子・安田・佐久間芳雄・内村・飯村・福島・鈴木孝秀・吉田・宮田・佐藤・酒井・井・石井が分担執筆し、文責は文末に明記した。各原稿の加除修正と、全体の調整・編集は井が担当した。また、弥生時代の遺構・遺物、水田跡については、文化財副主査吉田秀享の指導・助言によるところが大きい。

6. 本書に掲載した自然科学分析、空中写真撮影、地形測量等については、次の個人および団体の協力を得、その成果・考察を掲載した。(順不同・敬称略)

鉄製品・鉄滓分析	：川鉄テクノロジー株式会社	分析・評価センター	千葉事業所
金属学的考察	：大澤正己		
プラント・オパール	：株式会社	古環境研究所	
火山灰分析	：株式会社	古環境研究所	
リン・カルシウム分析	：パリノ・サーヴェイ株式会社		
炭化材樹種同定	：パリノ・サーヴェイ株式会社		
木製品樹種同定	：パリノ・サーヴェイ株式会社		
石質鑑定	：真鍋健一	(福島大学教育学部地学教室)	
空中写真・航空写真撮影	：有限会社	南会測量・株式会社	オリス
地形測量	：株式会社	オリス	

7. 本書に使用した地図は、建設省国土地理院長の承認を得て、同院発行の地形図(2.5万分の1)を複製したものである。承認番号；平8複第20号。

8. 発掘調査から本報告書を作成するまでに、次の機関および個人の方々から指導・助言・協力を得た。(順不同・敬称略)

福島県いわき建設事務所、福島県土木部高速道路整備室、いわき市土木部土木課
 いわき市四倉支所、いわき市教育委員会、財団法人いわき市教育文化事業団
 広野町教育委員会、小野町企画開発課・総務課、富岡町教育委員会、楢葉町教育委員会
 福島土地開発公社いわき支所、いわき市四倉町中島地区・行政区長、福島県立博物館
 宇佐見雅夫・斉藤義弘・鈴木隆康・高島好一・馬目順一・森幸彦・渡辺一雄
 松田隆嗣・樫村友延

9. 本文中に掲載した人名については敬称を省略させていただいた。

10. 本書に収録した調査記録および出土資料は、福島県教育委員会が保管している。

用 例

1. 本書で使用した略号は、以下のとおりである。

いわき市… IWK 白岩堀ノ内遺跡… SHU

[遺構等]

遺構外堆積土… L 遺構内堆積土… ℓ 竪穴住居跡… SI 土 坑… SK

溝 跡 …SD 焼 土 跡… SG ピット… P 性格不明遺構… SX






2. 引用・参考文献は、執筆者の敬称を省略し、参考文献として巻末に収めた。

3. 本書における遺構図の用例は、以下のとおりである。

- (1) 方 位 遺構図・地形図の方位は真北を指す。座標南北線は真北を示す。
- (2) 標 高 標高および水系レベルは海拔標高を示す。
- (3) 縮 尺 縮尺率は掲載する遺構の大きさと性格により便宜決定した。選択した縮尺率については、スケールの脇に表示した。遺構図は原則として、竪穴住居跡は1/50、土坑は1/40、製鉄炉跡は1/50・1/80、溝跡は1/80・1/100、性格不明遺構は1/40とし、カマド跡や焼土跡等の小規模なものは1/30の縮尺率とした。
- (4) ケ バ 原則として遺構内の傾斜面は π で表示したが、相対的に緩傾斜の部分は π で表している。また、 π は後世の削平が明らかである場合に使用した。なお、風倒木跡やその他の攪乱による範囲には、遺構の緩傾斜と同じ π のケバを使用し、「カクラン」などの語句を明記して区別している。
- (5) 土 層 遺構外の自然堆積土はローマ数字で表記し、遺構内堆積土は算用数字で表記した。

[例] 遺構外自然堆積土 L I・L II… , 遺構内堆積土 ℓ 1・ ℓ 2…

- (6) ピットの深さ 平面図の()内の数値または一覧表、単位cm。
- (7) 網 点 挿図中の網かけ等については、その範囲や広がり等について下記の種類で表示した。

	酸化面		粘土		重複する遺構
	木炭散布範囲		カマドソデ		

- (8) 実測図 遺構実測図の具体的な用例は実測図用例(1)に示した。

4. 本書における遺物実測図の用例は、以下のとおりである。

- (1) 縮 尺 縮尺率はスケールの脇に表示したが、原則的には土器を1/3・2/5、石器を1/3・2/3、拓本を2/5縮尺とした。

- (2) 土器断面 弥生土器・土師器は断面を白ヌキで表記し、須恵器は断面を黒つぶしで表示した。粘土の積み上げ痕は器面では実線、断面では一点鎖線の表記をした。
- (3) 黒色処理 土師器における黒色処理は、その処理面を網点で表示した。

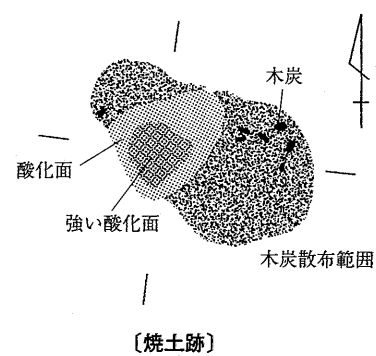
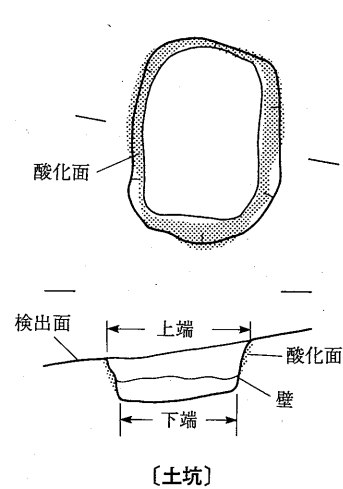
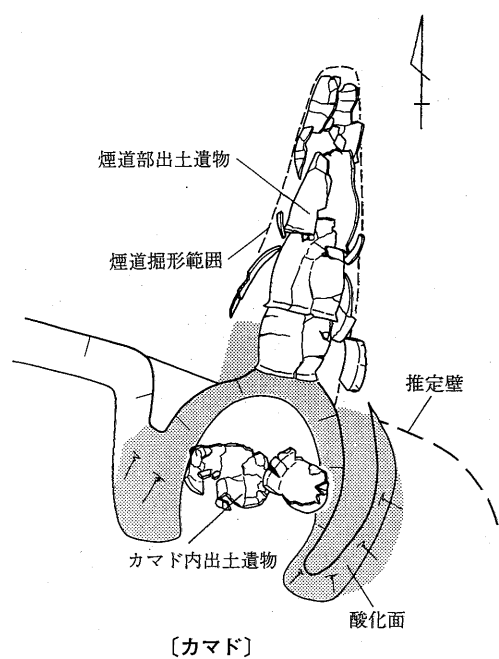
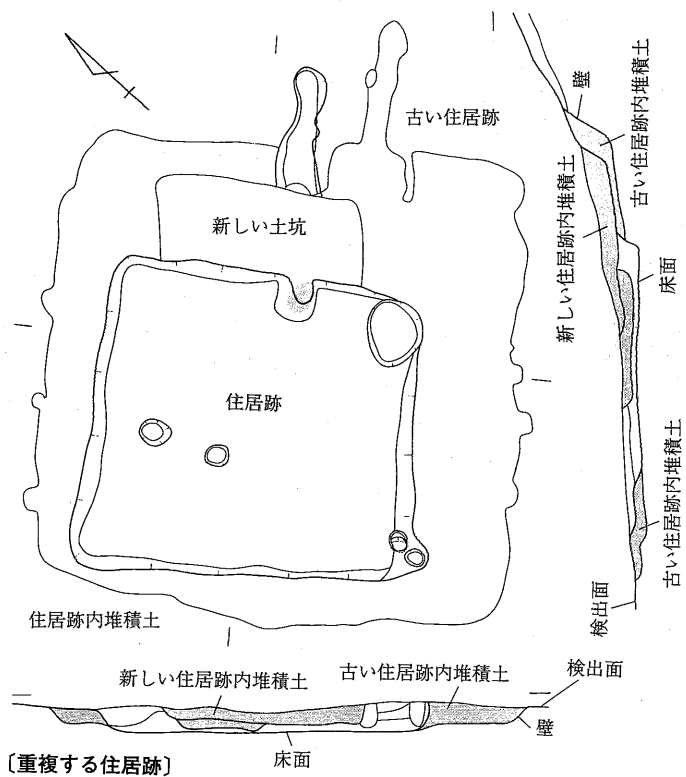


黒色処理



黒変

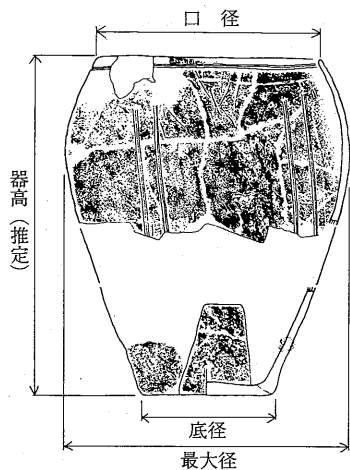
- (4) 実測図 上記以外の遺物実測図の用例は実測図用例(2)～(4)に示した。
5. 文章中の出土遺物点数は、すべて破片点数である。
6. 遺物については各頁ごとに1番から番号を付し、本文中ではその番号を挿図番号と組合わせて遺物番号としている。[例] 図43の21番 … 43-21
また、掲載土器の出土位置・層位は、その右下の()内に示している。
7. 本書における写真図版の用例は、挿図番号と対照できるように、遺物写真図版中に「図」を略して示した。 [例] 図33の10番 … 33-10



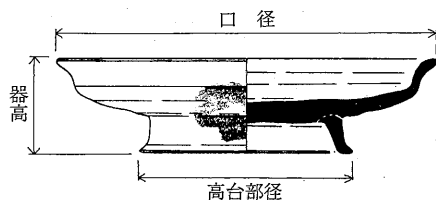
実測図用例 (1)



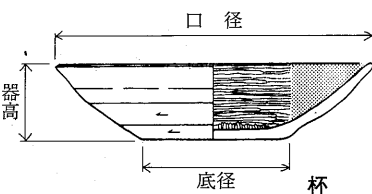
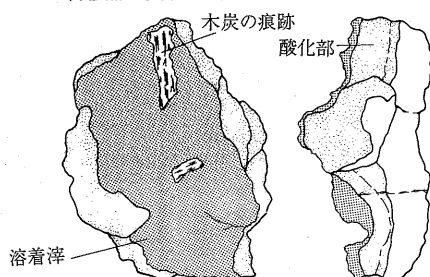
縄文土器（拓影）



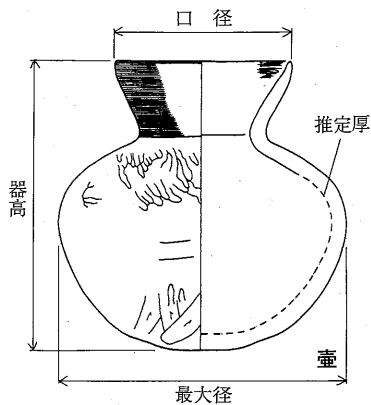
縄文土器 深鉢



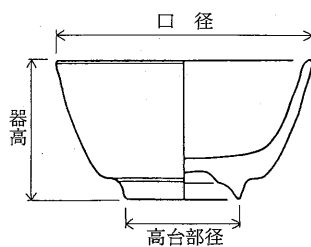
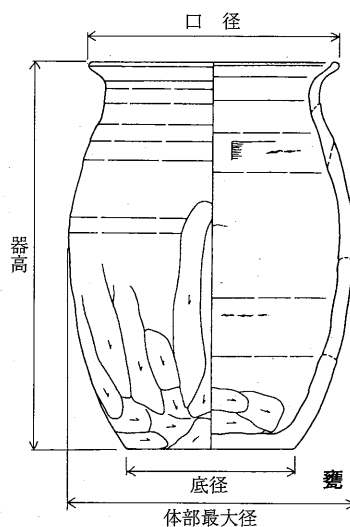
須恵器 高台付杯・盤



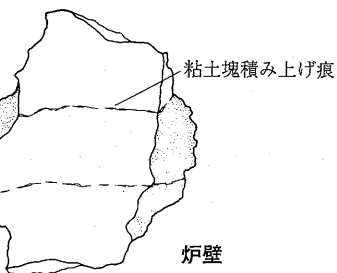
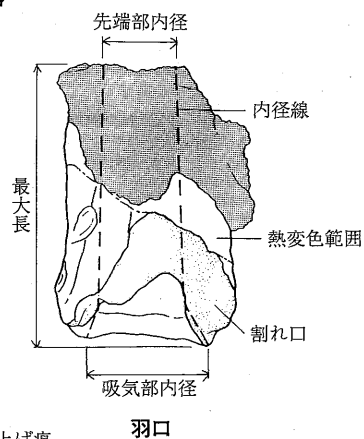
杯



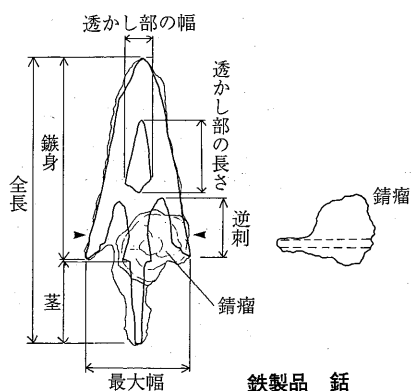
土師器



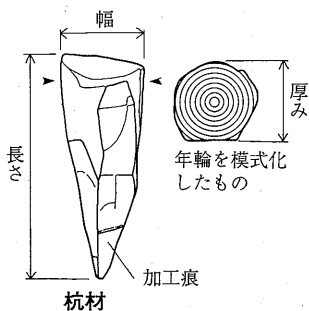
陶磁器 碗



炉壁

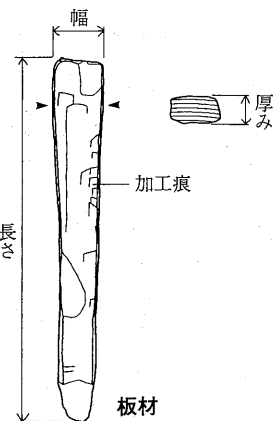


鉄製品 鋸



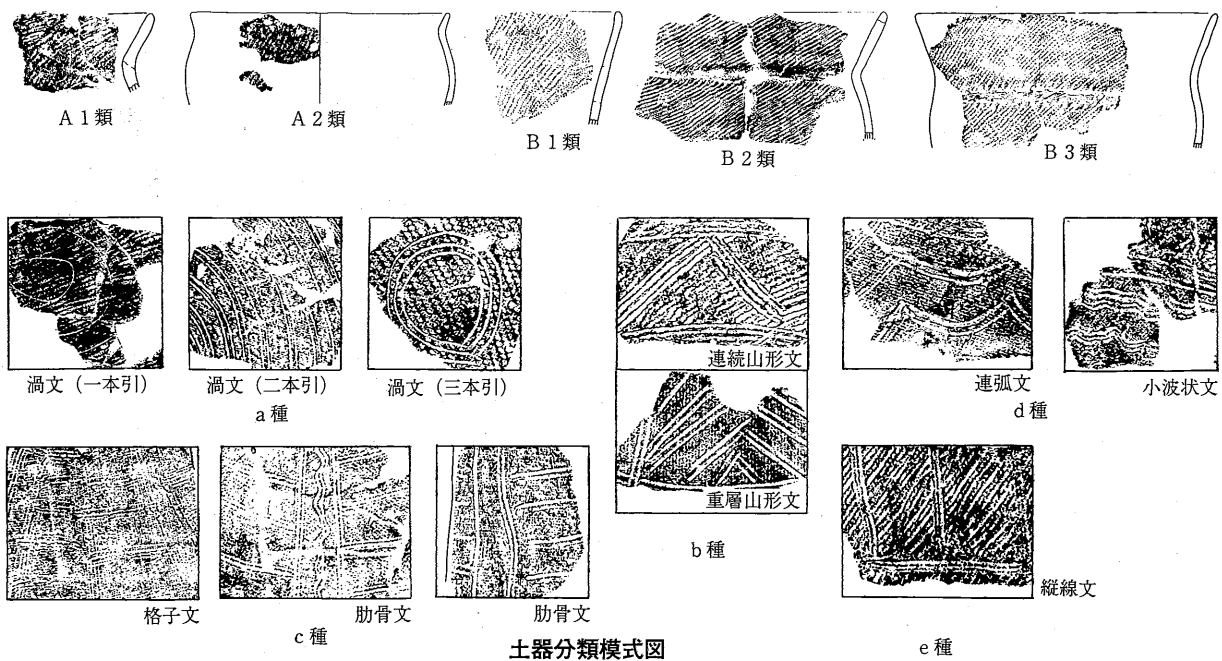
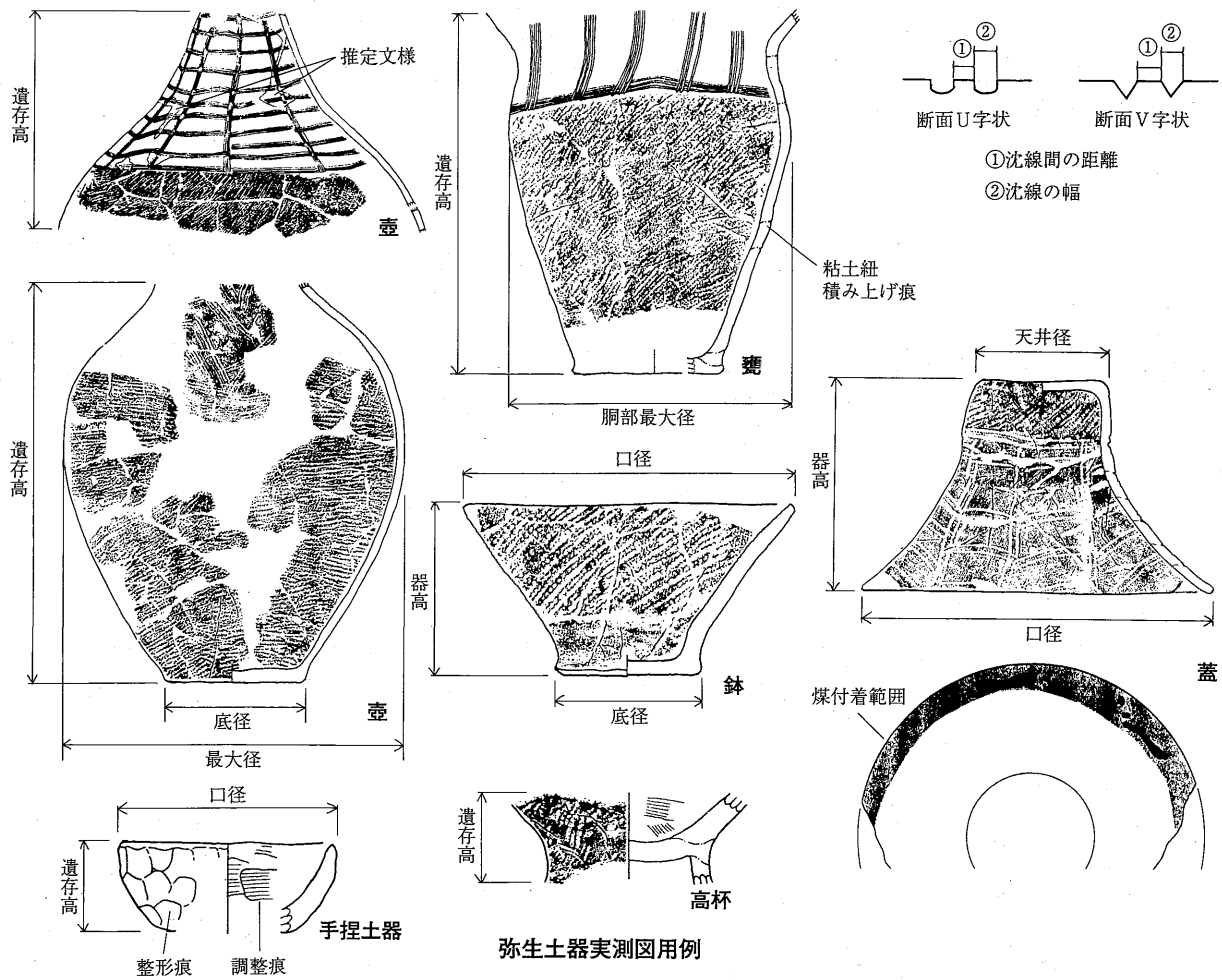
杭材

木製品

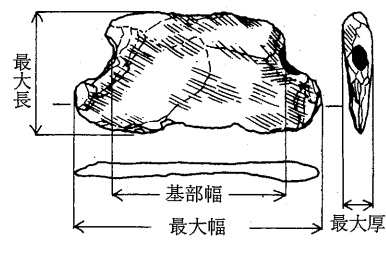
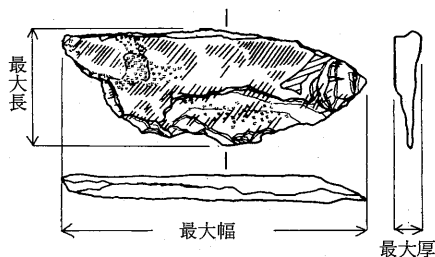
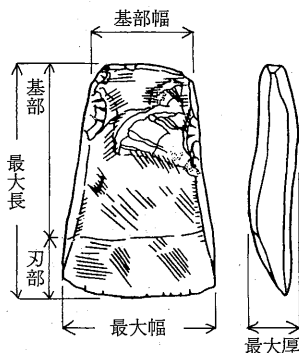
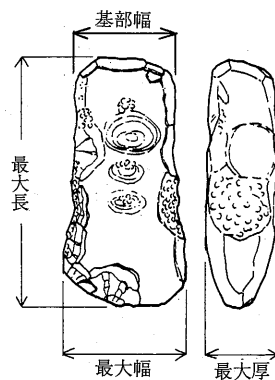
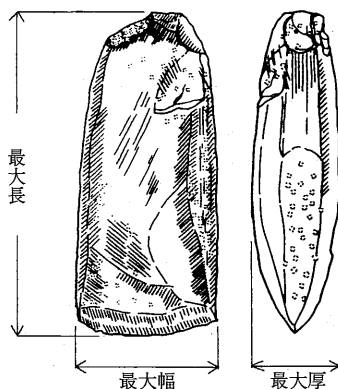
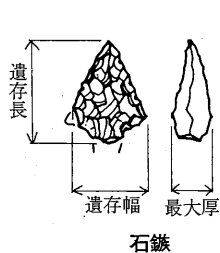


板材

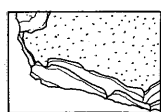
実測図用例（2）



実測図用例 (3)



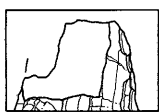
石器計測位置及び各部名称用例



自然面



節離面



欠損部



一次整形剥離
(階段状剥離)



微細剥離



回転による擦痕



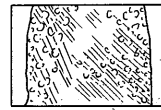
一次整形後の研磨痕



一次整形後の叩き痕



一次整形後の叩き痕
+ 研磨痕



研磨後の叩き痕



線条痕



使用痕・研磨痕



火熱痕



摩耗痕

石器実測図用例

実測図用例 (4)

目 次

第1章 調査経過と周辺環境	1
第1節 調査に至るまでの経過	1
第2節 調査経過	3
第3節 調査方法	7
第4節 自然的環境	9
第5節 歴史的環境	11
第2章 遺構と遺物	17
第1節 基本土層と遺構の分布	19
第2節 竪穴住居跡	24
1号住居跡 (24) 2・14号住居跡 (28) 3号住居跡 (36) 4号住居跡 (38)	
5号住居跡 (39) 6号住居跡 (41) 7号住居跡 (44) 8号住居跡 (46)	
9号住居跡 (51) 10号住居跡 (54) 11号住居跡 (57) 12号住居跡 (59)	
13号住居跡 (62) 15号住居跡 (65) 16号住居跡 (71)	
第3節 土 坑	72
1号土坑 (72) 2号土坑 (73) 3号土坑 (74) 4号土坑 (76)	
5号土坑 (76) 6号土坑 (78) 7号土坑 (80) 8号土坑 (80)	
9号土坑 (82) 10号土坑 (83) 11号土坑 (83) 12号土坑 (85)	
13号土坑 (85) 14号土坑 (87) 15号土坑 (89) 16号土坑 (89)	
17号土坑 (90) 18号土坑 (90) 19号土坑 (93) 20号土坑 (94)	
第4節 製鉄炉跡	94
1号製鉄炉跡・6号溝跡 (95)	
第5節 土器埋設遺構	104
1号土器埋設遺構 (104) 2号土器埋設遺構 (107) 3号土器埋設遺構 (108)	
4号土器埋設遺構 (110)	
第6節 溝 跡	111
1号溝跡 (112) 2号溝跡 (114) 3号溝跡 (117) 4号溝跡 (118)	
7号溝跡 (120) 8号溝跡 (121) 9号溝跡 (122)	
第7節 焼 土 跡	126
1号焼土跡 (126)	

第8節 水田跡	127
層位と分布 (127)	
LⅢb, 5号溝跡 (134)	
LⅣb (147)	
LⅤa, 10号溝跡 (153)	
LⅤb, 13・14号溝跡 (157)	
LⅥb, 15・16号溝跡 (159)	
LⅨb, 11・12号溝跡 (165)	
LⅩb (165)	
第9節 遺物包含層	168
層位と分布 (168)	
1・2号遺物包含層 (170)	
3号遺物包含層 (202)	
4号遺物包含層 (208)	
5号遺物包含層 (220)	
6号遺物包含層 (227)	
第10節 その他の遺構と遺物	250
1号性格不明遺構 (250)	
2号性格不明遺構 (251)	
1・2号畑跡 (252)	
遺構外出土遺物 (253)	
試掘調査出土遺物 (263)	
第3章 考察	266
第1節 弥生時代の遺構と遺物	266
第2節 古墳時代以降の遺構と遺物	290
第3節 まとめ	298
付 章	309
付章1 いわき市白岩堀ノ内遺跡の火山灰分析	309
付章2 いわき市白岩堀ノ内遺跡のプラント・オパール分析	315
付章3 いわき市白岩堀ノ内遺跡における木製品・炭化材の樹種同定	327
付章4 いわき市白岩堀ノ内遺跡における土器埋設遺構の リン・カルシウム分析	341
付章5 いわき市白岩堀ノ内遺跡出土製鉄関連遺物と 弥生時代銛の金属学的調査	345

挿 図・表 目 次

〔挿 図〕

図1 常磐自動車道（いわき中央～ いわき四倉）位置図	1	図39 15号住居跡カマド，出土土師器	68
図2 白岩堀ノ内遺跡と路線予定図	2	図40 15号住居跡出土土師器	69
図3 発掘調査遺跡位置図	4	図41 15号住居跡出土土師器・須恵器	70
図4 グリッド配置図	8	図42 16号住居跡，出土弥生土器	72
図5 いわき市四倉・久ノ浜地区地質図	10	図43 土坑位置図	73
図6 周辺の遺跡	12	図44 1～3号土坑	75
図7 基本土層柱状図	20	図45 4号土坑	77
図8 遺構配置模式図	22	図46 5・6号土坑	79
図9 遺跡周辺地形図	23	図47 7・8号土坑	81
図10 住居跡位置図	25	図48 9・10号土坑	84
図11 1号住居跡	26	図49 11～13号土坑	86
図12 1号住居跡カマド	27	図50 14号土坑	88
図13 1号住居跡出土土師器	28	図51 15～20号土坑	91
図14 2号住居跡	29	図52 3・9～11号土坑出土弥生土器・ 石器	92
図15 2号住居跡煙道部	30	図53 14・16号土坑出土陶磁器・羽口・ 土師器	93
図16 14号住居跡	31	図54 1号製鉄炉跡(1)	96
図17 14号住居跡カマド・ピット	32	図55 1号製鉄炉跡(2)	97
図18 2号住居跡出土土師器・須恵器・ 石器・鉄製品	34	図56 6号溝跡	98
図19 14号住居跡出土土師器・須恵器	35	図57 1号製鉄炉跡出土炉壁	100
図20 3号住居跡，出土石器	37	図58 1号製鉄炉跡出土羽口・弥生土器	102
図21 4号住居跡，出土土師器・須恵器	38	図59 6号溝跡出土弥生土器・石器	103
図22 5号住居跡	40	図60 土器埋設遺構位置図	105
図23 5号住居跡出土弥生土器・石器	41	図61 1号土器埋設遺構，出土弥生土器	106
図24 6号住居跡	42	図62 2号土器埋設遺構，出土弥生土器	107
図25 6号住居跡出土弥生土器・石器	43	図63 3号土器埋設遺構	108
図26 7号住居跡，出土弥生土器・石器	45	図64 3号土器埋設遺構出土弥生土器	109
図27 8号住居跡，カマド	47	図65 4号土器埋設遺構	110
図28 8号住居跡出土土師器・須恵器・ 鉄製品	50	図66 4号土器埋設遺構出土弥生土器	111
図29 9号住居跡	52	図67 溝跡位置図	112
図30 9号住居跡出土土師器・須恵器	53	図68 1号溝跡，出土陶磁器・羽口	113
図31 10号住居跡，カマド， 出土弥生土器・石器	55	図69 2号溝跡，出土縄文土器・土師器・ 陶磁器	115
図32 11号住居跡	57	図70 3号溝跡	117
図33 11号住居跡出土弥生土器・石器	59	図71 4号溝跡，出土陶磁器	119
図34 12号住居跡カマド	60	図72 7号溝跡	121
図35 12号住居跡出土土師器・須恵器	61	図73 8号溝跡	122
図36 13号住居跡	63	図74 9号溝跡	123
図37 13号住居跡出土土師器・石器	64	図75 9号溝跡出土弥生土器・土師器・ 須恵器・石器	125
図38 15号住居跡	66	図76 1号焼土跡	126

図77	水田跡位置図	127
図78	水田跡基本土層断面(1)	128
図79	水田跡基本土層断面(2)	129
図80	1~3号トレンチ断面	131
図81	4号トレンチ断面	132
図82	5号トレンチ断面	133
図83	北側水田跡断面	134
図84	LⅢ水田跡(1)	135
図85	LⅢ水田跡(2)	136
図86	5号溝跡	138
図87	5号溝跡断面	139
図88	LⅢb出土土師器・須恵器・木製品	141
図89	5号溝跡出土土師器・須恵器・石器	143
図90	5号溝跡出土木製品(1)	144
図91	5号溝跡出土木製品(2)	145
図92	5号溝跡出土木製品(3)	146
図93	LⅣb水田跡(1)	148
図94	LⅣb水田跡(2)	149
図95	LⅣb水田跡(3)	150
図96	LⅣ出土土師器・須恵器・弥生土器・ 石器	151
図97	LⅤa水田跡(1)	154
図98	LⅤa水田跡(2)	155
図99	LⅤb水田跡	156
図100	LⅤ出土須恵器・弥生土器・石器	158
図101	LⅥb水田跡	160
図102	15・16号溝跡断面	161
図103	LⅥb出土土師器	163
図104	LⅥb出土須恵器・木製品	164
図105	LⅨb水田面	166
図106	LⅩb面	167
図107	1・2・5号遺物包含層位置図	169
図108	1・2号遺物包含層	171
図109	1号遺物包含層断面	172
図110	2号遺物包含層断面	173
図111	1・2号遺物包含層出土遺物分布図	174
図112	1号遺物包含層出土弥生土器(1)	175
図113	1号遺物包含層出土弥生土器(2)	176
図114	1号遺物包含層出土弥生土器(3)	177
図115	1号遺物包含層出土弥生土器(4)	178
図116	1号遺物包含層出土弥生土器(5)	179
図117	1号遺物包含層出土土師器・須恵器・ 鉄製品・銭貨	180
図118	1号遺物包含層出土石器(1)	182
図119	1号遺物包含層出土石器(2)	183
図120	1号遺物包含層出土石器(3)	185
図121	1号遺物包含層出土石器(4)	186
図122	1号遺物包含層出土石器(5)	187

図123	2号遺物包含層出土弥生土器(1)	188
図124	2号遺物包含層出土弥生土器(2)	191
図125	2号遺物包含層出土弥生土器(3)	192
図126	2号遺物包含層出土弥生土器(4)	193
図127	2号遺物包含層出土弥生土器(5)	194
図128	2号遺物包含層出土弥生土器(6)	195
図129	2号遺物包含層出土弥生土器(7)	196
図130	2号遺物包含層出土弥生土器(8)	197
図131	2号遺物包含層出土弥生土器(9)	198
図132	2号遺物包含層出土埴埴・須恵器	199
図133	2号遺物包含層出土石器(1)	200
図134	2号遺物包含層出土石器(2)	201
図135	3・4・6号遺物包含層位置図	203
図136	3号遺物包含層	204
図137	3号遺物包含層出土遺物分布図	204
図138	3号遺物包含層断面	205
図139	3号遺物包含層出土弥生土器	206
図140	3号遺物包含層出土弥生土器・石器	207
図141	4号遺物包含層	208
図142	4号遺物包含層断面	209
図143	4号遺物包含層出土遺物分布図	210
図144	4号遺物包含層出土弥生土器(1)	211
図145	4号遺物包含層出土弥生土器(2)	212
図146	4号遺物包含層出土弥生土器(3)	213
図147	4号遺物包含層出土弥生土器(4)	214
図148	4号遺物包含層出土弥生土器(5)	215
図149	4号遺物包含層出土弥生土器(6)	216
図150	4号遺物包含層出土弥生土器(7)	217
図151	4号遺物包含層出土石器(1)	218
図152	4号遺物包含層出土石器(2)	219
図153	5号遺物包含層	220
図154	5号遺物包含層断面	221
図155	5号遺物包含層出土遺物分布図	221
図156	5号遺物包含層出土弥生土器(1)	222
図157	5号遺物包含層出土弥生土器(2)	223
図158	5号遺物包含層出土須恵器	224
図159	5号遺物包含層出土石器(1)	225
図160	5号遺物包含層出土石器(2)	226
図161	6号遺物包含層	227
図162	6号遺物包含層断面	228
図163	6号遺物包含層出土遺物分布図(1)	229
図164	6号遺物包含層出土遺物分布図(2)	230
図165	6号遺物包含層出土弥生土器(1)	231
図166	6号遺物包含層出土弥生土器(2)	232
図167	6号遺物包含層出土弥生土器(3)	233
図168	6号遺物包含層出土弥生土器(4)	235
図169	6号遺物包含層出土弥生土器(5)	236
図170	6号遺物包含層出土弥生土器(6)	237

第1章 調査経過と周辺環境

第1節 調査に至るまでの経過

昭和44年埼玉県三郷～茨城県千代田石岡間の基本計画に始まった常磐自動車道は、その路線を徐々に北に延ばし、昭和63年3月には基本計画茨城県千代田石岡～福島県いわき四倉間の内、いわき中央インターチェンジ（以下、ICと言う）までが開通している。未開通であったいわき中央IC～いわき四倉までの区間については、遅れて平成元年に整備基本計画路線となり、現在平成9年の供用開始にむけて建設計画が進められている。なお、いわき四倉以北の延伸分については、宮城県亘理までの基本計画がすでに決定しており、平成5年には福島県いわき四倉～福島県富岡間の施行命令が出されている。

財団法人福島県文化センターが、常磐自動車道に関わる埋蔵文化財の調査に携わったのは、平成5年2月にもたれた福島県企画調整部総合交通課・日本道路公団仙台建設局いわき工事事務所・福島県教育委員会文化課・いわき市教育委員会文化課・いわき市都市整備課・財団法人いわき市教育文化事業団・財団法人福島県文化センターの7者協議からである。協議ではいわき中央IC～いわき四倉間の自動車道路線内に所在する埋蔵文化財の取扱について話し合われ、その結果好間町および平赤井・平窪地区に所在する13遺跡についてはいわき市教育委員会文化課並びに財団法人いわき市教育文化事業団が調査を実施し、四倉町大野地区に所在する16遺跡については福島県教育委員会並びに財団法人福島県文化センターが調査を担当することを確認した。

上記経緯の中で福島県教育委員会では平成5年度から新規事業として常磐自動車道関連埋蔵文化財調査に着手し、福島県文化センターにその調査を委託している。平成5年度の常磐自動車道関連埋蔵文化財調査は手始めとして試掘調査計画が策定され、福島県文化センターでは地権者からの承諾書が揃うのを待って10月20日から担当分である16遺跡の総面積162,600㎡を対象に調査を開始している。その結果12月23日までに9遺跡69,900㎡の路線内要保存面積を確定したが、調査条件が整わず試掘が実

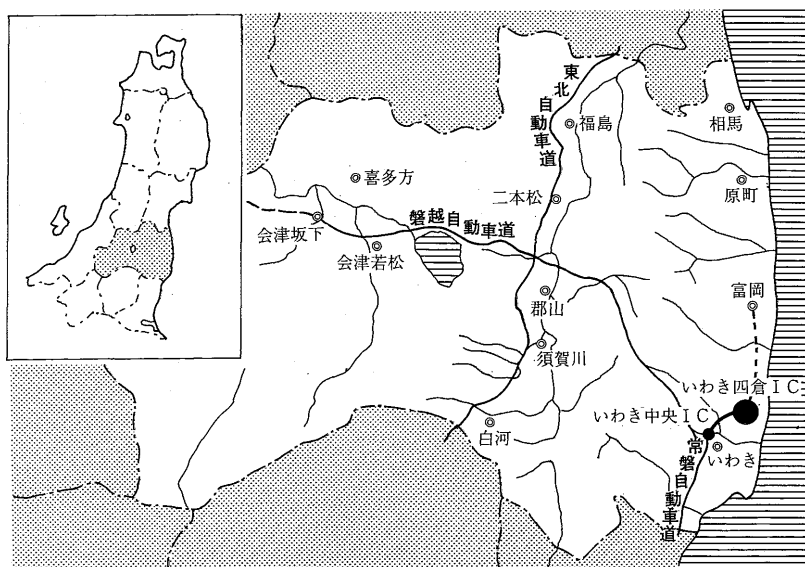


図1 常磐自動車道（いわき中央～いわき四倉）位置図

施できなかった箇所や、調査対象範囲外まで遺跡範囲の拡張が認識できた遺跡については、後日の再調査によって保存面積を確定することとした。

平成6年度は5遺跡（対象面積53,700㎡）の追加試掘を行い、前年度の成果と合わせて路線内遺跡要保存面積を確定したほか、久原A遺跡を初めとする5遺跡の発掘調査を実施している。6年度も承諾書取得などの条件整備作業との調整を余儀無くされ、その都度調査員・作業員の移動及び配置換えで対応したが、開始時期の遅れは取り戻せず、5遺跡34,100㎡の全てを調査終了したのは暮れの押し迫った12月の下旬であった。

平成7年度は発掘調査を中心に事業規模が拡大したことから、調査員30名というこれまでに例のない調査体制がしかれ、4月中旬の調査開始を目指して年度初め早々から準備作業に着手している。4月11日には日本道路公団仙台建設局いわき工事事務所・福島県教育委員会文化課・財団法人福島県文化センターの3者協議を行い、未買収地の存在・伐採木の処理・排土置き場の確保など、調査開始までの問題点を確認した。また、4月12日にはいわき市教育委員会文化課・財団法人いわき市教育文化事業団・福島県教育委員会・財団法人福島県文化センターの4者で調査地区が隣接する白岩堀ノ内遺跡について、福島県文化センター側から調査計画を説明するという形で協議を行い、調

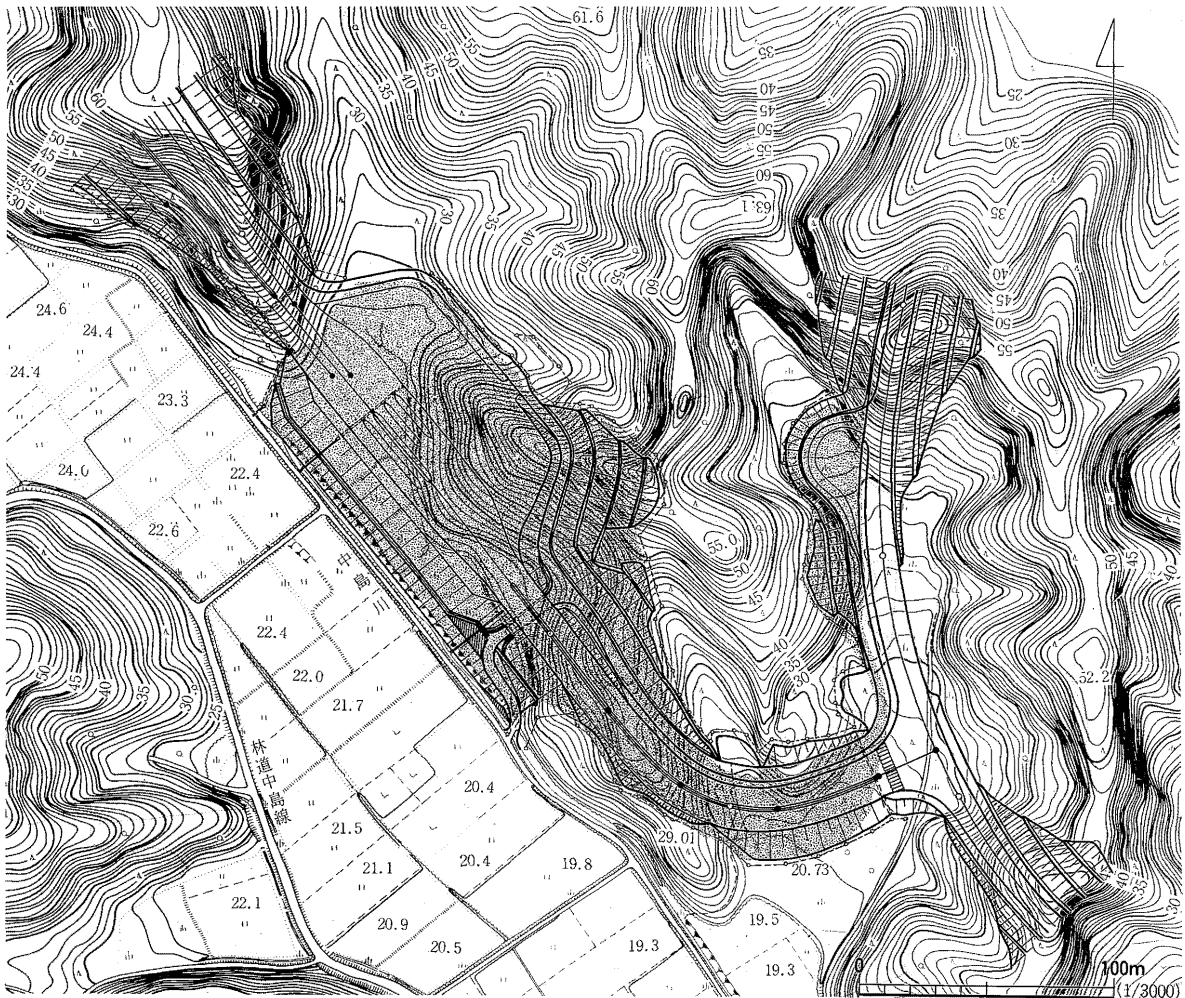


図2 白岩堀ノ内遺跡と路線予定図

整を図っている。7年度調査は上記協議の翌日である4月13日より表土除去作業を開始し、全スタッフをそろえた本格的な作業始動は翌週の4月18日からであった。(安 田)

第2節 調査経過

白岩堀ノ内遺跡の現地調査は、平成7年4月1日付け福島県教育委員会と財団法人福島県文化センターとの委託契約に基づき、平成7年4月12日から12月22日まで34,300m²の発掘調査を実施した。調査日数は延べ132日であった。

一部、低地の水田跡の調査が予定されていたので、平成7年2月には既に、調査区北側の沢部の調査区の境に、遮水のための綱矢板を設置していた。綱矢板による遮水が有効で、水田跡の調査は湧水に悩まされることはなかった。4月12日の調査開始を目指して、発掘調査の準備のため、作業員の手配と連絡、作業員を運ぶバス運行の手配や連絡、重機・車両・仮設休憩所・仮設便所などの借用の手配を進めた。4月11日現場の状況を確認の上、日本道路公団仙台建設局いわき工事事務所・福島県土地開発公社いわき支所・いわき市教育委員会文化課を始めとする関係機関に、調査開始にあたっての挨拶と打ち合わせを行った。

12日から調査員8名、作業員約110名の体制で調査を開始した。調査は隣接して調査している大猿田遺跡と協力して、調査員・作業員も随時融通しながら、効率化に努めた。調査初日には調査範囲を縄張りし、バスの運行経路を確認した。13日には重機による表土剥ぎを丘陵頂部から開始し、並行して器材・資材などを仕分けして、作業ができる準備を行った。4月18日からはバスを運行し作業員を雇用し、調査を開始した。調査は、重機による表土剥ぎが終了した丘陵頂部から、作業員を投入し遺構検出作業を行った。

尾根部からは弥生土器や焼土遺構・ピット・土坑などが検出され始め、4月中旬には竪穴住居跡・埋甕・遺物包含層などが次々と検出された。こうした遺構検出作業と並行して、基準杭設定を行った。4月24～26日には林道中島線の水路工事のため通行止めとなったので、臨時に作業員は休みとし、調査員のみで調査を継続した。

4月27日から再び作業員による調査を再開した。同日、県総務部財政課・県教育庁財務課・文化課の視察を受ける。4月下旬には県道白岩バイパス建設用地の借用を県いわき建設事務所に了解いただき、排土の仮置きを撤去を前提とし行うこととした。

4月29日から5月7日までは、祝祭日などのため現地調査を休止した。5月8日に現地調査を再開し、弥生・古墳時代の竪穴住居跡・土坑・埋甕などの精査と遺構検出作業を継続した。5月13日以降の降雨のため、中島川が増水し、調査区及び排土置き場の土砂流出も激しいことから、川岸に土のうを積み、法面をビニールシートで保護、土止め柵の設置や、排水路の掘削などを行った。15・16日にはさらに強い雨が降り続いたので、夜間にも見回りなどを実施し、災害対策に努めた。17～19日には雨のため崩れた川岸や農道を補修し、さらに次の降雨に備えて土止めや排水路の整備を

行った。

6月になっても断続的に降雨は続いたが、雨の合間をぬって竪穴住居跡・土坑・遺物包含層・埋甕などの精査、遺構検出作業を継続した。6月14日には大雨のため中島川が氾濫する恐れが強くなったため、雨の中調査員全員で川岸に土のうを積むと同時に、関係機関に通報し、公団いわき工事事務所・中島行政区長らと現地の点検へと向かった。15日に「常磐道建設促進のための連絡会」が開かれ、関係機関で問題点が話し合われた。

16日には降雨の中、県高速道路整備室・県土地開発公社いわき支所・道路公団いわき工事事務所・県いわき建設事務所・県文化課などの関係機関で現地を視察し、土砂流出の状況や危険箇所を確認した。6月22・23日は松喰虫防除の薬剤の空中散布のため、作業員を休みとした。6月下旬から7月上旬にかけても、雨のためほとんど調査できず、安全対策を中心に作業を進めた。7月4日には県高速道路整備室・公団いわき工事事務所・県文化課・県文化センターで、安全対策について協議し、解決の方向性が出された。

7月11日には尾根部の遺構について、フォトバルーンによる空中写真撮影を実施した。7月4日協議の防災対策案に沿って、今年度調査予定であった大猿田遺跡水田部への排土の仮置きを開始した。大猿田遺跡の調査が災害防止のため次年度に延長となり、白岩堀ノ内遺跡へ調査員・作業員を移動し、調査員10名、作業員約140名の体制で調査を行うこととなった。調査は、丘陵下部斜面部を中心に、検出作業によって確認できた弥生・奈良・平安時代の竪穴住居跡・溝跡・土坑・遺物包含層・埋甕などの精査を継続した。

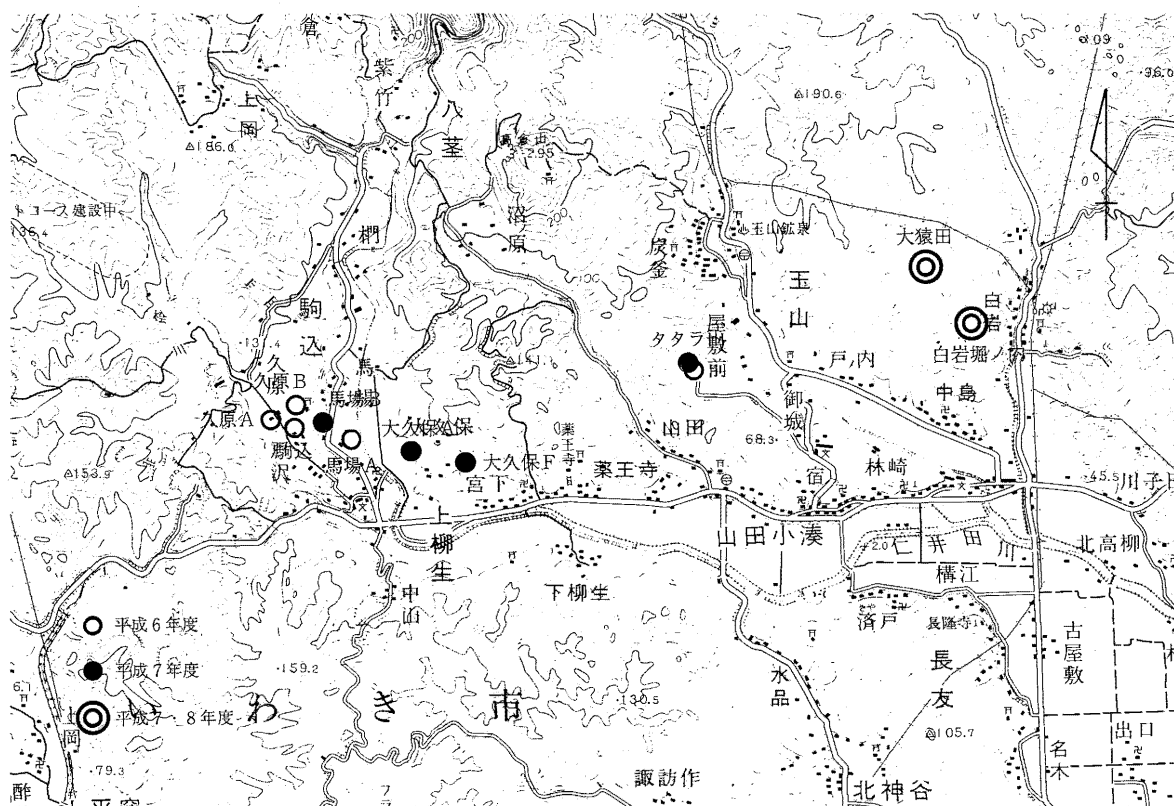


図3 発掘調査遺跡位置図

(国土地理院1/2.5万地形図 承認番号：平8東縦第20号)

梅雨がおさまると、気温が急激に高くなり、今度は日射病で倒れる作業員が相次いだ。7月26・27日、遺跡調査課の安全衛生委員会の視察を受け、現場の安全点検を受ける。8月上旬には1号遺物包含層から完形の鉄製銚が出土し、弥生時代の鉄製品としては県内初の出土例となった。8月12日から20日まではお盆休みとして、現地調査を休止した。8月21日から調査を再開し、丘陵部の弥生・奈良・平安時代の竪穴住居跡、弥生時代の遺物包含層、近代の土坑・溝跡などの精査と、遺構検出作業を行った。

8月下旬から丘陵部の調査と並行して、水田部の排土搬出と表土剥ぎを開始した。常磐自動車道遺跡発掘調査では労災事故が多発したために、9月12日にいわき労働基準監督署の視察を受け、口頭で改善点の指導を得た。この改善指導に従い、始業前の体操や危険箇所の点検、安全確保に努めた。9月中旬から土層断面や平面での水田面の確認作業を行い、遺構面や層位などを認定し、調査方針を確認した。そして、10月上旬に吉田秀享文化財副主査の協力を得て4面の水田面を認定し、奈良・平安時代、古墳時代の1～3面の調査に着手した。この時点で調査した丘陵部の遺構数は、竪穴住居跡15軒、土坑14基、溝跡5条、遺物包含層5カ所、埋甕4基、畑跡2カ所ほかなどである。

10月上旬には新たに、調査区中央で古代の製鉄炉跡1基を検出したほか、調査区北端の丘陵裾部では平安時代の火災に遭った竪穴住居跡1軒を検出した。調査の結果カマド煙道に底部を打ち欠いた土師器甕を連結して転用していたことを確認した。また、水田跡Ⅲ面では奈良・平安時代の自然流路である5号溝跡を検出した。また、フォトバルーンで空中から、丘陵南半部の写真撮影を行った。

表1 常磐自動車道発掘調査遺跡一覧

調査年度	遺跡名	所在地	時代	種別	調査面積㎡	備考
平成6年度	久原A遺跡	いわき市四倉町駒込	近世	集落跡	3,300	
	久原B遺跡	いわき市四倉町駒込	近世	散布地	700	
	駒込遺跡	いわき市四倉町駒込	近世	集落跡・木炭窯跡	4,800	
	馬場A遺跡	いわき市四倉町駒込	近世	集落跡・木炭窯跡	7,600	
	タタラ山遺跡	いわき市四倉町山田小湊・玉山	縄文～平安	集落跡・窯跡	17,000	
平成7年度	馬場B遺跡	いわき市四倉町駒込	近世	木炭窯跡	3,100	
	大久保A遺跡	いわき市四倉町駒込	平安・中世	集落跡	4,000	
	大久保F遺跡	いわき市四倉町駒込	平安	集落工房跡・窯跡	12,100	
	タタラ山遺跡	いわき市四倉町山田小湊・玉山	縄文～古墳	集落跡・窯跡	10,300	
	大猿田遺跡	いわき市四倉町中島	古墳～平安	集落跡・流路跡・窯跡	9,000	面数により面積換算部を含む
	白岩堀ノ内遺跡	いわき市四倉町中島	縄文～近代	集落跡・水田跡・製鉄跡	34,300	面数により面積換算部を含む
平成8年度	白岩堀ノ内遺跡	いわき市四倉町中島	弥生～奈良	水田跡	1,500	
	大猿田遺跡	いわき市四倉町中島	古墳～平安	集落跡・流路跡	43,500	面数により面積換算部を含む

中旬には、福島県考古学会副会長渡辺一雄・馬目順一、(財)いわき市教育文化事業団常務理事や、県文化課職員が来跡し、指導・助言をいただいた。下旬には労働災害事故が再度複数の発生をみたため、現地作業を休止して、危険箇所の再点検、安全対策を実施した。27日には福島労働基準監督署労働基準監督官から文書による改善指導を受け、緊急に県文化センター安全衛生委員会が招集され、対策が協議された。そして、安全衛生委員会による現地の安全指導や、作業員に対する安全教育の徹底が図られた。

11月上旬には県文化課職員の視察がある。また、いわき市土木部・公団いわき工事事務所・県文化課・県文化センターの4者で協議を行い、中島川の安全対策の責任分担や連絡体制、県道白岩バイパスに仮置きした排土の処理などについて話し合った。当初4面の水田面の調査を予定していたが、11月中旬に新たにトレンチ設定し、深掘りした結果、5面目の水田跡を土層断面で確認し、出土遺物から奈良時代以前と推定された。

また、県道白岩バイパスに仮置きした排土について範囲や高さを調べ、土量算定の資料とする。(財)いわき市教育文化事業団職員が視察を行う。この間、奈良・平安時代の水田跡と5号溝跡の検出、掘り込みを継続した。5号溝跡からは木製品が多量に出土した。11月下旬には県文化課に対して、新発見の水田面や今後の調査上の問題点を説明した。そして、新発見の水田面の調査も含め、全工程を終了しようと、増員・努力したが、結果、新発見の水田面の調査は翌年度に送らざるを得なかった。

そして、12月上旬には奈良・平安時代の水田跡の調査を終了し、一部に疑似畦畔や杭列、畦畔・足跡を検出した。そしてラジオコントロールヘリコプターで空中から、水田跡・自然流路跡・2・14号住居跡などの全景写真を撮影した。古墳時代以前の水田跡の1,500㎡については次年度調査とすることとなった。

また、増員した調査員・作業員によって、これまで排土の搬出路として利用していた盛土を除去して、平安時代の土坑・性格不明遺構や弥生時代の遺物包含層の調査を行う。水田跡では4面目まで掘り下げ、検出作業を中心に行う。県高速道路整備室から災害時の緊急連絡網について提示される。

調査は古墳時代の水田面の直上層で終了することとし、筵とシートで遺構面・土層断面を保護した。その後、資材・器材を撤収し、調査区の縄張りをして安全を確保し、平成7年度の現地調査は終了した。

12月段階では公団いわき工事事務所・県高速道路整備室との調整が付かず、調査終了部分の引き渡しはできなかった。12月25～27日には残務処理、仮設便所・車両・重機などの返却を行う。合わせて、関係機関・関係地元地権者・行政区長などへの挨拶を行い、平成7年度の現地調査は一旦終了とした。

平成8年度の白岩堀ノ内遺跡の調査計画については、1月17日に公団いわき工事事務所・県高速道路整備室・県文化課の3者で協議がもたれ事業計画と調査計画の調整がはかられた。その結果、

平成8年度は5月20日までの引き渡しを目標として、調査を行い、排土置き場など具体的な問題については今後継続的に協議することとした。また、県道白岩バイパス部分に仮置きした排土処置については、公団で対応することとなった。

1月26日に県文化課・県文化センターは道路公団いわき工事事務所に対し、新発見で次年度調査とした水田跡1,500㎡を除く、34,300㎡の引き渡しを現地で行った。

県文化センターでは、平成8年度の調査は、工事工程との調整から期間が限定され、年度当初から本格的な調査を開始しなければならなかったため、平成8年2月下旬から平成8年度の調査の準備を行ない、作業員への連絡、バス運行の手配、重機・キャリア・ベルトコンベアー・車両・仮設休憩所・便所などの賃借物件を準備し、器材・資材の準備を確認した。そして平成8年度の2次調査は、平成8年4月1日付の福島県教育委員会と財団法人福島県文化センターの『平成8年度埋蔵文化財調査委託契約』に基づき、平成8年4月3日付福島県教育委員会教育長から財団法人福島県文化センター館長宛の通知により、1,500㎡を対象に、現地調査を開始した。

4月上旬から作業員約100名を雇用し、調査員約10名で調査を開始した。水田跡を保護していたシートや筵・土のうを取り除き、排水を行ない、遺構面の検出作業を開始した。4月中旬には残っていた古墳時代及び古墳時代以前の水田跡の調査を終了し、水田面・流路の記録を作成した。5月上旬には古墳時代の水田跡・流路の調査を終了し、記録を作成した。

5月中旬には下層遺構の確認のため、古墳時代前期以前の面まで部分的に面的に掘り下げ、遺構・遺物の有無を確認した。古墳時代前期以前の面では出土遺物がなく、流路以外の遺構が検出できないことから、調査を終了することとした。最後に、重機によりトレンチを設定して掘り下げ、最終的に流路以外の遺構がないことと、出土遺物がいないことを確認した。5月中旬には器材・資材を撤収した。

同じく5月中旬には、平成6年度設置した矢板も引き抜きを終了した。そして、平成8年5月21日に公団いわき工事事務所、県教育庁文化課、県文化センター、ハザマ・日本国土開発共同企業体の関係職員で調査終了状況を確認し、引き渡しを行なった。

本調査の全般について、公団いわき工事事務所・県いわき建設事務所・いわき市経済土木課・いわき市教育委員会・いわき市四倉支所、ハザマ・日本国土開発共同企業体並びに地元中島行政区の絶大なご協力をいただいたことを、明記しておく。

(飯 村)

第3節 調 査 方 法

白岩堀ノ内遺跡で今回調査を実施したのは、対象となる35,800㎡である。調査に当たっては、本遺跡並びに各遺跡との位置関係を正確に把握するために、国土座標軸を基準として遺跡全体に5mのグリッドを施し調査を行った。このグリッド杭は、調査区内の所用箇所に設置を行っているが、それは、日本道路公団が設置した路線センター杭や各要所に設けられた座標杭を国土座標上に沿っ

て換算し直し、これを測量杭としたものである。原点となる基準杭は、国土座標の $X=125.100$, $Y=99.200$ である。また、グリッドには個別の番号が与えられているが、この原点となる座標から南北方向に北から南へ AA・AB…BA・BB…CA・CB…と付した2つのアルファベットの組み合わせと、東西方向に西から東へ 1・2・3…と付した算用数字との組み合わせによって表示し、各々北西隅に当たる杭を A017グリッド・AV55グリッド・BH26グリッド等と呼称している。これらの各グリッドは、遺物の出土位置表示、遺構の位置表示を行うためのものであり、これとは別に平面図作成のため、グリッドの方向と一致した1m毎の番号を付している。その原点は $X=124.800$, $Y=99.500$ で、この座標が N S00, E W00 であり、調査区内においては、N〇〇とW〇〇の基準線のみが存在する。

本調査では、表土剥ぎは主に重機を使用し、遺物を多く包含する L II 以下の層から人力によって草削り・唐鍬等を使用して遺構・遺物の検出作業を行った。その際の排土処理は、不整地運搬車・一輪車等を用いて運搬した。各遺構の掘り込み調査にあたっては、土器埋設遺構・土坑等の小型の遺構については長軸優先の2分割法を、住居跡等は4分割法を基本とし、製鉄炉等の比較的規模が大きい遺構に関しては6分割法等で調査を行った。遺物の取り上げに際しては、遺構内のものに関しては上記の区画層位ごとに、遺構外のものに関してはグリッド単位で取り上げ、基本層位はローマ数字を用いて L I・L II…と現し、遺構内の層序は $\ell 1 \cdot \ell 2 \dots$ と表した。

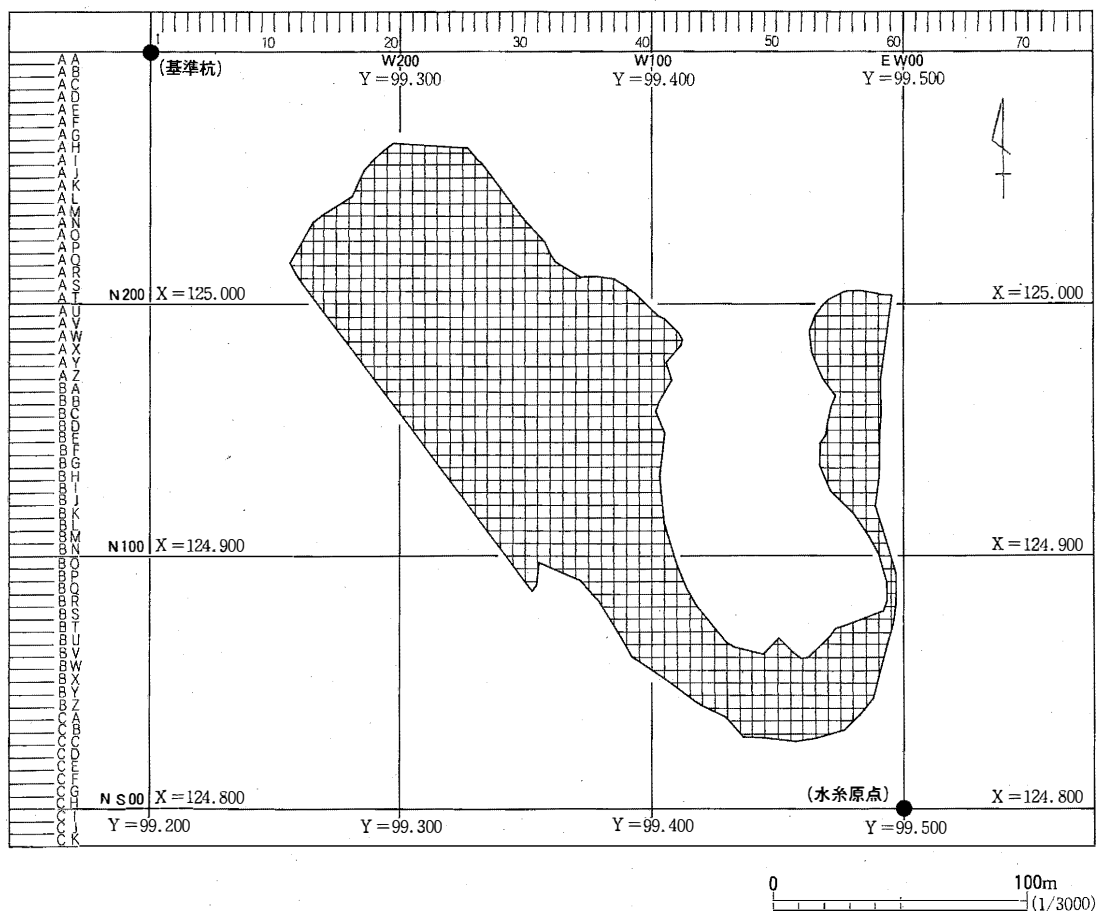


図4 グリッド配置図

遺構の記録は、1/20縮尺を基本として平面図及び断面図を作成している。土器埋設遺構・土坑等の小規模な遺構や住居跡カマド等の遺構細部については1/10縮尺で作成している。また、遺跡基底面の地形図は1/200縮尺を基本とし、1m間隔の等高線で作成しているが、北側丘陵の急斜面部分については安全上航空測量を行っている。

写真は調査段階に応じて6×4.5判のモノクローム・カラーリバーサルフィルムで随時撮影し、他に遺物出土状態や完掘・全景など必要に応じて35mm判のモノクローム・カラーリバーサルフィルムでも撮影を行った。また、航空機やバルーン・ラジコンヘリ搭載カメラによって、遺跡全景や調査区各部の撮影を実施している。

今回実施した化学分析は、鉄製品・鉄滓・プラント・オパール・火山灰分析・炭化物樹種同定・木製品樹種同定・リン・カルシウム分析・石質鑑定の7項目である。鉄製品・鉄滓については、遺存度の良い6点について川鉄テクノロジー(株)・県立博物館に分析・評価を依頼した。鉄製品のうち、特に鉄製鋸(鉄鋸?)に関しては弥生時代の稀有な例として興味深い資料である。プラント・オパール・火山灰分析については、古環境研究所に分析・評価を依頼し、北側水田部の3地点27か所のサンプリングを実施している。また、リン・カルシウム分析については、検出された土器埋設遺構の堆積土及び地山採取資料を、炭化物樹種同定に関しては、選出方法としては遺存状態の良い資料について1本から1資料を採取し、ビニール袋で小片をまとめて持ち帰ったものについては各袋から抽出して分析を行った。木製品の樹種同定は、実測した製品中心に、コア・サンプルを作成し、外部に依頼した。(井)

第4節 自然的環境

福島県の形状は東西に長く、西から越後山脈、飯豊山地、奥羽山脈、阿武隈高地と南北に縦走する山系によって、会津・中通り・浜通りの三地方に区分される。浜通り地方とは阿武隈高地の東半のいわき市～相馬郡新地町にいたる太平洋に面した地域である。地形的には阿武隈高地の東部(標高約400～600m)東側から、それに続く丘陵地帯(標高約50～100m)と、さらに海岸寄りの低地帯からなる。

阿武隈高地の地質は、花崗岩を主体とする深成岩及び変成岩を基盤とし、その上に古第三紀・新第三紀の堆積層が丘陵を形成している。平野を含めた低地帯は、第四紀以降に谷部に堆積した礫・砂・泥層からなる。この周辺には西から東へ二ツ箭断層など幾つかの大きな断層が走る(福島県; 1994, 鈴木ほか; 1989)。浜通り地方ではこの阿武隈高地を源とし、太平洋に注ぐ河川の河口付近に都市が発達している。

いわき市は、浜通り地方の南端にあり、北は双葉郡広野町、西は東白川郡古殿町・同鮫川村、南は茨城県北茨城市に接し、東は太平洋に面している。阿武隈高地の東南に位置し、ここから太平洋へむかって仁井田川・夏井川・藤原川・鮫川などが東流し、その流域に耕地・集落が開けている。

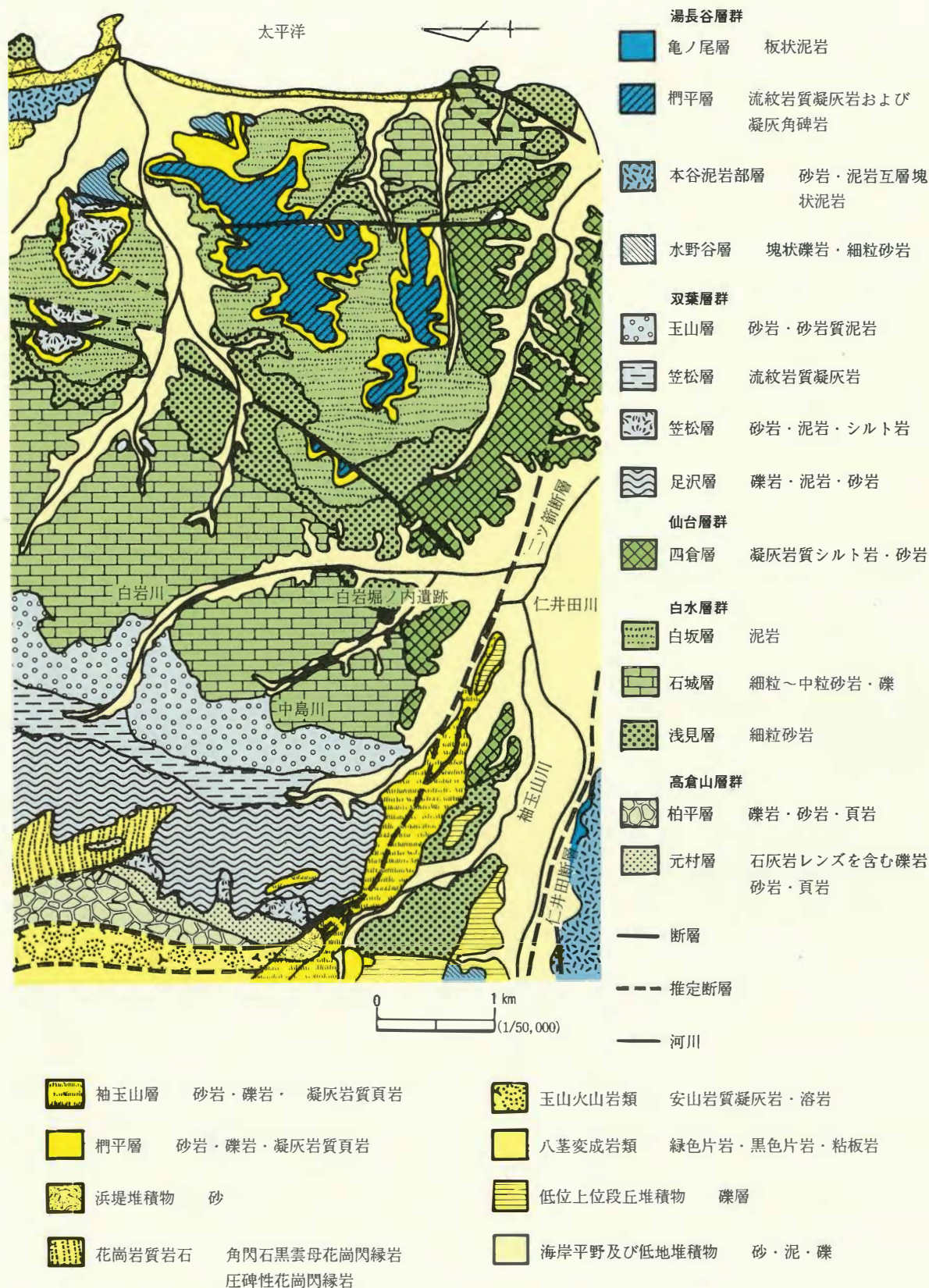


図5 いわき市四倉・久ノ浜地区地質図

四倉町は、いわき市の中心部である平地区の北隣に位置し、仁井田川の河口付近に開けた海岸平野と連続した平野に形成された町である。

白岩地区は、四倉町の市街地の南側を流れる仁井田川の中流域一帯である。この地区は北に標高約295mの高倉山、南に標高225mの石森山を望み、その間を縫うように仁井田川と、それに流入する小河川によって開析された小規模な谷が樹枝状に発達している。仁井田川は、四倉町の北西にある猫鳴山・三森山などを源流として、はじめは南流し駒込地区に入る。下柳生から玉山地区で流路を東へとる。玉山から戸田地区で高倉川・袖玉山川・中島川・白岩川が合流する。そして、戸田地区で流路を大きく南東へ転じ、広い沖積平野を形成しながら太平洋へ向かい、上仁井田地区で浜堤に沿うように屈曲して横川となって南流し、夏井川と合流して太平洋に注ぐ。

白岩地区はほぼ西から東に流れる仁井田川中流の北側一帯で、その間を中島川が南流する。白岩堀ノ内遺跡はこの中島川流域の東側に存在する。白岩地区は二ツ箭断層の北側にあって、花崗岩質岩石・八茎変成岩などを基盤とし、固結堆積物からなる白水層群などと、半固結堆積物よりなる仙台層群が堆積する。断層の南側にある仁井田川周辺は、固結堆積物からなる白水層群・湯長谷層群と、仙台層群が複雑に入り組みながら堆積している。

白岩堀ノ内遺跡周辺の地質は、丘陵部分は白水層群の一部である石城層と呼ばれる中粒～細粒砂岩あるいは礫岩を基盤とする丘陵部と、南西側の完新世の低地堆積物層である砂・泥・礫によって形成された低湿地に分けられ、低地帯は現在は水田となっている。

遺跡の多くは、仁井田川兩岸の微高地から丘陵地帯にかけて分布する（いわき市教委；1993）。

いわき市の気候は、暖流の影響を受け、月平均気温は1月が3.5度、8月は25.2度で、年格差19度と冬暖かく夏は涼しい海洋性温暖気候である。夏は南風の影響で降水量が多いが、冬は北西風が強く乾燥した晴天が多い。年間降水量は1,389mmで比較的少ない（福島県；1994）。（宮田）

第5節 歴史的環境

白岩堀ノ内遺跡周辺の旧石器時代の遺跡として、大久町亀ヶ崎遺跡がある。ポイント・ブレイドの散布地として知られる（渡辺ほか；1986）。昨年度四倉町タタラ山遺跡（図6-4）が調査され、この遺跡からはナイフ形石器1点が出土している（本間ほか；1995）。

縄文時代では、同じくタタラ山遺跡から早期の茅山下層式土器が出土している。縄文前期の遺跡では山間部での調査例は少く、弘源寺貝塚（図6-44）が南へおよそ9kmの所に位置する。この貝塚は、現在の海岸線から約5.4kmさかのぼった夏井川の左岸にあり、いわき地域で最古の、そして最も内陸部の貝塚としても著名である。遺物としては、大木1・2a式土器と関東南部に多く分布する関山・黒浜式土器が主である。貝層下からは早期末の関東地方の鵜ヶ島台式土器の破片も出土しており、密接な交流を示す遺跡例である（渡辺ほか；1986・佐藤ほか；1986）。

縄文前期後半から中期前半にかけては貝塚の形成がいったん途絶え、中期中葉になって再び遺跡

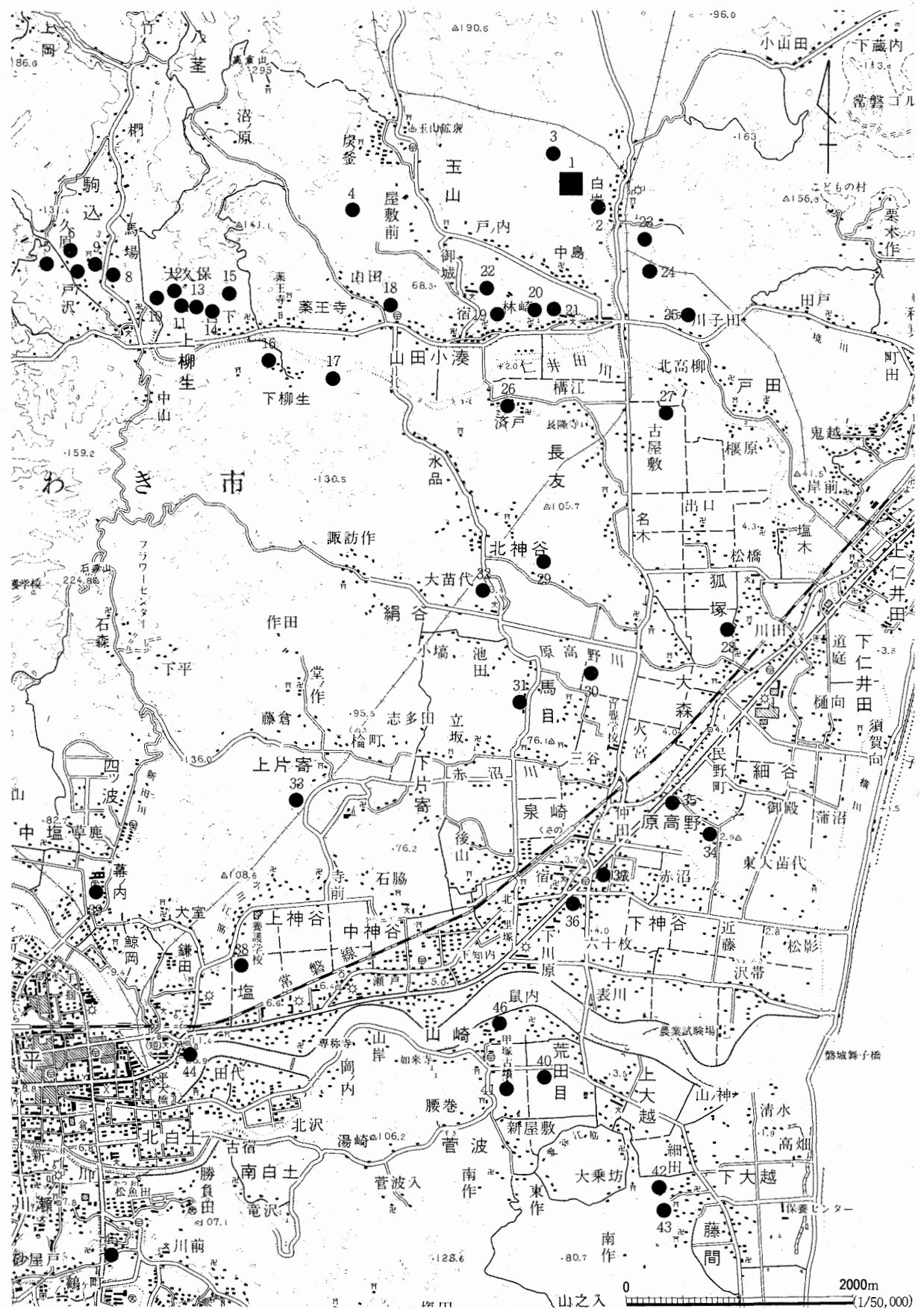


表2 関連する周辺の遺跡

平成8年度

No	遺 跡 名	所 在 地	遺 跡 の 概 要
1	白岩堀ノ内遺跡	四倉町中島字三反田	弥生・古墳～平安時代の集落・生産跡 平成7・8年度調査
2	白岩堀ノ内館跡	四倉町白岩字堀ノ内他	中世の城館跡 平成6・7年度調査
3	大猿田遺跡	四倉町中島字大猿田	古墳～平安時代の集落・工房跡 平成7・8年度調査
4	タタラ山遺跡	四倉町玉山字北タタラ山他	縄文～平安時代の集落跡 平成6・7年度調査
5	久原A遺跡	四倉町駒込字久原	縄文・近世の土坑群他 『常磐自動車道遺跡調査報告4』平成7年
6	久原B遺跡	四倉町駒込字久原	近世の遺物包含地 『常磐自動車道遺跡調査報告4』平成7年
7	駒込遺跡	四倉町駒込字久原	近世の建物跡 『常磐自動車道遺跡調査報告4』平成7年
8	馬場A遺跡	四倉町駒込字馬場	縄文・古代・近世～近代の建物跡 『常磐自動車道遺跡調査報告4』平成7年
9	馬場B遺跡	四倉町駒込字馬場	近世の木炭窯他 平成7年度調査
10	大久保A遺跡	四倉町駒込字日ノ目他	平安期・中世～近世の集落跡 平成7年度調査
11	大久保C遺跡	四倉町駒込字大久保	縄文～平安時代・近世の散布地
12	大久保E遺跡	四倉町駒込字大久保	古墳～平安時代の散布地 平成5年度試掘調査
13	大久保F遺跡	四倉町駒込字大久保	縄文・平安時代の工房跡・窯跡 平成7年度調査
14	大久保G遺跡	四倉町駒込字大久保	縄文～近世の散布地
15	粟刈沢遺跡	四倉町薬王寺字粟刈沢	古墳～平安時代の散布地
16	日陰遺跡	四倉町下柳生字六反田	古墳時代の祭祀遺跡・散布地
17	和具遺跡	四倉町下柳生字和具	縄文時代の散布地
18	山田小湊遺跡	四倉町山田小湊字小湊	古墳～平安時代の散布地
19	玉山遺跡	四倉町玉山字牧ノ下他	弥生～古墳時代の散布地
20	玉山古墳群	四倉町玉山字林崎	古墳 玉山1号墳(全長118mの前方後円墳)を含む
21	林崎遺跡	四倉町玉山字林崎	弥生～古墳時代の散布地
22	御城古墳群	四倉町玉山字御城	古墳時代後期の古墳群
23	永田横穴墓群	四倉町白岩字永田	古墳～平安時代の横穴墓・散布地
24	白岩横穴墓群	四倉町白岩字上ノ子田他	古墳～奈良時代の横穴墓 平成6年度調査
25	川子田横穴墓群	四倉町戸田字川子田	古墳時代の横穴墓
26	済戸貝塚	四倉町長友字済戸他	縄文時代の貝塚
27	戸田条里遺跡	四倉町戸田地内	弥生～近世の水田遺構他 『戸田条里遺跡』平成3年
28	西原遺跡	四倉町狐塚字西原	奈良・平安時代の遺物包含地 昭和58年度調査
29	袖作遺跡	平北神谷字袖作	弥生・平安時代の散布地
30	町田古墳	平馬目字町田	古墳
31	作ノ内横穴墓群	平馬目字作ノ内	古墳時代の横穴墓
32	大苗代遺跡	平絹谷字大苗代	弥生～中世の散布地 絹谷館跡も含む
33	山田作横穴墓群	平上片寄字山田作	古墳時代の横穴墓群 昭和51年度調査
34	中里遺跡	平原高野字中里	古墳～平安の遺物包含地
35	伊勢前貝塚	平原高野字伊勢前	古墳時代の地点貝塚
36	内宿遺跡	平下神谷字内宿	古墳時代前期の集落跡 『内宿遺跡』昭和57年
37	出口遺跡	平下神谷字出口	奈良～平安時代の遺物包含地
38	上神谷条里遺跡	平上神谷・平塩地内	奈良時代の条里制遺構
39	中塩祭祀遺跡	平中塩一水口	古墳時代の祭祀跡・散布地 昭和37年度調査
40	荒田目条里遺跡	平荒田目字甲塚他	奈良時代以降の条里・祭祀・水田遺構
41	甲塚古墳	平荒田目字甲塚	古墳 国指定史跡
42	夏井廃寺跡	平下大越字石田	奈良～平安中期の郡衙附属寺院跡
43	根岸遺跡	平下大越字根岸	奈良時代の磐城郡衙跡
44	弘源寺貝塚	平鎌田字小山下	縄文時代前期の貝塚
45	龍門寺遺跡	平下荒川字諏訪下	縄文～近世の集落・散布地
46	小茶円遺跡	平山崎字金沢他	奈良～平安時代の集落跡

の数が増加する。遺跡としては田之網貝塚・片寄貝塚などがある。田之網貝塚からは中期の大木8b式・9式土器が出土する。片寄貝塚は中期の大木9式土器を主としており、ともに中期後葉に属する貝塚である(日下部ほか;1991)。また、済戸貝塚は長友にあり、中期から後期前葉にかけての貝塚である(日下部ほか;1991・いわき市教委;1993)。

弥生時代では、中期に属する遺跡が多い。仁井田川河口付近に中期・後期の土器を出土する地引洞穴が存在する(いわき市教委;1993)。仁井田川を約5km溯った玉山川との合流地点付近に存する玉山遺跡からは、天神原式期の土器棺が出土している(渡辺ほか;1986)。戸田条里遺跡(図6-27)では龍門寺式期に比定される水田跡が検出され、水田耕作土壌から炭化米が出土した(猪狩ほか;1991年)。タタラ山遺跡(本間ほか;1995)・白岩堀ノ内両遺跡では中期後半の天神原式土器の包含層が検出された。片寄貝塚では石庖丁や管玉が出土している(日下部ほか;1991)。

古墳時代では、主軸長約118mを測る前方後円墳の玉山古墳を中心とする玉山古墳群(図6-20)がある。玉山古墳は浜通りでも最大の古墳で、会津大塚山古墳にも匹敵する規模を有する。詳しい調査は実施されていないが、4～5世紀に比定されている(渡辺ほか;1986)。大野中学校周辺の台地上にも遺跡が分布する。大野中学校A・B遺跡は古墳時代の遺物包含地(いわき市教委;1993)であり、御城古墳群(図6-22)は後期の円墳を主とする群集墳である(渡辺ほか;1986)。

また、いわき市内には50カ所を越える横穴墓群があるとされるが、なかでも本地区は横穴墓が多い地域である。川子田横穴墓群・山田作横穴墓群(図6-25・33)は古墳時代に限定されているが、白岩横穴墓群(図6-24)では古墳時代から奈良時代まで、永田横穴墓群(図6-23)はさらに平安時代まで営造されていた横穴墓であるとされる(渡辺ほか;1986)。

古墳時代前期の集落としては中里遺跡・内宿遺跡(図6-34・36, いわき市教委;1992・樫村ほか;1982)があり、また、古墳時代後期の集落として白岩堀ノ内・タタラ山・戸田条里遺跡などがある(図6-1・4・27)。伊勢前貝塚(図6-35)では土師器の細片が出土する(渡辺ほか;1986, 日下部ほか;1991)。この他、祭祀遺跡として日陰遺跡・中塩祭祀遺跡(図6-16・39)がある。日陰遺跡は下柳生にあり、仁井田川の右岸台地上に位置する。円板・白玉などの石製模造品が出土している(いわき市教委;1993)。中塩祭祀遺跡は、夏井川に近い低位段丘上にあり、現在は水田面下となっている。遺物は円板・刀子・剣・白玉・勾玉をかたどった石製模造品のほか、土師器・須恵器が出土している。土師器には関東地方の影響がみられ、年代は6世紀初頭頃と考えられる(渡辺;1986, 穴沢・馬目;1991)。

奈良・平安時代の遺跡では、タタラ山遺跡(図6-4)で竪穴住居跡19軒などが検出された。大久保F遺跡(図6-13)は平安時代の土師器・須恵器生産に関連した遺構などが検出されており、特殊な集落の在り方を窺わせる。大久保A遺跡(図6-10)では、奈良・平安時代の竪穴住居跡や掘立柱建物跡が検出された。また、この付近は条里遺跡が多いところでもある。戸田条里遺跡(図6-22)では平安時代の水田跡が検出された。上神谷条里遺跡(図6-38)は奈良時代の遺構である。仁井田川中流域の山田小湊・薬王寺近辺には条里制遺構が残っている(鈴木;1992)。

中世に入るとこの地域は文治2年(1186)、岩城郡内に設定された好間庄に含まれる。好間庄は関東御領で、承元2年(1208)に大野地区が「衣谷郷」・「大野郷」からなる好間東庄に属し、大須賀氏が、絹谷に政所をおいて預所職を勤めた。その絹谷の政所が絹谷館(図6-32)ということであろう。四ッ倉町長友・大塚付近には、岩城氏発祥の地で室町期まで存続したという長友館跡が存在する(小林ほか;1988)。

戦国時代末から近世初期頃の白岩地区は、岩城氏の領地であったが、その後は領主が頻繁に替わり、慶長7年(1602)には鳥居氏が入封、元和8年(1622)に内藤氏の平藩領に編入された。延享4年(1747)には幕府直轄領となって中神谷代官所の支配を受け、寛延2年(1749)常陸笠間藩井上氏の領地となる。その後、安永6年(1777)再び幕府の直轄支配を受け、翌7年(1778)には再び岩城平藩領となる。寛政2年(1790)以降は笠間藩の領地となり、明治維新に至った。

明治4年(1877)の廃藩置県によりまず平県として成立し、間もなく磐前県と改称、ついで明治9年(1886)年に磐前県は廃されて福島県に合併される。四倉町は明治22年(1899)の町村制施行により磐城郡四ッ倉町となった(小林ほか;1988)。

明治以降、四ッ倉町の経済を支えたのは、主に鉱業である。大正2年(1913)の『石城郡巡視関係書類』(県庁文書)では、明治40年に八茎銅山の廃石の石灰石を利用して、磐城セメント株式会社が設立された。この会社によりセメント原料の粘土が採掘され、現在もその痕跡をとどめている。

戦後昭和30年(1955)に四ッ倉町・大野村・大浦村が合併して磐城郡四倉町となり、同41年(1966)の市町村合併で、いわき市四倉町となり、現在に至っている(小林ほか;1993)。(宮 田)

引用・参考文献

- | | | | |
|---------|------|------------------------|-------------|
| 福 島 県 | 1913 | 『石城郡巡視関係書類』 | |
| 檜村 友延ほか | 1982 | 『内宿遺跡－古代集落の調査－』 | いわき市教育委員会 |
| 福島県教育庁 | 1984 | 『福島県埋蔵文化財分布図』 | |
| 福島県教育庁 | 1985 | 『福島県埋蔵文化財一覧表』 | |
| 渡辺 一雄ほか | 1986 | 『いわき市史』 | いわき市 |
| 渡辺 一雄ほか | 1986 | 『弘源寺貝塚』(財) | いわき市教育文化事業団 |
| 小林 清治ほか | 1988 | 『福島県の中世城館跡』 | 福島県教育委員会 |
| 鈴木 敬治ほか | 1989 | 『福島県地学のガイド』 | コロナ社 |
| 猪狩 忠男ほか | 1991 | 『戸田条理遺跡－水田跡の調査－』(財) | いわき市教育文化事業団 |
| 日下部義己ほか | 1991 | 『福島県の貝塚－県内貝塚詳細分布調査報告－』 | 福島県教育委員会 |
| 馬目 順一ほか | 1991 | 「福島」『日本の古代遺跡45』 | 保育社 |
| 鈴木 貞夫 | 1992 | 『福島県の歴史地理研究』 | いわき地域学会 |

第1章 調査経過と周辺環境

- 小林 清治ほか 1993 「福島県の地名」『日本歴史地名大系7』 平凡社
- いわき市教委 1993 『いわき市埋蔵文化財分布地図』
- 大越 道正ほか 1994 『常磐自動車道遺跡分布調査報告3－いわき市四倉地区－』 福島県教育委員会・(財)福島県文化センター・日本道路公団
- 福島県 1994 『土地分類基本調査・平』
- 本間 宏ほか 1995 『福島県内遺跡分布調査報告1－常磐自動車道いわき市四倉～富岡町間予定路線周辺－』 福島県教育委員会・(財)福島県文化センター
- 本間 宏ほか 1995 「第6編 タタラ山遺跡(第1次)」『常磐自動車道遺跡調査報告4』 福島県教育委員会・(財)福島県文化センター・日本道路公団

第2章 遺構と遺物

今回の調査で検出された遺構は、住居跡16軒、土坑20基、土器埋設遺構4基、製鉄炉跡1基、溝跡16条、水田跡6面、焼土跡1基、畑跡2か所、性格不明遺構2基である。このうち、弥生時代の遺構は、住居跡6軒、土坑5基、土器埋設遺構4基、遺物包含層6か所であり、古墳時代～平安時代の遺構としては、住居跡10軒、土坑9基、製鉄炉跡1基、溝跡12条、水田跡6面、焼土跡1基等である。住居跡は、各時期ともに調査区中央を南北に延びる細尾根の丘陵頂部付近や丘陵裾部等から確認されており、土器埋設遺構は丘陵縁辺部から確認された。遺物包含層は、この丘陵の急斜面部や裾部を巡るように形成され、従来同丘陵裾部に連続して形成されていたものと考えられる1号遺物包含層と2号遺物包含層については、丘陵を遮断する仮設道路により削平されているため、便宜上区分して調査した。

遺物は、遺構内及び遺構外から総数36,130点出土している。その内訳は、縄文土器片19点、弥生土器片27,713点、石器類1,983点、土師器片3,499点、須恵器片722点、陶磁器片350点、羽口片89点、木器類538点、銭貨6点、鉄製品194点、鉄滓420kg、木炭1,017点である。土器では、遺物総数の約86%が弥生時代中期後葉頃に属するもので、遺物包含層からの出土量が最も多い。特に、1・2号遺物包含層と丘陵を挟んで北側に隣接する4・6号遺物包含層では、共に47%の出土量を占め、全包含層の主体を占めている。破片資料が大半であるため、復元できたものは少なかった。石器類は、該期に属する大陸系磨製石器・打製石器類・剥片石器類が出土し、特に石核・剥片石器類が多量に出土している。

報告に当たっては、遺構は全て図示し、写真はできるだけ掲載することとした。遺物は実測図及び拓影で収録することに努め、復元実測可能な個体については全て図示した。また、本遺跡で主体を占める弥生土器のみについて分類を行った。

＜弥生土器の分類＞

本章で取り扱う弥生土器の大別は、施文具やその文様構成等から従来の土器型式に則して行い、器種形態を便宜上の区分目安として下記のように分類した。このうち、壺形土器・甕形土器については、口縁部・頸部などの部位の文様を重視して各々まとめて掲載し、描画する主幹文様構成によりさらにa～g種に細分した。これら細別したものについては、実測図用例(3)に模式化して合わせて掲載している。鉢形土器と蓋については、底部(つまみ部)からの立ち上がりと胴部最下端部の文様帯の有無、及び内面調整と口唇部の形態・付着物等の有無を区分目安とした。また、胴部資料や地文のみの資料、底部資料、型式大別や器種分類が困難な資料等については第Ⅱ群土器内において一括して掲載した。

第Ⅰ群土器 比較的尖小な工具により、沈線で描画したもの。足洗1・2式土器に比定される土

器群。

第Ⅱ群土器 束線具や数本同時による平行沈線文を描画したもの。本遺跡で主体を占める天神原式土器に比定される土器群。

第Ⅲ群土器 2本同時の平行沈線文を描画したもので、桜井式に比定される土器群。

第Ⅳ群土器 川原町口式に比定される土器群。

上記の土器群を以下の8類に形態分類し、文様構成等により更にa～g種に細分した。

1類 : 壺形土器。

2類 : 甕形土器。形態や頸部の屈曲度によりA1～B3に細分した。

A1 : 短頸でやや内湾気味・受口状となるもの。

A2 : 短頸で頸部の屈曲が『く』字状になるもの。

B1 : 長頸でやや内湾気味となるもの。

B2 : 長頸で頸部の屈曲が『く』字状になるもの。

B3 : 長頸で頸部の屈曲が弱く、直線的なもの。

さらに、1・2類の口縁部から上胴部資料は、主幹文様構成により、次のa～g種に細分した。

a種 : 同心円状の渦文等の文様を描画したもの。

b種 : 山形文・三角形文・菱形文等の文様を描画したもの。

c種 : 格子文・肋骨文等の文様を描画したもの。

d種 : 連弧文・波状文の文様を主体的に描画したもの。

e種 : a～d種以外の文様構成をとるもの。

f種 : 地文が施されているもの。

g種 : 無文のもの。

3類 : 鉢形土器。

4類 : 高杯。

5類 : 蓋。

6類 : 手捏土器。

7類 : 主体文様が観察できず、地文が施文されている胴部資料。

8類 : 底部資料。

石器については、本章では分類は行わず、従来通り既成の名称で呼べるものは原則的に石器種ごとに並べ、個々の属性・法量等について記載した。打製石器類や石核等については、用途不明のものも多いため、その詳細については第3章において述べる。また、石器の法量や石質等の一覧表を作成したが、それは出土した個々の遺構や遺物包含層ごとには掲載せず、第3章末に一括して収録した(表5)。

(井)

第1節 基本土層と遺構の分布

1. 基本土層

白岩堀ノ内遺跡は、調査区が南北に細長く、しかも複雑に開析された谷開口部や丘陵部、それに低地部に位置しているため、調査区全体では各々で土層の堆積状況やその分布状況が異なる様相を示している。そのため、詳細な土層観察結果とその分布については、後述する第8節水田跡・第9節遺物包含層の冒頭において詳しく述べることにし、ここでは調査区内での基本的な層序と分布について述べる。

白岩堀ノ内遺跡は、小河川によって開析された標高25～50mほどの小規模な丘陵地に位置する。この丘陵の基盤層は、花崗岩を主体とする深成岩および変成岩であり、その上を固結堆積物(高倉山層群・双葉層群)や半固結堆積物(仙台層群)、末固結堆積物からなる洪積層と沖積層が被覆している。遺跡内においては、丘陵の尾根部や斜面部、開析作用によって浸食された丘陵開口部・低地にかけてその堆積土状況がやや異なるものの、基本的に共通するこれらの土を大きく6層に分層し、LⅠ～LⅥと表記した。さらに、LⅢ～LⅤについては土質・色調の違いによりLⅢを4細分、LⅣを3細分、LⅤを2細分し、アルファベット小文字を付して表記した。また、丘陵斜面部から裾部に多く認められたLⅤの再堆積層については、「'」を付してLⅤ'と表記した。調査区内の丘陵斜面部および頂部付近では、LⅠ(表土)・LⅡ直下に基盤層であるLⅤおよびLⅥが堆積し、この層の上面において多くの遺構を検出している。なお、土層の観察を行った9地点(AP13・AM28・AW35・BG36・B039・BN42・CC53・BN58・AT54)および基本土層柱状図を図7に示した。以下、各堆積層の特徴と分布を中心に報告する。

LⅠ：LⅠは黒褐色系(10YR 2/3)の表土・耕作土で、遺跡全体に堆積する。丘陵頂部や急斜面部では薄く堆積し、平均して約6～15cmの層厚である。

LⅡ：LⅡは暗褐色系(10YR 3/4)の堆積土で、調査区中央部の尾根頂部から下位斜面の一部、北側沢部の中位に厚く堆積しており、部分的に欠層している。基本的にはLⅢが風化し、土壌化したものと考えられ、層厚は頂部付近で3～10cm、沢部で10～20数cmと厚く堆積する。調査区内においては休耕田や畑跡もあり、このLⅡまで一部攪乱を受けている。LⅠ・LⅡには近世・奈良～平安時代の遺物が僅かに包含されている。

LⅢ：LⅢは基本的には褐色系の堆積土で、調査区内の南半部では4分層できる。炭化物・凝灰岩・小礫を含み、平均して10～20cm程の層厚である。比較的斜面下位では厚く堆積しており、丘陵頂部や東向き斜面では一部欠層している。奈良・平安時代にかけての遺物を多く包含するが、弥生時代の遺物もこの層から若干出土している。弥生時代の遺物量はこの層の下位から増え始める。

LⅤ'：LⅤ'はにぶい黄色粘質土で、LⅤに類似する無遺物層である。LⅣの上層に数度に渡っ

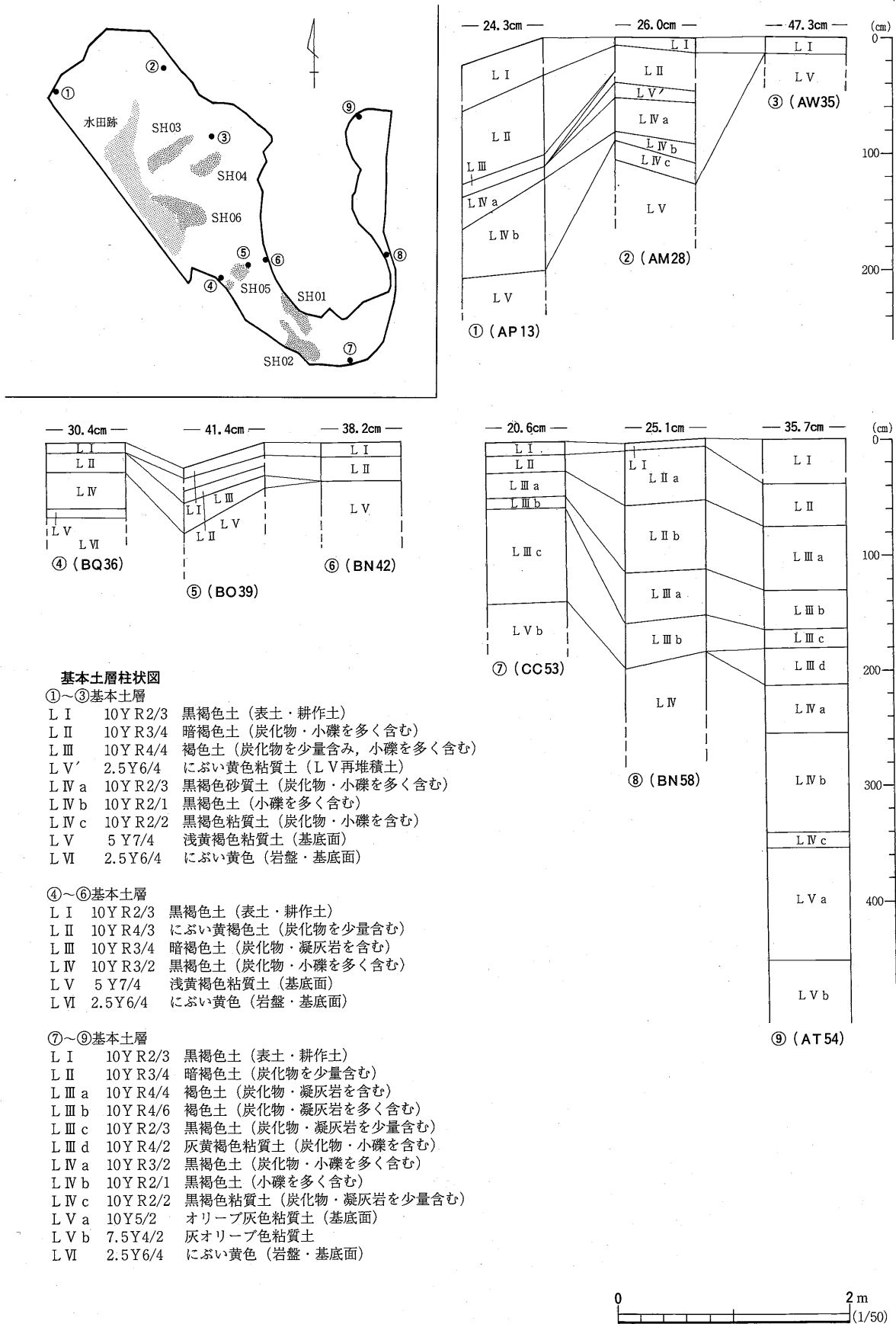


図7 基本土層柱状図

て再堆積しており、主に1号遺物包含層や4号遺物包含層が形成されていた丘陵斜面部や裾部で顕著に認められる。凝灰岩・小礫を若干含み、層厚は斜面下位程厚く堆積しており、平均して10～20cm程の層厚である。1号遺物包含層では、弥生時代の遺物を多量に含む下層のLⅣを完全にバックした状態で堆積していた(図109)。

LⅣ：黒褐色土の堆積土で、調査区内では3分層できる。基本的には調査区全域に広く堆積するが、特に調査区中央を南北に延びる丘陵部両側斜面(AW～BA・26～34, BE～BJ・26～33, B0～BQ・36～38, BS～CB・43～47)において顕著に認められる。斜面下位ほど厚く堆積しており、平均して30～80cm程の層厚である。堆積土中には径2～3cmの小礫を多く含み、上位層(LⅣa)ほど炭化物を多く混入している。また、LⅣとした土は、LⅣa～LⅣcおよびLⅣ上・LⅣ下なども包括している。このLⅣが遺物包含層を形成する主体層であり、弥生時代の遺物を多量に包含している。

LⅤ：浅黄褐色粘質土の無遺物層で、部分的に白色粘質土の場合もある。当遺跡の基盤を形成している層で、花崗岩が風化して形成された土壌である。調査区内においては、丘陵頂部付近で顕著に認められるが、急斜面部や斜面下位では流失して下層のLⅥが露出している。

LⅥ：にぶい黄色土の無遺物層である。LⅤとともに当遺跡の基盤層であり、径3～5cmの小礫が主体で、丘陵斜面土部では径15～30cmの礫も含む。

以上が各層の特徴であるが、これらを概観すると調査区内においてはLⅠ～Ⅲが薄く堆積し、丘陵斜面部や裾部ではその傾斜に沿って、下位程厚く堆積している。調査区中央付近の丘陵斜面部には、弥生時代の遺物を包含するLⅣが厚く堆積し、この上面に再堆積層であるLⅤ'が部分的に被覆している。当遺跡の基盤層であるLⅤ・LⅥは、丘陵頂部付近では粘質土のLⅤが顕著に認められるのに対し、斜面部ではLⅤ流失によって花崗岩・泥岩の礫が主体となる下層のLⅥが露出している。丘陵裾部や低地部では、斜面上位からの流れ込みや、浅い開析谷の開析作用によって形成された再堆積層が顕著に認められる。こうした堆積状況は、中島地区で共通する堆積状況と考えられ、調査区全体では丘陵部・斜面部が多いことや遺構検出面であるLⅥが流失しやすい礫層であったため、遺構検出や崩落した部分の認定が困難であった。

次に各層位と遺物の関係について概略的にみると、LⅠ・LⅡ中には近世～奈良・平安時代までの各時期の遺物が包含されているが、北側斜面部や丘陵頂部では極めて出土量が少ない。LⅢには、古墳～奈良・平安時代の遺物が包含され、丘陵斜面部等では弥生時代の遺物もこの層から若干出土している。LⅣに包含される遺物は、弥生時代の遺物が中心である。出土した遺物の大半は、LⅣの中でもLⅣaおよび上位からの出土であり、各包含層中においてLⅣa～LⅣc・LⅣ上・下に分層しているが、明確に層位別に出土したものではなく、混在して出土したものである。また、出土遺物からみれば、弥生時代の遺物が全総数の約85%と圧倒的に多いのに対し、土師器・須恵器は僅か約1%に過ぎない。

各層位と検出された遺構の関係について見てみると、層位と遺構の関係がある程度明らかとなっ

たものは15基である。弥生時代の住居跡である3・5～7・11・16号住居跡はLⅣ・LⅤおよびLⅥを掘り込み、奈良・平安時代の住居跡である2・14号住居跡や8号住居跡はLⅢ・LⅤ'を掘り込んで構築している。土坑では北側丘陵の開口部付近で検出された16～18号土坑はLⅢ上面からの検出であり、特に南側谷奥で検出された8基の土坑（2・4～9・14号土坑）は出土遺物等からも近代のものと考えられる。

2. 遺構の分布

今回検出された遺構は、屋外柱穴等の小穴類を除くと68遺構に達する。その内訳は住居跡16軒、土坑20基、土器埋設遺構4基、製鉄炉跡1基、溝跡16条、水田跡6面、焼土跡1基、畑跡2か所、性格不明遺構2基となり、これら遺構配置と分布状況について図8に示した。

遺構の分布状況を見ると、丘陵頂部や斜面中腹の小規模な平坦部に集中する傾向はあるが、遺跡全体では散在的である。また、遺構別に見ると、住居跡では調査区中央の丘陵部付近を中心に検出されており、土坑も同様な分布域を示している。ただし、調査区東側奥に集中する土坑（SK02・04～09・14）については、溝跡や畑跡等の分布と一致しており、他の散漫な分布状況よりもその密度が大きい傾向を示している。また、遺物包含層については、調査区中央の丘陵部斜面に厚く堆積しているが、遺物の包含密度も高く、当時の斜面への廃棄、あるいは上位からの流れ込みによって

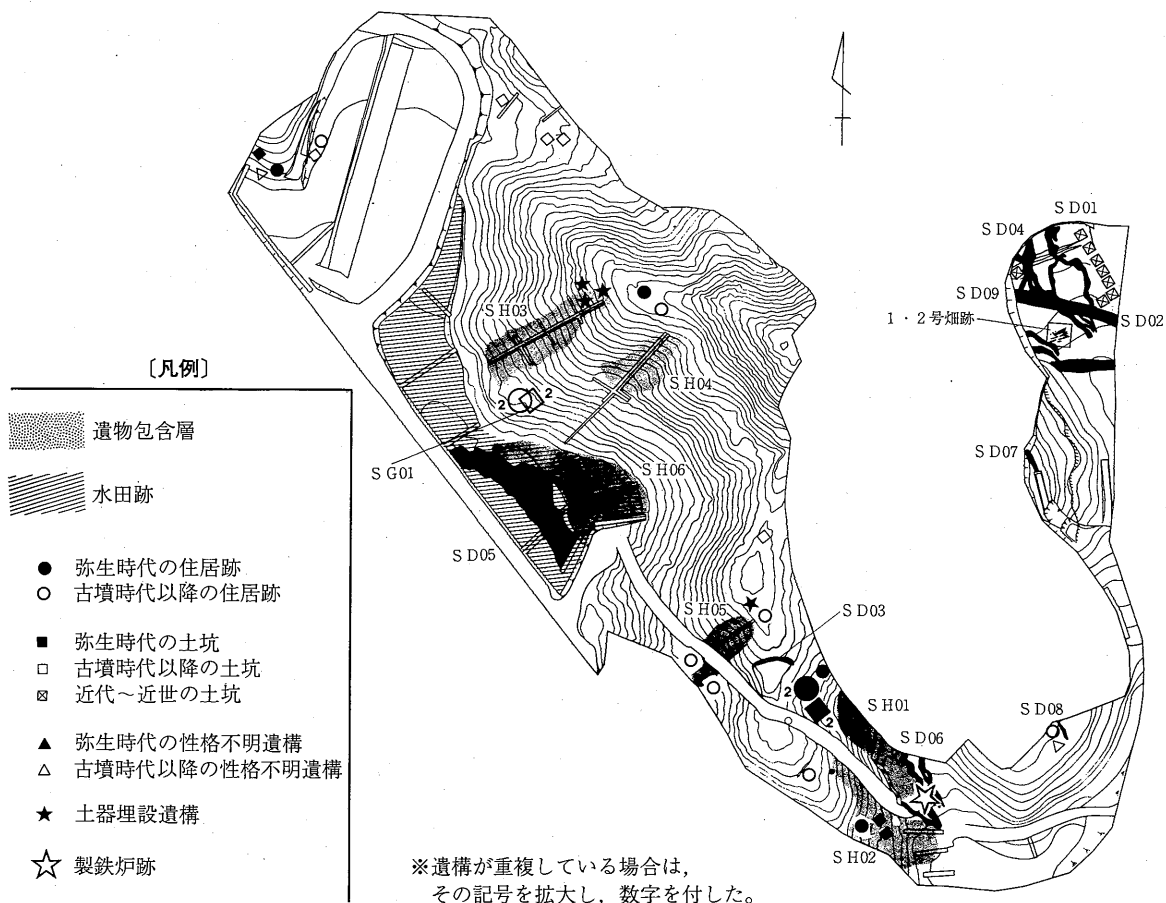


図8 遺構配置模式図

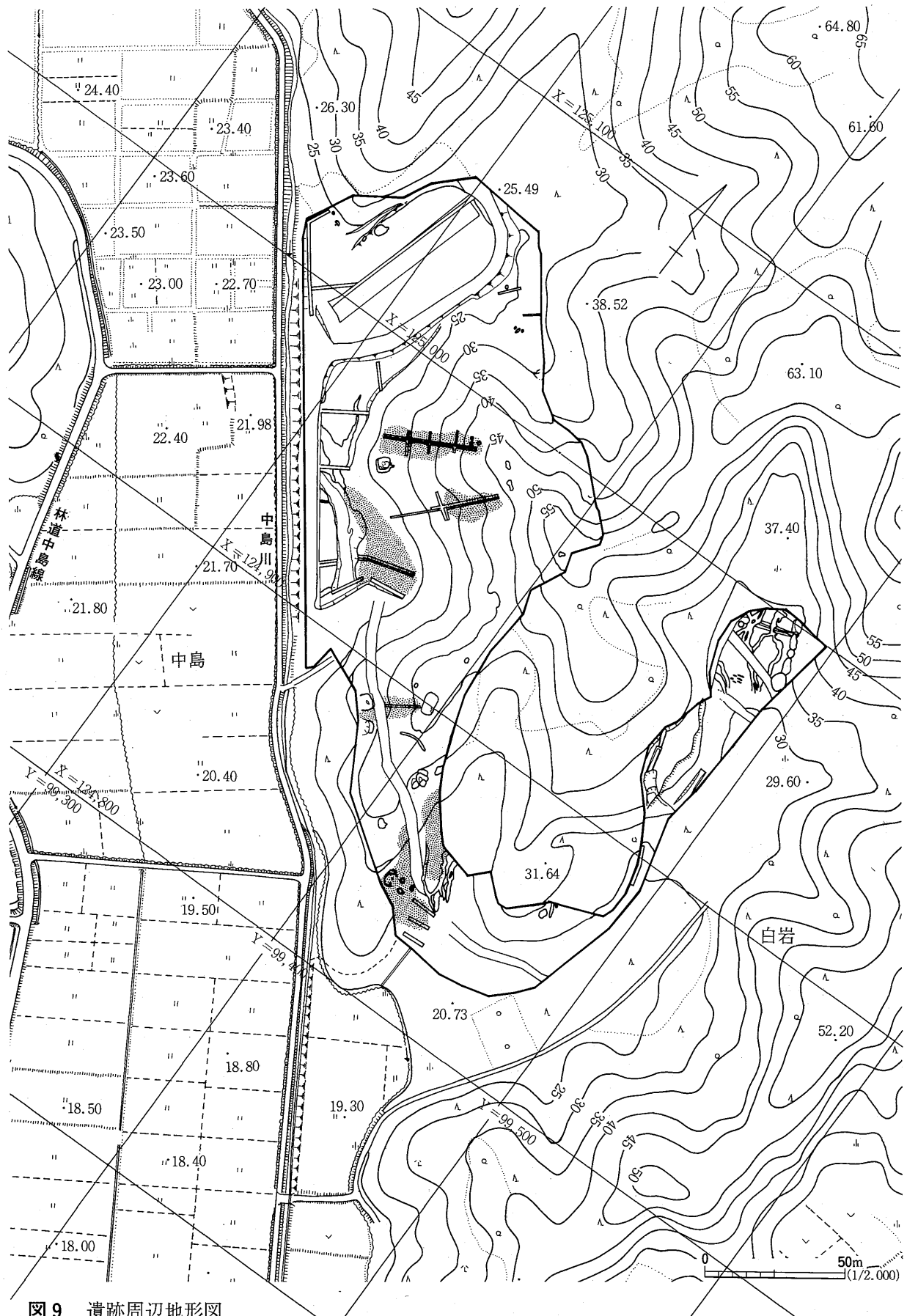


図9 遺跡周辺地形図

形成されたものと判断している。他に土器埋設遺構も2グループに分かれてはいるが、全体としては該期の住居跡や土坑の分布域と一致しており、遺物包含層が南西向き斜面に形成される丘陵先端部からの検出である。これら遺構が検出された丘陵下位の裾部から低地部には、水田面が5面確認されており、やはりその時期の住居跡や5・10号溝跡等の自然流路等と分布域が一致している。

次にこれら遺構を時期別に見てみると、弥生時代の住居跡は南東向き斜面の中腹から多く検出されており(S I 05~07・11・16)、3号住居跡の1基のみが北西へ延びる丘陵の細尾根部から検出されている。古墳時代以降の住居跡の分布状況をみても、同様な分布域を示している。1・10号住居跡は調査区中央の丘陵頂部および先端部で検出され、8・9・13号住居跡は西・南向き斜面の中腹から検出されている。これとは別に、1・10号住居跡等と同標高ではあるがやや離れた急斜面側で検出された4号住居跡や2・14号住居跡のように丘陵裾部から検出された住居跡もある。各1基のみ検出された製鉄炉跡および焼土跡は、検出層位・出土遺物等より古代のものとみられるが、丘陵裾部で検出されたその時期の住居跡の分布とも類似している。

調査区内では遺構の希薄・集中部分は若干あるが、住居跡等の遺構がある程度集中する分布域はやはり丘陵頂部や中腹および裾部のようである。細尾根丘陵地を中心とするこのような遺跡の在り方は、時代が異なる遺構の分布状況をみても同様な傾向が窺え、希薄な例といえよう。遺跡全体が丘陵地であるため、地形・地質等の自然的要因に起因する部分が大きく、特に限られた場所を選定して遺構を構築していたのであろう。(井)

第2節 竪穴住居跡

本調査区で検出された住居跡は、弥生時代6軒、古墳～平安時代10軒の合わせて16軒である。弥生時代の住居跡は尾根部及び丘陵頂部より下がった南斜面の平坦部に構築されており、古墳～平安時代の住居跡は丘陵頂部と、斜面が平坦になる位置に立地している。

1号住居跡 S I 01

遺 構 (図11・12, 写真6・7)

本遺構は、調査区中央の南北に延びる丘陵頂部、BM39・40, BN39・40, B039・40グリッドに位置する。同丘陵頂部の北側平坦部には、1号土坑が近接する。検出面はLV上面である。遺構内堆積土は4層に区分され、斜面上位からの流れ込みが観察されることから自然堆積層と考えられる。遺構内堆積土は、凝灰岩ブロックを含む褐色土で、ℓ4は壁溝内堆積土である。

平面形は長方形を呈し、規模は長軸6.3m、短軸3.9mである。主軸方向はN80°Eである。床面は、ほぼ平坦で北から南に向かって緩やかに傾斜し、その比高差は約20cmである。周壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は、最も遺存状態が良い北壁で50cmを測る。壁溝は北西コーナーから西壁、北東コーナーから東壁にかけて検出され、幅5～13cm、深さ5cmほどである。

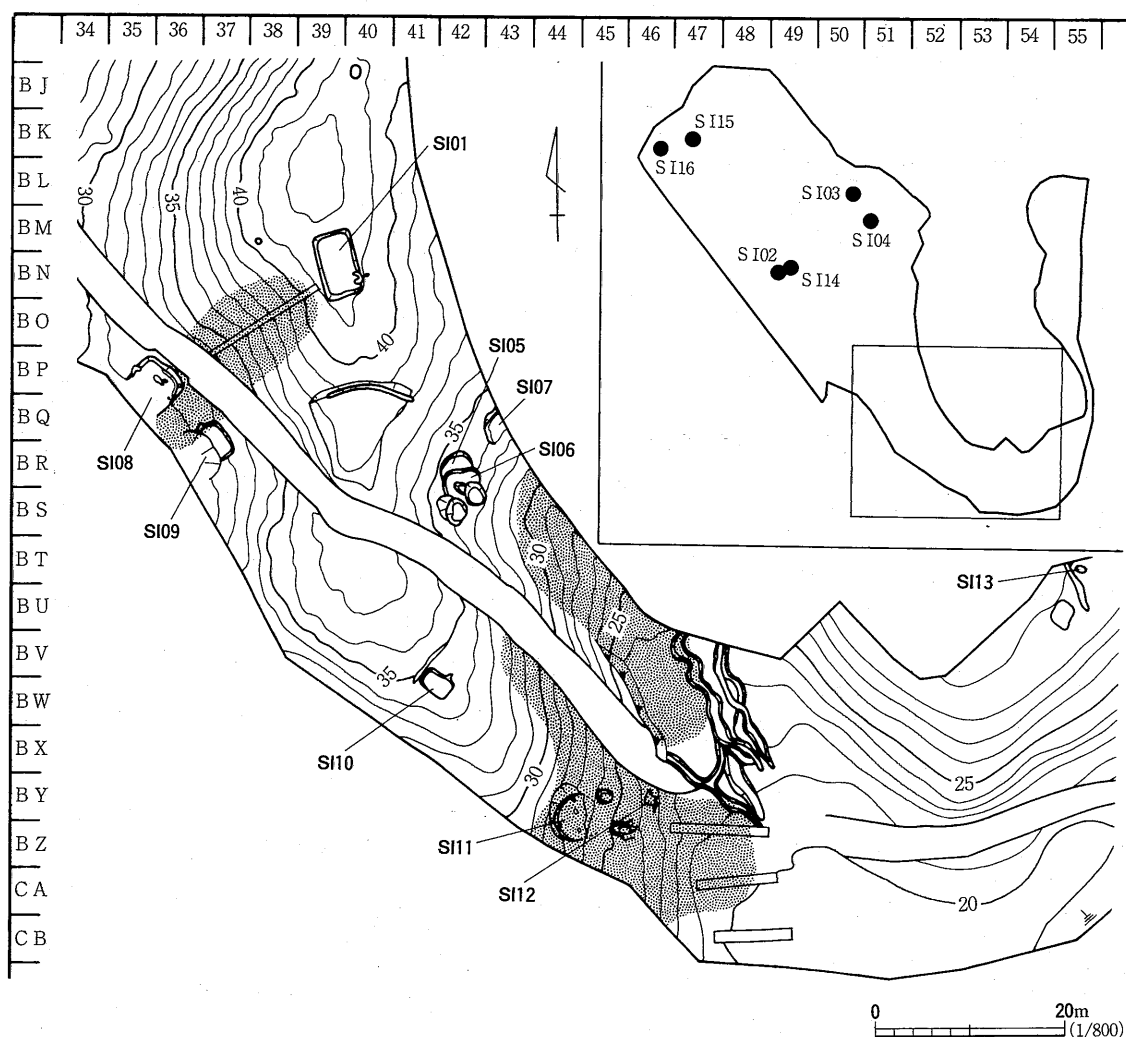


図10 住居跡位置図

東壁の南寄りに、酸化面を検出したので、カマドと判断した。カマドの燃焼部と袖部を検出したが、天井部は遺存していなかった。煙道部は削平を受け検出できなかったが、煙出しピットを検出した。カマド内堆積土は、炭化物・焼土粒を含む褐色土で、 $\ell 2$ は粘質土の焼土ブロックを含んでおり、天井・側壁の崩落土と判断した。 $\ell 3$ は粘土ブロックを多く含む粘質土で、燃焼部底面と判断した。

遺存するカマドの規模は、燃焼部で奥行き60cm、最大幅70cmを測る。残存する袖部上端から燃焼部底面までの深さは最深部で18cmを測る。燃焼部底面には酸化面を確認できなかったが、左袖部の燃焼部側壁面上部は良く焼けており、酸化部分は厚さ1～5cmに及ぶ。燃焼部奥壁上端から煙出し先端までは60cmを測る。煙出しピットは遺存部で径16cmの円形を呈し、深さ約30cmを測り、周壁に酸化面が見られた。

床面からピットを6基検出した。そのうちP1～5は壁際にあり、本住居跡に伴う柱穴と判断した。その規模は直径26～40cm、深さ8～24cmを測る。P6は、床面北西部に位置し、隅丸長方形を呈する。その規模は、長軸200cm、短軸84cm、深さ8cmを測る。ピット内堆積土は、炭化物を含む

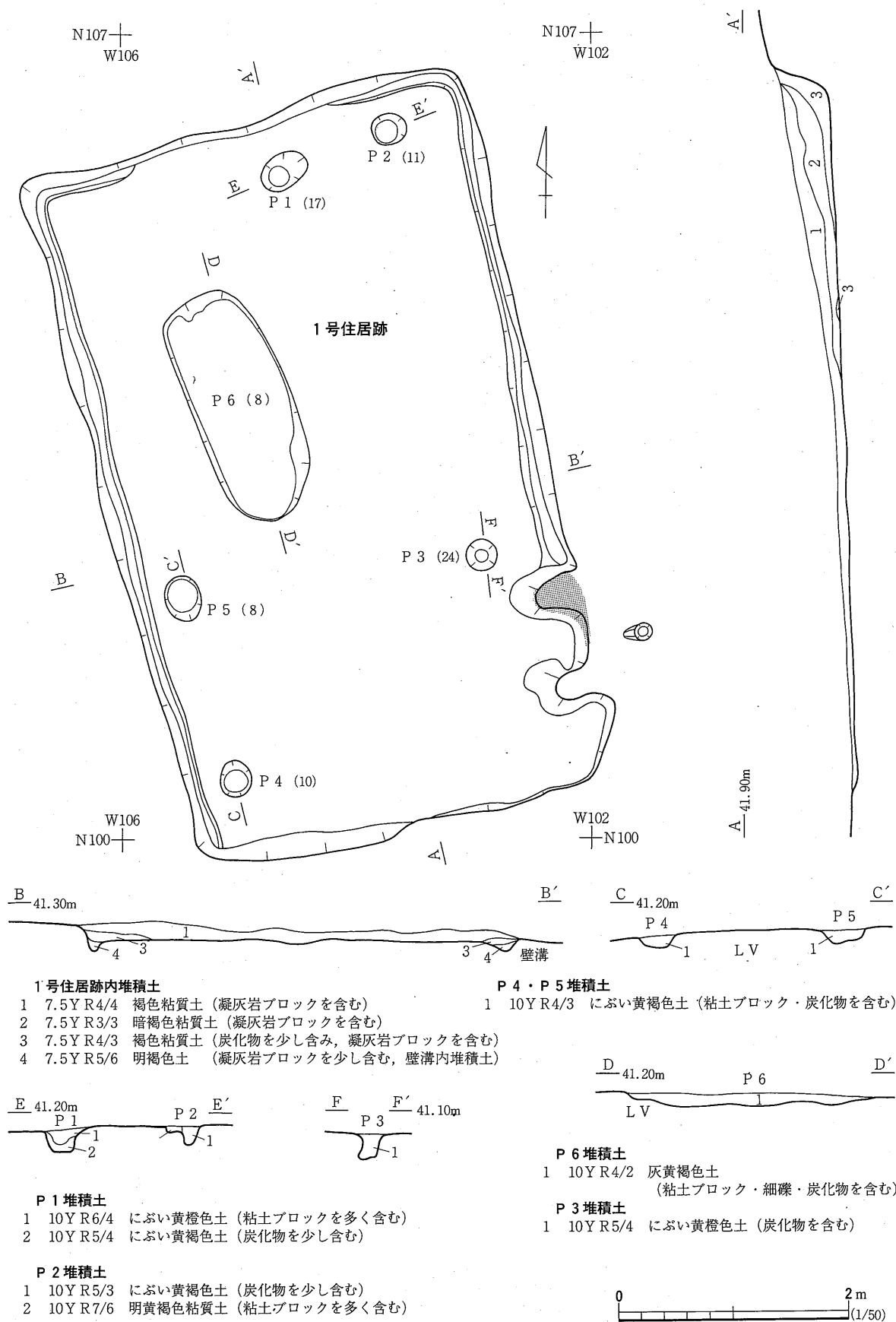


図11 1号住居跡

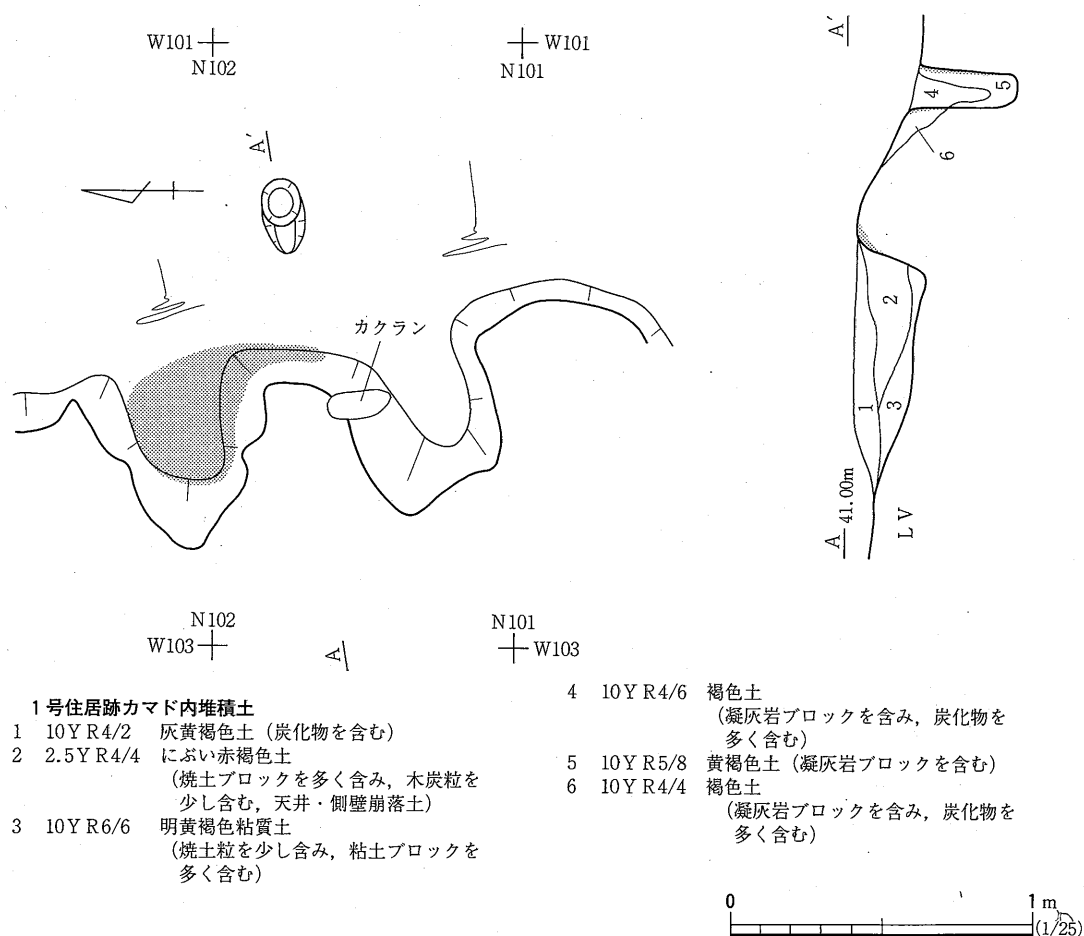


図12 1号住居跡カマド

褐色土で、LVの粘土ブロックが含まれていた。

遺物 (図13, 写真122)

遺構内から出土した遺物は、土師器片79点、石器類3点である。そのうち、遺存状態の良い3点について図示した。

土師器 13-1はC区ℓ3から出土した非ロクロの土師器杯で、約70%が遺存している。肥厚な丸底の底部から内湾気味に立ち上がり、直線的に外傾しながら口縁部に至る器形である。外面胴部下位から底部にかけてはヘラケズリ調整、口縁部はヨコナデ調整が施されている。内面は黒色処理が施され、口縁部から体部にかけては横方向、底部は一定方向への丁寧なヘラミガキ調整が加えられている。胎土は精良で、焼成も良く、にぶい黄橙色を呈する。法量は口径16.2cm、器高5.5cmを測る。2はC区床面から出土した非ロクロの土師器杯で、約70%が遺存している。平底風の丸底の底部と体部の境に段を有し、内湾気味に立ち上がる器形である。外面は口縁部から体部にヨコナデ調整、底部にヘラケズリ調整が施されている。内面は黒色処理が施され、口縁部付近には横方向、底部には一定方向へのヘラミガキ調整が施されている。器面には粘土紐積み上げ痕が明瞭に残り、胎土は細砂を多く含み、焼成も良く、明褐色を呈する。法量は口径14.8cm、器高3.9cmを測る。3はb区床面直上から出土した非ロクロの土師器甕の底部と考えられる。体部内外面にはヘラケズリ

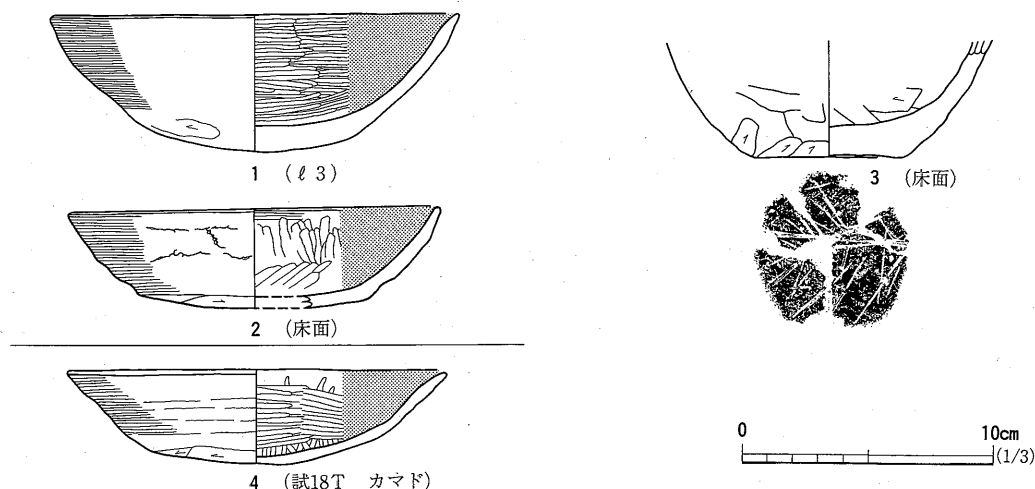


図13 1号住居跡出土土師器

・ナデ調整が施されている。底部は平底で、木葉痕が認められる。胎土は砂粒を含み、焼成は良好で、色調は内面にぶい黄褐色、外面黄褐色を呈する。法量は底径6.0cm、遺存高4.6cmを測る。

ま と め

本遺構は、平面形が長方形を呈する竪穴住居跡であり、調査区から検出された住居跡の中では大形に属する。本住居跡は単独で構築されている点、形態が長方形基調という点が特徴的で、該期の住居跡としては珍しい。所属時期は出土土器の特徴から栗圀式に比定され、7世紀後葉に機能したものと推定した。

(佐久間ふく子)

2・14号住居跡 S I 02・14

遺 構 (図14～17, 写真8～11)

本遺構は、調査区BA27, BB26・27, BC27グリッドに位置する。西向き斜面の丘陵裾部の舌状にせり出した標高26m程の平坦部にある。検出面はLV上面である。検出当初は単独の住居跡と想定し、さらに広い範囲で木炭が堆積していたので、火災住居も想定して、掘り込みを始めた。掘り込み中の土層観察により、14号住居跡と19・20号土坑、1号焼土跡との重複を確認した。床面精査中に2号住居跡のプランを検出し、土層観察ベルトから壁の立ち上がりを確認した。新旧関係は、2号住居跡は14号住居跡よりも新しく、19・20号土坑、1号焼土跡よりも古い。2・14号住居跡について、調査の便宜上一緒に掘り込み、調査をしたので、ここでは一括して取り扱い、説明することとする。2号住居跡から順に述べる。

2号住居跡の堆積土は3層に分層される。遺構内堆積土は20号土坑に切られており、最下層でl 3の黄褐色土が凹レンズ状に堆積する。l 1・2は褐色土で壁際の僅かな部分に堆積しており、斜面上方からの流入土で、自然堆積を示している。平面形は方形を呈し、規模は長軸3.4m、短軸3.3mである。周壁は、東側では遺存状態は良く、西側の斜面下位では悪い。4辺とも約45°の角度で緩やかに立ち上がり、遺存高は4.5～10.3cmである。壁溝は認められなかった。床面はLVを掘り

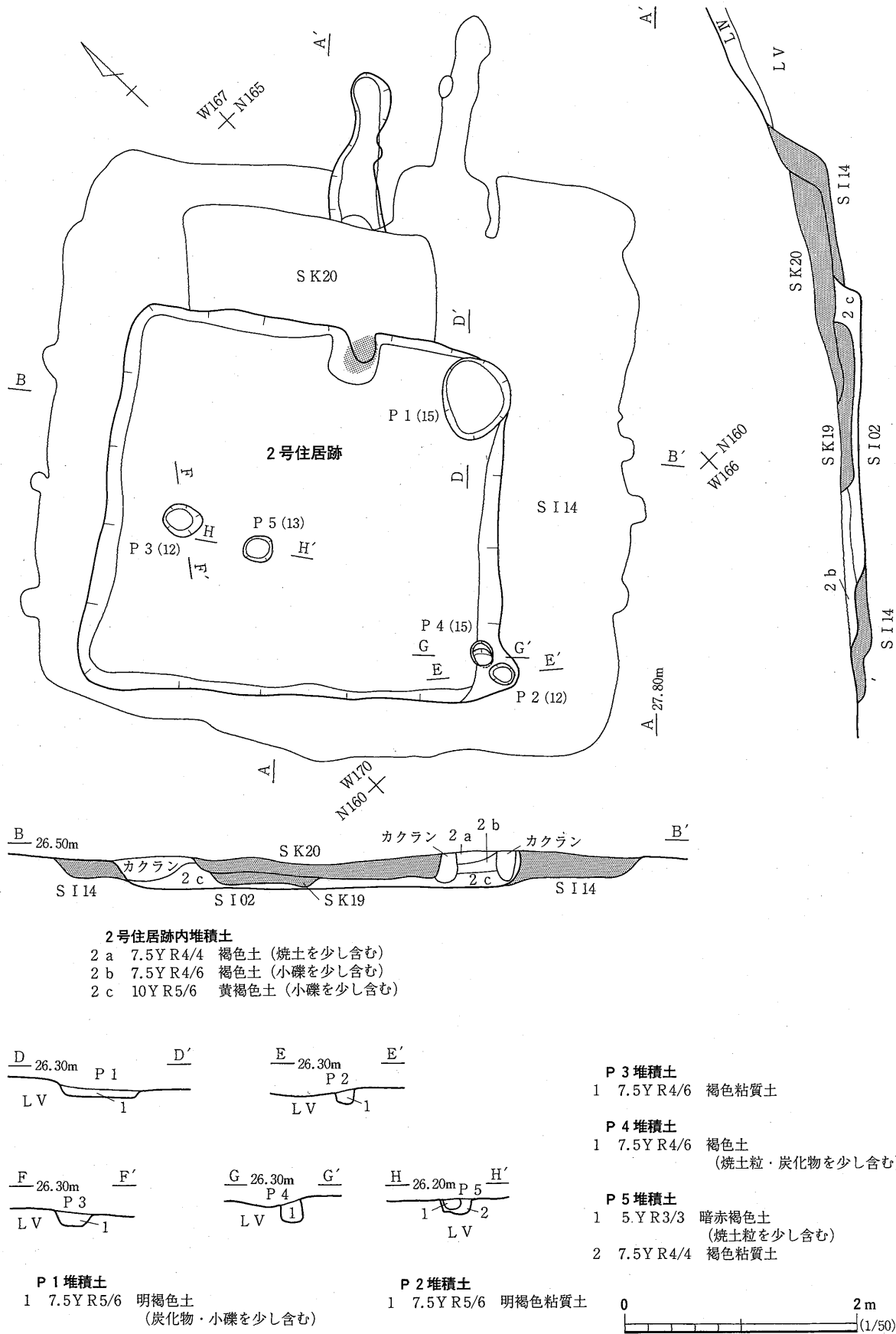


図14 2号住居跡

込み、水平で平坦であるが、踏み締まりや硬化面は確認できなかった。

カマドは東壁中央部に付設されていた。重複する20号土坑により、カマドと煙道の大部分が破壊されているため、煙道の約半分と右袖の一部のみを検出した。袖部の構築状況は遺存が悪く、不明である。煙道は地下式で、その遺存長は1.2mであるが、遺存する袖の一部と東壁の位置から考えると、本来の長さは約2mと想定できる。煙道の右側の一部と煙出し部の一部では、褐色の弱い熱酸化が見られた。煙出し部の平面形は、開口部の長径48cm、短径38cmの楕円形である。煙出し部からは、18-2の土師器甕が正位で出土した。出土状況から、斜面上方からの流入とは考えにくく、カマド廃絶時に儀礼的な意味で、意図的に遺棄したものと判断した。

床面からはピットが5個確認された。P1の平面形は、不整楕円形を呈する。規模は、長軸64cm、短軸58cm、検出面からの深さは、10cmの浅いピットである。底面は、平坦である。形状と位置から貯蔵穴と考えられる。P2～5は柱穴であるが、柱痕は確認できなかった。各ピットは、ほぼ円形をなす。最大のP3の規模は、長軸34cm、短軸30cm、検出面からの深さ12cmである。最小のP4は、長軸21cm、短軸18cm、検出面からの深さ15cmである。検出した柱穴からは、上屋の構成は不明である。

14号住居跡の堆積土は2層に分層され、少量の礫を含む褐色系の堆積土である。2号住居跡に壊されており、四方の壁際に僅かずつ自然堆積がみられる。平面形は方形を呈し、規模は長軸5.1m、短軸5.0mである。周壁は、斜面上位の東半の遺存状態が良く、斜面下位の西半の遺存状態は悪い。

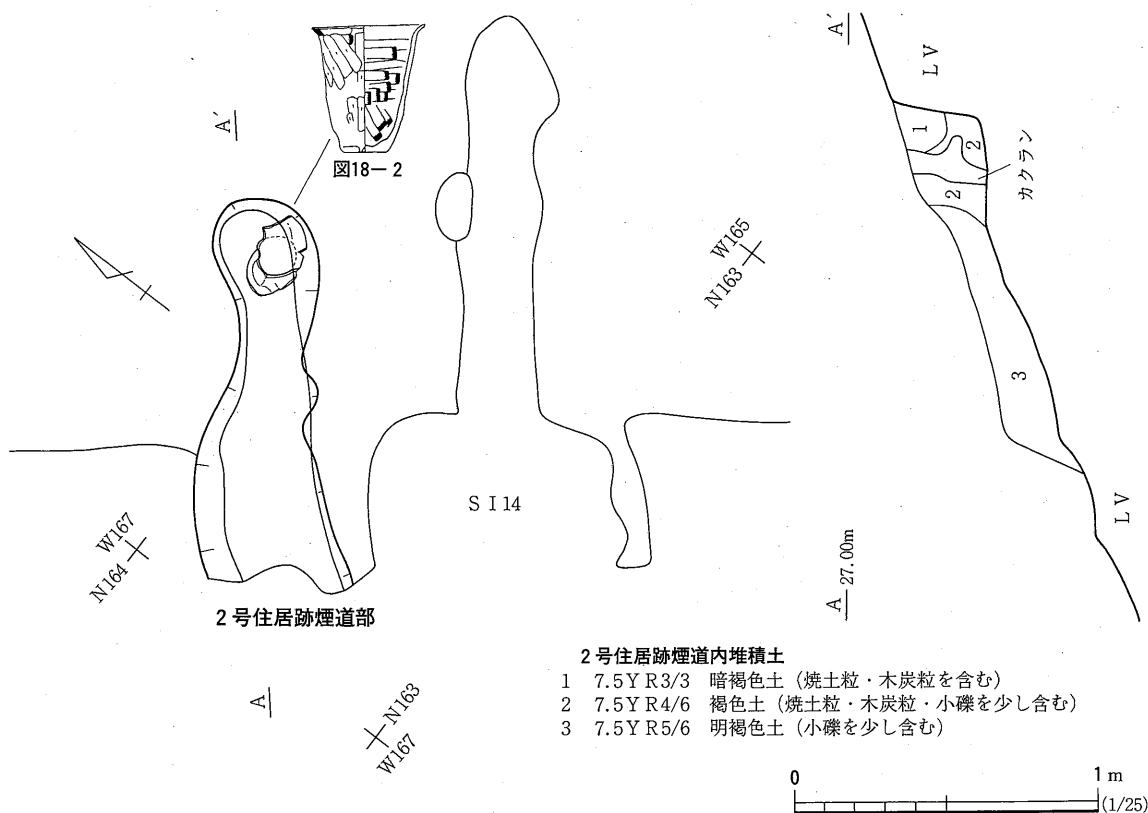


図15 2号住居跡煙道部

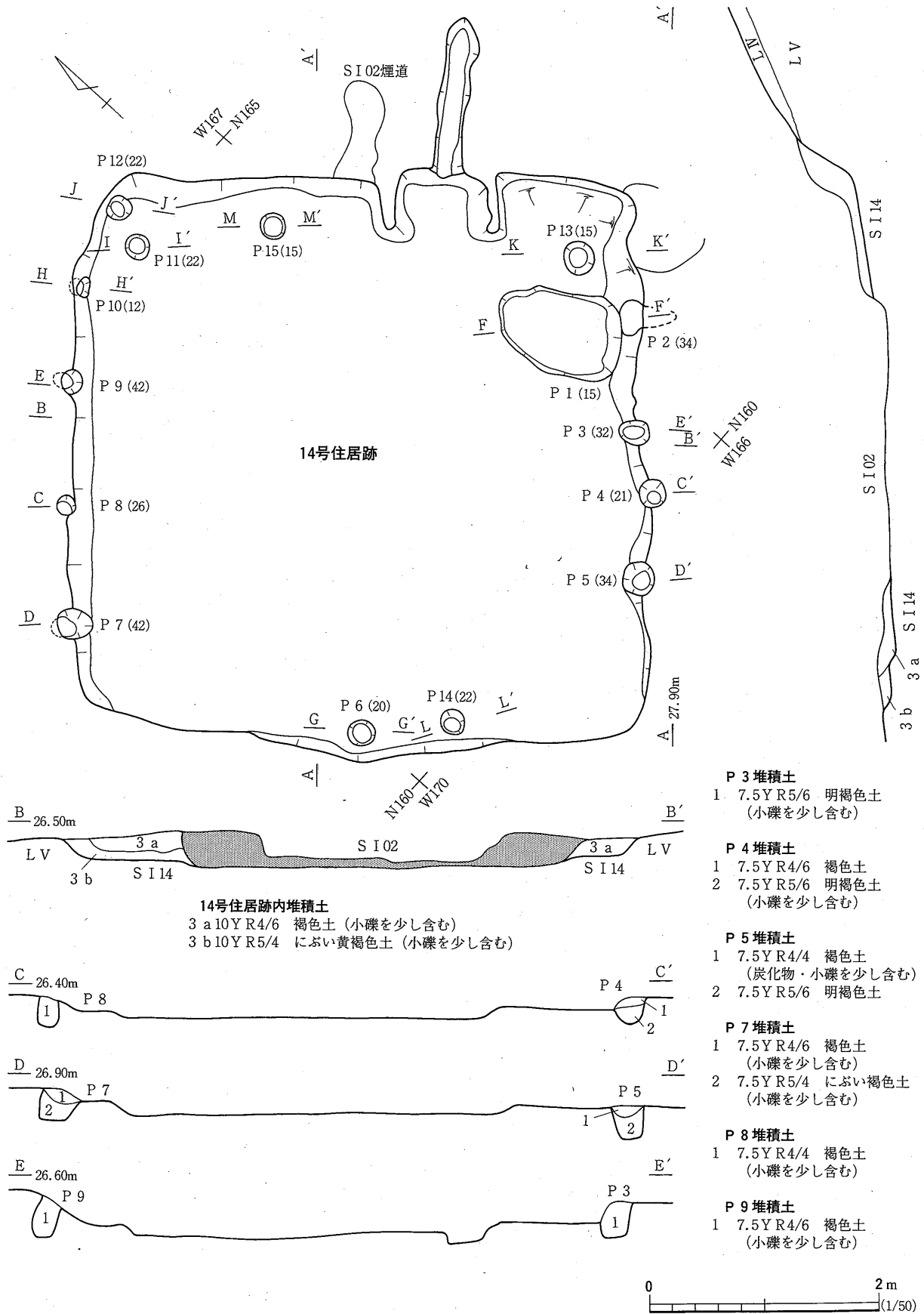


図16 14号住居跡

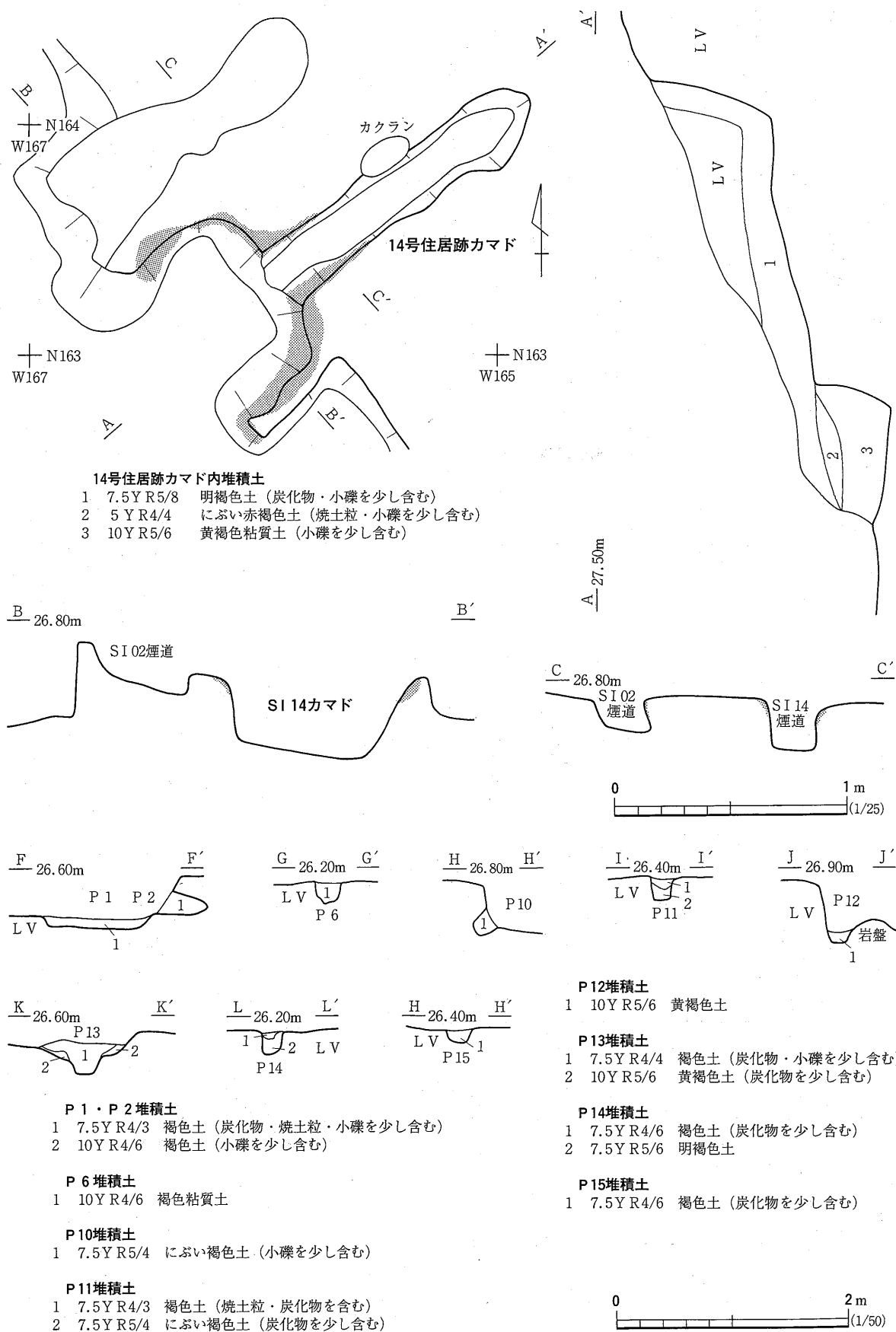


図17 14号住居跡カマド・ピット

西壁の両コーナーは検出できなかった。遺存状態の良い東壁は、最大42cmほどで急に立ち上がっている。周溝は認められなかった。床面は、LVを水平に掘り込んでいる。多少の凹凸はあるが、ほぼ平坦である。硬化面や踏み締まりは確認できなかった。

カマドは東壁の中央よりやや南側に設置されていた。カマド内堆積土は、3層に分けられる。ℓ1は炭化物を若干含む明褐色土、ℓ2は焼土を少量含んだにぶい赤褐色土、ℓ3は粘性のある黄褐色土である。ℓ1は、煙道部から続いて堆積しており、カマドが廃絶した後にLVに相当する土が流入したものである。ℓ2・3は、カマドの天井崩落土を含むカマドの崩壊土と考える。袖部は、LVを残して構築しており、住居跡内に約90cm張出している。燃焼部は最大幅80cm、奥行45cm、深さ37cmを測る。袖部及び奥壁では酸化面が広い範囲で確認されたが、燃焼部底面では木炭粒や焼土粒は確認できなかった。煙道は地下式で、カマド奥壁から1.36m北東へ延びている。煙出し部の平面形は、長径40cm、短径30cmの楕円形を呈し、煙道部からほぼ垂直に立ち上がる。

ピットは、床面及び壁側から15個確認された。P1は南壁の中央やや東よりに位置し、平面形は、不整楕円形を呈している。掘形上端部での規模は、長軸110cm、短軸71cm、床面からの深さは15cmを測り、浅いピットである。底面はやや南側に傾斜しているが、ほぼ平坦である。貯蔵穴と考える。P2～15は柱穴で、うち8個は壁柱穴である。いずれからも柱痕は確認できなかった。

各ピットの平面形は、円形や楕円形基調で、規模は18～32cm、床面からの深さは15～42cmである。床面にあるピットは、深さが18～22cmと浅く、壁柱穴は、30～48cmと深く掘り込まれている。壁柱穴P2とP10、P3とP9、P4とP8、P5とP7は、それぞれ対をなす位置にある。それぞれの柱間の長さは、4.8m～5.1mである。

遺物 (図18・19, 写真123～125)

2号住居跡出土遺物 2号住居跡から出土した遺物は、土師器片262点、須恵器片26点、弥生土器片12点、鉄製品10点、石器1点である。そのうち、遺存状態が良く図示できたものは土師器2点、須恵器13点、鉄製品3点、石器1点である。

土師器 18-1はℓ2から出土した土師器杯で、約1/5が遺存している。平底の底部から直線的に外傾するもので、碗状に深みのある器形である。外面は摩滅しており不明瞭であるが、黒色処理が施され、体部上半にヘラケズリ調整が施されている。内面は黒色処理が施され、体部から口縁部にかけて横方向へのヘラミガキ調整が加えられている。胎土は緻密で、焼成は良好である。法量は推定底径6.5cm、口径14.5cm、器高5.7cmを測る。2は煙出し部のℓ1から出土した非ロクロの土師器甕で、ほぼ完形品である。平底の底部から直線的に外傾する体部を有し、口縁部で緩く外反する器形である。外面の器面調整は口縁部がヨコナデ調整、胴部が縦位へのヘラケズリ調整が施されている。内面は体部上半が横方向、下半は縦位・斜め方向へのヘラナデ調整が施されている。底部には木葉痕が認められる。胎土は粗砂や細砂を多量に含み、焼成は良く、にぶい褐色を呈する。法量は底径6.9cm、口径18.2cm、器高20.3cmを測る。

須恵器 18-3～8は底部から体部下半を遺存する須恵器杯である。3はℓ2から出土した須恵

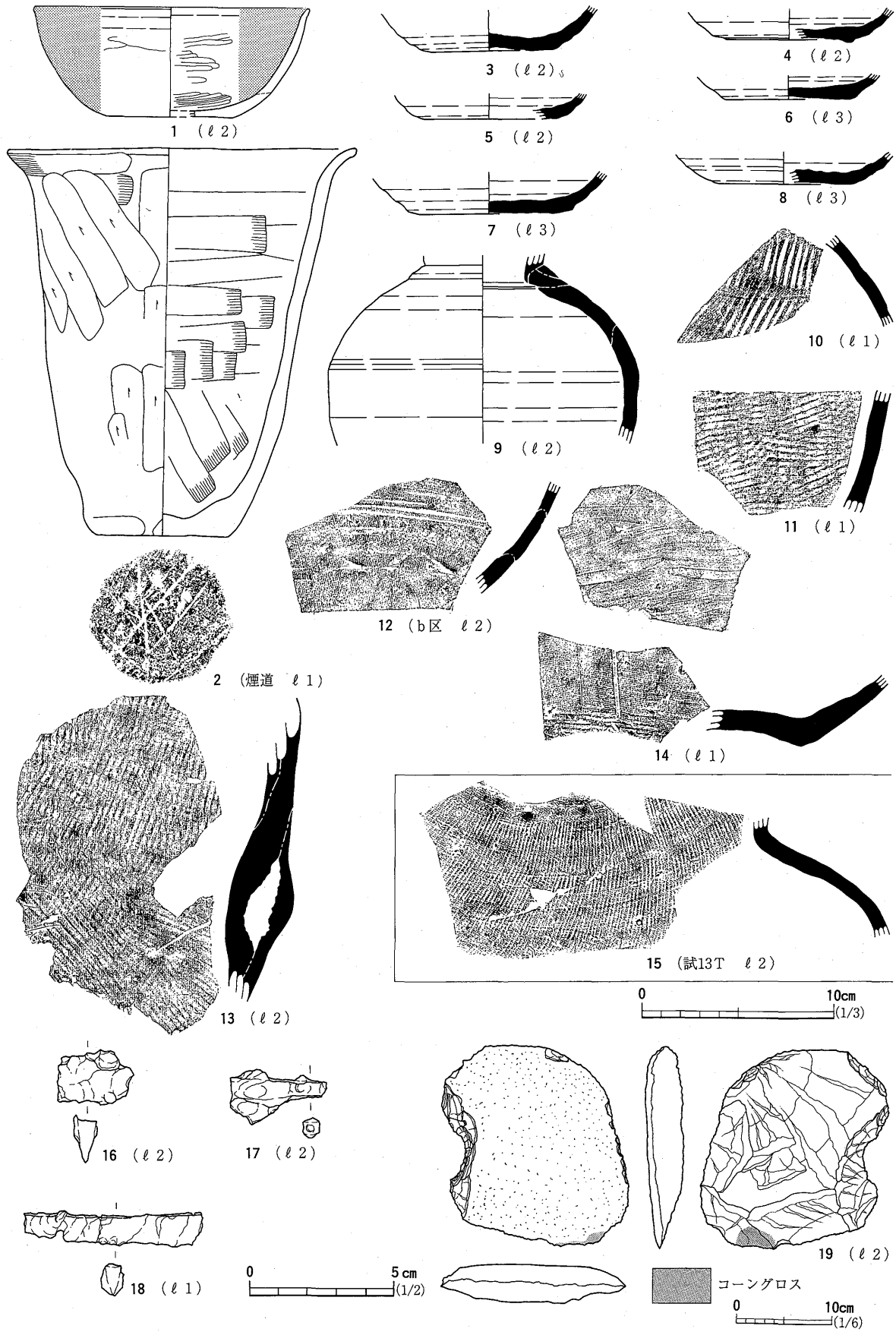


図18 2号住居跡出土土師器・須恵器・石器・鉄製品

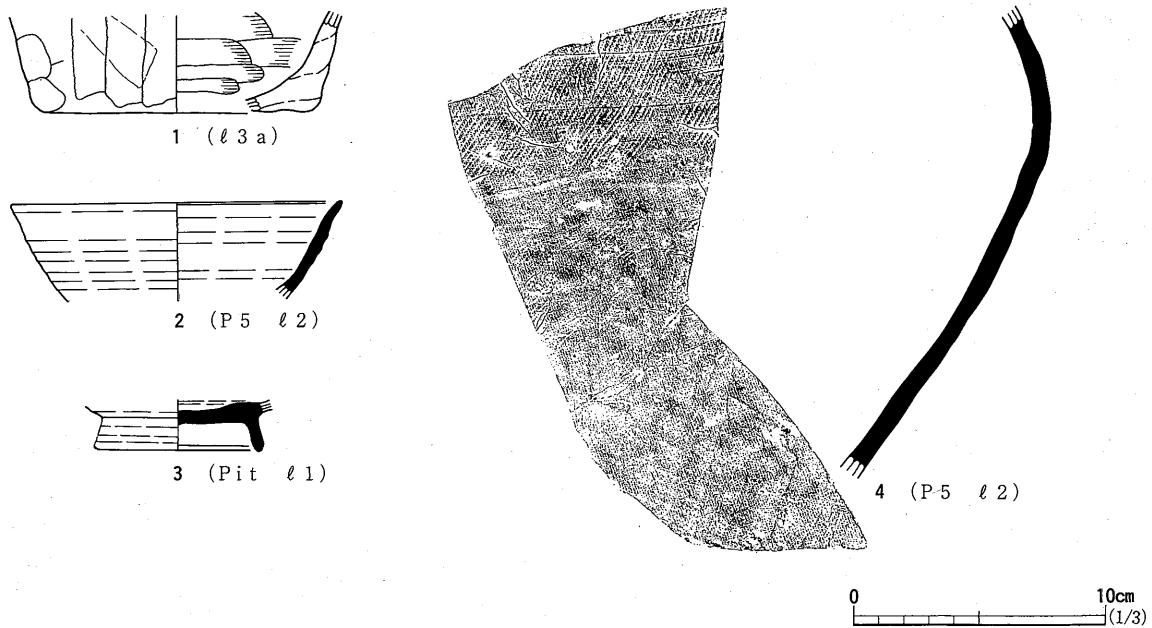


図19 14号住居跡出土土師器・須恵器

器杯で、約3/5を遺存している。底部切りはなし技法は回転ヘラ切りである。体部は二次加熱を受け赤変した部分が認められ、若干摩滅している。4・6の底部は静止糸切りによるもので、5・7・8は底部切り離し後のヘラケズリ再調整が観察される。色調は4・6・8は灰白色を呈するが、3・5・7はにぶい黄橙色である。胎土は粗砂粒を多く含み、4・8の焼成は堅質で特に良好である。底径は比較的遺存状態が良い3が7.5cm、6が6.9cm、7が8.0cm、8が7.0cmである。

9は須恵器長頸瓶の体部片である。胴上部に最大径を持つ球形を呈し、頸部にリング状の突帯が三段巡る。胎土は若干の細砂を含んで、焼成は良く、黄灰色を呈する。遺存する法量は最大径16.2cm、遺存器高9.9cmを測る。10～14は須恵器甕の破片資料で、13・14は大甕の資料と思われる。外面には平行タキ痕、内面には当て具によるオサエの痕跡が一部認められる。12の内面はナデ調整によって当て具痕が消されている。

鉄製品 18-16～18が該当する。16・18は刀子身の破片資料である。断面三角形状を呈するが、刃部の詳細は錆による劣化が著しく不明である。法量は16が遺存長2.1cm、幅1.6cm、厚さ0.8cmを測り、18は遺存長6.2cm、幅1.1cm、厚さ0.8cmを測る。重量は共に4gである。17は紡錘車軸の一部と思われるが、錆による劣化が進んでいるため詳細は不明である。遺存長2.4cm、最大幅1.9cm、最大厚0.6cmを測り、重さ60gである。

石器 18-19はl 2から出土した大型の板状石器である。比較的大きく採取した素材剥片の側縁に一次剥離調整を施しているものである。自然面を残し、片側縁には敲打によって抉りを作出している。刃部にはコーングロスが認められ、網点によってその範囲を表記している。石質はヒン岩である。

14号住居跡出土遺物 14号住居跡から出土した遺物は土師器片89点、須恵器片5点、弥生土器片26点である。そのうち、遺存状態が良く図示できたものは土師器1点、須恵器3点である。

土師器 19-1は胴部下位から底部付近を遺存する非ロクロの土師器甕である。底部から直線的に外傾する器形を呈する。器面は摩滅が著しいが、外面に縦位のヘラケズリ調整、内面には横位のヘラナデ調整が施されている。胎土は粗砂を含み、黄橙色を呈する。遺存する法量は底径10.8cm、遺存高3.6cmを測る。

須恵器 19-2は底部欠損の須恵器杯である。体部が直線的に外傾し、口縁部で緩く外反するもので、底径に対する口径比が比較的大きく、深みのある器形と思われる。胎土は粗砂を多く含み、焼成は良く、灰白色を呈する。遺存する法量は口径13.2cm、遺存高3.9cmを測る。3は底部から高台部を遺存する須恵器高台付杯である。胎土は細砂を多く含み、焼成は良く、灰色を呈する。遺存する法量は底径6.6cm、遺存高2.2cmを測る。4は須恵器甕の胴部資料で、外面には平行タタキ痕が認められる。

ま と め

2号住居跡は本調査区では中型の竪穴住居跡である。煙出し部からは、土師器甕が正位で出土した。カマドの遺存状態は悪いが、煙道部と煙出部の遺存状況から、他の住居跡に比べて、煙道が長いことが特徴的である。機能時期は、出土遺物から8世紀後半と考えられる。

14号住居跡は調査区内から検出された住居跡の中では大型に属する。対応する壁柱穴が8個検出された。機能時期は重複する2号住居跡よりも古く、出土遺物から2号住居跡以前の8世紀代の所産と考えられる。

2号住居跡と14号住居跡で、住居の建て替えは確認できなかった。両住居跡とも日当たりのよい丘陵裾部に立地している。2・14号住居跡とも立地や所属時期から、西側低地に展開する水田跡との密接な関連が想定される。

(福 島)

3号住居跡 S I 03

遺 構 (図20, 写真12・13)

本住居跡は調査区の北側、AW34グリッドに位置する。遺構は標高47m程の丘陵頂部の平坦部に立地し、表土剥ぎ終了後の遺構検出作業の際に検出された。当初淡い赤褐色を呈する焼土化範囲が検出され単独の焼土遺構と思われたが、踏み締まりの範囲と柱穴と考えられるピットが合わせて検出されたことから、炉を伴う住居跡と判断した。

遺構の検出面はLV上面であるが、丘陵の頂部という立地条件のために、5cm程の薄い表土の直下で検出面に至り十分な土層観察が行えなかったうえ、丘陵の肩にかかる部分はすでに流出したものか本来の形を止めておらず、竪穴の掘り込みが存在したかは明らかにできなかった。また、住居の床面に利用された地山の白色粘質土層にも掘り込みの跡はみられず、住居跡全体の形状・規模ともに不明確で、踏み締まりの範囲を把握するにとどまった。

なお、本住居跡から約15m隔てた丘陵の西側斜面上位には弥生時代中期の2～4号土器埋設遺構が検出されているほか、同時期の3・4号遺物包含層は本住居跡直下の南西斜面に形成されている。

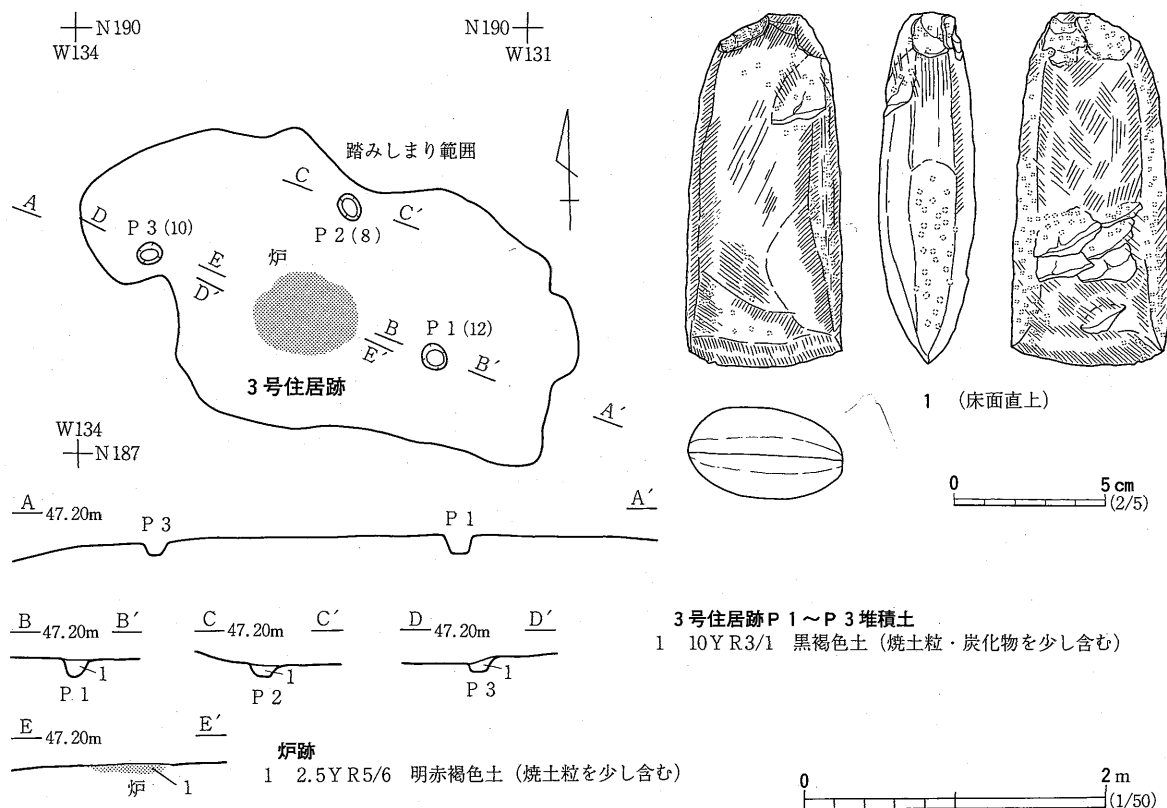


図20 3号住居跡，出土石器

本住居跡は、丘陵頂部の狭小な平坦部を利用して構築されている。遺存する踏み締まりの範囲は、東西3.4m、南北1.8mを測り、床面はLV上面で地山を利用して形成され、炉から外方に向けて緩やかな勾配が付く。

貼床はみられず地山を整地して平坦な床を作り出している。また、遺存する床面から小穴が3か所検出された。直径16~18cm、深さ8~12cmを測り、堆積土中には焼土・炭化物を少量含んでいる。いずれも柱穴と考えられる。

炉は踏み締まりの中央やや南よりに検出された。長径70cm、短径55cmを測る長円形の地床炉で、堅く焼け締まり淡い赤褐色を呈する。断ち割りによる断面観察では被熱範囲は中心部で床面下7cmにおよんでいる。掘形は確認されず、床面を直接利用している。

遺物（図20，写真126）

遺物は炉北側の床面から太型蛤刃石斧1点が出土している。

まとめ

本住居跡では年代の明らかな出土遺物はないが、磨製石斧の特徴と、本遺構の西側斜面に形成された3・4号遺物包含層の立地状況とから遺物包含層と同時期と推察され、弥生時代中期末の所産と考える。

（吉田）

4号住居跡 S I 04

遺 構 (図21, 写真14・15)

本住居跡は調査区北側のAX35グリッドに位置する。遺構は丘陵頂部に近い標高46~47m程の南西向き斜面に立地し、表土剥ぎ後の遺構検出作業で確認された。遺構の検出面はL V上面であるが、L II・IIIを主とした遺構内流入土の状況から構築時の掘込面はさらに上層と考えられる。本住居跡は今回の調査区のなかでも最も標高の高い場所にあり、3号住居跡ほか弥生時代の遺構が検出された地区の東端に位置する。遺構内の堆積土は4層に区別されるが、いずれも住居廃棄後のL II・IIIの流れ込み、または壁の崩落によるものであり、自然堆積である。

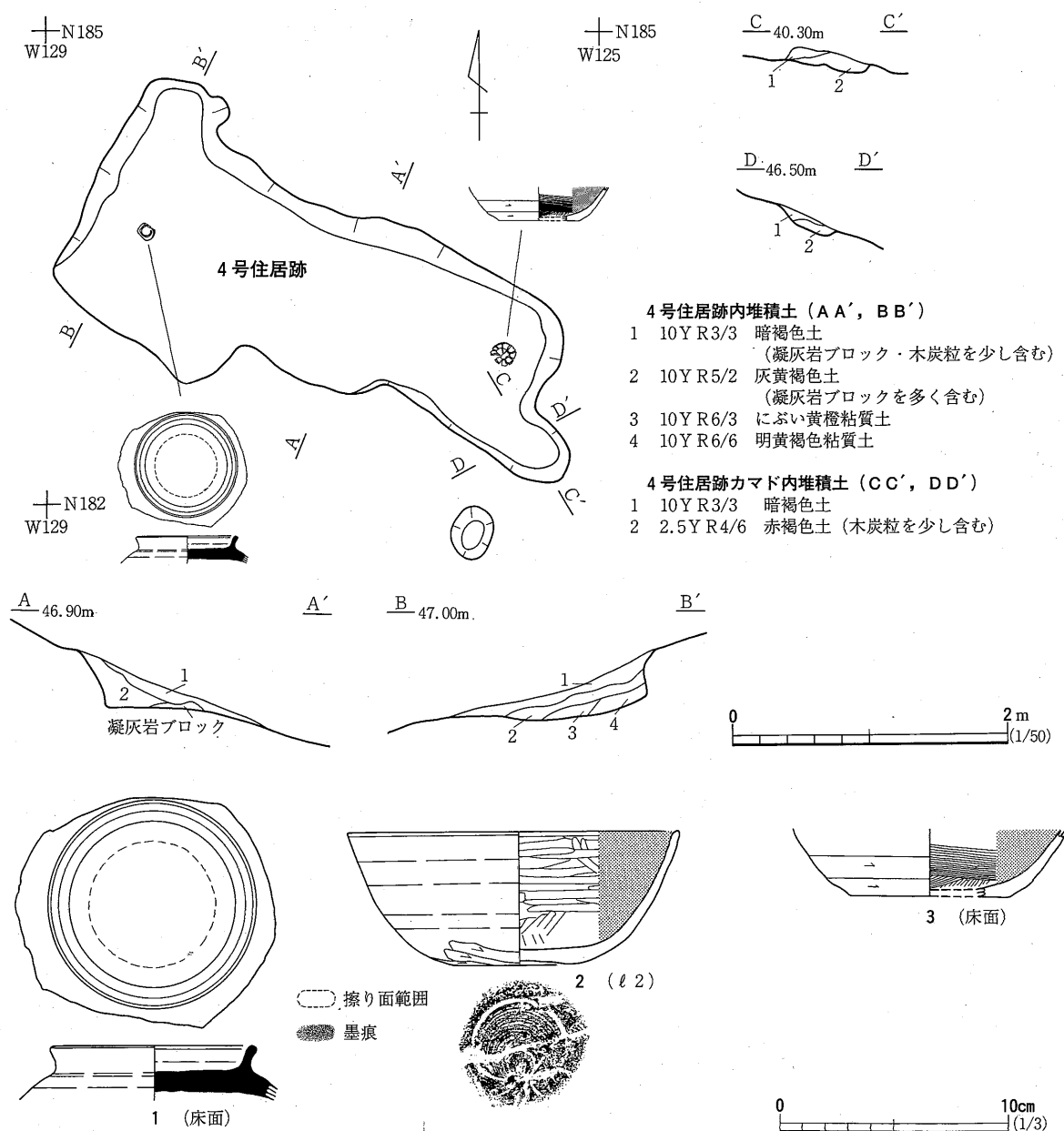


図21 4号住居跡, 出土土師器・須恵器

本住居跡は急斜面に構築されているため、遺構の南半に当たる斜面下位の床と壁の立ち上りはすでに流出し本来の形を止めておらず、住居跡全体の形態・規模は確認できなかった。遺存する床面での規模は東辺0.95m、西辺1.7m、北辺3.2mを測り長方形基調のものであるが、北壁の西端が40×40cm程山側へ張り出している。竪穴の周壁は北壁と東壁・西壁の一部が遺存しており、壁高は北壁で35～40cmを測る。床面は貼床によって地山を整地し、北壁から南に向けて緩やかな勾配が付く平坦な床を作り出しているが、急峻な地形に制約されたところが大きいと考える。

カマドは東壁に施設されるが、煙道にかけてすでに形を止めていない。わずかに遺存する燃烧部底面は煙道にかけて緩く傾斜して下がり、周囲の酸化は弱い。カマドの南側から長円形の小穴P1が検出された。長径37cm、短径28cm、深さ6cmを測り、長軸が住居の東壁と並行していたものと推察され、貯蔵穴の底部分と考えられる。この他に柱穴となるような小穴は確認されなかった。

遺物 (図21, 写真127)

本住居跡からは土師器片8点、須恵器片2点が出土している。

土師器 21-3は床面上から出土した土師器杯で、体部下半から底部にかけての資料である。底径7.0cmを測り、薄手の個体である。ロクロによる整形の後、体部下端から底部にかけて回転ヘラケズリによる再調整を施し、内面は丁寧なヘラミガキと黒色処理を施す。胎土には細砂粒を含む精製されたものが用いられ、焼成も良好で外面は黄橙色を呈する。2は堆積土中から出土した土師器杯である。口径14.5cm、底径5.1cm、器高5.8cmを測り、底部が小さく深形で椀に近い形状である。ロクロ整形の後、底部周縁には手持ちヘラケズリによる再調整が施されている。器面が荒れて単位は不明瞭ながら、体部内面には横方向のヘラミガキと黒色処理を施す。胎土には小石を多く含み、焼成は不良で粗製の個体である。外面は明赤褐色を呈する。

須恵器 21-1は床面上から出土した須恵器高台杯の底部資料である。遺存する高台径は9.0cmを測り、底部外面の墨痕と磨痕から転用硯として使用されたと考えられる。胎土には細砂粒を含む精製されたものが使用され、焼成も良好で灰白色を呈する。

まとめ

本住居跡は、柱穴が明らかではないが、床面から出土した土師器の年代から9世紀前半の時期が考えられる。

(吉田)

5号住居跡 S I 05

遺構 (図22, 写真16・17)

本遺構は調査区中央部の南北に延びる細尾根部、BR42グリッドに位置する。遺構が構築されている付近は丘陵頂部からやや下がった標高34mほどの比較的緩やかな斜面部で、等高線に沿うように平坦部となっている。新旧関係は隣接して6・7号住居跡、3・11号土坑が存在し、断面観察と重複関係から5号住居跡→6号住居跡→3号土坑の順で新しく、11号土坑よりも6号住居跡の方が新しいことが判明している。検出面はLV上面であるが、斜面南側で6号住居跡に切られているた

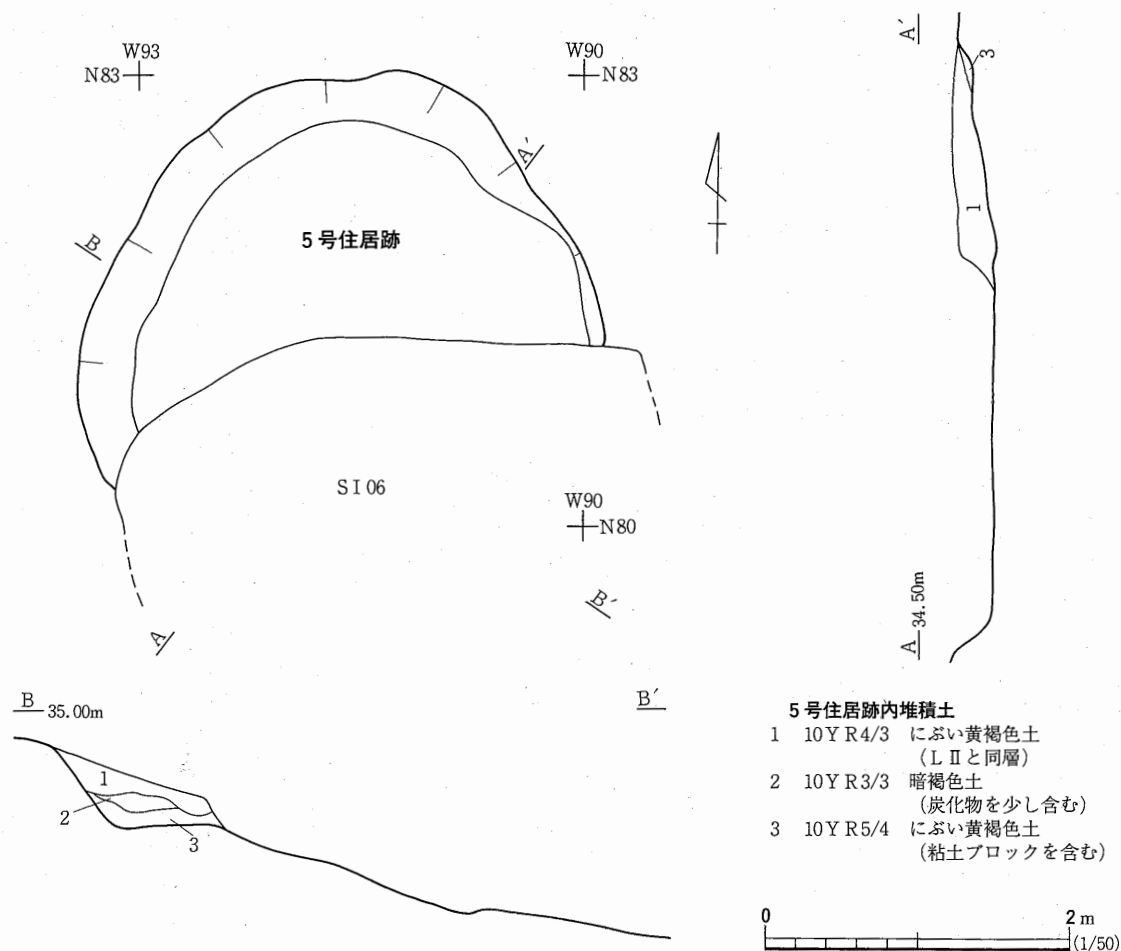


図22 5号住居跡

め、遺存状態は悪い。

遺構内堆積土は褐色系の3層に分層され、斜面上位からの流れ込みによる自然堆積層と判断される。平面形は遺存する斜面上位の西側半分のプランから、長径3.8m程の不整楕円形を呈するものと考えられる。周壁は遺存状態の良い北壁で約70cmを測り、緩やかに立ち上がる。床面は斜面下位の南側に向かって緩傾斜しており、若干凹凸はあるがほぼ平坦である。

住居施設である炉跡や柱穴等は確認できなかった。

遺物 (図23, 写真128)

遺物は堆積土内から弥生土器片127点、石器類35点が出土している。細片で摩滅が著しいため図示できたのは弥生土器4点、石器類6点である。

弥生土器 23-1～4は弥生土器の破片資料である。1は器種不明の胴部資料で、地文に直前段多条を回転施文している。2～4は底部資料で、底部から直線的に外傾するもの(2・4)と垂直気味に立ち上がるもの(3)がある。3は器形的に鉢形土器の可能性はある。2・3の地文には附加条文が施文されており、4は摩滅しているため不明である。

石器 23-8は大型の扁平片刃石斧の欠損品である。刃部に最大幅を持ち、両側縁に一次調整を施しているものである。刃部は丁寧な研磨が加えられており、刃こぼれ状の使用痕が部分的に認

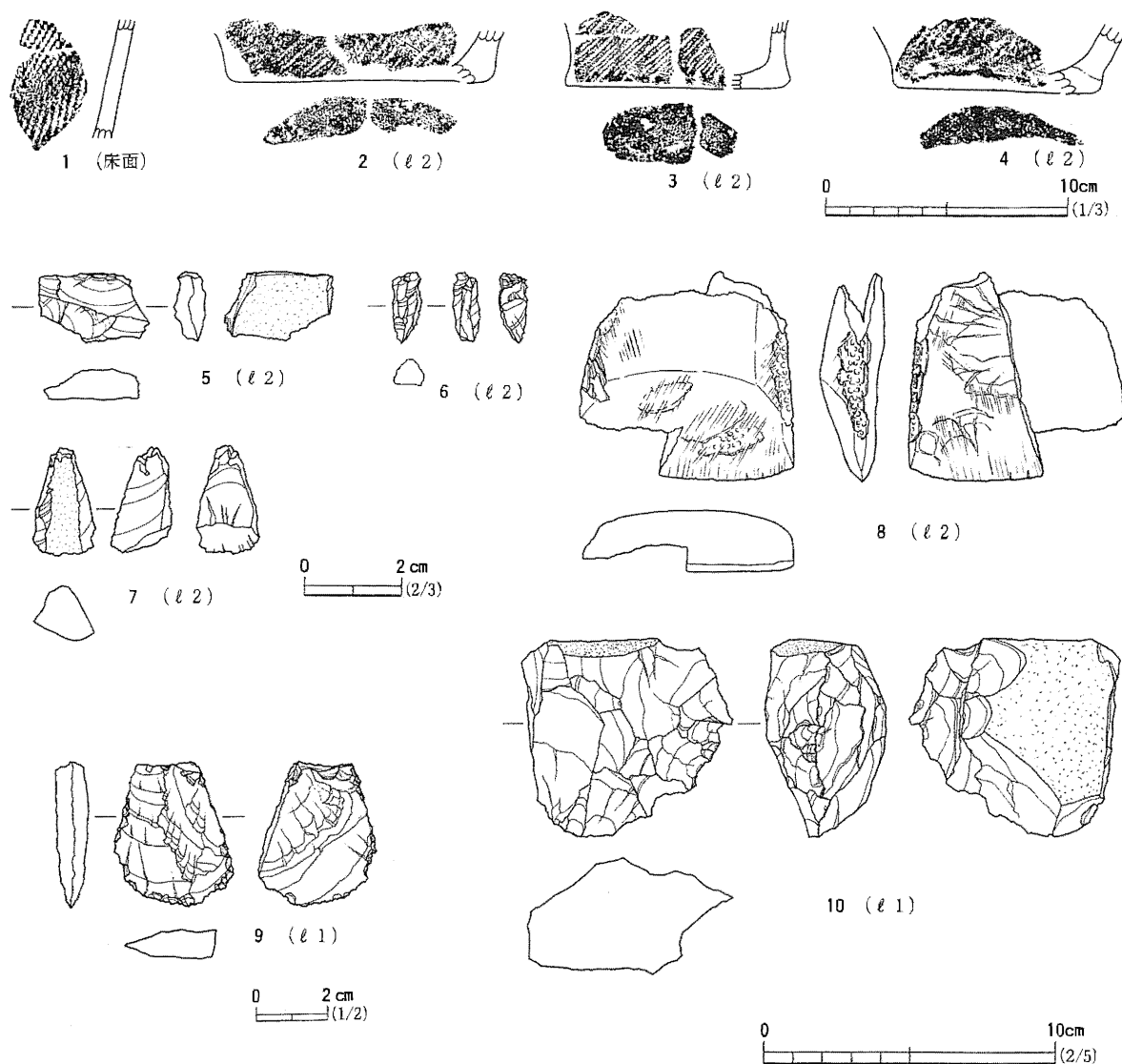


図23 5号住居跡出土弥生土器・石器

められる。石質は緑色片岩である。5・6・7は剥片石器で、縦方向に細かい剥離調整が施されているものである。5・7の器面には自然面が残る。9は小型剥片の縁辺部に微細剥離が認められる剥片石器である(R・F)。石質は5・6・7が玉髄, 9が流紋岩である。10は石核である。表皮を敲打して剥離を行っているもので、打面を任意に転移している。石質は流紋岩である。

まとめ

本遺構は、遺存する規模から3.8m程の小型の住居跡に属する。住居施設である炉跡や柱穴等の確認はできなかったが、重複関係や出土遺物から弥生時代中期末頃の所産と考える。(井)

6号住居跡 S I 06

遺構 (図24, 写真18)

本遺構は調査区中央部の南北に延びる細尾根部, BR42・43, BS42・43グリッドに位置する。遺構が構築されている付近は、丘陵頂部からやや下がった標高34mほどの比較的緩やかな東向き斜面部

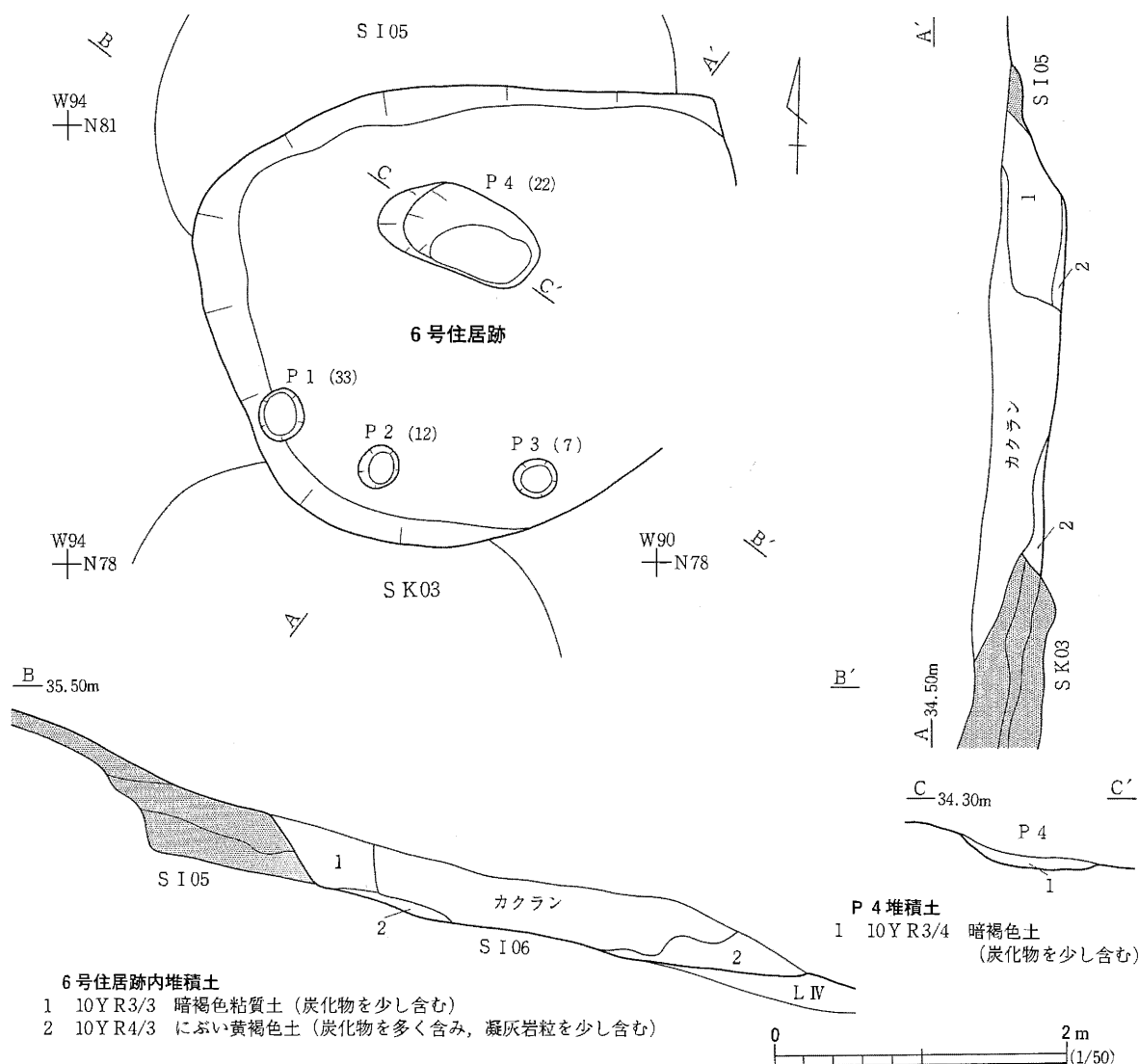


図24 6号住居跡

で、等高線に沿うように平坦部となっている。隣接して5・7号住居跡、3・11号土坑が存在し、重複関係は5号住居跡・11号土坑を切っており、3号土坑に切られている。検出面はL V上面であるが、斜面南側が流出しているため遺存状態はあまり良くない。

遺構内堆積土は2層に分層され、斜面上位からの流れ込みによる自然堆積層と判断される。平面形は遺存する斜面上位の西側プランや南側床面で検出された柱穴から、長軸3.8m、短軸2.9m程の不整楕円形を呈するものと考えられる。周壁は遺存状態の良い西壁で約10cmを測り、緩やかに立ち上がる。床面は斜面下位の南東側に向かって緩傾斜しており、若干凹凸はあるがほぼ平坦である。

住居跡床面からはピットが4基確認された。P 1～P 3は径約20cm、深さ20cm程を測り、ほぼ等間隔で設置された壁柱穴と考えられる。P 4は住居跡中央部の西壁寄りから検出された楕円形を呈するピットで、長軸110cm、短軸53cm、深さ22cmを測り、剥片石器等が多く出土した。住居施設である炉跡は確認できなかった。

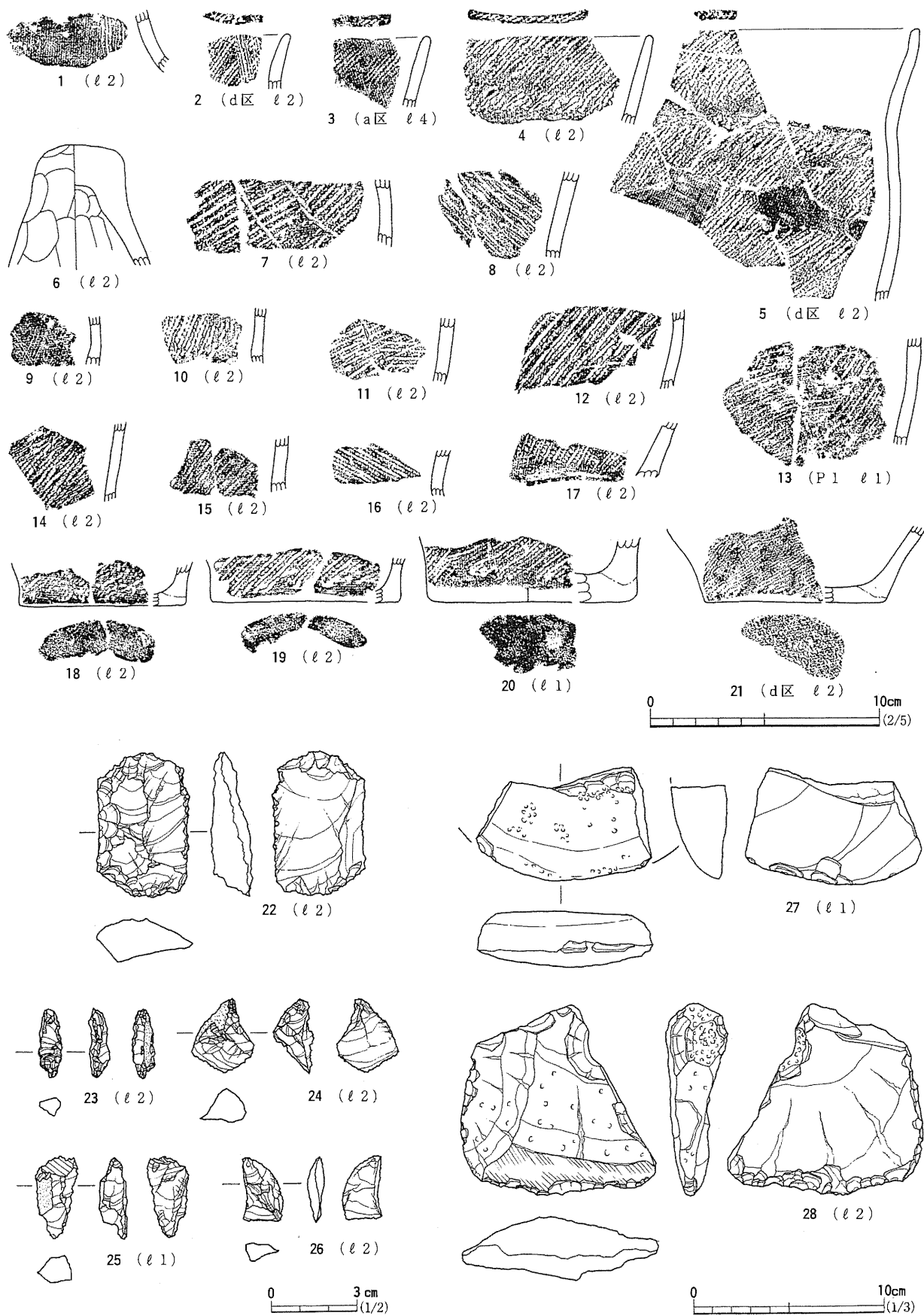


図25 6号住居跡出土弥生土器・石器

遺 物 (図25, 写真129・130)

出土した遺物は弥生土器片437点、石器類94点である。そのうち、図示できたのは弥生土器21点、石器類7点である。

弥生土器 25-1～21は弥生土器の破片資料である。1は壺形土器の頸部資料で、束線具によって縦位に多条沈線を描画しているものである。2～5は甕形土器の口縁部資料で、2は縦位への束線具、3～5は地文のみが観察される。地文は2・3が附加条、4・5が斜縄文を回転施文しており、口唇部には胴部と同一原体を押捺している。4には煤状の付着物が認められ、器厚は平均して5mm程である。6は蓋の摘み部分の資料と考えられ、内外面にケズリ・ナデ調整が施されている。7～17は胴部の破片資料である。7は先細の工具によって円文が、9には束線具によって連続山形文が描画されている。地文には8・10～12・14～17が附加条、7・12・13が直前段多条文を回転施文している。13は煤状の付着物が認められ、15は二次加熱を受け赤変している。18～21は底部資料で、18～20は底部から垂直気味に、21は直線的に外傾する器形である。20の底部はやや厚手となりやや大型に属するものと考えられる。地文には18～20が附加条、21が直前段多条文を回転施文しており、20・21の底面には平織り状の布圧痕、18・19にはナデ調整が施されている。19は二次加熱を受け赤変している。

石 器 25～22は縦長の主要剥離側縁部に細かな剥離調整を加えているもので、刃部が片刃となるスクレーパーである。横断面形は三角形状を呈し、使用時に生じたと思われる微細剥離痕が観察される。石質は流紋岩である。23は細片の縁辺部に剥離調整を施し、縦長状のドリルの先端部を作出しているものである。石質は鉄石英である。24～26は剥片で、25は自然面が残り、縦長状に剥離調整が施されている。石質は玉髄である。

27・28は環状石器の欠損品と思われる。27は環状の素材剥片の側縁部を調整して刃部としているもので、刃部には研磨後の剥離が認められる。28は素材剥片の縁辺部に両面から剥離調整が加えられているもので、叩き調整によって挟り部分が認められる。刃部には直交する線状痕が認められ、狭い平坦面が作出されている。石質は閃緑岩である。

ま と め

本住居跡は、遺存する規模から小型の住居跡に属する。住居施設である炉跡は確認できなかったが、P4から剥片石器がまとまって出土している。所属時期は、重複関係や出土遺物から弥生時代中期末頃の所産と考える。

(井)

7号住居跡 S I 07

遺 構 (図26, 写真19)

調査区中央部の丘陵頂部からやや下がった南北に延びる尾根部、BQ43、BR43グリッドに位置する。比較的傾斜の緩やかな平坦部に立地しており、主軸方向はN23°Wである。検出面は、LV上面である。重複する遺構はないが、南西に5・6号住居跡が隣接している。北東部は調査区外で、南西

部約1/2の調査を行った。遺構内堆積土は、3層に分層され、壁際の流れ込みの状態、斜面上位からの流入の状態から、自然堆積と考えられる。各層とも炭化物を含む褐色土で、弥生土器片が出土している。

平面形は隅丸長方形を呈するものと推定され、規模は遺存している長軸3.3m、短軸2.5mである。床面はほぼ平坦で北から南に傾斜し、その比高差は24cmである。周壁は外傾して急に立ち上がり、北西側と南西側が遺存している。壁高は遺存状態の良い南西壁で40cm、北西壁で20cmほどである。柱穴・炉は検出されなかった。

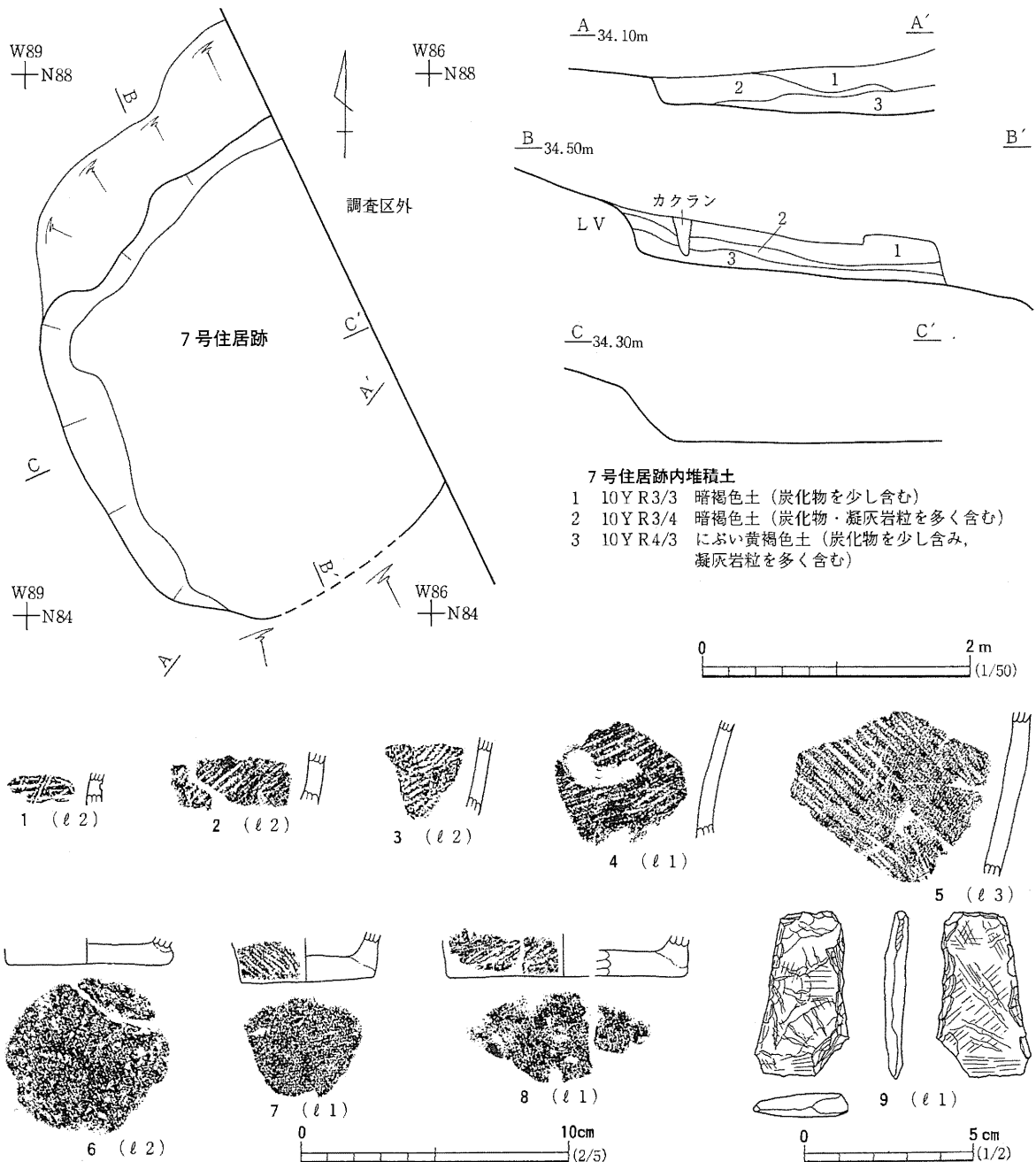


図26 7号住居跡，出土弥生土器・石器

遺 物 (図26, 写真131・132)

出土した遺物は弥生土器片69点, 石器類11点, 土師器片1点である。そのうち, 図示できたのは弥生土器8点, 石器類1点である。

弥生土器 26-1~5は胴部の破片資料である。1は束線具によって縦位に多条沈線を描画しており, 2~5は地文のみ観察できる。地文には2・4が0段多条文, 3・5が附加条文を回転施文している。5の器面は二次加熱を受け赤変している。6~8は底部資料で, 7は小型に, 8はやや大型に属する器形である。底面は7が平織り状の布圧痕, 6・8にはナデ調整が施されている。

石 器 26-9は両側縁から基部にかけて一次剥離調整が施されているもので, 刃部に最大幅を持つ小型の扁平片刃石斧である。表裏面の調整剥離及び左側面の剥離が研磨痕に切られているが, 右側面の剥離が研磨痕より新しいことや, 器厚が非常に薄手であることから石庖丁の転用品の可能性が高い。法量は最大長4.9cm, 基部幅2.8cm, 器厚0.7cmを測り, 刃角は22°である。石質は頁岩である。

ま と め

本遺構は柱穴・炉は検出できなかったが, 形態から住居跡と判定した。所属時期は堆積土内の出土土器の特徴から, 隣接する5・6号住居跡と同時期の弥生時代中期末葉頃と考えられる。

(佐久間ふく子)

8号住居跡 S I 08

遺 構 (図27, 写真20・21)

本住居跡は調査区中央より南に延びる丘陵の南西斜面中腹部, BP35・36, BQ35・36グリッドに位置する。本住居跡は標高32~33mの緩斜面に立地している。検出面は, 平面プランの西側がL V上面, 東側はL III上面, 南端はL IV上面である。L III・IV上面ではL Vの再堆積土と考えられる, にぶい黄褐色土が散漫に堆積し, 住居構築時の排出土である可能性が高い。本住居跡は斜面に立地しているため, 斜面下位の南西部は流失している。本住居跡は東半部で5号遺物包含層と重複し, 本住居跡が新しい。本住居跡の南東4.5mには9号住居跡が隣接している。

堆積土は8層に分層でき, l 1~6はレンズ状の堆積を示し, L III~Vに起因する流入土と考えられる。l 7は住居跡中央の床面上に堆積し, 木炭・炭化粒が主体となる層である。木炭は直径1~3cm程の丸木の細片が多い。l 7直下の床面では一部酸化した部分が認められ, l 7の存在は床面の酸化面に起因すると判断した。l 8は貼床でL IIIを主体とし, L Vブロックが混入する。堆積土はl 1~6が自然堆積土, l 7・8が人為堆積土と判断した。

遺存する平面プランは長軸約5.4m, 短軸約4.0mの不整長方形を呈する。本住居跡は斜面を「L」字状に切り出して構築されている。床面は住居跡の西半部で掘形のL V面であるが, 中央部を除く東半部では掘形上に盛土し貼床を構築している。床面は平坦であり, 住居跡北側でL Vの礫層面が表出する他, 貼床部は叩き締め等により硬化しており, 全体に硬質である。貼床の層厚は5~20cm

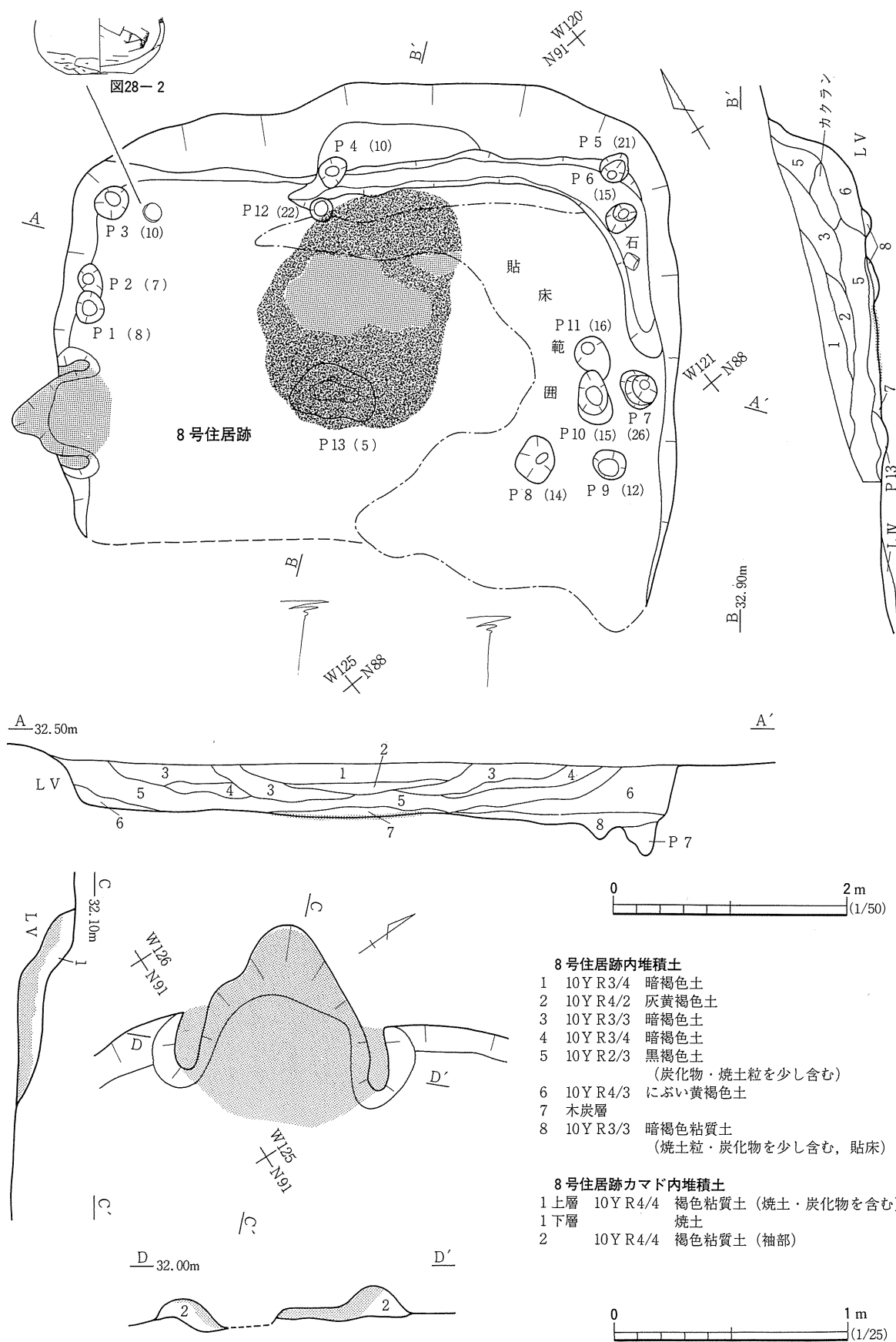


図27 8号住居跡, カマド

である。貼床部には北壁寄りに位置して住居跡東端より西方に舌状に張り出した部分が存在するが、単に住居跡の掘形なのか壁溝等の施設を意図した掘形なのか把握できなかった。

周壁は斜面上位の北・東・西壁が遺存する。東・西壁は斜面の傾斜とともに壁高が低下し、斜面上位の南方端で床面に接する。周壁は、北壁は上半部が崩落し内湾して立ち上がるのに対し、東・西壁は直線的にやや外傾して立ち上がる。壁高は北壁東端部で最大80cmを測る。

壁溝は北壁中央部から東側コーナーを回り、東壁中央部に至る部分が確認された。壁溝内堆積土は住居跡内堆積土 ℓ 8 に近似しているが、やや軟質である。壁溝は最大幅50cm、最小幅20cm、床面からの深さは最大で7cmを測り、底面は平坦である。

カマドは西壁の南寄りに付設されている。カマドの主軸方向はN52°Wであり、住居跡の長軸方向と合致する。遺存状態は悪く燃焼部、袖の一部のみが遺存する。カマドは掘形を有し褐色粘質土を積み固めて構築されている。カマド内堆積土は、2層に分層でき、 ℓ 1 上層は焼土粒・炭化粒を含み天井部の崩落土であると考えられる。 ℓ 1 下層は強い酸化が認められ焼土化している。 ℓ 2 はカマド袖構築土と判断した。

遺存するカマドの規模は、最大幅1.1m、最大長0.8mである。燃焼部底面の規模は、最大幅70cm、奥行50cmを測り、酸化部分の厚さは最大で7cmである。燃焼部底面は中央部で若干窪む皿状を呈し、燃焼部奥壁は緩やかに立ち上がる。袖部は最大で幅28cm、長さ35cmが遺存する。袖部の燃焼部側はよく焼けており、酸化部分の厚さは最大で8cmである。

住居跡堆積土 ℓ 7 の木炭・炭化粒層は、住居跡中央の北壁寄りの長軸2.2m、短軸1.6mの範囲に集積している。床面の酸化面は木炭・炭化粒の集積範囲の中央に位置し、長軸1.3m、短軸0.7mの不定形を呈し、酸化部分の厚さは最大で3cmを測る。酸化面の性格として、鍛冶遺構の可能性を考え、酸化面及び周辺の土壌を採取して検討したが、鍛造剥片は検出されなかった。鍛冶遺構の可能性はなく、酸化面の性格は不明である。木炭・炭化粒の堆積は局所的なものであるが、床面を占める割合は大きく、住居機能時に存在していたとは考え難い。木炭・炭化粒及び酸化面は、住居の廃絶時に近い時期に残されたものである可能性が高い。

ピットは計13基確認された。各ピットの長軸・短軸、検出した床面及び住居跡掘形面からの深さはピット計測表に示した。P 1～5・7は床面上で検出され、周壁直下に位置することから住居跡に伴う壁柱穴と考える。このうちP 3～5・7は規則的な配置を有し、P 3・5が北・東側コーナー部に、P 4・7が北・東壁の中央付近に位置し、各ピットの中心間の距離はP 3－P 4間1.9m、

表3 8号住居跡ピット計測表

(単位；cm)

	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6	P 7	P 8	P 9	P 10	P 11	P 12	P 13
長軸	30	25	30	30	27	28	34	40	31	47	39	22	70
短軸	25	20	25	23	24	26	29	37	27	27	28	19	45
深さ	8	7	10	10	21	15	26	14	12	15	16	22	5

P 4－P 5間2.4m, P 5－P 7間1.8mを測る。P 1～3は礫層に掘り込まれ、浅くすり鉢状を呈し、P 4・5・7は円筒状を呈する。堆積土はL Vを主体とするにぶい黄褐色土で、柱痕跡は確認できなかった。

P 6は壁溝の底面より、P 8～12は貼床下より検出されたピットであるが、性格は不明である。P 6・12は円筒状のピットで、堆積土はL IIIを主体とする暗褐色土である。P 6・12はそれぞれP 5・4の南西に近接し、住居跡内側に入り込むかたちとなるが、壁柱穴と近似した配置を有する。P 6・12の中心間の距離は2.6mである。P 8～11は不定形の平面形を有し、すり鉢状の断面形を呈するピットであり、堆積土はL IIIを主体としL Vブロックが混入する。P 13は住居跡中央に位置し、床面の酸化面の南西25cmに近接する皿状のピットであり、ℓ 7の堆積が認められ、性格は不明であるが、酸化面と関連を有する可能性がある。

遺 物 (図28・写真133)

出土遺物は弥生土器片68点、土師器片53点、須恵器片15点、鉄製品1点、木炭142点である。図上復元が可能な土師器6点、須恵器2点、鉄製品1点を図示した。図示した土器の出土層位は、住居跡内堆積土ℓ 6 (28－1)、床面直上(28－2・8)、カマドℓ 1 (28－4～7)である。

土師器 28－1は土師器杯で、平底の底部から体部が緩く内湾して立ち上がる器形である。調整は器面の摩滅が著しく図示していないが、体部・底部外面はヘラケズリである。内面はヘラミガキ・黒色処理される。胎土に細砂粒を含み、にぶい黄橙色を呈する。2は土師器碗で、平底の底部から、体部下端で僅かに括れ、体部が内湾して立ち上がり、体部上端で僅かに内傾して口縁部に至る器形である。外面は底部に木葉痕が残り、体部下半はヘラケズリされ、内面はヘラナデされる。胎土に細砂粒を含み、焼成は良く、体部外面は再酸化により赤変し、橙色を呈する。4は土師器甕で、体部は直立し、口縁部が緩く外傾する。調整は、器面の摩滅が著しく図示できなかったが体部外面は縦方向のヘラケズリである。胎土に粗砂を多く含み、再酸化により赤変し、橙色を呈する。5は土師器甕で、直立し口縁部は短く緩く外反する。口縁部はヨコナデ、体部外面はヘラケズリ、内面にヘラナデが加えられる。

7は土師器甕で、直立する体部上半から、強く屈曲し水平に開く口縁部に至る器形である。ロクロ調整で、胎土に細砂粒を多く含み、焼成は良く、にぶい黄橙色を呈する。6は土師器甕で、直線的に外傾して立ち上がり、内外面はナデ調整である。胎土に微砂粒を多く含み、焼成は良く、にぶい黄橙色を呈する。

須恵器 28－8は須恵器杯で、体部が直線的に外傾して立ち上がる器形で、口縁部がやや外反する。ロクロ調整で、底部の切り離しは回転ヘラ切りで、底部外面のみにナデ再調整される。胎土に粗砂を含み、焼成はやや悪く、灰色を呈する。

9は須恵器杯である。体部は直線的に外傾して立ち上がり、口縁部はやや外反する。ロクロ調整で、胎土は精良で、焼成はやや悪く、灰白色を呈する。

鉄製品 28－10は錆化が著しい鉄製品で、紡錘車の軸と推定される。遺存長6.1cmを測り、直径は

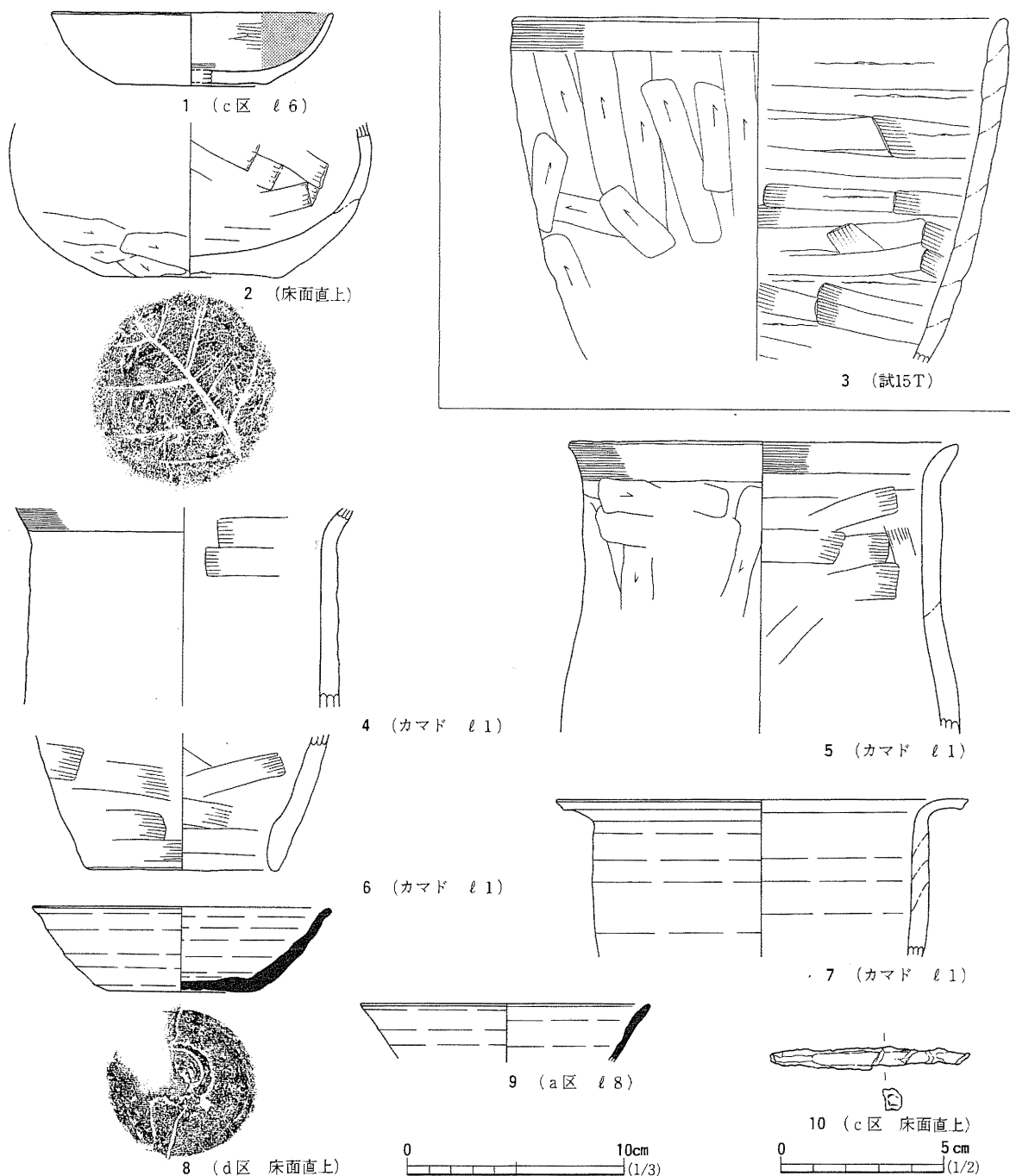


図28 8号住居跡出土土師器・須恵器・鉄製品

3～4mm程である。

まとめ

本住居跡は丘陵上の緩斜面に構築され、斜面下位の南部は流失している。住居跡中央の床面に木炭・炭化粒を伴う酸化面を有する。酸化面の性格は不明であるが、木炭・炭化粒が床面上に比較的広範囲で堆積していることから、酸化面の形成が廃絶時に近い時期であると推定され、住居廃絶に伴う焼却行為の痕跡である可能性がある。本住居跡の所属時期は、出土遺物から奈良時代に比定される。

(石井)

9号住居跡 S I 09

遺 構 (図29, 写真22・23)

調査区南側丘陵部, 南西向き斜面に立地し, BR37グリッドに位置する。本遺構の南西斜面下位側は, 地山流出が著しく, 遺存していない。北東壁が全体の1/3程度遺存しているのみである。さらに北壁は攪乱によって欠失している。5号遺物包含層と重複し, 本遺構が新しい。検出面は, LV上面である。遺構内堆積土は4層に分層され, 炭化物や凝灰岩粒を含む褐色土である。

ℓ3・4の堆積状況は, 地形上, 斜面上位から流れ込むような自然堆積の様相を呈する。ℓ3・4の堆積後, 床面の大半が流出し, 遺構内にℓ2が堆積した。その後斜面下位の遺構外部分の地山が, さらに流出したものと考えている。斜面上位と下位に堆積土が分断された様子が土層断面から観察される。平面形は明確に検出できないが, 遺存する周壁から隅丸方形基調を呈するものと推定される。規模は, 遺存する長軸4.8m, 短軸2.3mである。床面は北東から南西への傾斜が大きく, 遺存している範囲はほとんどない。周壁は外傾して緩やかに立ち上がり, 壁高は北東壁が最大58cmを測る。遺存している北東壁の北西側に長径120cm, 短径70cmの楕円形の焼土範囲を検出し, カマドと判断した。カマドは遺存状態が悪く, ほとんど形状をとどめていない。カマド内堆積土は, ℓ1が焼土粒・炭化物を含む暗褐色土である。ℓ1除去後, 酸化面を確認したので, 燃烧部の一部と判断した。燃烧部底面は, 良く焼けて硬化しており, 酸化部分は厚さ1~2cmほどである。燃烧部中央床面には, 炭化物が残留していた。柱穴や壁溝は確認できなかった。

遺 物 (図30, 写真134)

出土した遺物は弥生土器片69点, 石器類5点, 土師器片48点, 須恵器片24点である。そのうち, 図示できたのは土師器4点, 須恵器8点である。

土師器 30-1は土師器杯, 2~4は土師器甕である。1はロクロ整形による土師器杯の底部片で, 内面は黒色処理が施され, ヘラミガキ調整が加えられている。2は胴部下半から底部にかけての破片資料で, 外面は縦位のヘラケズリ調整, 内面はヘラナデ調整が施されている。器面は二次加熱を受け摩滅しており, 煤状の付着物が認められる。3は長胴甕の胴部資料で, 直立気味の胴部から「く」字状に外反する器形である。外面は縦位のヘラケズリ調整, 内面はヘラナデ調整が施され, 口頸部には横ナデ調整が加えられている。4の底部には木葉痕が認められる。

須恵器 30-5~11は須恵器杯, 12は須恵器甕の破片資料である。5は大型の須恵器杯で, 内湾気味に立ち上がる体部を有する碗形に近い器形である。外面は火ダスキが認められ, 藁状の付着物が観察できる。遺存する法量は口径19.2cm, 底径10.2cm, 器高6.4cmを測る。6・7・9・10の底部調整は回転ヘラ切り後, 手持ちヘラケズリ再調整が観察される。

法量は6が口径14.9cm, 底径7.0cm, 器高3.9cm, 7が口径14.1cm, 推定底径7.9cm, 器高4.2cm, 9が推定口径13.5cm, 底径7.2cm, 器高4.1cm, 10が推定底径7.2cm, 遺存高2.0cmを測る。8・11の切り離し技法は不明であるが, 8の底部外面には回転ヘラケズリ再調整, 11の体部下端から底部に

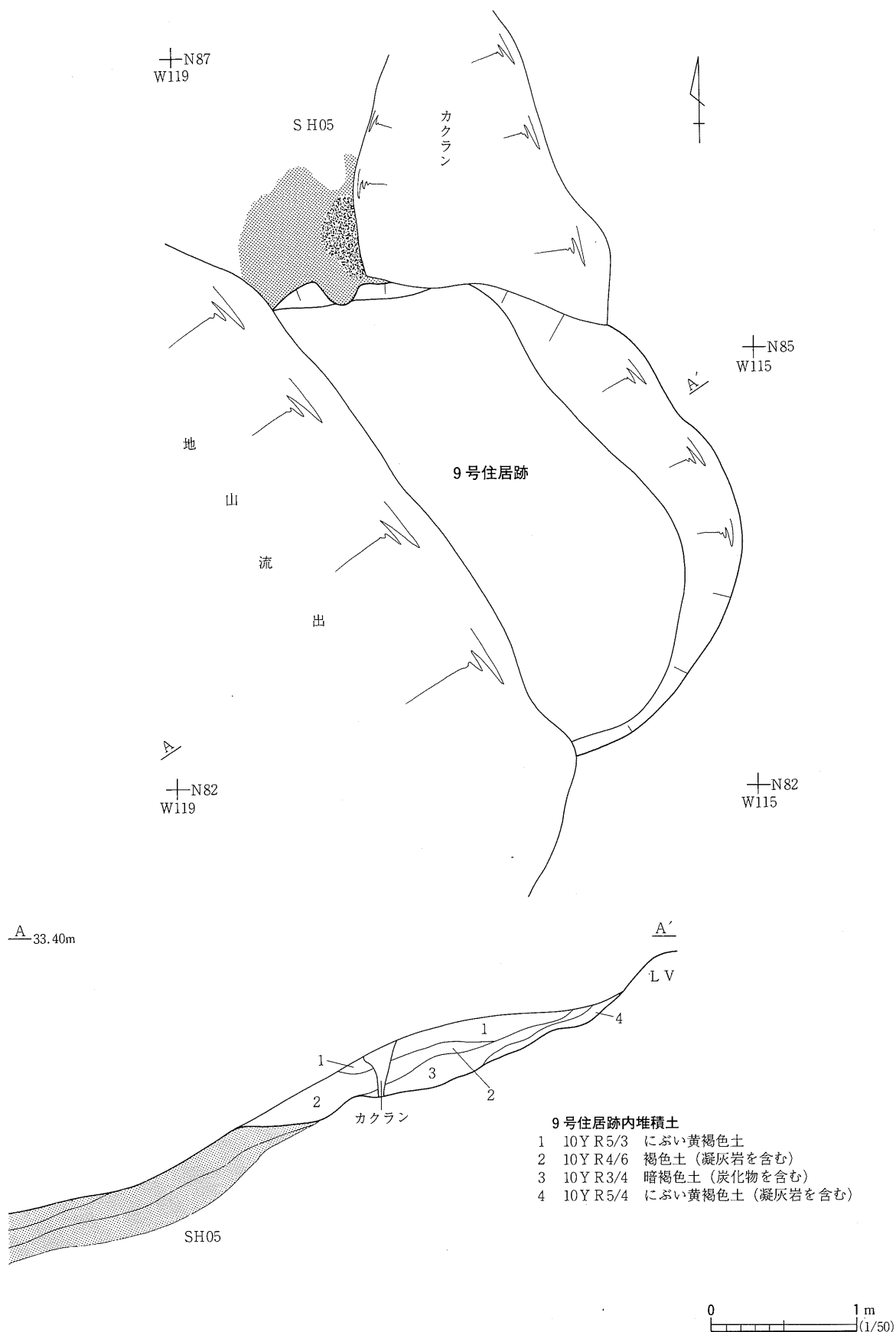


図29 9号住居跡

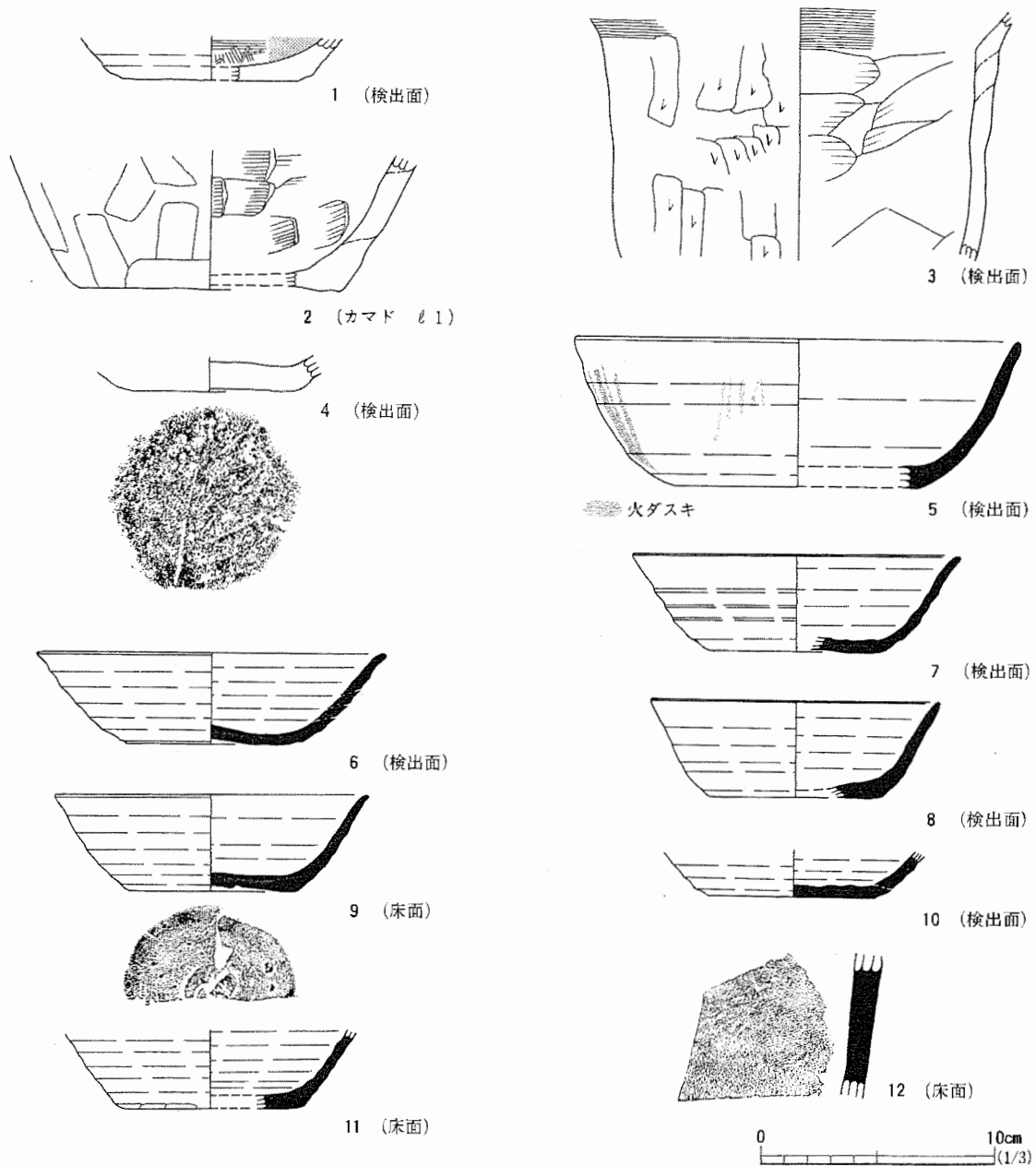


図30 9号住居跡出土土師器・須恵器

かけて手持ちヘラケズリ再調整が加えられている。法量は8が口径12.5cm，推定底径7.0cm，遺存高4.1cm，11が推定底径7.8cm，遺存高3.2cmを測る。全体的に口径に対する底径比が0.50～0.56で大きい傾向がある。12は須恵器甕の胴部の破片資料で，外面はタタキ痕，内面はナデ調整が認められる。

まとめ

本遺構は南西側の大半が流出し，北東側の約1/3が遺存していた。カマドも燃焼部床面の一部を残すのみの極めて遺存状態の悪い住居跡である。所属時期は，出土土器から判断して，8世紀後半代と考えられる。

(佐久間ふく子)

10号住居跡 S I 10

遺 構 (図31, 写真24・25)

本住居跡は調査区中央の南に延びる丘陵先端部, BV42, BW41・42グリッドに位置する。本住居跡は標高34mの細尾根の南東向き斜面に構築され, 本住居跡の周囲は約5m四方の範囲で平坦部が作り出されている。検出面はL V上面である。本住居跡の周辺には木根による攪乱が多く, 土坑と誤認して調査を進めたが, 断ち割りに際し壁溝が確認された。再び検出面の精査を行った結果, カマドと煙出しピットを検出し, 住居跡であることが判明した。

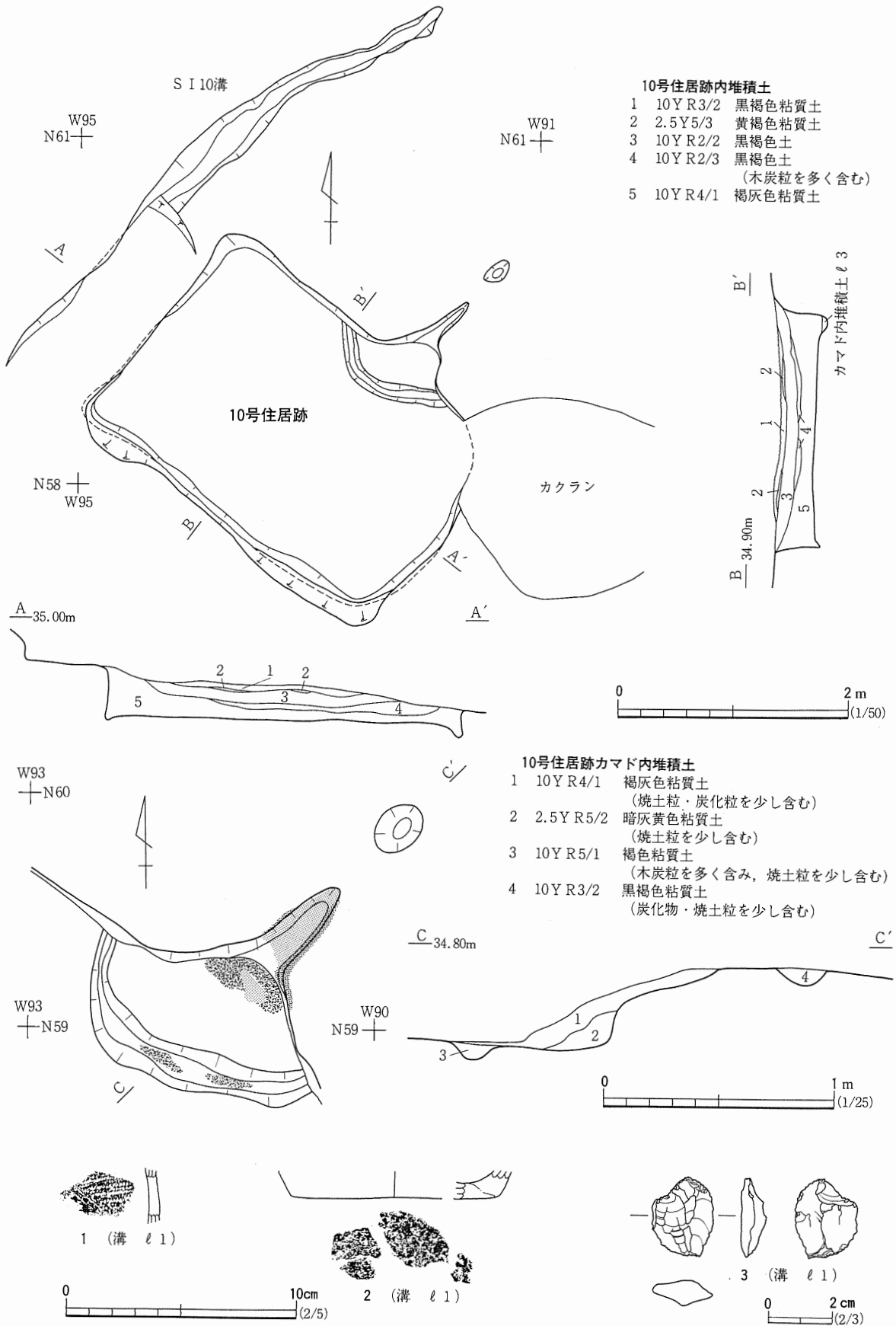
再精査に伴い, 同検出面において, 本住居跡に隣接して, 1条の溝跡が検出された。溝跡は, 本住居跡の構築面となっている平坦部の基部に配置されていることから, 本住居跡の構築に際し平坦部とともに作り出されたものであると判断した。本溝跡は本住居跡の屋外の付属施設として, 本項で扱っている。本住居跡と重複・近接する遺構はないが, 同一の丘陵上には1号住居跡・3号溝跡が存在する。

遺構内堆積土は5層に分層できた。ℓ 1・3・4は黒褐色土を主体とし, ℓ 4には木炭粒が多量に含まれる。ℓ 2は薄く散漫に堆積する。最下層に堆積したℓ 5は, 構築時の排出土が流入したものとする。堆積土はL III～Vに起因するものと考えられ, レンズ状に堆積していることから, 自然堆積土であると判断した。

本住居跡の平面形は, 比較的整った長方形を呈する。規模は上端部で長軸3.1m, 短軸2.1mを測り, 長軸方向はN57° Wである。周壁は斜面上位である北西壁で最大高50cm, 斜面下位の南東壁で最小高15cmを測り, 中段で内側に張り出す, 断面「く」の字状を呈して立ち上がる。壁溝は住居跡の南半部である, 南壁, 東壁と西壁の南半において認められ, 上端の最大幅15cm, 最深12cmを測る。壁溝は下部で窄まり, 幅5cm程の板状の断面形を呈し, 板材を打ち込んだ痕跡である可能性が高い。床面は平坦であり水平である。

カマドは北壁の東寄りに付設されている。燃烧部と煙道の一部, 煙出しピットが遺存している。カマド内堆積土は2層に分層された。堆積土は住居跡内堆積土ℓ 5に近似した粘質土であるが, 焼土粒・炭化粒が認められ, 天井部の崩落土と考える。遺存するカマドの平面形は, 煙道部基部で括れる三角形のプランを呈する。カマドの構造は半地下式と推定され, 周壁を掘り抜いて燃烧部と煙道を作り出し, 掘り残した部分を天井部として用いていた可能性が高い。本住居跡のカマドは, 袖部の構築土が遺存していないことや, 後述する床面で検出された溝跡によって範囲が限定されていることから推定して, 本住居跡が小型であるために, 居住空間を広く保つ必要性があり, 床面上を占有する袖部構造を持たなかったと考える。

燃烧部の規模は最大幅70cm, 奥行き50cmを測る。燃烧部底面は平坦であり, 煙道寄りの長軸15cm, 短軸10cmの範囲で焼土が散布し, その周囲の長軸40cm, 短軸15cmの範囲で炭化粒の分布が認められた。燃烧部奥壁は, ほぼ垂直に立上がり, 燃烧部底面から奥壁上端までの高さは20cmである。煙道



は燃烧部奥壁上端より緩やかに立ち上がり、燃烧部奥壁上端より煙出しピット端まで全長90cmを測るが、遺存する長さは40cm、最大幅は20cmである。燃烧部奥壁東側、煙道側壁上半部には酸化面が認められ、酸化部分の厚さは最大で2cmである。煙出しピットは長軸25cm、短軸18cm、深さ10cmを測る。

カマドに近接して、床面に溝跡が設けられているのが確認された。床面の溝跡は、カマドの両端を起点とし、半円を描いて燃烧部を取り囲んでおり、最大幅19cm、最小幅7cm、床面からの深さは最大7cmを測る。溝跡内堆積土には焼土粒・炭化粒が多く含まれ、床面の溝跡は、本住居跡の機能時には開口していた可能性が高く、床面とカマドを隔てる間仕切りのための溝であったと考える。

屋外の溝跡は本住居跡の斜面上位の北西40cmに近接している。溝跡の西半部は木根による攪乱のため失われている。溝跡内堆積土は、住居跡内堆積土のⅡ5に近似したLVの再堆積土であり、斜面上位からの自然流入土と考えられる。

溝跡は細尾根を横断するように構築されており、平面形は斜面下位の南方向に開く弓状のプランを呈し、長さ4.8mが遺存している。遺存する東半部の末端は東側斜面に開口している。底面は丸い断面形を示す。底面には若干の凹凸が認められるが、東半部では、中央部より下位の東端に向かい傾斜を示し、中央部と東端部との比高差は7cmを測る。壁は斜面上位の北壁はほぼ垂直に立ち上がり、最大高34cmを測り、斜面下位の南壁は底面より緩やかに立ち上がり、最大高7cmを測る。屋外の溝跡は、傾斜地に立地する本住居跡の性格上、斜面上位からの水・土砂の流入を防ぐ役割を果たしていたと考える。

遺 物 (図31)

遺物は遺構内堆積土から流紋岩剥片12点、溝跡内堆積土から弥生土器片22点が出土している。これらは全て本住居跡に伴出するものではなく、摩滅が著しく、細片であるため図示できたのは弥生土器2点、剥片1点である。

弥生土器 31-1は弥生土器の胴部片、2は底部資料である。1の地文には附加条を施文しており、2の底部には布状の圧痕が認められる。

石 器 31-3は不定形の剥片で、主要剥離縁辺の一部に細かな調整剥離が認められる。

ま と め

本住居跡は丘陵先端部の尾根上に孤立して存在する。本住居跡は、本住居跡の構築に際して作り出された平坦部を構築面とし、平坦部の斜面上位の基部に屋外の溝跡を有する。本住居跡は長方形を呈し、調査区内で検出された住居跡の中では小型に属する。カマドの酸化状態は弱く、比較的短期間のうちに廃絶したものとする。本住居跡の性格は、一時的または季節的に用いられた住居跡であったと考えている。本住居跡に伴う出土遺物はなく、片付けられた印象がある。

所属時期は不明であるが、住居跡形態や、周壁の掘り抜きによるカマドの構築状態から、奈良時代に比定される可能性がある。

(石 井)

11号住居跡 S I 11

遺 構 (図32, 写真26)

本住居跡は南北に延びる丘陵の南端部BY44・45, BZ44・45グリッドに位置し, 南東向き斜面中位に立地する。検出面はL VIである。重複する遺構はないが, 近接して12・13号土坑が存在する。遺構内堆積土は3層に分層できる。ℓ 1は黒褐色土で斜面上位からの流入土, ℓ 2は暗オリーブ褐色土で, 壁際で三角堆積の状態を呈する。ℓ 1・ℓ 2は堆積状況から自然堆積と考えられる。ℓ 3は暗褐色土で床面の凹部に堆積している。遺存する床面が, 西から東へ斜度5° とかなり傾斜していることから, 床面を平坦にするために整地した際の, 堆積土である可能性が考えられる。本住居跡

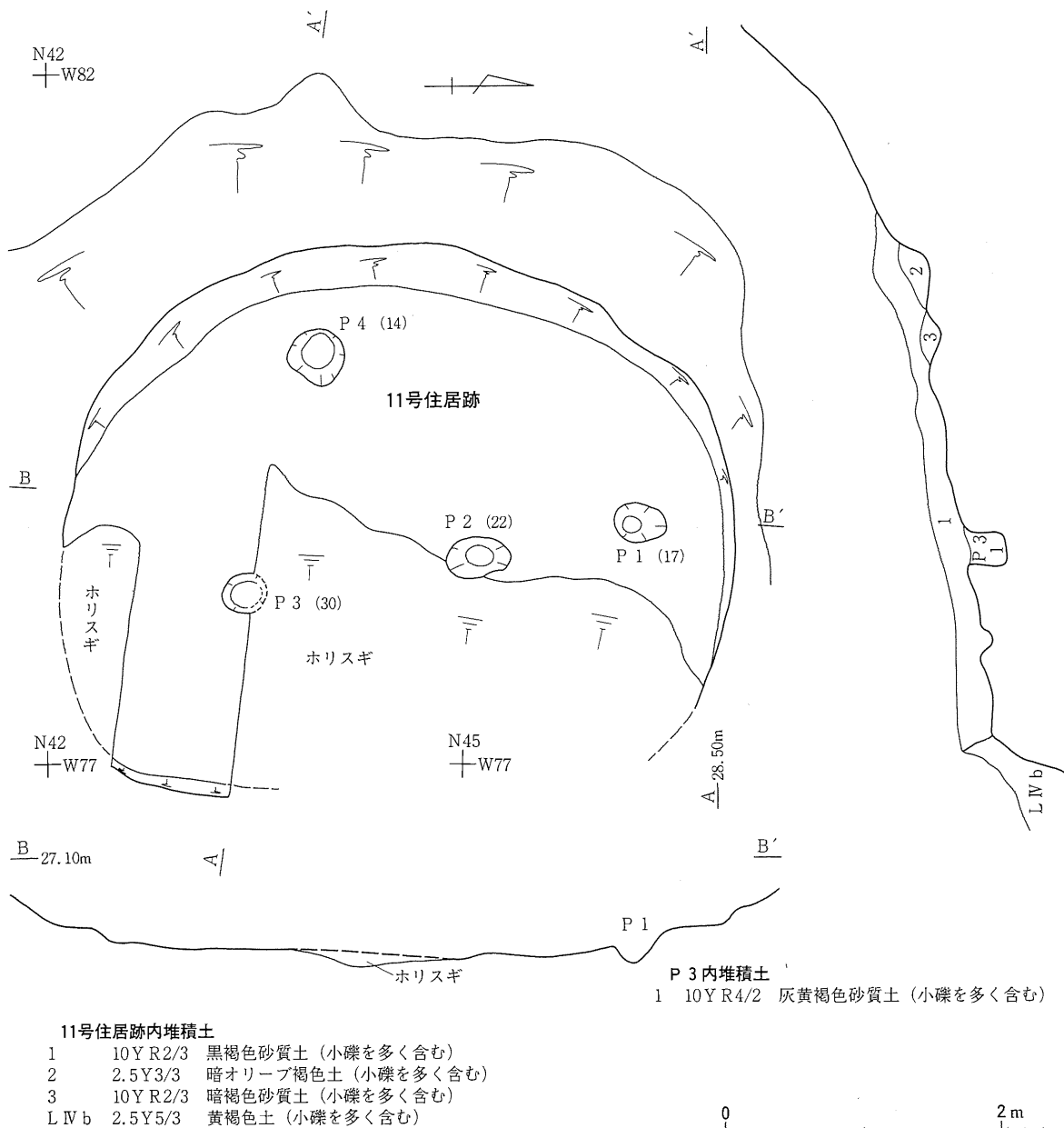


図32 11号住居跡

より斜面下方には、L IV bが堆積している。これは本住居跡を構築した時の排土である可能性が高い。

本住居跡は斜面中腹の急斜面を作出して、平坦部を構築している。本住居跡の平面形は、検出作業中に東側が削平され、全体のプランは確認できない。遺存する平面形から楕円形を呈していたものと考えられる。遺存する規模は、南北4.9m、東西4.0mを測る。周壁は、西壁から北壁にかけて残存し、緩やかに立上がる。壁高は、斜面上位の西壁中央部で最大32cmを測る。炉跡は検出できなかった。

住居施設はピットが4個検出された。P 1～4の堆積土は、礫を多量に含む灰黄褐色土である。P 1～4の規模は、径29～43cmの楕円形を呈し、深さ14～30cmを測る。底面は平坦で、壁はほぼ直立して立ち上がる。断面形は円筒形を呈する。P 1・3・4は、壁際に位置し、P 1－P 3、P 3－P 4を結んだ線がほぼ直交する。柱痕は確認されていないが、P 1・3・4は本住居跡の柱穴と考えられる。本住居跡中央部にはP 2が存在する。P 2は、他の3個のピットと規模がほぼ同じことから、柱穴の可能性が考えられる。

遺 物 (図33, 写真135)

本住居跡から出土した遺物は、弥生土器片100点、石器類118点である。このうち、遺存状態が良く図示できたのは弥生土器8点、石器4点である。

弥生土器 33-1～5は胴部片、6～8は底部資料である。1・2は束線具によって縦位の多条沈線を描画しているもので、1の施文具の深さはやや深い。地文には2・3・5が附加条、4が斜縄文を施している。6～8は底部資料で、8の底部には布状の圧痕、7にはナデ調整、6には布状の圧痕とナデ調整が認められる。

石 器 33-9・10は棒状の素材剥片に一次調整を施し、研磨によって整形をしているノミ形石器である。9は器面全体に丁寧な研磨調整が加えられており、10はノミ形石器の未成品と考えられる。

11・12は刃部に最大幅を持ち、両側縁から基部にかけて一次調整痕が残っている扁平片刃石斧である。11はやや小型、12は大型の器形である。11は両側縁に敲打による調整、背腹面及び刃部に研磨を施している。12の側縁には一次剥離後の部分的な敲打が認められ、研磨によって最終調整を行っている。刃部には線状の使用痕が認められる。

11の法量は最大長6.9cm、最大幅4.9cm、基部幅2.8cm、最大厚1.8cmを測り、刃角42°を測る。12は最大長8.5cm、最大幅5.6cm、基部幅3.2cm、最大厚1.8cmを測り、刃角49°を測る。石質は11が泥岩、12が蛇紋岩である。

ま と め

本住居跡は、遺存状態は良くないが、遺存する壁から楕円形を呈する住居跡と考えられる。所属時期は、出土遺物の特徴から弥生時代中期末葉頃と考えられる。

(酒 井)

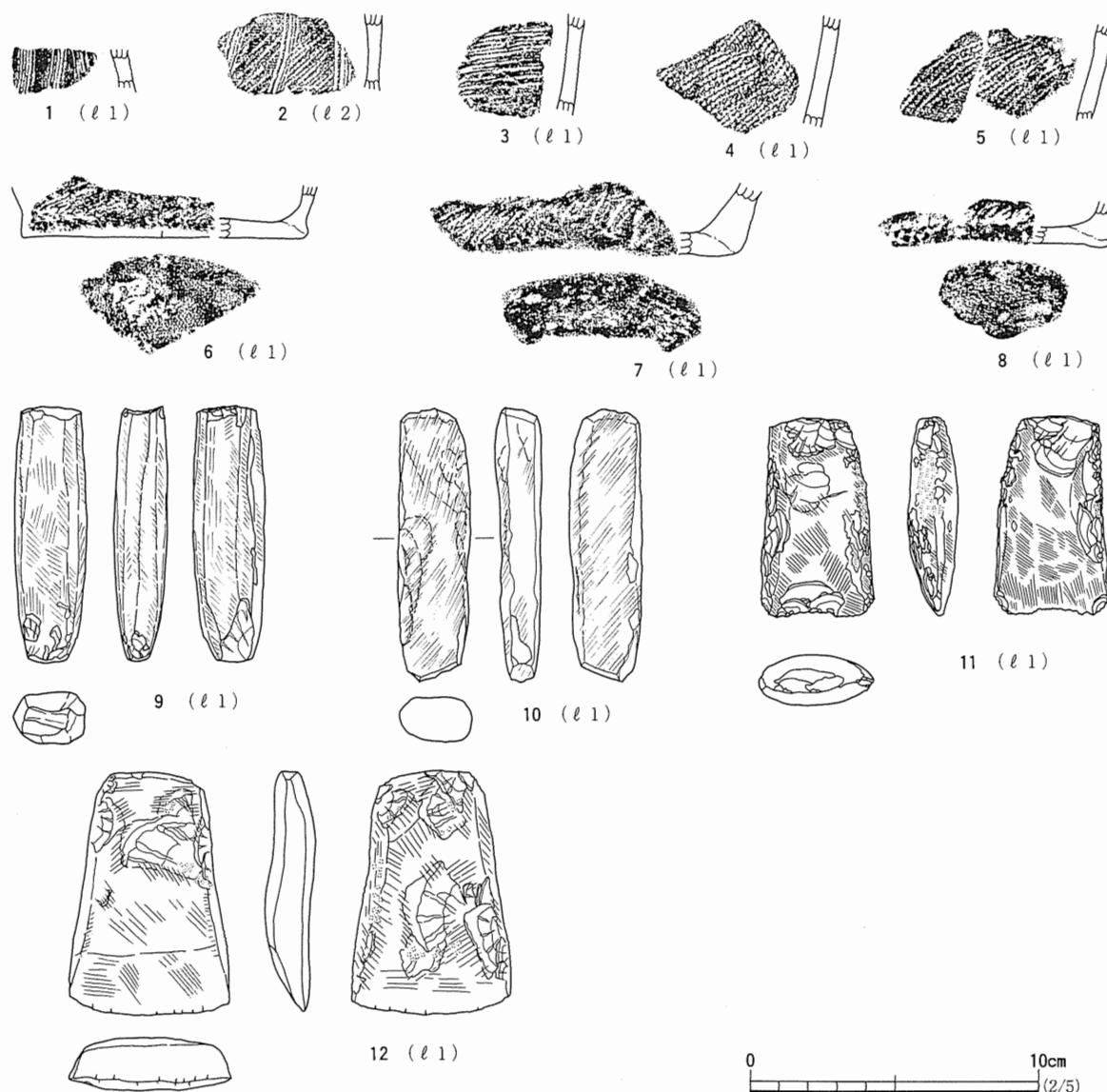


図33 11号住居跡出土弥生土器・石器

12号住居跡 S I 12

遺 構 (図34, 写真27)

本住居跡は調査区中央を南北に延びる丘陵の東向き斜面裾部、BY46・47グリッドに位置する。同斜面に確認された2号遺物包含層を掘り込んだ際、土師器を集中的に出土するカマドを検出し、住居跡と認定した。遺構検出面はL VI上面である。斜面上方には11号住居跡と12・13号土坑、10mほど北東に1号製鉄炉がある。本住居跡は遺存状態が悪く、カマドと西壁の一部を残し、大部分が流出欠損している。

カマド内には天井崩落土が少量見られる程度で、カマドの上部構造の大部分は遺存していない。残存するカマド袖部は明黄褐色粘土で造られ、両袖部とも60°程度の急角度で内傾する。カマドの燃烧部は奥行き68cm、最大幅50cmを測る。燃烧部底面には酸化面を確認できなかったが、袖部の燃

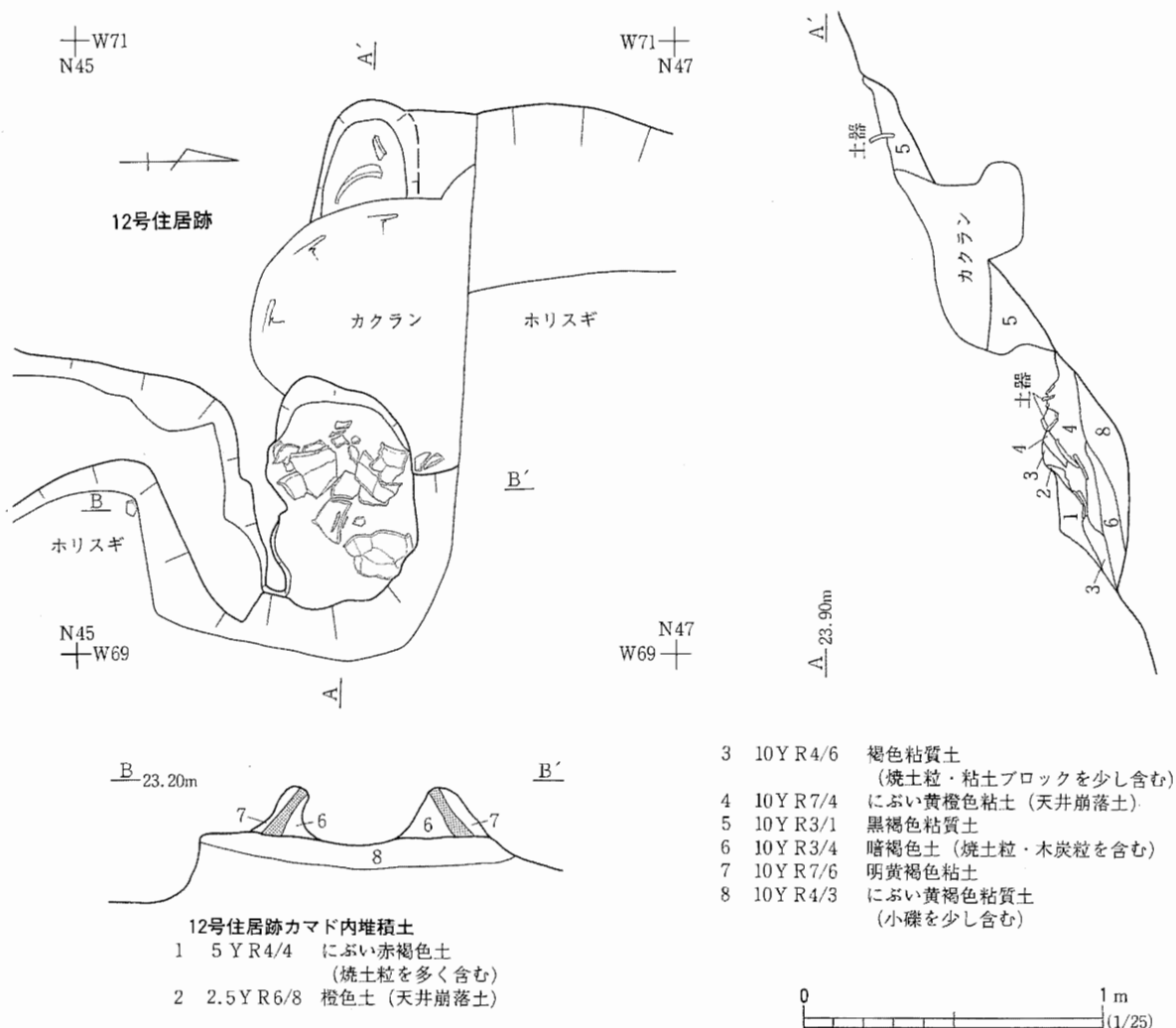


図34 12号住居跡カマド

焼部内側壁面は良く焼けており、酸化部分は3～5cmに及ぶ。

煙道部には大きな攪乱があり、煙道全体の明確なプランは確認されなかった。煙出しと思われる部分は比較的是っきりしたプランを検出できたが、煙出しピットや酸化面は確認されなかった。燃焼部奥壁から煙出し先端までは162cmを測る。

遺物 (図35, 写真136)

遺物は遺構内堆積土から土師器片9点、須恵器片9点、カマド内堆積土から土師器片85点、煙道部先端から土師器片2点を出土した。また、遺構内の攪乱からは須恵器杯片2点を出土している。そのうち、図示できたのは土師器6点、須恵器1点である。

土師器 35-1～5はカマド内堆積土から出土した土師器甕である。1は非ロクロ成形の土師器甕で、口縁部から体部上半にかけて遺存している。器形的には、体部はやや内湾気味に立ち上がり、体部中位で最大胴径になる。口縁部は「く」字形に外反し、器面の遺存状態は良い。口径19.4cm、推定最大胴径19.8cm、遺存高19.0cmを測る。調整は、内外面とも口縁部はヨコナデが施されている。外面は体部上半から下半にかけて全面的に縦方向のハケメ、内面は体部上半にヘラナデが施

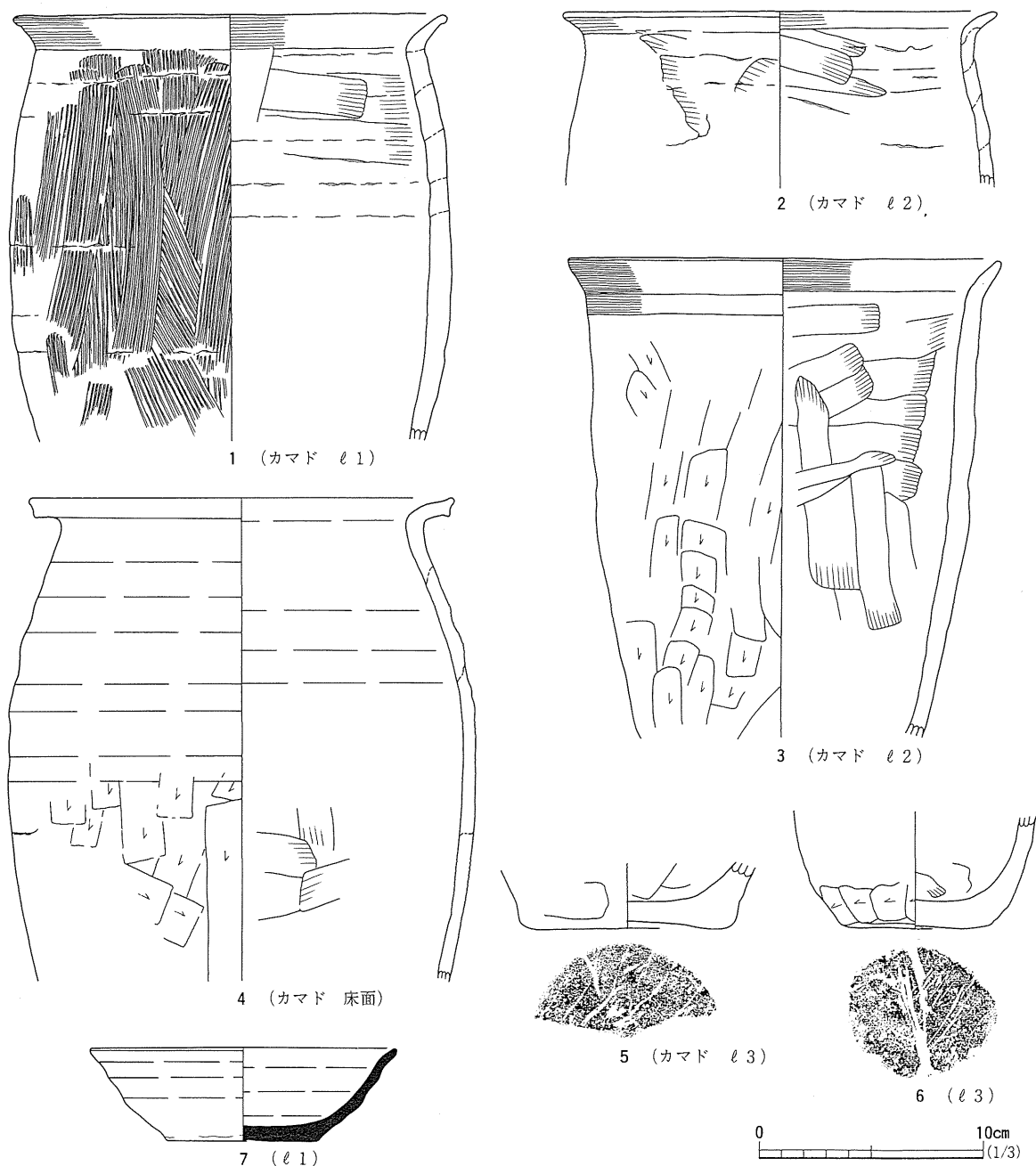


図35 12号住居跡出土土師器・須恵器

されている。また、内外面ともに粘土積み上げ痕が明確に残る。胎土はやや粗で、粗砂を含む。焼成の程度は良く、内外面ともにぶい黄橙色を呈する。2は非ロクロ成形の土師器甕の口縁部で、「く」字形に強く外反する。器面の遺存状態は良い。推定口径19.4cm、遺存高7.9cmを測る。調整は、内外面とも口縁部にはヨコナデが施されている。体部は、内外面ともにヘラケズリ後に斜め方向のヘラナデが施されている。胎土は密で、砂粒を多量に含む。焼成の程度は良く、内外面とも灰黄褐色を呈する。3は非ロクロ成形の土師器甕で、底部を除き約70%が遺存している。体部はほぼ直線的に外傾して立ち上がり、口縁部が外反する器形である。器面の遺存状態は良い。口径19.4cm、遺存高21.2cmを測る。調整は、外面が口縁部にヨコナデ、体部から底部にかけて縦方向のヘラナデが

施されている。内面は口縁部にヨコナデ、体部上半にヘラナデが施されている。胎土は密で、細砂を多く含む。焼成の程度は良く、内外面とも黄褐色を呈する。4はロクロ成形の土師器甕で、口縁部から体部下半にかけて約25%が遺存している。器形は、体部は内湾して立ち上がり、体部中位で最大胴径になる。口縁部は水平近くまで強く外反する。器面の状態は良い。推定口径19.0cm、推定最大胴径21.0cm、遺存高21.5cmを測る。調整は、外面はロクロナデ後、体部下半にヘラケズリが施されている。内面はロクロナデ後、体部下半にヘラナデが施されている。胎土はやや粗で、多量の細砂と少量の小礫を含む。焼成の程度は良く、内外面とも赤褐色を呈する。5は土師器甕の底部片である。器形は判然とせず、器面は荒れている。推定底径9.0cm、遺存高2.9cmを測る。調整は、内外面とも横方向のヘラケズリが施されている。底部には木葉痕が確認される。胎土は密で、砂粒を多量に含む。焼成の程度は良く、内面はにぶい黄橙色、外面はにぶい橙色を呈する。

6は遺構内堆積土から出土した非ロクロ成形の土師器甕の底部である。平底の底部から外傾して立ち上がる器形で、器面は荒れている。底径6.9cm、遺存高5.2cmを測る。外面の底部からの立ち上がり部分にヘラケズリが施されているが、体部の調整は不明である。内面底部にはヘラナデが施されている。胎土は密で、砂粒を少量含む。焼成の程度は良く、内面はにぶい黄褐色、外面は褐色を呈する。

須恵器 35-7は遺構内堆積土から出土した須恵器杯で、約40%が遺存している。平底の底部から緩く内湾気味に立ち上がり、口縁部で若干外傾する器形である。表面は摩滅が進んでいる。底部切り離し技法は不明である。胎土は密で、少量の砂粒を含む。焼成の程度は良く、灰白色を呈する。法量は推定口径13.8cm、推定底径6.6cm、器高4.1cmを測る。

ま と め

本遺構は斜面裾部の礫層(LVI)を一部掘り込んで構築しているが、遺構の大部分は地崩れや攪乱によって失われ、カマドとその近辺しか遺存していない。本遺構の所属時期は出土遺物から9世紀前半に比定される。

(内 村)

13号住居跡 S I 13

遺 構 (図36, 写真28・29)

本住居跡は、調査区南側奥の丘陵部、BT55・56グリッドに位置する。遺構が構築されている付近は、標高28.5mほどの平坦面で、地形の観察から丘陵上位が数度にわたって大きく削平されていることが分かる。粘土層が削平されていることは、記録に残る近代の磐城セメント株式会社による粘土採掘のためであることが分かった。本住居跡は、旧地形からすると頂部より一段低い平坦面にあったため、その削平を辛うじて免れたものと考えられる。本住居跡の貯蔵穴と焼土が遺存していたLV上面で、貯蔵穴(P1)とカマドの痕跡を検出したが、住居跡としてのプランは検出できなかった。貯蔵穴上端の北側は、約1mで調査区境界である。8号溝跡と重複し、本遺構が古い。

P1は貯蔵穴で、その規模は、現況の上端で長軸120cm、短軸80cm、検出面から最深20cmを測る。

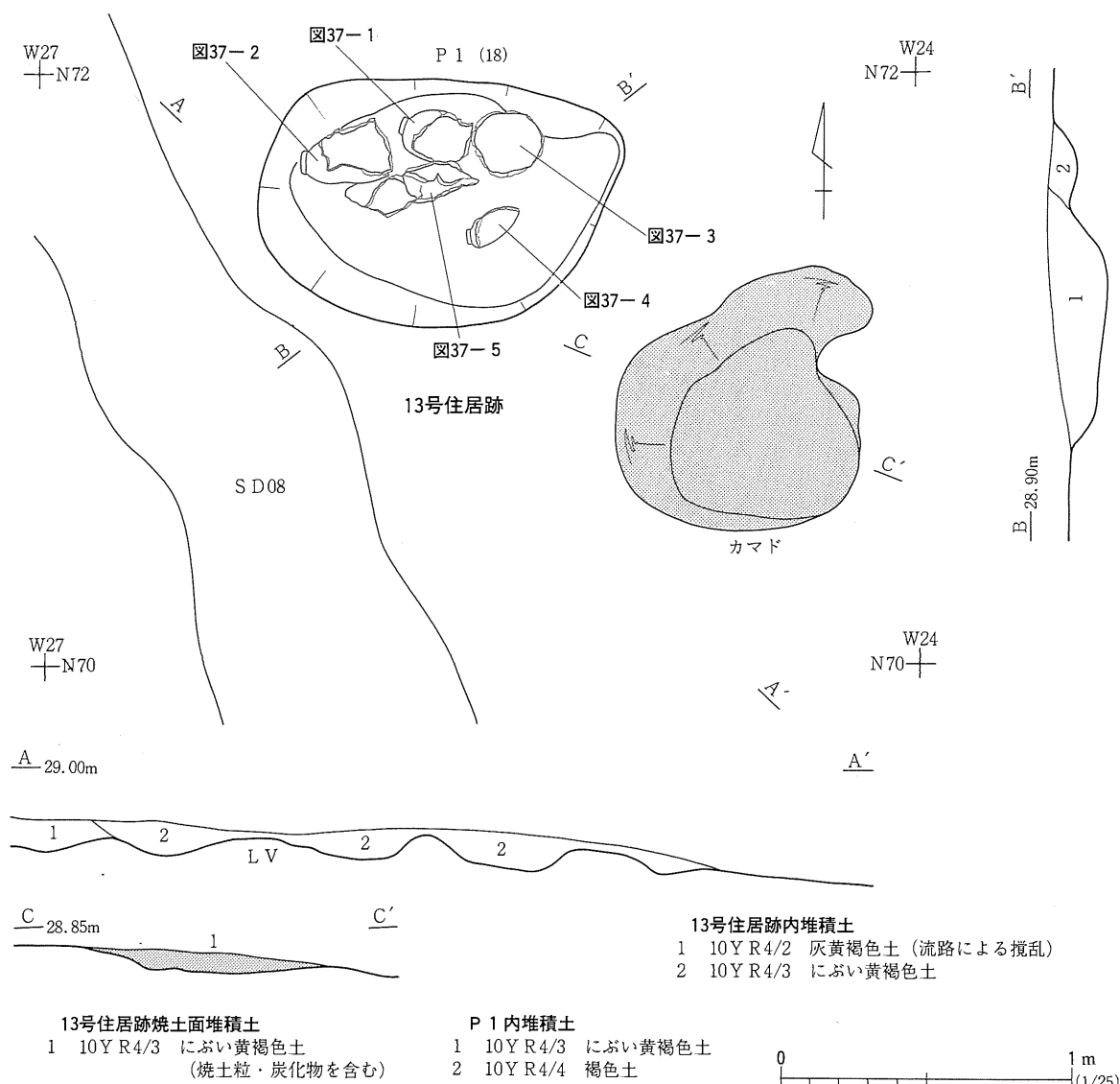


図36 13号住居跡

貯蔵穴内堆積土は2層に分層され、いずれも粘質土で固く締まっているが、自然堆積と考えられる。貯蔵穴の北壁寄りに、 ℓ 1から土師器甕・甗が6個体出土した。本来正位で置かれていたものが、近代の削平時に圧力が加わり南東方向に倒れ込むように埋没し、堆積土に残されたものと考えられる。焼土の範囲は、P 1の南東側に長径98cm、短径86cmの楕円形で検出された。焼土の堆積状態は、全体に焼土粒・炭化物粒が散らばっていて、焼土の厚さは最深部まで6cmを測る。検出面では酸化面は検出されず、貯蔵穴との位置関係を考慮すると、壊されたカマドの残骸と判断した。

遺物 (図37, 写真137)

本住居跡から出土した遺物は土師器片344点、石器類1点である。このうち、遺存状態が良く図示できたのは土師器6点、石器類1点である。P 1からは土師器甕5個体、甗1個体がまとまって出土している。

土師器 37-1は土師器甕で、口縁端部を欠くが約60%が遺存している。平底の底部から外傾し

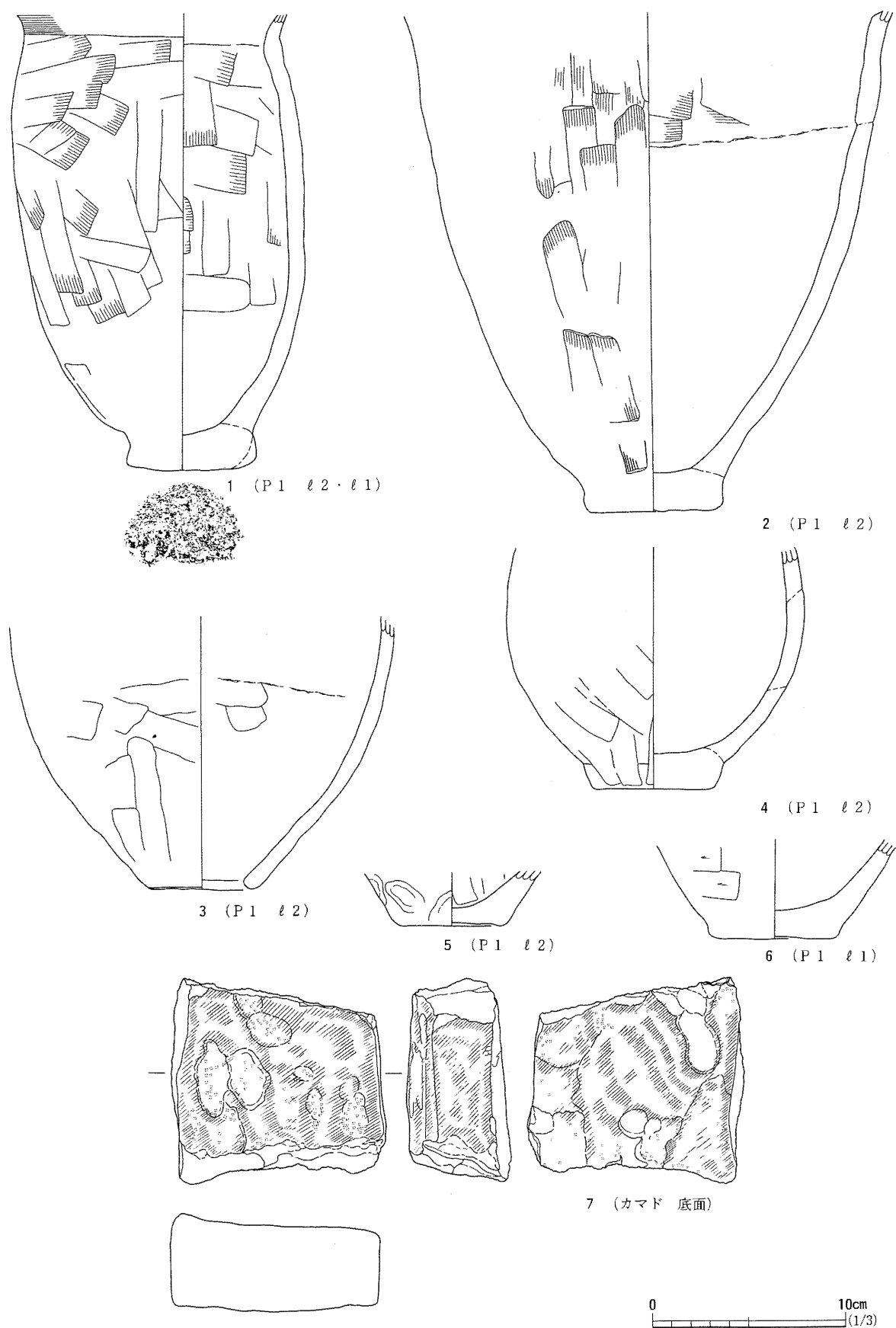


図37 13号住居跡出土土師器・石器

て立ち上がり、やや内傾気味の体部から緩く外反する口縁部に至る器形である。底径5.9cm、遺存器高23.6cm、体部上位で推定最大胴径15.2cmを測る。器面が荒れていて、調整痕は不明瞭である。体部外面はヘラケズリ調整、口縁部はヨコナデ調整、体部内面にはヘラナデ調整があり、底部に木葉痕が認められる。胎土は砂粒を多く含みやや荒く、色調は内面暗赤褐色、外面黒褐色を呈する。2は土師器甕で、口縁部を欠くが約40%が遺存している。平底の底部から外傾して立ち上がり、やや直立気味の体部を有する器形で、底径6.6cm、遺存器高25.7cmを測る。器面が荒れているので不明瞭だが、体部外面ヘラケズリ調整、内面ヘラナデ調整で、内面に粘土積み上げ痕が観察される。胎土は砂粒を多く含み、焼成は良好で、色調は内面褐色、外面にぶい黄褐色を呈する。4は土師器甕の胴部から底部破片である。底径6.4cm、遺存器高12.5cmを測る。器面が荒れていて、調整痕は不明瞭である。内面ナデ調整、外面ケズリ調整である。胎土は細砂を多量に含み、焼成は良好で、色調は内面にぶい橙色、外面にぶい褐色を呈する。5は土師器甕の底部片で、底径5.4cm、遺存器高2.8cmを測る。器面は摩滅が著しく調整は不明瞭だが、内面に部分的にヘラナデ調整が観察される。胎土は砂粒を多く含み良く、焼成も良好で、にぶい橙色を呈する。6は土師器甕の底部片で、底径6.4cm、遺存器高4.8cmを測る。器面摩滅が激しく調整不明瞭で、体部外面にヘラケズリ調整がわずかに観察される。胎土は砂粒を多く含み良く、焼成も良好で、色調はにぶい橙色を呈する。

3は無底の土師器甕の体部小片で、推定孔径5.5cm、遺存器高14.2cmを測る。器面が荒れていて不明瞭であるが、体部内外面ヘラケズリ・ヘラナデ調整がわずかに観察される。胎土・焼成は良好で、色調はにぶい橙色を呈する。

石 器 37-7はカマド床面から出土した石皿である。表面には二次加熱を受けた痕跡が著しく、カマド施設として再利用されたものと考えられる。

ま と め

本住居跡は削平が著しく、住居跡としてのプランを検出することができなかった。しかし、貯蔵穴(P1)とカマドの痕跡を検出したので、住居跡と判断した。所属時期は出土土器から判断して住居式と考え、6世紀代と推定した。

(佐久間ふく子)

15号住居跡 S I 15

遺 構 (図38・39, 写真30・31)

本住居跡は、A016・17グリッドに位置する。遺構は、調査区北側の南北に延びる丘陵先端の裾部、標高23m程の平場部に等高線に沿うように構築されている。重複する遺構はないが、南方向に近接して15号土坑が存在する。検出面は、LIV a 上面である。初めに4個体の土師器甕が連なって出土し、その南側に黒褐色土の方形のプランとして検出した。

遺構内堆積土は、4層に分層される。ℓ1・2は、黒褐色土で、遺構の西側上層に堆積しており、東側では削平により消失している。ℓ3は、黒色土で、遺構内全体に広く堆積しており、層厚は最大で30cmを測る。ℓ1～3は、斜面上位より流れ込んだ堆積土状況を示し、自然堆積層と考え

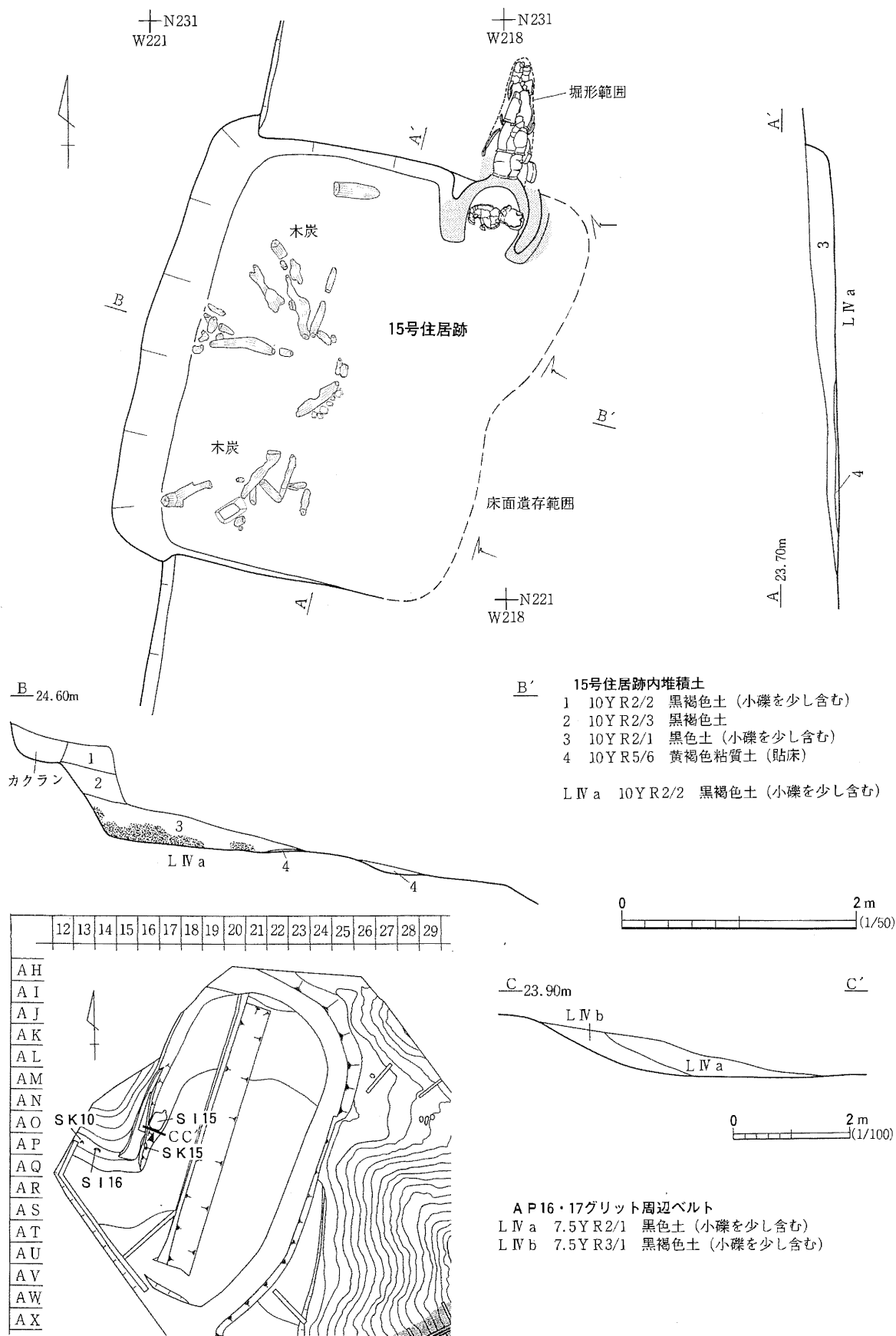


図38 15号住居跡

られる。住居跡床面の東側半分は、L V相当である黄褐色粘質土(ℓ 4)によって、3 cm前後の厚さで貼床されている。

床面直上から、多量の木炭状の炭化物が出土した。遺物として取り上げた炭化物は310点を数える。図38に示すように、これらの炭化物の長軸方向は、住居跡中央部から周辺部に向かって放射状に延びている。このことから、これらの炭化物は住居跡の上屋を形成していた梁や柱材が焼け落ちたものと判断した。

平面形は斜面下位の東側が流出により消失しているが、ほぼ方形基調を呈する。遺存規模は、南北3.8m、東西3.0mを測る。周壁は、北壁がやや急に立ち上がり、西壁・南壁は緩やかに立ち上がる。東壁は流出により消失している。斜面側の西壁が遺存良好で、遺存高は検出面から最大50cmを測る。床面は、斜面下位に向かって緩やかに傾斜する。

カマドは北壁の中央からやや東側に付設されていた。カマドの軸方位は、N13° Eを指す。カマドは、袖部、燃烧部と土師器甕を連結した煙道部を遺存する。カマド内堆積土は、暗褐色土の単層で焼土を含む。カマド袖部は、黒褐色土の地山に褐色粘質土と暗褐色土が互層に築かれている。袖部は、東側の袖部が削平を受けて上部の残りが悪い。袖部の規模は、奥壁からの長さ約60cm、両袖間の幅は95cmを測る。袖部の遺存高は、西側袖が住居跡床面から20cm、東側袖が、住居跡床面から5 cmを測る。

燃烧部は、奥行き55cm、幅40cmを測り、中央付近は、住居跡床面より5 cm程低くなっている。燃烧部底面・壁面に酸化面は確認できなかった。煙道部は、焼成室底面から10cm程上がった奥壁から住居跡外に約1 m張り出しており、底部を打ち欠いた土師器甕を掘形内に4 個体連結して埋設している。4 個体の土師器甕の周囲には、これらを固定するために、土師器甕片が5 片突き刺してあった。煙道内の堆積土は、黒褐色土の単層である。

住居跡の付属施設である柱穴・ピット等については、焼け落ちた柱材と考えられる炭化材の根本近辺を中心に丁寧に精査したが、検出することはできなかった。

遺 物 (図39～41, 写真138・139)

本住居跡からは土師器片590点、須恵器片5点、木炭310点が出土した。そのうち、復元できた土師器9点、須恵器2点について図示した。

土師器 39-2は床面直上より出土したロクロ整形の土師器杯である。内面には横方向の丁寧なヘラミガキが顕著で、黒色処理が施されている。特に底部には一方向の丁寧なヘラミガキが観察できる。外面は体部下半から底部全面に回転ヘラケズリ再調整が施されている。

39-1・40-1はカマド内堆積土から潰れた状態で出土した2体の土師器甕である。39-1は非ロクロ土師器甕で、平底の底部から直線的に外傾する体部を有し、「く」字形に強く外反する口縁部に至る器形である。口縁部はヨコナデ調整、内面にヘラナデ調整、外面には縦方向のケズリ調整が施されている。底面には、木葉痕が観察できる。40-1はロクロ整形で、体部中位に最大径のある「卵形」を呈し、口縁部は「く」字形に緩く外反する器形である。内面にナデ調整、外面は体部

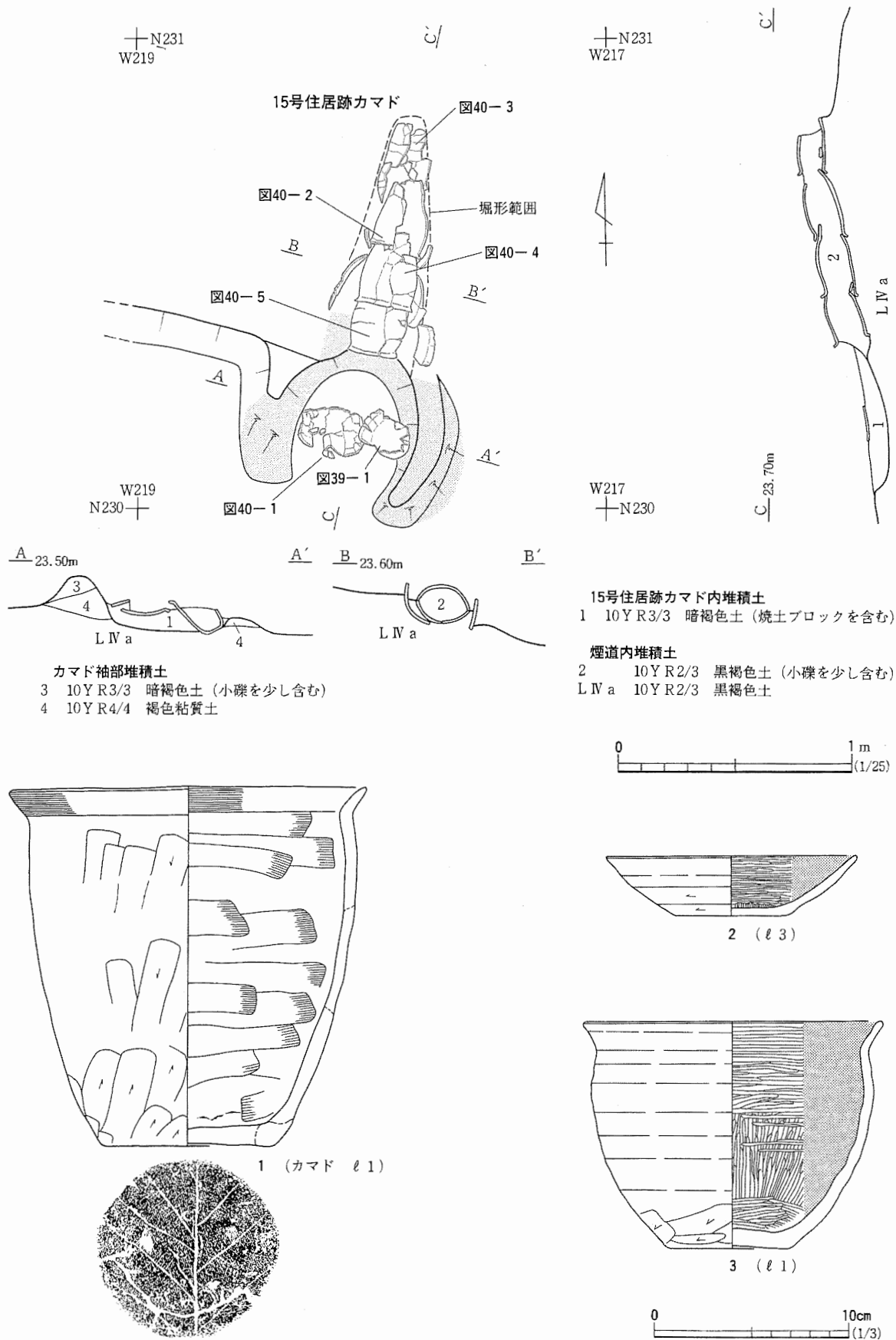


図39 15号住居跡カマド，出土土師器

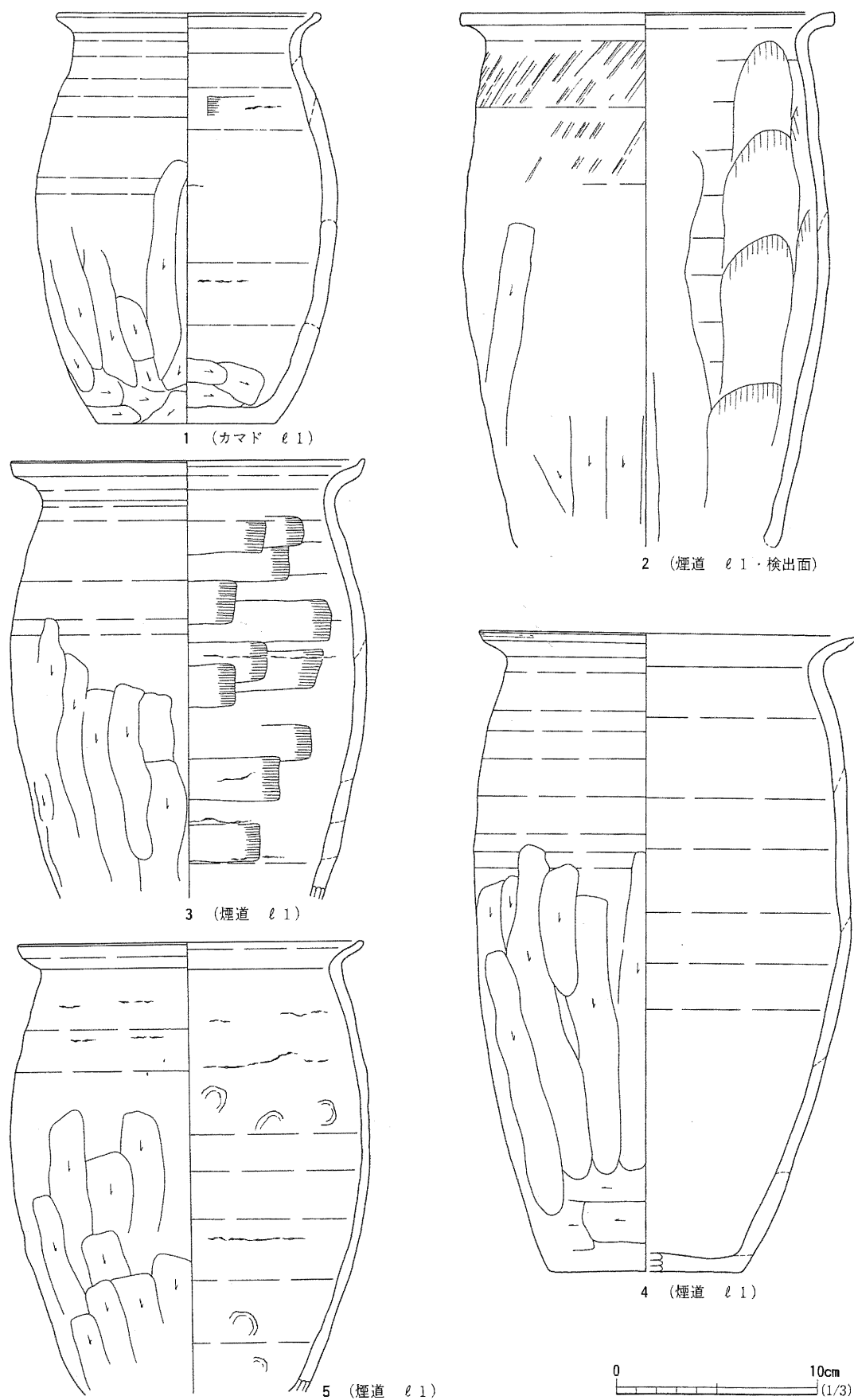


図40 15号住居跡出土土師器

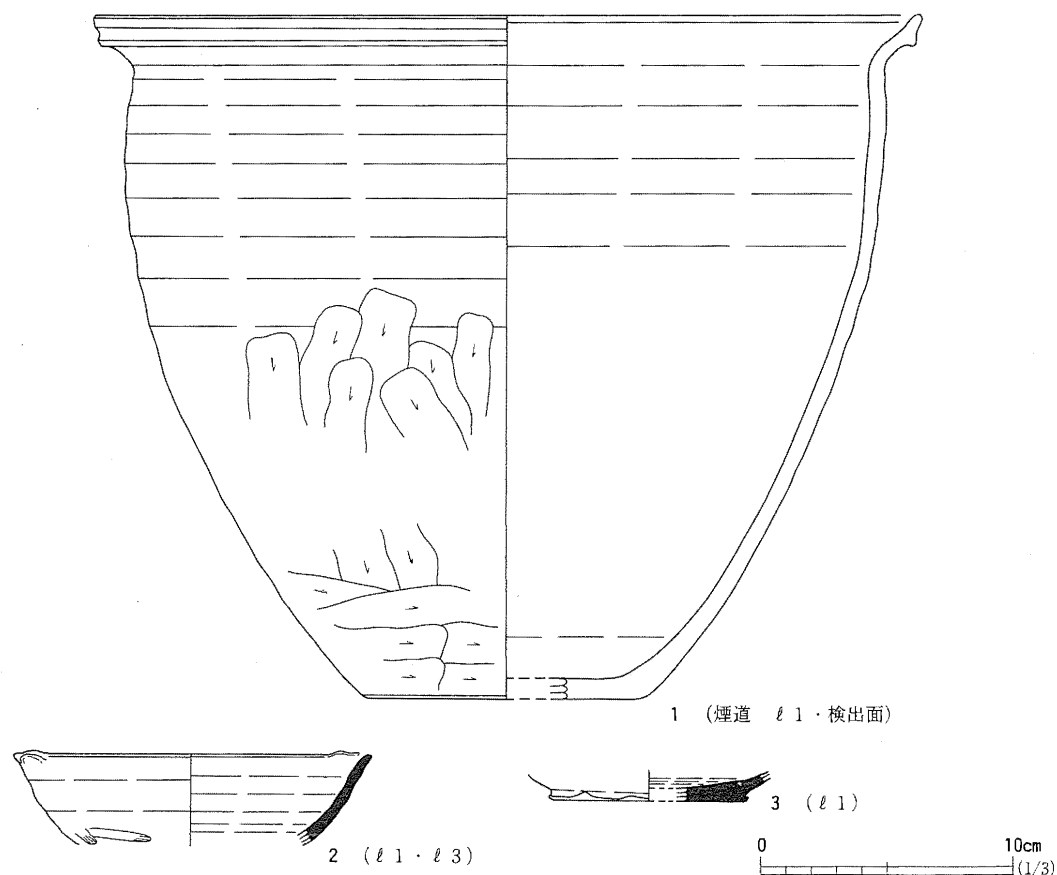


図41 15号住居跡出土土師器・須恵器

下半にケズリ調整が施されている。

39-3は堆積土中から出土したロクロ整形による小型の土師器甕で、体部が丸みを持ち、口縁部が外側に緩く屈曲する器形である。内面はヘラミガキ調整と黒色処理、外面は体部下半から底部にかけて手持ちヘラケズリ再調整が施されている。底面はナデ調整で、切り離しは不明である。

40-2～5はカマド煙道部に使用されていた4個体の土師器甕である。カマド側から5⇨4⇨2⇨3の順に連結された状態で出土した。いずれもロクロ整形の長胴甕で、口縁部から体部にかけて遺存し、底部を欠損している。2は内面に横位のヘラナデ調整後に、縦位に単位の高い大きなヘラナデ調整が施されている。外面は上半に平行タキが観察でき、体部にはヘラケズリ調整が認められる。3は内面にヘラナデ調整、外面の体部下半には縦方向へのケズリ調整が認められる。4は内面にロクロナデ調整、外面の体部下半には縦位のヘラケズリ調整が施されている。5は内面にロクロナデ調整、粘土紐積み上げ痕、整形時の指頭圧痕が顕著である。外面は体部下半に縦位のヘラケズリ調整が施されている。これら4個体の土師器甕は、いずれも片側の器面の荒れが激しく、にぶい赤褐色に焼けている。他方の片側は遺存状態が良く、下側にして埋設したものと考えられる。

41-1は煙道の4個体の土師器甕を固定していた5つの破片と、検出面やカマド内から出土した破片を接合・復元したロクロ整形の土師器甕である。口縁部にヨコナデ調整、外面の体部下半から底部にかけてヘラケズリ調整が施されている。

須恵器 41-2・3は堆積土中から出土した須恵器杯の破片資料である。2は口唇部に指圧痕が認められ、3の底部切り離し技法は回転糸切りによるものである。色調は黄灰色～灰色である。

ま と め

本住居跡は、床面上に木炭状の炭化物が放射状に分布して出土していることから、焼失家屋である可能性が高い。カマド煙道部は、底部を打ち欠いた土師器甕を4個体連ねて煙道部としており、近接するタタラ山遺跡7号住居跡(本間ほか;1995)に類似するものである。所属時期は、これら煙道部に埋設された土師器甕の特徴や、カマド内出土遺物から、8世紀末～9世紀初頭頃と考えられる。

(佐久間芳雄)

16号住居跡 S I 16

遺 構 (図42, 写真32)

本遺構は、調査区北側の南北へ延びる丘陵先端部、AP14グリッドに位置する。遺構が構築されている付近は、標高24mほどの比較的緩やかな斜面部で、等高線に沿うように平坦部となっている。隣接して10号土坑・2号性格不明遺構が存在し、新旧関係は2号性格不明遺構と重複しており、本遺構の方が古い。検出面はLV上面であり、斜面下位の南側は流出により遺存状態は悪い。

遺構内堆積土は褐色系の2層に分層され、斜面上位からの流れ込みによる自然堆積層と判断される。平面形は、遺存する斜面上位の北側半分のプランから、長径2.5m、短径1.6mの不整楕円形を呈するものと考えられる。周壁は底面から緩やかに外傾しながら立ち上がり、遺存状態の良い北壁で約25cmを測る。床面は斜面下位の南側に向かって緩傾斜しており、若干凹凸はあるがほぼ平坦である。

住居施設である炉跡や柱穴等は確認できなかった。

遺 物 (図42, 写真140)

遺物は遺構内堆積土から弥生土器片36点が出土している。細片で摩滅が著しいため図示できたのは弥生土器11点である。

弥生土器 42-1～9は口縁部・胴部の破片資料、10・11は底部資料である。1は甕形土器の緩やかに外反する口縁部資料である。2は束線具によって格子状の文様を描画しているものである。地文には1・3・5・7・9が附加条、6が直前段多条、4が斜縄文、8が0段多条を回転施文している。6の器面には煤状の付着物が認められる。10・11は底部資料で、10の底部には布状の圧痕、11にはナデ調整が認められる。

ま と め

本遺構は、遺存する規模から一辺3m程の小型の住居跡に属する。住居跡施設である炉跡や柱穴等の確認はできなかったが、重複関係や出土遺物から弥生時代中期末頃の所産と考える。(井)

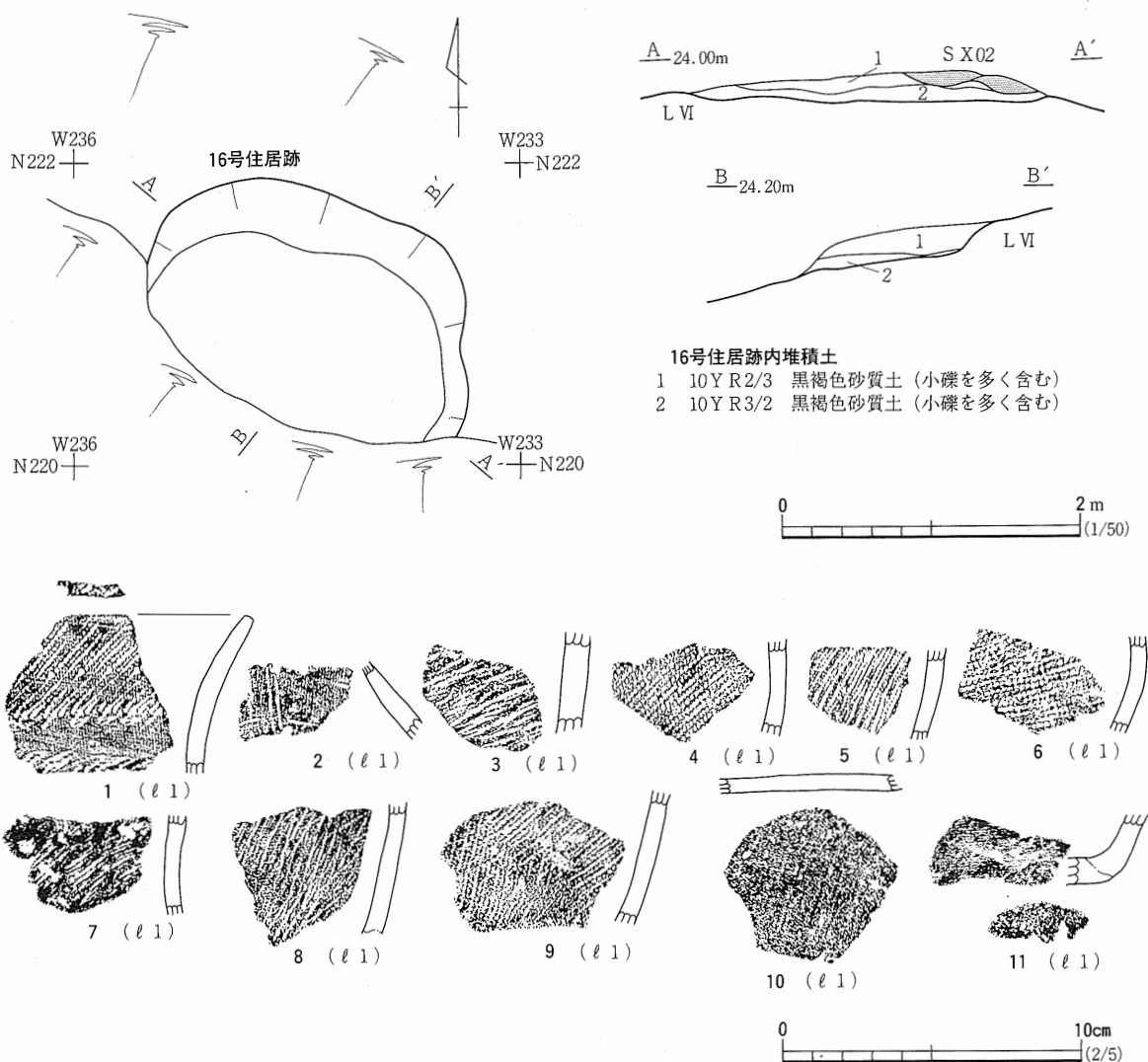


図42 16号住居跡，出土弥生土器

第3節 土 坑

今回の調査で検出された土坑は20基である。これらの土坑は、丘陵頂部や裾部の比較的平坦な場所に立地し、住居跡と近接して確認されている場合が多い。分布状況は、中央丘陵南西側斜面裾部2基、北西側斜面裾部3基、南側丘陵頂部1基、南東側斜面中腹部2基、裾部2基、西端丘陵南側斜面裾部2基、北東端沢部8基である。北東端沢部の7基は集中しているが、ほかは散在している。

1号土坑 S K 01

遺 構 (図44, 写真34)

本土坑は調査区中央を南北に延びる細尾根の丘陵頂部、BJ40グリッドに位置する。重複する遺構はなく、本土坑の南約15mに1号住居跡が近接する。L V上面より検出し、土坑内堆積土は3層に

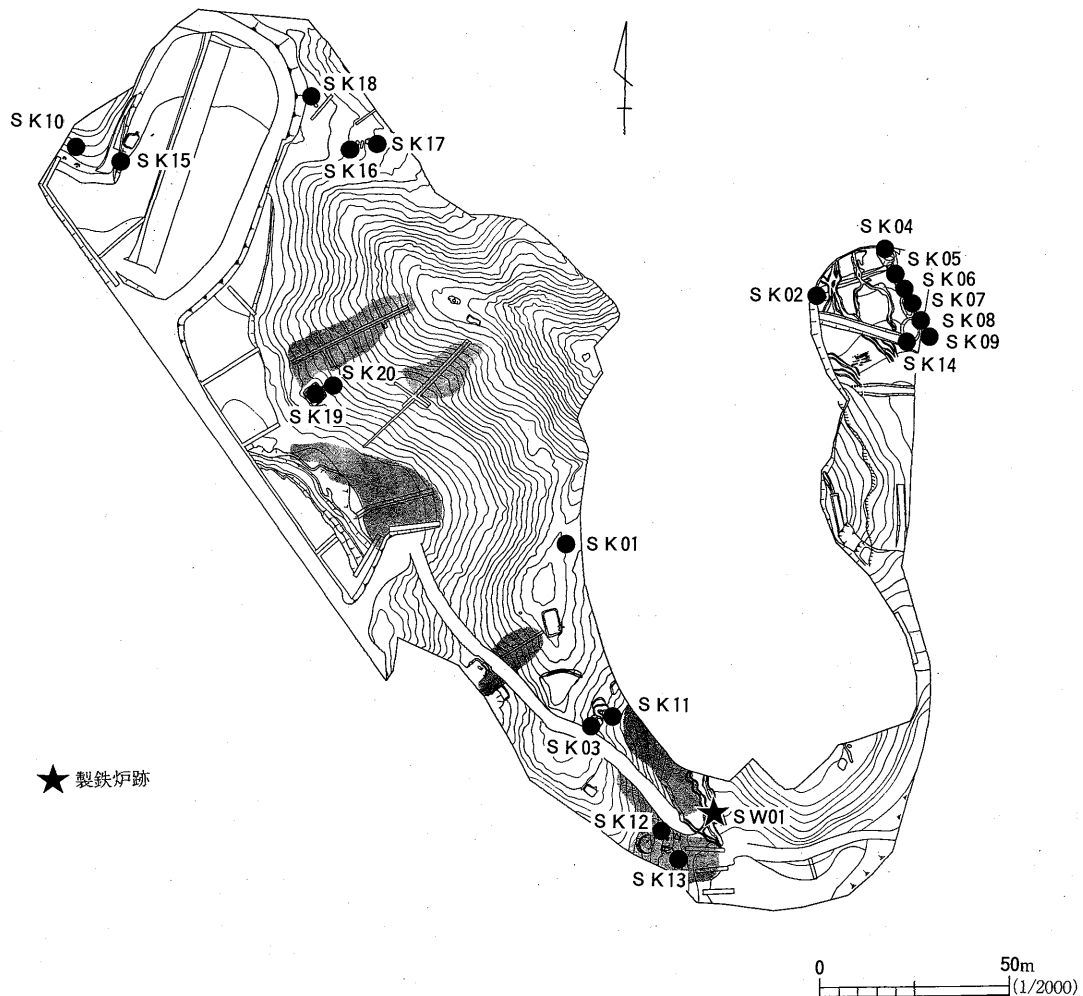


図43 土坑位置図

区分した。いずれも褐色を基調にした堆積土で、 $\ell 3$ には木炭粒・焼土粒が多量に含まれていた。壁際の流れ込みの状態，レンズ状の堆積の状態から自然堆積と判断した。長軸は $N14^{\circ}E$ である。

平面形は南北に長軸を持つ隅丸方形を呈し，規模は上端で長軸1.1m，短軸0.9mである。深さは，検出面から最深25cmを測る。周壁は急に立ち上がり，南西側壁面と南西コーナーにかけて上部に厚さ1～2cmの酸化面が観察された。底面にも，長径34cmの楕円形と長径17cmの三日月形に厚さ1～2cmの酸化面が観察される。取り上げるほどの木炭片もなく，遺物は出土しなかった。

ま と め

本土坑の性格は，平面形や底面・壁面に酸化面が見られ，底面直に木炭粒が多く出土したことから木炭焼成遺構と考えられる。出土遺物がなく時期は不明である。(佐久間ふく子)

2号土坑 SK02

遺 構 (図44, 写真34)

本土坑は調査区北東端の西側，南向きに緩やかに傾斜し，削られてついた段差の下段，北西から

東南に向け、緩やかに傾斜するAV54・55グリットに位置する。重複する遺構は認められないが、東側1mに4号溝跡、南側4mに2号溝跡が近接している。検出面はLⅡ下面であり、暗褐色土の方形のプランを検出した。遺構内堆積土は2層に分層されるが、下層(ℓ2)は湧水のためグライ化したものと思われ、基本的には単層である。人為堆積の可能性が高いと考えられる。

平面形は方形基調を呈し、主軸方向はN71°Eである。下端は東西に長軸をとる長方形を呈する。規模は上端で一辺1.5m、下端で長軸0.7m、短軸0.4mを測り、検出面から最深部までの深さは1.5mを測る。周壁はほぼ垂直に立ち上がり、断面は逆台形を呈する。底面は凝灰岩を掘り込んでおり、平坦である。

遺物

本土坑からの出土遺物は弥生土器片5点、土師器片4点、須恵器片6点、陶磁器片4点、鉄滓26g、木製品1点である。遺物は全て堆積土中からの出土であり、本遺構に伴う遺物ではない。

まとめ

本土坑は立地的状況や調査中も常に湧水していたことから、井戸跡の可能性が高い。明確な所属時期は不明であるが、掘り込み面や出土遺物等から近世末から近代の所産と考えられる。(鈴木)

3号土坑 SK03

遺構 (図44, 写真34)

本土坑は調査区中央部の南北に伸びる細尾根部、BS42グリッドに位置する。遺構が構築されている付近は、丘陵頂部からやや下がった標高34mほどの比較的緩やかな斜面部で、等高線に沿うように平坦部となっている。重複する遺構としては、6号住居跡を切っており、隣接する5号住居跡や11号土坑を含めて最も新しい。検出面はLV上面であり、斜面上位及び下位は崩落や流出により遺存状態は悪い。

遺構内堆積土は褐色系の3層に分層され、斜面上位からの流れ込みによる自然堆積層と判断される。平面形は不整楕円形を呈し、規模は長軸3.3m、短軸2.7mである。周壁は底面から緩やかに外傾しながら立ち上がり、遺存状態の良い北壁で約15cmを測る。床面は斜面下位の南側に向かって緩傾斜しており、若干凹凸はあるがほぼ平坦である。

遺物 (図52, 写真141)

本土坑の堆積土内からは、弥生土器片273点、土師器片1点が出土している。そのうち、遺存状態の良い弥生土器12点について図示している。

弥生土器 52-1～3は口縁部から頸部、4～10は胴部、11・12は底部資料である。1は壺形土器の頸部資料で、束線具によって横位に施文している。2・3は口縁部片で、地文に附加条を施している。4～6は先細の一本工具によって円文が描画され6には焼成後の穿孔が認められる。比較的器厚が薄く、脆い。7は3本工具、8は束線具によって三角文・連続山形文を描画しており7の沈線は深い。11はやや大型、12は小型に属する底部資料で、共に布状の圧痕が認められる。

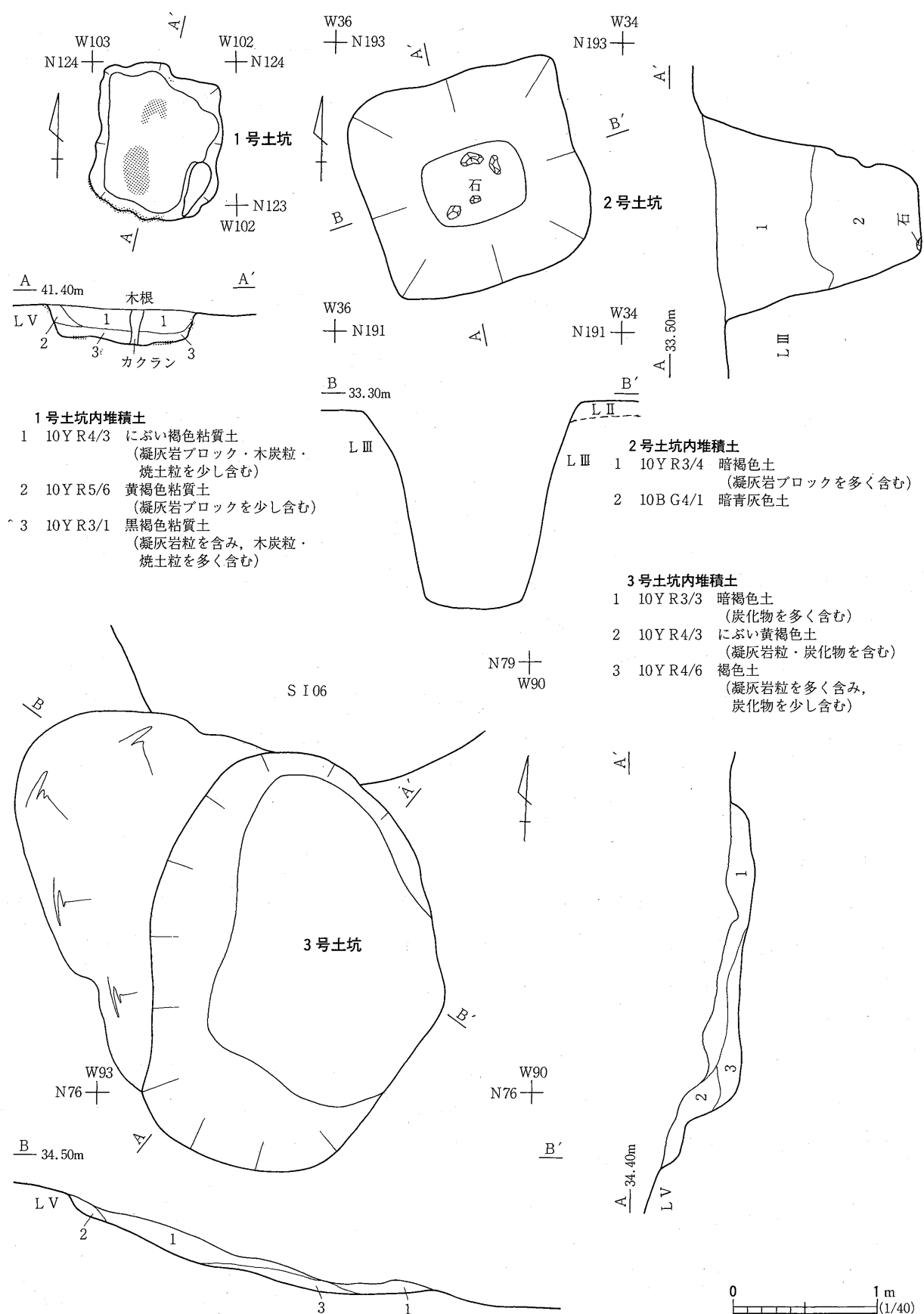


図44 1～3号土坑

ま と め

本土坑は丘陵頂部からやや下がった平坦部に構築されていた。この付近には、狭い範囲であるが住居跡(S I 05~07)や土坑(S K 11)が重複しており、本土坑が最も新しい。性格は明確にはできないが、所属時期は重複関係や出土遺物から弥生時代中期末頃の所産と考えられる。(井)

4 号土坑 S K 04

遺 構 (図45, 写真34・35)

本土坑は、調査区北東端で南向きに緩やかに傾斜し、削られて作り出された段差の上面に立地する。本土坑の東側は凝灰岩の急崖が立ち上がり、北側では調査区の境となる、AT56・57グリットに位置する。遺構南部で5号土坑と重複し、本土坑が新しい。西側5mに1号溝跡が近接している。検出面は東半でLⅥ、西半でLⅢ上面であり、暗褐色土の調査区外に延びる楕円形のプランを検出した。遺構内堆積土は13層に分層される。当初はℓ8上面が地山と同じ凝灰岩と判断し、底面と考えた。しかし、壁面に比してあまり堅くなく、締まりもないことからさらに掘り下げることにした。ℓ1~ℓ7は炭化物が少量含まれ、斜面上位からの流れ込みによる堆積と考えられる。ℓ8~13は拳大から人頭大の凝灰岩ブロックが主となり、一時期に堆積したと考えられる。堆積状況から、ℓ1~7は自然堆積、ℓ8以下は人為堆積と考えられる。

平面形は楕円形を呈し、主軸方向はN80°Wである。検出できた規模は、上端で長径4.7m、短径3.2mを測り、推定では長径5.0m、短径4.5m程度になると思われる。検出面から約2mを掘り込んだが底面が検出できず、作業上の安全を考え調査を断念したので、底面は検出していない。周壁は、東壁はLⅥで、凹凸しながら急に立ち上がる。東南部には検出面からの深さ1.5mの壁面に段がある。西壁はLⅢで、凹凸がなく急に立ち上がる。

遺 物

本土坑からの出土遺物は近世から近代の陶磁器片が多く、ℓ1・2・3・5から合計12点が出土し、ℓ1から弥生土器片が1点出ている。いずれも堆積土中からの出土であり、本遺構に伴うものではない。

ま と め

本土坑の性格は完掘しておらず断定できない。しかし、出土遺物から近代以降の遺構と推定され、土坑の規模や掘り込むことのできた深さから長さ1mのボーリングステッキでも底面に届かない深さを考えると、記録に残る近代のセメント原料の粘土採掘坑の可能性も考えられる。(鈴木)

5 号土坑 S K 05

遺 構 (図46, 写真35・36)

本土坑は、AT57グリッドに位置する。この一帯は、現代に畑の造作のため削られて作り出された段差がある。東側には、凝灰岩の急崖が立ち上がる。初め4・6号土坑のプランを確認し、南北方

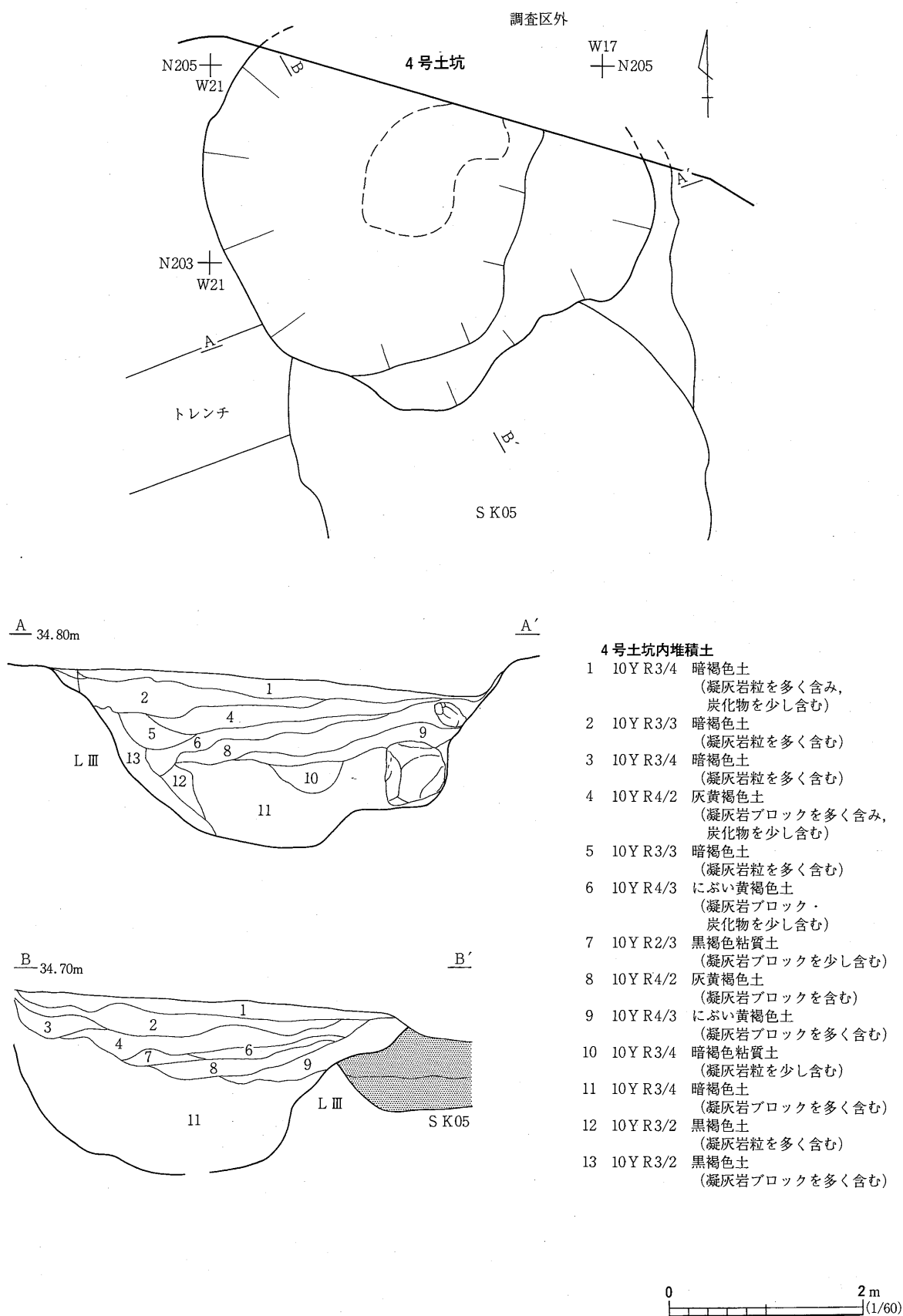


図45 4号土坑

向に土層観察ベルトを残し掘り込みを開始した。4号土坑の掘り込み中、土層断面観察により、新たな土坑を確認した。そこで掘り込みを中断し、プランの検出を行ったところ、東半はLⅥ、西半はLⅢ上面で、にぶい黄褐色土の不整な楕円形のプランを検出した。本土坑の北側で4号土坑、南側で6号土坑が重複する。新旧関係は、平面的にはとらえることができなかったが、土層断面の観察で、古い方から6号→5号→4号土坑の順であることが分かった。。西側5mに1号溝跡が近接している。遺構内堆積土は2層に分層され、凝灰岩ブロックを多量に含み、堆積が水平に近いので、人為堆積と考えられる。

平面形は楕円形を呈し、主軸方向はN68°Wである。6号土坑と重複して壊されているので、本遺構の全体の規模は不明である。遺存規模で長径4.6m、短径3.0mを測り、推定では長径4.6m、短径4.0mとなる。下端では長径2.3m、短径2.0mを測り、検出面からの深さは1.1mを測る。底面はLⅤまで掘り込まれており、比較的平坦である。周壁は、東壁はLⅥで凹凸があり、急に立ち上がる。西壁はLⅢで東側に比べ緩やかに立ち上がる。

遺 物

本土坑からの出土遺物は、ℓ1から土師器片1点と陶磁器片1点、ℓ2から須恵器片2点が出ている。しかしいずれも堆積土中からの出土であり、本遺構に伴うものではない。

ま と め

本土坑は出土遺物が少ないため、所属年代・性格は判断できなかった。しかし、4・6号土坑と重複しており、立地や形態が酷似していることから、4・6号土坑と同じ近代のセメント原料の粘土採掘坑と想定されるが、詳細は不明である。

(鈴木)

6号土坑 SK06

遺 構 (図46, 写真35・36)

本土坑は、AT57・58, AU57・58グリッドに位置する。東側には、凝灰岩の急崖が立ち上がる。本土坑は北側で5号土坑、南側で7号土坑と重複する。本土坑が両土坑より古い。検出面は東半でLⅥ上面、西半でLⅡ下部であり、にぶい黄褐色土の楕円形のプランを検出した。遺構内堆積土は、6層に分層される。当初ℓ6上面が地山と同じ凝灰岩と判断し、底面と考えた。しかし、壁面に比してあまり堅くなく、締まりもないことからさらに掘り下げた。検出面から最深部までで約2m掘り込んだが底面を検出できず、作業上の安全を考え調査を断念し、底面は検出していない。

ℓ1～4までは、凝灰岩ブロックを含むものの、斜面上位からの流れ込みによる堆積状況を呈している。ℓ5・6には、凝灰岩ブロック・粘土ブロックが混ざりあって堆積している。堆積状況から、ℓ1～4は自然堆積、ℓ5・6は人為堆積と考えられる。

平面形は楕円形を呈し、主軸方向はN30°Wである。5・7号土坑と重複して壊されているので、本遺構の全体の規模は不明である。遺存規模で長径5.2m、短径2.9mを測り、推定長径6.4m、短径2.9mとなる。周壁は東壁でLⅥで凹凸を持ちながら急に立ち上がり、西壁でLⅢで急に立ち

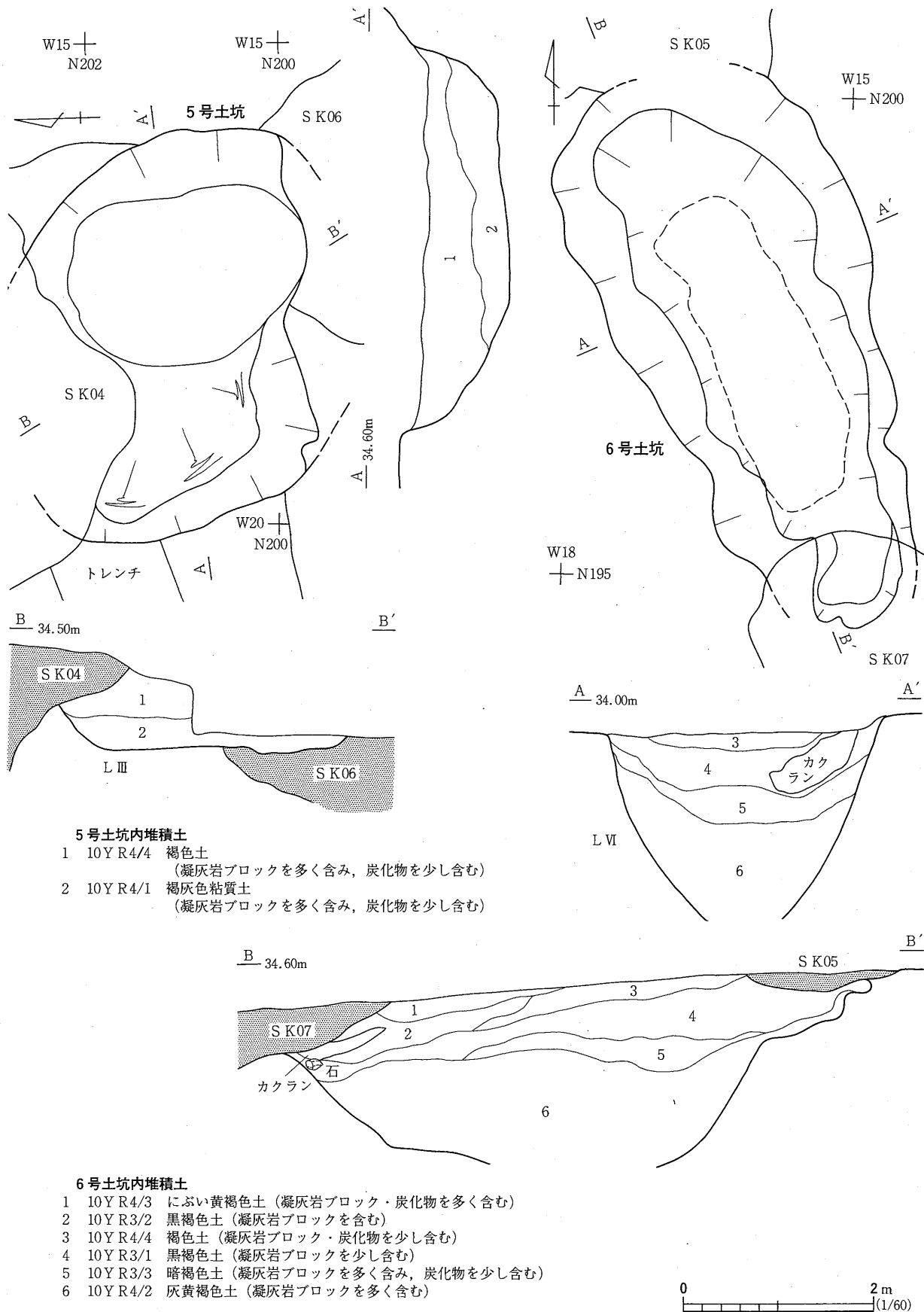


図46 5・6号土坑

上がる。北西部の壁面で、部分的にオーバーハングしている箇所がみられる。

遺 物

本土坑からの出土遺物は近世から近代の陶磁器片が4点出土し、他に弥生土器片1点、須恵器片1点、鉄製品2点が出ている。いずれも堆積土中からの出土であり、本遺構に伴う遺物ではない。

ま と め

本土坑の性格は完掘しておらず断定できない。しかし、出土遺物から近代以降の遺構と推定され、5・7号土坑と重複しており、立地や形態が4・5・7・8号土坑と類似している。また、土坑の規模や掘り込むことのできた深さから長さ1mのボーリングステッキでも底面に届かない深さを考えると、記録に残っている近代のセメント原料の粘土採掘坑の可能性が考えられる。(鈴木)

7号土坑 SK07

遺 構 (図47, 写真35・36)

本土坑はAU57・58, AV57・58グリッドに位置し、北東から南西への緩やかな傾斜面に立地し、東側には凝灰岩の急崖が立ち上がる。本土坑の北側で6号土坑、南側で8号土坑と重複する。本土坑が両土坑より新しい。6号土坑と8号土坑は直接の重複関係がなく、新旧関係は不明である。検出面は東半はLⅥ上面、西半はLⅡ下部で、にぶい黄褐色粘質土の楕円形のプランを検出した。遺構内堆積土は、にぶい黄橙色粘質土の単層で人為堆積と考えられる。

平面形は楕円形を呈し、主軸方向はN22°Wである。規模は上端で長径3.0m、短径2.4mを測り、下端で長径2.5m、短径2.0m、検出面からの深さ0.6mを測る。底面はLⅤまで掘り込まれており、隅丸長方形を呈し、凹凸も少なく平坦である。周壁は、東壁はLⅥで、急に立ち上がる。西壁は底面近くはLⅤ、中間部からはLⅢで凹凸があるが東壁に比べ緩かに立ち上がる。本土坑から遺物は出土しなかった。

ま と め

本土坑からの出土遺物がないので、性格は不明である。しかし、4～6・8号土坑に比して規模や形態が異なるので、他の土坑とは性格を異にすると考えられる。所属年代は、6・8号土坑より新しいので、近代以降と考えられる。(鈴木)

8号土坑 SK08

遺 構 (図47, 写真35・36)

本土坑はAV58, AW58グリッドに位置し、北東から西南への緩やかな傾斜面に立地し、東側には凝灰岩の急崖が立ち上がる。本土坑の北側で7号土坑、南側で9号土坑と重複する。本土坑が両土坑より古い。検出面は東側ではLⅥ、西側ではLⅡ下部であり、暗褐色土の楕円形のプランを検出した。遺構内堆積土は6層に分層され、ℓ1～3はレンズ状堆積の様相を呈する。ℓ4・5は凝灰岩ブロックを多量に含み、水平な堆積を示す。ℓ1～3は自然堆積、ℓ4・5は人為堆積と思われる。

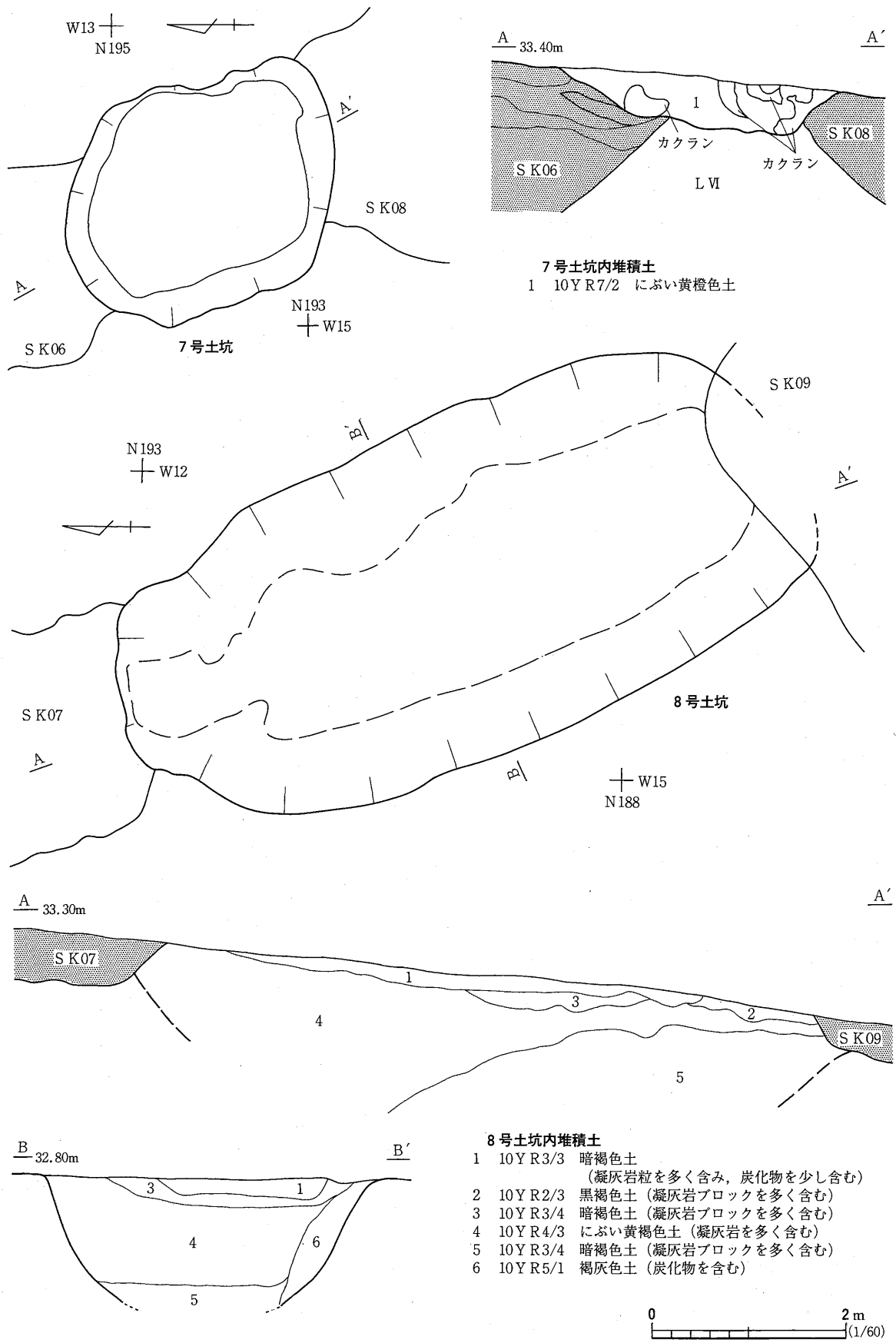


図47 7・8号土坑

平面形はN22° Wに主軸を取る楕円形を呈する。7・9号土坑と重複して壊されているので、本遺構の全体の規模は不明である。遺存規模で長径6.7m、短径3.5mを測り、推定では長径8.0m、短径3.5mとなる。検出面からの深さ1.7mまで掘り込んだが、底面を検出できず、作業上の安全を考え調査を断念し、底面は検出していない。周壁は東壁はLⅥで、急に立ち上がる。西壁は下部でLⅤ、中間部からLⅢで、やはり急に立ち上がる。

遺 物

本土坑からの出土遺物はℓ1から土師器片1点、ℓ2から陶磁器片2点が出ている。いずれも堆積土中からの出土であり、本遺構に伴う遺物ではない。

ま と め

本土坑の性格は完掘しておらず断定できない。しかし、出土遺物から近代以降の遺構と推定され、土坑の規模や掘り込むことのできた深さから長さ1mのボーリングステッキでも底面に届かない深さを考えると、記録に残る近代のセメント原料の粘土採掘坑の可能性が考えられる。(鈴木)

9号土坑 SK09

遺 構 (図48, 写真35・37)

本土坑はAW58, AX58・59グリッドに位置し、南西方向の緩やかな斜面に立地する。本土坑は14号土坑の堆積土を掘り込んで作られている。本土坑の北側で8号土坑、南側で2号溝跡と重複する。2号溝跡調査中に本土坑の存在に気づき、トレンチを設定して掘り込み、土層断面観察をした結果本土坑を確認した。新旧関係は、古い方から2号溝跡→14号土坑→8号土坑→9号土坑の順となる。

検出面はLⅡ下部であり、暗褐色土の楕円形のプランを検出した。遺構内堆積土は5層に分層され、ℓ4は14号土坑堆積土である灰層の上にあって、水平な堆積を見せる。ℓ1～3は斜面上位からの流れ込みによる堆積状況を示している。ℓ4は底面の灰層を覆う人為堆積、ℓ1～3は自然堆積と考えられる。遺構南部の約1/7は2号溝跡の調査の段階で、掘り過ぎたため遺存していない。

平面形は遺存部から推定すると、楕円形を呈するものと考えられる。主軸方向はN0° Eである。遺構の全体の規模は不明であるが、遺存部の規模は長径6.0m、短径5.6mを測る。検出面からの深さ1.0mを測り、底面は14号土坑堆積土で、ほぼ中央部に南北4.2m、東西1.8～2.8mの範囲で不整形の灰の範囲が確認できる。周壁は全体に緩やかに立ち上がる。

遺 物 (図52, 写真142)

本土坑からの出土遺物は、ℓ1・4から須恵器片2点、陶磁器片4点、炉底・炉壁244g、地下足袋1足、鉄製品43点が出土している。そのうち図示できたのは磁器1点である。

磁 器 52-13はℓ4から出土した染付磁器筒形の碗で、体部約1/3が遺存している。推定口径5.7cm、遺存器高5.8cmを測る。体部外面には波濤紋と四方紋が銅版で転写されている。内外面に透明釉が施されている。胎土は精緻で焼成は堅緻、白色を呈する。19世紀末から20世紀前葉に比定できる。

ま と め

出土遺物から近代以降の遺構と考えられる。底面である14号土坑上層から灰が出土しているにもかかわらず、灰の周囲には焼け面が検出されていないことから、焼却した燃え滓を捨てたと考えられる。本土坑の性格は14号土坑上層のくぼみを利用して灰捨て場として使用された後、それを埋めるために作られた廃棄された遺構と考えられるが詳細は不明である。(鈴木)

10号土坑 SK10

遺 構 (図48, 写真37)

本土坑は、調査区北側の南北に延びる丘陵先端部、AP13グリッドに位置する。遺構が構築されている付近は、標高24mほどの比較的緩やかな斜面部で、等高線に沿うように平坦部となっている。重複する遺構はなく、隣接して16号住居跡や2号性格不明遺構が存在する。検出面はLV上面であり、斜面下位は崩落や流出により遺存状態は悪い。

遺構内堆積土は、褐色系の2層に分層され、斜面上位からの流れ込みによる自然堆積層と判断される。平面形は、不整楕円形を呈し、規模は長軸1.3m、短軸1.2mである。周壁は、底面から緩やかに外傾しながら立ち上がり、遺存状態の良い北壁で約0.4cmを測る。床面は、斜面下位の南側に向かって緩傾斜しており、若干凹凸はあるがほぼ平坦である。

遺 物 (図52, 写真143)

本土坑の堆積土内からは、弥生土器片11点が出土している。細片で摩滅が著しいため図示できたのは弥生土器2点である。14・15は弥生土器の胴部破片資料で、地文に附加条を施している。

ま と め

本土坑の性格は不明であるが、所属時期は出土遺物から弥生時代中期末頃の所産と考える。(井)

11号土坑 SK11

遺 構 (図49, 写真37)

本土坑は、調査区中央部の丘陵頂部から南東側へやや下がった平坦部、BS42・43グリッドに位置する。比較的緩やかな傾斜面に立地する。重複関係は6号住居跡に壊され、本土坑が古い。長軸方向はN75°Wである。検出面は6号住居跡床面のLVである。

土坑内堆積土は4層に分層され、ℓ4がLVの再堆積土で壁際に見られる。ℓ1～3は斜面上位からの流れ込みが認められることから、自然堆積と思われる。ℓ1～3から土器細片が出土した。

平面形は南東部を欠失しているが、ほぼ楕円形を呈する。規模は上端で長径2.2m、短径2.0m、検出面からの深さは最深部で0.6mを測る。周壁は緩やかに立ち上がり、底面は、斜面に沿って南東側に傾いている。その比高差は27cmで、底面にはかなりの凹凸が見られた。

遺 物 (図52, 写真143)

本土坑の堆積土内からは、弥生土器片175点、石器84点、土師器片5点が出土している。そのう

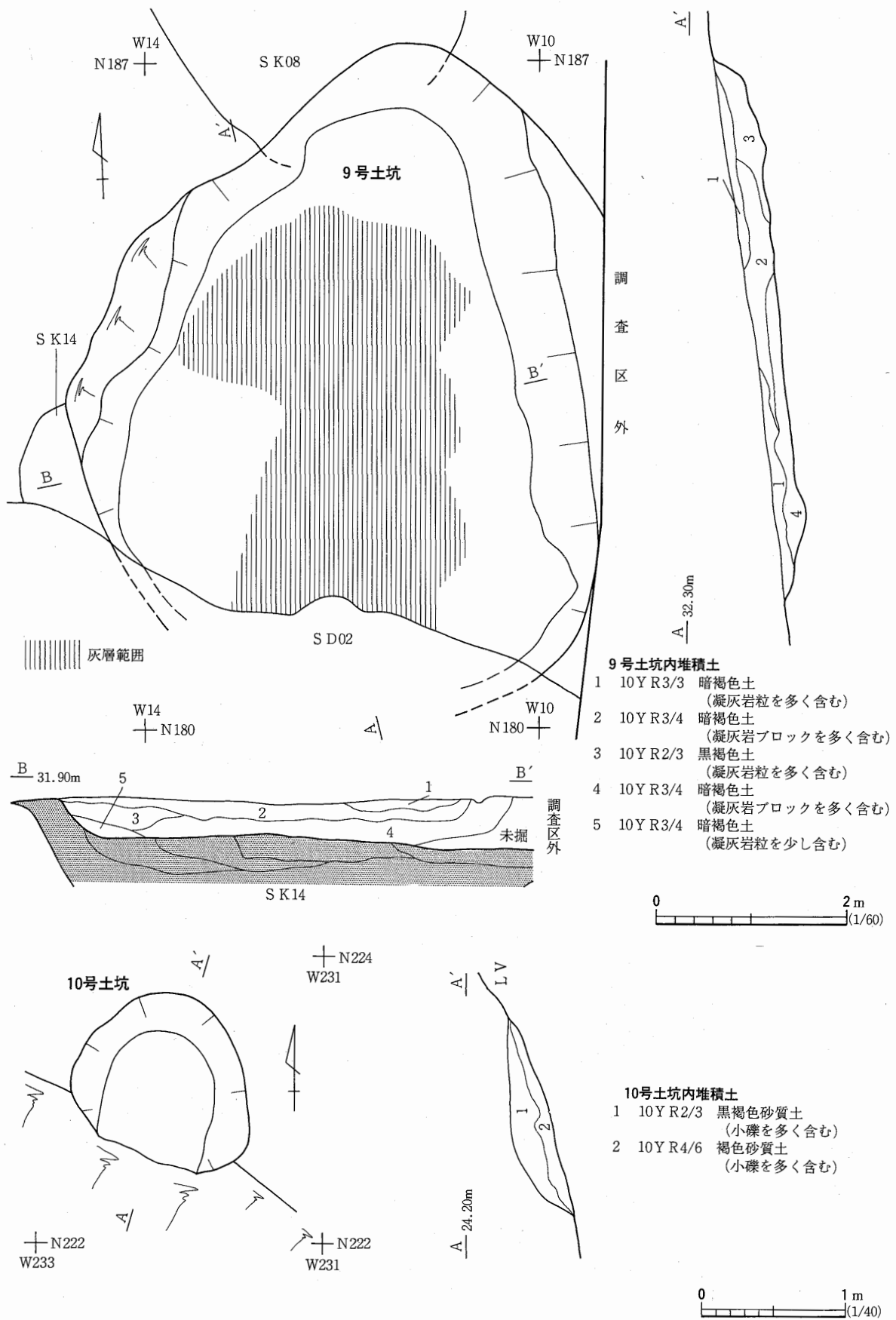


图48 9·10号土坑

ち、遺存状態の良い弥生土器5点、石器2点について図示している。

弥生土器 52-16・17は頸部資料、18は胴部、19・20は底部資料である。16・17は壺形土器の頸部資料で、束線具によって16が連続山形文、17が横位に描画しているものである。19・20の底部資料はともに二次加熱を受け摩滅している。地文には17が附加条、18・19が直前段多条、20が斜縄文を施文している。

石 器 52-21・22は石核である。21・22は両面に自然面が残る比較的小規模の素材で、21は打面を任意に転移して剥離を行っている。22は表皮の周縁部から一定方向に剥離し、柱状に縦長の剥片を採取しているものである。石質は21・22とも流紋岩である。

ま と め

本遺構の性格は不明であるが、所属時期は、堆積土中の出土遺物から判断して、重複する6号住居跡とほぼ同時期、弥生時代中期末・天神原式期と考えられる。(佐久間ふく子)

12号土坑 S K12

遺 構 (図49, 写真37)

本土坑は、調査区中央を南に延びる丘陵の東向き斜面、BY45・46グリッドに位置する。同斜面に確認された2号遺物包含層を掘り込んだ際、L VI上面で検出された。斜面上方西側に11号住居跡、南側に13号土坑が近接する。

平面形は隅丸長方形を呈し、その規模は上端で長軸1.7m、短軸1.4m、下端で長軸1.3m、短軸1.1m、深さ0.7mを測る。長軸方向は斜面の最大傾斜方向とほぼ一致する。堆積土は2層に分層され、底面から10cm程度の厚さで細かい礫を多く含んだ明黄褐色粘質土が緩く堆積する。壁は比較的急角度で立ち上がる。底面は斜面下方に向かって緩やかに傾斜する。本土坑からは遺物は出土しなかった。

ま と め

本土坑の機能した年代や性格は、出土遺物がなく不明であるが検出面や立地状況、位置関係から、11号住居跡との関連性が高く、弥生時代の所産と思われる。(内 村)

13号土坑 S K13

遺 構 (図49, 写真38)

本土坑は、調査区中央を南に延びる丘陵の東向き斜面、BZ46グリッドに位置する。同斜面に確認された2号遺物包含層を掘り込んだ際、L VI上面で検出された。斜面上方西側に11号住居跡、北側に12号土坑が近接する。斜面下半部は遺存状態が悪く、遺構の平面形は明確でない。斜面上半部から推定される本土坑の平面形は隅丸長方形を呈し、その規模は上端で長軸2.8m、短軸1.6m程である。長軸方向は斜面の傾斜方向とほぼ一致する。遺存状態のよい北壁と西壁は比較的急角度で立ち上がる。底面はほぼ17°の角度で傾斜している。底面中央に隅丸長方形を呈する掘り込みがあり、

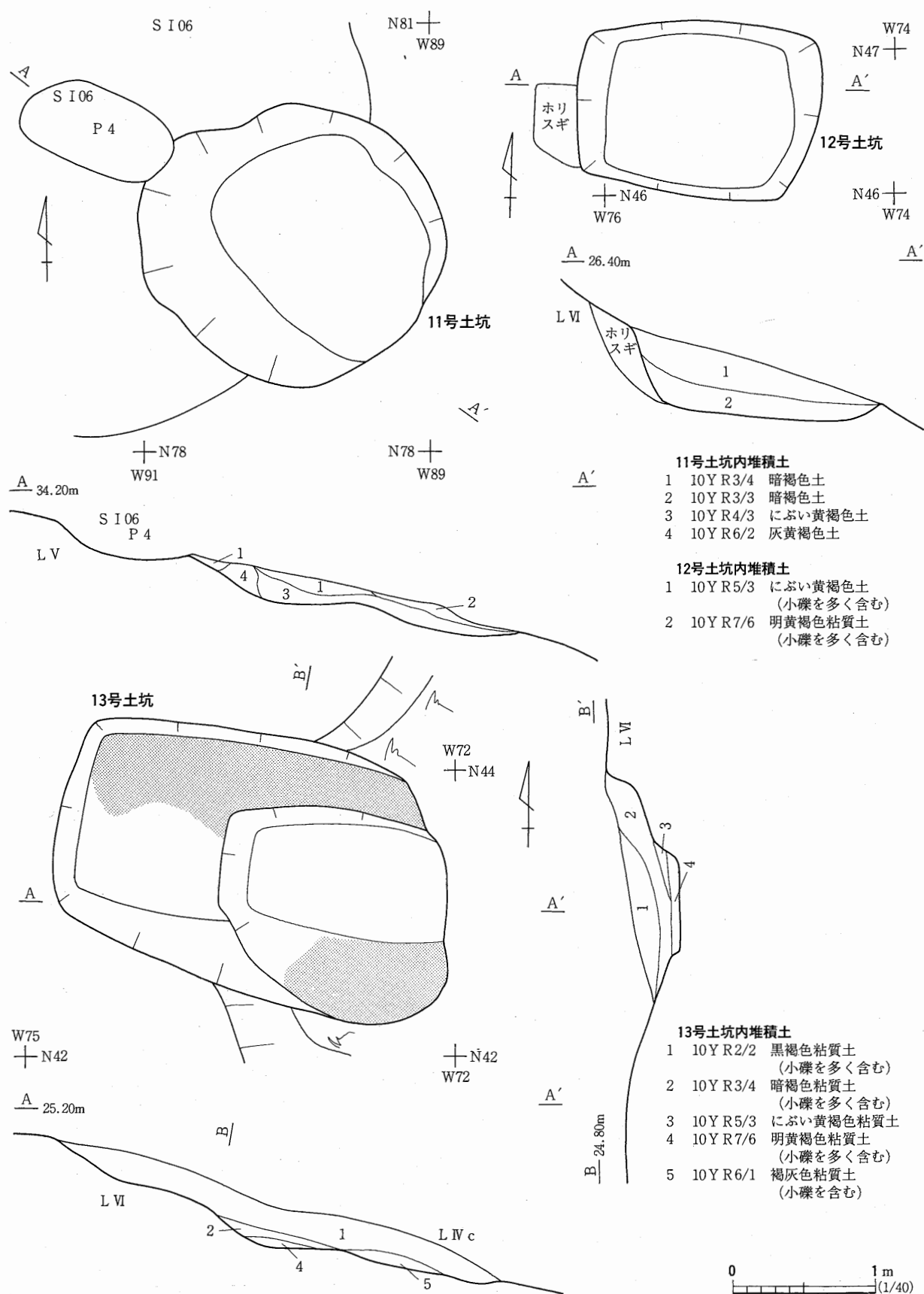


図49 11～13号土坑

この部分の底面はほぼ水平である。この掘り込み部分の斜面下半部も遺存状態は悪く、遺存規模は上端で長軸1.6m、短軸1.4m程である。また、この掘り込みの周囲には粘土層が露出している。

本土坑から遺物は出土しなかった。

ま と め

本土坑の性格は、底面に粘土層が広く見られることから、水に関係のある施設と考えられた。しかし、粘土を底面や壁に貼るなど、構築材料として積極的に用いた痕跡は見られず、水関係の施設と断定はできない。本土坑の年代は、出土遺物がなく不明であるが、検出面や立地状況、位置関係から11号住居跡との関連性が指摘され弥生時代の所産と思われる。

(内 村)

14号土坑 SK14

遺 構 (図50, 写真38)

本土坑はAW58, AX58・59グリッドに位置し、南西方向に緩やかに傾斜する斜面に立地する。本土坑の堆積土を掘り込んで作られた9号土坑、北側で8号土坑、南側で2号溝跡と重複する。9号土坑と同じく、2号溝跡調査中に本土坑の存在に気づき、トレンチを設定して掘り込み、土層断面観察をした結果、本土坑を確認した。新旧関係は2号溝跡→14号土坑→8号土坑→9号土坑の順である。検出面は9号土坑底面である。

遺構内堆積土は11層に分層される。ℓ1bは、厚さ2～25cmを測る灰層である。しまりがなく、釘、鉄滓、木の燃えかす等を含み、人為的に燃えた灰が捨てられたものと判断した。ℓ2・3は斜面上方からの流れ込みによる堆積で、ℓ4～6はレンズ状堆積を呈しており、自然堆積と考えられる。ℓ7～9は凝灰岩ブロックと粘土ブロックが多量に混じっていることから、人為堆積と考えられる。ℓ10は壁のくずれた自然堆積である。遺構南部の約1/6は2号溝跡の調査の段階で、掘り過ぎたため遺存していない。

平面形は遺存部から推定すると楕円形を呈するものと考えられるが、遺構が東側の調査区外に延びるため全体の規模は不明である。遺存する規模は長径5.8m、短径4.5mを測る。検出面から1.7mを掘り込んだが、底面を検出できず、作業上の安全を考え調査を断念し、底面は検出していない。周壁は、東から南にかけて調査段階で掘り過ぎたため、検出できたのは北東壁と西壁である。北東壁はLⅥで凹凸を持ちながら急に立ち上がり、上端から0.6m～1.3mの深さに段がみられる。西壁はLⅢで北東壁に比べ比較的緩かに立ち上がる。

遺 物 (図53, 写真142)

本土坑からの出土遺物は、須恵器片3点、陶磁器片4点、鉄製品31点、炉底・炉壁8g、羽口1点、ビール瓶1個体である。いずれも堆積土中からの出土であり、本遺構に伴う遺物ではない。そのうち図示できたのは陶磁器1点、羽口1点である。

陶磁器 53-1はℓ3から出土した染付磁器の小椀で約1/2が遺存している。推定底径3.6cm、口径8.2cm、器高4.4cmを測る。型作りで見込に向かって右側から商店名がプリントされている。遺

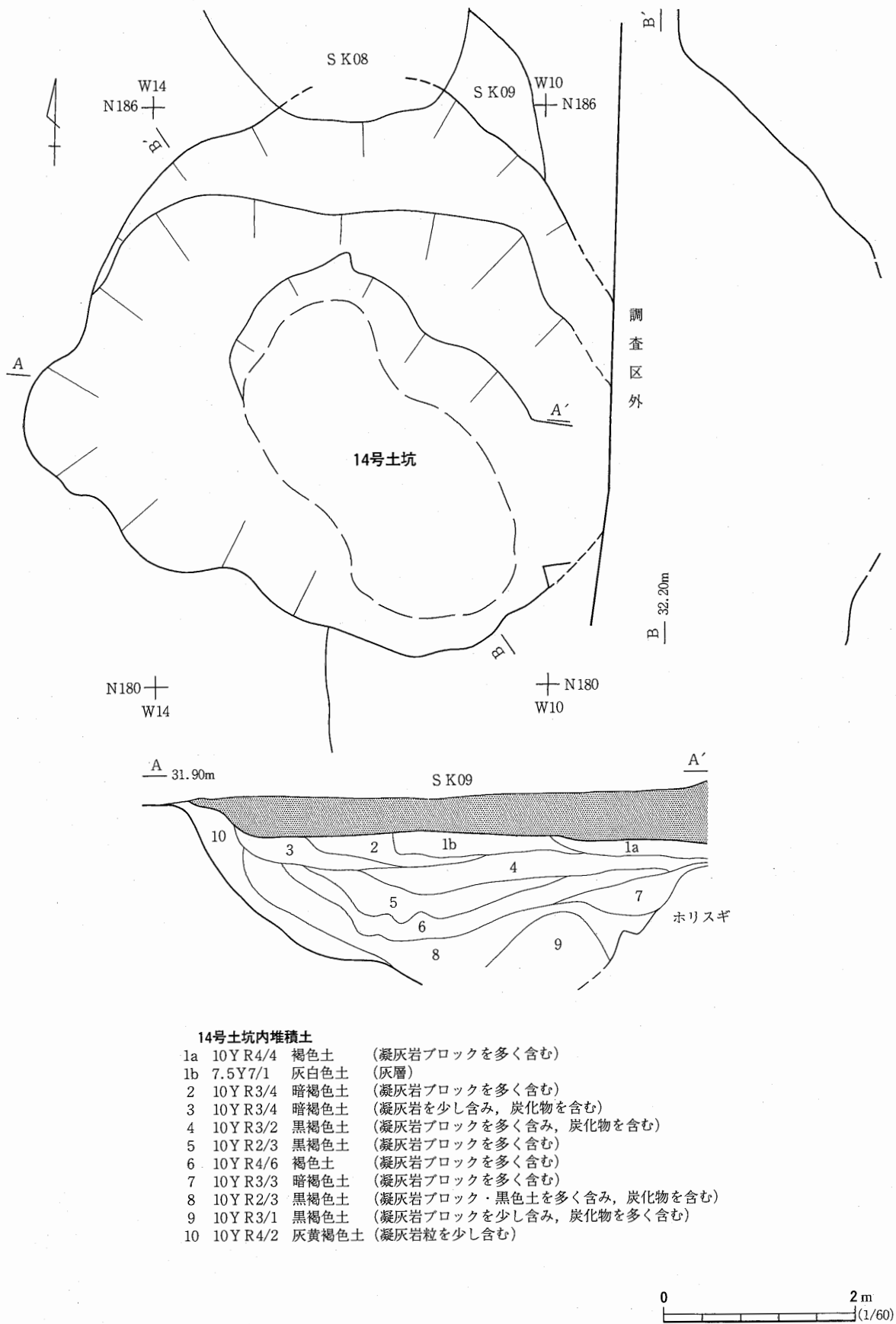


図50 14号土坑

存している範囲では中央に「高木屋商・・・」, 上部に「大浦村上・・・」, 下部に「醤油・・・」まで判読できる。高台を除いて全面に透明釉が施されている。胎土は精緻, 焼成は堅緻, 白色を呈する。工業製品であることから20世紀前半に比定される。

羽 口 53-2はℓ3から出土した羽口片である。遺存長5.4cmを測る。吸気部と先端部ともに欠損している。胎土は砂粒を多量に含み, 焼成は良く, 外面は浅黄橙色, 内面は淡橙色を呈する。外面は被熱により遺存先端部から2cm幅で浅黄橙色に変色をしている。

ま と め

本土坑の性格は完掘しておらず断定できない。しかし, 出土遺物から近代以降の遺構と推定され, 土坑の規模や, 掘り込むことのできた深さから長さ1mのボーリングステッキでも底面に届かない深さを考えると, 記録に残る近代のセメント原料の粘土採掘坑の可能性が考えられる。(鈴木)

15号土坑 S K15

遺 構 (図51, 写真38)

本土坑は調査区北側のAP16グリッドに位置する。重複する遺構はないが, 近接して北側斜面上に, 15号住居跡が存在する。遺存状態は極めて悪く, 遺構の大部分は消失している。検出面はL V上面であるが, 斜面西側に設定した土層観察用のベルトから, L IV a上面から遺構が掘り込まれていることが観察できた。

遺構内堆積土は, 黒褐色系の2層に分層される。ℓ1は, 黄褐色のL Vの再堆積土を含んだ黒褐色土で, ℓ2はℓ1より礫をやや多く含む。堆積土の状況は, 斜面上位からの流れ込みによる自然堆積の状況を呈している。遺構の西側半分は作業用の道路が設置されており, 本遺構はその道路の下側まで潜り込んでいるため, 全体の平面形は明らかにできなかったが, 東側約半分の遺存プランより, 楕円形を呈していたと考えられる。遺構の深さは, 最大88cmを測る。周壁は, 北・南壁が緩やかに立ち上がる。東は, 削平のため残存していない。西壁は, 道路下にあるため調査できなかった。底面は, 凹凸がある。遺構内から遺物は出土していない。

ま と め

本土坑は遺構の約半分が削平により消失しているため, 明確な規模は明らかにできなかった。しかし, 遺存するプランや断面形, 堆積土の状況等から, その性格は, 落とし穴状の遺構であった可能性も考えられる。所属時期は, 出土遺物がないため明確には不明であるが, 掘り込み面がL IV a上面であることから, 弥生時代までは下らないと考えられる。(佐久間芳雄)

16号土坑 S K16

遺 構 (図51, 写真38・39)

本土坑は調査区北側のAN29・A029グリッドに位置する。3・4号住居跡の検出された丘陵の北斜面下位に立地し, 検出面のL V上面で, 隅丸長方形のプランに酸化した周壁の上端が露呈した状態

で検出された。これとともに本土坑の東側65cm、斜面上方のところに長さ190cm、幅35cmの溝状プランが検出された。検出面での観察では、溝跡は土坑の長軸方向と並行して走り、堆積土が土坑と同質であることから、関連する遺構と判断し合わせて調査することとした。土坑内の堆積土は3層からなり、底面直上のℓ3には木炭片を多量に含む。平面形は隅丸長方形を呈し、検出面での規模は1.3×0.8m、検出面からの深さは遺存状態の良い東側で48cmを測る。土坑の底面はほぼ平坦で、遺存する周壁は緩やかに立ち上がり、全周して酸化状態が認められた。断ち割りによる断面観察では、酸化の厚さは壁の上部で約3cmにおよぶ。付随する溝跡の堆積土は土坑のℓ1と同質で焼土小塊・木炭片を含む。検出面からの深さは8～13cmを測り、底面はほぼ平坦で、土坑本体のような壁の酸化は認められなかった。

ま と め

本土坑は壁の酸化状態と底面上に堆積した多量の木炭片から、木炭焼成を目的とした土坑と考えられる。また、並んで検出された溝跡は、防湿の目的で斜面上方からの流水を防ぐ付属施設と推察される。なお、土坑の年代は、本遺跡の奈良・平安時代に属する住居跡と検出面までの堆積土の状況が類似することから古代にさかのぼるものと考えますが、時期を推し量る遺物の出土はなく、他の遺構との重複もないことから構築時期の詳細については不明である。

(吉 田)

17号土坑 SK17

遺 構 (図51, 写真39)

本土坑は調査区北側のAN29・A029グリッドに位置する。遺構は16号土坑と同様に丘陵の北斜面下位の緩斜面に立地し、16号土坑の東側2mに近接して検出された。検出面はLV上面で、遺構内堆積土は2層からなり、底面直上のℓ2には木炭片を多量に含む。

平面形は隅丸長方形を呈し、検出面での規模は1.1×0.8m、検出面からの深さは中心で35cmを測る。底面は中央でわずかに窪むが周壁は垂直に近く立ち上がり、ほぼ全周して酸化状態が認められた。壁の断ち割りによる観察では、酸化の厚さは約3cmにおよぶ。

ま と め

本土坑は壁の酸化状態と底面上に堆積した多量の木炭片から、16号土坑と同様に古代の木炭焼成土坑と考えられるが、構築時期の詳細は不明である。

(吉 田)

18号土坑 SK18

遺 構 (図51, 写真39)

本土坑は調査区北側奥のAM26・27グリッドに位置する。北側水田部の東側にある二つの丘陵に挟まれた開折谷の開口部付近に存在する。重複する遺構はないが、東側斜面上位には、隣接して16・17号土坑が存在する。検出面はLV上面で、焼土化した隅丸方形のプランとして検出した。

遺構内堆積土は2層に分層される。ℓ1は暗褐色土で斜面上位からの流れ込みや壁側の三角堆積

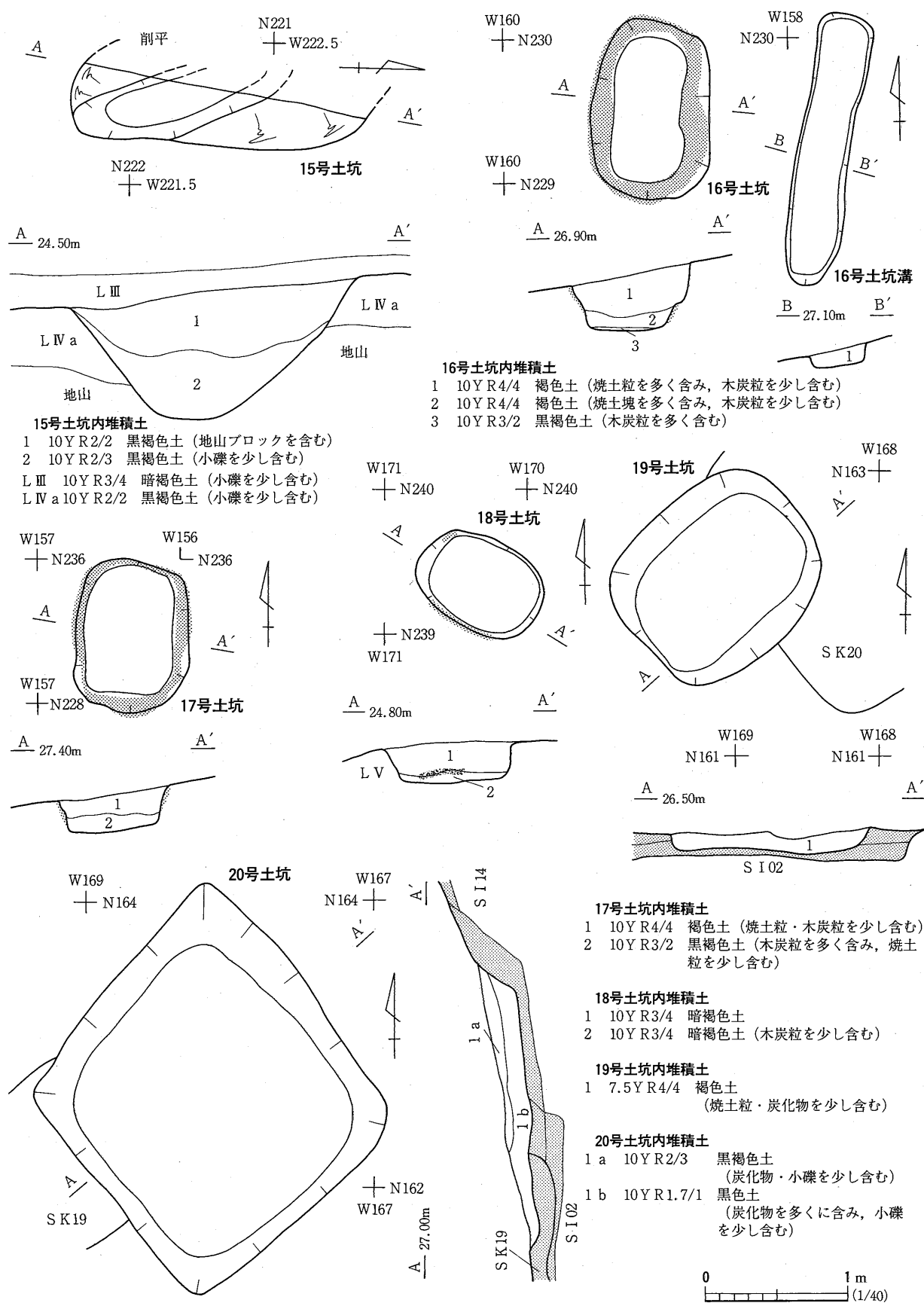


图51 15~20号土坑

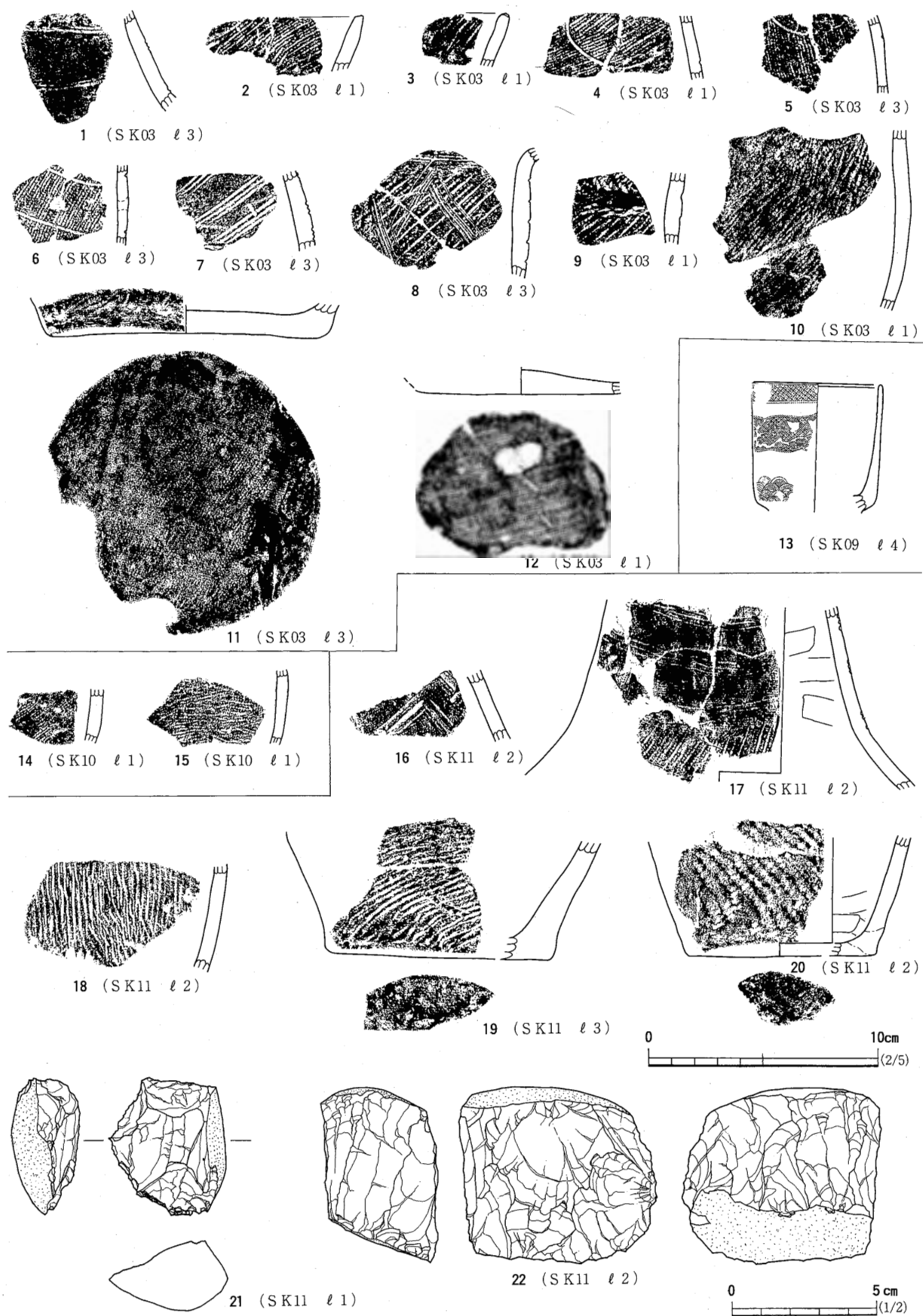


図52 3・9～11号土坑出土弥生土器・石器

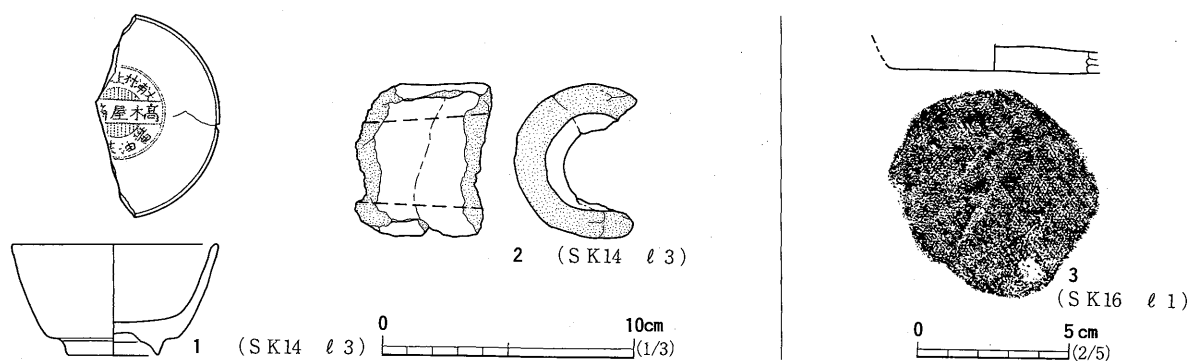


図53 14・16号土坑出土陶磁器・羽口・土師器

が認められることから、自然堆積によるものと考えられる。ℓ2は上面に木炭粒を含む暗褐色土で、底面に薄く堆積している。

平面形は長軸0.9m、短軸0.6mの隅丸長方形を呈する。主軸方向は、N61°Wを指す。検出面から底面までの深さは、中央部で最大29cmを測る。周壁は、北・東・南壁とも急に立ち上がり、西壁はやや緩やかに立ち上がる。周壁の北西コーナーと南壁には幅5cmほど、長さ12～50cmの範囲に渡って、酸化面が確認された。酸化面の厚さは3cmほどで、底面までには及んでいない。遺物はℓ2から木炭が少量(52g)出土したが、細片である。

ま と め

本土坑の明確な性格は不明であるが、周壁に熱を受けた酸化面が確認されたこと、下層(ℓ2)に木炭粒の堆積が認められたことなどから、木炭焼成土坑の可能性が高い。所属時期は、出土遺物がないため明確には特定できないが、隣接する16・17号土坑と検出面が同じことから、これらと近接した時期の可能性が考えられる。

(佐久間芳雄)

19号土坑 SK19

遺 構 (図51)

本土坑は調査区中央のBB27グリッドに位置する。西向き斜面の丘陵裾部、標高26m程の平坦部で2・14号住居跡掘り込み中に土層観察により確認した。検出面は、北東部では20号土坑の底面、南東部及び北西部では2号住居跡の覆土上面である。重複及び隣接して2・14号住居跡、20号土坑が存在し、土層観察と切り合い関係から本土坑は、2・14号住居跡より新しく、20号土坑より古い。

遺構内堆積土は1層であり、少量の小礫と微量の焼土・炭化物を含む褐色のシルト質の堆積土である。

平面形は、遺存するプランより隅丸長方形基調と判断されるが、調査段階において検出が遅れてしまい、掘り過ぎてしまった。遺存するプランは、2・14号住居跡の土層観察用として残した南東及び北部ベルト部分である。遺存規模は、長軸上端で1.4m、短軸1.2mを測る。検出面からの深さは、遺存状態の良い北部壁で24cmである。断面形は、鍋底状を呈し、周壁は緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

ま と め

本土坑の性格は不明であるが、調査区内から検出された土坑の中では中型に属するものである。機能時期は、出土遺物はないが重複関係から、奈良・平安時代に機能していたものと考えられる。

(福 島)

20号土坑 S K20

遺 構 (図51)

本土坑は調査区中央のBB27グリッドに位置する。西向き斜面の丘陵裾部、標高26m程の平坦部で2・14号住居跡掘り込み中に土層観察により確認した。検出面は北部では14号住居跡の覆土上面、南部は、2号住居跡の覆土上面である。重複及び隣接して2・14号住居跡、19号土坑、1号焼土跡が存在し、土層観察と切り合い関係から本土坑は、2・14号住居跡、19号土坑より新しく、1号焼土跡と同じ時期である。

遺構内堆積土は2層である。ℓ1aは炭化物少量と小礫を多く含む黒褐色のシルト質の堆積土で、ℓ1bは炭化物を多量に含み、小礫を少量含む黒色のシルト質の堆積土である。平面形は遺存するプランより、隅丸方形基調と判断されるが、調査段階において検出が遅れてしまい、掘り過ぎてしまった。

遺存するプランは、2・14号住居跡の土層観察用として残した北東部、南西部、及び西部のベルト部分である。遺存規模は、東西ベルトの上端で、2.0mを測る。検出面からの深さは、遺存状態の良い北東部壁で28cm、西部壁で17cmである。断面形は、鍋底状を呈し、周壁は西部は緩やかに立ち上がり北東部は急激に立ち上がる。底面はほぼ平坦であると思われる。壁面に酸化面などは確認できなかった。

ま と め

本土坑は調査区内から検出された土坑の中では大型に属するものである。その性格は明確には分らないが、内部に酸化面はないが、木炭が大量に出土したことから、木炭を貯蔵した土坑ではないかと考える。また、本土坑のすぐ南西部に1号焼土跡があり、本土坑と関連のある可能性が高い。機能時期は、時代を特定する出土遺物がないため明確には判断し得ないが、奈良・平安時代に機能していたものとする。

(福 島)

第4節 製鉄炉跡

本遺跡では、南東に開いた開析谷の緩斜面から製鉄炉跡が1基検出された。炉跡・ふいご施設などは確認できなかったが、炉本体の上屋構造に伴うものと考えられるピットや、自然流路に流れ込むように廃滓場が検出された。ここでは、1号製鉄炉跡と6号溝跡とした自然流路跡について一括して取り上げ、1号製鉄炉跡から順に述べることとする。

1号製鉄炉跡・6号溝跡 SW01・SD06

遺 構 (図54・55・56, 写真40～43)

1号製鉄炉跡は、南東に開いた開析谷の開口部付近BW48, BX48・49グリッドに位置し、標高23～24mの緩斜面上に立地する。本製鉄炉跡は6号溝跡と重複関係にある。新旧関係は、6号溝跡の埋没途中に本製鉄炉跡が構築され、製鉄炉操業後に再び6号溝跡が機能したと考えられる。近接して、南西側約6mに12号住居跡が存在する。検出面は浅黄褐色粘質土のLV上面で、自然流路に流れ込むように廃滓場が確認された。

本製鉄炉の遺物取り上げに際しては、土層観察用のベルトを境として、北東側から時計回りにa～f区の6分割をして取り上げた。廃滓場北側～中央部に位置するc・d・e区では、鉄滓の総量271.735kgのうち172.420kgの鉄滓が排滓されていた。堆積土は2層からなる。ℓ1は暗褐色土で、木炭粒・焼土粒・礫などを含み、羽口片が出土した。ℓ1は鉄滓を多量に含む鉄滓層と判断した。ℓ2は、暗褐色土で、LVのブロックを多量に含むことから、炉構築時の排出土と考えた。

廃滓場は6号溝跡と同様に、北西から南東へ大きく蛇行しながら形成されていた。主軸方向は、N18°Wを示す。検出できた廃滓場の範囲は、南北長軸6.9m、最大幅1.4m、厚さは最大で0.4mを測る。南北の比高差は89cmである。

等高線を見ると廃滓場は、北側先端部から大きく蛇行する中央部まで尾根状の高まりをもつ。廃滓場の高さは、中央部で一段下がり、斜面下方の南端部まで続く。本製鉄炉操業後に、6号溝跡が再び機能することから、大きく蛇行する廃滓場中央部～南端部は、鉄滓が廃滓場から流れ込んだ可能性が高い。

本製鉄炉跡に付設するものとして、廃滓場の北側からピットが8個検出された。P1～8は配列から、炉本体の上屋構造に伴う柱穴と判断した。平面形は東西1間、南北3間の不整長方形を呈する。四隅を結んだ全体の規模は、東側柱列・西側柱列が5.6m、北側柱列は2.4m、南側柱列は2.6mを測る。各柱穴間の寸法は1.9～2.6mである。柱穴の堆積土は、炭化物粒を含む黒色土や暗褐色土である。柱穴の規模は長径20～46cm、短径17～25cm、深さ15～70cmを測り、断面形は円筒形を呈する。

廃滓場の北側には、南北長軸2.1mの楕円形の落ち込みが見られ、酸化面が確認されている。炉本体は検出できなかったが、位置関係から落ち込み部に炉が存在したことが考えられる。

炉跡は、ピットの配置や廃滓場の位置関係から、軸線が等高線と直行する縦置き長の長方形箱型炉が存在していた可能性が高い。ふいご施設も明確には確認できなかったが、溶着滓の付着した羽口が出土した。地形や立地状況から踏みふいご設置は考えにくい、人工送風の装置があった可能性が考えられる。

6号溝跡は、BV47～49, BZ47～49で検出された自然流路である。本溝跡は大きくは2つの本流があり、それぞれ6号溝跡a・6号溝跡bとした。6号溝跡aと6号溝跡bの重複関係は認められな

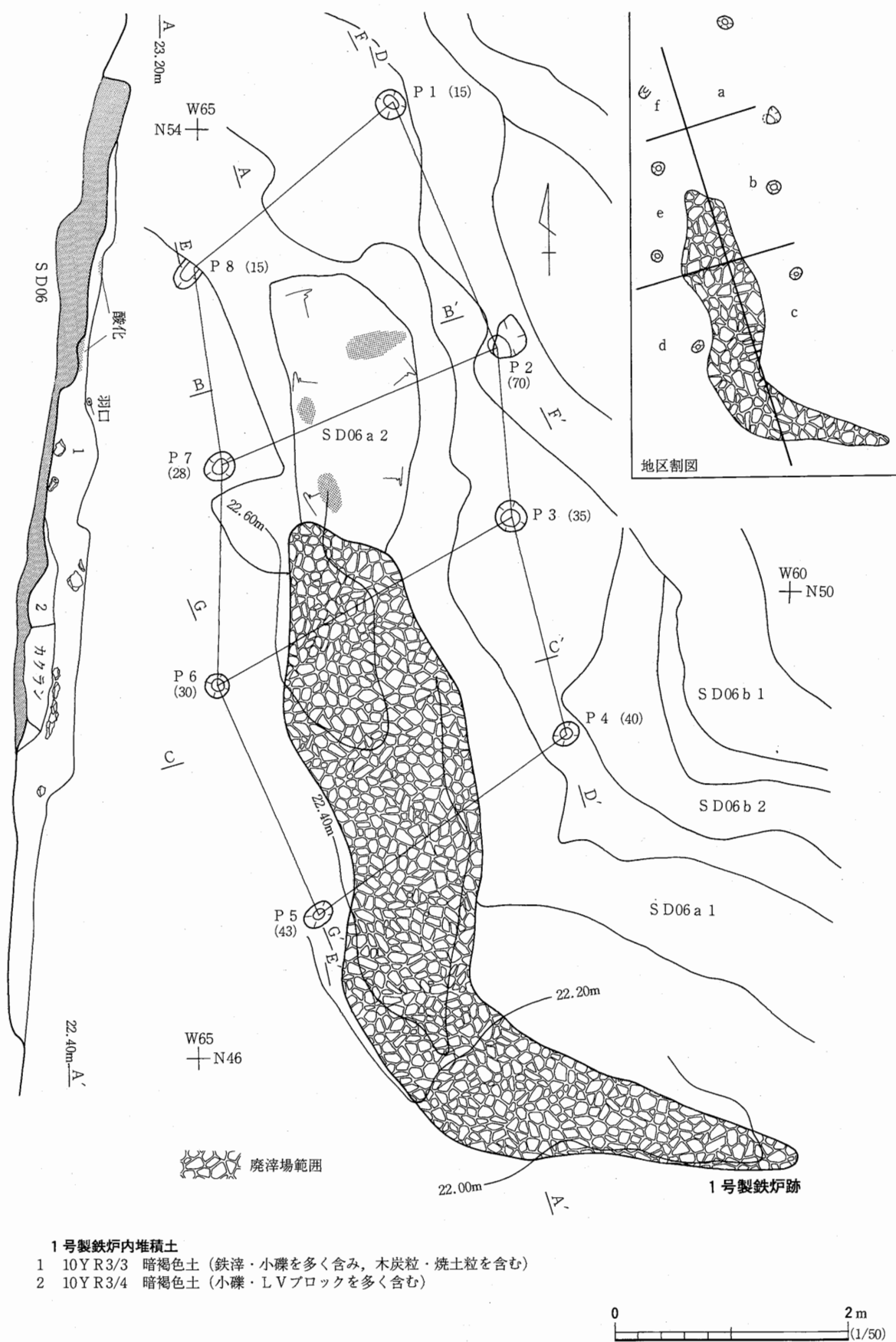


図54 1号製鉄炉跡 (1)

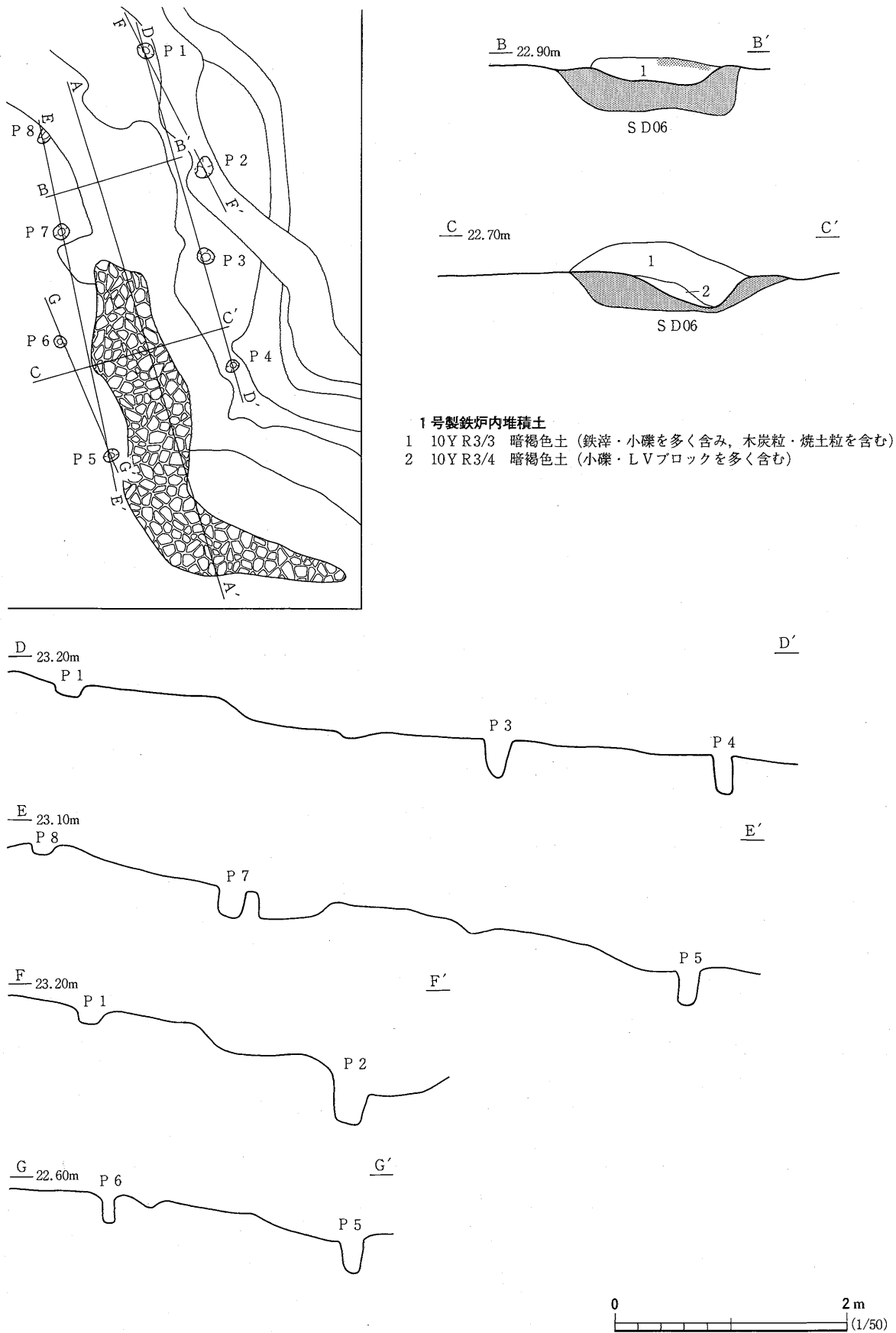


図55 1号製鉄炉跡 (2)

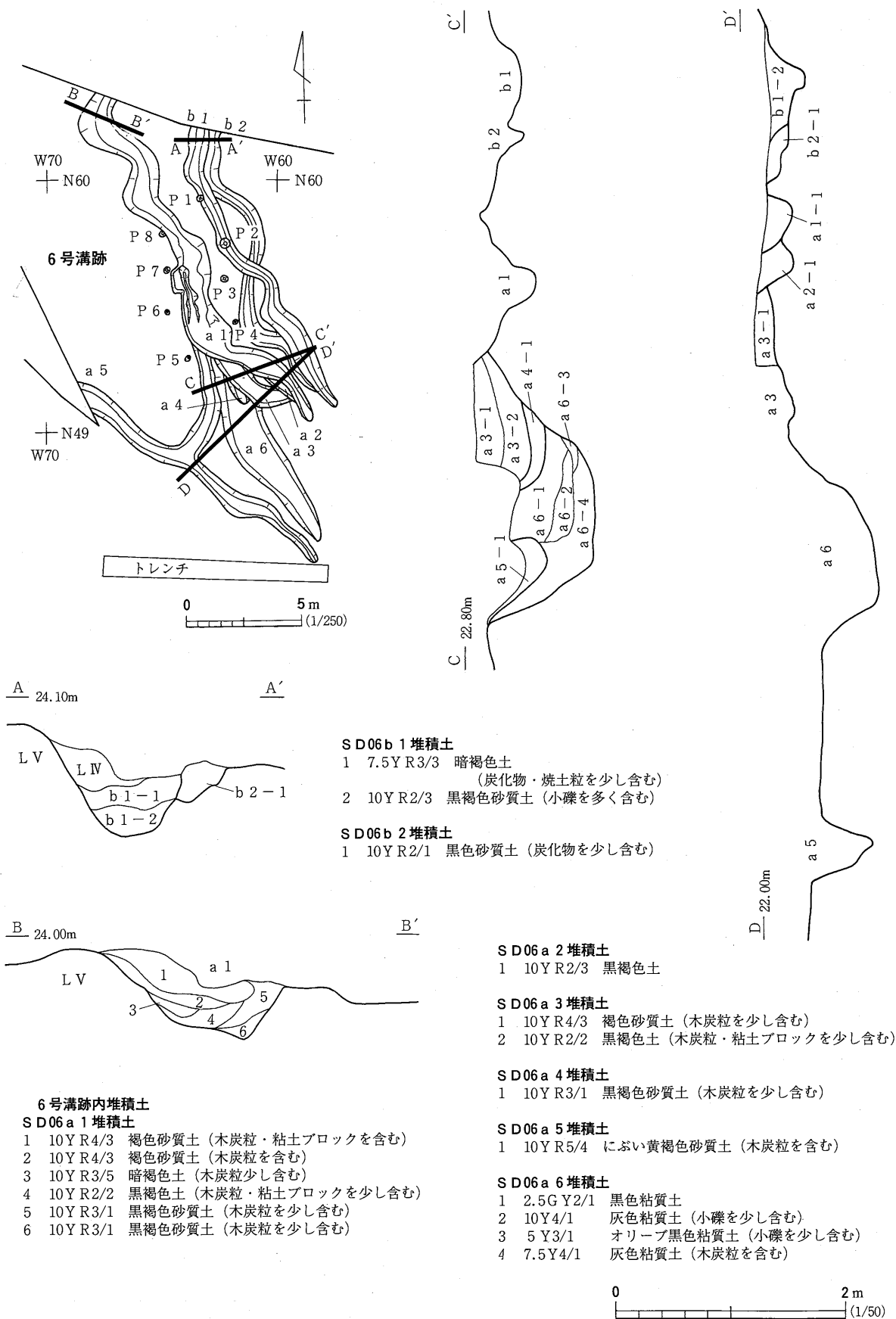


図56 6号溝跡

い。6号溝跡aは、土層の観察により6回の流路の変更があったことが確認された（流路の変更が確認されたそれぞれの溝跡をa1, a2・・・a6と称する）。

新旧関係は新しいものから、6号溝跡a1→a2→a3→a4→a6の順に機能したと考えられる。6号溝跡a5と6号溝跡a6も重複関係にある。新旧関係は新しいものから、6号溝跡a5→a6の順に機能している。1号製鉄炉跡との重複関係は、6号溝跡a3の堆積土上に1号製鉄炉が構築されていることから、1号製鉄炉跡の操業後に、6号溝跡a2, 6号溝跡a1が機能した可能性が高いものと考えられる。

6号溝跡aの東側には6号溝跡bが存在する。6号溝跡bは土層観察により2回の流路の変更があることが確認された（b1, b2と呼称する）。新旧関係は、土層の観察から6号溝跡b1→b2の順に機能している。6号溝跡b1の堆積土ℓ2は黒褐色土で、6号溝跡a2のℓ1と対応する。上述の通り6号溝跡a2は、1号製鉄炉跡の操業後に機能した可能性が高く、6号溝跡b1も6号溝跡a2と同時期に機能したと考えられる。

6号溝跡b1の北端、調査区との境に位置するBV48グリッドからは、底面上及び黒褐色土ℓ2より9.525kgの鉄滓が出土している。出土地点は、1号製鉄炉より北側約7.5mも離れた斜面上位に位置する。出土した鉄滓は、調査区外の開けた丘陵部から流れ込んだ可能性が高く、調査区外の丘陵部には、数基の製鉄炉が存在することが考えられる。

遺物（図57・58, 写真144・145・153・154）

1号製鉄炉跡出土遺物 1号製鉄炉跡から出土した遺物は、縄文土器片19点、弥生土器片39点、土師器片2点、羽口片84点、鉄滓271.735kg（炉底・炉壁64.510kg, 流出滓206.770kg, 鉄塊0.455kg）、鉄製品1点、炭化物6点である。このうち、遺存状態の良い炉壁4点、羽口9点、弥生土器3点について図示した。なお、近接する1・2号遺物包含層からも、それぞれ3.949kg・7.361kgの鉄滓が出土している。出土位置は、本製鉄炉跡付近～斜面下位に位置するBX47・48～CA48・49グリッドからが多く、本製鉄炉跡から流れ込んだ鉄滓の可能性が高い。

炉壁 57-1～4は横長の粘土ブロックを積み重ねて構築された炉壁の一部である。横方向に延びる粘土ブロックの積み上げ痕の間隔から、1～4は高さ5.2～7.0cmの粘土ブロックを積み上げて炉壁を構築したものと考えられる。炉壁の厚さは、内面が溶解され本来の厚さを窺い知ることはできない。外面の色調はにぶい黄橙色粘土で、スサの混入が見られる。内面は黒色の溶着滓が付着し、製錬作業中に中の空気が弾けてできた径1～4mm程の気泡が多く見られる。

1はa区ℓ1から出土した。長さ15.1cm, 幅13.0cm, 厚さ5.6cm, 重量0.6kgを測る。外面は粘土ブロックの積み上げ痕が1本確認できる。内面は、操業時の工具痕が縦方向に観察でき、長さ11cm, 幅2.5cmを測る。炉壁を取り壊した時の痕跡である可能性が考えられる。2はd区ℓ1から出土した。炉壁側部の一方が曲折しており炉壁のコーナー部と考えられる。長さ18.4cm, 幅14.1cm, 厚さ8.9cm, 重量1.05kgを測る。外面は、粘土ブロックの積み上げ痕が横方向に2本確認できる。内面は、褐色に錆びた突起部が確認できる。また、木炭の痕跡と考えられる凹部があり、長さ5.5

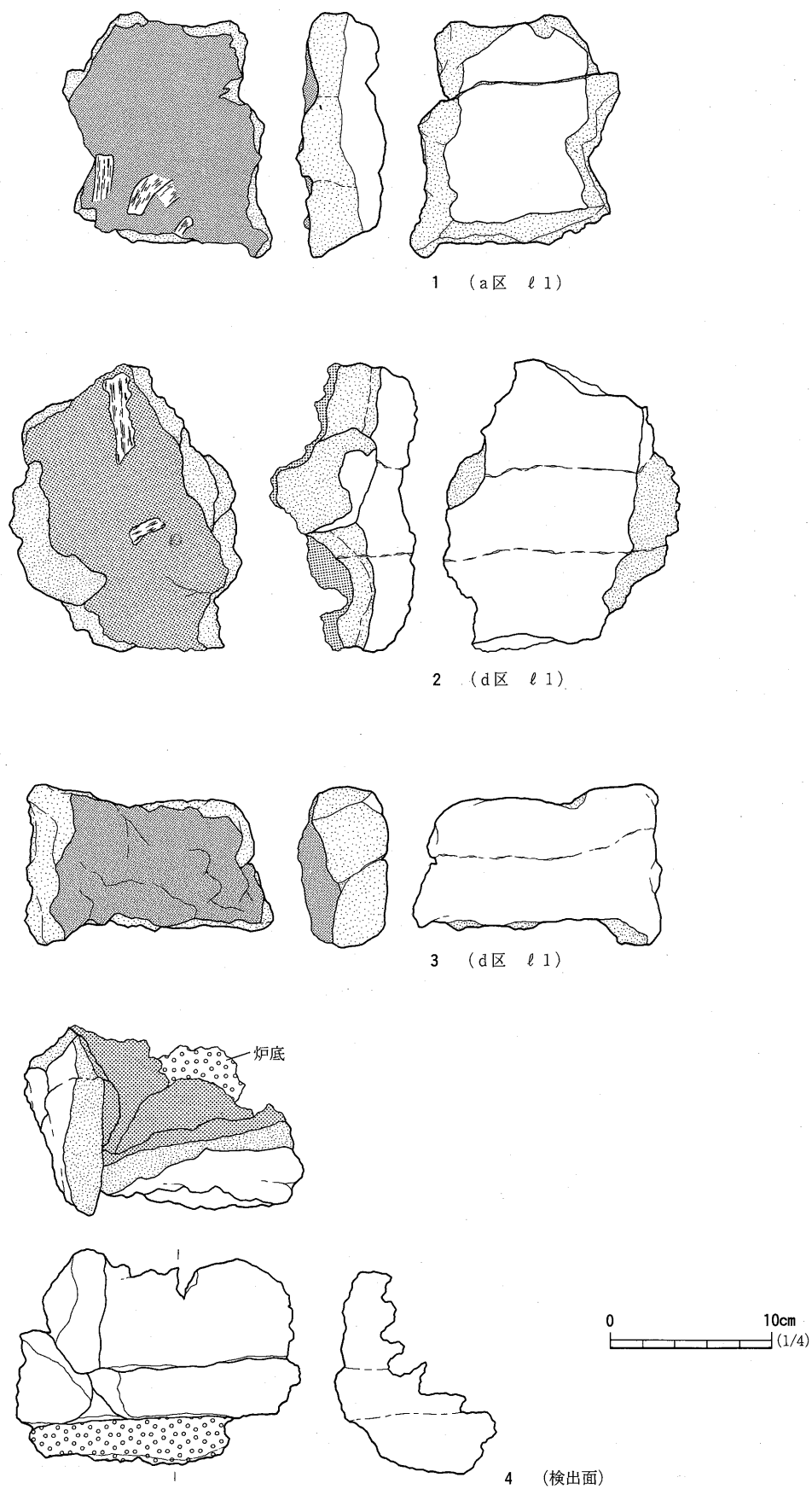


図57 1号製鉄炉跡出土炉壁

cm, 幅1.2cmを測る。破損した側面を観察すると、羽口の装着痕が確認できる。装着角度は15°を測る。断面を観察すると外側はにぶい黄橙色粘土である。内面は厚さ2.5cmにわたり溶着滓が付着し、気泡が多く見られる。外面と内面に挟まれた中間部には、厚さ2.0cmにわたり火熱を受け赤褐色を呈する酸化部が確認できる。3は長さ9.9cm, 幅15.4cm, 厚さ5.6cm, 重量0.46kgを測る。外面は粘土ブロックの積み上げ痕が横方向に1本確認できる。内面は、錆びて褐色を呈する突起部が確認できる。4は検出面から出土した。長さ15.6cm, 幅17.0cm, 厚さ9.0cm, 重量1.2kgを測る。4は粘土ブロックの端を直角に組み合わせ、コーナー部を作り出している。基底には炉底周縁部の一部が付着している。外面は粘土ブロックの積み上げ痕が横方向に1本確認できる。内面は褐色に錆びた突起部により凹凸が激しく、基底部付近は炉壁の溶解により挟られている。断面を観察すると、外側はにぶい黄橙色粘土である。内面は厚さ2.0cmに渡り溶着滓が付着し、気泡が多く見られる。外面と内面に挟まれた中間部は、厚さ2.0cmに渡り火熱を受け赤褐色を呈する酸化部が確認できる。

羽口 58-1~9はℓ1より出土した。これらはいずれも使用後に破棄されたもので、溶着滓が付着し先端部が浸蝕されているものや外面が赤褐色に変色しているものである。外面調整は指オサエ、指ナデが主体をなす。9は吸気部内面に指オサエ・指ナデの調整が見られる。断面形は内径・外径ともに吸気部でラッパ状に開口している。9は吸気部の遺存状態が良い。吸気部内径は5.3~6.8cm, 外径は6.8~7.5cmを測る。6~8は装着角度が確認できた。角度は10~15°である。

弥生土器 58-10~12がある。いずれも流れ込みによるもので、本遺構に伴うものではない。10・11は甕形土器の頸部付近の破片で、地文には斜縄文が施文されている。12は底部資料で、底部にナデ調整が施されている。

6号溝跡出土遺物 6号溝跡出土遺物は、弥生土器片359点、石器類113点、土師器片23点、須恵器片2点、鉄滓9.525kg(炉底・炉壁2.968kg, 流出滓6.557kg)、鉄製品4点、炭化物2点である。いずれも流れ込みによるもので本遺構に伴う遺物ではない。遺存状態が良く、図示できたものは弥生土器7点、石器4点、須恵器1点である。

弥生土器 59-1~7はℓ2より出土した弥生土器の破片資料である。いずれも流れ込みによるもので、本遺構に伴う遺物ではない。1が壺形土器の頸部資料、2~5が甕形土器の口縁部から頸部付近の資料、6が胴部資料、7が底部資料である。1は二本同時施工具によって縦位に文様を描画しているもので、沈線の深さは比較的深い。2~4は長頸で緩やかに外反する口頸部を有し、5は短く屈曲する器形である。5は薄手で小型の甕形土器と思われる。2・4・6は斜縄文、3・5は附加条文が施文されている。

石器 59-9~12である。9は太型蛤刃石斧の未成品と思われ、側縁部に一次調整剥離を施している。10は敲打器で、敲打による窪み痕が認められる。11・12は石核である。剥離作業面が2面以上見られ、打面を任意に転移して剥離を行っている。

須恵器 8は須恵器甕の胴部資料で、外面平行タタキ痕、内面ナデ調整が施されている。

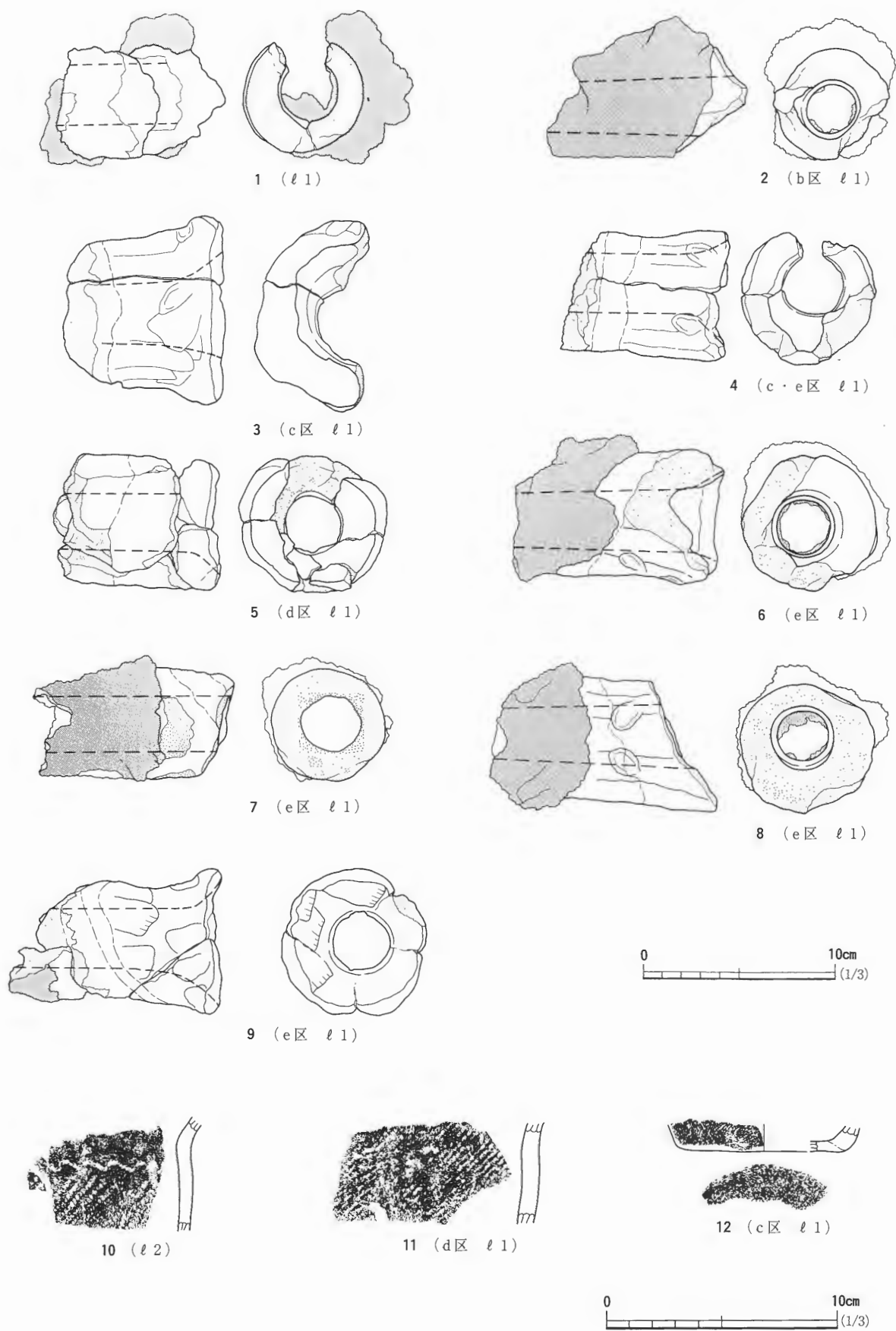


図58 1号製鉄炉跡出土羽口・弥生土器

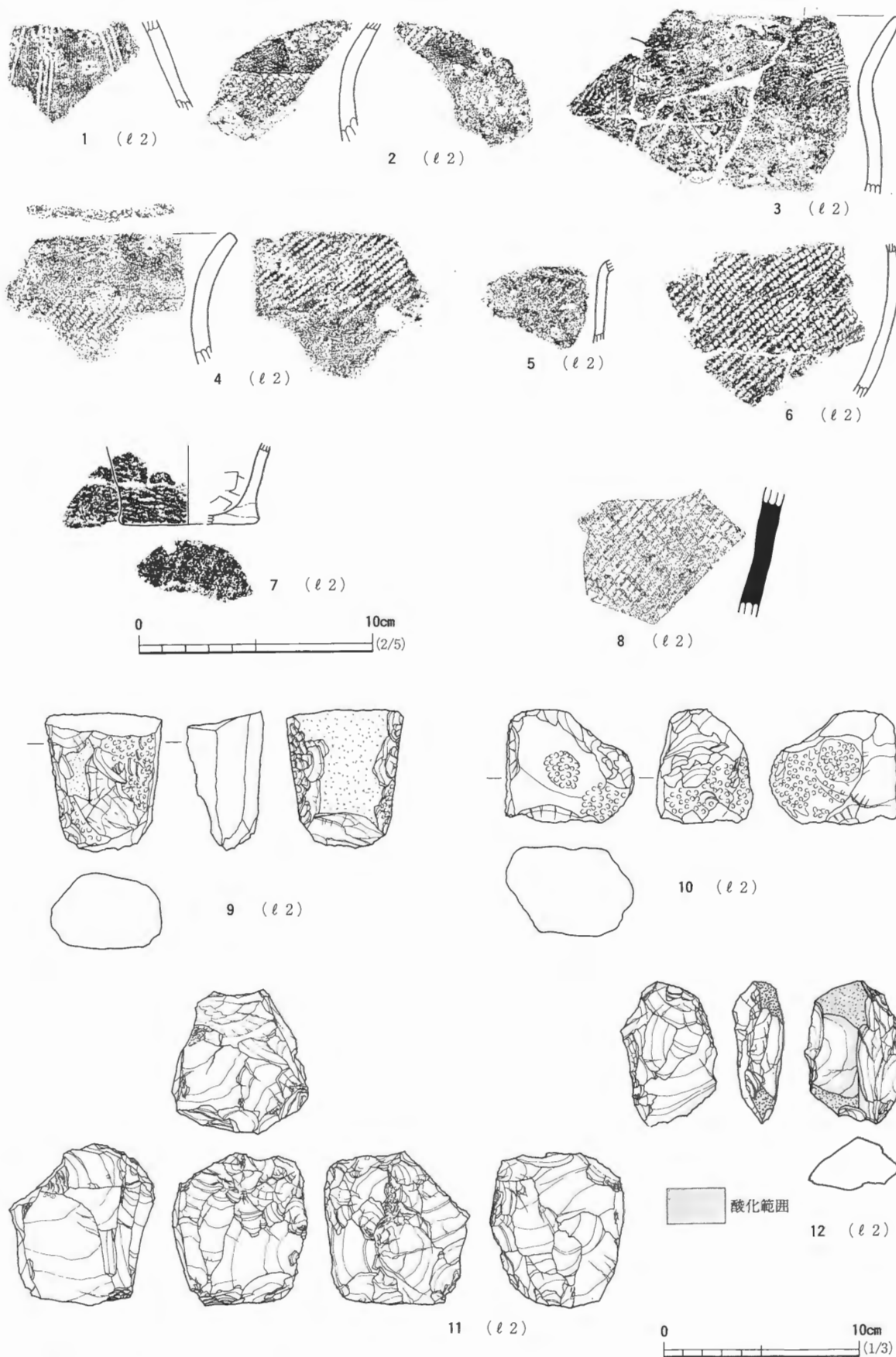


図59 6号溝跡出土弥生土器・石器

ま と め

1号製鉄炉跡は南東に開いた解析谷の緩斜面上に構築された製鉄炉で、廃滓場が6号溝跡aと重複して北西～南東に大きく蛇行して検出された。新旧関係は、新しいものから6号溝跡a 1→6号溝跡a 2→1号製鉄炉→6号溝跡a 3の順に機能している。1号製鉄炉跡に付設するものとして、東西1間、南北3間の建物跡が確認された。この建物跡は、炉本体の上屋として機能していた可能性が考えられる。炉跡は検出できなかったが、建物の配置や廃滓場の位置関係から、炉の軸線が斜面の傾斜方向と同じくする縦置き of 長方形箱型炉が存在していたことが考えられる。

ふいご施設は明確には確認できなかったが、地形や立地状況から踏みふいご以外のふいご施設が存在した可能性が考えられる。操業回数は、鉄滓の総量が少ないこと(271.735kg)、鉄滓層が単層であることを考慮すると、1回の操業しか行われていない可能性が高い。

1号製鉄炉の時期は、出土遺物がないため明確には断定し得ない。しかし、12号住居跡が8世紀後半の住居跡であること、炉の主軸が斜面の等高線と直行する縦置き of 長方形箱型炉が存在した可能性が高いこと、本製鉄炉の立地する地形は緩斜面で、踏みふいごを設置するような段差が見られないことなどを考えると、8世紀に機能したことが推測される。(酒 井)

第5節 土器埋設遺構

今回の調査で検出された土器埋設遺構は4基である。これらは、調査区中央部を北西及び南へ延びる細尾根丘陵の縁辺部から検出され、同丘陵部には該期の住居跡や包含層も所在し、密接な関係があることがわかる。

1号土器埋設遺構 SM01

遺 構 (図61, 写真44)

本遺構は調査区中央を南北へ延びる細尾根丘陵頂部の縁辺部、BM38グリッドに位置する。同丘陵部の南東側斜面中腹には、弥生時代の住居跡(S I 05～07)・土坑(S K 03・11)が検出されており、やや離れた北側丘陵部にはほぼ同一標高で2～4号土器埋設遺構が検出されている。この2～4号土器埋設遺構と本遺構は、共に地形的に類似する西向き斜面の丘陵縁辺部に構築されており、隣接した下位斜面には遺物包含層(S H 03・05)が形成されている。

検出面はLV上面であるが、斜面部に立地するため流出が著しく、埋設土器の上部はすでに消失していた。検出できたのは土器の一部が弧状に巡る暗褐色の楕円形プランと掘形であり、周囲からは同一個体の破片も出土している。遺構半截の結果、堆積土は大きく埋設土器内堆積土(ℓ 1～3)と掘形内堆積土に分層される。埋設土器内堆積土は、やや褐色系でしまりがなく、ℓ 1・2には炭化物粒、ℓ 3には有機物が認められた。

また、堆積土内からは土圧等により欠損・流入した同一個体や別個体の資料が出土しており、数



図60 土器埋設遺構位置図

個体によって構成された可能性が高い。掘形内堆積土は粘土ブロック・小礫を含むにぶい黄褐色粘質土である。土器を埋納するための掘形は、楕円形基調で、長軸48cm、短軸42cmを測る。断面形は鍋底状を呈し、検出面からの深さは22cmを測る。土器の埋納状態は明確には判断し得ないが、遺存する埋設土器や掘形プランから正立斜位であったと考えられる。

遺物 (図61, 写真146)

遺物は埋設土器(61-1)と、土器内堆積土から出土している。このうち、遺存状態が良く、ある程度復元・実測できた6点について図示した。

61-1は壺形土器の頸部付近の破片である。縦方向へのケズリ調整が施され、下位には単節斜縄文が施文されている。2・3は同一個体の壺もしくは甕の胴部上半の破片である。地文に単節斜縄文を施し、先細の工具により渦巻状の文様を1本引きで描いているものである。胎土には砂粒を多く含み、焼成はあまり良くない。内面は磨滅が著しく、調整痕は観察できなかった。

4・5は共に底部資料であるが、本遺構からは4個体分の底部片が出土している。4の胴部下端には付加条文が、5には斜縄文が施されており、底部には布圧痕が観察される。6は蓋の口縁部付近の破片である。外面には付加条文が施され、口唇部にも押捺している。内面には丁寧なナデ調整が施され、焼成は良好である。

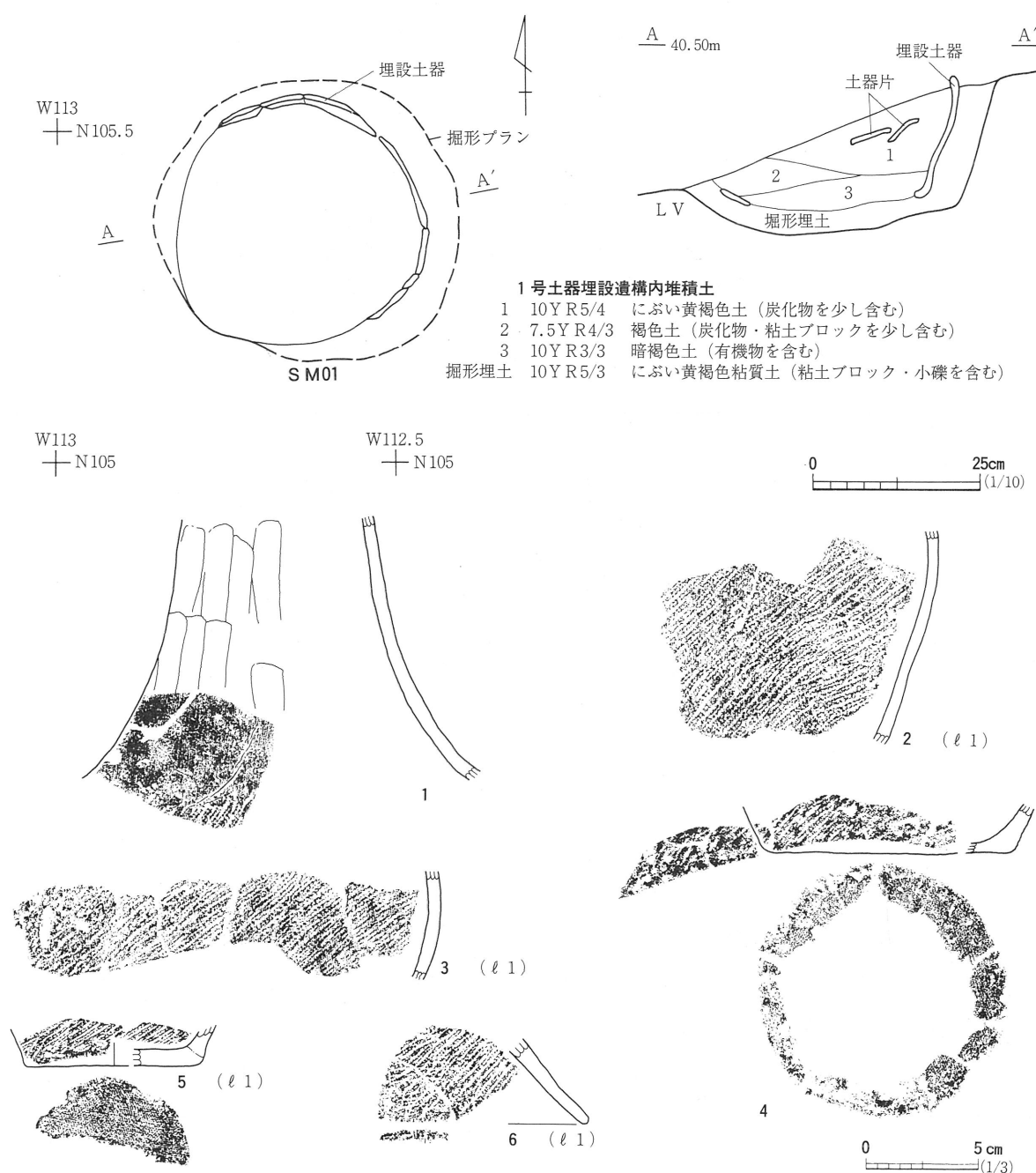


図61 1号土器埋設遺構，出土弥生土器

まとめ

本遺構の性格は明確には不明であるが，埋設された土器の状態や堆積土内から出土した別個体の資料，およびリン・カルシウム分析の結果等から，土器棺墓の可能性が高い。遺構の構築時期については，5号遺物包含層や2～4号土器埋設遺構と同時期と考えられ，埋設土器の特徴から第Ⅱ群土器と考える。

(井)

2号土器埋設遺構 SM02

遺 構 (図62, 写真45)

調査区北部のAW31グリッドに位置する。3号住居跡の検出された丘陵の肩部分に近い斜面上位に立地し、後述する3・4号土器埋設遺構とほぼ同一の地点に近接して検出された。各埋設土器との距離はそれぞれ1m, 1.5mである。確認された3基の土器埋設遺構の周囲には、東側15mの丘陵頂部で3号住居跡が検出されているほか、直下の南西斜面に3号遺物包含層が形成されている。

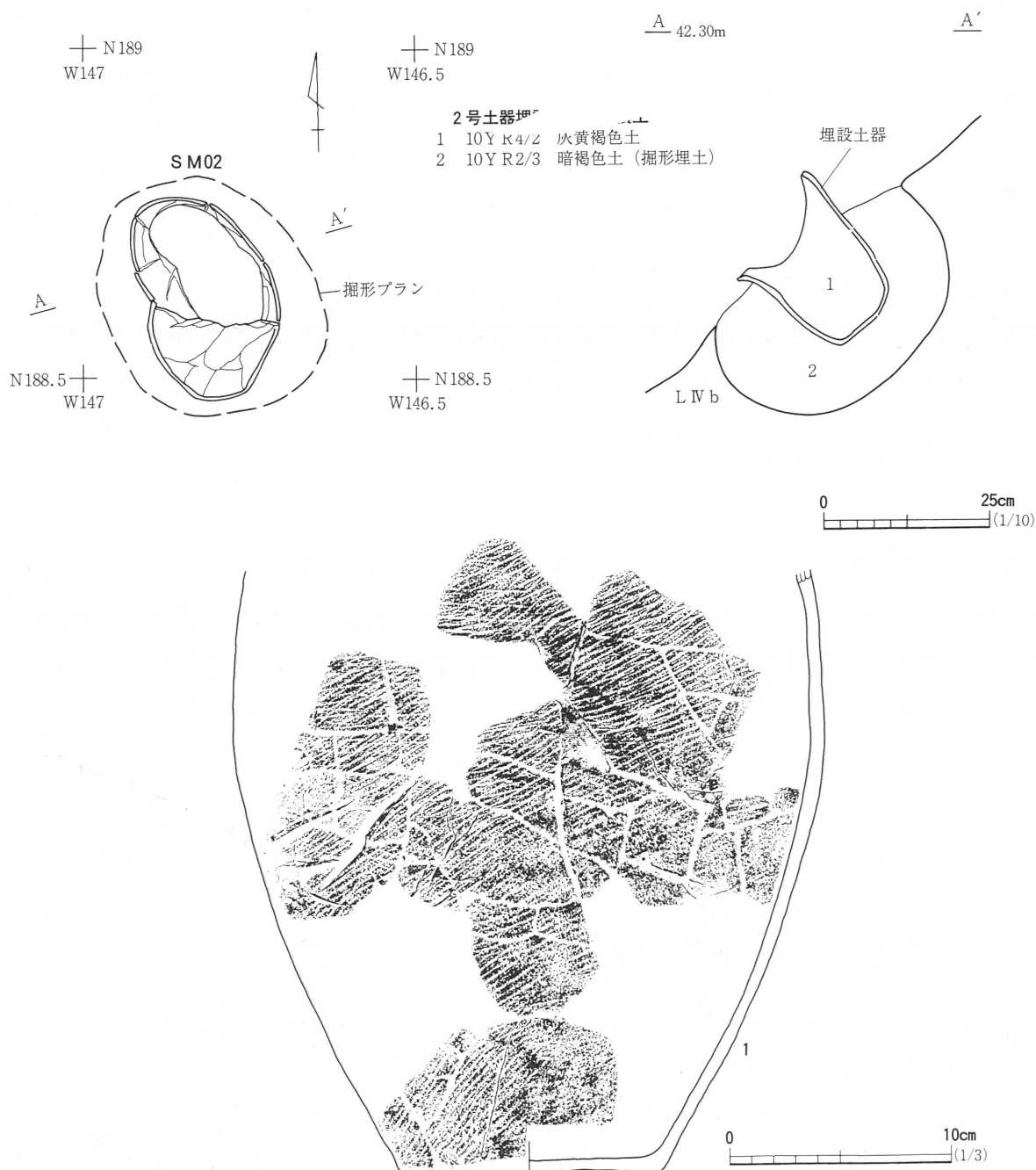


図62 2号土器埋設遺構，出土弥生土器

遺構検出面はL IV b上面で、急斜面に立地するため土砂の流出が著しく、埋設土器の上部はすでに失われており胴部下半が遺存するのみであるが、周辺から同一個体の破片も多数出土している。また、本来の掘り込み面も、さらに上位であったと考えられる。したがって、単体で埋設されていなかった可能性も考慮する必要がある。土器は正立斜位の状態で、斜面に対しては垂直に埋設されている。掘形の平面形は楕円形を呈し、検出面での規模は38×31cmを測る。埋設土器内堆積土は灰黄褐色土、掘形内堆積土は暗褐色土である。

遺 物 (図62, 写真147)

埋設土器は、壺形または甕形土器の胴部から底部にかけての資料で、口頸部は欠損する。底径が比較的大きく約12.0cmを測り、遺存高約27cmを測る。肩の張りが弱く胴部中位に最大径をもつ器形と考えられる。遺存する胴部上半から胴部下半の全面には、地文の細い附加条縄文が施文されている。

ま と め

本遺構は、付章4のリン・カルシウム分析による結果から、土器棺墓の可能性が考えられる。また、遺構の構築時期については、本遺構の埋設土器の特徴が断片的で直接時期を絞り込めないが、近接して検出された、比較的遺存状態が良く土器の特徴も明らかな3号土器埋設遺構や3号遺物包含層と同時期と推察され、第Ⅱ群土器と考える。 (吉 田)

3号土器埋設遺構 SM03

遺 構 (図63, 写真46)

調査区北部のAW31グリッドに位置する。丘陵の肩部分に近い斜面上位に立地し、2・4号土器埋設遺構と同一の地点で近接して検出された。検出面はL IV b上面で、土器は倒立の状態で埋設されており、倒置された胴部上半から口頸部が遺存し、口縁部を欠損する。掘形の平面形は不整な円形

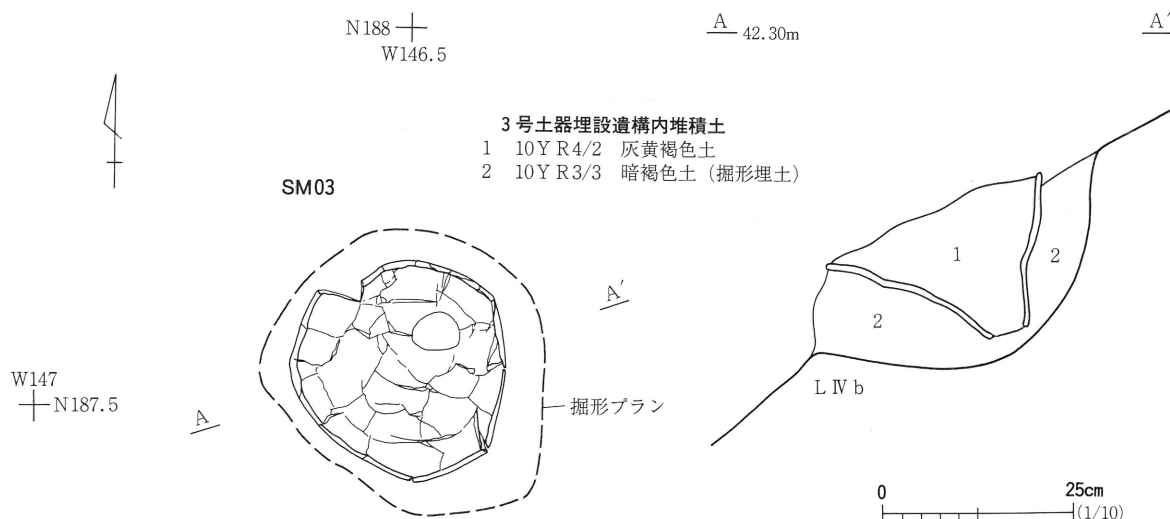


図63 3号土器埋設遺構

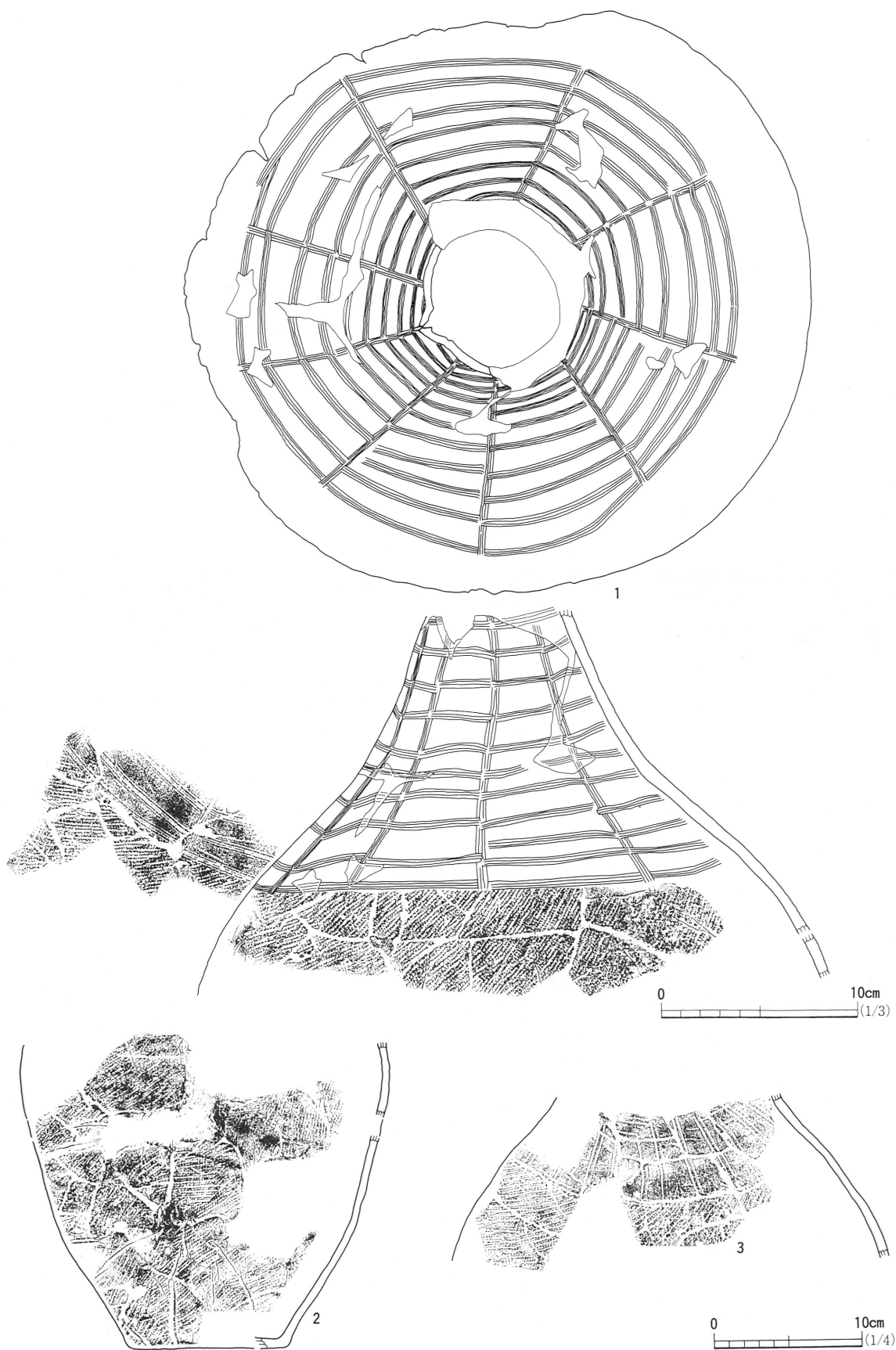


図64 3号土器埋設遺構出土弥生土器

を呈し、検出面での規模は41×35cmを測る。埋設土器内堆積土は灰黄褐色土、掘形内堆積土は暗褐色土である。埋設土器の内部からは別個体の土器片が出土していることから、埋設された土器は当初より底部を欠損し、それをふさぐ蓋として既述の土器片が使用された可能性が考えられる。

遺 物 (図64, 写真148・149)

64-1は埋設土器で壺形土器であり、長頸の直線的な器形である。口縁部と胴部を欠損している。頸部から胴部上半と胴部下半の間で文様が区画され、頸部から胴部上半には地文がなく、4本の束線具によって肋骨文が描かれる。胴部には撚糸文が施される。3は埋設土器の堆積土から出土した壺形土器で、頸部下半から胴部上半が遺存している。頸部には束線具による格子文を施し、胴部には撚糸文が施されている。2は埋設土器内の堆積土から出土した胴部下半から底部にかけての資料である。胴部には撚糸文が施されている。

ま と め

本遺構の時期は、埋設土器の特徴から第Ⅱ群土器と考えられ、弥生時代中期末と考える。

(吉 田)

4号土器埋設遺構 SM04

遺 構 (図65, 写真47)

調査区北部のAW31グリッドに位置する。丘陵の肩部分に近い斜面上位に立地し、2・3号土器埋

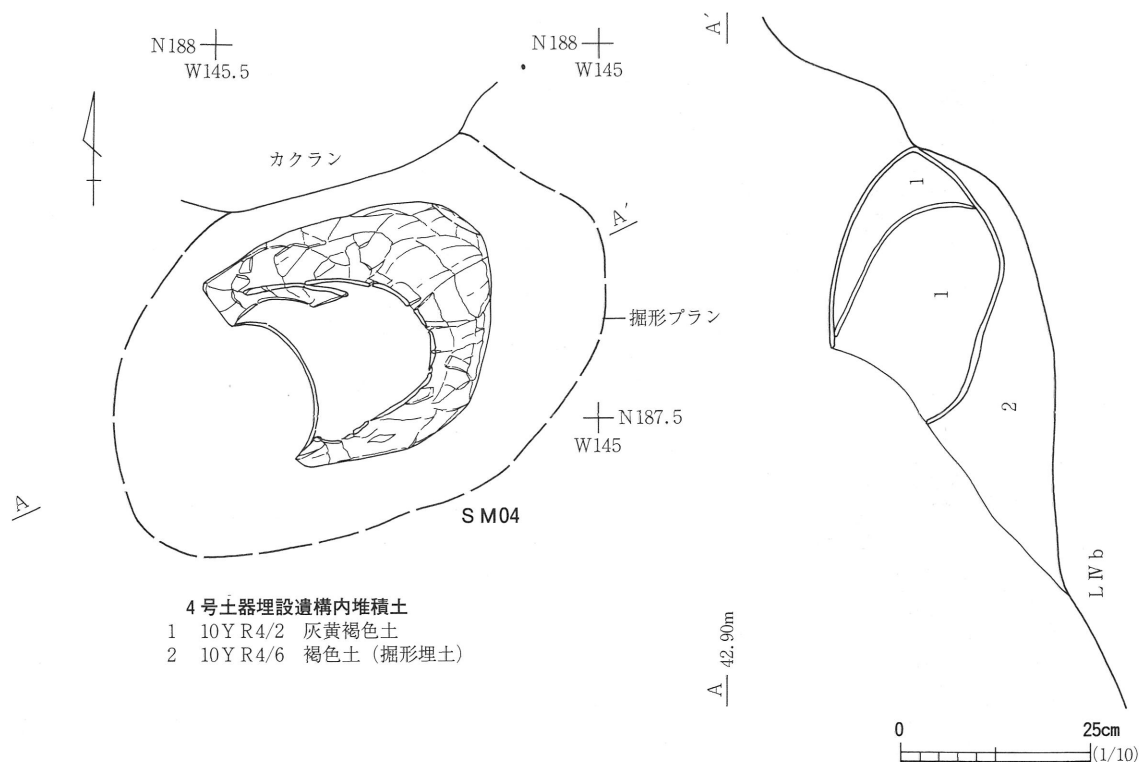


図65 4号土器埋設遺構

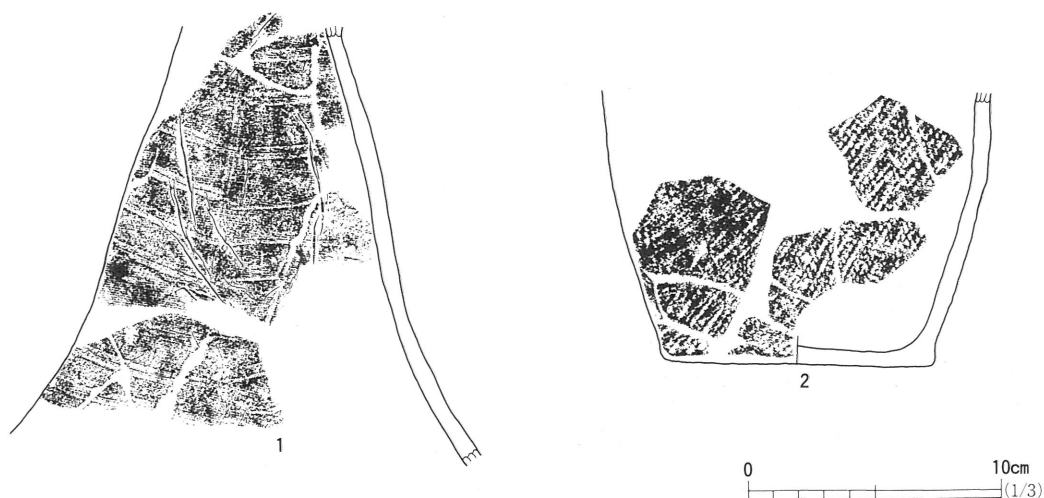


図66 4号土器埋設遺構出土弥生土器

設遺構に近接して検出された。他の2基と同様にLⅣb上面で検出されたが、木根による攪乱のため遺存状態が悪く、遺構の北半は本来の埋設状態をとどめていない。土器は正立斜位の状態で埋設されたものと推察され、斜面に対して垂直に埋設されたものと判断できる。

現況では胴部下半から底部が遺存するのみである。遺存状態が悪く、一部しか復元できなかったが、明らかに別個体の土器が2個体以上出土しており、組み合わせて埋設された可能性が高い。埋設土器内堆積土は灰黄褐色土で、掘形内堆積土は褐色土である。掘形の平面形は楕円形を呈し、検出面での規模は71×48cmと他の2基と比較して大きめである。

遺 物 (図66, 写真150)

埋設土器は遺存状態が悪く、ようやく復元できた部分のみ図示した。66-1は埋設土器内堆積土から出土した壺形土器の頸部資料で、束線具により格子文が描かれている。2は埋設土器で甕形土器と推定され、胴部下半から底部のみ遺存している。胴部には撚糸文が施されている。

ま と め

出土土器は特徴から第Ⅱ群土器と考えられ、本遺構の時期は弥生時代中期末と考える。(吉 田)

第6節 溝 跡

今回の調査で検出された溝跡は16条である。各溝跡は調査区北側の丘陵裾部の水田部付近(SD05・10~16)や、複雑に入り組んだ沢部の開口部付近(SD01・02・04・06・09)から検出されており、性格的に異なる3・7・8号溝跡は丘陵頂部で確認されている。これらの溝跡の位置図を図67に示したが、各々重複が認められた5・10~16号溝跡は第8節水田跡、6号溝跡は第4節製鉄炉跡の項で合わせて説明することとし、ここでは1~4・7~9号溝跡について述べる。

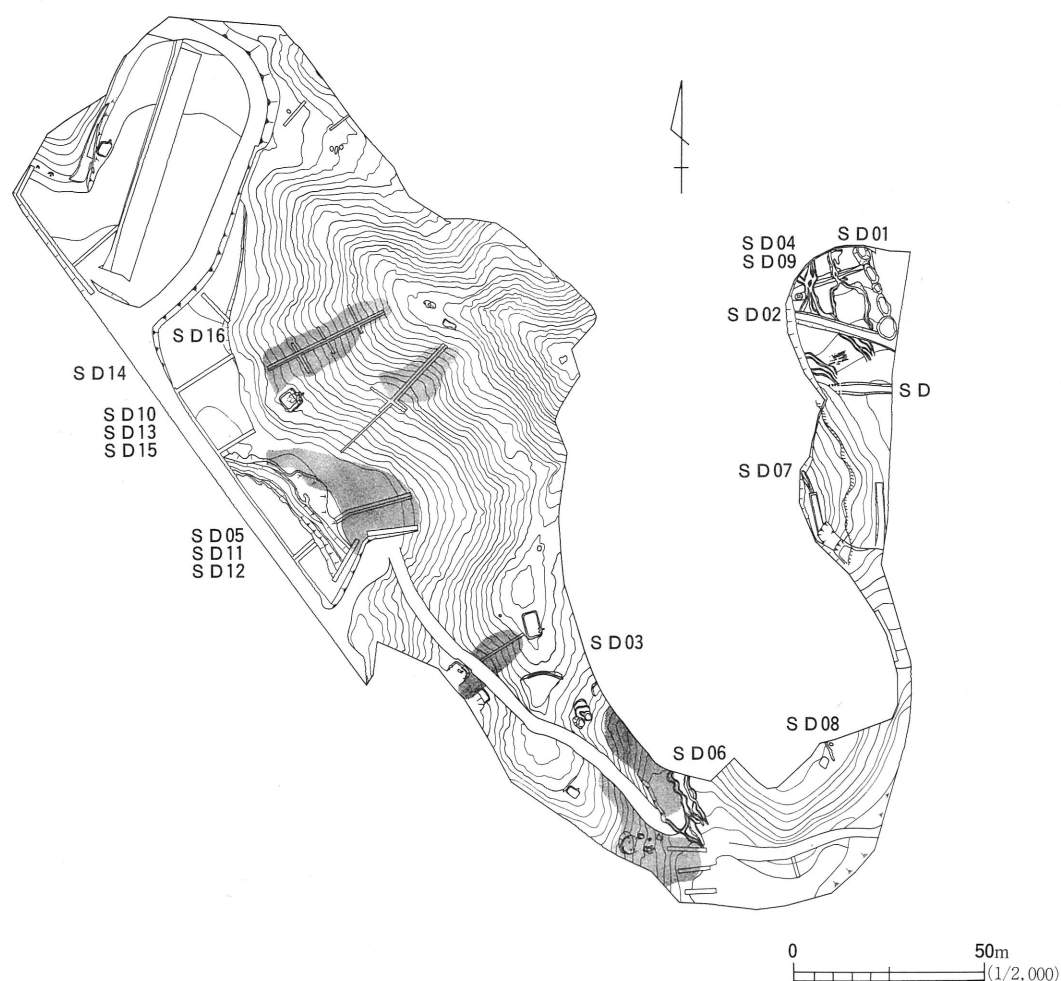


図67 溝跡位置図

1号溝跡 SD01

遺 構 (図68, 写真48)

本遺構はAT55・56, AU55・56, AV55～57, AW55・57, AX57グリッドに位置し、北から南に向け緩やかに傾斜する斜面に立地する。検出面はLⅢ上面である。主軸方向N17.5° Wで斜面に沿うように南に走り、AU56グリッドで東と西の2方向に分岐する。南西方向に分かれた溝は、土層観察用基本ベルトの西側には検出できなかった。

東南方向の溝は、AV57グリッドでN16° Wに主軸を取り緩やかに蛇行しながら南に走る。西側4mに4号溝跡が平行するように走っている。AX57グリッドで2号溝跡と重複し、本遺構が新しい。遺構内堆積土は10層に分層される。ℓ1～6はLⅢを基調とする褐色、ℓ7～10はLⅣを基調とする黒褐色の堆積土である。南側の下流で最下層となるℓ8の下層に、流水の痕跡と考えられる凝灰岩ブロックが多量に堆積しており、また土層観察から自然堆積と考えられる。

北側が調査区外に延びるので全容は分らない。調査区内の本溝跡の規模は、全長26.6m、開口部

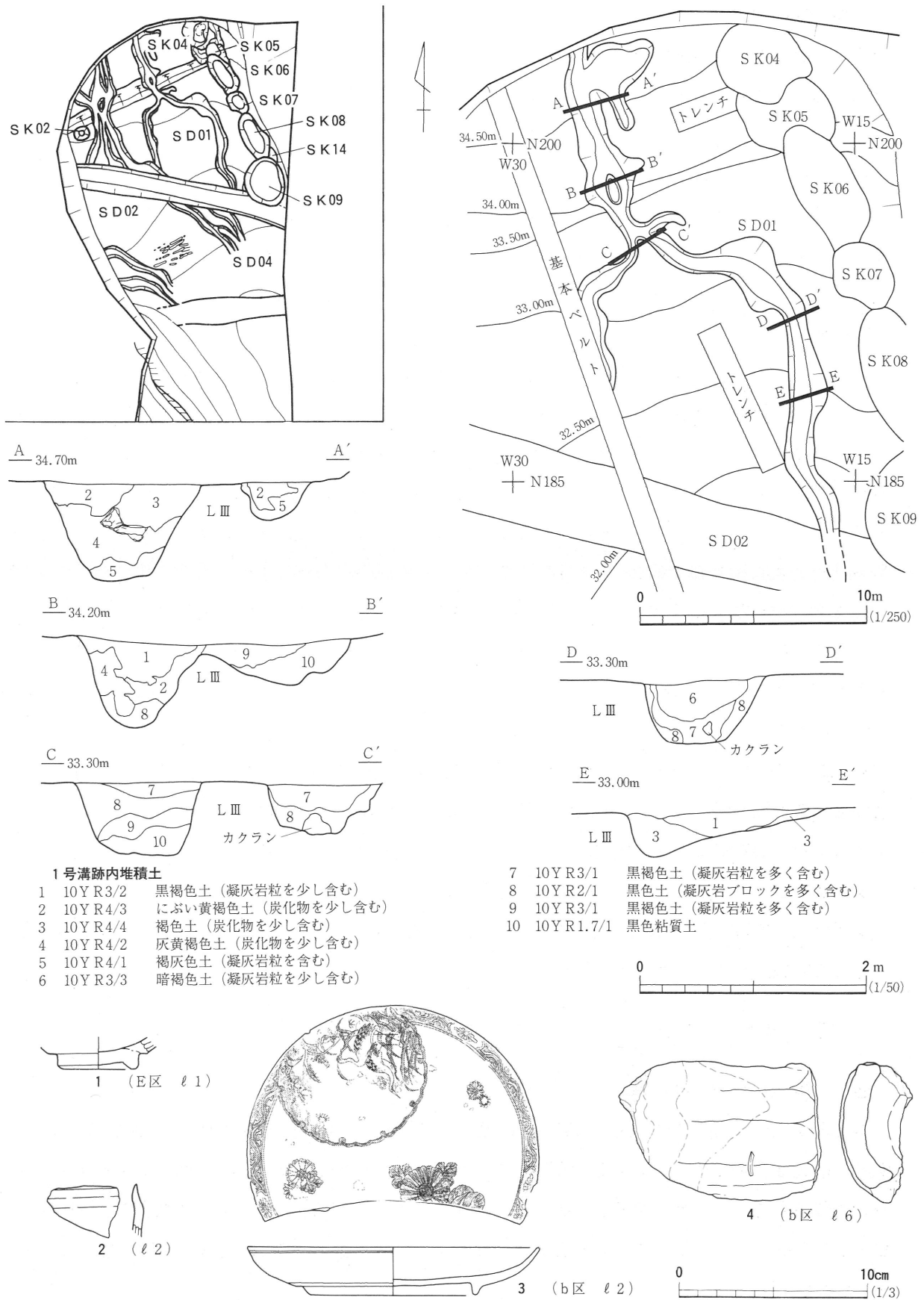


図68 1号溝跡, 出土陶磁器・羽口

最大幅4.5mを測る。検出面からの深さは北側上流で90cm程度と深く、南側下流で20cm程度と浅くなる。上流と下流の検出面の比高差は2.75mを測る。周壁は北側上流部分でほぼ垂直に近い角度で壁面に凹凸を持ちながら立ち上がる。南側の下流にくると壁面に凹凸も少なくなり緩やかに立ち上がる。

遺 物 (図68, 写真153)

本遺構からの出土遺物は、弥生土器片41点、土師器片18点、須恵器片32点、陶磁器片30点、羽口片1点、炉底・炉壁80g、鉄滓12gが出土している。いずれも堆積土中からの出土遺物で、本遺構に伴うものではない。そのうち、図示できたものは陶磁器3点、羽口1点である。

陶磁器 68-1はℓ1から出土した天目茶碗の底部である。底径4.2cm、遺存器高1.7cmを測る。削り出し高台で、底部外面はアーチ型に削り出されている。内面には漆黒色の天目釉が施釉されている。胎土は精良で焼成も良く灰白色を呈する。瀬戸の製品で15世紀代に比定される。2はℓ2から出土した古瀬戸灰釉平碗の口縁部小片である。遺存器高2.8cmを測る。やや屈曲して外反する口縁部に特徴があり、内外面に黄緑色を呈する灰釉が施釉されている。胎土は良く、焼成も良く灰白色を呈する。瀬戸の製品で、15世紀に比定される。器面に火熱した痕跡が認められる。3はℓ2から出土した染付磁器皿で約2/3が遺存している。三角形の高台が付され、内湾気味に緩く口縁部に至る器形である。口径15.6cm、底径9.0cm、器高2.6cmを測る。内面には草花鳥紋がプリントによって染紋されている。外面には圈線が巡る。胎土は精緻で焼成は堅緻、白色を呈する。口縁部にやや歪みがあり、内面には窯クズが付着していることから、本来はハネモノであった可能性が高い。20世紀前半に比定する。

羽 口 68-4はℓ6から出土した羽口片である。遺存長10.7cmを測る。先端部は破損しており吸気部が広がる形態である。器壁が厚く外面はヘラケズリが施され、被熱をうけ変色した部分がみられる。胎土は砂粒を含み、焼成は良くなく、明褐色を呈する。

ま と め

本溝跡は立地状況と遺構形態、堆積状況から、自然流路と考えられる。検出面や出土遺物などから近代まで機能していたと考えられる。

(鈴木)

2号溝跡 S D02

遺 構 (図69, 写真49)

本遺構はAW53～55、AX54～59、AX57・58グリッドに位置し、南向きの緩やかな斜面に立地する。検出面はLⅢ上面である。1・4号溝跡、9・14号土坑と重複し、いずれの遺構よりも本遺構が古い。遺構内堆積土は9層に分層される。ℓ2・4・5・6には凝灰岩ブロックが多量に含まれ、ℓ6～8の下部はグライ化によって変色している。ℓ8は砂質土の堆積で、凝灰岩や炭化物の混入がみられない。

ℓ1から4までは斜面の傾斜に反して斜面下方からの堆積をしており、ℓ5～7は斜面上位から

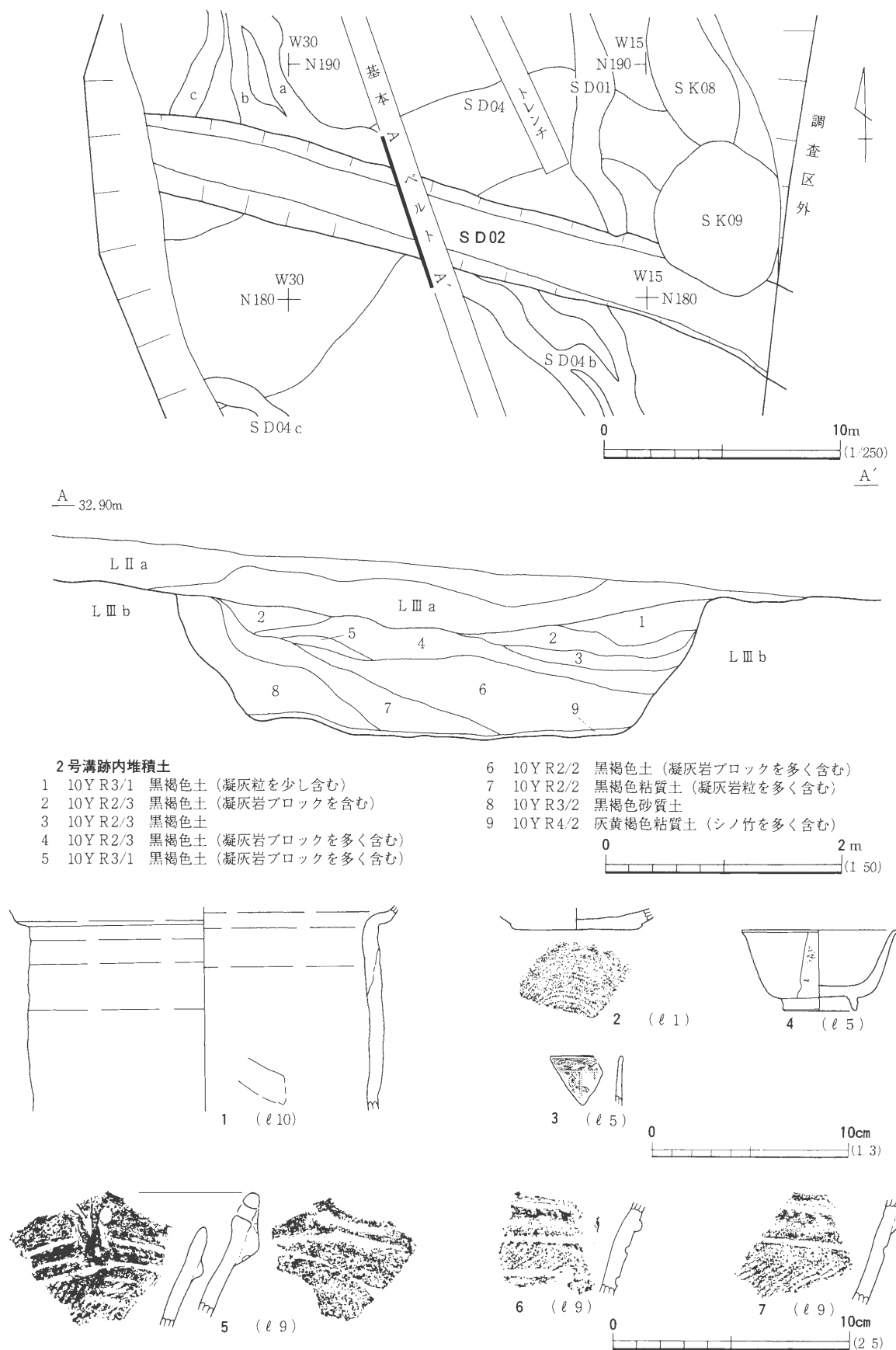


図69 2号溝跡, 出土縄文土器・土師器・陶磁器

流れ込んでいる堆積状態を呈している。含まれている凝灰岩ブロックが大きく、遺構周辺にはこのような凝灰岩ブロックが見られず、遺構内堆積土のみで見られることから、人為堆積と考えられる。

検出面から20～30cmの深さまでは硬く、唐鍬やスコップがなかなか入らず、雨が降ると表面がぬかるみ滑りやすくなる土だった。ℓ 1・2からの遺物出土が多く弥生土器・土師器・陶磁器が出土したが、小片が多かった。ℓ 4～6には人頭大の凝灰岩ブロックが混じるようになり、スコップ・唐鍬でもなかなか掘り込めなかった。ℓ 4・5から遺物の出土はなかった。ℓ 6・7上部は湧水のため土もだいたい柔らかくなり掘りやすくなってきたが、土が湿っぽくスコップにくっつき剥がれにくくなった。

ℓ 6・7中間部まで掘り下げたところから湧水し始め、掘り下げるにしたがい湧水の量が増え、排水作業を行いながらの掘り込みとなった。ℓ 6～8の下部はとても柔らかく楽に掘ることができたが、粘性がありスコップから剥がれないのと湧水で泥田のようになった。ℓ 7から遺物は出土せず、ℓ 8から陶磁器、弥生土器、須恵器が出土した。湧水によりℓ 6・7がぬかるみ状態になり土質を判断できなかったため、トレンチを設定し掘り込んだところℓ 6～8の下層からシノダケと木の枝を多量に含んだℓ 9が確認され、ℓ 9下層を底面と判断した。

シノダケ・木の枝は切り口を揃え、北西から東南への溝の流れに沿って隙間なく敷き詰められていた。シノダケ・木の枝のためスコップが入らず、剥がすような感じで掘り込みを進めた。ℓ 9を除去したところでオリーブ灰褐色の粘土が広がり、壁面と粘土の境から湧水しており、暗渠排水のためシノダケと木の枝は底面に敷かれたものと考えた。

本遺構は主軸方向N73° Wで、北西から東南に直線的に延びる。本遺構の東西両端で調査区外に延びるため、全体の規模は分からない。調査区内では、全長27m、開口部最大幅3.8m、検出面からの深さは最大1.5mを測る。底面は平坦で東南に向い傾斜しており、比高差は81cmを測る。周壁は遺存状態が良く凹凸も少なくほぼ垂直に立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。周壁が全域にわたり直線的で、崩落した様子がなく、均一な角度で立ち上がることや流水の痕跡や自然堆積が見られないことから、本溝跡を掘った後さほど時間をおかず埋め戻していると考えられる。

遺 物 (図69, 写真152)

本遺構からの出土遺物は、縄文土器5点、弥生土器43点、土師器3点、陶磁器15点、鉄滓10g、炉底・炉壁72g、地下足袋1点が出土している。いずれも堆積土中からのもので、本遺構に伴うものではない。図示できたものは縄文土器3点、土師器2点、磁器2点である。

縄文土器 69-5～7は同一個体の破片資料である。波状口縁を有する浅鉢と思われ、粘土紐貼付けによる突帯文と横走る隆沈線が施されている。波頂部には穿孔、粘土紐貼付けの上下には盲孔が認められる。縄文後期後葉の堀之内2式(綱取I)に属するものと考えられる。

土師器 69-2はℓ 1から出土した土師器杯の底部小片である。推定底径6.2cm、遺存器高0.7cmを測る。外面に回転糸切り痕、内面にヘラミガキ黒色処理が観察される。胎土は砂粒を含みやや粗で、焼成は良く明灰色を呈する。1はℓ 8から出土した土師器甕の体部片である。直立気味の体部

から「く」字形に外反し、口縁部に至る器形である。遺存器高10.3cmを測る。ロクロ調整で胎土は砂粒を含み、焼成は良く明褐色を呈する。

磁 器 69-3はℓ3出土の染付磁器の碗の口縁部小片である。外面にはプリントで文様が染付されている。内外面に透明釉が施されている。胎土は精緻、焼成は堅緻で白色を呈する。19世紀末から20世紀前葉に比定される。4はℓ5から出土した染付磁器の碗で、約1/2が遺存している。直立する高い高台から内湾気味に立ち上がり、直線的な体部から緩く外反する口縁部に至る器形である。底径3.7cm、器高4.1cmを測る。外面に花文の印版で染め付けされている。高台畳付を除き全面に透明釉が施されている。胎土は精緻、焼成は堅緻で白色を呈する。東北地方産で19世紀に比定される。

ま と め

本遺構は検出面や出土遺物から、近代の遺構であると推定される。本遺構は、沢部の湧水の多い場所にあり、底面にシノダケや木の枝が敷きつめられ、埋め戻されていることから暗渠施設と考えられる。本遺構は、沢部北側奥からの湧水を遮水する意図があったと思われる。(鈴木)

3号溝跡 S D03

遺 構 (図70, 写真50)

本溝跡は調査区中央より南に延びる丘陵の、標高39mの尾根上、BP40・41、BQ39~41グリッドに位置する。本溝跡の検出面はLV上面である。本溝跡の南方に隣接し、平坦部が存在する。平坦部は斜面上位の北に向かって開く扇形を呈し、東西・南北ともに、最大幅10mを測る。平坦部の南端、

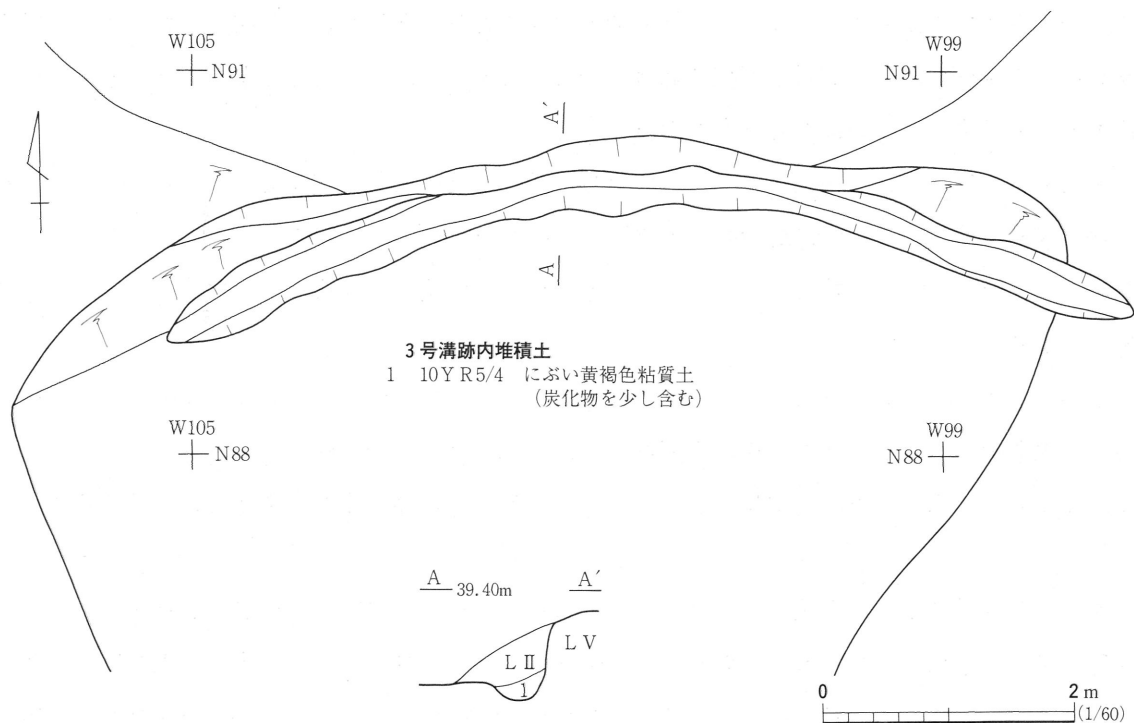


図70 3号溝跡

北端の高低差は約60cmであり、緩やかな傾斜を示す。平坦部は人為的な削平によるものと考えるが、遺構・遺物は検出されず、削平を受けた時期、性格は不明である。本溝跡は平坦部の斜面上位の基部に位置するが、平坦部に伴うものであるか確認できなかった。

堆積土は1層である。ℓ1はLVの再堆積土であり、LVにより壁の立ち上がる北壁の崩落土と考えられる。本溝跡は細尾根を横断するように構築されており、緩やかな屈曲を示し南方に開く弓状のプランを呈し、先端部は東西両側斜面へ開口している。規模は最大長7.8m、最大幅60cm、最小幅30cmである。壁はほぼ垂直に立上がり、南側壁で最大70cm遺存する。底面には若干の凹凸が認められるが、中央部の標高が最も高く、両端との標高差は東側で30cm、西側で10cmである。

遺 物

堆積土より弥生土器片34点が出土しているが、細片で摩滅が著しいため図示できなかった。

ま と め

本溝跡は人為的に形成された平坦部に隣接して存在する溝である。本溝跡に伴う遺物はなく、所属時期・性格は不明である。

(石 井)

4 号溝跡 S D04

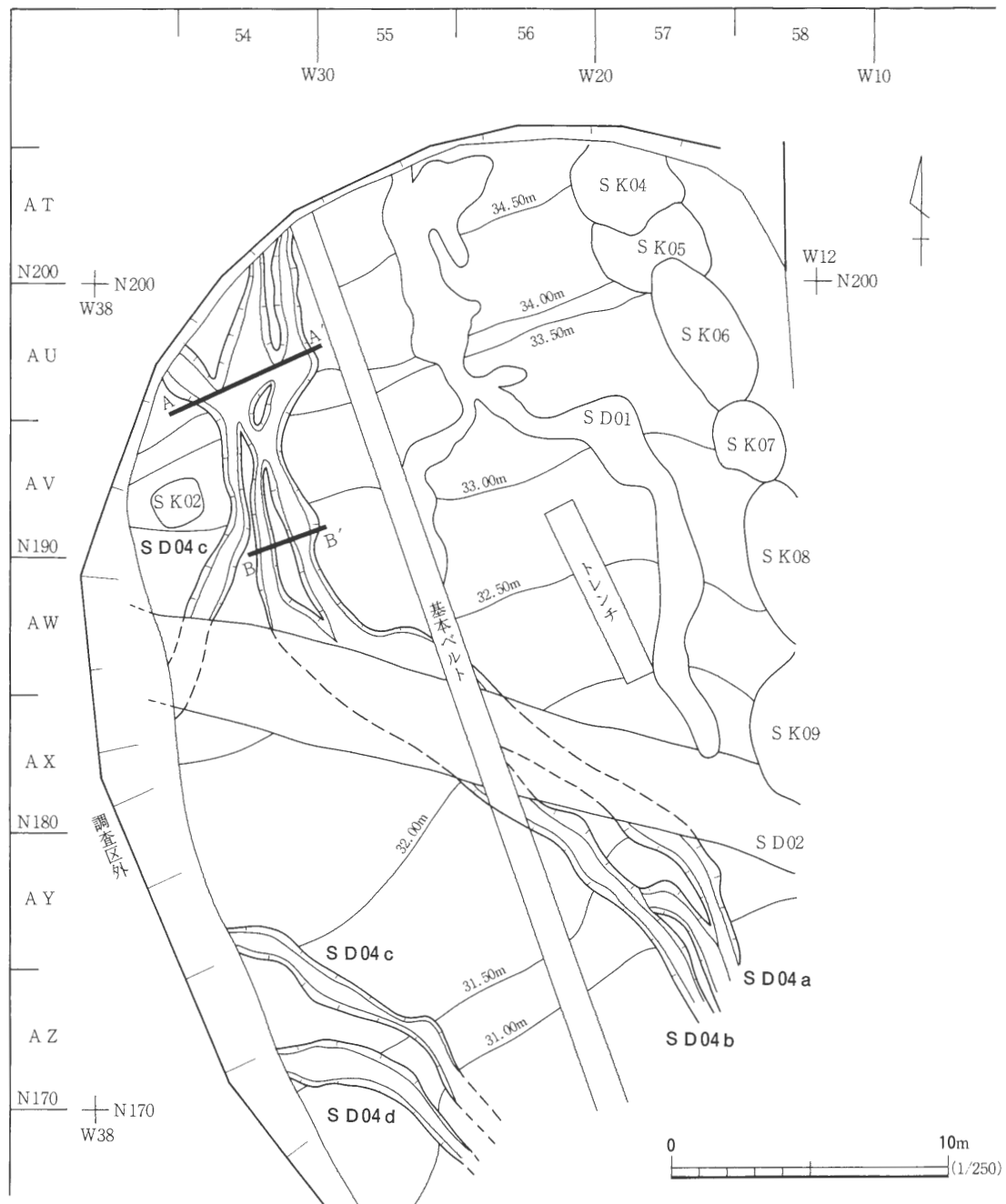
遺 構 (図71, 写真51)

本遺構はAT54, AU54, AV54, AW54・55, AY56・57グリッドに位置し、南向きに緩かに傾斜する斜面に立地する。検出面はLⅢ上面で、4a～cの溝跡を検出した。3条とも調査区の地形に沿って北から南へ蛇行しながら流れる自然流路と思われる。東側から4a・4b・4c号溝跡とした。新旧関係は、古い方から4a→4b→4c号溝跡の順である。2号溝跡と重複する部分は、2号溝跡調査中、本遺構の存在に気付かず掘り過ぎて壊してしまったため、遺存しない。基本土層ベルトの断面観察の結果、本遺構が新しいことが分かった。

またAY54・56, AZ55, BA55グリッドから溝跡2条を検出したが、北側溝跡を4c号溝跡の流れる方向と堆積土から、4c号溝跡の続きと判断した。南側溝跡は4c号溝跡の続きかどうか判断できなかったため、4d号溝跡とした。4c・d号溝跡の新旧関係は重複関係がなく、堆積土からは判断できなかった。

遺構内堆積土は5層に分層され、4b号溝跡にあるℓ3の暗褐色土以外は、黒褐色土の堆積土である。明確ではないが、北側上流から流れ込んだと思われる凝灰岩粒が各層下部に多く含まれていることから、流水による自然堆積と考えられる。3条とも北側上流が調査区外に延びるので全容は分らない。

4a・b号溝跡は主軸方向N5°Wで北から傾斜に沿うように緩やかに蛇行しながら南に走り、AW54グリッドで東南方向に流れを変える。AY56グリッドで2号溝跡と重複する。調査区内の規模は全長は4a・b号溝跡で17.8m、開口部最大幅で4a溝跡が3m、4b溝跡が1.5mを測る。底面は北から南に向け緩やかに傾斜しており、検出面からの深さは4a・b号溝跡とも北側上流で約16cm、



4号溝跡内堆積土

- | | |
|-------------------------------|-----------------------------|
| 1 10Y R3/1 黒褐色土 (凝灰岩粒を少し含む) | 4 10Y R2/3 黒褐色土 (凝灰岩粒を多く含む) |
| 2 10Y R2/2 黒褐色土 (凝灰岩粒・炭化物を含む) | 5 10Y R2/3 黒褐色土 (凝灰岩粒を多く含む) |
| 3 10Y R3/3 暗褐色土 (凝灰岩粒を多く含む) | |

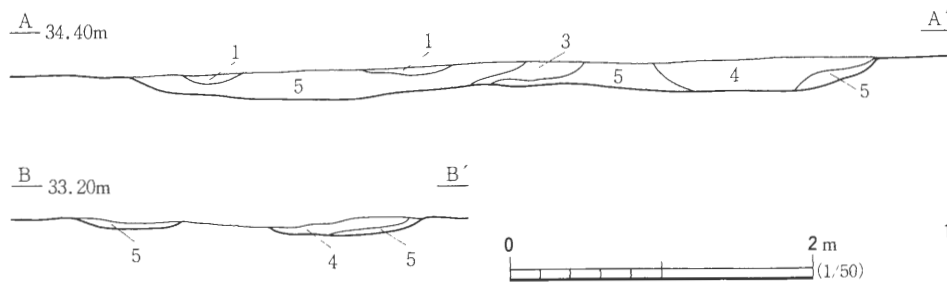


図71 4号溝跡, 出土陶磁器

南側下流で約20cmである。北側上流と南側下流の検出面の比高差は3.6mを測る。周壁は上流，下流とも緩やかに立ち上がる。

4 c 号溝跡はAV54グリッドで南西方向に流れを変え調査区外に延び，AY54グリッドでまた調査区内に現れる。長さは2号溝跡北側で15.0m，南側で7.5mを測る。開口部最大幅1.6m，検出面からの深さ2号溝跡北側上流で約16cm，2号溝跡南側下流で4cm程度である。底面は，2号溝跡北側では北から南に向け緩やかに傾斜しており，2号溝跡南側では北西から東南に向け緩やかに傾斜している。上流と下流の検出面の比高差は3.6mを測る。周壁は北側上流，南側下流とも緩やかに立ち上がる。

4 d 号溝跡は主軸方向N65° Wで，遺構内堆積土は黒褐色土の1層である。全長7m，開口部最大幅1.6m，底面は北西から東南に向け緩やかに傾斜しており，検出面からの深さは約5cmである。周壁は緩やかに立ち上がる。

遺 物 (図71)

本遺構から出土した遺物は，土師器片10点，須恵器片5点，陶磁器片1点，炉底・炉壁11gである。いずれも堆積土中からの出土であり，本遺構に伴うものではない。そのうち，陶磁器1点のみについて図示した。

陶磁器 71-1はℓ1から出土した古瀬戸灰釉平椀の口縁部小片である。遺存長3.5cmを測る。湾曲して外反する口縁部に特徴があり，内外面に黄緑色を呈する灰釉が施釉されている。貫乳が著しい。胎土は精良，焼成は良く白色を呈する。瀬戸産と推定され，15世紀代に比定される。

ま と め

本溝跡は立地状況と遺構形態，堆積状況から，自然流路と考えられる。検出面や出土遺物などから近代以降の所産と考えられる。

(鈴 木)

7号溝跡 S D07

遺 構 (図72, 写真52)

本遺構はBF54・BG54グリッドに位置する。本遺構の立地する丘陵全体は，近代の粘土掘削の際に排出された人頭大の凝灰岩ブロックを多量に含む再堆積層で，覆われている。その丘陵部の東向きの急斜面上部の平坦面に，本遺構は立地する。本遺構の位置する丘陵部には，他の遺構は存在しない。調査区境の土層断面で，LⅡ上面から掘り込まれていることを確認した。

当初本遺構は土坑と考えて調査を開始したが，東南方向に延びるため，溝跡と考えた。本遺構は主軸方向N25° Wで，北西から東南に等高線に沿うように走る。北西側は調査区外に延び，東南側は試掘の際のトレンチと，トレンチを掘り込んだ際に掘り過ぎて壊し遺存しない。遺構内堆積土は6層に分層される。土層断面の観察からは本溝跡は3面あると考えられる。第1面はℓ6の下面で，第2面はℓ4上面，第3面はℓ3上面である。しかし第2・3面は平面では捉えられなかった。

最初にℓ6下面を底面として機能した後，ℓ5・6が自然堆積した。第2面はℓ4を掘り込んで

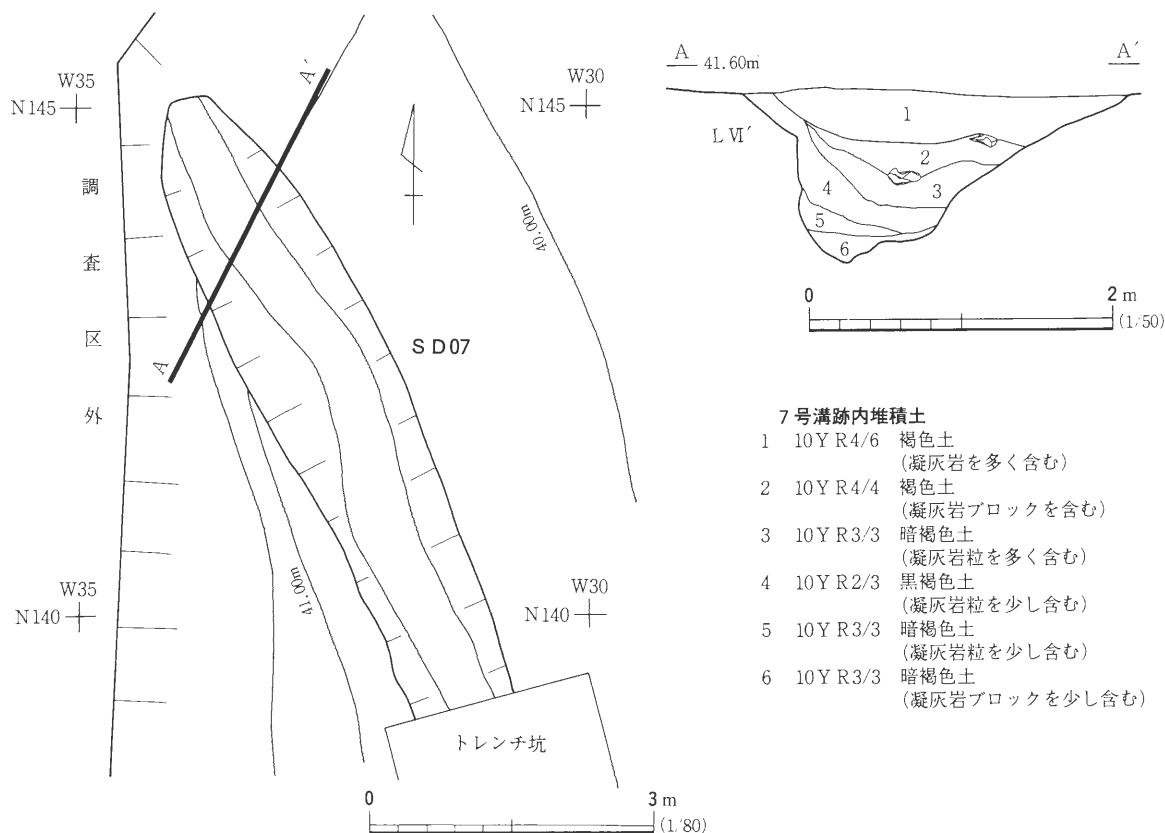


図72 7号溝跡

いることが土層断面から確認され、 $\ell 4$ の堆積がやや不自然であることから、 $\ell 5$ 上面が溝跡の可能性も考えられるが、 $\ell 5 \cdot 6$ が $\ell 4$ に対してとても柔らかいため、 $\ell 5$ 上面が溝跡とは断定できなかった。掘り込んだ後に埋め戻した可能性も考えられる。第3面は、 $\ell 4$ 上面の溝跡が機能している時に自然堆積した $\ell 3$ で、 $\ell 1 \cdot 2$ が再堆積層と同質の土に対し、 $\ell 3$ は暗褐色土で固くなっている。 $\ell 1 \cdot 2$ は溝跡が機能しなくなった後に、再堆積層の土が流れ込んだものと考えられる。

平面的に検出した第1面、 $\ell 6$ 下面での規模は、残存長6.5m、残存最大開口幅2.3mを測る。周壁は、東壁は緩やかに立ち上がる箇所と急に立ち上がる箇所があるが、西壁に比べ緩やかに立ち上がる。西壁は凹凸があり急に立ち上がる。底面は北西から東南に向かい緩やかに傾斜しており、比高差は59.6cmである。本遺構から遺物は出土しなかった。

ま と め

本遺構は立地状況・遺構形態・堆積状況から道跡の可能性が考えられる。再堆積層が掘り込まれて作られたことから、時期は近代以降と考えられる。

(鈴 木)

8号溝跡 SD08

遺 構 (図73)

調査区南側奥の丘陵部、BT55・BU55グリッドに位置する。周辺は近代の粘土採掘が行われ、数度にわたって大きく削平されている平坦部である。13号住居跡と重複し、本溝跡が新しい。本溝跡は

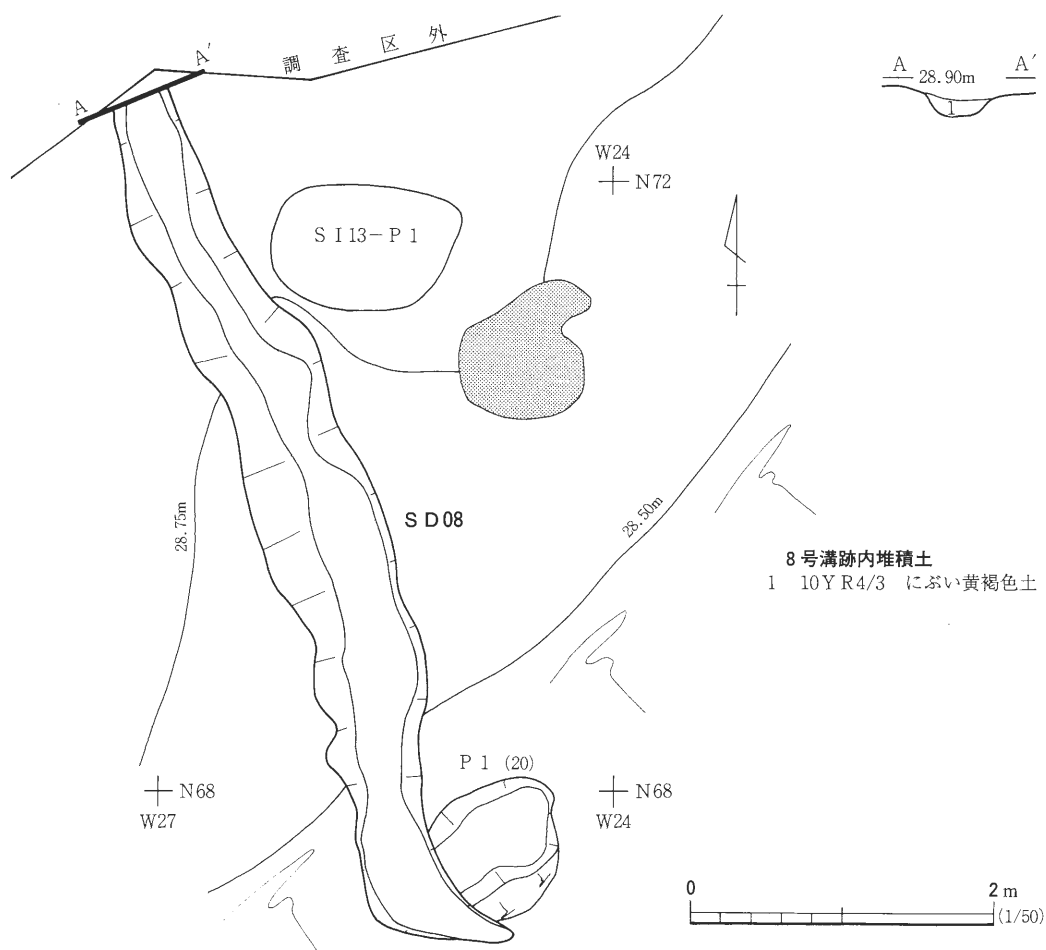


図73 8号溝跡

北部が調査区境界に接し、南端部でBU56 P1を壊してP1より新しい。検出面はLVである。堆積土は1層で、にぶい黄褐色土の自然堆積である。

規模は、遺存長5.9m、最大幅0.8m、検出面から最深30cmを測る。主軸方向はN19°Wで、ほぼ直線的に延びている。底面は南東方向に緩やかに傾斜し、比高差は60cmである。底面はほぼ平坦で、壁は一部垂直に立ち上がる場所もあるが、緩やかに立ち上がる部分が多い。本遺構からは遺物は出土しなかった。

まとめ

本遺構は、当初何らかの目的で人為的に掘られたものと推定されるが、性格を特定することができない。本溝跡は出土遺物がなく、所属時期を明らかにすることはできないが、近代の削平以降と考える。

(佐久間ふく子)

9号溝跡 S D09

遺構 (図74, 写真53)

本遺構はAT54~56, AU54~56, AV54~57, AW55~57, AX55~57グリッドに位置し、北から南に向かう緩やかな斜面に立地する。LⅢを掘り込み、LⅣを検出した段階で、9a~dの溝跡を検出し

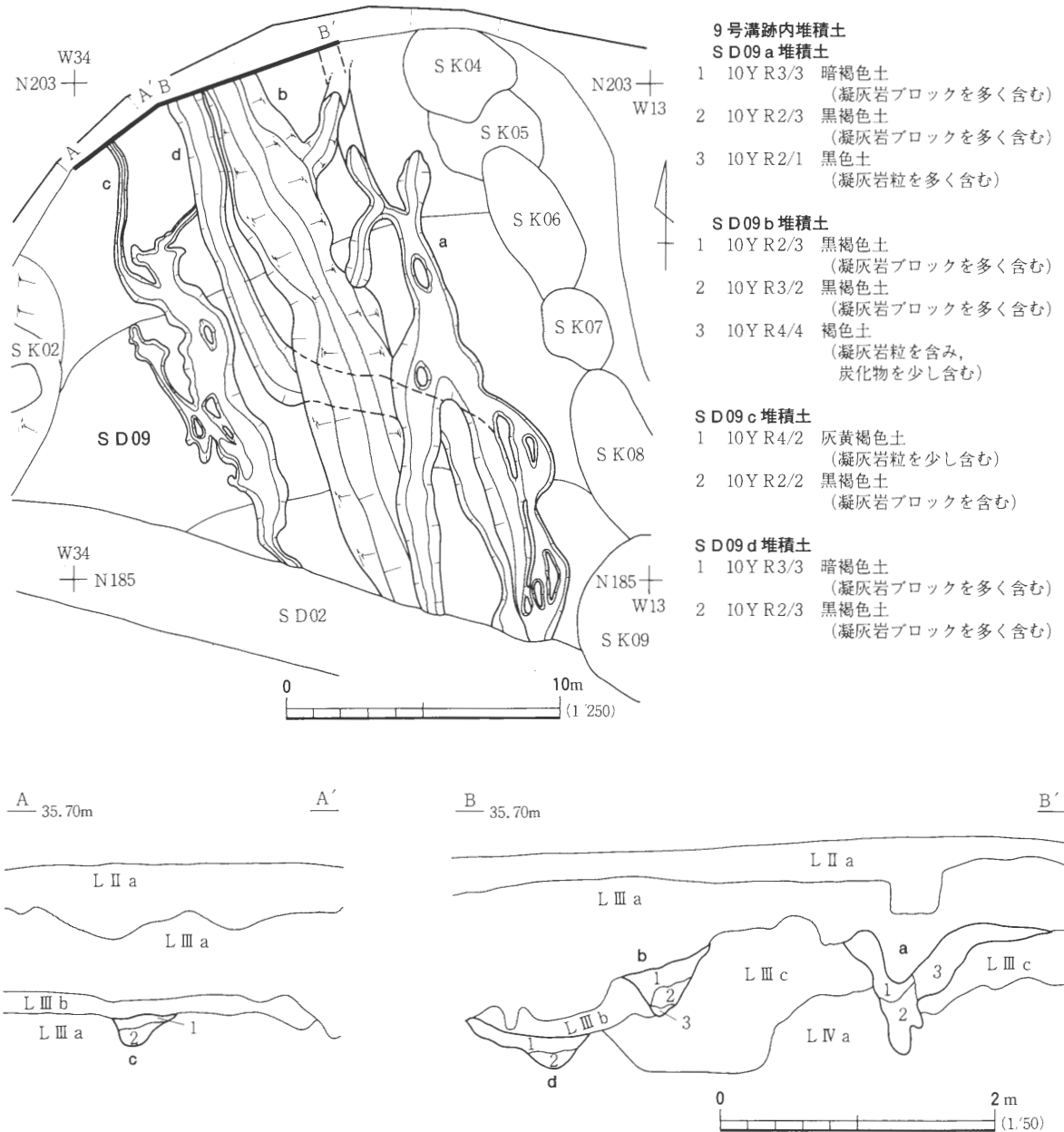


図74 9号溝跡

た。調査区の地形に沿って北から南へ蛇行しながら流れる、自然流路と思われる。新しい順に9 a・9 b・9 c・9 d号溝跡とした。調査区北側の土層断面を観察すると、9 a号溝跡はL III下部から掘り込まれているのが分かった。

遺構南端部で2号溝跡に壊されている。2号溝跡以南は、調査は行わなかった。遺構内堆積土はそれぞれ2～3層に分層される。北側上流から流れ込んだと思われる凝灰岩ブロックが各層下部に多く含まれていることから、自然堆積と考えられる。いずれも北側上流が調査区外に伸びるので、全容は分からない。

9 a号溝跡は主軸方向N25° Wで北から南に地形に沿うように走り、AW57グリッドで分流し平行しながら南に走る。分流した西側の溝が9 d号溝跡のプランを横切るように流れ、AW56グリッドで

9 b号溝跡を壊している。全長20m, 開口部最大幅2.5mを測る。底面は北から南に向け傾斜しており, 比高差は1.9mを測る。検出面から最深部で42cmを測る。周壁は北側上流, 南側上流ともに緩やかに立ち上がる。

9 b号溝跡は主軸方向N20° Wで, 北から南に地形に沿うように走る。AV56グリッドで9 d号溝跡のプランを横切るように走り, AW56グリッドで9 a号溝跡に壊される。全長20.2m, 開口部最大幅3.5mを測る。底面は北から南に向け傾斜しており, 比高差は2.12mを測る。検出面から最深部で58cmを測る。周壁は北側上流, 南側上流ともに緩やかに立ち上がる。

9 c号溝跡は主軸方向N25° Wで, 北から南に地形に沿うよう蛇行しながらに走る。全長18m, 開口部最大幅1.8mを測る。底面は北から南に向け傾斜しており, 比高差は1.8mを測る。検出面から最深部で77cmを測る。周壁は上流では緩やかに立ち上がるが, 下流では凹凸があり, 急に立ち上がる。

9 d号溝跡は主軸方向N20° Wで, 北から南に地形に沿うように走り, AV56グリッドで9 a・9 b号溝跡を横切るように東南に方向を変え, AV57グリッドで再び南に流れを変える。全長25.5m, 開口部最大幅2.0mを測る。底面は北から南に向け傾斜しており, 比高差は2.1mを測る。検出面から最深部で77cmを測る。周壁は上流, 下流ともに緩やかに立ち上がる。

遺 物 (図75, 写真155)

本遺構からの出土遺物は, 弥生土器片38点, 土師器片264点, 須恵器片99点, 陶磁器片10点, 炉底・炉壁210g, 鉄滓4g, 石器1点である。いずれも堆積土中からの出土であり, 本遺構に伴うものではない。図示できたのは弥生土器1点, 土師器2点, 須恵器4点, 石鏃1点である。

弥生土器 75-7は小型壺の胴部資料である。地文には0段多条文を回転施文し, 内面にはナデ調整が施されている。

石 器 75-8は基部を欠損する凸基有茎式石鏃である。表裏面から細かな剥離調整が施され, 縦横断面形が流線形を呈する。法量は遺存長1.8cm, 最大幅1.4cm, 最大厚0.7cmを測り, 石質は流紋岩である。

土師器 75-1・2はロクロ整形による土師器甕の口頸部資料である。1・2は長胴形の器形を呈し, 頸部が「く」字状に外反して口唇部が上位に摘み上げられているものである。胎土は共に砂粒を含み, 焼成は良く褐色を呈する。遺存する法量は1が推定口径18.2cm, 遺存高8.2cm, 2が推定口径18.0cm, 遺存高5.0cmである。

須恵器 75-4は須恵器杯で, 約1/2を遺存する。器面は荒れて摩滅しており, 底部は回転ヘラケズリ調整が施されている。胎土は良く, 焼成はやや軟質で灰白色を呈する。遺存する法量は推定底径7.0cm, 推定口径13.7cm, 器高4.0cmを測る。

3は須恵器甕の口縁部小片である。「く」字状に強く外反する口縁部に至る器形である。器面が荒れて摩滅しており, 胎土はやや粗で, 焼成は良くなく灰白色を呈する。法量は推定口径21.0cm, 遺存高8.0cmを測る。

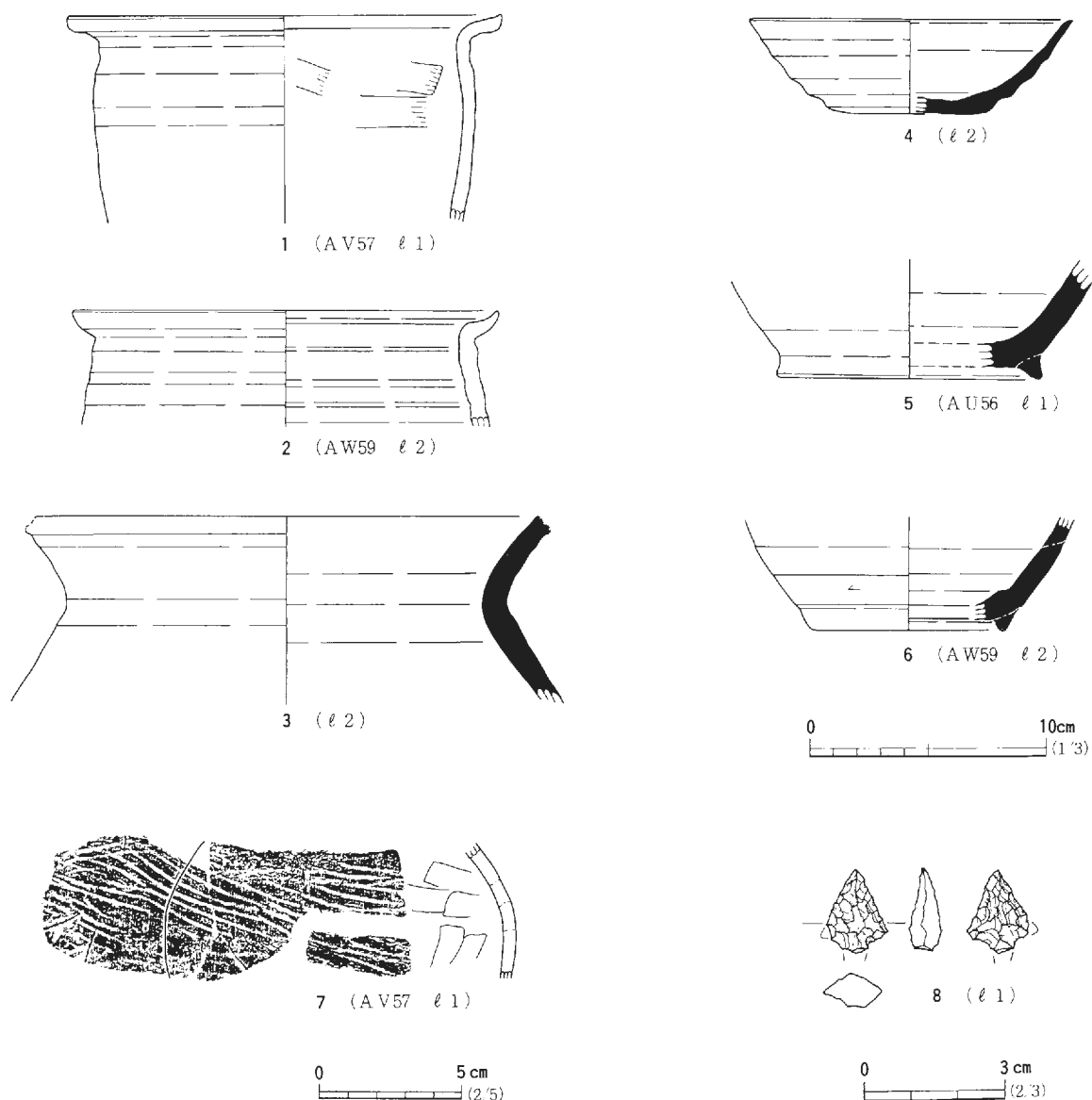


図75 9号溝跡出土弥生土器・土師器・須恵器・石器

5・6は須恵器長頸瓶の底部資料で、底部には断面三角形の高台が付されている。平底の底面からやや内湾気味に立ち上がる器形である。5の内底面には窯クズが付着し、底部に焼台の痕跡が残る。体部外面に灰が付着し、溶け切らずに白濁している。6は体部外面に回転ヘラケズリが施されている。共に胎土は良く、焼成も良く青灰色を呈する。遺存する法量は5が推定底径11.1cm、遺存高5.0cm、6が推定底径8.1cm、遺存高4.7cmを測る。

ま と め

本溝跡は立地状況と遺構形態、堆積状況から、自然流路と考えられる。重複関係から9d号溝跡が最も古い時期に機能し、次いで9c号溝跡、9b号溝跡が機能し9a号溝跡が最も新しい時期に機能していたと考えられ、2号溝跡以前の遺構であることは明らかである。遺構に伴う遺物が出土していないため時期は不明である。

(鈴木)

第7節 焼土跡

本調査区から検出された焼土跡は、1基のみである。検出地点は丘陵裾部の舌状にせり出した平坦部である。ここでは、2・14号住居跡を始めとする5つの遺構の重複関係があるが、検出された焼土跡は、それらの遺構の関連施設としては取り扱わず、焼土跡として個別に取り扱う。

1号焼土跡 S G01

遺 構 (図76, 写真54)

本遺構は調査区のBB27グリッドに位置する。西向き斜面の丘陵裾部、標高26m程の平坦部で2・14号住居跡の掘り込み中に確認された。検出面は2号住居跡の堆積土上面で、本遺構が新しい。

酸化面の範囲の平面形は、不整楕円形で長軸が60cm、短軸が45cmを測る。本遺構は、掘形をもたず、検出面から最大18cmの深さで被熱酸化している。この酸化した範囲の南西部分の約30cm四方は、厚さ12cmで、色鮮やかな明赤褐色を呈している。特に強い熱を受けて酸化したことが顕著に認められる。その周辺部は弱い熱により、厚さ6cmで暗赤褐色に変色している。酸化面の東西130cm、南北70cmの範囲には、本焼土跡を取り囲むように木炭粒が多く散らばっている。

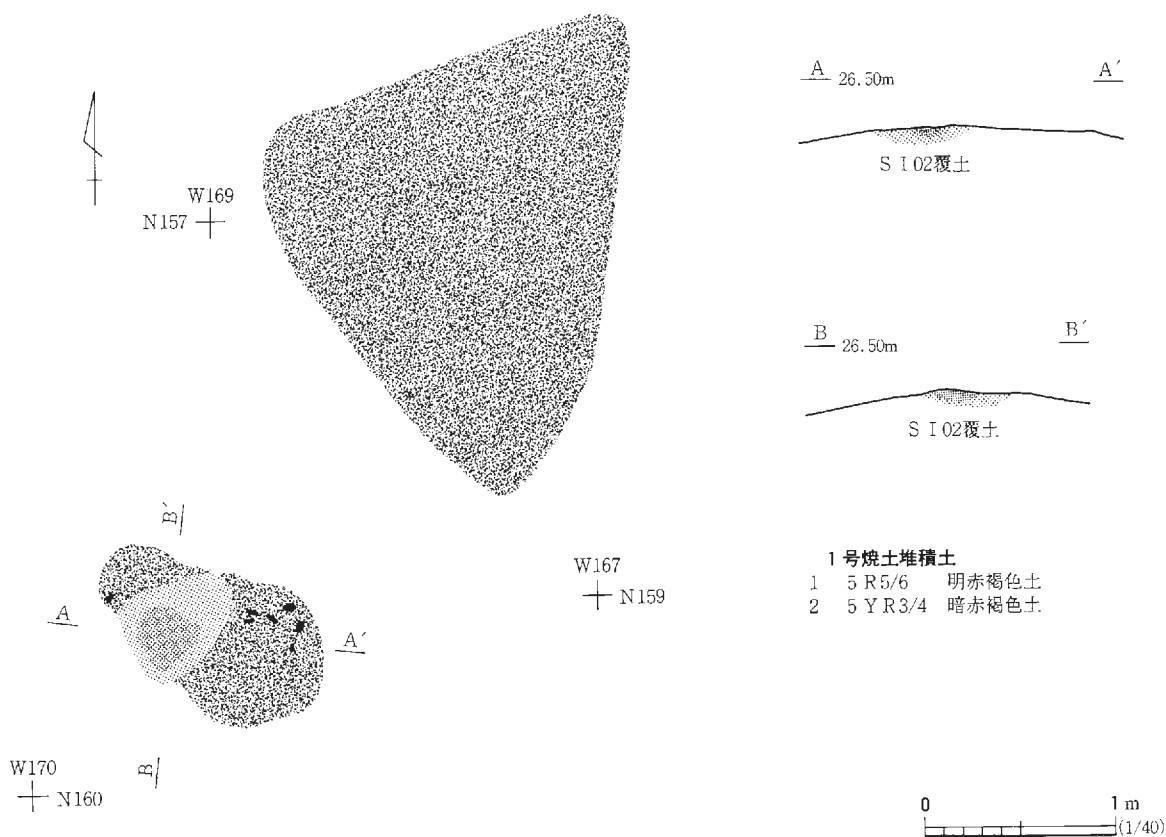


図76 1号焼土跡

遺 物

本遺構からは、鍛造剥片が微量出土した。他に土器などの出土はない。

ま と め

本遺構は、遺存状況が良くないが、鍛造剥片が出土したことから、鍛冶炉と判断した。所属時期は出土遺物がないため不明であるが、2号住居跡堆積土上面に作られていたことから奈良時代以降に機能していたものと考えられる。

(福 島)

第8節 水 田 跡

層位と分布 (図77～106, 写真56～61・70～81)

水田跡は調査区北西側の丘陵裾部の低地で検出され、現況も水田であった。AR24, AS23・24, AT

二

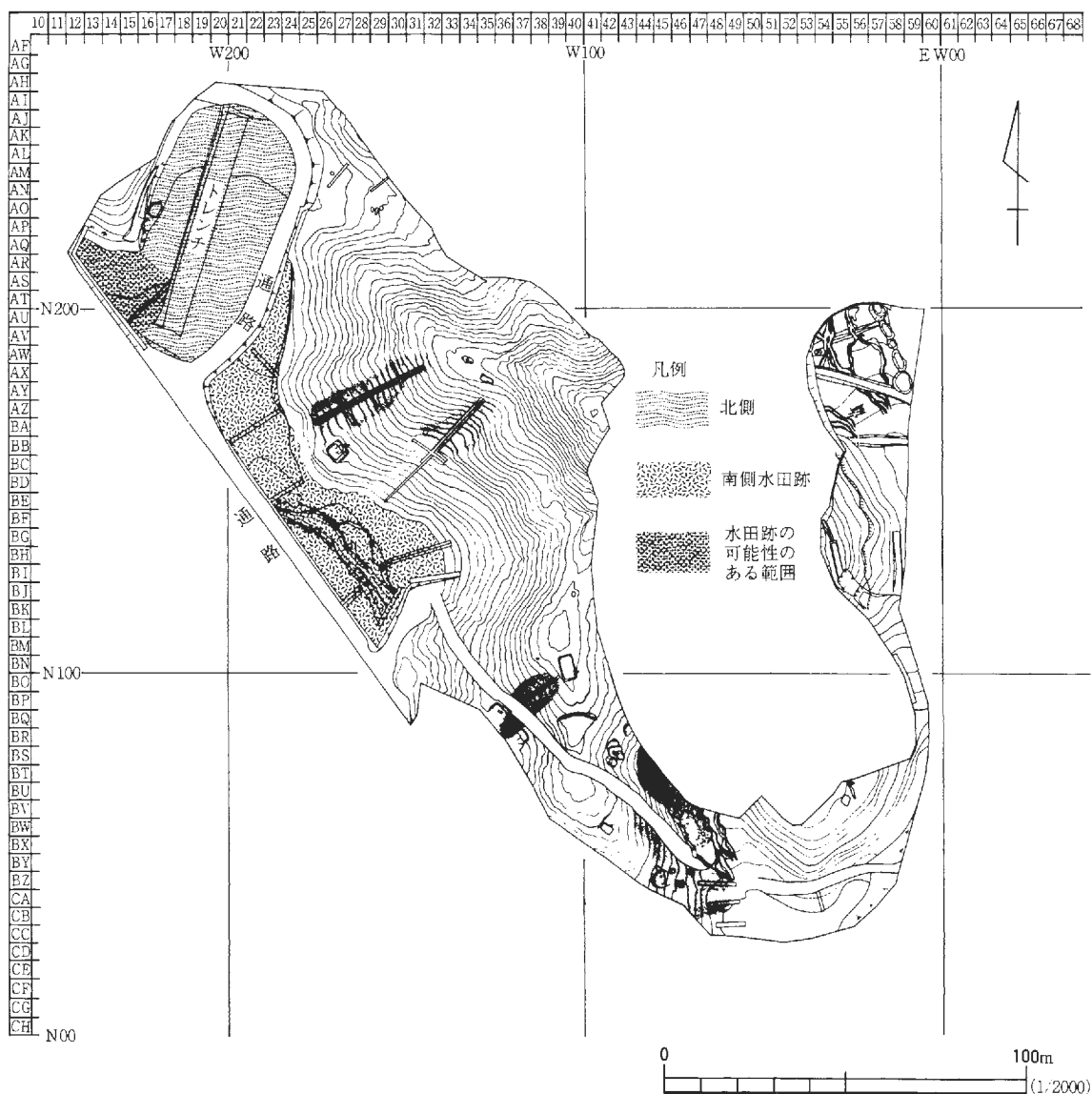


図77 水田跡位置図

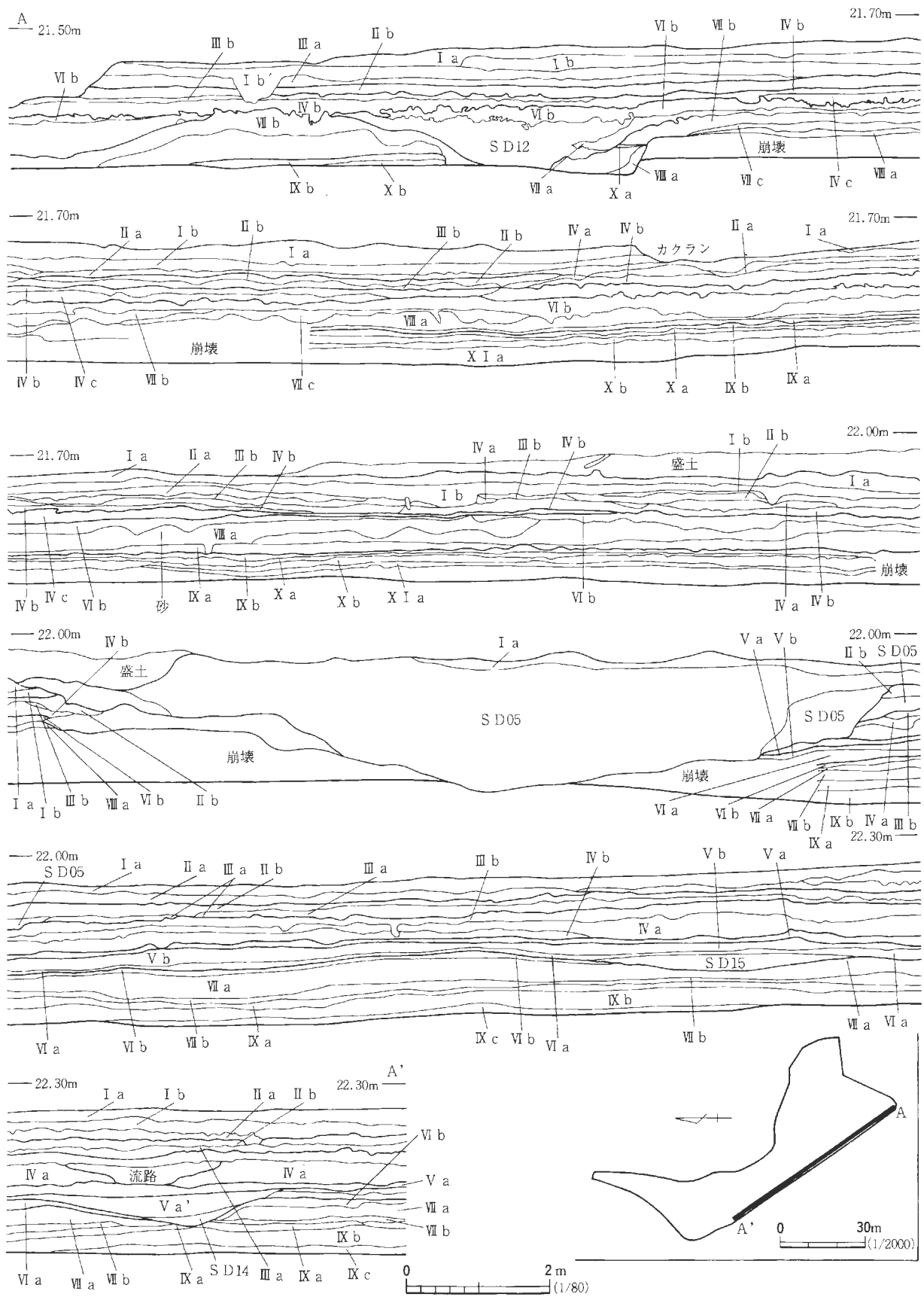


図78 水田跡基本土層断面 (1)

水田部基本土層				
L I a	2.5Y4/2	暗灰黄色土	L IV b	10Y R3/2 黒褐色粘質土（小礫・白色砂粒・炭化粒を含む）
L I b	10Y R5/2	灰黄褐色土	L IV c	10Y R4/2 灰黄褐色砂（小礫を多量に含む）
L I b'	10Y R5/2	灰黄褐色土	L IV c 1	10Y R4/1 褐色粘質土（礫を少し含む）
L II a	10Y R4/1	褐色土	L V a	10Y R4/1 褐灰色砂質土
L II b	10Y R3/2	黒褐色粘質土（白色砂粒を少し含む）	L V a'	10Y R4/1 褐灰色砂質土
L II c	10Y R2/3	黒褐色土（炭化物を多く含む、小礫を少し含む）	L V b	10Y R2/1 黒褐色粘質土（炭化物を多く含む）
L II d	10Y R5/2	灰黄褐色砂（炭化物を微量に含む）	L V c	10Y R1.7/1 黒色粘質土（小礫を少し含む）
L II e	5Y3/1	オリブ黒色土（炭化物を少し含む）	L V d	2.5Y4/2 暗灰黄色土（小礫を含む）
L II f	10Y R5/3	にぶい黄褐色土（礫を多量に含む）	L V e	2.5Y3/2 黒褐色土（小礫を含む）
L III a	10Y R5/2	灰黄褐色土（小礫を含む）	L VI a	10Y R3/1 黒褐色土（小礫を多く含む）
L III a 1	10Y R4/6	褐色粘質土（礫を多く含む）	L VI a'	10Y R3/1 黒褐色砂質土
L III a 2	10Y R4/2	灰黄褐色土（礫を多く含む）	L VI b	10Y R1.7/1 黒色粘質土（小礫・白色砂粒・炭化物を含む）
L III a 3	10Y R6/6	明黄褐色粘質土（礫を含む）	L VI b 1	5Y3/2 オリブ黒色粘質土（小礫・白色砂粒・炭化物を含む）
L III a 4	10Y R4/4	褐色粘質土（礫を含む）	L VII a	2.5Y3/1 黒褐色粘質土
L III a 5	10Y R3/2	黒褐色土（礫を多く含む）	L VII b	2.5Y2/1 黒色粘質土
L III a 6	5Y R3/4	にぶい黄褐色粘質土	L VII c	5Y2/1 黒色粘質土
L III a 7	10Y R3/2	褐色粘質土（礫を含む）	L VII a	2.5Y4/1 砂礫層（黄褐色砂を少し含む）
L III a 8	10Y R4/2	灰オリブ色土	L IX a	2.5Y4/2 砂質土（灰オリブ・砂利含む）
L III b	10Y R2/1	黒色粘質土	L IX b	5Y3/2～10Y6/1 粘質土（オリブ黒色・炭化物を縞状に含む・粘性あり）
L III b 1	5Y R3/2	黒色粘質土	L IX c	2.5Y4/2 砂質土（灰オリブ・砂利含む・しまりなし・粘性あり）
L III b 2	2.5Y4/2	暗黄灰色粘質土	L X a	2.5Y6/1 砂質土（黄灰色）
L III b 3	2.5Y4/1	黄灰色粘質土（礫を含む）	L X b	2.5Y3/1 粘質土（黒褐色）
L III c	10Y R5/2	灰黄褐色粘質土	L XI a	5Y5/4 粘土質土（オリブ色・礫を部分的に含む）
L III d	10Y R5/2	褐色土（小礫を多く含む）	L XI b	5Y3/1 粘質土（オリブ色）
L IV 1	10Y R2/2	黒褐色土	L XI a	5Y5/1 砂質土（砂利・内礫を含む）
L IV 2	10Y R3/4	暗褐色土	L XI b	5Y3/1 粘質土（オリブ黒色）
L IV 3	10Y R3/1	黒褐色土	L XII a	7.5Y5/1 灰色砂質土（粗砂・小礫を含む）
L IV 4	10Y R4/2	灰黄褐色土（褐色土ブロックを含む）	L XII b	7.5Y3/1 オリブ黒色砂質土（砂を少量含む）
L IV 5	10Y R2/2	暗褐色土	L XII c	5Y4/1 灰色砂質土（灰色粘質土を含む）
L IV 6	10Y R3/4	黒褐色土		
L IV a		礫層（10Y R4/2灰黄褐色砂を少し含む）		

図79 水田跡基本土層断面（2）

23・24, AU23・24, AV22～24, AW21～23, AX20～23, AY20～23, AZ20～24, BA20～24, BB21～24, BC22～25, BD22～25, BE23～29, BF24～32, BG24～33, BH25～33, BI26～33, BJ27～30, BK27～30, BL28～30, BM29グリッドで検出された。6号遺物包含層が東側に隣接しており、水田跡上面まで堆積していることから、再堆積によって形成された遺物包含層と判断された。東側丘陵裾部で2・14号住居跡、北側丘陵裾部で15号住居跡が検出され、密接な関係が想定された。

平成5年度の試掘調査で、土層断面で水田土壌が確認できたことから、水田跡の存在が推定された。本調査では水田跡の調査は排土処理の関係上、丘陵部の調査が終了に近付いた、8月下旬から開始した。重機で排土の運搬・処理を行い、重機により面的に水田面直上までの掘り下げを試みた。しかし、予想より掘り過ぎ、後述するLⅢ・Ⅳまで掘り下げる結果となった。排土の搬出路の確保や中島川の安全対策ために、南西川沿いと水田調査区中央に通路を残して掘り下げた。便宜的に、中央の通路から北と南に分けて、ここでは北側・南側と分けて呼称する。北側については、水田面及び水田土壌は確認できなかった。水田跡から出土した遺物は弥生土器片145点、土師器片390点、須恵器片59点、石器片26点、鉄製品1点である。

南 側

南側はLⅢ・Ⅳ面上面まで掘り下げて検出作業を行うこととなったが、遺構面で湧水があり、軟弱であることから、排水路を兼ねて調査区の境に沿ってトレンチを掘った。そのトレンチで土層断面観察を行い、LⅢ・Ⅳ面まで掘り下げられていることがわかった。そこで、畦畔や水路、耕作に

よる土層の攪拌や土層上面・下面の乱れ(凹凸)を基準として、水田土壌を認定した。認定に当たっては、吉田秀享文化財副主査の指導・助言を受けた。水田土壌と認定できた土層はLⅠb・Ⅱb・Ⅲb・Ⅴa・Ⅴb・Ⅵb・Ⅷb・Ⅸbであり、LⅠbは現代の水田跡であり、LⅡbは面的に調査するのが不可能な状況であり、結果的にLⅢ面から検出作業を行うこととした。

南側水田跡の基本土層のうちLⅠaは暗灰黄色土、LⅠbは灰黄褐色土であり、現代の表土・水田面と考えられる。層厚5～30cmを測り、調査区全面に堆積している。LⅡaは褐色土、LⅡbは黒褐色粘質土で水田土壌と考えている。5号溝跡の周辺で部分的に欠失しているが、厚い部分で層厚40cmを測る。5号溝跡の周辺を除く調査区全面に堆積している。LⅢaは礫を少し含む灰黄褐色土で、5号溝跡北側のみに堆積している。LⅢbは黒色粘質土で、水田土壌と推定した。堆積は5号溝跡南側で薄く、北側で比較的厚く、最大20cmを測る。出土遺物からLⅡ・Ⅲは奈良・平安時代の水田跡の可能性が高い。

LⅣaは灰黄褐色砂を含む礫層で、LⅣbは黒褐色粘質土で砂・礫を含む。洪水による堆積と判断され、5号溝跡北側で厚く、南側で薄い傾向があり、最大層厚30cmを測る。LⅢの出土遺物から洪水は奈良時代前半と考えられる。LⅤaは褐灰色砂質土で5号溝跡北側にのみ堆積し、層厚5～10cmを測り、ほぼ均一に一面に堆積している。LⅤbは木炭粒を少し含む黒褐色粘質土で、5号溝跡北側に5～30cmの層厚で堆積している。

LⅤb'は灰オリーブ土で5号溝跡北側に部分的に堆積し、層厚5～10cmを測る。LⅥaは小礫を多く含む黒褐色土で、5号溝跡付近から北側に層厚5～10cmで堆積している。LⅥbは砂を含む黒色粘質土で全面に堆積し、層厚5～30cmを測る。LⅥbは出土遺物から古墳時代前期と考えられる。

LⅦaは砂を多量に含む黒褐色砂質土で、ほぼ全面に堆積し、層厚5～40cmを測る。氾濫による堆積と判断できる。LⅦbは黒色粘質土で、南端部と5号溝跡北部に堆積し、層厚5～20cmを測る。LⅧaは黄褐色砂を含む砂礫層で、5号溝跡南側にのみ堆積し、層厚5～40cmを測り、氾濫による堆積と考えられる。

LⅨaは礫を含む灰オリーブ砂質土で層厚5～20cmを測り、全面に堆積し、5号溝跡北側で薄く、南側で厚い。LⅨbは炭化物を含むオリーブ黒色粘質土で層厚5～30cmを測り、ほぼ全面に堆積している。LⅨcは木炭粒を少し含む灰オリーブ砂質土で、5号溝跡北側のみに厚さ10cm前後で堆積している。LⅩaは黄灰色砂質土で、厚さ5～20cmで全面にほぼ均一に堆積している。LⅩbは黒褐色粘質土で厚さ5～20cmを測り、全面にほぼ均一に堆積している。LⅦ以下では時期を示す出土遺物がないことから、時期を推定できなかった。

土層断面観察で水田土壌の可能性が考えられたのは、LⅨbまでであったことからLⅩ以下については、トレンチ調査によって遺構・遺物の有無を確認した。LⅩ以下についてはほとんど砂礫層で洪水による堆積ないしは、大型の河川が存在したものと推定された。現表土から約5mまで堆積状況を確認したが、出土遺物はなく、水田土壌も確認できなかった。

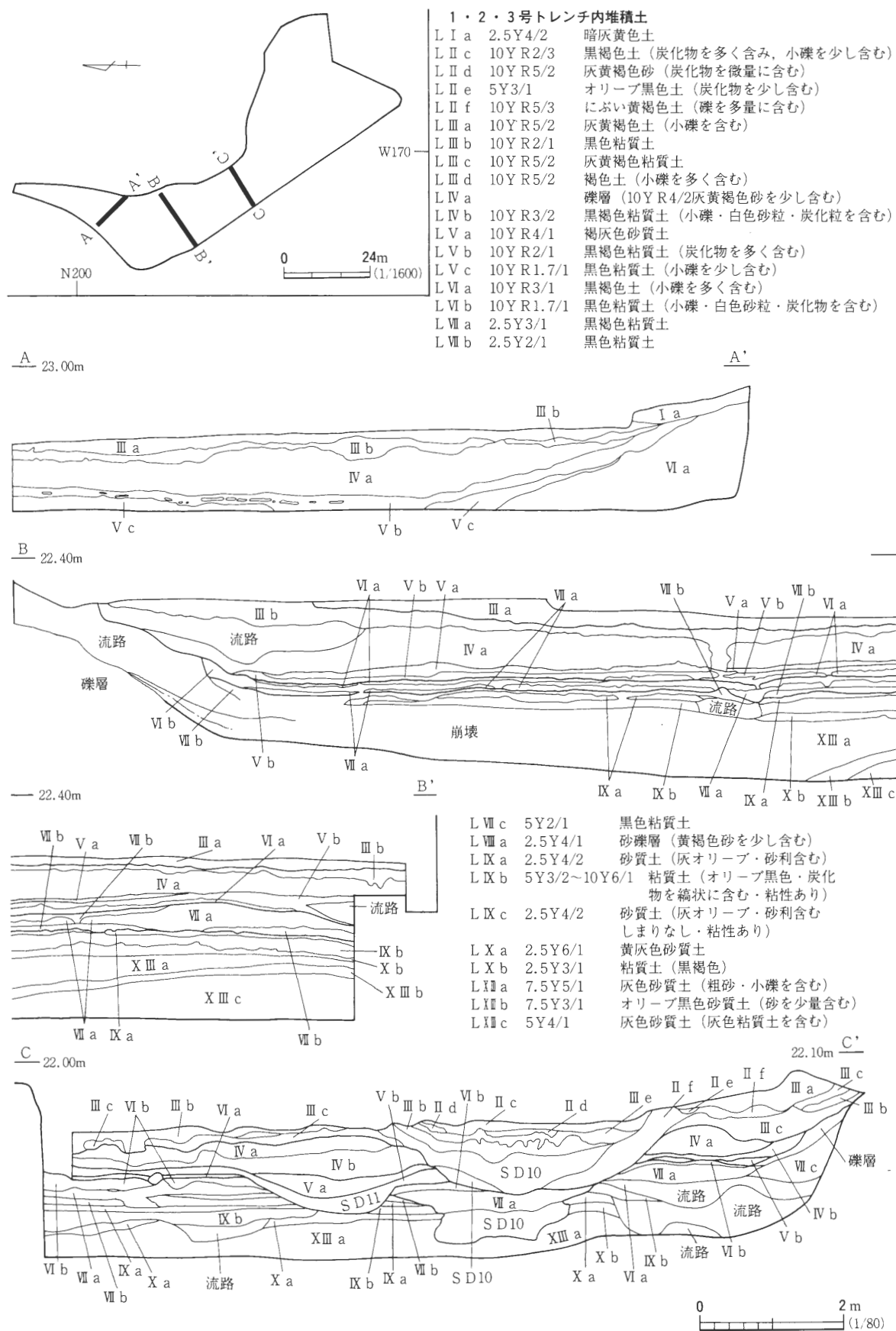
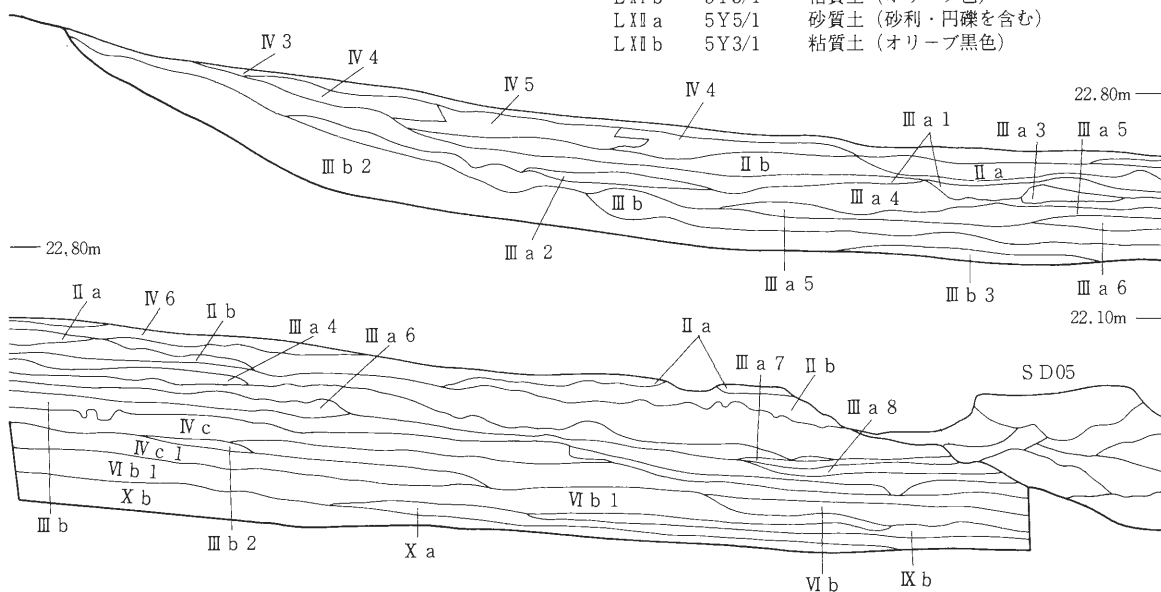


図80 1～3号トレンチ断面

4号トレンチ堆積土

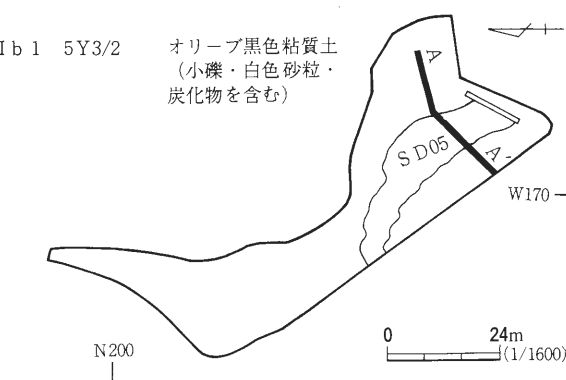
L II a	10Y R4/1	褐色土
L II b	10Y R3/2	黒褐色粘質土 (白色砂粒を少し含む)
L III a 1	10Y R4/6	褐色粘質土 (礫を多く含む)
L III a 2	10Y R4/2	灰黄褐色土 (礫を多く含む)
L III a 3	10Y R6/6	明黄褐色粘質土 (礫を含む)
L III a 4	10Y R4/4	褐色粘質土 (礫を含む)
L III a 5	10Y R3/2	黒褐色土 (礫を多く含む)
L III a 6	10Y R5/4	にぶい黄褐色粘質土
L III a 7	10Y R3/2	褐灰粘質土 (礫を含む)
L III a 8	10Y R4/2	灰オリーブ色土
L III b	10Y R2/1	黒色粘質土
L III b 1	5Y R3/2	黒色粘質土
L III b 2	2.5Y4/2	暗黄灰色粘質土
L III b 3	2.5Y4/1	黄灰色粘質土 (礫を含む)
L IV 3	10Y R3/1	黒褐色土
L IV 4	10Y R4/2	灰黄褐色土 (褐色土ブロックを含む)
L IV 5	10Y R2/2	暗褐色土
L IV 6	10Y R3/4	黒褐色土
L IV a		礫層 (10Y R4/2灰黄褐色砂を少し含む)
L IV b	10Y R3/2	黒褐色粘質土 (小礫・白色砂粒・炭化粒を含む)
L IV c 1	10Y R4/1	褐色粘質土 (礫を少し含む)

A 24.00m



L VI b 1 5Y3/2

オリーブ黒色粘質土
(小礫・白色砂粒・炭化物を含む)



L VII a	2.5Y4/1	砂礫層 (黄褐色砂を少し含む)
L IX a	2.5Y4/2	砂質土 (灰オリーブ・砂利含む)
L IX b	5Y3/2~10Y6/1	粘質土 (オリーブ黒色・炭化物を綿状に含む・粘性あり)
L X a	2.5Y6/1	砂質土 (黄灰色)
L X b	2.5Y3/1	粘質土 (黒褐色)
L XI a	5Y5/4	粘質土 (オリーブ色・礫を部分的に含む)
L XI b	5Y3/1	粘質土 (オリーブ色)
L XII a	5Y5/1	砂質土 (砂利・円礫を含む)
L XII b	5Y3/1	粘質土 (オリーブ黒色)

11号溝跡内堆積土

1	5Y6/1	砂質土 (灰色)
2	2.5Y3/3	粘質土 (暗オリーブ褐色・粘性強い)
3	5Y5/1	砂質土 (灰色)
4	2.5Y3/2	粘質土 (黒褐色)
5	2.5Y4/1	砂質土 (黄灰)
6	5Y4/3	粘質土 (暗オリーブ色・粘性弱い)
7	5Y2/1	粘質土 (黒色)
8	5Y4/3	粘質土 (暗オリーブ色)
9	5Y3/2	粘質土 (オリーブ黒色)

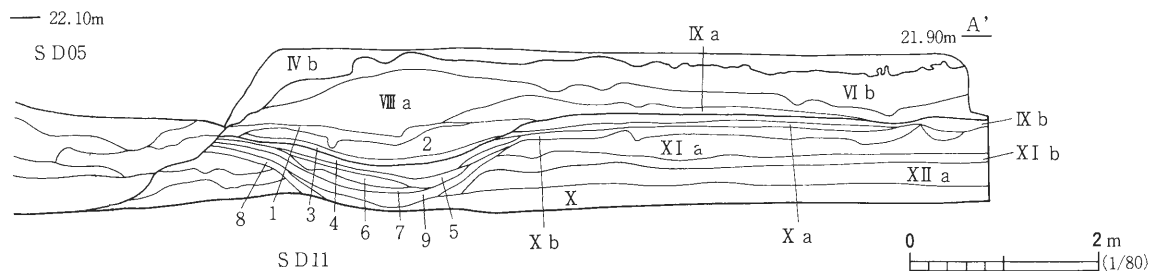


図81 4号トレンチ断面

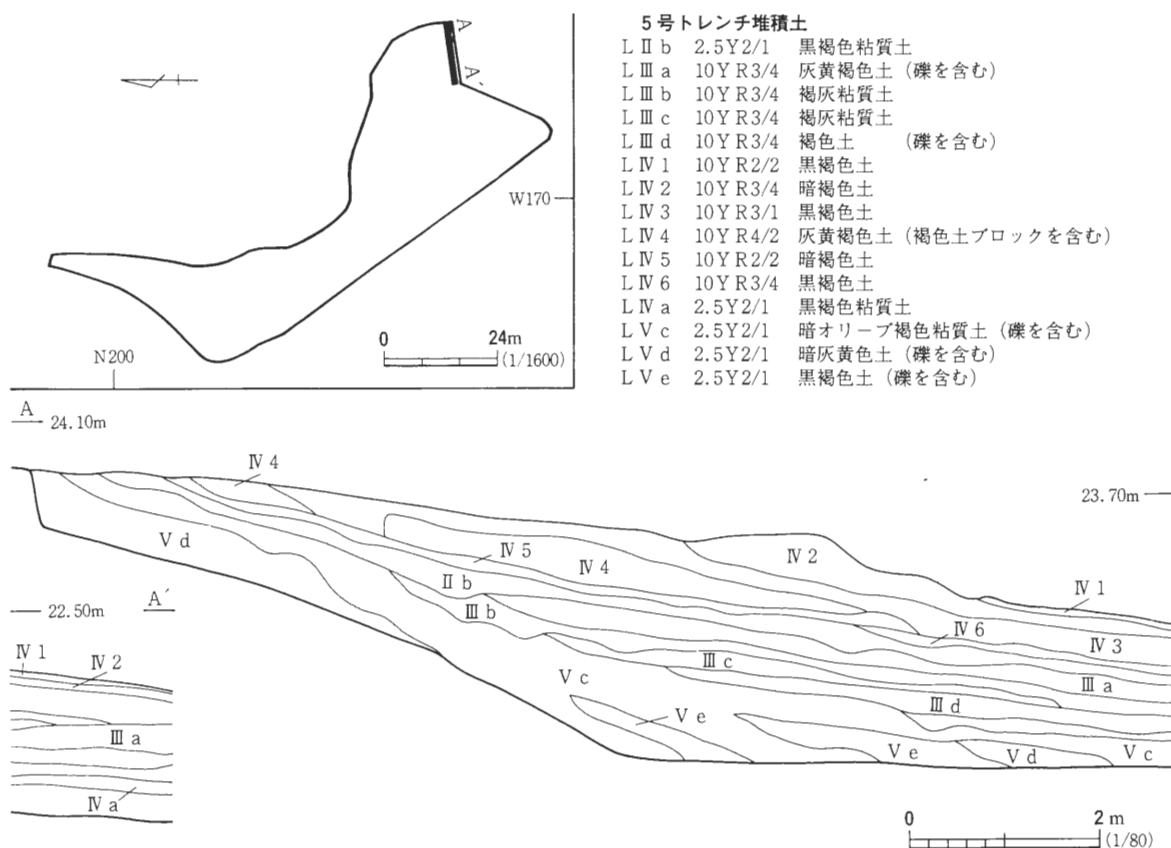


図82 5号トレンチ断面

北 側

排土搬出路北側ではトレンチ調査の結果、明確な水田面や水田土壌を確認できなかった。出土遺物もなく、遺構も特に確認できなかったので、面的な調査は行わず、トレンチ調査によって調査を終了した。深さ約1.5mまで掘り下げて土層観察を行ったところ14層確認でき、粘質土と砂質土が交互に堆積し、均質で堆積層の乱れも少ないことから、積極的に耕作されたとは考え難い。堆積層は南に開く沢の一部であり、沢部北奥からの流水などの影響が大きかったと判断され、耕地に適さなかったものと判断される。現況でも休耕地・荒地の部分が多かったことは、その傍証となろう。

南側と堆積土の対比は困難ではあるが、氾濫による砂礫層を鍵層に対比を行うと、L 4～6=L III, L 7=L IV, L 8=L V a, L 9=L VI a, L 10=L VI b, L 11=L VII a, L 12=L VIII a, L 13=L IXとなる。対応関係が確実ではないので、ここでは便宜的に、基本土層を示すLと算用数字の組み合わせで表記する。L 1～5から弥生土器が少量出土したが、混入したものと判断し、第10節その他の遺構と遺物で記述する。

なお、プラントオパール分析の結果(付章2参照)では、AV14グリッドL 3を稲作層と推定しており、西側の一部で水田が営まれていた可能性は否定できないが、調査所見からも広範囲な水田とは考えがたく、部分的なものと判断される。

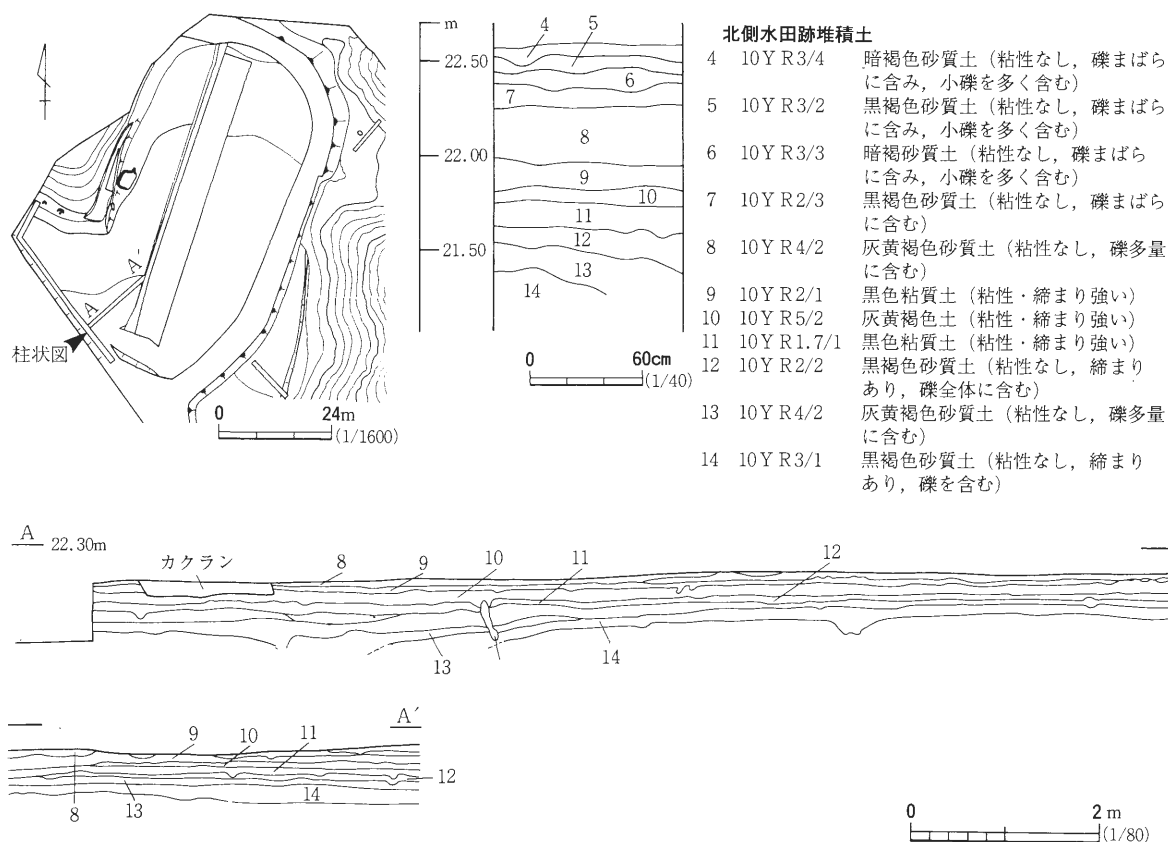


図83 北側水田跡断面

LⅢ b 面水田跡・5号溝跡 S D05

遺 構（図84～87、写真62～69）

重機で掘り下げた面で遺構検出作業を行ったところ、5号溝跡北側がLⅢ b 面であり、南側LⅣ b 面であることがわかった。重機でやや掘り過ぎたためか、水田跡の水路や畦畔・水田面などは検出できず、検出できた遺構は5号溝跡のみであった。そこで5号溝跡を調査し、LⅢ b の水田土壌の検出範囲を記録してLⅣ b 面まで掘り下げることとした。

LⅢ b は調査区全面にほぼ分布するが、5号溝跡西側では存在せず、5号溝跡北側に分布する。5号溝跡北側でも西側の丘陵裾部には存在せず、1号トレンチ北側でも明確ではなかった。5号溝跡東側ではやや掘り過ぎてLⅣ b 以下の層を検出した状態ではあるが、本来はLⅢ b が存在する。したがって、水田跡の区画は明瞭にできなかったが、水田土壌の広がりから、1号トレンチから5号溝跡の間と、5号溝跡東側に水田跡が存在したものと推定される。水田面は北西から南東へ緩く傾斜することから、北西から給水し、5号溝跡へ排水したものと判断される。

5号溝跡は調査区南西側の南端を走り、BE23～26、BF24～29、BG25～29、BH27～29、BI28～30、BJ29・30、BK29・30グリッドに位置する。検出面は表土除去後、最初の水田面を検出したLⅢ b 面である。当初、溝跡内堆積土①に相当する砂礫層について、調査区中央の南に伸びる丘陵を水源とする流路跡を想定し、調査を開始した。

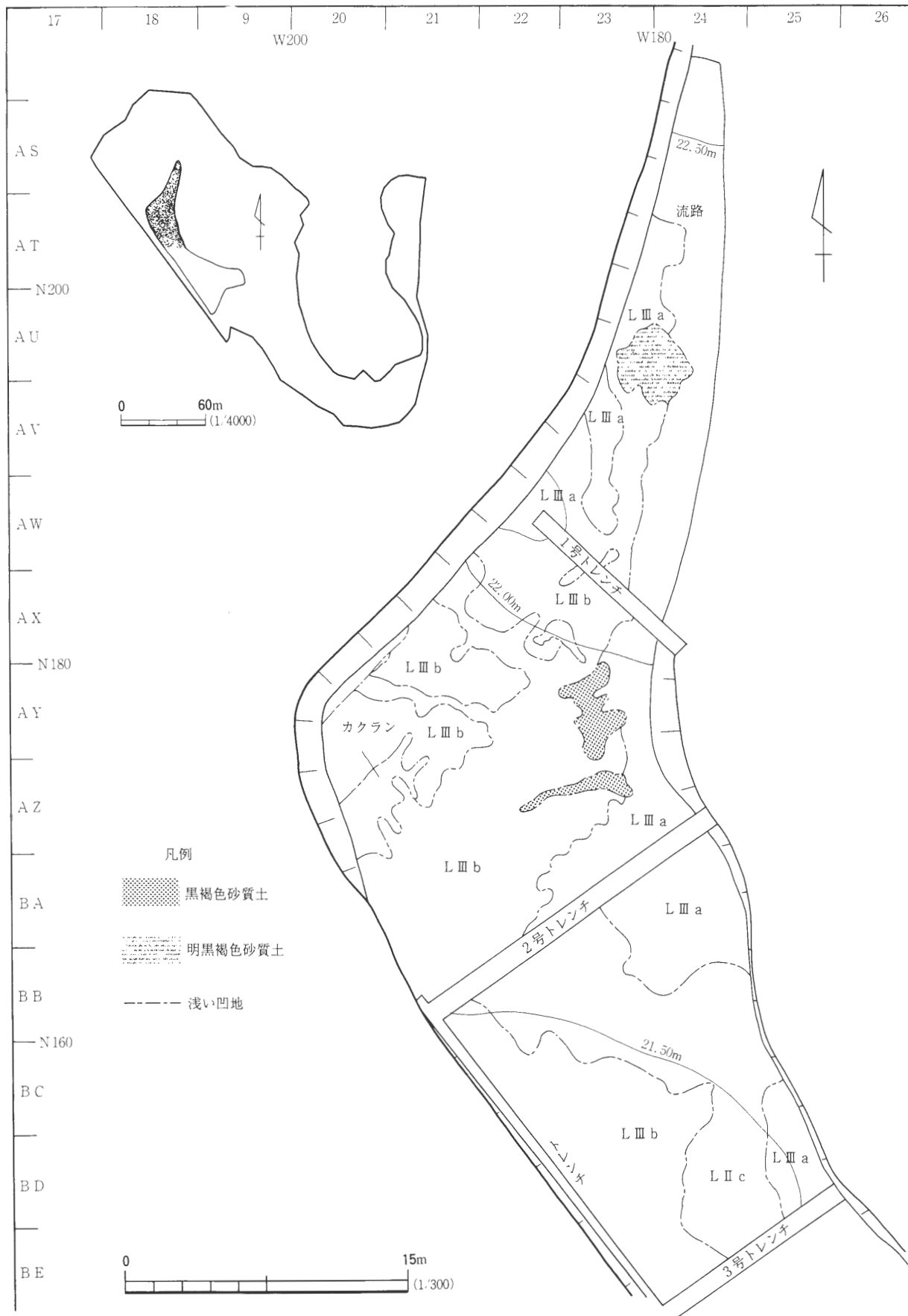


図84 L III水田跡 (1)

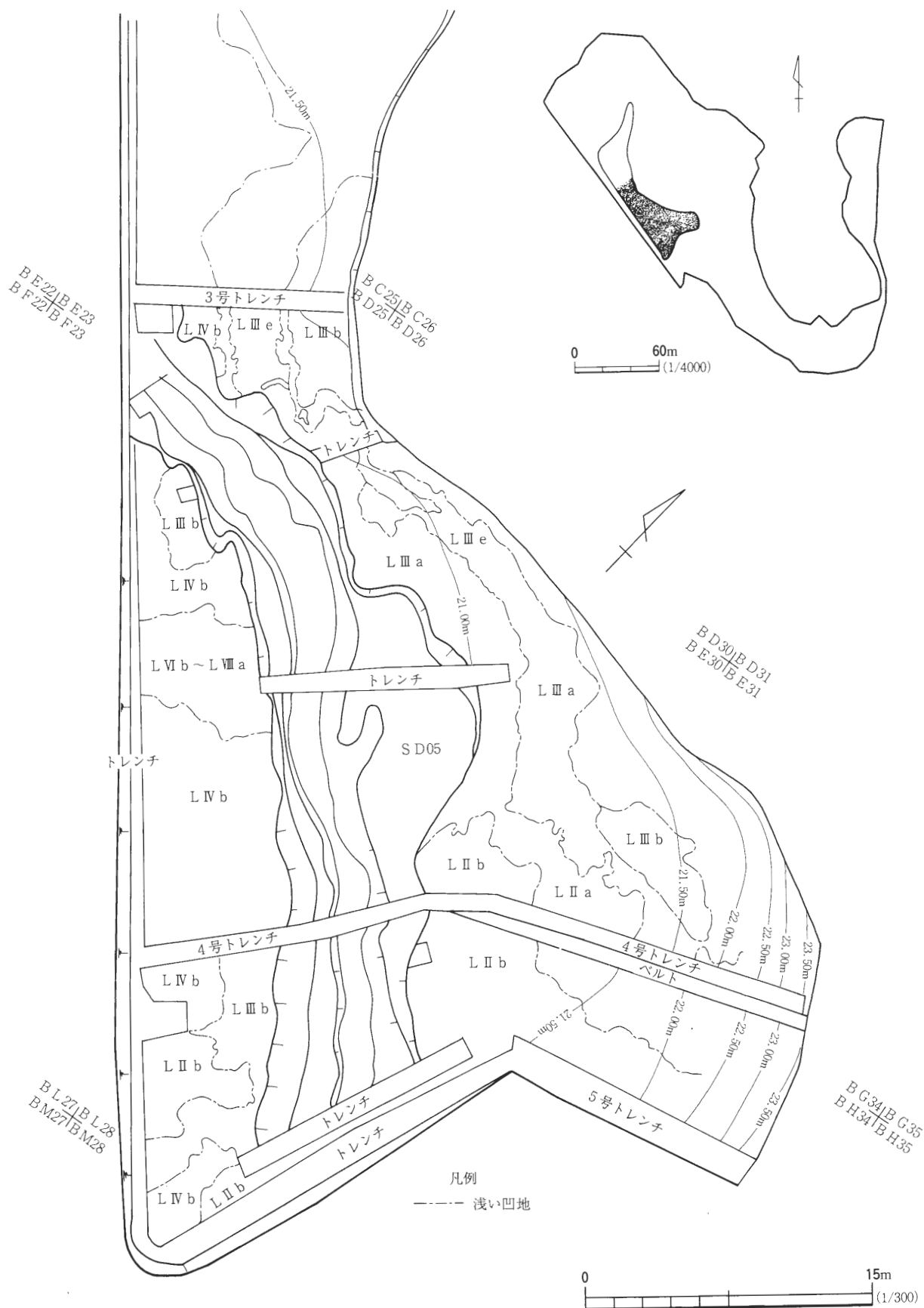


図85 L III水田跡 (2)

黒褐色粘質土で壁の立ち上がりを確認したが、底面とした礫層と基本土層との対応関係が把握できず、3本のサブトレンチを設定し、土層断面観察を行った。観察の結果、溝跡は複数時期の流路の重複を有する自然流路跡であることが判り、現在も調査区南西を流れる中島川の旧川道の可能性を考えた。溝跡内堆積土の堆積状態は、幾度も堆積と流失を繰り返した結果と判断され、時期毎の流路のプランは平面的に捉え難く、便宜的に一度に掘り込みを行い、土層断面で変遷過程を判断することにした。

堆積土は黒色・黒褐色粘質土層、砂層、砂礫層に大別でき、黒色・黒褐色粘質土層を鍵層として大きく6層に分層した(ℓ1～6)。各層は、さらに2～7層に細分できた(ℓ1a～gなど)。黒色・黒褐色粘質土層は、川岸である壁側からの流入・崩落土、または水流により運搬され、水勢の弱まる流路に停留した粘質土の堆積と推定し、比較的長い、水流の穏やかな時期ないしは水流のない時期に堆積したと考える。

砂層・砂礫層は水流により運搬されたもので、氾濫時の短い時間に堆積したと考える。層位は便宜的に、水流の浸食による流路の形成から、川岸における黒色・黒褐色粘質土の堆積を経て、氾濫時の砂礫層・砂層の堆積による流路の埋没までを一時期と考え、大きく一層として捉えた。堆積状態は必ずしも上位からの累積を示していないが、水流による浸食作用や、堆積土の流失を考え、自然堆積と判断した。

ℓ1は3層に細分され、ℓ1a・bは砂礫層、ℓ1cは黒褐色粘質土層である。ℓ1cは水流により下半が抉られ、ℓ1a・bがℓ1cに潜り込むように堆積している(土層断面A-A')。ℓ2は溝跡中央にのみ堆積し、2層に細分される。ℓ2aは砂礫層、ℓ2bは黒色粘質土層である。ℓ2bは北岸でℓ3の堆積した旧流路を遮断している(B-B'・C-C')。

ℓ3は溝跡中央部北岸の北東方向に大きく張り出した部分に認められ、7層に細分される。ℓ3a・fは砂層、ℓ3c・eは礫層、ℓ3b・d・gは黒色・黒褐色粘質土層である。ℓ3d・gは対応関係が把握できなかった。ℓ3はℓ3a・bとℓ3c～gで、前後の2時期に細分できる。流路はℓ3の堆積した時期には大きく北に湾曲していたと考えられ、ℓ3の堆積による埋没以降、ℓ2・1堆積期には再び北から南に移動したと考える(B-B'・C-C')。

ℓ4は6層に細分され、ℓ4a・eは砂層、ℓ4b～dは砂礫層、ℓ4fは黒褐色粘質砂である。ℓ4a・eは同質の堆積土である。ℓ4b・cの対応関係は把握できなかった。ℓ5は4層に細分され、ℓ5bは砂層、ℓ5a・cは砂礫層、ℓ5dは黒褐色粘質土層である。ℓ6は2層に細分され、ℓ6aは砂礫層、ℓ6bは粘質土層である。ℓ6bはLXI aに近似しているが砂質を帯びている。

溝跡は中央部で湾曲を示し、北東方向に膨らむ弓状を呈する。溝跡の規模は調査区内で全長約41m、最大幅11.0m、最小幅4.1m、検出面からの深さは最大で1.9mを測る。底面はLXI a 黄灰色粘質土で検出し、鍋底状の断面形を呈する。底面の西端と東端の比高差は、東端が低く24cmである。溝跡中央部の底面には深く抉れた部分が存在し、最深値を測り、西端との比高差は42cmである。溝跡の水流の方向は、西方より南東方向と推定される。

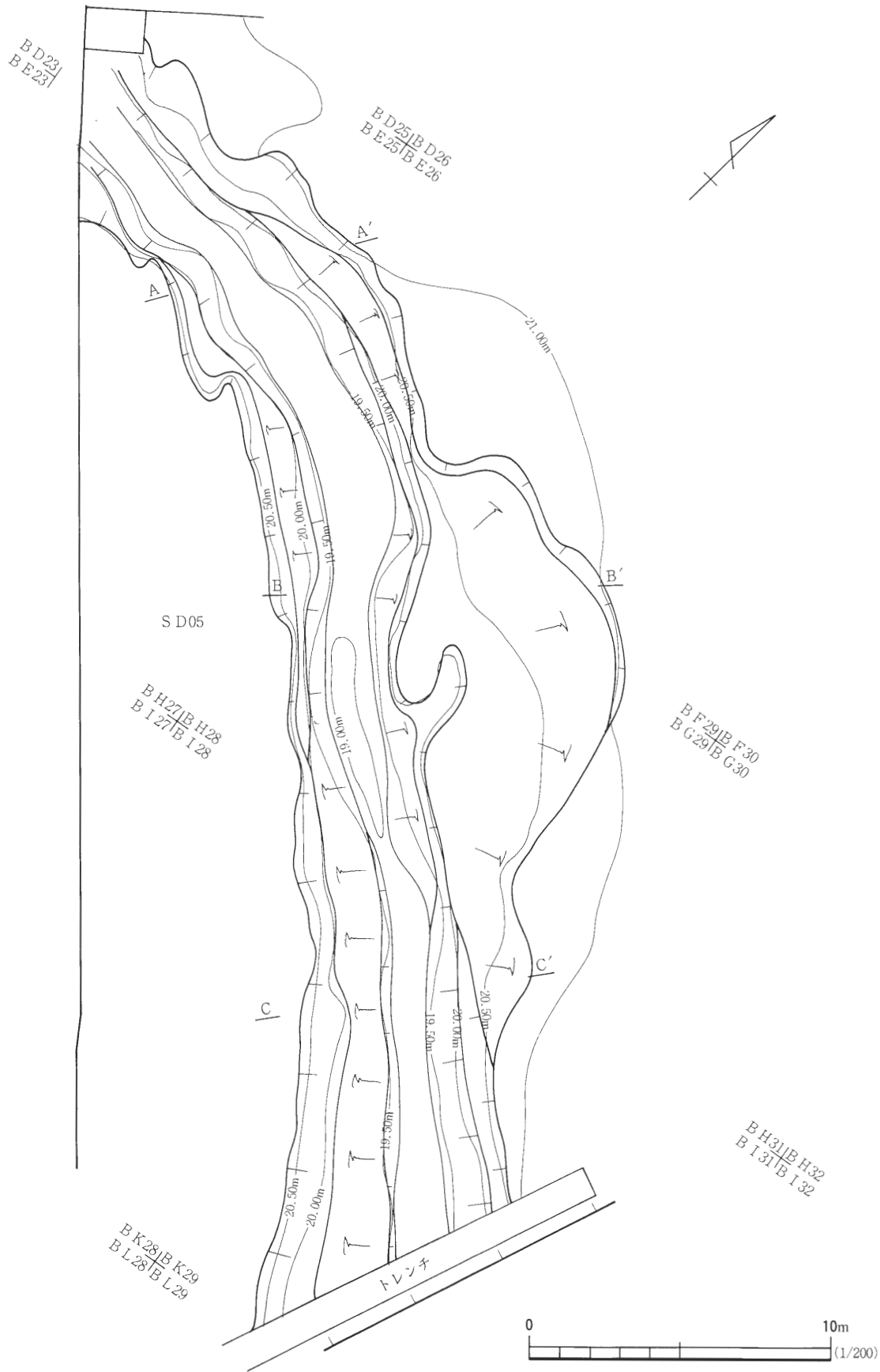


図86 5号溝跡

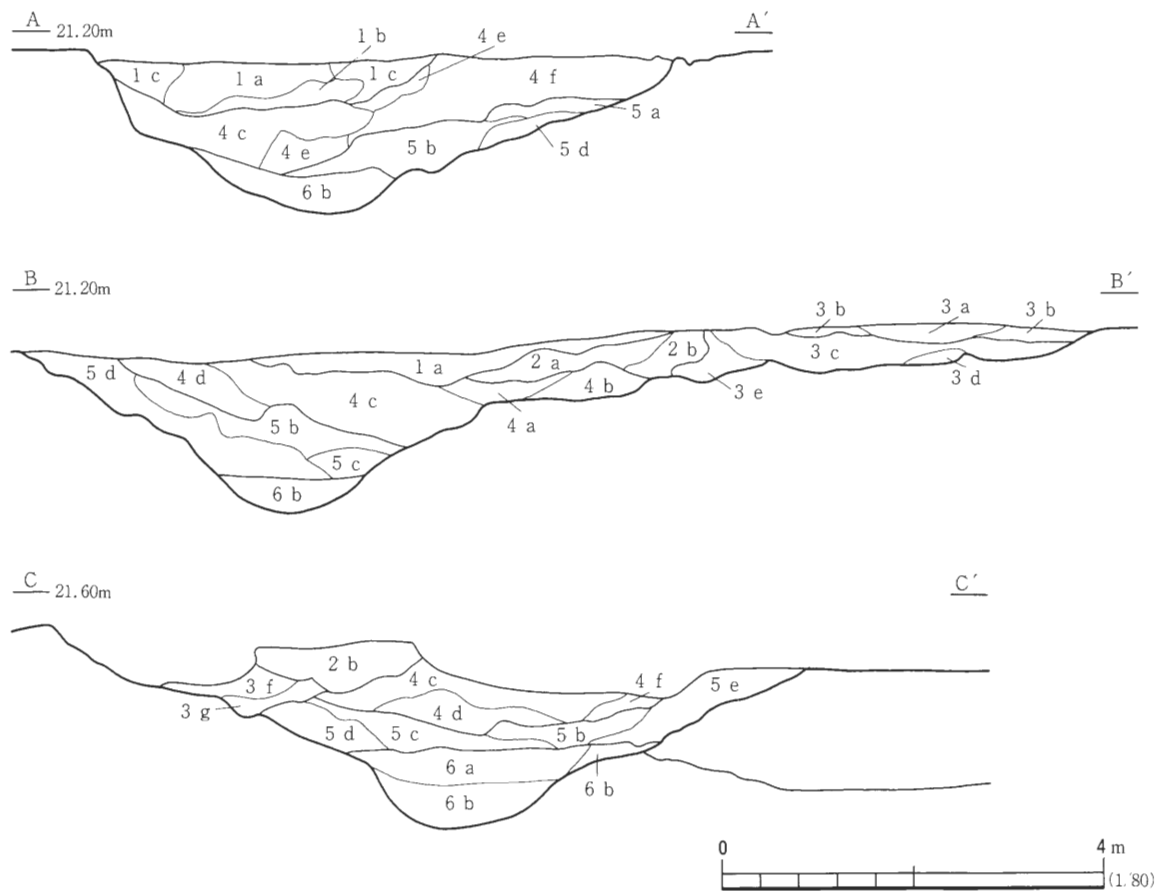
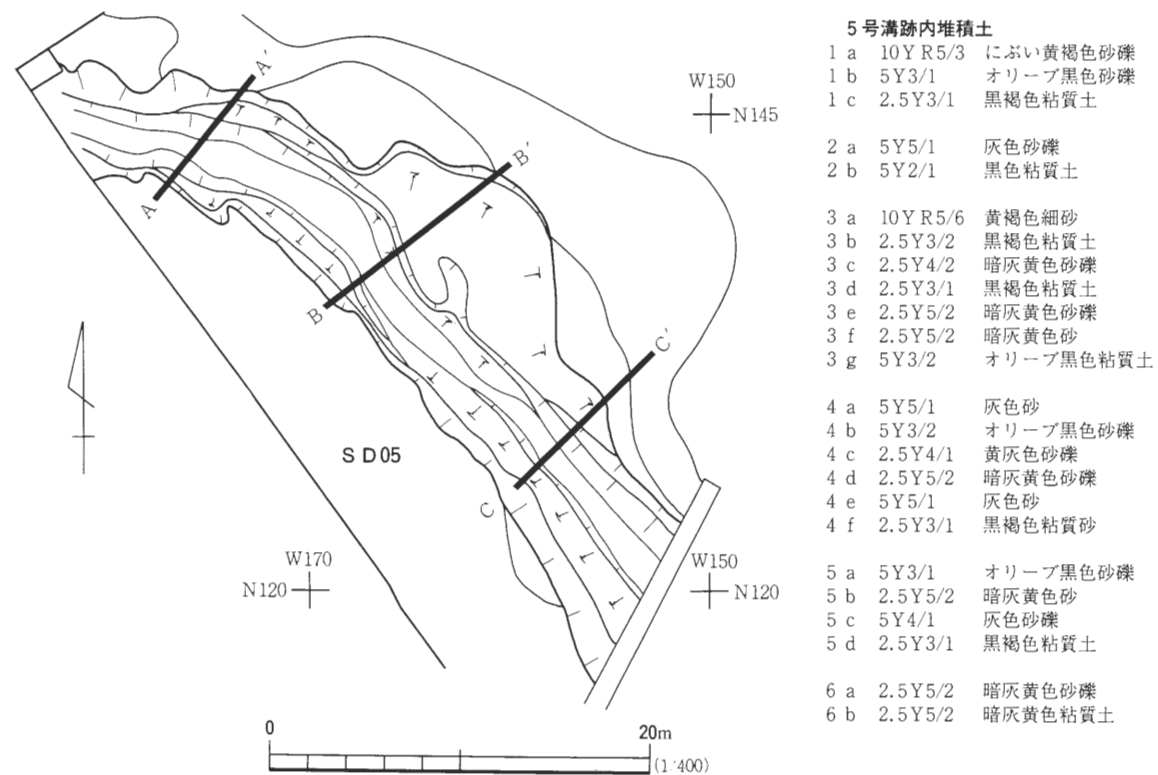


図87 5号溝跡断面

遺 物 (図88～92, 写真156～161)

LⅢbからの出土遺物は、土師器24片、弥生土器12片、須恵器4片、石器6点、木製品117点である。そのうち、図化できたのは、土師器1点、須恵器2点、木製品14点で図88に示した。

土師器 88-2は土師器甕の底部片で、底裏に木葉痕が残り、体部外面に縦方向のヘラケズリ調整が観察される。底径11.6cmを測る。胎土は砂粒を含みやや粗で、黒色・黄灰色を呈する。

須恵器 88-1はBJ27グリッドの調査区壁の崩壊土から出土した、須恵器長頸瓶の体部破片である。強く内傾する体部から直立する頸部に至る器形で、体部と頸部の境にリング状の凸帯が巡る。ロクロ調整で体部と頸部は、三段構成で継がれ、リング状凸帯で補強されている。胎土は微砂粒を含み精良で、焼成も良く暗青灰色を呈する。

88-3は須恵器甕の口縁部小片で、窯クズが付着し歪んでいることから、窯跡で焼き損じ廃棄されたものと判断した。推定口径26cmを測る。ロクロ調整で、胎土は精良で焼成も良く、灰色を呈する。窯跡での廃棄品であることから、大猿田遺跡との関連が指摘できる。

木製品 88-4～15はLⅢb面に打ち込まれていた杭で、地中にあった先端のみが遺存している。いずれも樹皮を剥いだ杭材の先端を、3～6面に大きく面取りして、杭先としたものである。図示したように加工痕は明瞭である。付章3に示したように、樹種はマツに統一されており、耐水性の強い樹種が選択されていることが伺える。88-16・17は板材で、丁寧な面取り加工がされており、比較的平滑である。用途は不明であるが、樹種は「モミ」である(付章3)。

5号溝跡から出土した遺物は、土師器8片、須恵器50片、弥生土器11片、石器6点、木製品178点である。そのうち図化できたのは、土師器1点、須恵器12点、石器2点、木製品26点で、図89～92に示した。出土層位はℓ4(89-3・4)、ℓ5(89-2)、下層(89-1)である。

5号溝跡からは木製品は流木として木枝等とともに、各層位の砂層・砂礫層から出土した。出土木は特に大きな木根等、明確な非製品以外を全て取り上げ、水洗いの後選別を行った。製品は全体の一割程度であり、杭が大半を占め、他は角材・板材、性格不明の製品である。木製品は溝跡内堆積土ℓ1出土遺物を上層、ℓ2以下を下層出土遺物として取り上げた。90-1～13、92-1～5は上層、91-1～7は下層出土である。

土師器 89-1は土師器杯で、平底の底部から、体部が僅かに内湾して立ち上がる器形である。外面は体部下端が縦方向にヘラケズリされ、内面はヘラミガキ・黒色処理されている。器壁は厚く、胎土は精良で微砂粒を含み、焼成は良く、にぶい黄褐色を呈する。

須恵器 89-2・3・5～7は須恵器杯の破片資料である。2は、体部が直線的に外傾して立ち上がる器形である。ロクロ整形で、底部切り離しはヘラ切りと推定される。胎土は精良だが、焼成はやや不良で、にぶい黄褐色を呈する。3は底部から体部下半にかけての破片資料で、体部がやや強く内湾して立ち上がる器形である。ロクロ整形で、体部下端より底部全面は回転ヘラケズリ再調整である。胎土は精良で、白色針状物質が混入する。焼成は良く、青灰色を呈する。5は須恵器杯の底部小片である。底部から内湾気味に外傾する器形で、内外面に墨痕が残る。ロクロ調整で、底

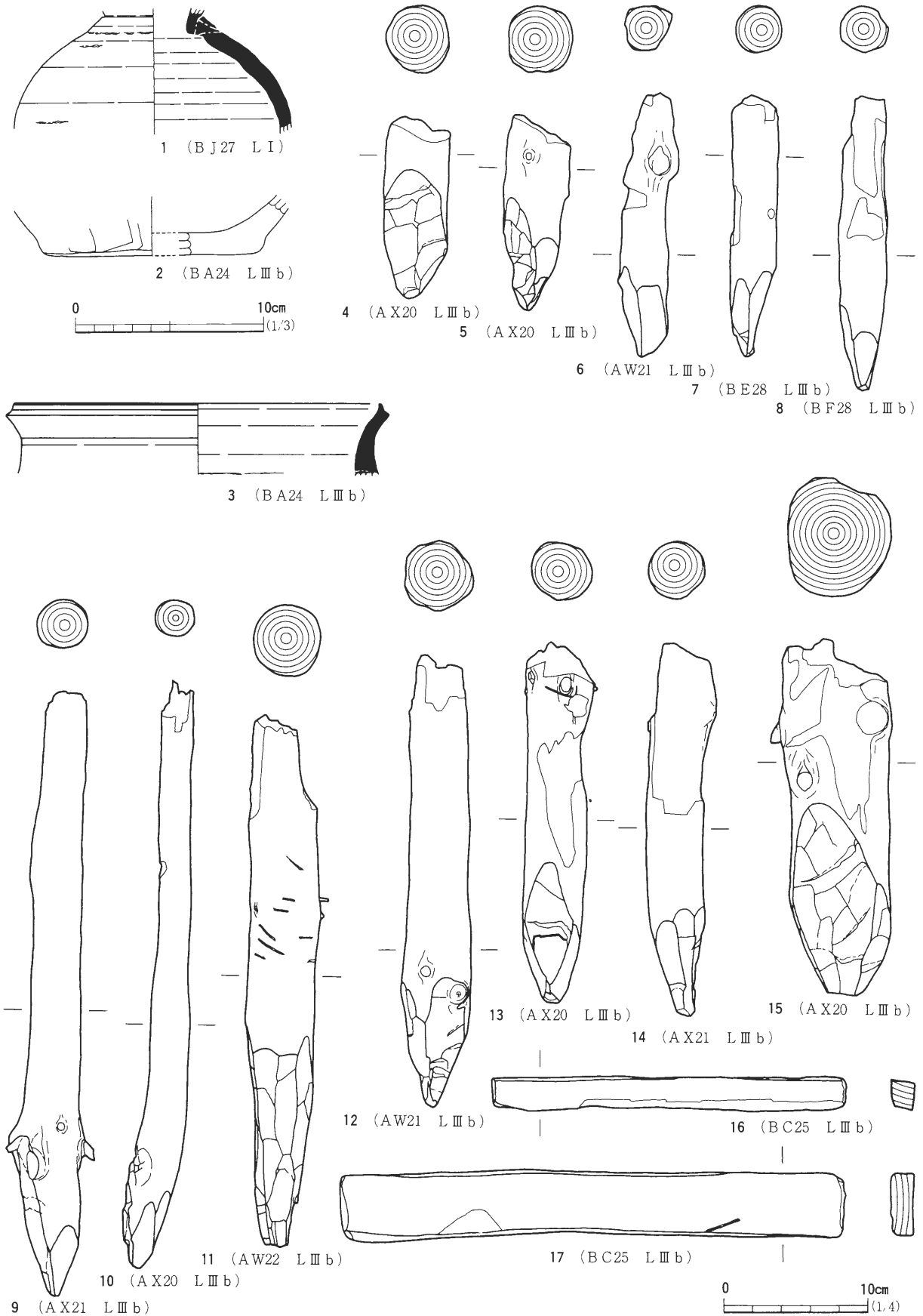


図88 L III b 出土土師器・須恵器・木製品

部ヘラ切り無調整である。胎土は精良だが、焼成は不良で、にぶい黄褐色を呈する。

6は須恵器杯で底部から口縁部までの約1/3が遺存している。底部から外反して立ち上がり、やや内湾気味の体部から、緩く外反する口縁部に至る器形である。ロクロ調整で、底部は回転ヘラケズリ再調整されている。底裏に墨痕がわずかに観察できるが、図示できなかった。推定口径14.0cm、推定底径6.6cm、器高4.1cmを測る。胎土は精良で焼成も良く、青灰色を呈する。7は須恵器杯の底部資料で、約1/4が遺存している。底部からやや内湾気味に外傾する器形で、ロクロ調整、底部回転ヘラ切り後、ナデ調整されている。底裏には墨書があるが、欠損しており、判読できない。推定底径7.8cmを測る。胎土は精良で焼成も良く、青灰色を呈する。

89-4は須恵器高台付杯で、外反して立ち上がる高台部から、やや強く内湾して立ち上がる体部を有する器形である。ロクロ整形で、胎土は精良で、白色針状物質が混入する。焼成は良く、青灰色を呈する。

89-8は須恵器甕の口縁部小片である。ロクロ調整で、外面に不揃いの波状文が観察される。胎土は精良だが、焼成はやや不良で、灰黄色を呈する。

89-9~13は須恵器甕の破片資料である。9は須恵器甕の体部片で、内面にはアテ具痕が残り、ヘラナデ調整されている。外面は平行タタキ後、ヘラナデ調整されている。部分的に焼成時の膨らみがあり、外面には焼台に転用されたと考えられ、融着痕が残る。焼き損じて廃棄された破片を、焼台に転用したものと判断される。胎土は精良で、焼成も良く、灰色を呈する。10は須恵器甕の体部小片で、外面は平行タタキで、内面はナデ調整されている。胎土は砂粒を含みやや粗で、焼成はやや不良である。断面青灰色、内外面褐色を呈する。11は須恵器甕の体部片で、体部外面は平行タタキ、内面には無文のアテ具痕が明瞭に残る。外面上部には自然釉がかかり、黄緑色・白色を呈する。胎土は、微砂粒を含むが精良で、焼成も堅緻である。青灰色を呈する。部分的に焼成時の膨らみがある。12は須恵器甕の体部小片で、外面に平行タタキ、内面に無文のアテ具痕が観察される。胎土は微砂粒を含み精良で、青灰色を呈する。13は須恵器甕の体部片と推定されるが、著しく窯変し、割れているので、断定はできない。器面には、部分的に平行タタキの痕跡が観察される。窯変が著しいことから、焼台と判断した。胎土は精良で焼成も堅緻で、青灰色を呈する。

石器 89-14はヒン岩製の挟り入り両刃石器で、完形である。両側縁中央に、対応するように2か所挟りが入り、表裏面中央には対応するように2か所窪みがある。刃部には敲打痕が観察されることから、叩く道具である可能性が高い。器面には敲打による調整、研磨による調整痕が部分的に観察される。いわき地方でのみ発見される特有の石器で、弥生時代中期後半に伴う可能性が高く、5号遺物包含層からの混入の可能性が高い。89-15はヒン岩製の三角形を呈する砥石で、加工痕はなく、上面に部分的に敲打痕と研磨痕が観察される。

木製品 90~92は木製品である。90-1は角材で、長方形の断面形を有する。90-2~13は材の一方端に先端加工が認められ、杭として機能したと考えられる。これらの内には、無加工の丸木を素材として利用しているもの(90-2~8・11~13)と、角材等、加工された材を素材としているも

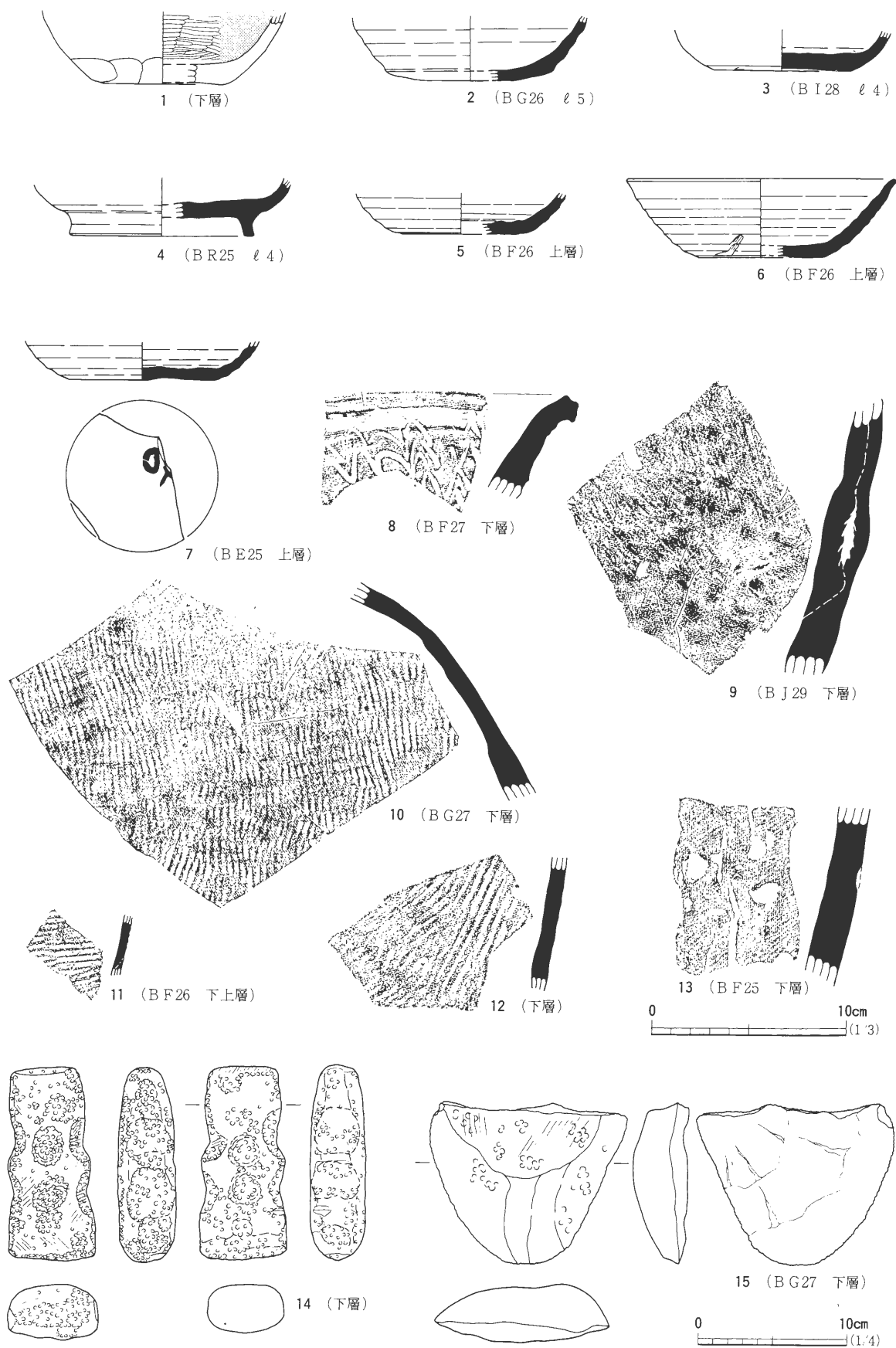


図89 5号溝跡出土土師器・須恵器・石器

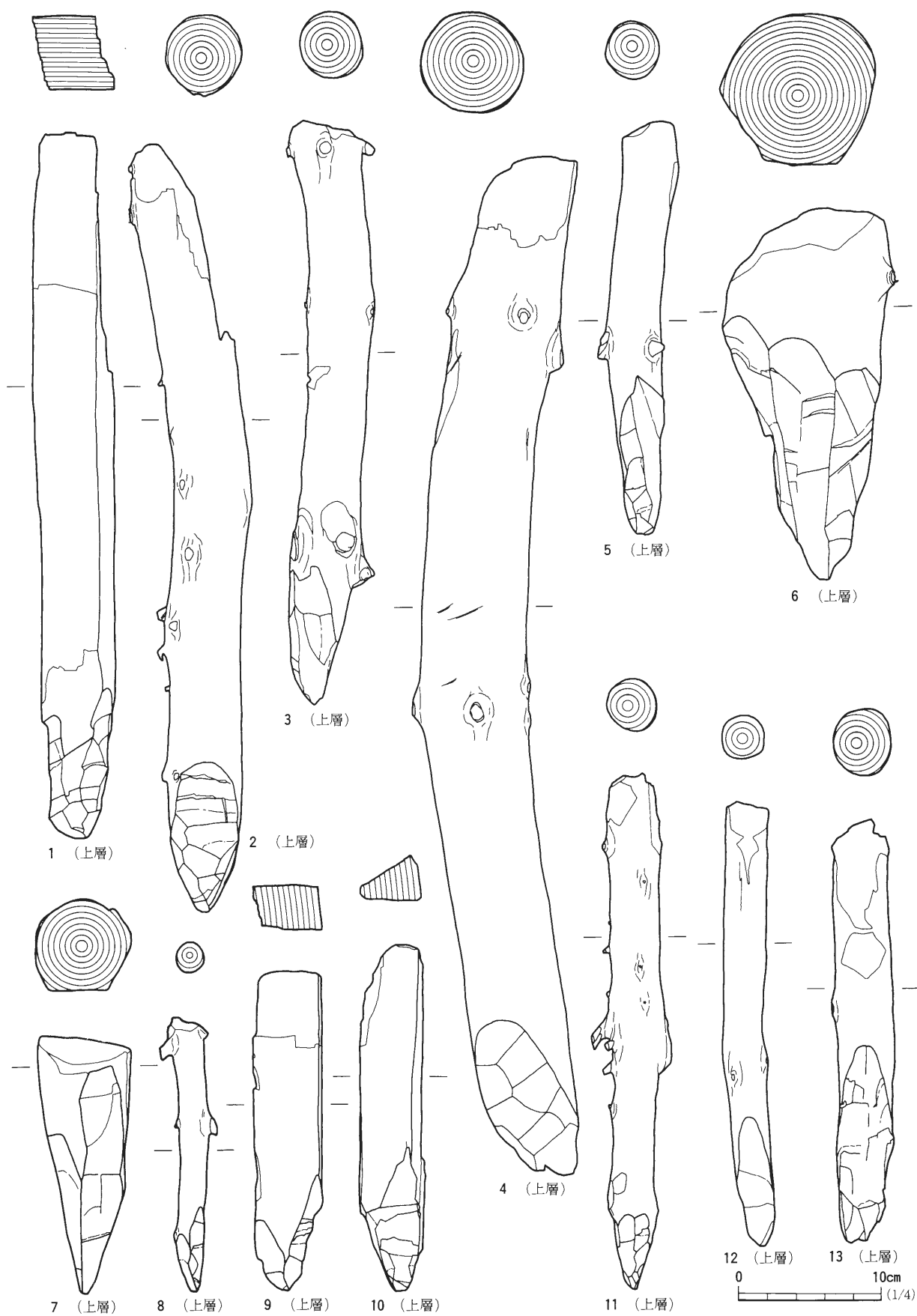


図90 5号溝跡出土木製品 (1)

の(90-9・10)がある。前者には、側枝を除去する程度の素材の加工が認められるもの(90-11～13)がある。

後者は建築材等の他の目的で加工され使用されたものか、建築材等に使用された後に先端加工され杭に転用されたものである可能性がある。先端加工には、一方向から斜位の削りによるもの(90-4・12・13)、一方向から斜めに切断した後、その両側を削り、三方向からの削りによるもの(90-2・3)、全周に渡り数方向から削られるもの(90-1・5～11)がある。

91-1～4・6・7は無加工の丸木を素材とし、一方端に先端加工が認められ、杭と判断される。91-1・2は一方向から、91-3・4・6・7は数方向からの先端加工が認められる。1は表面が炭化している。91-5は丸木を半裁した材であるが、性格は不明である。内面に、凹凸の著しい縦方向の加工痕を有し、外面には樹皮が残る。92-1～5は性格不明の木製品である。92-1の先端

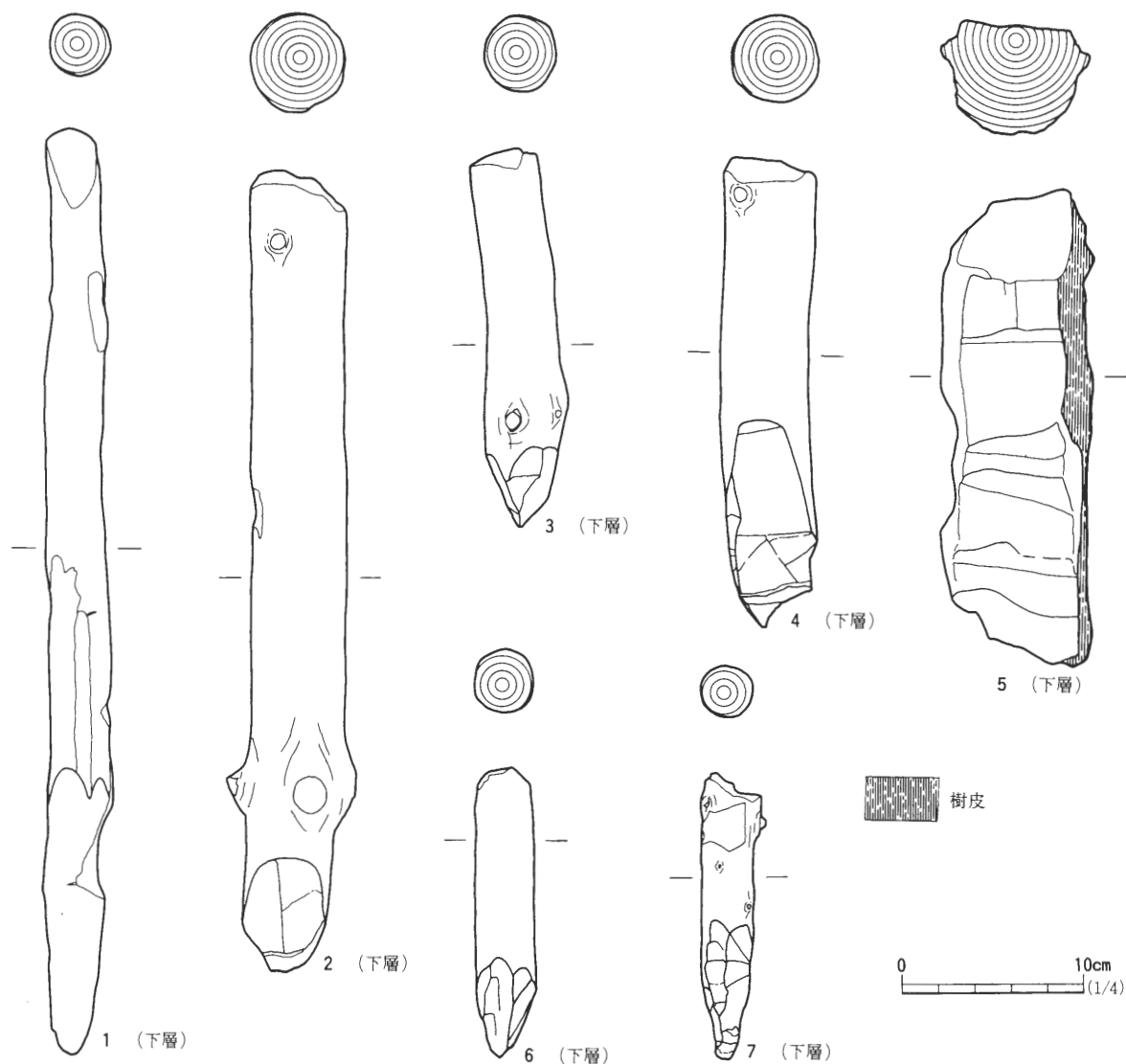


図91 5号溝跡出土木製品(2)

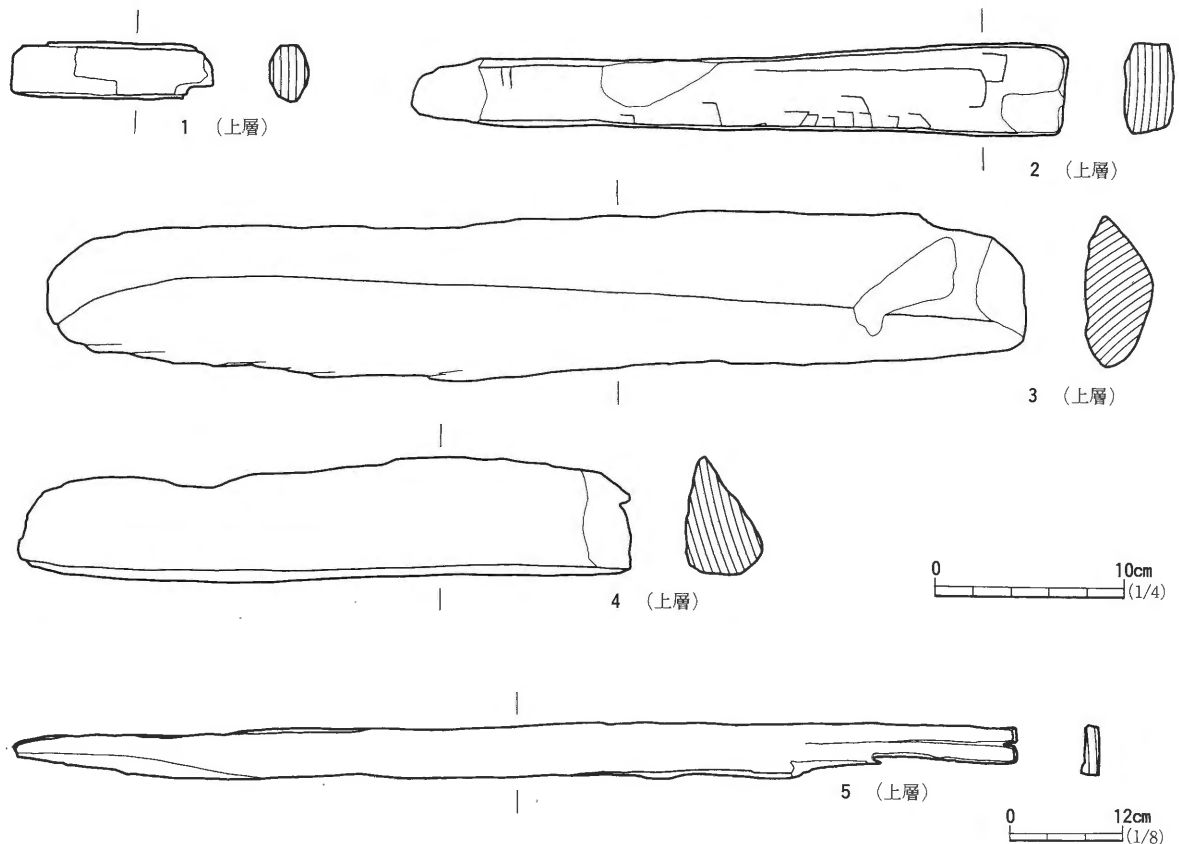


図92 5号溝跡出土木製品（3）

部は平坦でヘラ状を呈し、摩耗により丸みを帯びる。92-2・5は板材である。92-3は表面が炭化し、加工痕が不明瞭である。

まとめ

LⅢb面は重機での掘り下げの段階でやや掘り過ぎ、十分な検出作業ができなかったが、水田土壌の広がりをとらえることができた。水田跡は1号トレンチから5号溝跡の間と、5号溝跡東側で確認できた。水田跡の構造が確認できなかった一因には、より新しいLⅡb水田跡の耕作による影響を想定する必要がある。LⅢb水田跡の時期は出土遺物から8世紀中頃から9世紀前半に比定される。

5号溝跡は本調査区南西部の丘陵縁辺の低地を横断する自然流路跡であり、旧中島川の可能性が高い。本調査区南西部低地は旧中島川の氾濫原にあたり、本調査は動態を有する流路の変遷を部分的に捉えたにすぎない。溝跡として捉えた部分の所属時期は、出土遺物から8世紀後半から9世紀前半に比定される。黒色・黒褐色粘質土の堆積を流路からの流入によるものと推定するならば、溝跡内堆積土と基本土層との時期的対応関係を考えることができ、溝跡内堆積土⑥はLⅥb堆積期の流路に堆積したものであると推定され、本溝跡の所属時期は古墳時代前期まで遡る可能性がある。

(石井・飯村)

L IV b 水田跡

遺 構 (図93～95, 写真69・82～88)

L III b 水田跡を30cm前後掘り下げて、L IV b の黒褐色粘質土を検出した。水田跡は5号溝跡北側、西側、東側の一部で検出し、ほぼAU24, AV23・24, AW21・～24, AX20～23, AY20～23, AZ20～23, BA20～23, BB21～24, BC22～24, BD22～24, BE24～26, BF24・25・27・28, BG24～26・29, BH25～27・29・30, BI26～28・30・31, BJ27～29, BK27～29, BL28・29, BM29グリッドに位置し、北西から南東へ緩く傾斜している。

水田跡北西部のAW22, AX20～22, AY20～22グリッド付近には、杭の打ち込み痕跡や打ち込んだ杭の根元を、列状に多数検出した。杭は径10cm弱で、遺存しているものは根元が15～20cm打ち込まれた状態で、先端は削り出されている。杭列はかなり密集して列状に分布することから、畦畔の基礎の一部ないしは、水田跡の限界を示すものと判断した。

BB23・24, BC23・24, BD23・24, BE24・25グリッドで、畦畔で区画された水田面を検出し、3面の水田と足跡と考えられる痕跡や、稲株と可能性のある痕跡を多数検出した。水田面や足跡はL IV a と考えられる砂・礫層を除去して検出した。水田面は畦畔と最大比高差約10cmを測り、水田面は北西から南東へ傾斜している。北・西側から給水し、南東の5号溝跡へ排水する構造で、あったと推定される。水田面はほぼ水平ではあるが、既述のように凹凸が多く、凹面は不定形で径5～40cmを測り、底はL V に達している。足跡ないし稲株痕の可能性を考えている。

水田区画は不明確な部分もあるが、面積は15～40m²を測り、比較的小規模であることがわかる。水田区画が確認できた部分は、L V a 面の10号溝跡直上に位置し、自然流路の堆積土中に作られていたので、比較的遺存状態が良かったものと判断している。L III b で検出した5号溝跡は、既述のように長期間の存続年代が考えられることから、L IV b 水田跡の機能時期にも、5号溝跡は機能したものと判断している。

遺 物 (図96, 写真162・164・165)

L IV で出土した遺物は、弥生土器片46点、土師器片189点、須恵器片12点、石器6点である。

土師器 96-1は土師器杯で約1/2が遺存している。底部から内湾気味に立ち上がり、直立気味の口縁部に至る器形である。器面は荒れて不明瞭であるが、ロクロ調整で、底部は回転糸切りで無調整である。内面の調整は不明である。推定口径13.3cm, 底径6.6cm, 器高5.8cmを測る。胎土は良く、焼成も比較的良く、明橙色を呈する。2は土師器杯で約2/3遺存している。平底の底部から直線的に外傾して立ち上がり、外反気味の口縁部に至る器形である。器面が荒れているので底部切り離しは不明であるが、体部ロクロ調整で、底面は一定方向のヘラミガキ調整、体部は横方向のヘラミガキ調整で、黒色処理されている。口径13cm, 底径5.8cm, 器高4.1cmを測る。

96-3は土師器甕の底部片で、底裏に木葉痕が残り、体部外面に縦方向のヘラケズリ調整がなされている。底径9.4cmを測る。胎土は良く、焼成も良く、灰黄色を呈する。

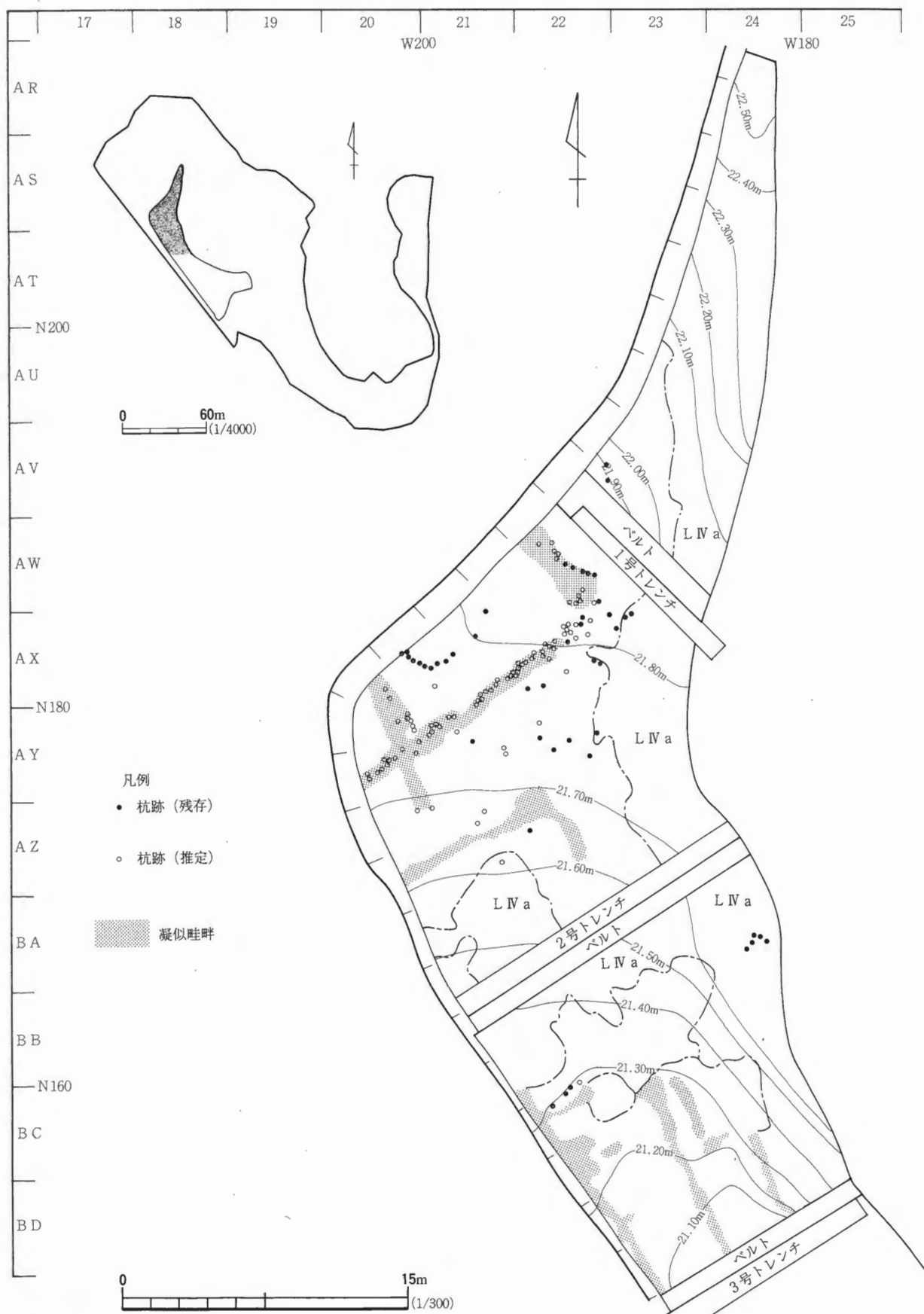


図93 L IV b水田跡 (1)

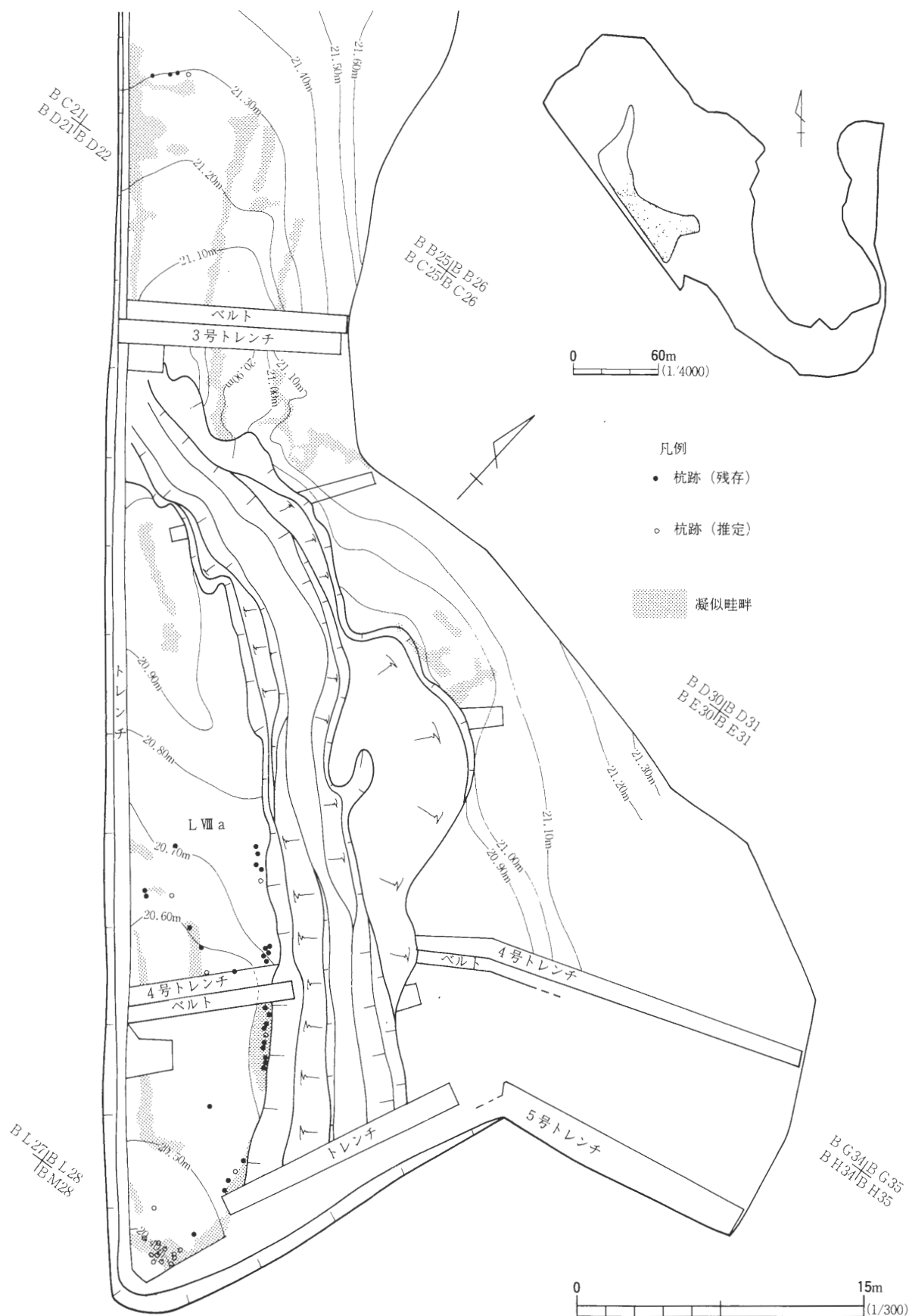


図94 L IV b 水田跡 (2)



図95 L IV b 水田跡 (3)

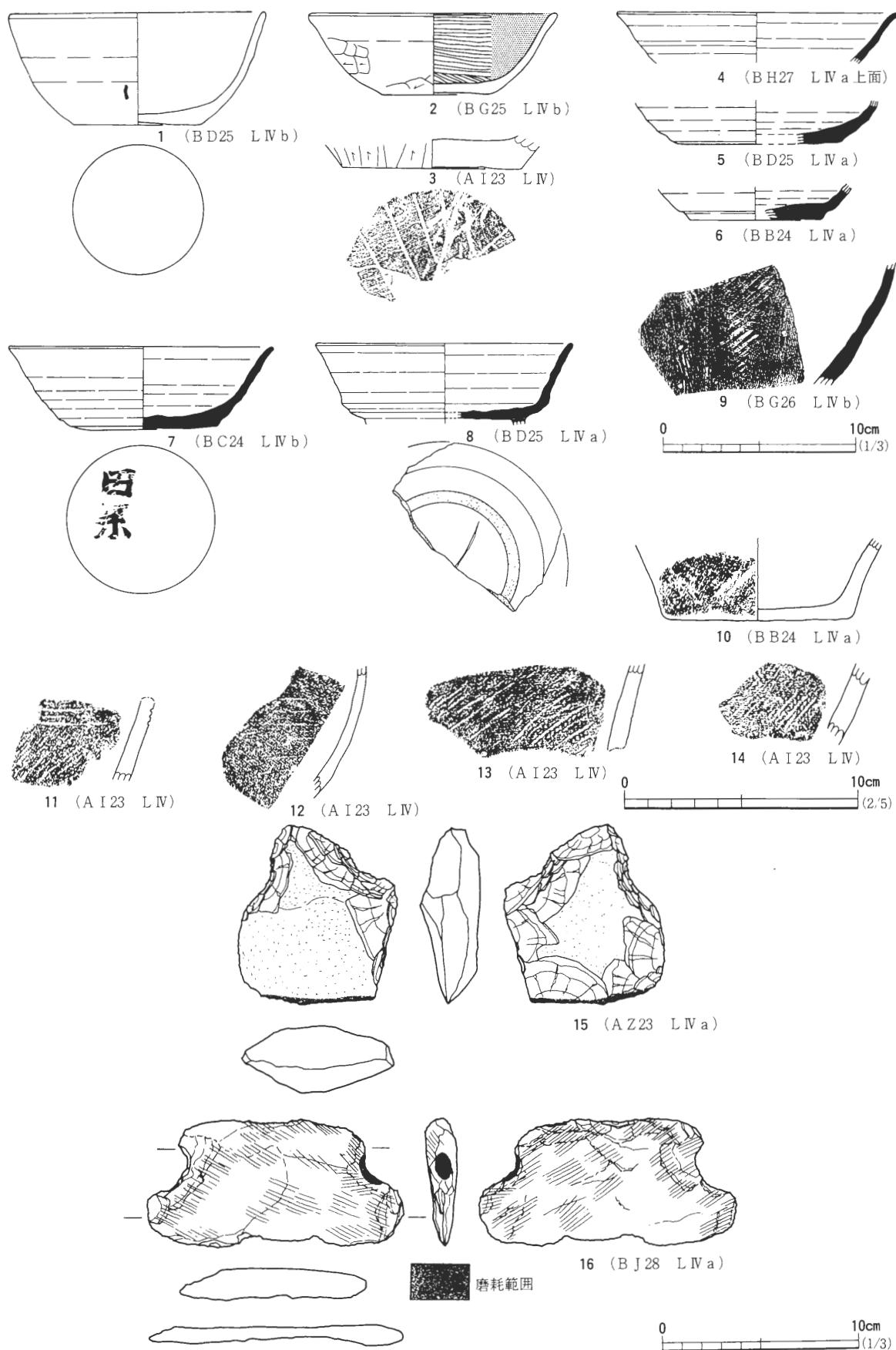


図96 L IV出土土師器・須恵器・弥生土器・石器

須恵器 96-4～6は須恵器杯の破片資料、7は約2/3を遺存する須恵器杯である。4は口縁部小片で、推定口径14.6cmを測る。胎土は精良で、焼成も良く、青灰色を呈する。5・6は底部小片で、5の底部切り離しはヘラ切り無調整、推定底径8.4cmを測る。胎土は精良で、焼成は良く、灰白色を呈する。6は回転糸切り無調整、推定底径7cmを測る。7は底部から直線的に外傾し、外反気味の口縁部に至る器形である。底部回転ヘラ切り後ナデ調整され、体部はロクロ調整である。推定口径13.8cm、底径7.4cm、器高4.3cmを測る。胎土は砂粒を含み精良で、焼成も良く、黄白色を呈する。底裏には、「田□」の墨書があり、隣接する大猿田遺跡2次調査出土資料の類品から、「田条」の可能性が高い。

8は須恵器高台付杯で約1/2が遺存している。平底の底部から内湾気味に立ち上がり、緩く外反しながら口縁部に至る器形である。底部は回転ヘラケズリ再調整後、高台が付けられ、体部はロクロ調整である。底部外面にヘラ書きがあるが、判読できない。推定口径13.4cm、遺存器高4.2cmを測る。胎土は精良で、焼成も良好で青灰色を呈する。

9は須恵器甕の体部片である。外面は平行タタキ整形後、縦位のヘラケズリ調整がされている。無文のアテ具痕を横方向に丁寧にヘラナデ調整している。胎土は微砂粒を含み精良で、焼成も良く灰白色を呈する。

弥生土器 96-10は弥生土器の壺形・甕形土器の底部片である。平底の底部から緩く外傾する体部に至る器形である。器面はほとんど剥落しているが、部分的に地文の縄文が観察される。底径8.2cmを測る。胎土は微砂粒を含みやや粗で、焼成も良く暗褐色を呈する。3号遺物包含層からの混入の可能性が高い。

96-11～14は弥生土器の壺形・甕形土器の体部小片である。12～14は地文の縄文のみであり、11は沈線で同心円文が描かれている。胎土は良く、焼成も比較的良く、灰黄色・黒色を呈する。3・6号遺物包含層からの混入の可能性が高い。

石器 96-15・16はLⅣaから出土した石器で、15は未製品であり、16は板状石器の一部である。15は部分的に自然面を残し、大きな剥離調整が加えられ不整形である。一部抉りが作り出されていることから、抉りのある石器の製作途中の欠損品と判断した。シルト岩製である。16は緑泥片岩製の板状石器で、刃部を欠損している。基部には両側縁に抉りがあり、剥離によって作り出されている。抉り部には使用のための摩耗痕が観察でき、両面には研磨調整痕が観察される。

ま と め

LⅣb水田跡は、5号溝跡周辺から北側に分布し、北端付近では畦畔の基礎と考えられる杭列を検出した。ほかに小規模な3区画の水田区画を検出し、足跡などを確認できた。5号溝跡は自然流路として、水田の用水の排水先として機能していた。出土遺物から8世紀後半から9世紀前半に比定される。

(飯 村)

L V a・10号溝跡 S D10

遺 構 (図97・98, 写真89～91)

L IV b 水田跡の下層の水田跡としてL V a 水田跡は、5号溝跡の北側のみで検出した。L V a は褐灰色砂質土で、L V a はAW21, AX20～22, AY20～22, AZ20～23, BA20～23, BB21～24, BC21～24, BD22～25, BE23～26グリッドに位置する。

L V 面の検出作業を通じて検出面上に部分的に砂の堆積が確認でき、それを除去すると、1～5mの不整形の浅い凹地が検出できた。それを水田面の遺存部分と考えた。水田の区画を明確にはできなかったが、遺存部から推定する限り、1辺4m前後の規模であったと考えられる。検出面は北西から南へ緩く傾斜し、北から給水して、10号溝跡へ排水する構造が推定できる。

10号溝跡はL V a 水田跡の南側、BC24, BD24, BE24・25グリッドに位置する。検出面はL V a 面で、南側は5号溝跡に壊され、北側は本来浅かったためか失われている。全体の形は不明である。土層断面観察では掘り込み面はL III b より上層とも考えられるが、平面的に検出できたのはL V a 面である。

堆積土は礫を多量に含む黒色土で、植物遺体も含まれる。遺存部で全長約14m、最大幅約3.3m、深さ最大0.3mを測る。底面は北から南東へ緩く傾斜している。本溝跡は本来、北側の沢から丘陵裾部を流れて形成された自然流路であり、5号溝跡に重なるように、南東へ流れたものと判断される。

遺 物 (図100, 写真163・166)

L V からの出土遺物は、弥生土器片5点、土師器片1点、須恵器片3点、石器1点で、L V から出土した。木製品は1点のみである。

須恵器 100-1は須恵器甕の底部小片で、平底の底部から直線的に外傾する体部に至る器形である。推定底径12.2cmを測る。体部内面はヘラナデ調整、外面は縦方向のヘラケズリ調整である。胎土は砂粒を含むが精良で、焼成も堅緻である。断面明橙色、器面は青灰色を呈する。

100-2は須恵器甕の体部小片で、外面に平行タタキ、内面にヘラナデ調整されている。体部外面には部分的に窯クズが付着している。胎土は微砂粒を含むが精良で、焼成も堅緻で灰色を呈する。

弥生土器 100-6は弥生土器の壺形土器の体部小片で、竹管状工具で二本一組の沈線で文様を描出している。第Ⅱ群土器に比定される。出土遺物は5号溝跡の周辺からの出土が多く、5号溝跡堆積土からの出土と判断でき、L V a 面に伴わない可能性が高い。弥生土器は5号遺物包含層からの混入と判断した。

10号溝跡から出土した遺物は、須恵器片10点、石器2点、木製品2点である。

須恵器 100-3は須恵器杯で、約1/4が遺存している。丸底気味の底部から内湾気味の体部に至る器形である。器面は荒れているが、底部ヘラ切り、体部ロクロ調整であり、再調整は不明である。推定底径7.4cmを測る。底裏に墨書があるが、判読できない。

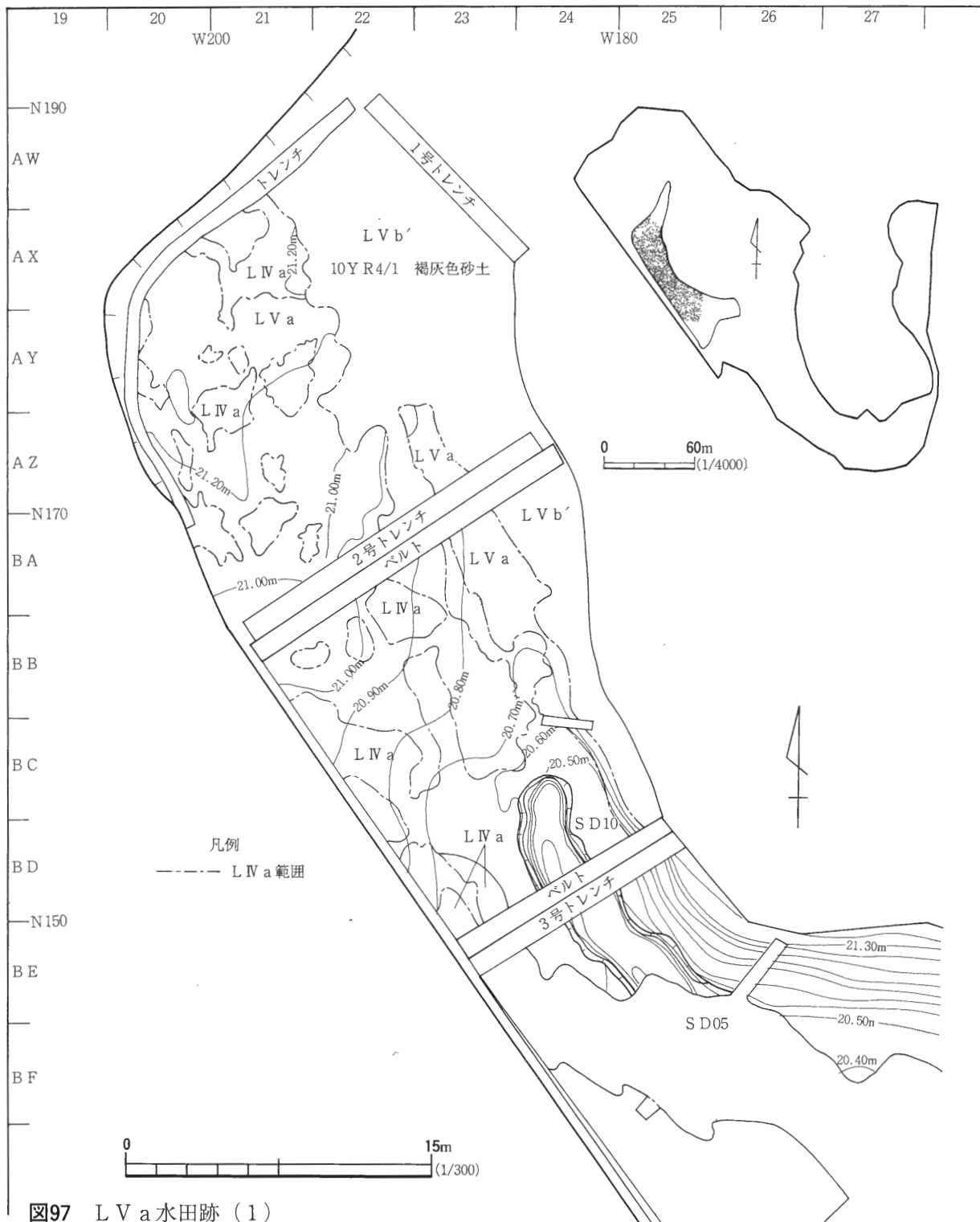


図97 LVa水田跡(1)

100-5は須恵器長頸瓶・壺の体部小片で、ロクロ調整である。体部外面に墨痕が観察されるが、字形をなしてはいないと判断された。胎土は精良で、焼成は堅緻で青灰色を呈する。

100-4は須恵器甕の体部片で、硯に転用されている。外面は平行タタキ、内面はナデ調整である。内面には磨った痕跡と墨痕が観察され、硯に転用されたものと判断される。破片化してから、転用したのと考えた。8世紀代と推定される。

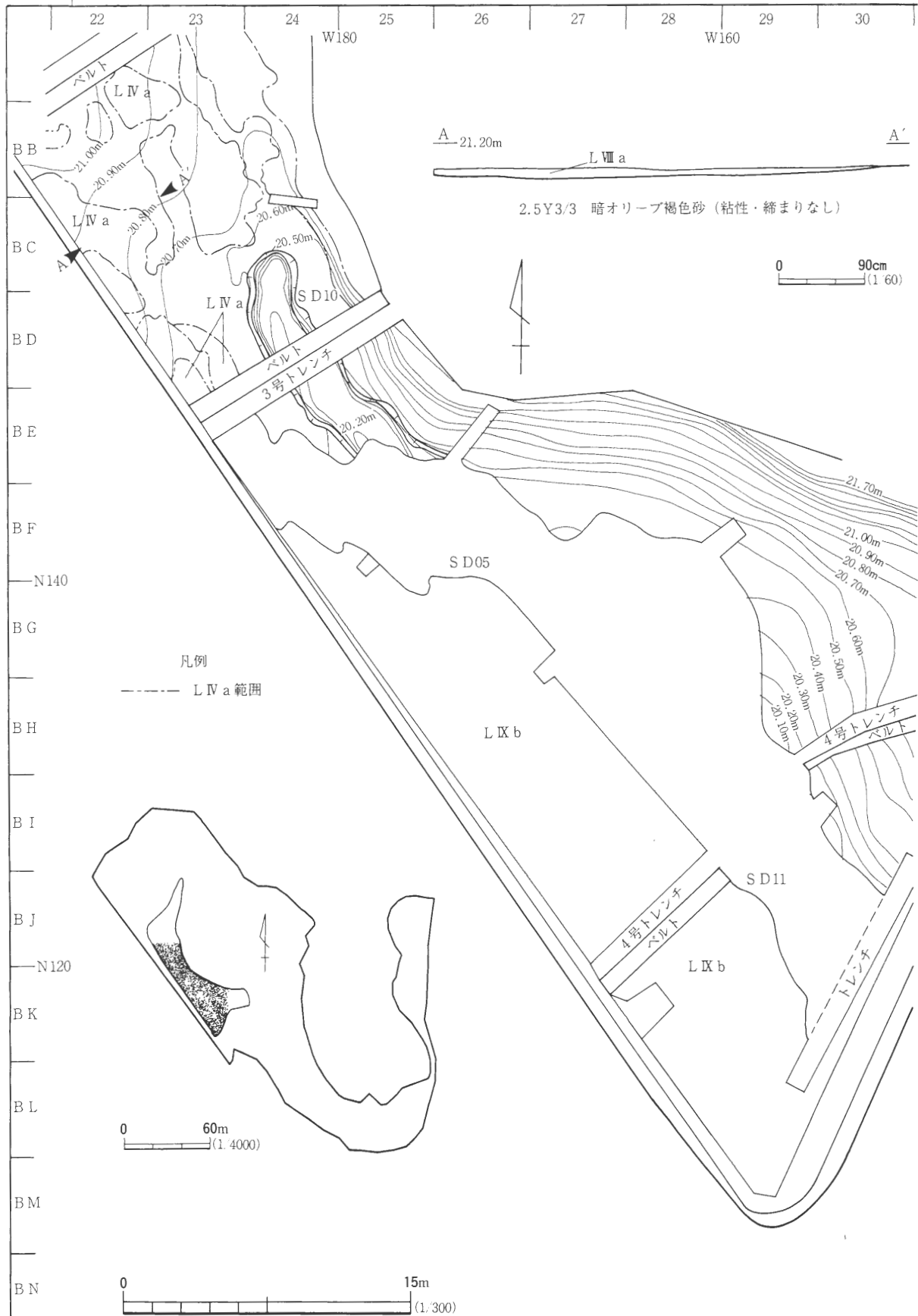


図98 LV a 水田跡 (2)

図99 L V b 水田跡

石器 100-7は破損した石皿を転用した砥石である。上面と側面片側に研いだ痕跡が観察できる。特に、上面には線状の研磨痕が数条観察でき、刃部を研いだ痕跡と判断できる。石質は細粒砂岩製である。8は太型蛤刃石斧の未成品であり、縁辺に1次調整と考えられる剥離調整と、敲打調整痕が観察される。製作途中で欠損したため、未成品のまま廃棄されたものと判断された。閃緑岩製である。

まとめ

L V aは1号トレンチ南から5号溝跡北側に分布し、明確な水田区画は確認できなかった。10号溝跡は水田面に伴う自然流路と考えられ、出土遺物から8世紀以前と考えられる。5号溝跡も10号溝跡に連続して機能した可能性は否定できない。L V aに伴う出土遺物はないが、L III bが8世紀以降、L VI bが4世紀前葉に比定できることから、L V b水田跡は奈良時代から古墳時代の可能性が高い。

(飯 村)

L V b 水田跡, 13・14号溝跡 S D 13・14

遺 構 (図99, 写真95～99)

L V bは黒褐色粘質土で、1号トレンチ南側から5号溝跡北側に分布し、AW21～23, AX20～23, AY20～23, AZ20～24, BA20～24, BB21～24, BC21～24, BD22～25, BE24・25グリッドに位置する。北東端に14号溝跡、南側に13号溝跡が位置する。水田面は北西から南東へ緩く傾斜し、検出面で部分的に砂の堆積を確認し、除去した形状を記録した。浅い流路ないしは水田跡の遺存部の可能性も考えられたが、旧状を推測できるほど遺存状態は良くなかった。

13号溝跡はBC22・23, BD22・23, BE23・24グリッドに位置し、L V b面で検出した。10号溝跡と5号溝跡に壊されており、全長約11mしか遺存していない。堆積土は炭化物を多量に含む黒褐色土で、植物遺体が多量に混入し、粘性が強い。東側で屈曲する「く」字形を呈する平面形で、最大幅2m、深さは最大約0.7mを測る。底面は水平で、壁は急角度で立ち上がり、平滑である。北から南へ流れる自然流路で、5号溝跡に重複するようにあったものと考えられる。

14号溝跡はAY20, AZ20・21, BA20・21, BB21グリッドに位置する。L V b面で検出した。大半が調査区外であり、全長約16mまで検出した。堆積土は砂を含む黒褐色粘質土である。最大幅2.5m、深さは最大30cmを測る。底面は緩く北から南へ傾斜し、断面形は「V」字形を呈する。底面・壁面は平滑である。大半が調査区外であるので、全形は不明であるが、北から南へ流れる自然流路と考えられる。出土遺物はない。

まとめ

L V b水田跡は水田土壌の範囲をとらえたのみで、水田区画を明確にはできなかった。また、13・14号溝跡は本水田跡に伴う自然流路であり、北から南へ流れる。流路の位置を考えると、営まれた水田跡は極めて狭かったものと判断される。出土遺物はないが、前述のL III bと後述のL VI bの年代から、奈良時代～古墳時代に比定できる。

(飯 村)

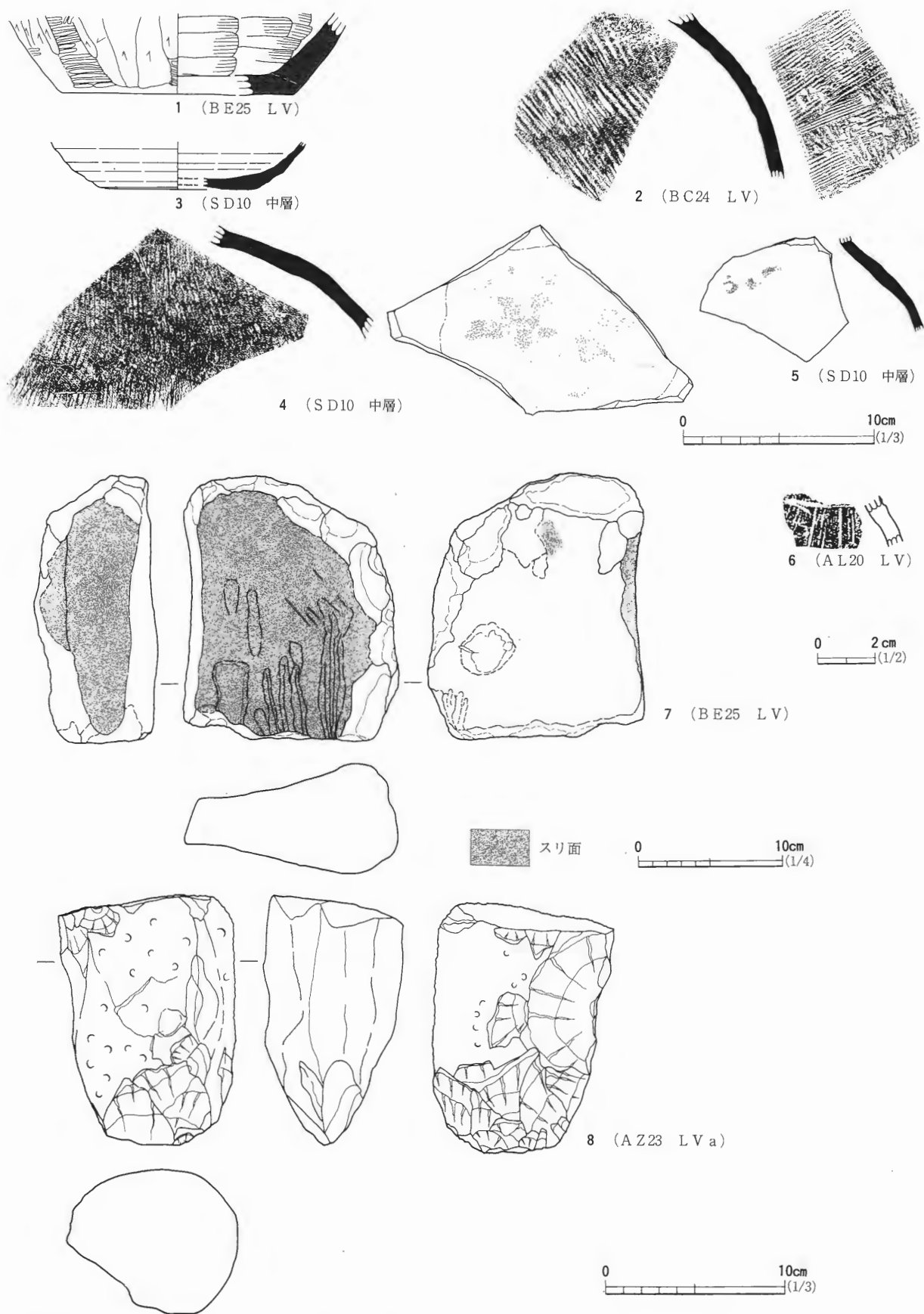


図100 LV出土須恵器・弥生土器・石器

L VI b 水田跡 15・16溝跡 S D15・16

遺 構 (図101・102, 写真100~103・106)

L V b 水田跡を20cm掘り下げて, L VI b 水田跡を検出した。水田土壌の分布は1号トレンチ南から5号溝跡北側の範囲で, AW21~23, AX20~23, AY20~23, AZ20~24, BA20~24, BB21~24, BC21~25, BD22~25, BE23~25グリッドに位置する。L VI bは小礫・砂・炭化物を含む黒色粘質土で, L VI b 水田跡は土層断面観察で水田跡の可能性を推定した。しかし, 検出作業を行った結果, 15・16号溝跡を検出したのみで, 水田跡の区画や水路などは検出できなかった。L V b面は北から南東へ緩く傾斜し, 浅い沢状の地形となっている。

15号溝跡はBC21~24, BD23・24グリッドに位置する。東側を10・13号溝跡で壊され, 西側の大半は調査区外となり, 全形は不明である。10・13・16号溝跡と重複し, 16号溝跡より新しく, 10・13号溝跡より古い。L VI b面で検出し, 堆積土は大きく3層に分層され, 上層が木炭粒を含む黒褐色土, 中層が砂を多量に含む灰色砂質土, 下層がオリーブ黒色粘質土で植物遺体を含む。中層は氾濫などによって一時期に埋まったものと考え, 自然堆積と判断した。西から南へ直角気味に屈曲する平面形で, 検出全長約16m, 最大幅約4m, 最大の深さ約70cmを測る。底面は中央で窪み, 壁は緩く立ち上がり, 断面形は浅い皿状を呈する。底面・壁面は平滑である。西から東へ流れる自然流路と考えられる。

16号溝跡はAY22・23, AZ23, BA23・24, BB23・24, BC23・24グリッドに位置する。15号溝跡と重複し, 本溝跡が古い。堆積土は木炭粒を少し含むオリーブ黒色粘質土で, 自然堆積と考えた。底面は平坦で北から南へ緩く傾斜し, 壁は緩く立ち上がり, 断面形は浅い皿形を呈する。北から南へ蛇行しながら伸び, 検出した全長約20m, 最大幅約3m, 最大深さ約20cmを測る。北から南へ流れる自然流路と考えた。

遺 物 (図103~104, 写真167~174)

遺物は主に5号溝跡南側から出土している。出土遺物は土師器片225点, 弥生土器片42点, 須恵器片9点, 木製品117点であり, そのうち図化できたのが, 図103・104である。

土師器 103-1は土師器の大型の壺で, 図化できたのは口頸部のみであるが, 図化できなかった体部片を含めると約1/4遺存している。強く内傾する体部から, 直立する頸部, 強く外反する口縁部に至る器形である。器面が荒れているので調整痕は不明であるが, 口頸部ヨコナデ調整, 体部はヘラミガキ・ヘラナデ調整で, 外面体部には部分的に丁寧な縦位のヘラミガキ調整が観察される。粘土紐積み上げ痕も観察できる。最大胴径80cm前後の大型の壺と推定される。胎土は砂粒を含むが良く, 焼成も良好で, 灰黄色を呈する。

103-2は土師器壺で約1/3が遺存している。内湾する体部から直立する口縁部に至る器形で, 口縁部ヨコナデ, 口縁部から体部に縦位の丁寧なヘラミガキが施されている。内面はヘラナデ・ユビオサエ調整である。口径6cm, 遺存器高9.4cmを測る。胎土は微砂粒を含み精良で, 焼成は良く,

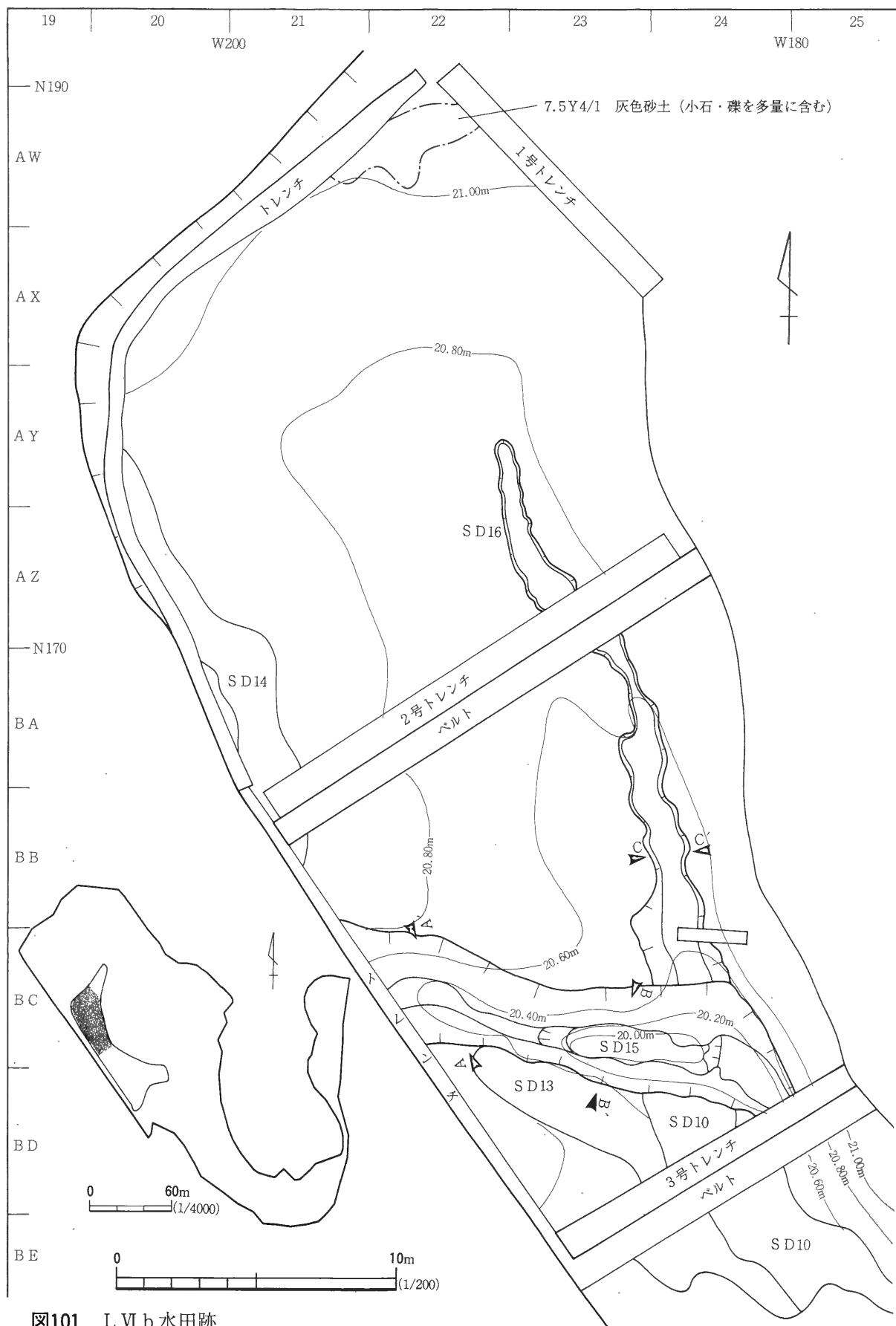


図101 LVI b 水田跡

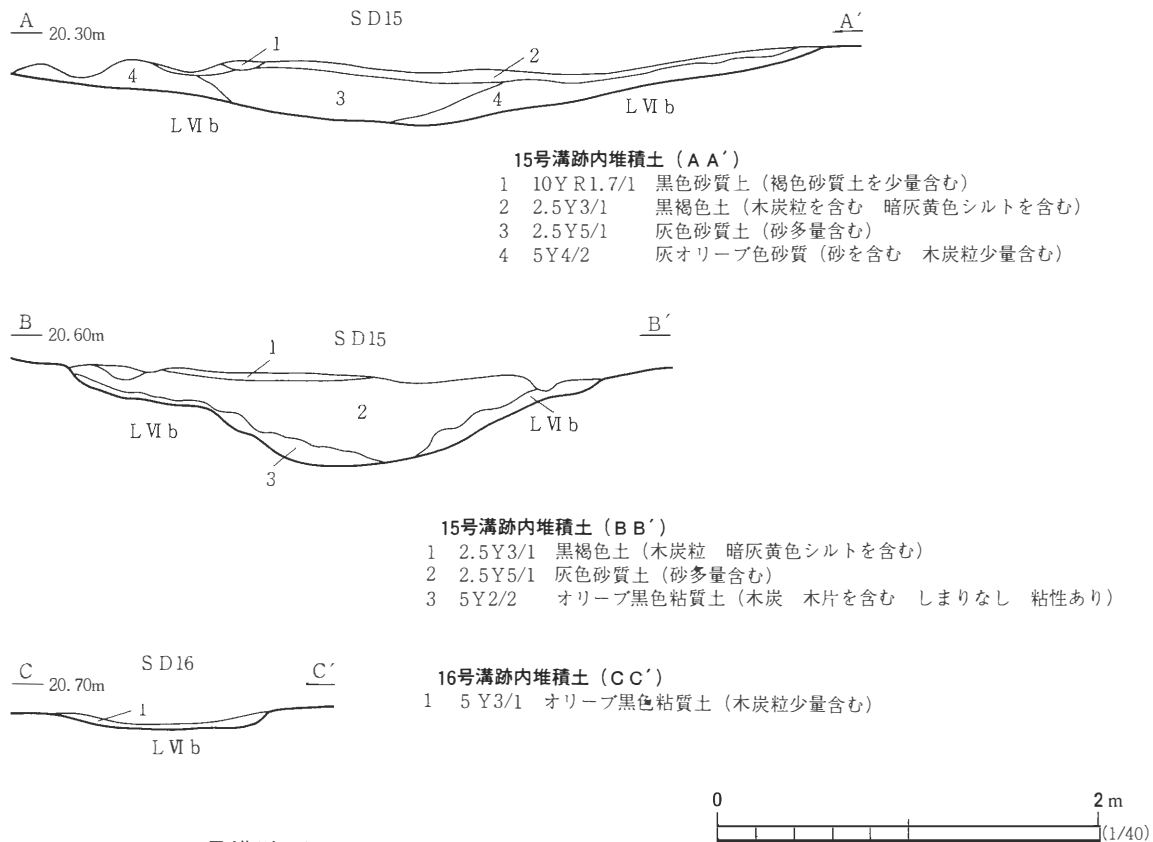


図102 15・16号溝跡断面

黒色・灰黄褐色を呈する。

103-3は土師器の小型の壺で、口縁部を欠くが、底部から体部約1/3が遺存している。球形に近い器形で、小さな平底の底部を持つ。器面が荒れているが、体部外面に部分的にヘラミガキ調整が観察され、内面はヘラナデ・ユビオサエ調整が、部分的に観察できる。器壁が薄く、丁寧に作られている印象である。底径3cm、遺存器高7.6cmを測る。胎土は精良で、焼成も良く、暗灰黄色を呈する。

103-4・5は土師器壺の底部片である。4は小さな平底の底部から、直線的に外傾する器形である。内面は丁寧なハケメ調整、外面はヘラケズリ調整である。推定底径4.2cmを測る。胎土は良好で、焼成も良く、明橙色を呈する。5は内面を丁寧なヘラナデ・ヘラミガキ(?)調整、外面をハケメ・ヘラケズリ調整で、丁寧な作りである。推定底径5.6cmを測る。胎土は良好で、焼成も良く、灰褐色を呈する。

103-6は土師器甕の体部上半から口縁部約1/5が遺存している。緩く丸みを持って内湾する体部から、「く」字形に緩く外反して口縁部に至る器形である。器面が荒れているので調整は不明瞭ではあるが、口縁部はヨコナデ調整で、部分的に斜方向のハケメ調整が観察される。体部外面は縦方向の丁寧なハケメ調整が部分的に観察され、内面は横方向のヘラナデ調整が施されている。胎土は砂粒を含むが良く、焼成も良く、灰黄色を呈する。

103-7は土師器甕の口縁部小片である。内傾する体部から、「く」字形に外反して口縁部に至る

器形で、口縁部ヨコナデ、体部はヘラケズリ調整である。口径22cmを測る。胎土は砂粒を含むが良く、焼成も良く、にぶい灰褐色を呈する。8は土師器甕の口縁部であり、約1/3が遺存している。直線的に内傾する体部から、「く」字形に緩く外反して口縁部に至る器形である。器面が荒れているので観察し難いが、口縁部ヨコナデ調整、体部はヘラケズリ調整が部分的に観察できる。推定口径18.8cmを測る。9は土師器甕の口縁部小片で、体部から「く」字形に水平に強く外反する口縁部に至り、口縁端部が直立する器形である。ロクロ調整である。推定口径19cmを測る。胎土は砂粒を含むが良く、焼成も良く、灰褐色を呈する。5号溝跡堆積土からの出土遺物と誤認した可能性が高い。

103-10は土師器甕の体部片で、外面は丁寧なハケメ調整、内面はナデ調整である。胎土は砂粒を含むが良好で、焼成も良く、灰褐色を呈する。

11は土師器高杯の口縁部小片で、直線的に外傾し、やや内湾気味の口縁部に至る器形である。口縁部は横位、体部は縦位の、内外面は丁寧なヘラミガキ調整である。外面は赤褐色に赤彩され、内面は摩滅しているが、部分的に赤彩が確認できることから、全面赤彩されていた可能性が高い。胎土は良く、焼成も良好で黄灰色を呈する。12は高杯の脚部で、裾部と身部を欠く。直線的に広がる脚部である。外面は縦位の丁寧なヘラミガキ調整で、内面は横方向にヘラケズリ調整されている。外面は漆黒色を呈する部分と、赤褐色を呈する部分があり、前者が黒色漆、後者が赤彩と考えられ、黒色漆の上に赤彩で文様が描かれていた可能性も否定できない。身部底面が一部遺存し、赤彩されている。推定口径20cmを測る。胎土は良く、焼成も良好で、黄灰色・灰褐色を呈する。

103-13は土師器器台の口縁部小片で、内湾する体部から、強く屈曲し外面に稜を形成し、緩く外反する口縁部に至る器形である。内外面は横方向に丁寧にヘラミガキが施され、赤彩されている。推定口径8.6cmを測る。胎土は良く、焼成は良好で、灰黄色を呈する。14は土師器の器台脚部で、裾部は欠損しているが、約1/3遺存している。脚部中央には穿孔があり、貫通している。器面は荒れていて、調整は不明である。胎土は良く、焼成はやや軟で、明黄橙色を呈する。

須恵器 104-1～3は須恵器甕の体部小片である。外面は平行タタキ、内面には無文のアテ具痕が残る、焼成時に膨らんでいるものもある。胎土は精良で、焼成も良く、青灰色を呈する。5号溝跡堆積土からの出土遺物と誤認した可能性が高い。

木製品 104-4～11は木製品で、杭と考えられる。打ち込まれていた杭の先端のみが遺存していた。樹皮を剥いだ丸材を1～6面に大きく面取りして、杭先としている。工具痕は明瞭である。付章3の樹種同定の結果によると、「マツ」を主とした樹種を選択していることがわかる。

ま と め

水田土壌と判断して調査したが、その範囲を確認したのみで、区画や水路については検出できなかった。考古学的には水田跡と断定するには至らなかった。15・16号溝跡は自然流路で、15号溝跡は西から東へ、さらに南へ流れ、5号溝跡などと同じ流れを辿る。16号溝跡は北から南へ流れる自然流路で、北側沢部からの流水と考えられる。時期を直接的に推定できる遺物はないが、5号溝跡

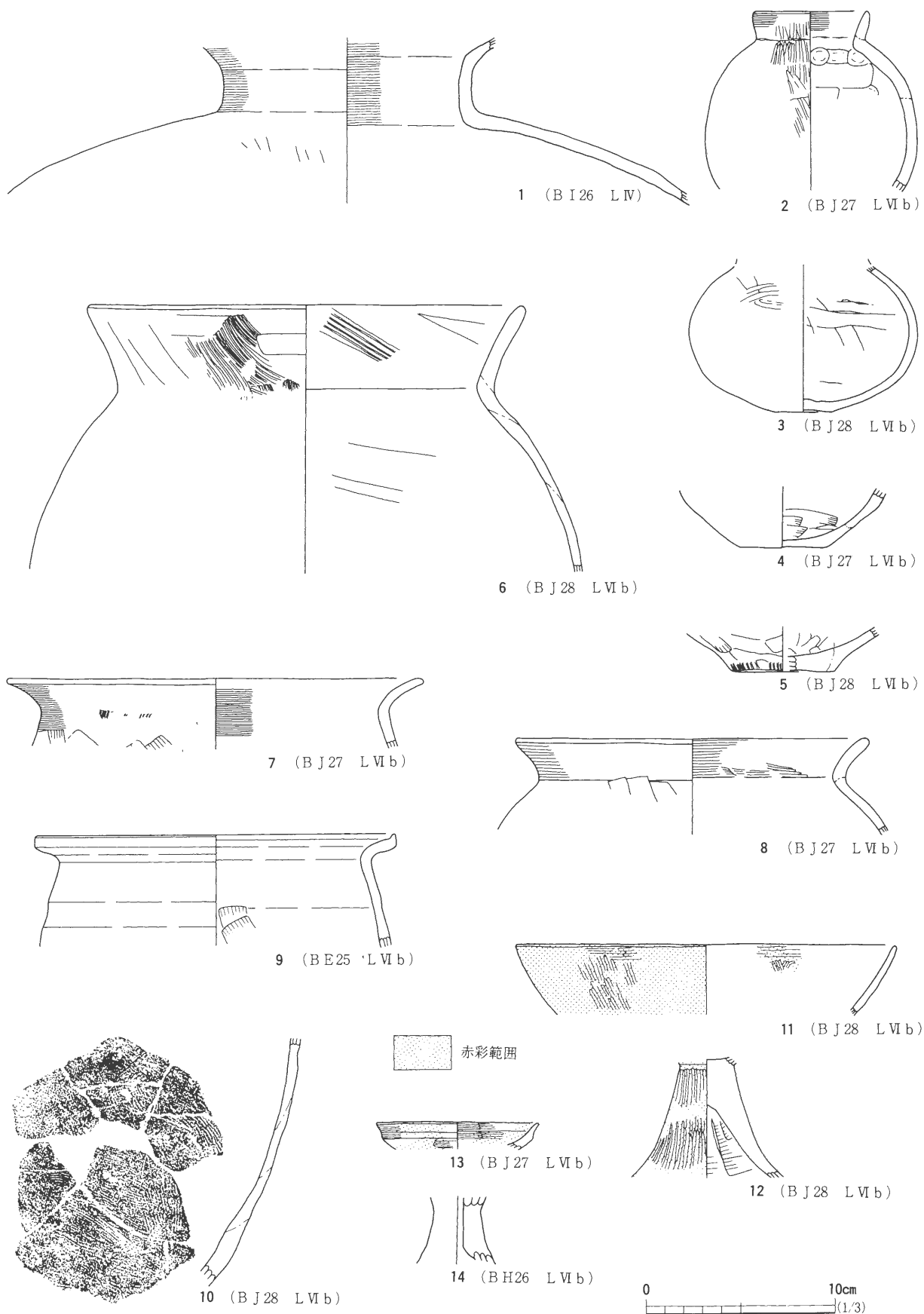


図103 LVI b出土土師器

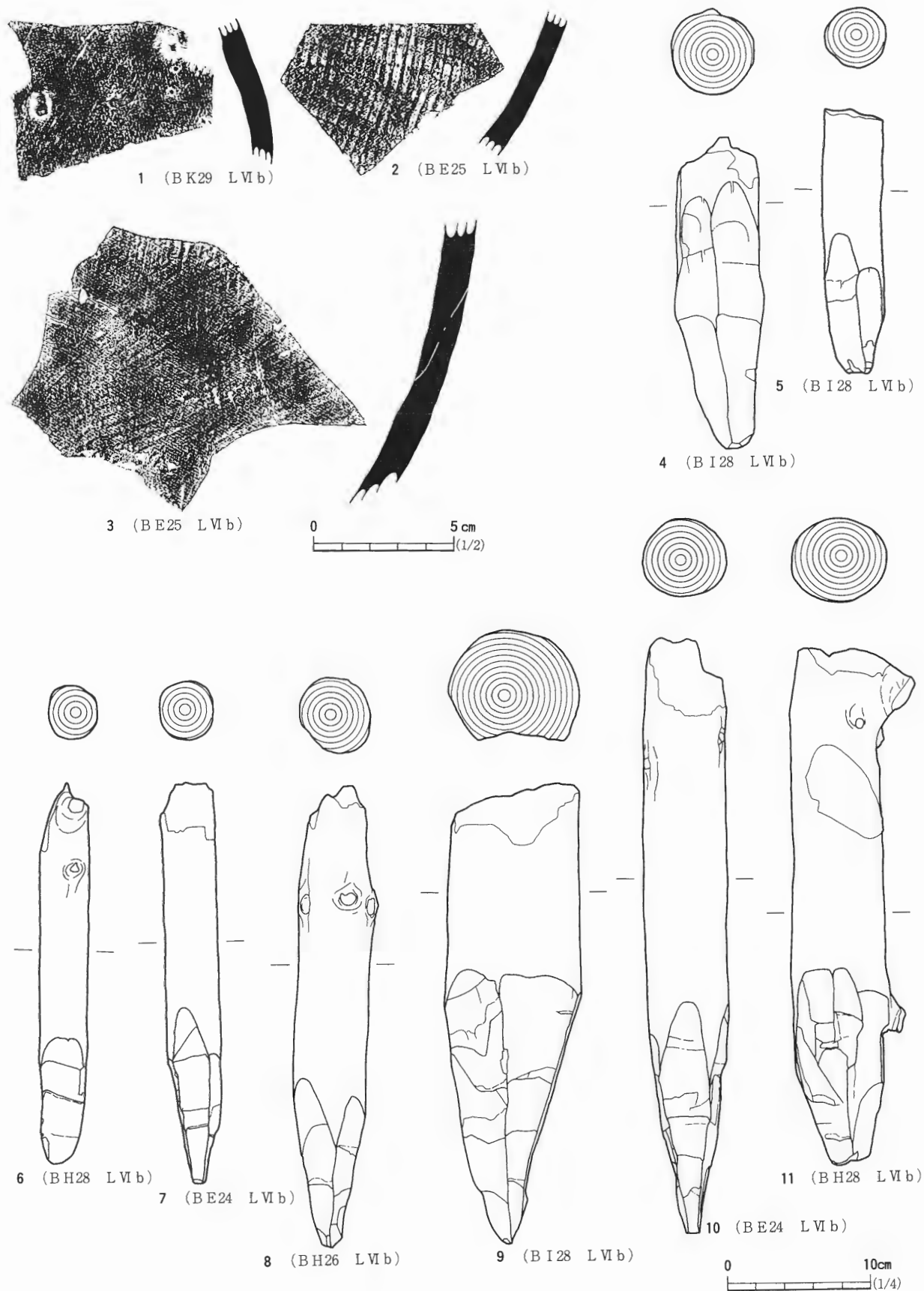


図104 LVI b出土須恵器・木製品

南側の同一層位から高杯・器台・壺・甕などがセットで出土している状況や出土土器の特徴から、古墳時代前期3世紀末から4世紀前半に比定できる可能性が高い。(飯 村)

L IX b 水田跡, 11・12号溝跡 SD11・12

遺 構 (図105, 写真92～94・104～109)

L IX bは炭化物を含むオリーブ黒色粘質土で、調査区全面に堆積しているが、5号溝跡南側で一部、調査した。BF24・25, BG24～26, BH25～27, BI26～28, BJ26～29, BK27～29, BL28・29グリッドで検出した。L IX b面では11・12号溝跡と、不定形な水田跡の可能性のある区画を検出した。L IX b面で暗灰黄色砂を検出し、それを除去して、細かい凹凸の分布を部分的に検出した。それで平面形を推定すると、径1～5mの不定形の平面形となり、水田面の遺存範囲と想定した。L IX b面は北西から南東へ緩く傾斜し、北西から給水し、南東へ排水したものと考えられる。検出したL IX b面の北東部と南東部で、11・12号溝跡を検出した。11号溝跡はBF25, BG25・26, BH26・27, BI27・28, BJ28・29, BK29グリッドに位置する。本溝跡は5号溝跡に大半を破壊され、本溝跡が古いことが明らかであるが、12号溝跡とは同時に機能した一連のものと判断した。堆積土は粘質土と砂質土の互層で、流水による水性堆積を繰り返した状況がわかり、自然堆積と判断した。遺存部で全長約36m、最大幅2.5m、深さは最大50cmを測る。底面は北西から南東へ緩く傾斜し、壁は緩く立ち上がり、断面形は幅広い「U」字形を呈する。本溝跡は12号溝跡と接続して、さらに南東へ伸びるものと判断される。底面・壁面は平滑である。5号溝跡とはほぼ並行することから、5号溝跡以前に同じ役割を果たした、北から南へ流れる自然流路と判断した。

12号溝跡は検出面がL IX bで、11号溝跡に連続して東西方向に検出された。大半は調査区外であり、検出した全長は約6.0m、最大幅約3.0m、深さ約0.5mを測る。堆積土は砂質土と粘質土の互層で自然堆積を示している。底面は平滑で北東から南西へ緩く傾斜し、壁も平滑で緩く傾斜し、断面形は幅広い「U」字形を呈する。11号溝跡に連続して北東から南西へ流れる自然流路と判断される。

11号溝跡からの出土遺物は、土師器片9点、須恵器片4点、石器1点であるが、図示はできなかった。5号溝跡堆積土からの出土遺物と誤認した可能性があることから、本溝跡に伴わない可能性が高い。

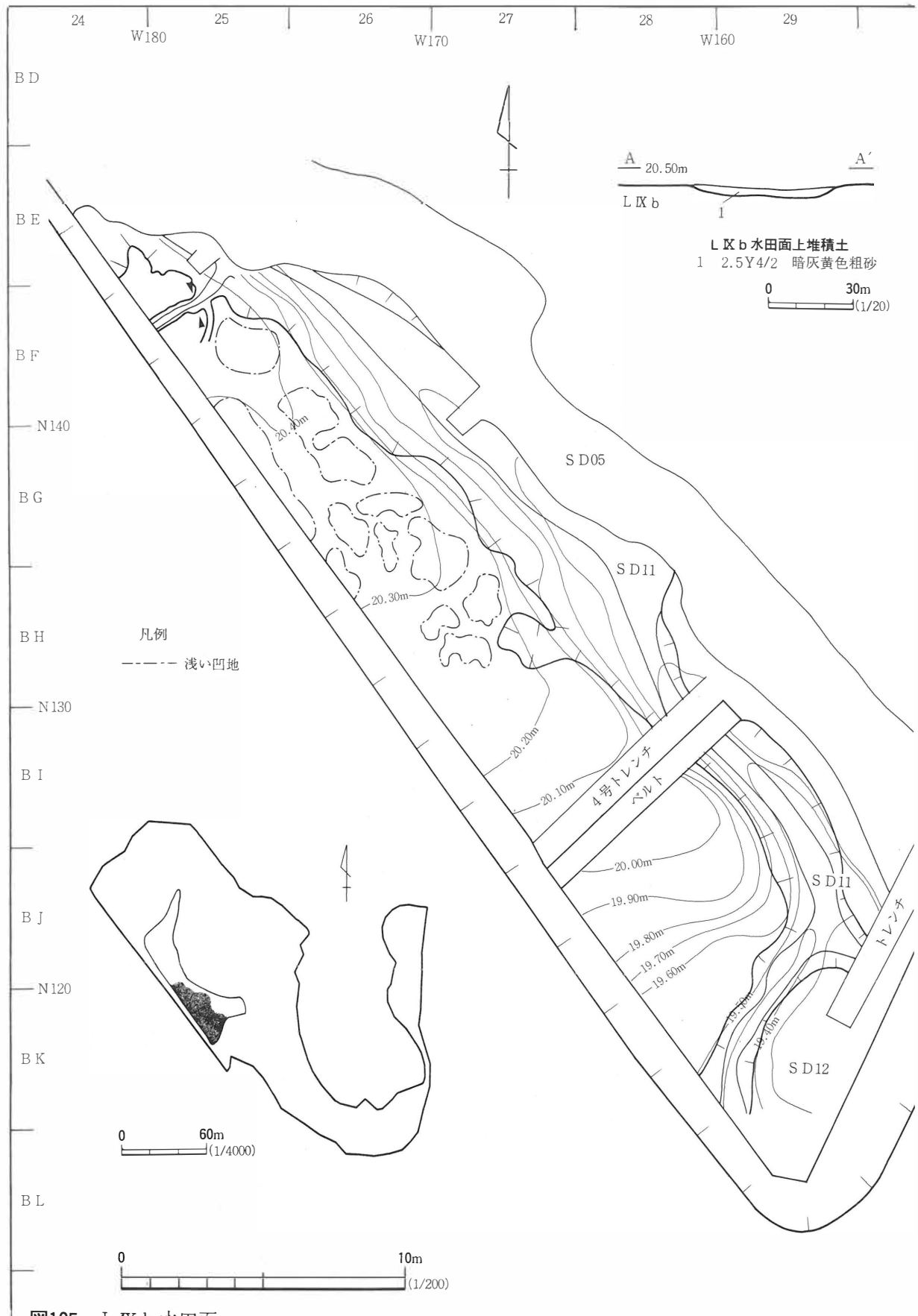
ま と め

水田の水路や明確な区画は不明であったが、痕跡的に水田面を検出できた。11・12号溝跡は北から南へ流れる自然流路であり、一連のものとして機能したと判断された。時期を示す出土遺物はないが、L VI bが4世紀前半であることから、それ以前と判断される。(飯 村)

L X b 面

遺 構 (図106, 写真107～109)

L IX b水田跡を10～20cm掘り下げて、L X b面を検出した。L X bは黒褐色粘質土で、土層断面



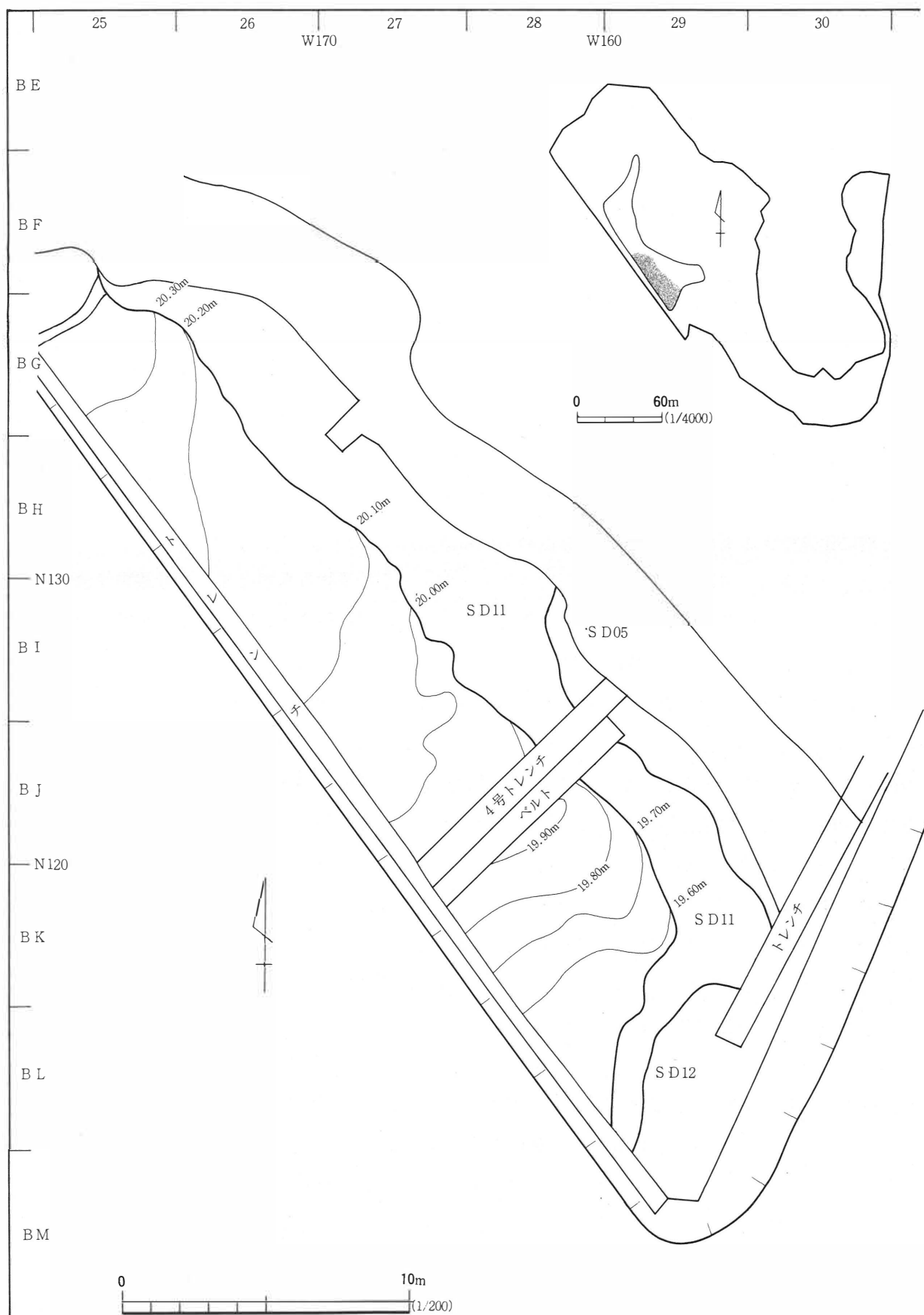


図106 L X b 面

観察では、水田土壌の可能性を推定したので、5号溝跡南側でのみ検出作業を行った。LⅨbで検出した11・12号溝跡以外に新たな遺構は検出できず、水田跡と考えられるような区画や水路も検出できなかった。したがって、水田跡とは確定できなかった。検出面は北西から南東へ緩く傾斜している。出土遺物はない。

ま と め

検出できた遺構・遺物はなく、積極的に水田跡とは認定できなかった。LⅥbが4世紀前半であることから、LⅩb面はそれ以前と考えられる。

(飯 村)

第9節 遺物包含層

今回の調査で確認された遺物包含層は6か所である。これら遺物包含層は、大きくは調査区中央部の南へ延びる丘陵を境とし、東側斜面(S H01・02・05)と西側斜面(S H03・04・06)に形成されていた(図107・135)。いずれの遺物包含層も再堆積を繰り返しながら形成されており、弥生時代中期後葉に比定できる土器や石器が主体を占めている。

出土した遺物は、隣接及び連続して形成されていた1・2号遺物包含層と4・6号遺物包含層の2か所からの出土が多く総出土点数の47%を占めている。また、遺物包含層が形成されていた丘陵部の頂部や中腹平坦部には、該期に属する住居跡(S I03・05～07・11)や土坑(S K03・11～13)・土器埋設遺構(S M01～04)が検出されており、これらの丘陵部を中心に生活が営まれていたものと考えられる。なお、報告にあたっては、第2章遺構と遺物の冒頭で前述した分類基準に則して遺物の説明を行うが、群分けが困難なものについては便宜的に形態分類のみとして扱った。また、1号遺物包含層と2号遺物包含層については、仮設道路により大きく削平されているため区分して調査を行っているが、連続する一連の遺物包含層と考えられるためここでは一括して報告する。

層位と遺物出土分布

調査区全体での基本的な層序は、本章第1節で述べた通りである。したがって、ここでは重複した記述を避け、丘陵斜面部や裾部に形成されていた基本的な遺物包含層の層序と出土遺物の分布について述べ、後に各包含層の説明を行うこととする。

本遺跡で遺物を包含している層は、LⅥ(地山)上層のLⅠ～LⅣまで全ての層に認められている。各層は丘陵上部で薄く、斜面下位で厚く堆積しており、斜面下位に厚く堆積したLⅣに多く遺物が包含されている。各層から出土した遺物の内訳は、LⅠから89点、LⅡから348点、LⅢから913点、LⅣから22,490点である。出土した遺物は、土器片約22,584点、石器類約1,256点であり、土器の内容は概ねLⅠ・Ⅱから近世～近代の土器、LⅢから奈良・平安時代の土器、LⅣからは弥生時代の土器を主体として出土している。全体的な出土量は圧倒的に弥生時代に属する遺物が多いが、その堆積土状況は一定せず、特に急斜面部のAZ～BB33～36グリッド(S H04)、BF～BI29～33グリッド(S H06)、BY～CA46～48グリッド(S H02)では数度の再堆積が認められている。

これらの箇所では、L IVは任意的にアルファベット小文字(L IV a～IV g)や数字を付して(L IV 1～IV 6)表記し、この他にも層が厚い場合などはL IV上・IV下と区分している。なおL IVについては、L IV aが部分的に欠落している箇所もあり、L II bやL IV上・IV下と層相が比較的似通っているために平面的に分離が困難な場合もあり、遺物の取り上げに際しては、L IVとして一括して取扱っている。L IV中において最も出土量が多かったのはL IV aであり、上位ほど出土遺物量が多く、下位ほど少なくなる傾向にある。L IV bより下層は無遺物層である。

遺物包含層の出土した遺物の分布状況をグリッド別に示した図111・137・143・155・163を見ると、調査区中央部の丘陵斜面から裾部にかけて非常にまとまって出土しており、斜面地形に対応した分布が窺える。遺物は丘陵頂部及び調査区の北・南側斜面部からはほとんど出土しておらず、500点以上の土器片を出土したグリッドを核とする大きなまとまりは東西に1か所ずつ存在する。中央丘陵部の西側斜面BF～BH30～33グリッド(S H06)及び東側斜面BV～CB45～48グリッド(S

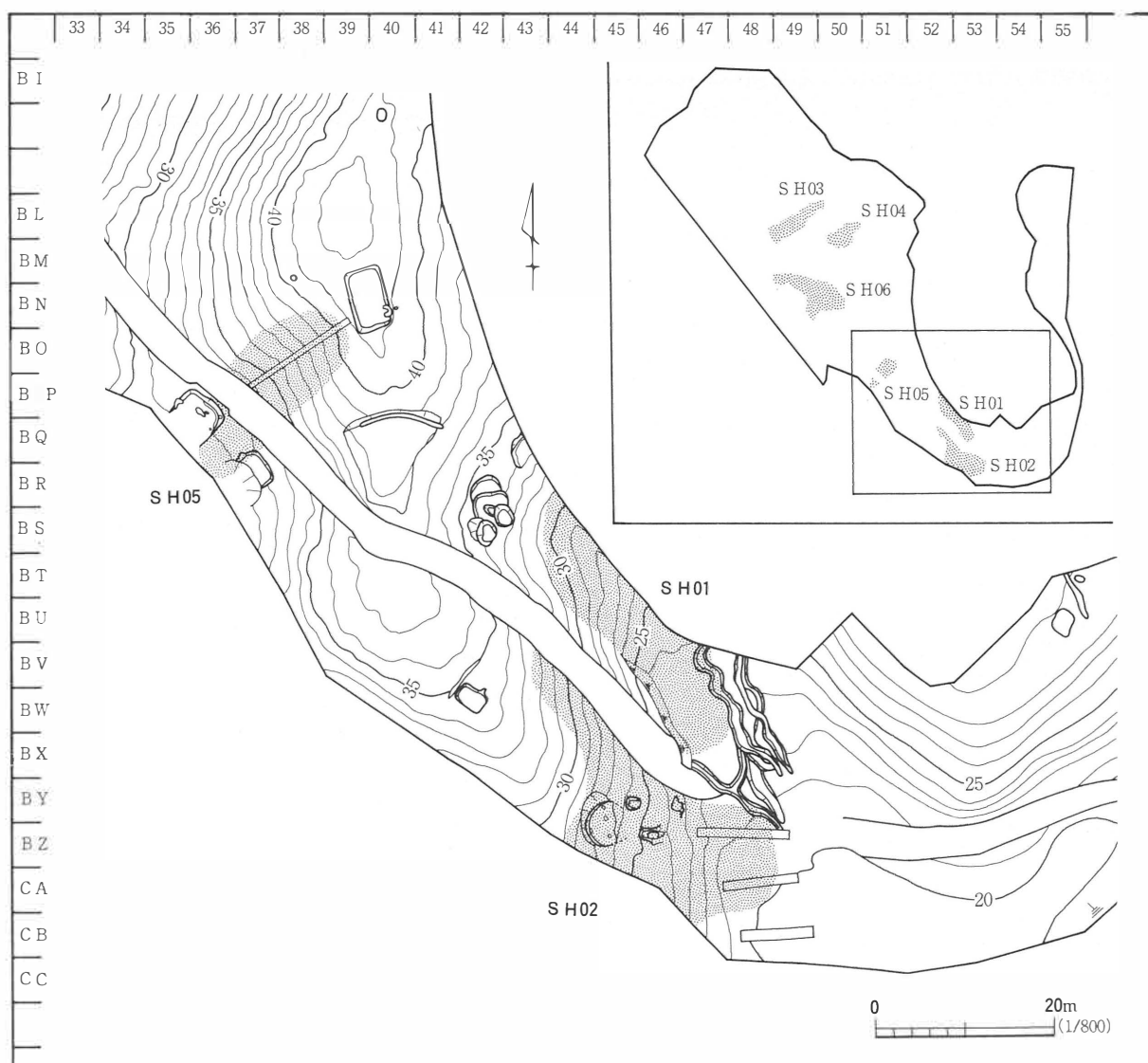


図107 1・2・5号遺物包含層位置図

H01・02)にまたがる範囲である。ここは丘陵斜面部から裾部にかけて入組んだ地形となっている場所であり、LⅣ・Ⅴ'の再堆積層が非常に厚く堆積しているところである。これら土器を多く出土したグリッドには、斜面地形に対応した遺物の分布ばかりでなく、遺物の出土量と比例して斜面上位に住居跡等の遺構密度が高く、下方への流出・廃棄あるいは意識的な投棄といったある程度の関与が想定される。また、図164に示したように、6号遺物包含層から比較的遺存状態の良い土器がまとまって出土していることは特記すべき点である。遺物包含層の他に、水田跡・溝跡等の中にもこれら弥生時代の遺物が含まれていたが、それらは全て斜面上位からの流れ込みによるものである。この他に、LⅣ中でも無遺物層に当たるLⅣd～Ⅳgが厚く堆積した部分(SH02)や水田部に隣接する箇所(SH06)については、トレンチ調査により土層観察と基底面までの確認を行っている。調査区の斜面裾部に位置するBZ～CB47～49グリッドでは8×2mのトレンチを3本、BG～BI30～33グリッド付近では20m(4T)と14m(5T)のトレンチを入れ、その堆積土状況と基盤層の確認を行った。また、これ以外の斜面裾部や開析谷開口部にあたる部分についても、トレンチにより深掘り調査を実施している。

遺物包含層から出土した石器類は2,024点で、そのうち比較的遺存状態の良い72点について図示している。出土した土器の約86%が弥生時代中期末葉に比定されるため、これらの石器のほとんども該期に属するものと考えている。出土した石器を器種別にみると、定型的な石器としての内訳は、石鏃1点、太型蛤刃石斧4点、抉り入り両刃石器3点、扁平片刃石斧21点、ノミ形石器2点、板状石器3点、石庖丁1点、敲打器4点、石斧類(打製・磨製石斧含む)11点、環状石器2点、磨石1点、砥石1点、石皿1点である。その他、剥片や不定形石器11点、石核6点について掲載している。遺物包含層から出土した石器は、遺跡全体の面積から見れば該期の他遺跡と比較しても多いことが窺える。特に、扁平片刃石斧は器種別の比率で27%に上り、大陸系磨製石器を中心とした工具類が多く出土している(約59%)。また、その一方で流紋岩製の剥片や石核が非常に高い比率で出土しているが、その製品はほとんどなく、石庖丁や石鏃等の打製石器をはじめとする農具類や石鏃が1・2点のみの出土である点は特徴的である。なお、図中において付着物や擦痕・摩耗痕・コーングロス等の使用痕を網点の違いによって表現し、包含層ごとの細やかな出土点数や器種組成・法量については各包含層中及び第3章に収録している。(井)

1・2号遺物包含層 SH01・02

遺 構 (図107～110, 写真110・111)

1・2号遺物包含層は、調査区中央を南北に延びる丘陵部の東向き斜面に位置する。丘陵先端部に近い標高23～31mほどの急斜面から裾部にかけて形成されている。調査区BR～CB44～49グリッドに認められ、その規模は中央部が仮設道路により削平されているがほぼ東西25m、南北50mの範囲である。基盤層までの層厚は、斜面上位では薄く25cm前後を測り、斜面下位では厚く約150cmの堆積がみられる。遺物は斜面下位の裾部に厚く堆積したLⅣに特に多く包含されており、斜面への廃

棄,あるいは流れ込みによって形成されたものと考えられる。

図109に示した1号遺物包含層の堆積状況をみると,斜面下位に厚く堆積したLⅣは2号遺物包含層の堆積状況よりも均一で,再堆積が著しくない。1号遺物包含層では,LⅤ'がLⅣaをバックするように上層を被覆している。一方,丘陵先端側に位置する2号遺物包含層では,粘質土と礫層が交互に堆積しておりLⅣが数回に亘って再堆積を繰り返した状況が観察できる(図110)。出土遺物を層位別・グリッド別に見ると,斜面地形に対応した遺物の分布が窺え,弥生土器はBW~CB46~48グリッドから多く出土している。特に,BW47, BY45~48, BZ~CA48グリッドからは500点以上の土器が出土しており,CA48では2,111点と最も多い。

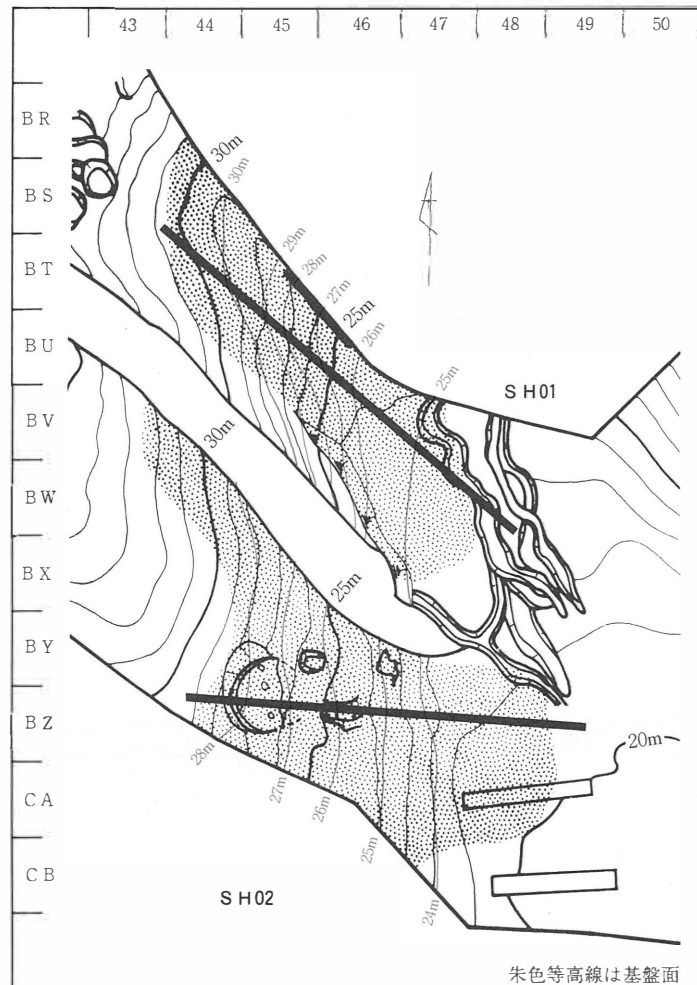


図108 1・2号遺物包含層

1・2号遺物包含層から出土した遺物は,LⅠが63点,LⅡが34点,LⅢが265点,LⅣが10,233点である。石器類は土器の出土量と比例しており,該期の遺構と隣接するグリッド近辺からの出土量が相対的に多い。1号遺物包含層の斜面上位に位置するBS・BT43~45グリッド,1・2号遺物包含層の斜面下位に位置するBV~CA46~48グリッドから多く出土しており,BW47からの出土が170点で最も多い。

遺物 (図111~134, 写真175~199)

遺物は1・2号遺物包含層から弥生土器片10,358点,石器類915点,鉄製銚1点,土師器片233点,須恵器片21点,陶磁器9点,銭貨1点,羽口10点,鉄製品7点が出土している。遺物包含層から出土した遺物総数(23,840点)の約48%にあたる。このうち,抽出して図示した遺物は,1号遺物包含層が弥生土器片91点,石器類27点,鉄製銚1点,土師器片1点,須恵器片1点,陶器片1点,銭貨1点,2号遺物包含層が弥生土器片208点,石器類14点,埴塙1点,須恵器片3点である。弥生土器は,その大半が中期末葉のものであり,石器も該期に属するものと考えられる。図示した41点の石器類は,器種別にみると石鏃1点,太型蛤刃石斧4点,扁平片刃石斧10点,石庖丁1点,石斧類(打製・磨製)6点,磨石1点,板状石器1点,敲打器1点,不定形石器2点,石皿1点,砥石1点,剥片6点,石核6点である。以下,1号遺物包含層から土器・石器の順で説明を行う。

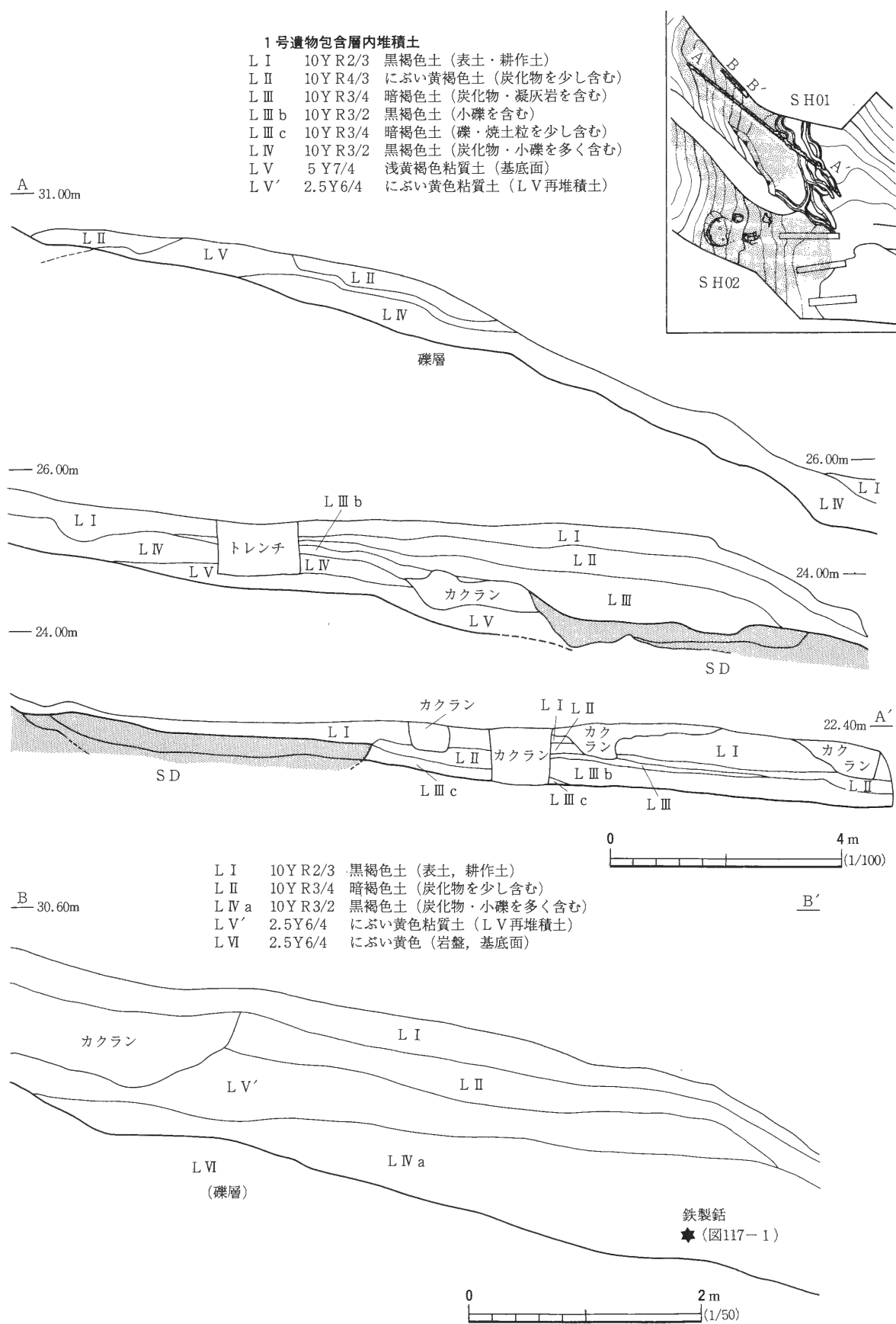


図109 1号遺物包含層断面

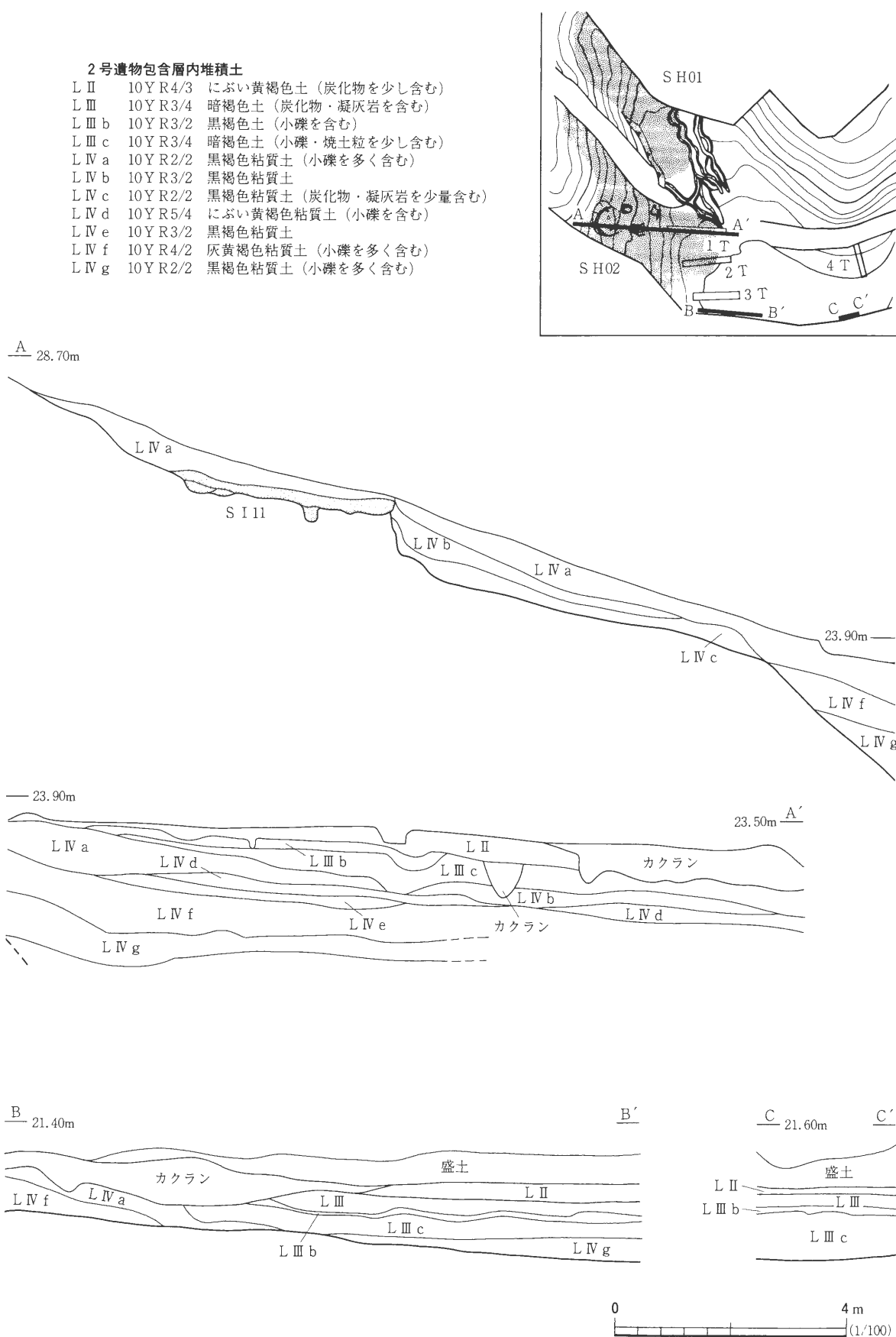


図110 2号遺物包含層断面

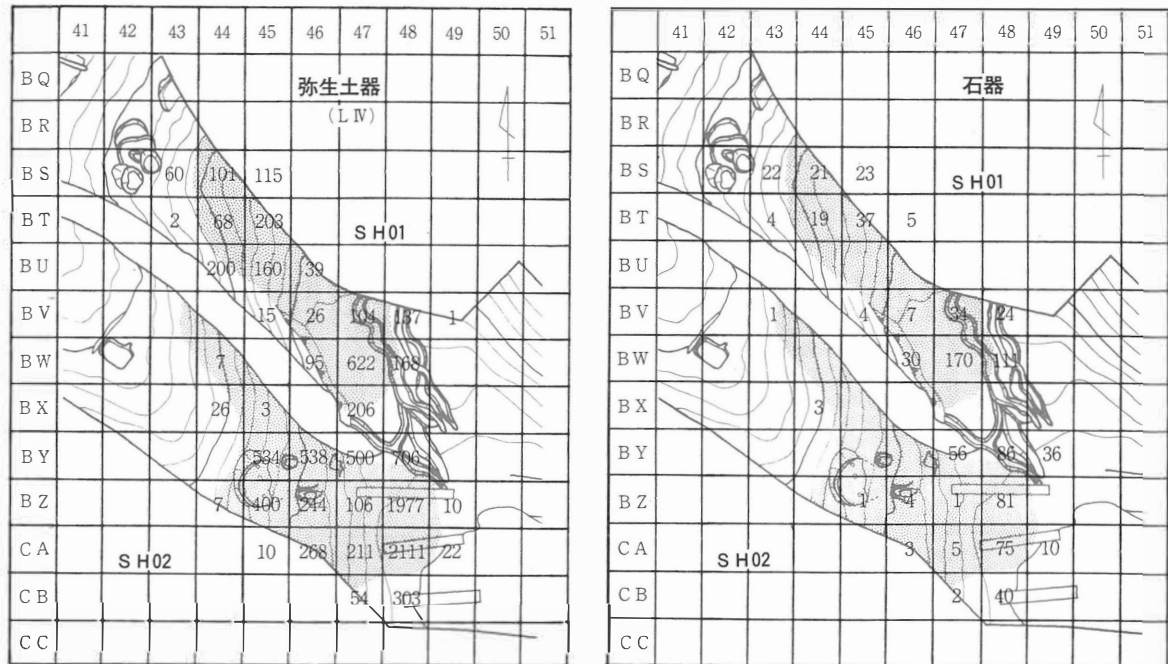


図111 1・2号遺物包含層出土遺物分布図

1号遺物包含層出土弥生土器 (図112～116, 写真175～180)

本包含層より出土した弥生土器は第Ⅰ～Ⅲ群土器に相当する。全体の器形を把握できる資料はなく、器種組成では3類(鉢形土器)が欠落している。以下弥生土器から各群ごとに説明するが、群分けや器種選定が困難なものについては第Ⅱ群土器内において一括して報告する。

第Ⅰ群土器 112-2～7が該当する。口縁部から底部までの器形全体を把握できる資料はなく、1類のみの出土である。

1類土器 壺形土器である。112-2～7は壺形土器の肩部から頸部にかけての破片資料で、主幹文様構成からa種とb種が認められる。

a種 112-2～6が認められる。2～6には先端が尖った1本の施文具によって浅い同心円状の渦文が描画され、2・4～6の地文には判然としないが附加条の原体が回転施文されている。胎土には粗砂粒を多く含み、焼成は比較的良好である。

b種 112-7 a～7 cは施文原体や胎土が酷似していることから同一個体とみられる。7 a～7 cは二本同時沈線文によって三角形状もしくは重層山形状に等間隔に描画されたもので、沈線間の距離は8mm程である。

第Ⅱ群土器 112-1・8～14, 113～116が該当し、最も出土量が多い。この中には群分けや器種選定が困難なものも含め、本群内でまとめて報告する。

1類土器 壺形土器で、112-1・8～14が該当する。8・10がやや内湾気味に、1・9・11が短く外傾する口縁部資料である。8は束線具を用いて多条沈線を縦位へ施文し、1・9～11は地文のみが観察される。1の口縁部は緩やかな波状を呈し、粘土積上げ痕が顕著である。外面地文部には附加条縄文が施文され、内面や口頸部の無文帯部には横位のナデ調整が施されている。口唇部に

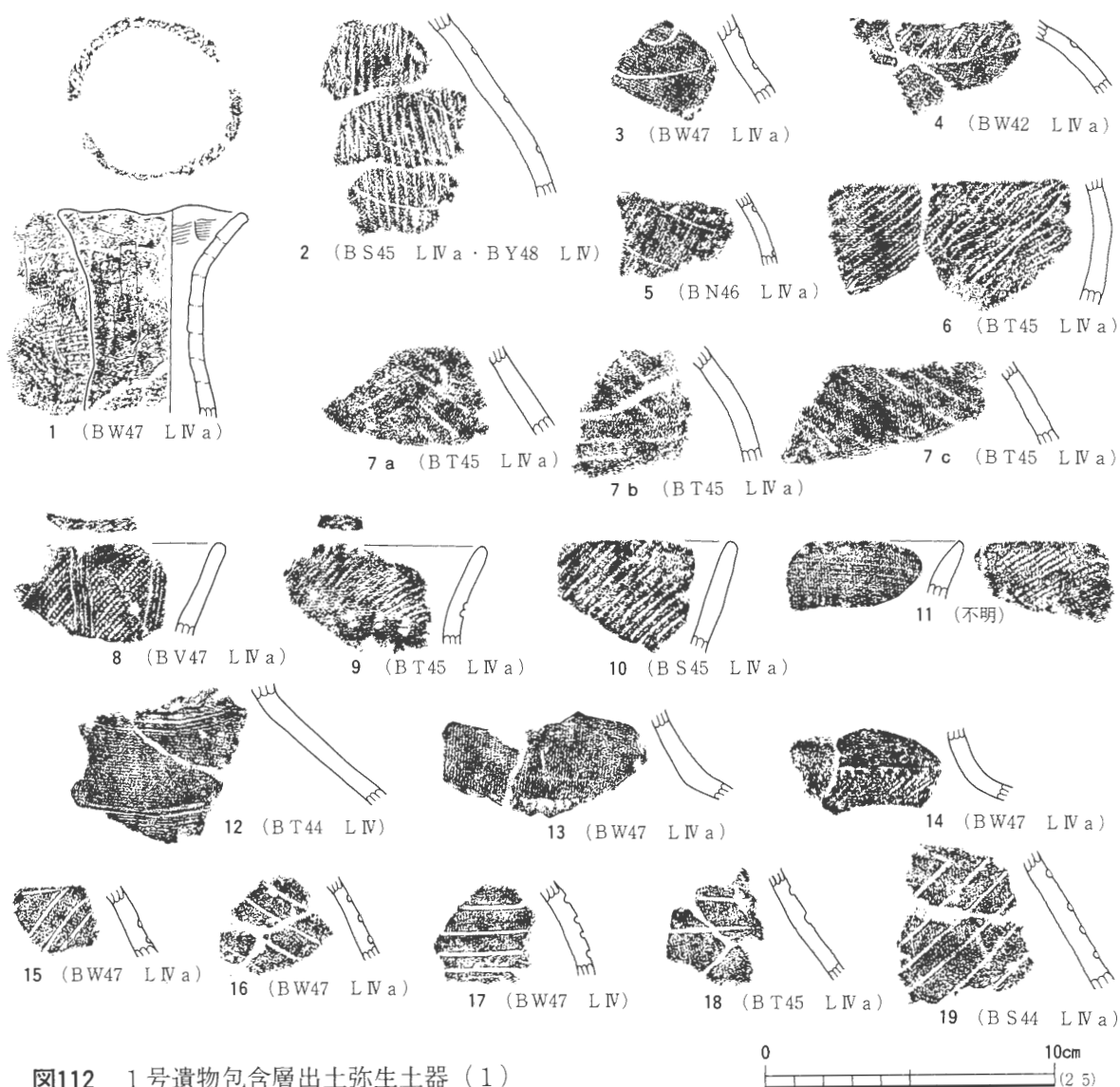


図112 1号遺物包含層出土弥生土器(1)

は同原体を回転押捺している。復元口径6.6cmを測る。8～11の地文に施されている原体は、8・10が附加条、9・11が判然し得ないが附加条あるいは直前段多条が回転施文され、8・9の口唇部には頸部原体と同一の原体を回転押捺している。12～14は壺形土器の頸部近辺の破片資料である。12には束線具を用いた横走沈線を巡らし、13・14の頸部には原体末端部の結節がみられる。器厚は平均して5mm程である。

2類土器 甕形土器の口縁部から頸部付近の破片資料で、図113が該当する。甕形土器は径15～20cm程の中型のものが比較的多い傾向があり、24は小型の甕と思われる。口縁部の形態では大きく短頸(A)と長頸(B)のものが認められ、さらに口頸部の屈曲の度合いによって内湾気味になるもの(1)、「く」字状になるもの(2)、屈曲が弱く直線的になるもの(3)等がある。

12～17は頸部が短く「く」字状に屈曲する(A2)口縁部資料で、器形や施文状況が類似するものである。13・15～17の口縁部の無文帯部には横位のナデ調整が施され、頸部下位に地文が施されている。13・15・16の口縁部内面には胴部原体と同一の斜縄文が施文されている。2・3も同様に頸

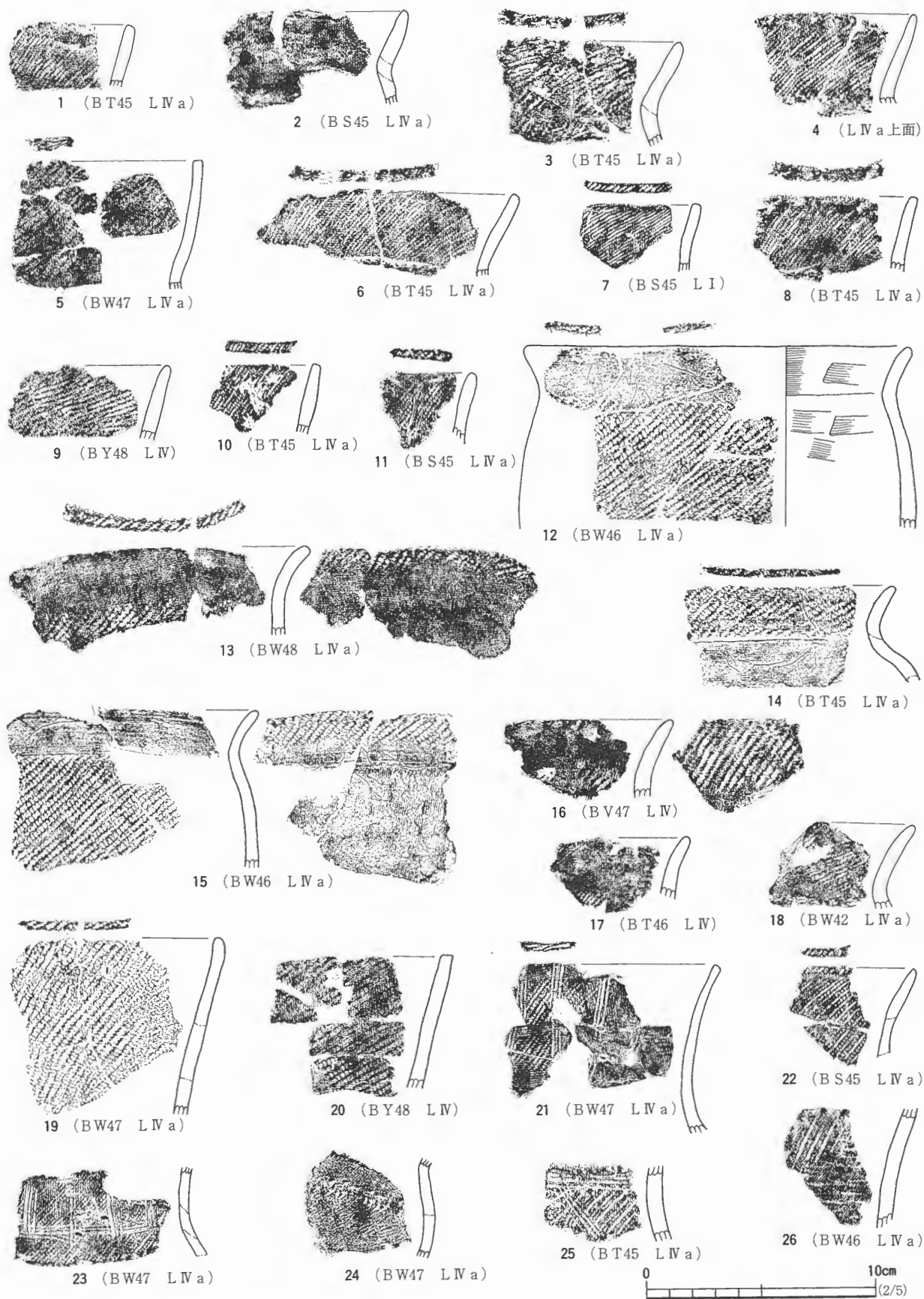


図113 1号遺物包含層出土弥生土器(2)

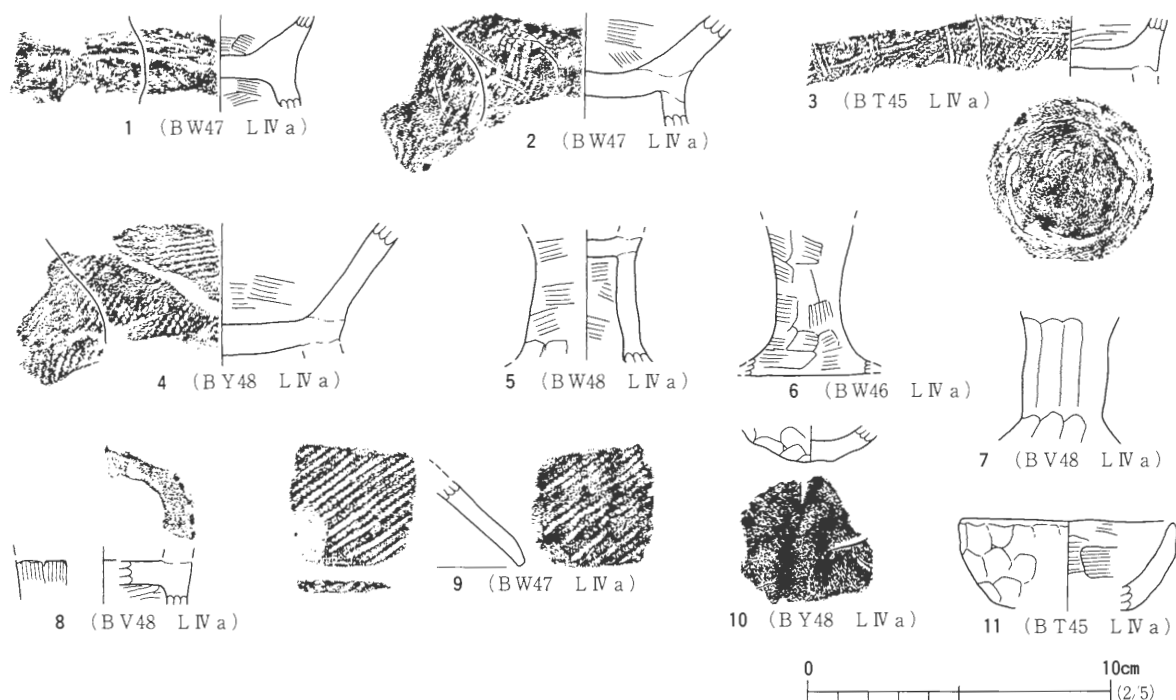


図114 1号遺物包含層出土弥生土器(3)

部が短く「く」字状を呈するが、口縁部でやや受け口状(A1)となる。5・19は頸部が長く内湾気味(B1)に、20~22は長頸で屈曲が弱く直線的になるもの(B3)である。21・23・25は束線具を用いて多条沈線を描画し、23・25の頸部には横位の区画線が施されている。5~8・10・20・21の口唇部は他の口縁部資料と比して角頭状を呈しており、3・5~8・10~14・19・21・22の口唇部には胴部原体と同一の原体を回転押捺している。地文に施されている原体は明確に判断し得ないものもあるが、1・3~6・17・21が直前段多条、7・24が撚糸文、12~16・19・20が斜縄文、22・25・26が附加条文、18が0段多条の原体を施文しているものと思われる。器厚は2・3・16の口唇部が肥厚しているが、平均して5mm程である。12は復元口径17cmを測る。

4類土器 114-1~7は高杯で、底部から脚部にかけての資料である。裾部が大きく広がるものはない。1・3は底部と脚部の境に束線具によって横走する多条沈線文が描画されている。1~4の内面には丁寧なナデ調整が加えられ、3の底部には脚部との貼り付け痕が観察される。地文に施されている原体は、1・2・4が直前段多条、3は判然し得ないが附加条文の原体を施文しているものと思われる。5~7は高杯の脚部資料で、6は裾部付近が窄まる器形を呈する。調整技法は5・6が内外面ともにナデ調整、7は顕著なケズリ調整が加えられている。

5類土器 蓋形土器で114-8・9が該当する。破片資料であるため全体の形状は判断し得ないが、器面調整が他と異なり整麗であるため蓋と判断した。8は蓋の摘み部分と思われ、内面には非常に丁寧なナデ調整が加えられている。9は先端部が若干内湾気味になるもので、地文には内外面共に附加条の原体を施文している。焼成は他と比して良好で堅質である。

6類土器 114-10・11が該当する。器面調整は共に外面に指頭圧痕が顕著に観察され、内面に

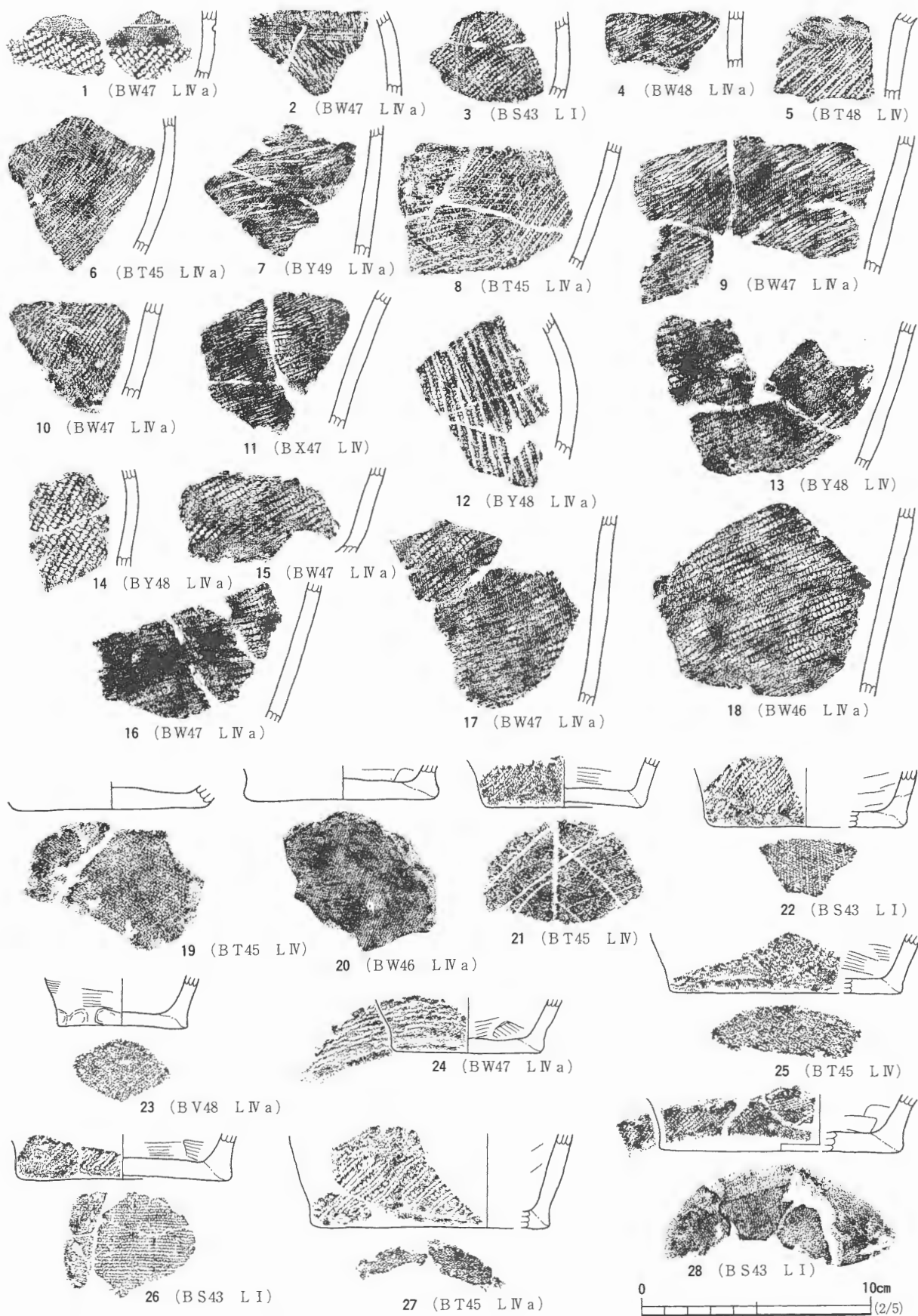


図115 1号遺物包含層出土弥生土器 (4)

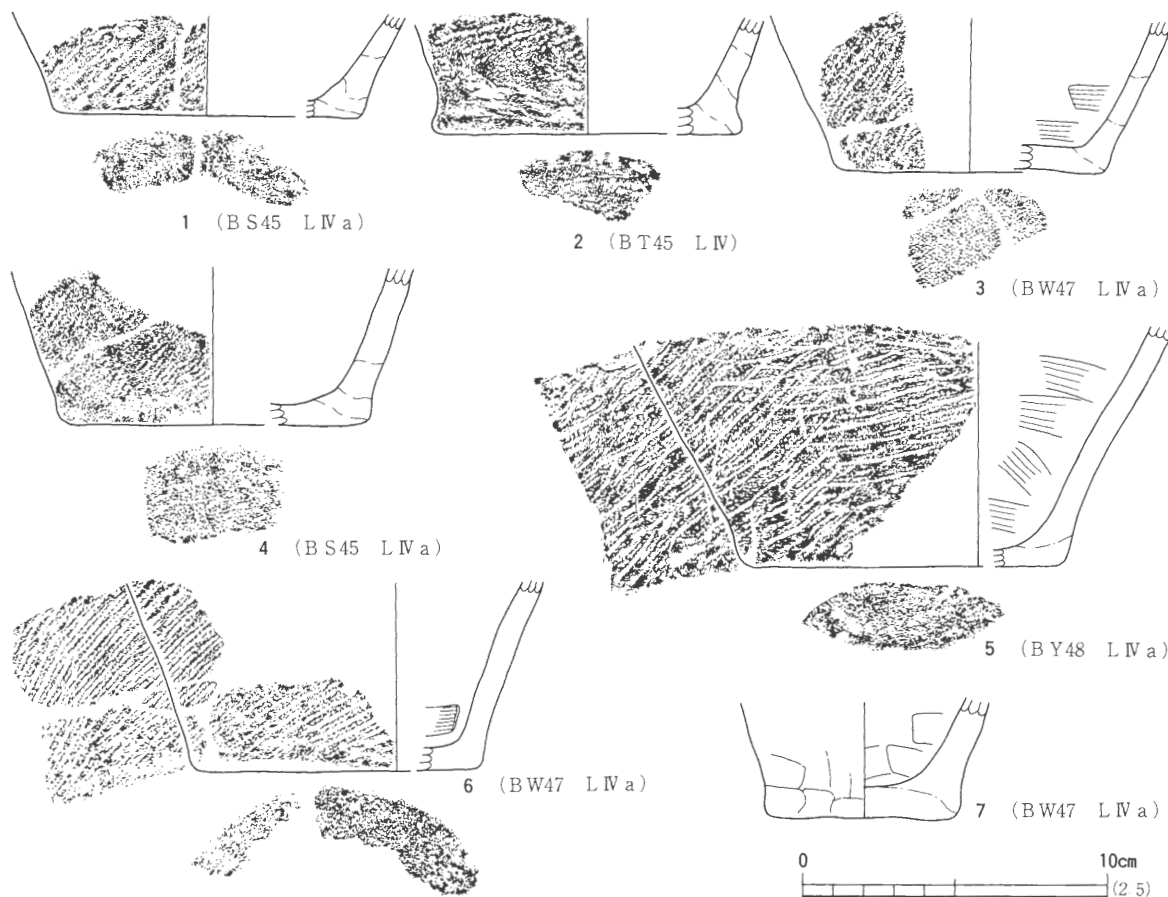


図116 1号遺物包含層出土弥生土器（5）

はナデ調整が施されている。平面形は楕円形を呈し、遺存状態の良い11の法量は口径7.2cm、遺存高3cmである。

7類土器 115-1～18は甕もしくは壺の胴部破片資料と思われるが、明確には器種選別できないものである。5～9・11・12は判然としないが直前段多条かもしくは附加条縄文を回転施文したもので、一部条が絡み合っている。8は同一原体による多方向からの施文がみられ、2・4は不明瞭であるが撚糸文と思われる。1・10・13～18は地文に斜縄文を施文したものである。器厚は平均して5mm程であるが、9・13・17・18は7mm前後を測り、大型の器形になるものと考えられる。

8類土器 115-19～28・116は底部資料である。比較的遺存状態の良い17点について図示した。大型の器形となるものはなく、底径8～10cm程の中型のものが比較的多い傾向にある。形態的には底部側面が突出するもの(115-20・22～24・27, 116-2)と突出しないもの(115-21・25・26・28, 116-1・3～7)がある。胴部下位の地文は115-21・22・27, 116-1・5・6が附加条文, 115-24が撚糸文を施文したものであると思われるが, 115-25・26・28, 116-4は判然し難く直前段多条かもしくは附加条縄文原体を横方向に回転施文したのと考えられる。26の胴部下端には原体末端部の結節が認められ, 116-5は原体の多方向からの施文により一部条が絡み合っている。胴部下位が無文となる23, 116-5は, 内外面ナデ調整や指頭圧痕が観察される小型の資料で, 器形的に3類(鉢形土器)や5類(蓋)の可能性もある。底面は平織り状の布圧痕が観察されるもの(115-19

・20・22・23・26, 116-3), 木葉痕が観察されるもの(115-21), ナデ状の調整が施されているもの(115-25・28, 116-1・4)摩滅が著しく判然し得ないもの(115-24・27, 116-2・5・6)がある。

第Ⅲ群土器 112-15~19が該当し, 全て破片であり, 出土数が少なく, 1類のみ図示した。

1類土器 15~19は壺形土器の頸部付近の破片資料である。二本同時施文によって山形状や三角形状に描画されたもので, 沈線間の距離は約6mm程である。やや深めに施文されており, 胎土には粗砂粒を多く含み, 焼成は良好である。

1号遺物包含層出土土師器・須恵器 (図117)

1号遺物包含層からは土師器片140点, 須恵器片4点が出土している。

土師器 117-3が該当し, LⅢからの出土である。3はロクロ成形による土師器甕である。口縁部が「く」の字状に外反し, 胴部中央から下半にかけてヘラケズリ調整が施されている。胴部中央部がやや丸みを持ち, 器形的に深みのある鉢形状を呈する。復元口径17.2cm, 底径9cm, 器高16

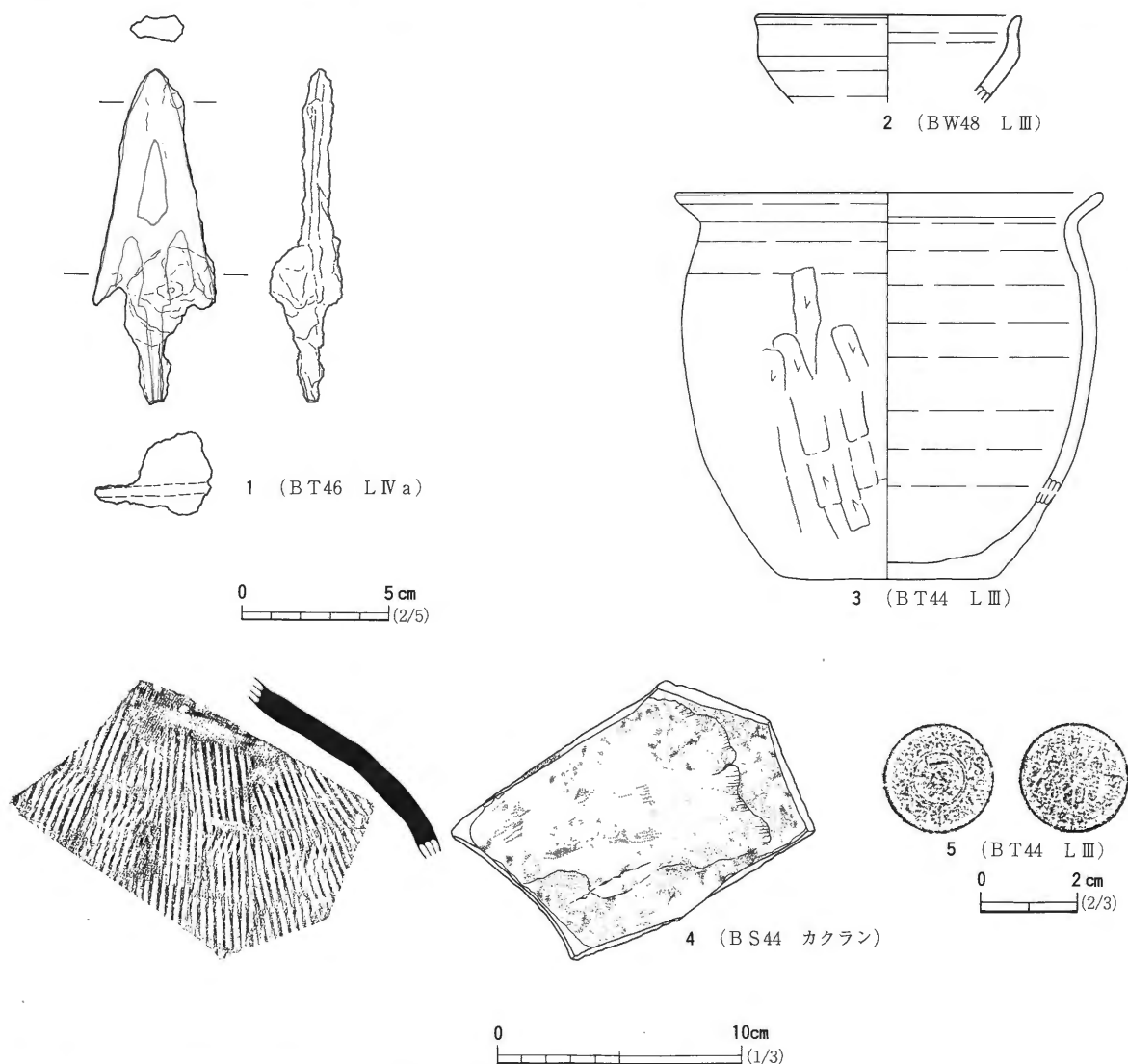


図117 1号遺物包含層出土土師器・須恵器・鉄製品・銭貨

cmを測る。

須恵器 117-4は須恵器甕の肩部付近の破片資料である。外面に平行叩き板の痕跡が認められ、内面は剥落して詳細は不明であるがアテ具痕による押えの痕跡が部分的に認められる。

1号遺物包含層出土陶器・鉄製品・銭貨（図117，写真182）

1号遺物包含層からは、鉄製銚1点、銭貨1点、陶器片8点が出土している。

陶器 117-2は古瀬戸後期様式後半の天目茶碗である。復元口径8cmを測る。

鉄製銚 117-1は鉄製銚と思われ、その出土位置と層位を図109に示した。錆化が著しいが遺存状態は比較的良く、X線写真の結果身の中央部に三角形の透かしが入る大型の有茎三角式である。遺存する法量は全長11.4cm、銚身8cm、最大幅4.3cmを測り、中央の透かしの長さ2.8cm、幅1cmである。逆刺の部分は2.4cmを測り、先端部がやや鋭利となる。銚身の断面は薄い板状を呈し、刃先は錆化が著しく詳細は不明である。形態が古墳時代に属する鉄製銚に類似するが、時期的には供伴する遺物から弥生時代中期末葉に属する可能性がある。分析の結果(付章5)は原料比定に至る成果は得られなかった。

銭貨 117-5は一銭青銅貨である。表面菊模様に唐草、中央円内に「一銭」、裏面は桐紋章があらわれている。大正九年(1920)製造のもので直径23.03mm、重さ3.75gを測る。

1号遺物包含層出土石器（図118～122，写真181～184）

出土した石器・剥片類は528点である。そのうち、剥片・石核は510点に上り、遺存状態が良く図示したものは石銚1点、太型蛤刃石斧2点、抉り入り両刃石器1点、扁平片刃石斧5点、石庖丁1点、石斧類4点、磨石1点、不定形石器2点、剥片4点、石核5点、石皿1点の計27点である。

石銚 出土量が非常に少なく、本遺跡から2点のみの出土である。118-1は先端部と基部側面が欠損した凸基有茎式石銚である。表裏面からの細かな調整剥離が施され、縦横断面形が流線形を呈する。法量は遺存長1.5cm、最大幅1.5cm、最大厚0.5cmを測り、石質は玉髄である。

太型蛤刃石斧 118-2・3である。全体の形状が分かるものはなく、2は基部側、3は刃部側約1/2を遺存する。2は叩き整形と敲打後の研磨調整が加えられているが、基部側で1次整形時の剥離が部分的に認められる。3は両側縁部に1次整形時の剥離痕が明瞭に認められるもので、腹面に特に調整が施されている。形態的には太型蛤刃石斧の未成品と考えられるが、両側縁部に擦痕状の磨耗が認められることから抉り入り両刃石器に属するものかもしれない。遺存する法量は2が遺存長11.5cm、最大幅6.3cm、最大厚4.5cmを測り、3が遺存長10.7cm、最大幅7.5cm、最大厚4.2cmである。石質は2・3共にヒン岩である。

抉り入り両刃石器 118-4が該当する。器形的には太型蛤刃石斧に類似するが、両側縁部に明瞭な抉りと背腹両面中央に相対する2つの凹みを有する。刃部の幅に比して基部側の幅が若干小さくなるもので、叩き整形と研磨によって1次整形時の剥離の稜を整形している。背腹両面では部分的な研磨調整が加えられ、刃部と見られる部分は鈍角的で敲打痕が観察される。背腹両面の凹みには擦痕が認められ、回転技法によって形成された可能性がある。この種の技法は他の器種には認めら

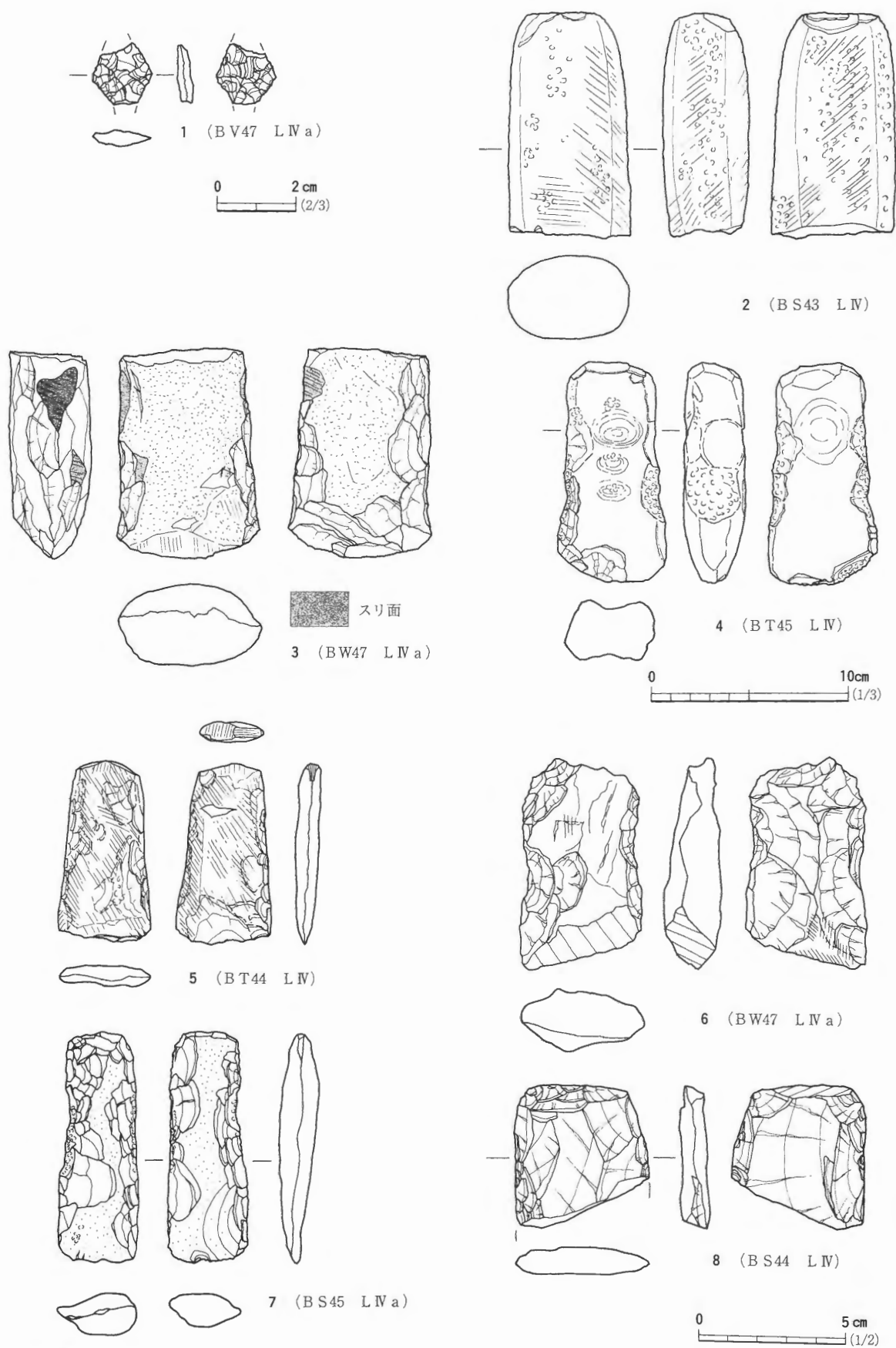


図118 1号遺物包含層出土石器 (1)

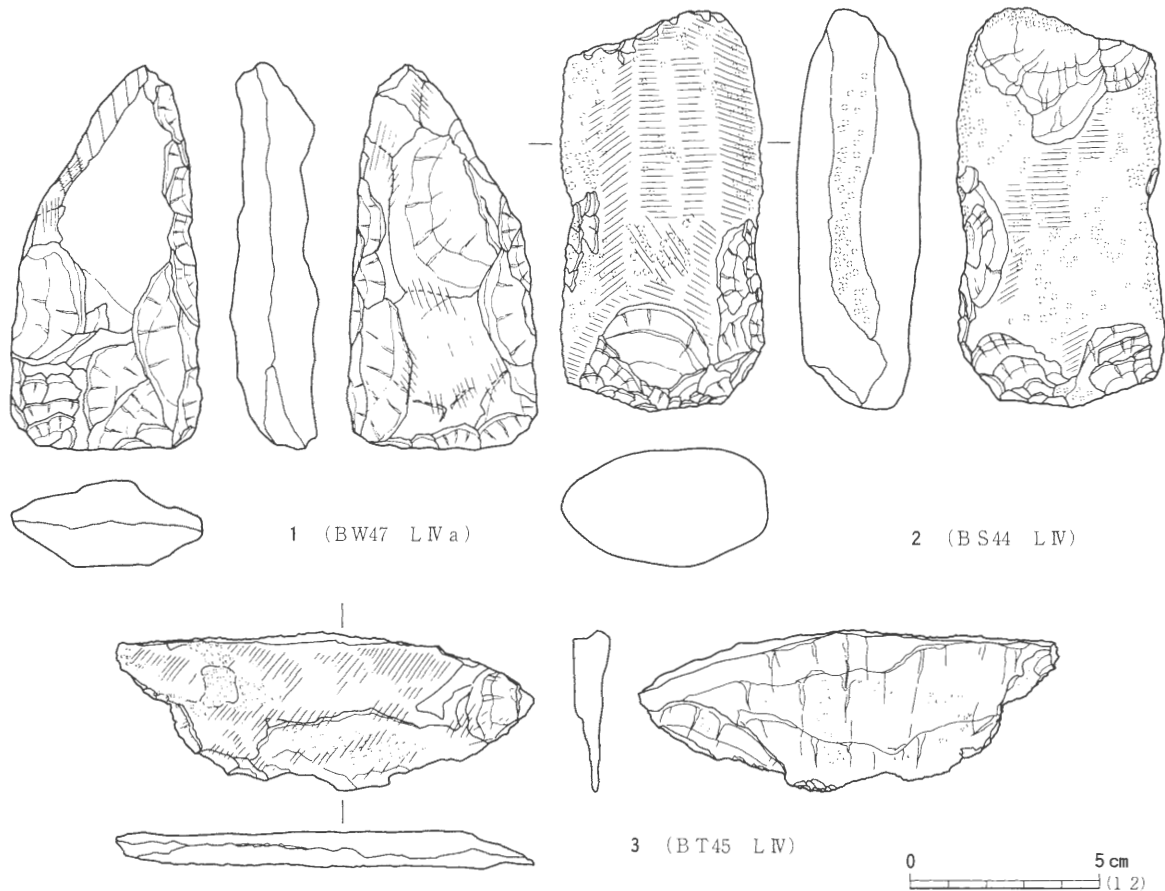


図119 1号遺物包含層出土石器(2)

れず、抉り入り両刃石器に多い。法量は最大長11.3cm，最大幅5.6cm，最大厚3.2cmを測り，石質はヒン岩である。本遺跡からは同形状の石器が4点出土しており，いわき市龍門寺・タタラ山遺跡等で類例が認められる。

扁平片刃石斧 118-5～8，119-1である。最も出土量が多く(26点)，本包含層から5点出土している。全体の形状が分かるものは2点(5・7)，他は刃部や基部側を欠損するものである(6・8，119-1)。すべて刃部に最大幅を持ち，両側縁から基部にかけて1次調整痕が残っている。5は1次整形の剥離後に丁寧な磨き調整が加えられているもので，刃部の作出が丁寧である。形態的に小型に属し，基部には研磨の切り合いによる狭い平坦面が見られる。刃部の使用痕・線条痕の状況，器厚が非常に薄手であることも考慮すると磨製石包丁の転用品の可能性もある。法量は最大長6.2cm，最大幅3.2cm，基部幅2.1cm，厚さ1.1cmを測り，刃角は約21°である。6は節離面を刃部とし，比較的大きな素材剥片の両側縁から基部にかけて1次調整を施したものである。器厚は他と比して厚手で中型に属する。7はやや細身のもので，基部側がやや厚手となる。背腹面には自然面を残し，両側縁から基部にかけて1次調整を加えているものである。両側縁のほぼ中央付近には敲打による調整が施されているが，研磨による最終調整は加えられていない。刃部には使用痕や線条痕が観察される。法量は最大長8.0cm，最大幅2.8cm，基部幅2.2cm，厚さ1.5cmを測り，刃角は約72°である。8は基部側を遺存する中型のもので，刃部側で「ハ」字状に末広がりとなる器形である。

両側縁から基部に細かな1次調整剥離が加えられ、背面は部分的に研磨によって剥離の稜が整形されている。119-1は形態的に大型に属するもので、敲打や研磨等の二次調整や使用痕が認められないことから未成品と思われる。比較的大型の素材を使用し、側縁や刃部付近に雑な一次調整剥離を加えている。表面にはベンガラと思われる赤色の付着物が部分的に認められる。

遺存する法量は最大長10.2cm、最大幅5.1cm、厚さ2.4cmを測る。石質は5・6・8が泥岩、7・119-1がシルト岩である。

石庖丁 119-3は磨製石庖丁の未成品と考えられる。本遺跡では石庖丁と考えられる製品はほとんど出土していない。板状節理の素材を加工したもので、形態的に小型に属するものである。背面は敲打後の研磨調整が顕著に見られるが、腹面は研磨調整は加えられていない。背面やや上位の基部側には研磨後の穿孔途中と思われる叩き痕が密に認められる。石質は泥岩である。

石 斧 119-2, 120-1～3は石斧と思われる。石斧には磨製石斧(119-2)と打製石斧(120-1～3)がある。2は刃部欠損の磨製石斧と考えられ、側縁に剥離調整、背腹面に研磨痕が認められる。側縁には研磨後の顕著な敲打痕が認められ、他器種から転用された可能性がある。120-1・2は大型の素材剥片に剥離調整を加えているもので、1は敲打痕によって剥離の稜が整形されている。3は比較的小型に属する石斧の未成品と思われ、側縁に1次調整による剥離痕が見られる。石質は119-2が泥岩、120-1が閃緑岩、2・3が泥岩である。

磨 石 120-4は楕円形の偏平な自然礫を使用し、平坦面に擦り痕が認められる磨石である。アスファルトが部分的に付着しており、図中に擦り面とアスファルト付着部分の違いをトーンの違いで表現した。石質はチャートである。

不定形石器 121-1・2は2次加工を施した不定形石器と判断した。出土量は非常に少ない。1は縦長の主要剥離側縁部に細かな調整剥離を加えたもので、刃部が片刃となる。素材剥片の横断面形は三角形状を呈し、使用時に生じたと思われる微細剥離痕が観察される。121-2は小型の剥片石器で、楔形石器(ピーエス・エスキュー)のように両極同時剥離が行われた可能性がある。石質は1が流紋岩、2が玉髄である。

剥片・石核 本包含層からは剥片348点、石核162点が出土している。そのうち、剥片4点(121-3～6)、石核5点(121-7～9, 122-1・2)について図示した。石質は剥片・石核ともに圧倒的に流紋岩が多く約73%を占めている。この中には火熱による剥離痕や赤褐色の火熱痕が観察されるものがある。3～6は不定形の剥片石器で、剥片の打面を除いた縁辺部に非常に細かい刃こぼれ状の使用痕が認められる。石核はいずれも剥離作業面が素材の縁辺部に限定され、打面を転移して剥離を行うものである。7～9は粗割り礫を素材としているもので、素材自体極めて小さい。剥離作業面が2面以上見られ、打面を任意に転移して剥離を行っている。10は表皮を敲打して剥離しており、打面を作らず打点を転移して剥片を採取している。122-2は大型の粗割り礫を素材とし、周縁部から剥離している剥片石核である。背面の側縁部より打点を転移して剥離しており、腹面はほとんど使用されていない。

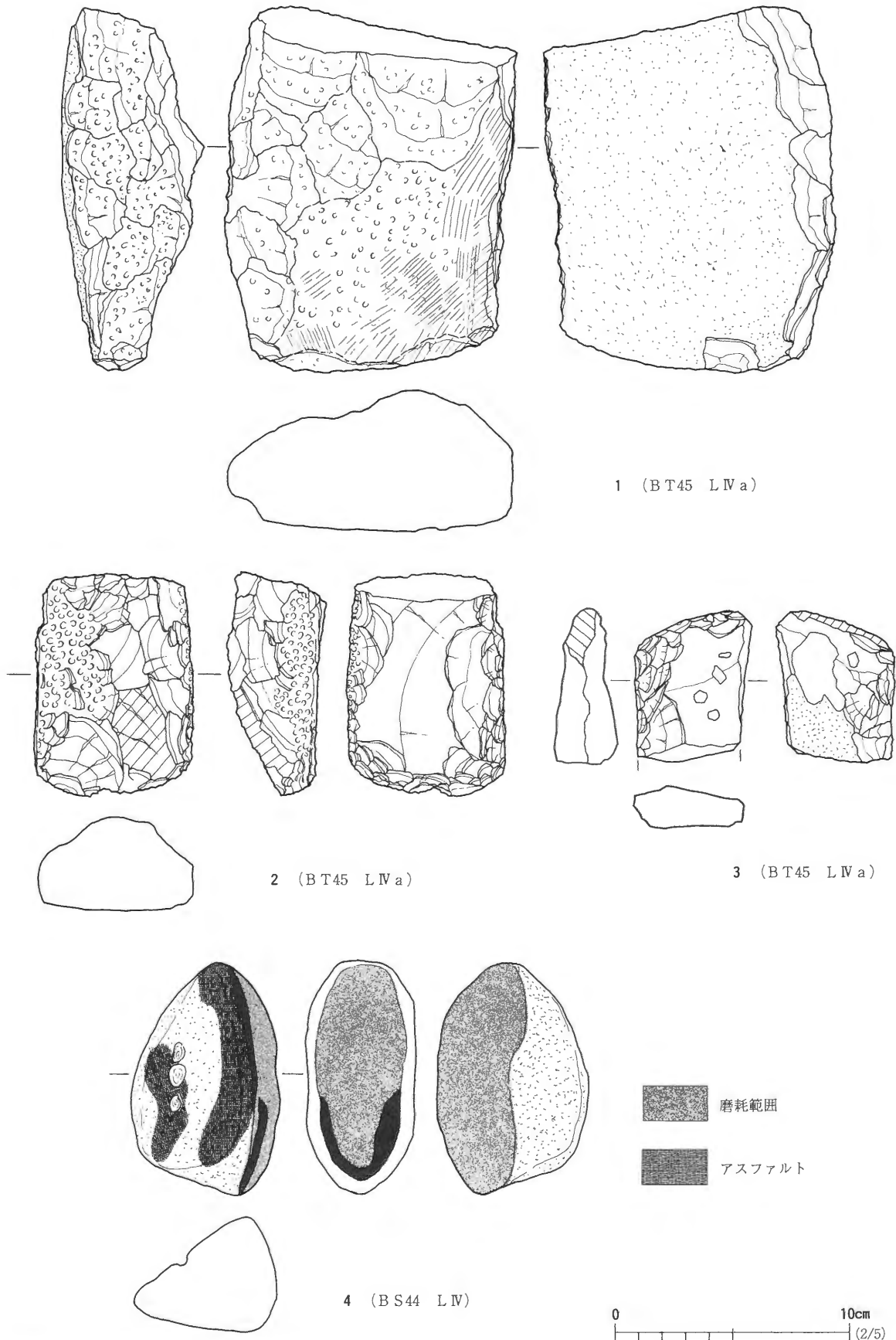


図120 1号遺物包含層出土石器 (3)

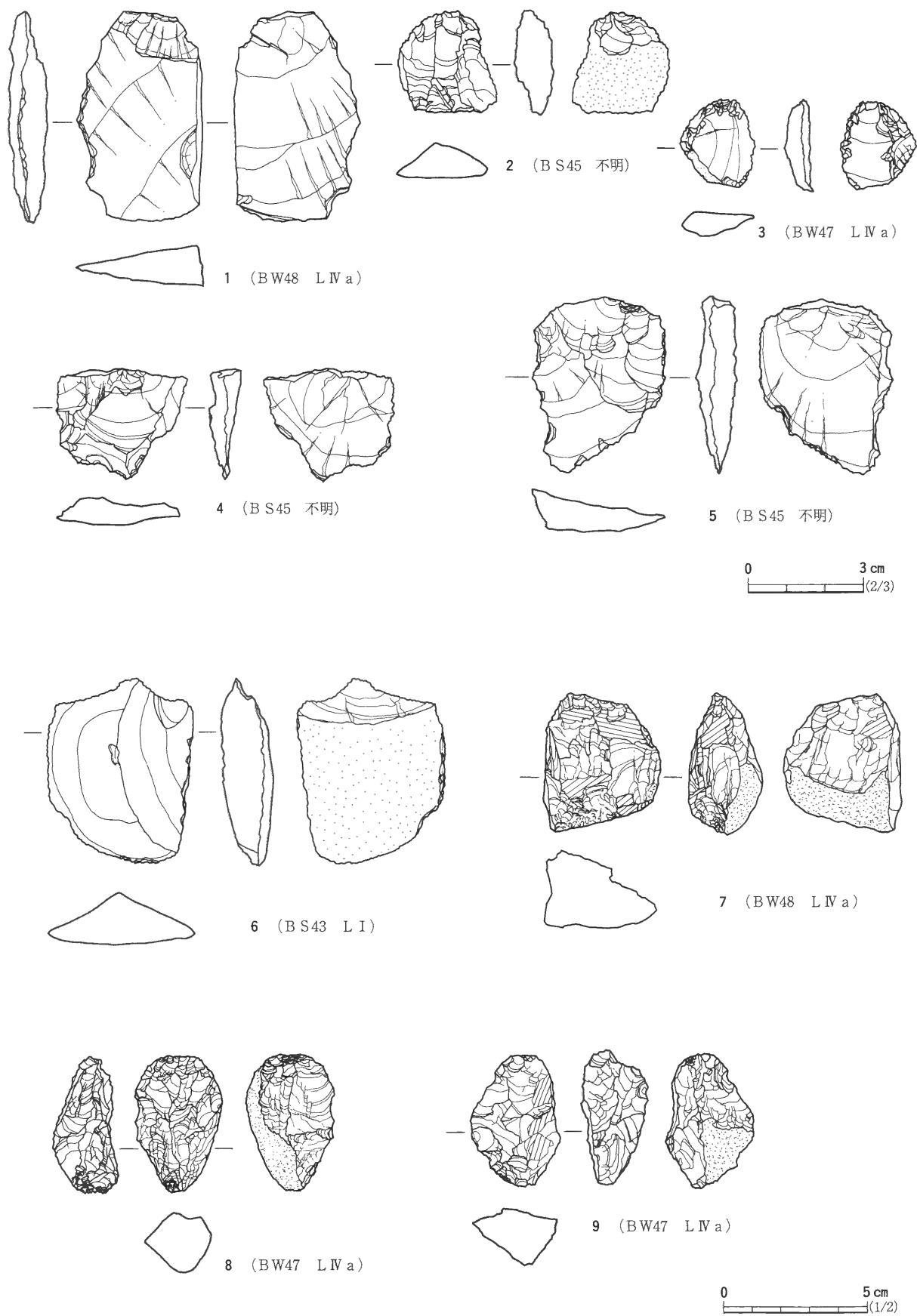


図121 1号遺物包含層出土石器 (4)

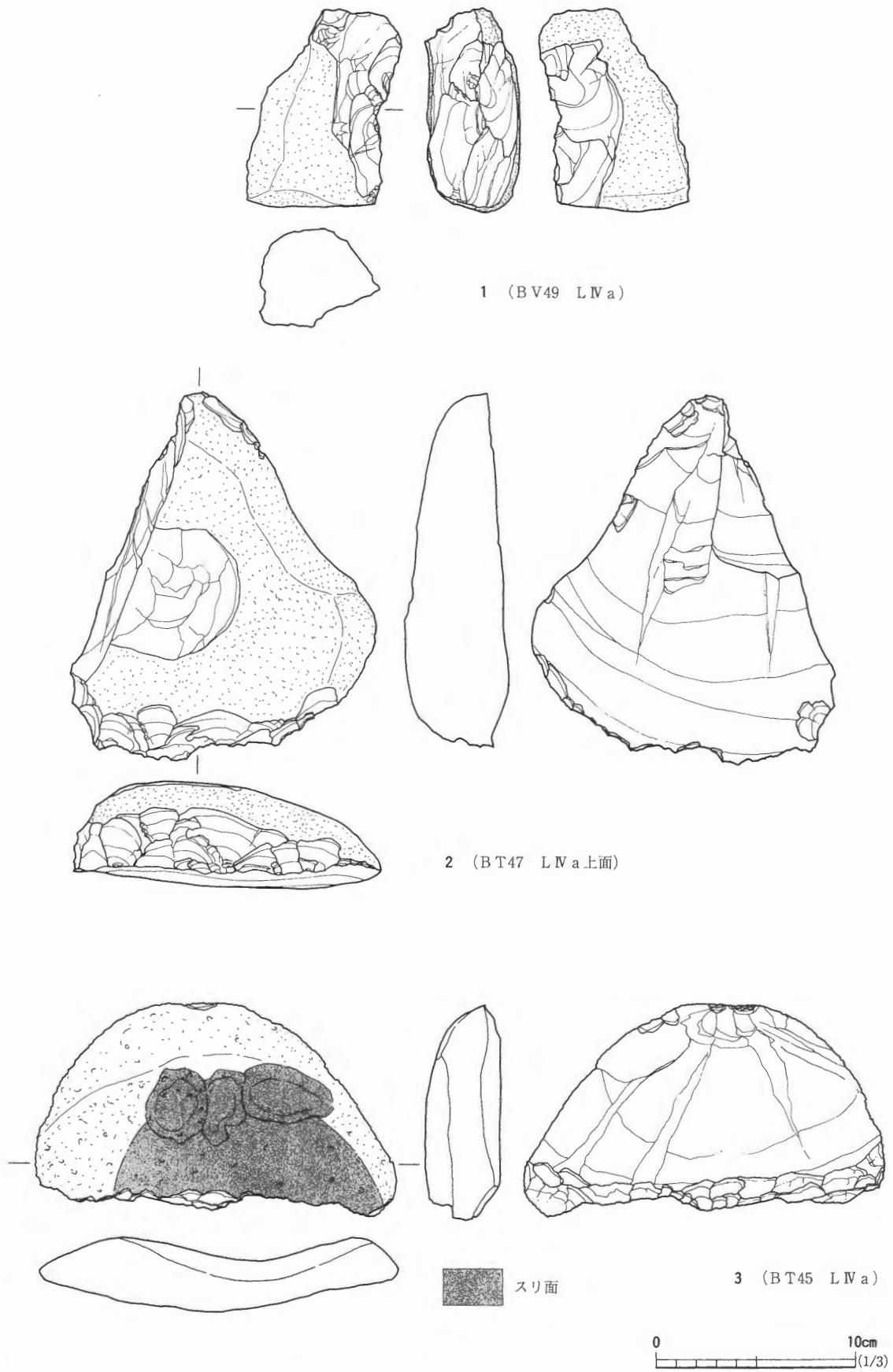


図122 1号遺物包含層出土石器 (5)

石 皿 122-3は器面が磨滅しており明瞭ではないが、石皿の欠損品と判断した。扁平な花崗岩礫を使用して、一面に緩く窪む凹面が認められる。この面の中央部はやや平滑になっている。

2号遺物包含層出土弥生土器 (図123~131, 写真185~196)

本包含層より出土した弥生土器は第Ⅰ~Ⅳ群土器である。全体の器形を把握できる資料はなく、器種組成では4類(高杯)が欠落している。以下弥生土器から各群ごとに説明するが、群分けや器種選定が困難なものについては第Ⅱ群土器内において一括して報告する。

第Ⅰ群土器 123が該当する。全て破片資料であり、7類のみの出土である。

7類土器 123は胴部の破片資料で、明確には器種選別できないものである。1~7は先端が尖った1本の施文具によって浅く曲線的に描画されているものである。8~11は2本同時の沈線文が等間隔に描画されたもので、沈線間の距離は8~12mm程である。地文は判然としないが直前段多条かあるいは附加条縄文を回転施文しており、3は一部条が絡み合っている。

6は不明瞭であるが撚糸文と思われる、5は斜縄文を施文している。器厚は平均して5mm程である。

第Ⅱ群土器 124~125が該当し、最も出土量が多い。全て破片資料であり、全体の形状を把握できるものはない。器形的には中型に属するものが多い傾向にあり、器種的には胴部(7類)・底部(8類)の破片資料、次いで甕(2類)・壺形土器(1類)の順で出土量が多い。

1類土器 124・125-1~6が該当する。124-1~9は壺形土器の口縁部資料で、1は受け口状、他は緩やかに外反し、復元口径11.4cmを測る。2は復元口径9.4cmを測り、3はやや広口の短頸壺で、復元口径15.8cmを測る。

4は頸部がやや広い器形となり、9は直線的に外反するものと思われる。4の内外面には束線具によって縦位に多条沈線が描画されているが、束線具が内面に施文される例は他にはない。地文に施されている原体は、3・5~7・9が附加条、2・4・8が直前段多条の原体を回転施文しているものと思われる、3~5・7・8の口唇部には同一原体を回転押捺している。器厚は平均して5mm程で、焼成は良好である。124-10~29, 125-1~6は壺形土器の頸部片で、主幹文様構成によりb~g種が認められる。

b種 124-15・19・27がある。15・19は束線具によって連続山形文、27は無文地に三角文を描

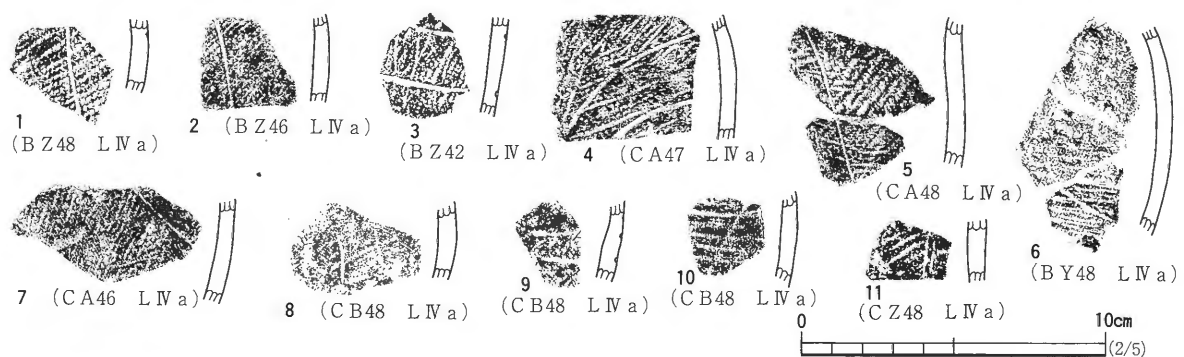


図123 2号遺物包含層出土弥生土器 (1)

画したものである。15の地文には附加条が施文され、19は明確に判断し得ないが直前段多条かあるいは附加条縄文が回転施文されたものと思われる。

c種 124-12-14・16・17・20-22・29が該当する。文様は3～5本の束線具によって助骨文(12・13・16・20-22)や格子文(14・17・29)が描画されているものである。

地文には14・22・29が直前段多条、16が附加条縄文の原体を施文しているものと思われ、12・20は無文の頸部に描画している。本種は施文具が異なるが、文様構成が桜井式土器に類似している。

d種 18・23-26・28がある。23・24は連弧文、18・25・26・28は波状の文様を束線具によって描いている。地文に施されている原体は18が直前段多条、28が附加条縄文、25は判然としないが撚糸文が施文されている。23・24・26は無文の頸部に描画されており、25は器形的に小型の壺と思われる。器厚は平均して5mm程であるが、26は3mmでやや薄手である。

f種 125-3～6は地文のみが観察されるものである。施文されている地文は3が直前段多条、4～6が附加条縄文と思われる。6は文様構成から器種的に5類(蓋)の可能性もある。

g種 125-1・2は頸部付近の破片資料で、外面にナデ調整が施されている。頸部が無文となるものは第Ⅲ群土器(桜井式土器)に多い傾向があり、器種では3類(鉢形土器)や5類(蓋)にも認められるが、一応本群本類に含めておく。

2類土器 甕形土器の口縁部から頸部片で、125-7～126-22が該当する。甕形土器は7が大型で、他は径15～20cm程の中型に属する。

口縁部の形態では、破片資料が多く詳細は不明であるが短頸(A)のものと長頸(B)のものが認められる。頸部が短く「く」の字状に屈曲するものは少なく、長頸となるものが多い傾向がある。また、口縁部から頸部にかけて施文される文様は圧倒的に地文が多く、束線具によるものは少ない。

口頸部の屈曲の度合いでは、12・13・20のように口縁部付近で内湾気味になるものや、7・8・10・24・26-32・35・36のように屈曲が弱く緩やかに外反するもの、9・11・14-19・21-23・25・33・34のように直線的に外反するものなどがある。7・14・17・18・22・23・32・33の口唇部は他の口縁部資料と比して角頭状を呈しており、15・20・27-30の口縁部はやや肥厚している。口縁部に施文されている文様は、9～11が無文地に束線具を用いた縦位への多条沈線を描画しており、他は地文に縄文が施されているものである。

8は復元口径14cmを測り、24は復元口径16.8cmを測る。地文に施されている原体は、明確に判断し得ないものもあるが、7・8・13・15・16・18・19・21-31・34・36が附加条文、14・32が直前段多条、17・20・33が0段多条の原体を施文していると思われる。35は摩滅が著しく不明である。

7・8・16-19・21-23・26・27・30・31・34の口唇部には胴部原体と同一の原体を回転押捺している。126-1～22は頸部付近の破片資料で、1～4には文様、5～22には地文(f種)のみが認められる。1は連続山形文(b種)、2は三角文(b種)が無文帯部に束線具によって描画され、2・3は横走沈線によって文様帯が区画されている。4は束線具による縦位への多条沈線が描画されたものである。地文に施されている原体は、2・4～8・11・14・16・17・20・22が附加条文、

1・3・9・10が直前段多条, 12・15・16が0段多条, 18・19・22が斜縄文であり, 22の内面には同一原体が施文されている。5・10・13・14・17～19は頸部の屈曲部に無文帯が認められ, 原体末端部の結節が観察される。6～12は口縁部欠損のため詳細は不明であるが, 頸部が短く「く」の字状に屈曲する器形と思われる。器厚は平均して5mm程で, 5～9は他と比して薄手で, 小型の甕である。

3類土器 126-24・25は鉢形土器の口縁部資料と判断した。出土数が少なく2点図示した。24は緩やかに外反する口縁部片で, 束線具による横走区画線間に連続山形文を描画している。口唇部には刻みが施され, 器面調整が整麗である。焼成は良好で, 器厚は6mmである。

器種的には4類(高杯)や5類(蓋)の可能性もある。復元口径16.8cmを測り, 25は束線具によって横走沈線を描画しているもので, 文様間は1.7cm程と広い。器厚は4mm程でやや薄手である。

5類土器 126-26～29は蓋形土器で, 全体形を把握できないが, 器形や器面調整が他と異なり整麗であるため蓋と判断した。26は口縁部に沿った横走沈線と縦位の多条沈線が描画されているものである。27～29は蓋の摘み部付近の破片資料と思われ, 内面には非常に丁寧なナデ調整が加えられている。27・28は直立気味に立上がり, 29は直線的な末広りの器形を呈する。

地文は, 27が斜縄文, 28・29は附加条の原体を施文している。27が天井径6.7cm, 28が4.4cm, 29は8cmを測る。

6類土器 126-30は口縁部を欠損する手捏土器である。器面調整は内外面に指頭圧痕が顕著に観察され, 内面には部分的にナデ調整が施されている。

平面形は楕円形を呈し, 底部は厚手となる。

7類土器 127・128・129-1～8は甕・壺などの胴部片で, 器種分けできない。127-1～6, 128-25は胴部上半の破片で, 127-1～6は束線具, 128-25は1本の太沈線によって曲線文が描かれている。地文の原体は, 7・8・13・21が撚糸文, 127-1・3～5・10・11・14～19・22・24, 128-6～19・24が附加条文, 127-2・25～27, 128-2～5・20・21・23・25・27, 129-1・2・5が直前段多条, 127-9・12・20・23, 128-26・28が0段多条, 128-1, 129-3・4・6～8が斜縄文を回転施文したものである。127-14, 128-8は軸に巻いた条が緩んでよれており, 127-11・19, 128-6・7・15は同一原体による多方向からの施文がみられ一部条が絡み合っている。器厚は平均して7mm程である。

8類土器 129-9～23, 130は底部で, 遺存状態の良い27点を図示した。器形的に129-10・14・17は底径4.7～6.4cmと小型, 130-1・2・8は底径10.6～11cmと大型に属する。形態的には底部側面がやや突出する129-10～12と突出しないもの, 129-14～18のように垂直ぎみに立上がるものと129-20, 130-5～12のように直線的に外反するものがある。形態的に小さく, 垂直ぎみに立上がる129-14～18は3類(鉢形土器)や5類(蓋)の可能性もある。

胴部下位に施文されている地文は, 不明なものもあるが, 附加条文かあるいは直前段多条を回転施文している。129-12・17・19, 130-6の胴部下端には外面ナデ調整や指頭圧痕が観察され, 12

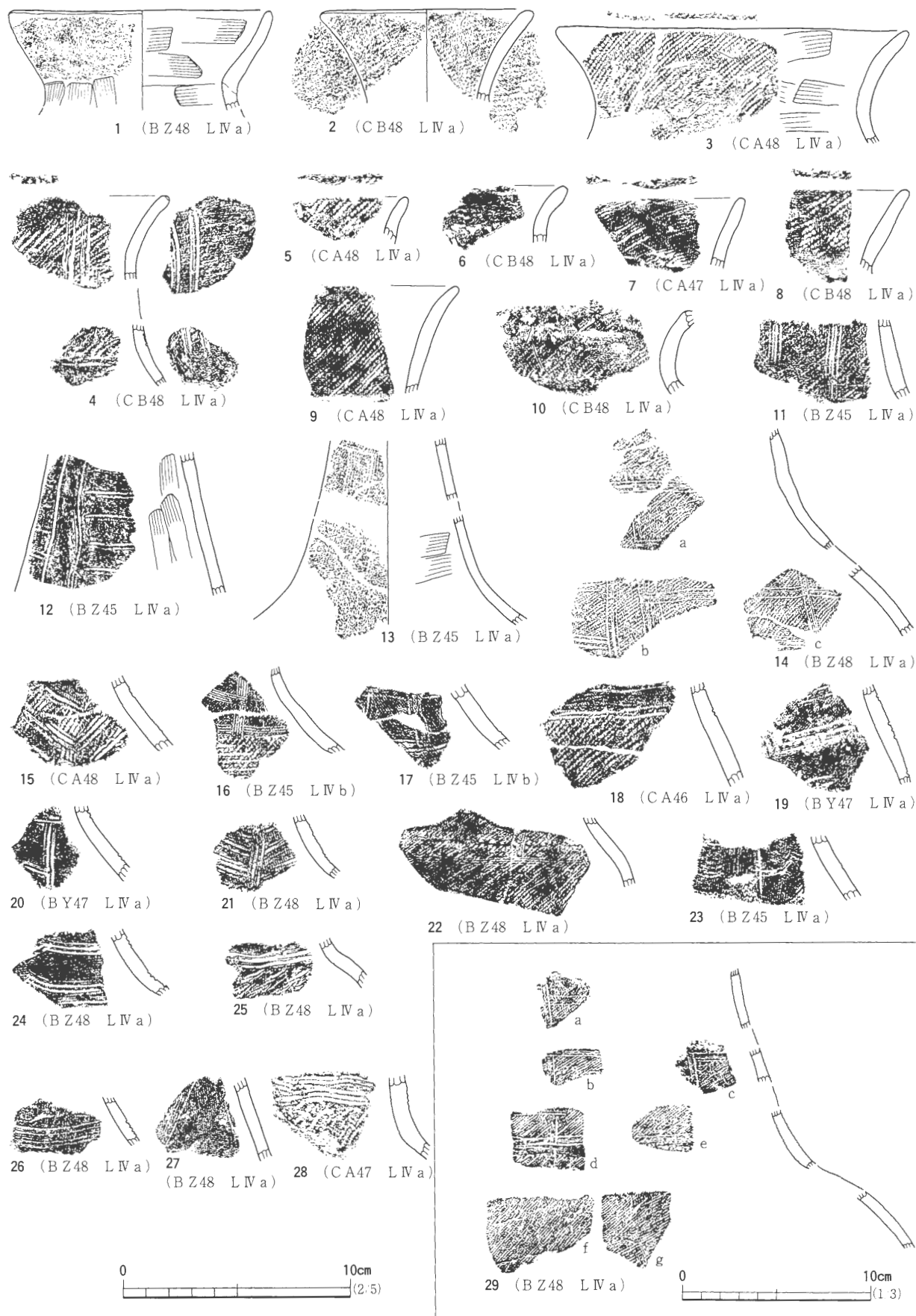


図124 2号遺物包含層出土弥生土器 (2)

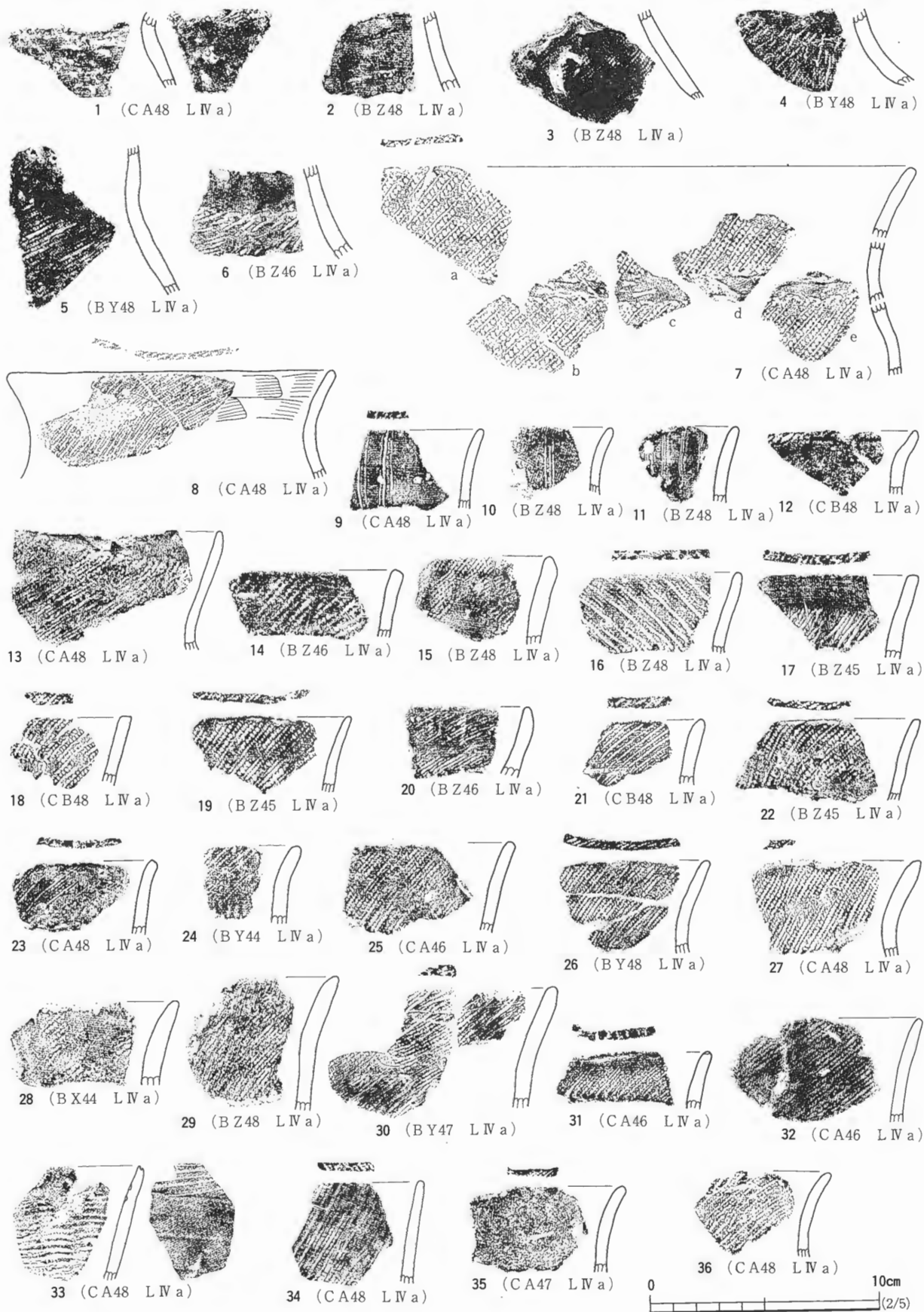


図125 2号遺物包含層出土弥生土器 (3)

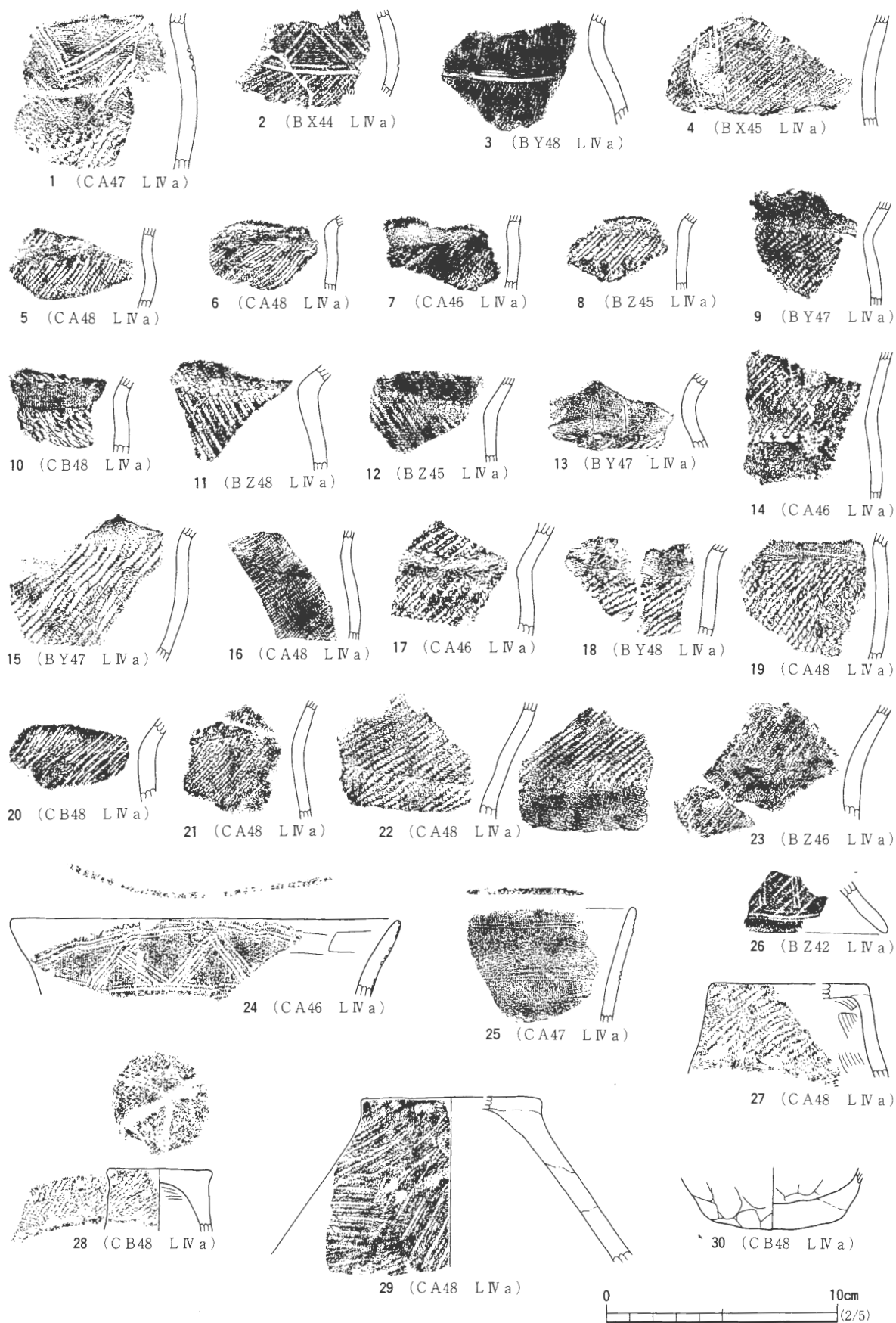


图126 2号遺物包含層出土弥生土器 (4)

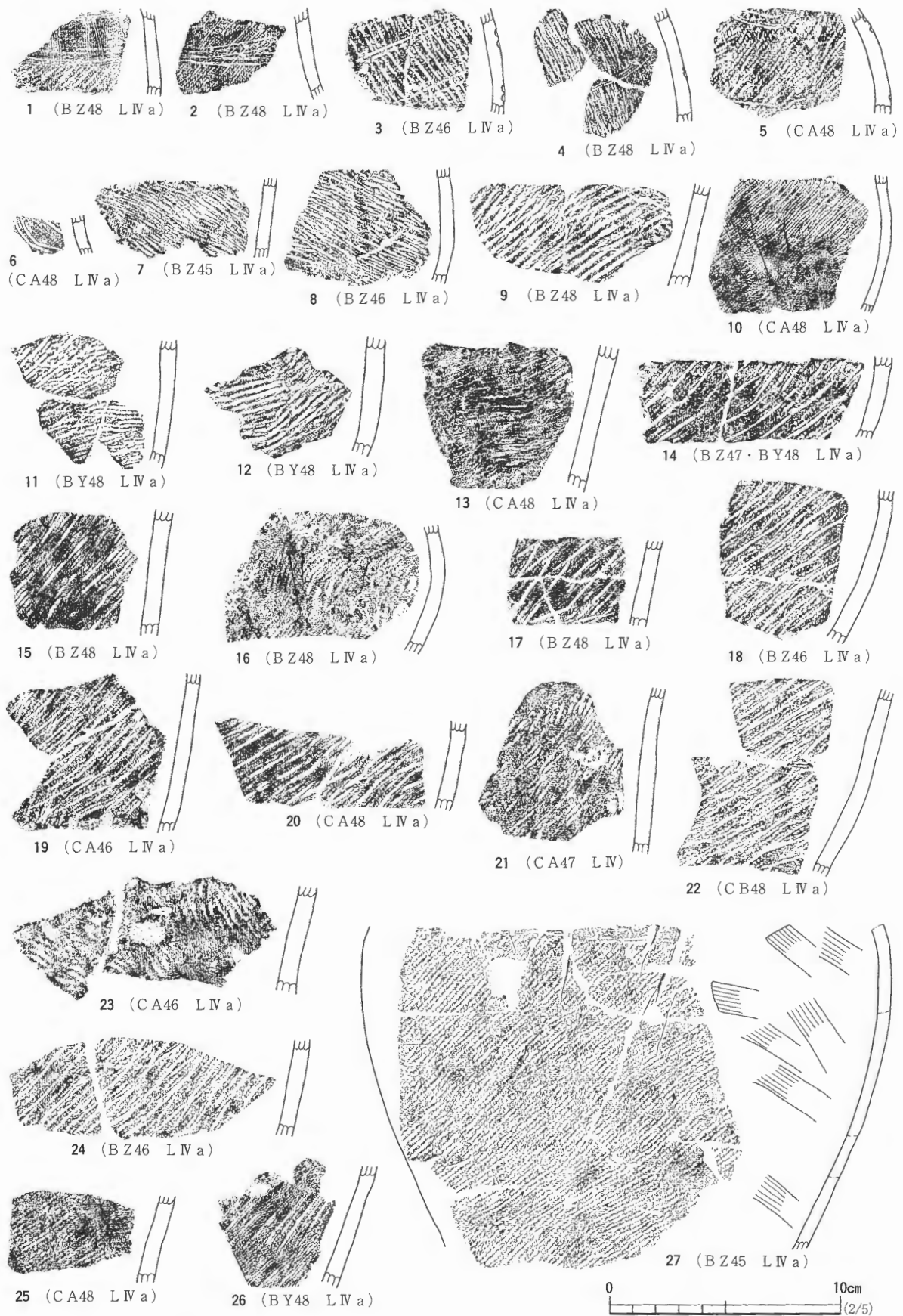


図127 2号遺物包含層出土弥生土器 (5)

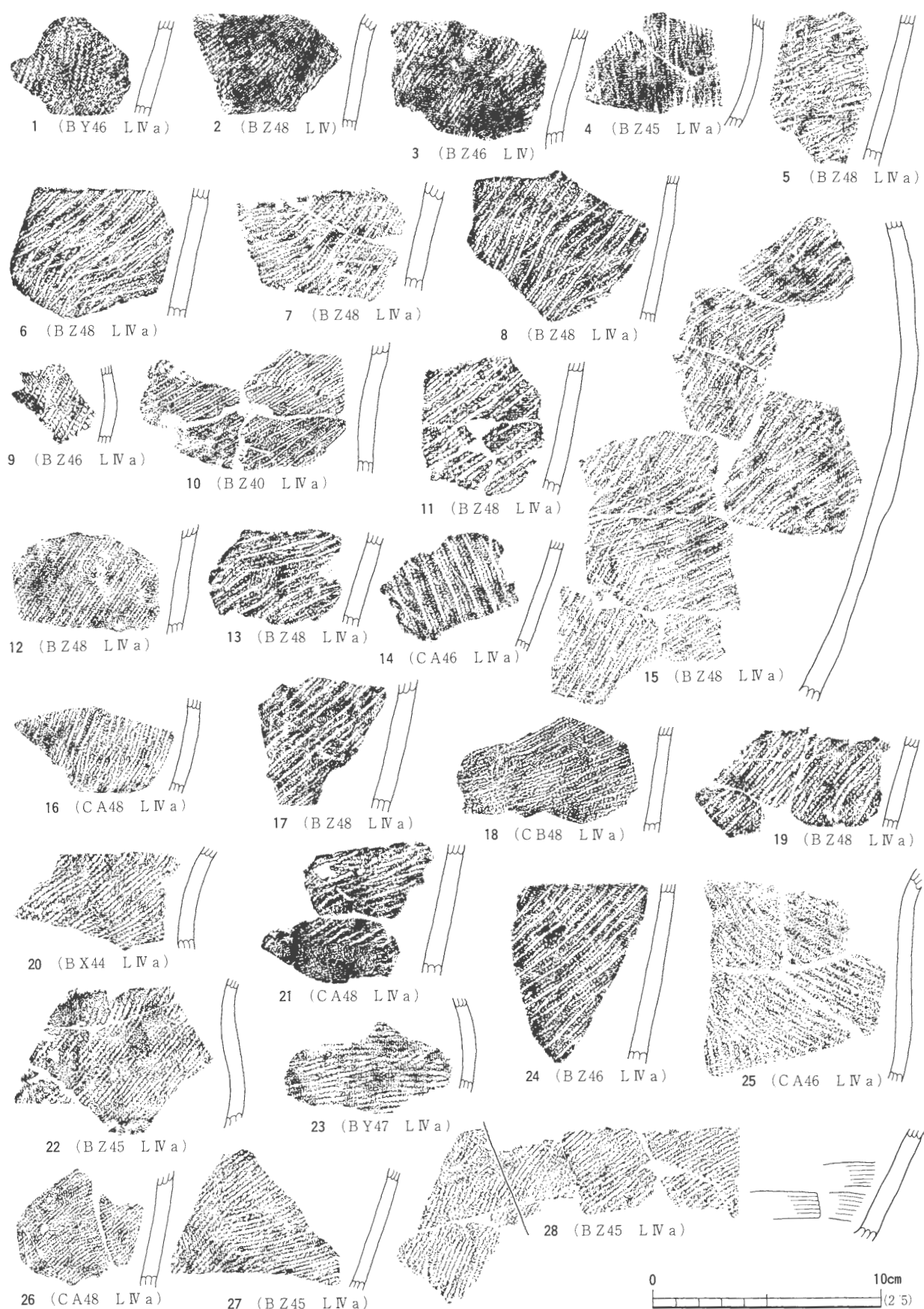


图128 2号遺物包含層出土弥生土器 (6)

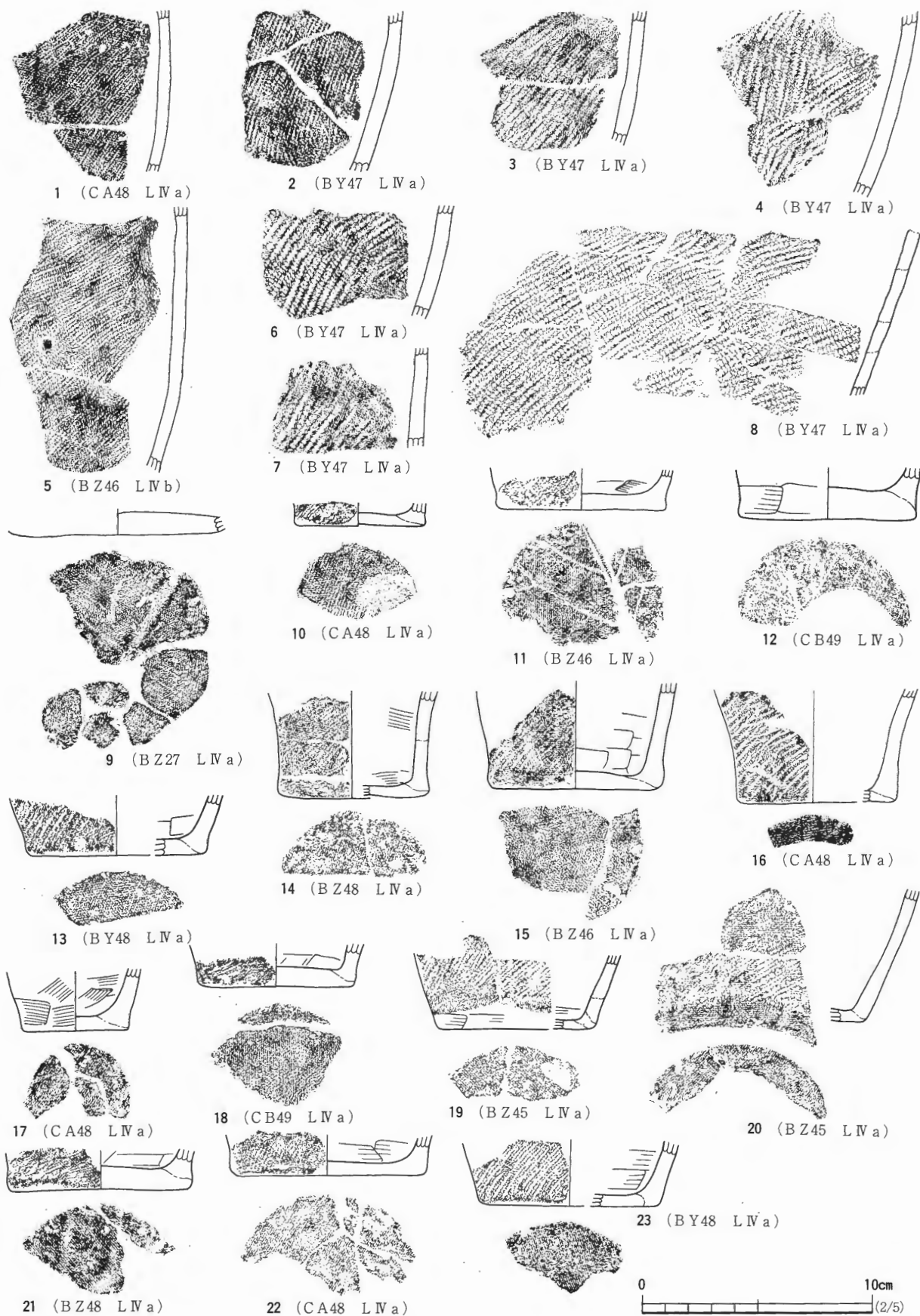


図129 2号遺物包含層出土弥生土器 (7)

9-11・19は2次加熱を受けた痕跡が認められる。

底面は平織り状の布圧痕が観察される129-9・10・13~16・18・19・21~23, 130-1~5・8~12, 木葉痕が残る129-11・12, 130-6・7, ナデ状の調整を施されている129-17・20がある。底径は4.7~11cmを測る。

第Ⅲ群土器 131-1~12が該当する。全て破片であり、全体の形状を把握できるものはない。遺跡内から出土した弥生土器総数(27,713点)の約0.06%にあたり、1類のみの出土である。

1類土器 131-1~12は壺形土器の頸部付近の破片資料で、1~4は同一個体である。1~4

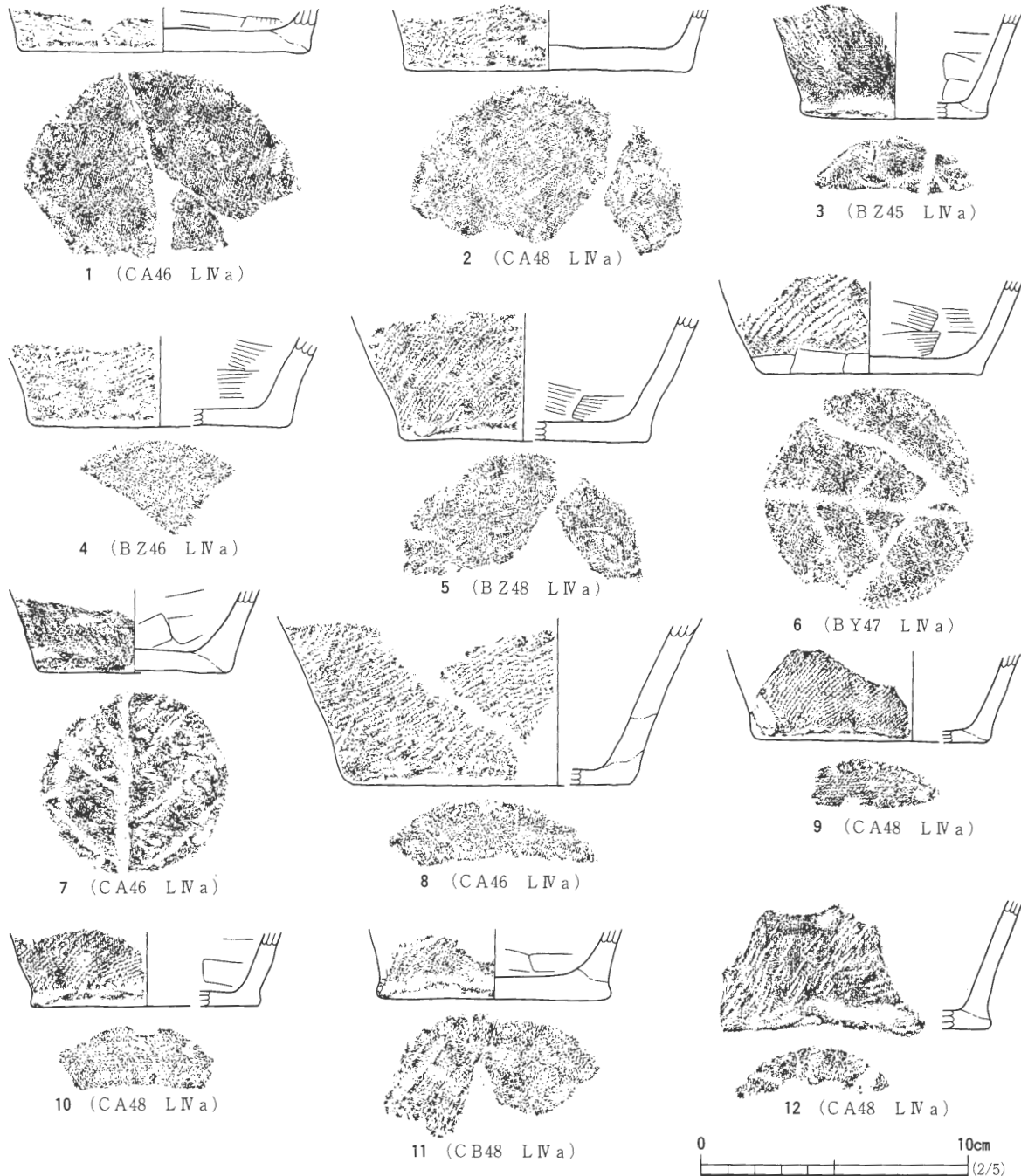


図130 2号遺物包含層出土弥生土器(8)

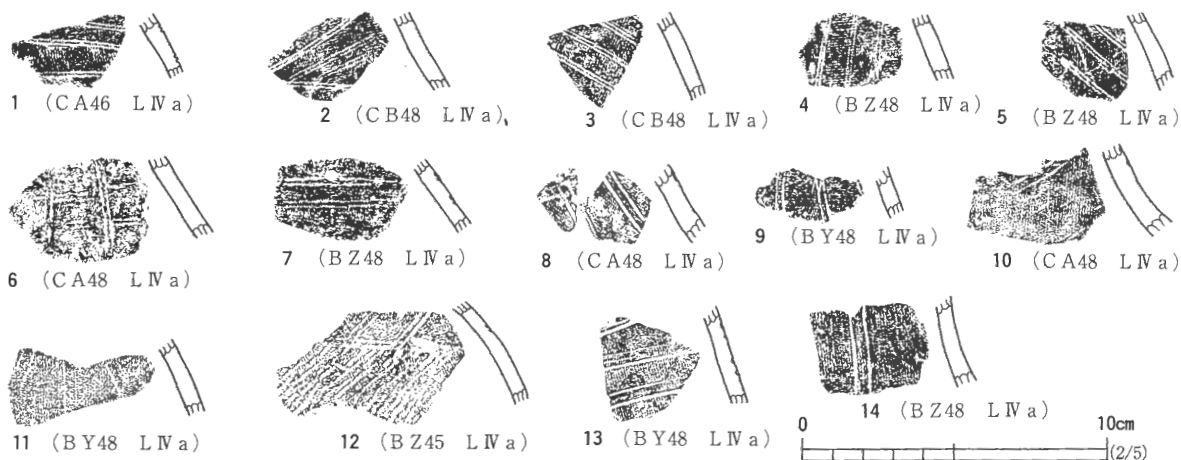


図131 2号遺物包含層出土弥生土器(9)

は先端が尖った工具により、二本同時施文の重層山形文を描画している。横走沈線によって文様帯を区画し、二線間の距離は1mm程で、断面V字状を呈し、沈線の深さは一定している。内面にはナデ調整が施され、器厚は5mm程である。

6・7は摩滅が著しく詳細は不明であるが、6は格子文、7は横線文を二本同時施文によって描画したものである。8～12は二本同時施文によって文様を描いているが、他と比して二線間の距離がやや広く、施文技法が異なるものである。8・10はやや太めの工具によって二本同時に施文しているもので、沈線の深さが異なるものである。いずれも沈線間の距離は4mm程で、断面はU字状を呈する。器厚は7mm程で他と比してやや厚手である。11は先端が尖った工具で二本同時に縦線文を描いており、沈線間の距離は4mm程である。12は沈線間の距離が2mm程とやや狭いが、区画横線文は11よりもやや太めの工具によって描画されている。

第Ⅳ群土器 131-13・14が該当し、第Ⅲ群土器同様に非常に希少な土器群である。全て破片資料であり、1類のみ判断できた。

1類土器 壺形土器の頸部付近の破片資料である。13・14は第Ⅲ群土器よりもやや太めの工具によって二本同時に文様を描画しているものである。施文具は8・10に近い工具によって描画されており、断面はU字状を呈する。いずれも沈線間の距離は5mm程で、比較的沈線の深さは一定している。器厚は平均して6mm程で、焼成は良好である。

2号遺物包含層出土須恵器・埴埴 (図132)

弥生土器・石器以外に133点の遺物が出土している。その内訳は土師器92点、須恵器17点、陶磁器1点、埴埴1点である。遺物は大半がLⅢからで、LⅣ以下には混在していない。

埴埴 132-1は埴埴である。椀形を呈し、器面には指頭による圧痕がある。法量は復元口径6.2cm、器高3.8cmを測り、器厚は平均して1cmである。

須恵器 132-2・3は須恵器杯、4は須恵器高台付盤である。2は直線的に外傾する器形で、体部下端から底部に回転ヘラケズリ調整、推定口径14.6cm、推定底径8.6cm、器高3.3cmを測る。3は底径8.2cmを測る。4は底部との境に緩やかな屈曲線を有し、体部中央から口縁部にかけて直立

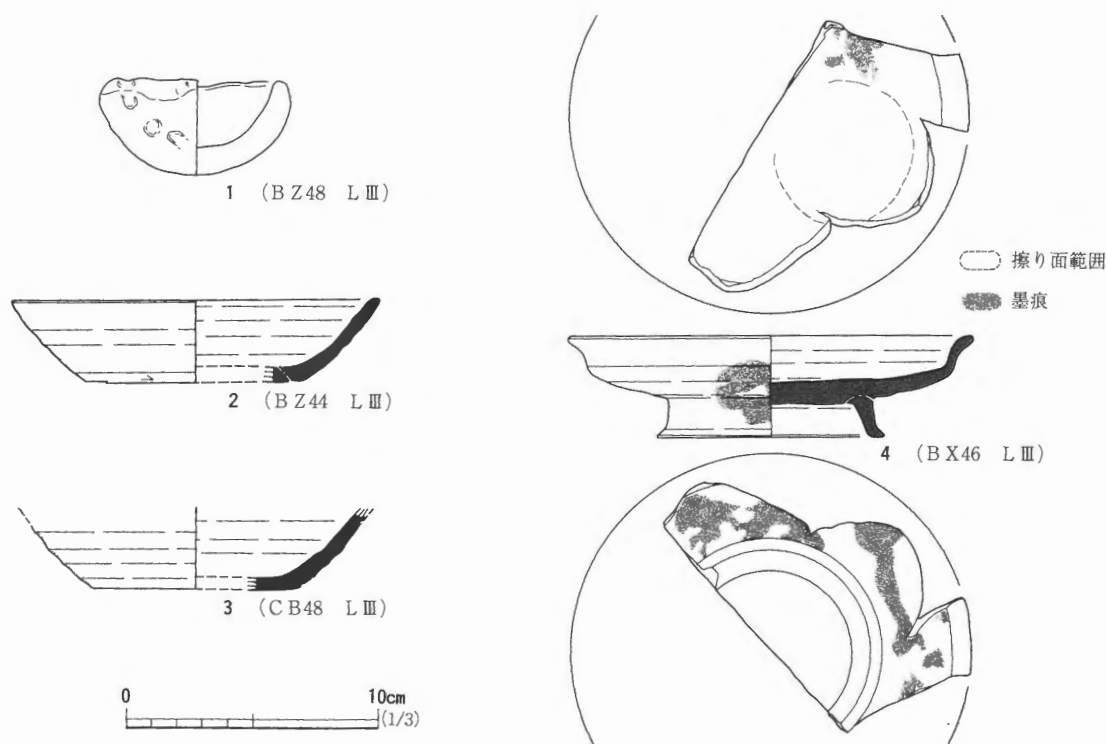


図132 2号遺物包含層出土埴塼・須恵器

気味に外反する器形である。

内外面には部分的に墨痕が付着し、内面底部には擦痕が認められ、転用碗と考えられる。法量は口径16.1cm、底径9.1cm、器高3.5cmを測る。

2号遺物包含層出土石器 (図133・134, 写真197~199)

出土した石器・剥片類は401点である。そのうち、剥片・石核は390点に上り、遺存状態が良く図示したものは14点である。内訳は太型蛤刃石斧2点、両刃石斧1点、扁平片刃石斧5点、板状石器1点、敲打器1点、剥片2点、石核1点、砥石1点である。

太型蛤刃石斧 133-1・2である。全形が分かるものではなく、基部側を欠損するもので、断面が共に楕円形を呈する厚みのある器形である。1・2はいずれも叩き整形と敲打後の研磨調整が加えられており、1次整形時の剥離が部分的に認められる。1の刃部には使用痕と思われるや線條痕が認められ、遺存する法量は1が遺存長11.5cm、最大幅6.8cm、最大厚4.1cmを測り、刃角は63°である。2は遺存長12.2cm、最大幅8.0cm、最大厚6.0cmで、石質は1・2共にヒン岩である。

両刃石器 133-8は刃部欠損の両刃石斧と思われる。器形的には基部側の幅が小さくなるもので、太型蛤刃石斧より器厚がやや薄手である。器面には1次整形時の剥離痕が認められ、丁寧な叩き整形が加えられている。背面中央部と側縁部には磨耗により擦れた痕跡が認められる。

この種の調整技法は、抉り入り両刃石器に限って顕著に認められ、転用・未成品の可能性が考えられ、遺存する法量は最大長9.0cm、最大幅5.8cm、最大厚2.6cmを測り、石質はヒン岩である。

扁平片刃石斧 133-3~7が該当する。最も出土量が多く(26点)、本包含層から5点出土。すべて刃部に最大幅を持ち、両側縁から基部にかけて1次調整痕が残っている。

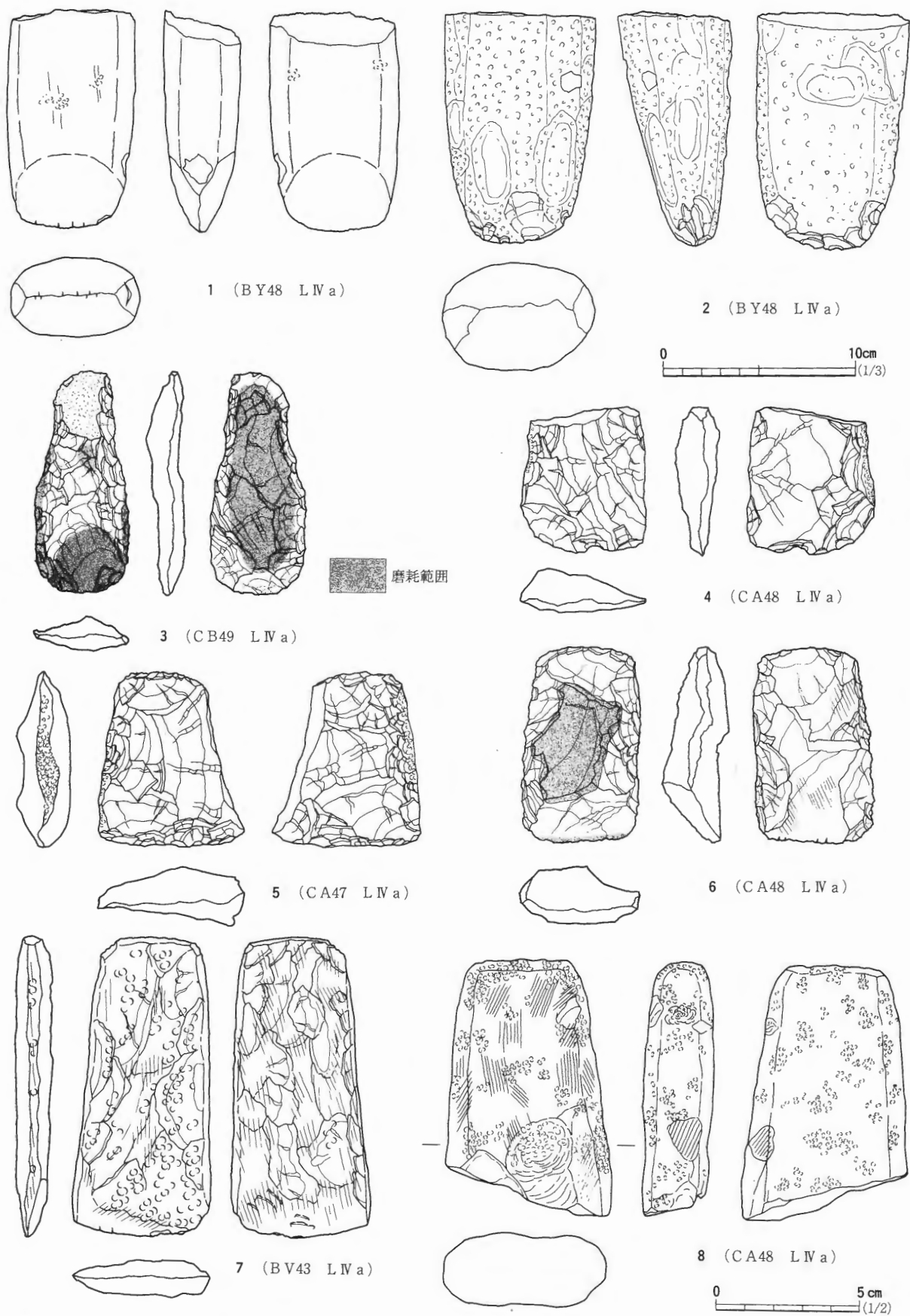


図133 2号遺物包含層出土石器 (1)

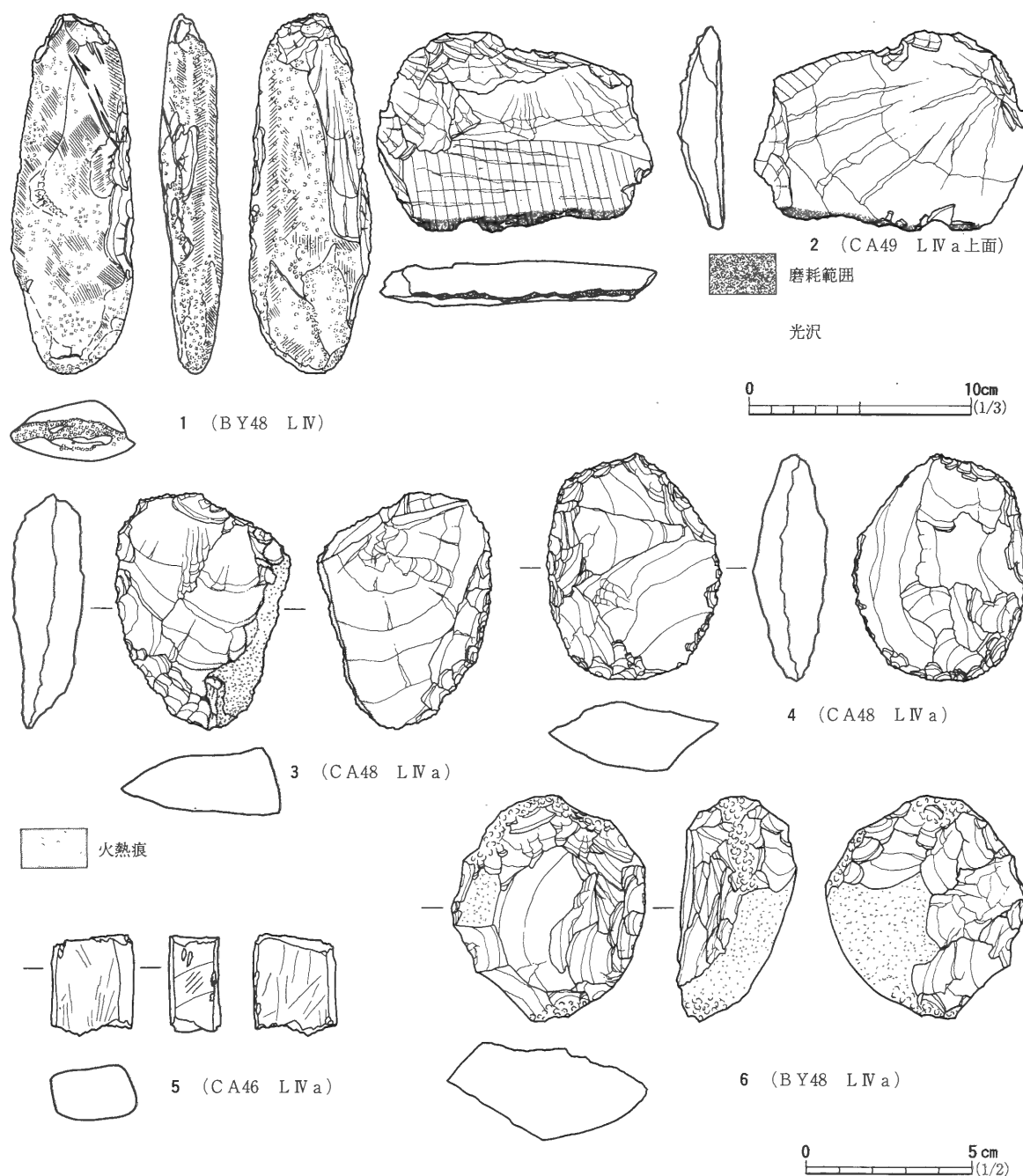


図134 2号遺物包含層出土石器(2)

全体的に雑な造りのものが多く、形態的に3が小型、4～6が中型、7が大型に属する。器厚は3・7がやや細身、5・6が厚手、7は基部側がやや厚手となる。3・6の背腹面には部分的に磨耗した痕跡が認められる。5の側縁には1次剥離調整後の顕著な叩き痕が加えられ、7の腹面には1次整形後の敲打痕はなく、直接研磨を加えている。6・7の刃部は局部研磨調整が施されて、5～7の刃縁には使用痕や線条痕が認められる。法量は大型の7が最大長10.6cm，最大幅4.9cm，基部幅3.7cm，厚さ1.3cmを測り，6が最大長8.0cm，最大幅3.9cm，基部幅3.6cm，厚さ1.1cmで，刃角は7が約32°，6が約46°である。石質は4・5・6・7が緑色片岩，8がヒン岩である。

板状石器 134-2は刃部の長さに対し、身幅がほぼ同等である。比較的大きく剥離した薄手の素材剥片に簡単な1次調整を施しているもので、断面が板状を呈し、直線的な刃部をもつものである。刃部は節離面をそのまま利用し、磨滅が著しく、刃こぼれが多く見られる。刃縁には明確なコーングロス認められず、使用による微細剥離や磨耗している。法量は最大長9.0cm、最大幅12.3cm、最大厚1.9cmを測り、刃角は約22°である。石質は泥岩である。

敲打器 134-1は両面に自然面を残し、偏平な縦長礫の先端部に敲打痕が認められるものである。側縁部には1次剥離調整による整形が見られ、叩き・研磨調整によって稜が壊されている。法量は最大長17.1cm、最大幅5.5cm、最大厚2.6cmを測り、石質は頁岩である。

剥片・石核 本包含層からは剥片271点、石核119点が出土している。そのうち、剥片2点(134-3・4)、石核1点(134-6)について図示した。

石質は剥片・石核ともに圧倒的に流紋岩が多く約90%を占めている。この中には火熱による剥離痕や赤褐色の火熱痕が観察されるものが約15%ある。3・4は不定形の剥片石器で、剥片の打面を除いた縁辺部に細かい刃こぼれ状の微細剥離痕が認められるものである。

3には表皮が遺存し、赤褐色の火熱痕が観察される。石核は表皮を敲打して剥離しており、打面を作らず打点を転移して剥片を採取している。

砥石 134-5が該当し、全面に顕著な研磨痕が認められる欠損品である。研磨は側縁部に対し、直交もしくは斜行するように認められる。遺存する法量は最大長3.0cm、最大幅2.5cm、最大厚1.6cmを測り、石質は鉄石英である。

まとめ

1・2号遺物包含層は、本遺跡で検出された包含層の中でも規模・遺物の出土量ともに大規模のものである。遺物は総出土点数の約46%を占め、弥生時代中期末葉の極限られた時間幅内に制約されるものである。

包含層が形成された最終的な時期は、2号遺物包含層での再堆積が著しく明確には不明であるが、他の包含層と同時期の弥生時代中期末葉頃と考えられる。(井)

3号遺物包含層 SH03

遺構 (図135・136・138, 写真112・113)

本包含層は、調査区北側のAW29～32, AX27～32, AY25～30, AZ25～30, BA26～28, BB26グリッドに位置する。3号住居跡、2・3・4号土器埋設遺構の検出された丘陵部北側の南西斜面に形成され、遺物の分布範囲は東西37m、南北12mの範囲にわたる。

遺物を包蔵する堆積層はLⅣ・LⅣa・LⅣbで、包含層の堆積は地山の起伏によって様々であるが、斜面上位から中腹にかけて20～40cm、下位では部分的に70～80cmと厚くなる。

遺物は斜面中腹に堆積したLⅣに多く含まれ、斜面上位から中腹にかけてはLⅣa・LⅣbにも少量含まれており、斜面への廃棄、あるいは流れ込みによって形成されたものとする。

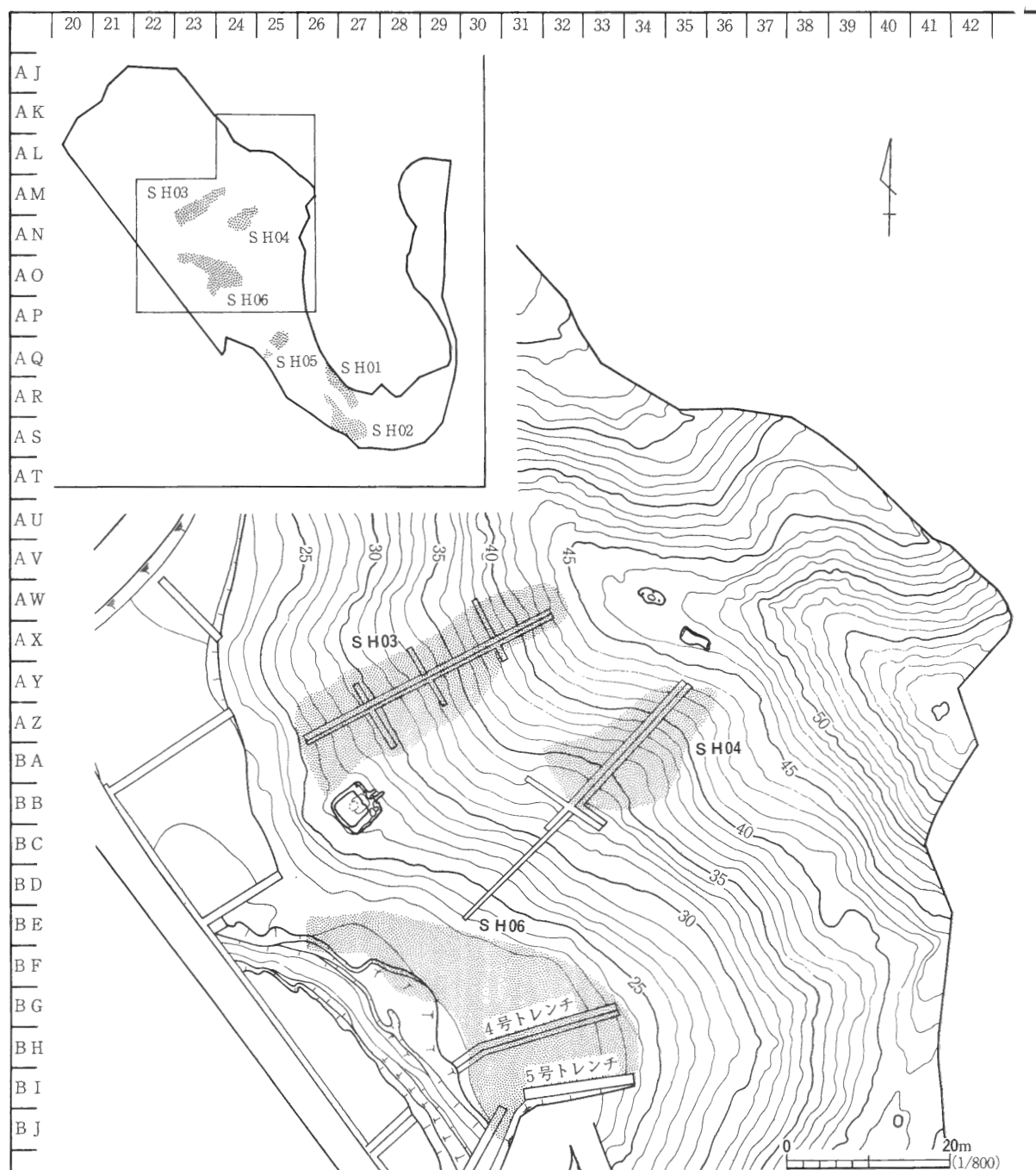


図135 3・4・6号遺物包含層位置図

遺物

本包含層より出土した遺物は、弥生土器片257点、石器類2点である。このうち遺存状態の良い弥生土器33点、石器2点を抽出し図示した。

土器 (図139・140, 写真200~203)

本包含層で出土した土器は、第Ⅱ群土器である。

1類土器 139-1~5は束線具のような工具を用いて多条沈線を施文してる。

1は壺形土器の口縁部資料で、束線具状の工具を用いて横走沈線を巡らしている。2・3は壺形

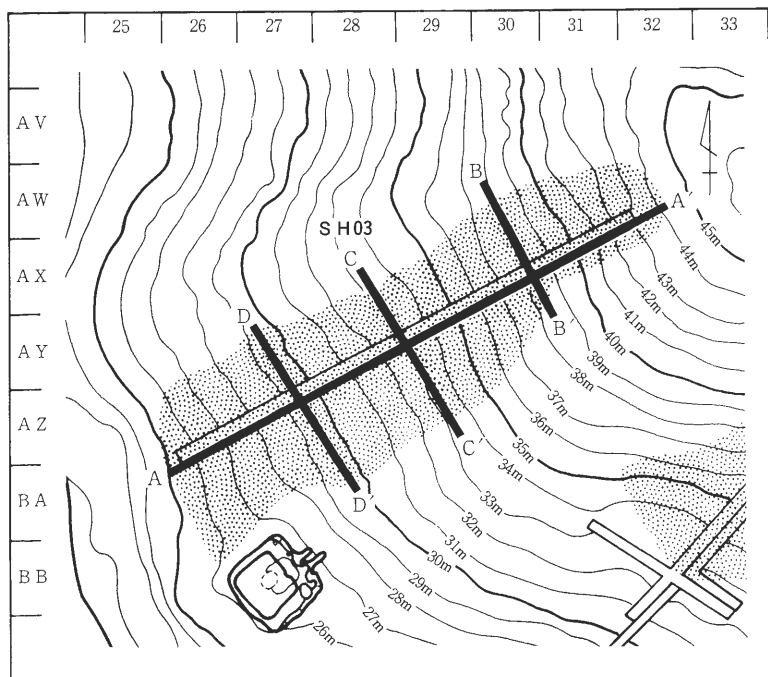


図136 3号遺物包含層

5類土器 139-10・11は他の底部資料と比較して小さいため蓋と判断した。10には木葉痕が明瞭に残る。10は天井径7.2cm, 11は5.7cmを測る。

7類土器 139-12~28は壺もしくは甕の胴部破片資料と考えるが、明確には器種判別できないものである。施文される原体は・附加条縄文・直前段多条縄文が多い。

8類土器 140-1~5は底部資料で5点を図示した。胴部下位に施文される原体は、7類と同じ傾向である。底径10.4~12cmを測る。

石器 (図140, 写真204)

出土した石器は、打製石器1点とノミ形石器1点である。

140-6は扁平片刃石斧と考えられる。側縁部には両面からの調整が施され、片側の側縁部には弱い挟りがつけられ刃部がわずかに弧状を呈する。140-7は刃部と側縁部に研磨を施したノミ形

土器の同一個体の頸部資料で、束線具状の工具を用いて幾何学的な文様を施している。4・5も壺形土器同一個体の頸部資料で、地文との境に束線具状の工具を用いて横走沈線を巡らし、その上位には同様の工具で連弧文が描かれている。

6~8は頸部から胴部にかけての破片資料で、6・8には地文の附加条縄文のみ施される。

9は同じく壺形土器の口縁部資料で、口唇部にも縄文が施されている。

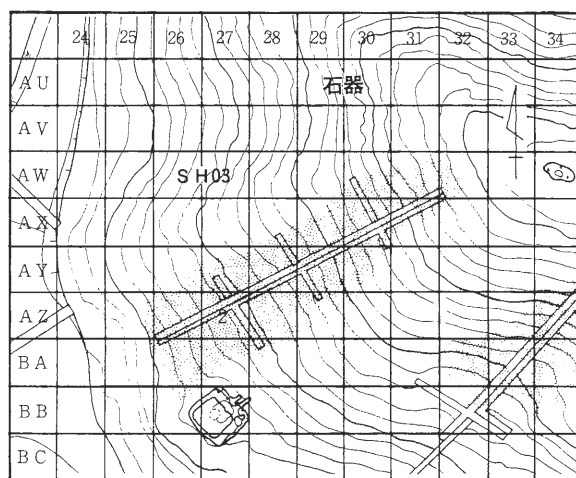
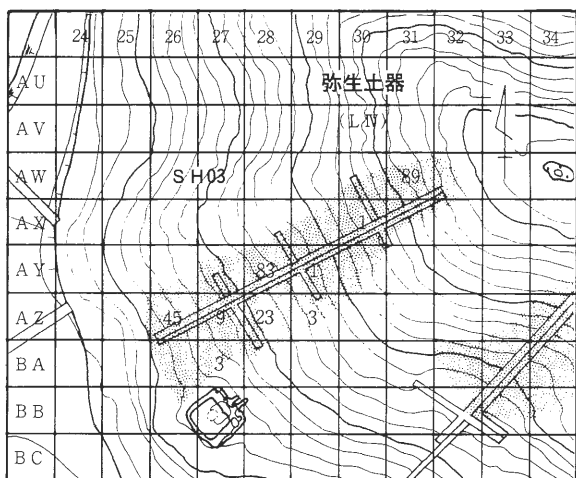


図137 3号遺物包含層出土遺物分布図

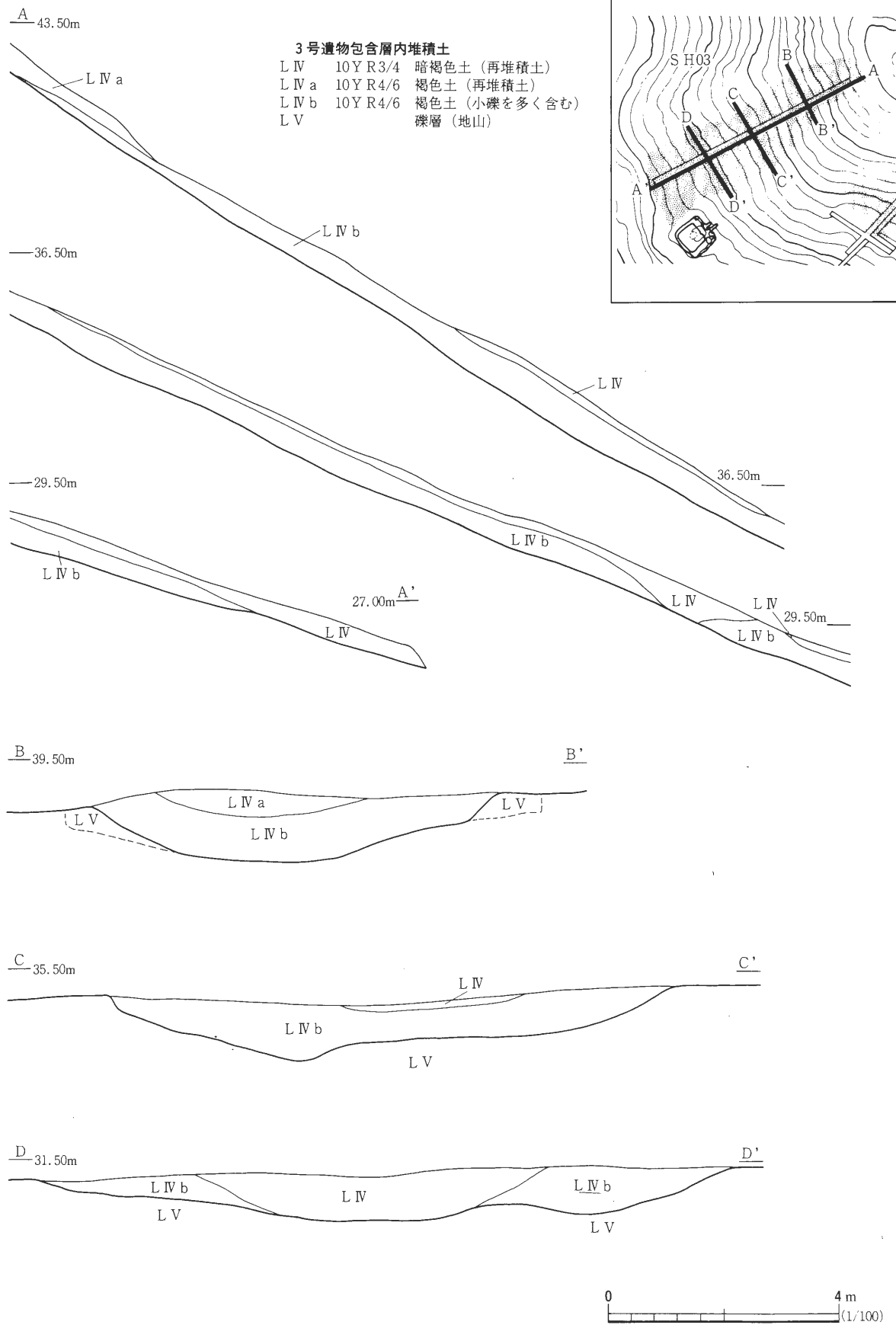


図138 3号遺物包含層断面

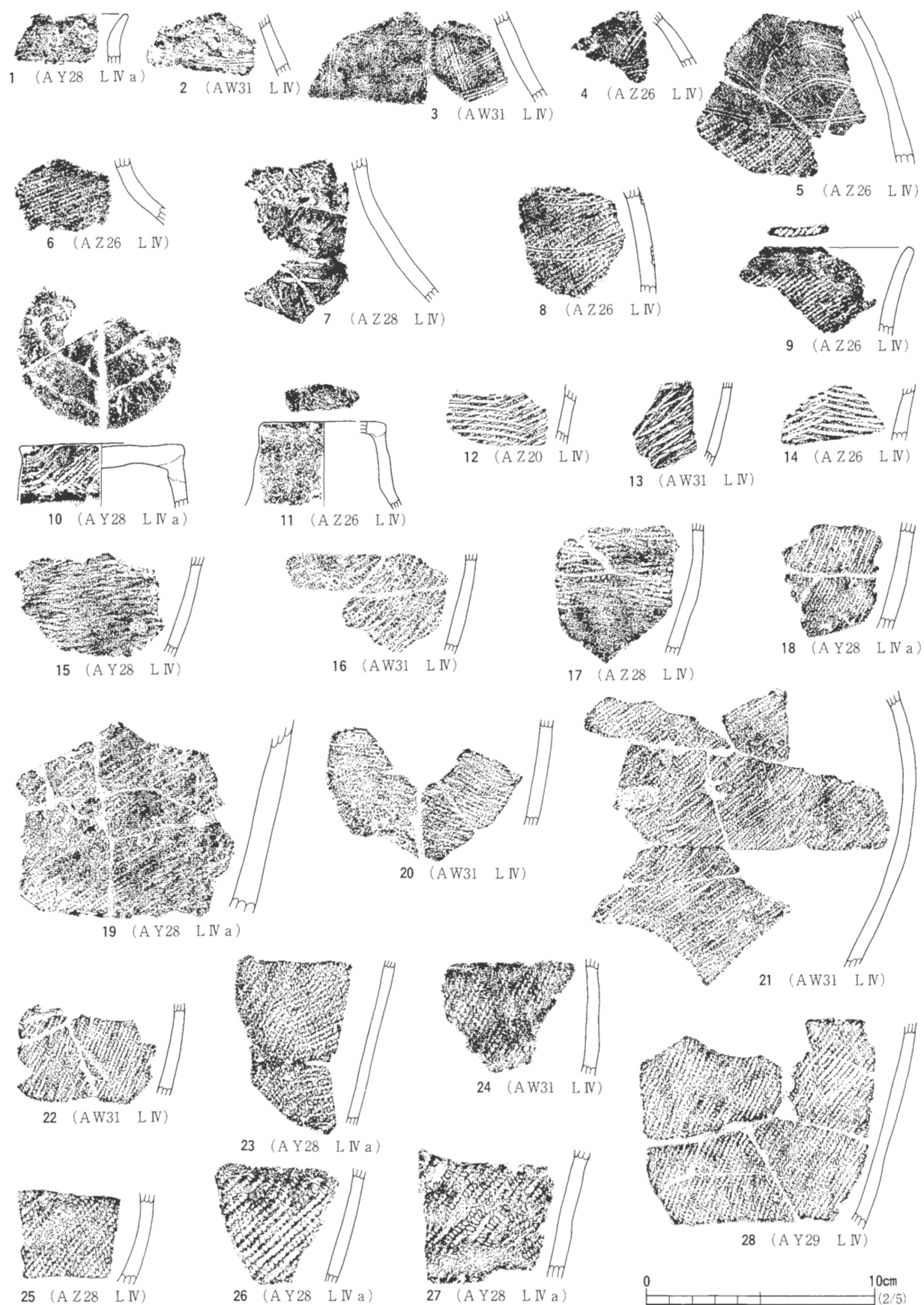


図139 3号遺物包含層出土弥生土器

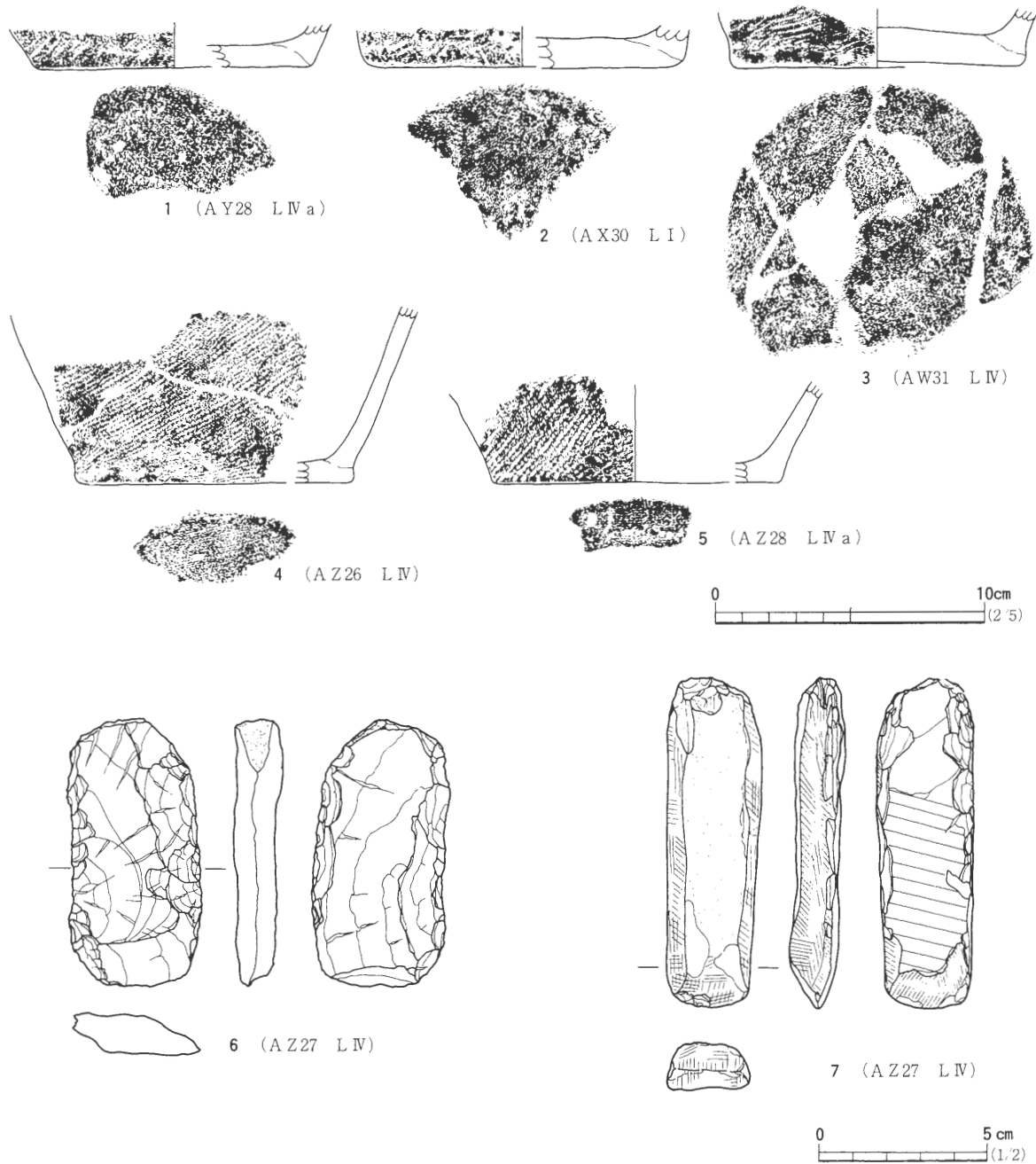


図140 3号遺物包含層出土弥生土器・石器

石器である。

ま と め

本包含層は、規模・遺物出土量ともに本遺跡で検出された他の包含層と比較して小規模なものである。弥生土器はそのほとんどが中期後葉の天神原式土器で、伴出した石器も同時期のものと考えられる。

出土した土器が弥生時代の天神原式期のものに限られることから、他の遺物包含層と同時期の弥生時代中期後葉に形成されたものと考ええる。

(吉 田)

4号遺物包含層 SH04

遺 構 (図141・142, 写真114・115)

本包含層は、調査区北側丘陵南東斜面に立地し、標高34~43mの南東方向に開いた沢部に形成されている。AY34~36, AZ32~35, BA32~35, BB32~35グリッドに位置し、その広がりには最大で、東西17m, 南北23mの範囲である。地山までの層厚は、沢部上位では20~40cmと薄く、沢部中部では厚く70~90cmほどの堆積がみられる。包含層内堆積土は、8層に分層され自然堆積の状態を示している。調査の結果、LⅣ上層, LⅣ下層, LⅤ', LⅣaに弥生土器を包含し、他は無遺物層である。以下、各層の特徴について述べていく。

LⅡは、にぶい黄褐色土で土は柔らかく、沢部上位から中位のAY35, AZ34・35グリッドに認められる。沢部上位にある窪地でのみ堆積がみられるが、出土遺物はない。LⅣ上層は、明褐色土で、柔らかく、沢部中程の窪地, AZ33・34, BA34・35グリッドに広がり、最も多く遺物が出土した層である。LⅣ上層の堆積状況は、斜面西側では薄く、東側にいくにしたがって厚く堆積しているが、東西土層観察用ベルトより南側には堆積がみられない。

LⅤ'は、LⅣ上層とLⅣ下層との間で部分的に堆積しており、土層観察の結果、LⅤ(明黄褐色粘質土)の再堆積土と考えられ、AZ34グリッドに広がりが見られる。土は硬く、粘性も強く、出土遺物も少ない。LⅣ下層は土色、土質はLⅣ上層と同じで、沢部中位の窪地, AZ33・34, BA33~35, BB36グリッドに広がり、LⅣ上層と同じく最も多く遺物が出土した層である。堆積の状況は、斜面西側では薄く、東側ではLⅣ上層よりも厚く堆積している。東西土層観察用ベルトより約2mほど南側まで堆積しているのが確認された。

LⅣaは、小礫を含む暗褐色土で、上層は礫を微量に含むが柔らかく、下層は礫を多量に含み、ツルハシでようやく掘れるくらいの硬さである。その広がり、AZ32・33, BA32~35, BB33~35グリッドで認められ、遺物の出土は、上層からのみで下層からの遺物の出土はない。LⅣbは、小礫を多量に含む黄褐色土で、土はとても硬い。LⅤは、粘性の強い明黄褐色粘質土である。

出土遺物をグリッド別にみると、弥生土器は斜面沢部のAZ34, BA33・34グリッドからの出土が多く、AZ34グリッドからは755点、BA34グリッドからは1,084点の弥生土器片が出土し

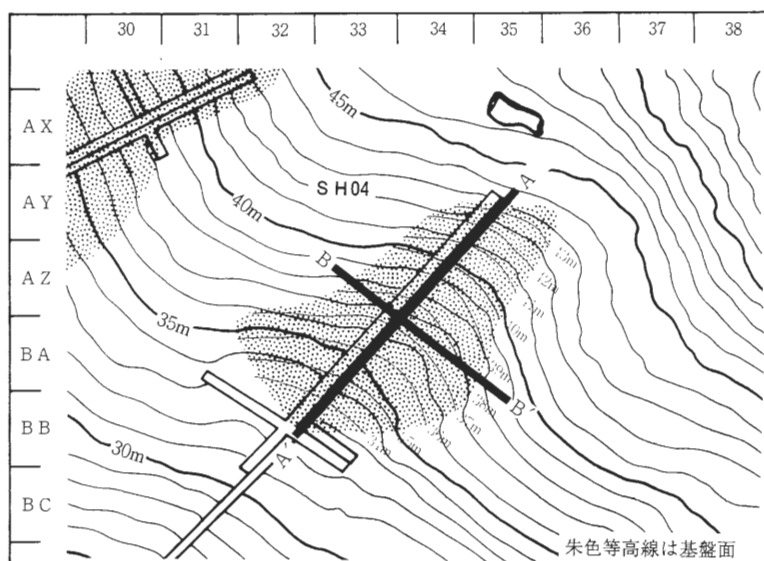


図141 4号遺物包含層

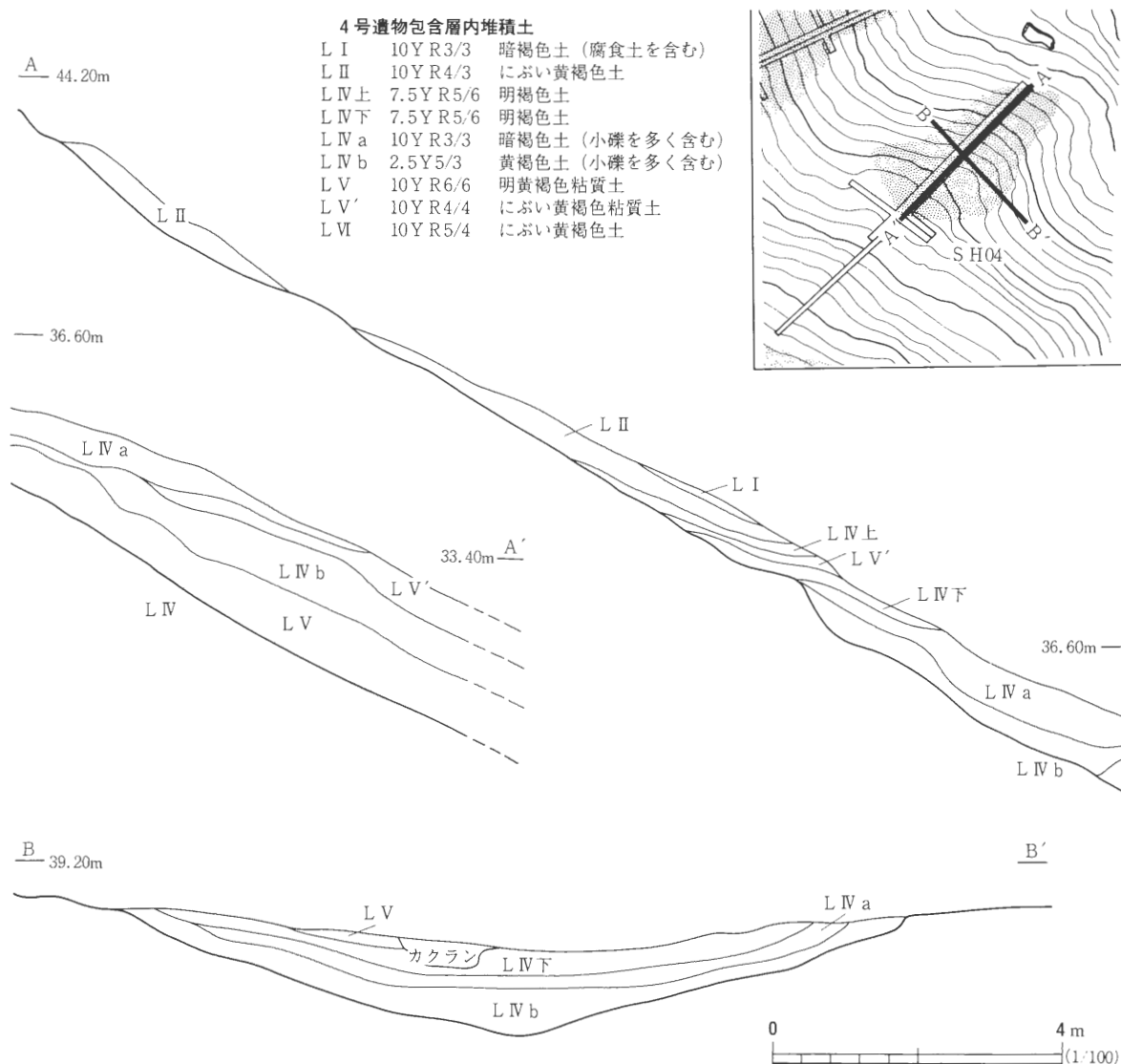


図142 4号遺物包含層断面

ている。石器も土器の分布と比例しており、AZ34グリッドから29点、BA34グリッドから31点出土している。また、AZ33グリッドのL IV上層から1点、AZ34グリッドのL IV上層から1点、L IV下層から3点の土師器片が出土している。これは、4号住居跡から流れ込んだものと考えられる。

本包含層は、尾根頂部に弥生時代の3号住居跡が検出されていることを考慮すると、不要になった生活用具を南東斜面に廃棄し、それがL IV下層に含まれていたと思われる。その上層にはL V'が堆積していることから、3号住居跡の廃絶後にL V'が自然堆積によって形成されたものと考えられる。時間を経て、一時的に遺物包含層を形成していたL IV下層が、3号住居跡付近にあった土とともに流出し、再堆積してL IV上層を形成した。後世になり、L I・IIが斜面上に自然堆積し、埋没したと考えられる。このようにして、沢部上位から中位にかけて本包含層が3号住居跡と関連して廃棄され、再堆積を繰り返しながら形成されたものと考えられる。(佐藤)

遺物 (図144～152, 写真205～217)

本包含層から出土した遺物は、弥生土器片2,227点、石器類72点、土師器片5点である。本遺跡

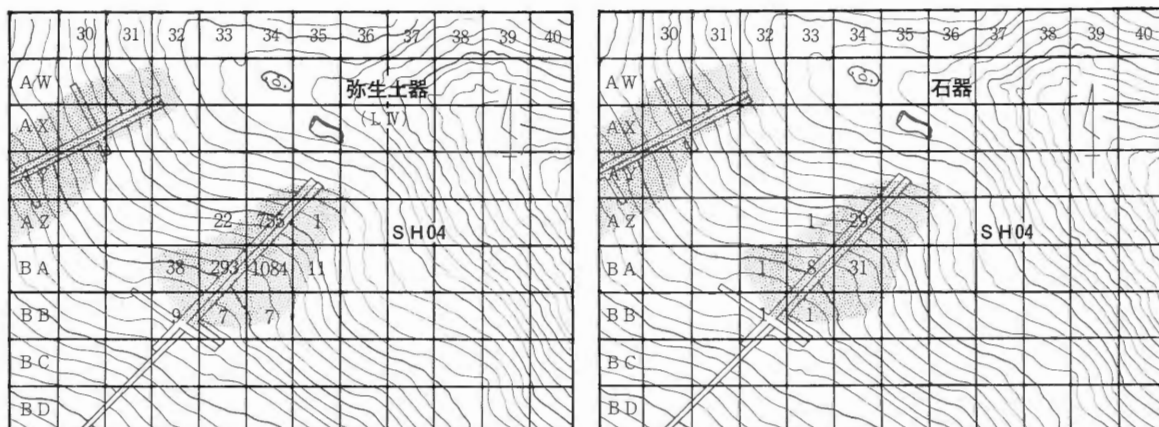


図143 4号遺物包含層出土遺物分布図

から出土した遺物総数の約10%にあたり、抽出して図示した遺物は弥生土片器151点、石器類8点である。弥生土器はその大半が中期末葉のものであり、石器も該期に属するものと考えている。図示した8点の石器類を器種別にみると、抉り入り両刃石器1点、扁平片刃石斧3点、環状石器1点、不定形石器2点、剥片1点である。以下、弥生土器・石器の順で説明を行う。

弥生土器 (図144～150, 写真205～214)

本包含層より出土した弥生土器は第Ⅱ～Ⅳ群土器である。全体の器形を把握できる資料はなく、器種組成では3・6類が欠落する。以下、分類困難なものについては第Ⅱ群土器で一括報告する。

第Ⅱ群土器 144～149が該当し、最も出土量が多い。この中には分類が困難なものもある。

1類土器 144-1～20は壺形土器の破片資料である。8～11は口縁部、他は頸部付近にかけての資料で、主幹文様構成からb・c・e種が認められる。1～18は束線具状の工具を用いて文様を描画しているもので、1は重層山形文(b種)、2～8は格子状(c種)の文様、9～18は縦位や横位(e種)へ多条沈線を施文している。2～4・8はほぼ等間隔の縦線文を施し、その線間に横位の短沈線を加えて格子状の文様を描いているものである。比較的直線的な文様であるが、8の縦線間に描画された横線は連弧状に施文されている。12・15・18は横位への多条沈線によって文様帯を区画しているものである。全体的に沈線の深さは浅く一定しているが、3・8・18は他と比してやや深い。地文に施されている原体は、10が直前段多条、16・19が0段多条、18が附加条で、12の地文は明確に判然し得ないが附加条あるいは直前段多条が回転施文されている。

2類土器 144-21～24, 145, 146-1～8は甕形土器の口縁部から頸部片である。器形的には比較的中型のものが多い傾向にあり、145-22や146-1～4は小型の甕と思われる。口縁部形態では145-22, 146-2～6のように短頸で短く屈曲するもの(A2), 145-13～16のように長頸で「く」字状に屈曲するもの(B2), 145-7・8・24～26のように長頸で緩やかに外反するもの(B3)がある。短頸で短く屈曲するもの(A2)は頸部付近を無文とするものが多く、長頸で緩やかに外反する器形のもの(B3)は文様を描画している場合が多い。145-13・14は小波状口縁となるもので、本遺跡では明確な小波状口縁を有する器形の例は希薄である。地文に施されている原体は、

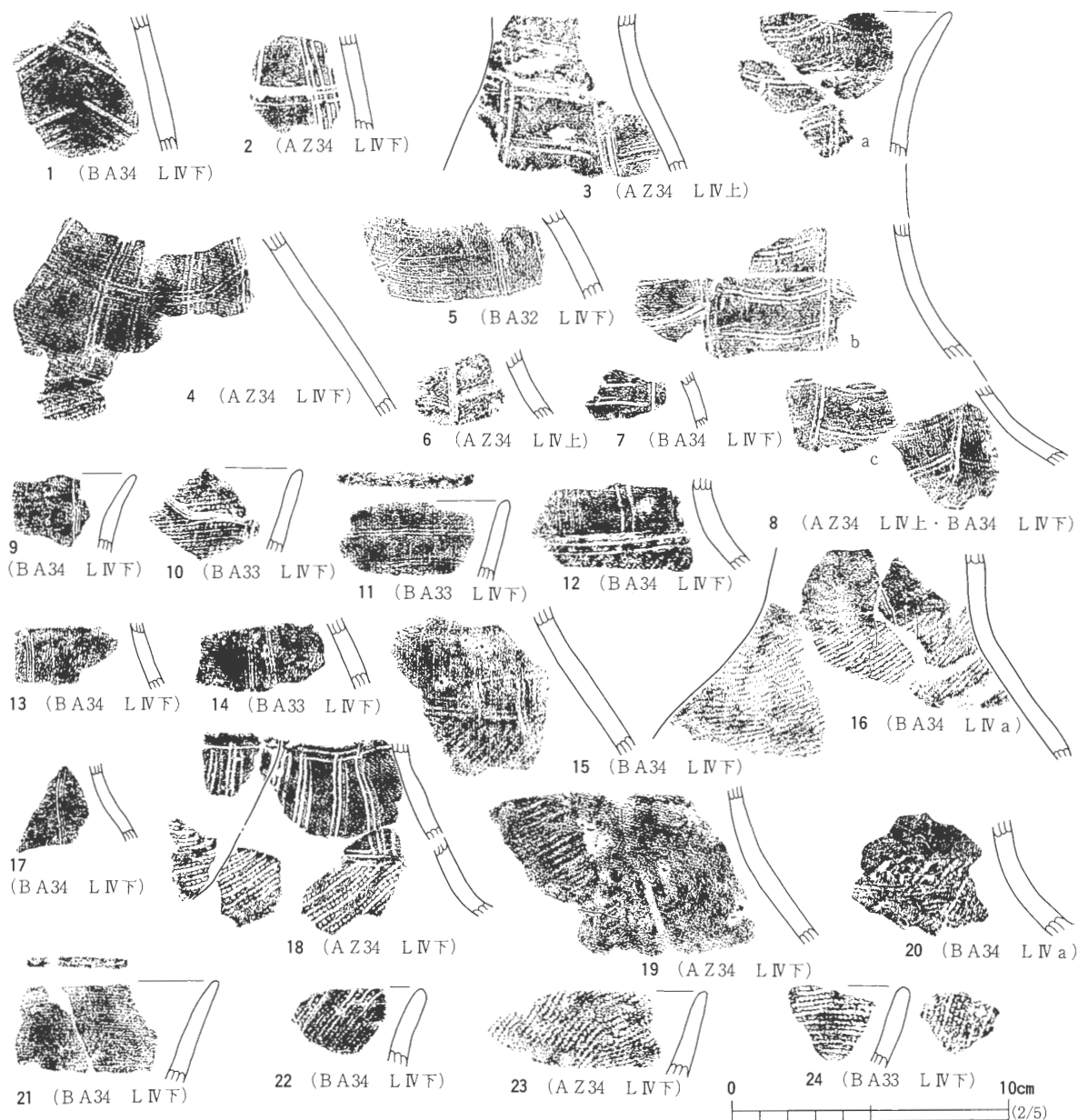


図144 4号遺物包含層出土弥生土器 (1)

145-2・3・13・14・16・が0段多条, 144-22・24, 145-7~10・12・15・17・18・24~26, 146-2~4・7が附加条文, 144-23, 145-4・11, 146-6が直前段多条, 145-1・5・6, 146-1・5・7・8は明確に判然し得ないが附加条かあるいは直前段多条を施文しているものと思われる。145-13・14・16・18・146-6には原体末端部の結節が認められる。144-21, 145-1・4・6・8~14の口唇部には胴部と同一原体が回転押捺され, 15の口唇部には刻みが加えられている。146-6~8の器面には煤状の付着物が認められる。器厚は平均して6mmである。145-5は復元口径17.8cmを測る。

4類土器 146-9~14は高杯の底部から脚部にかけての資料である。全て破片資料のため全体の形状を把握できるものはない。器形的に9は小型, 10~12は中型, 13・14は底部が厚手となりや

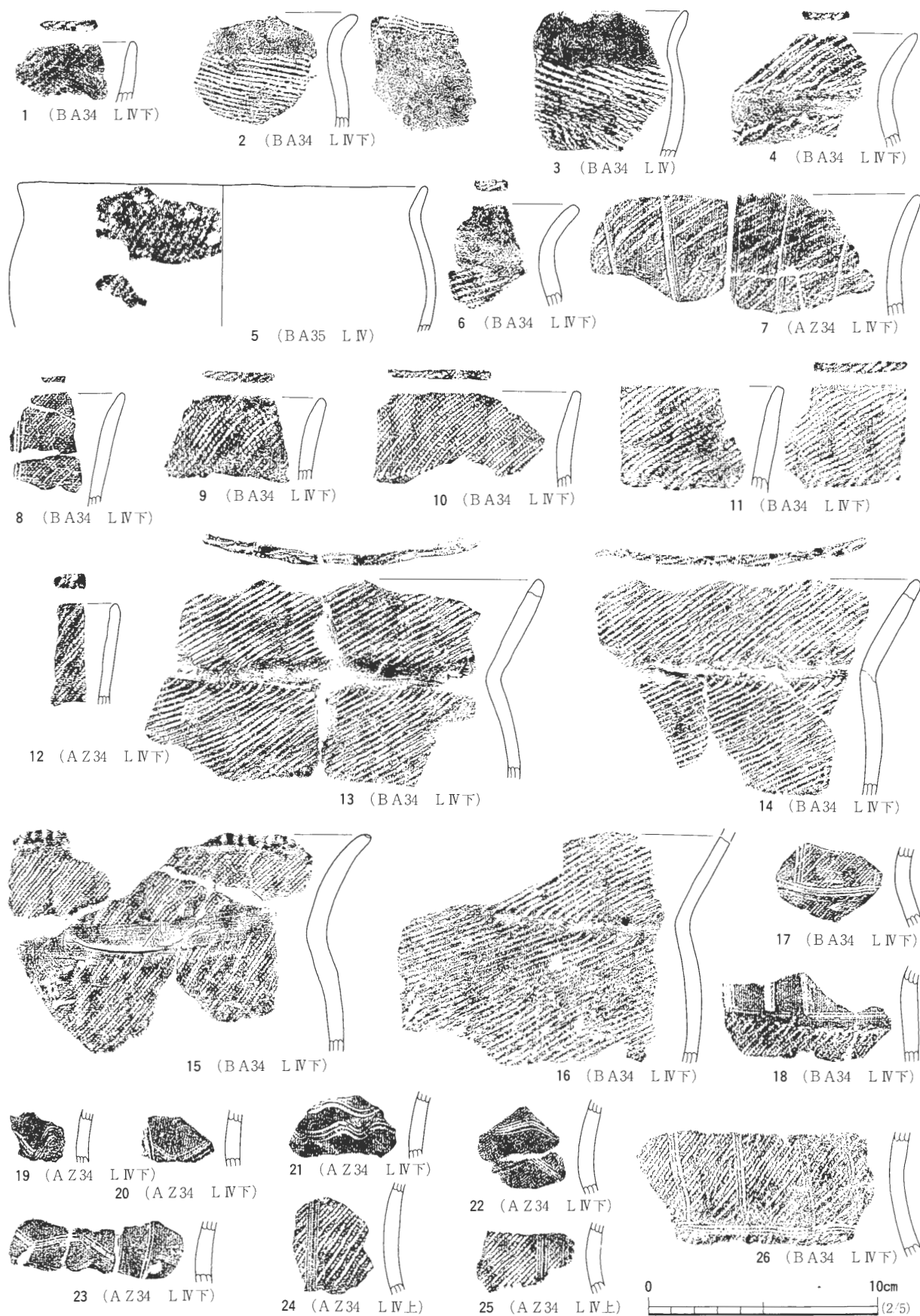


図145 4号遺物包含層出土弥生土器(2)

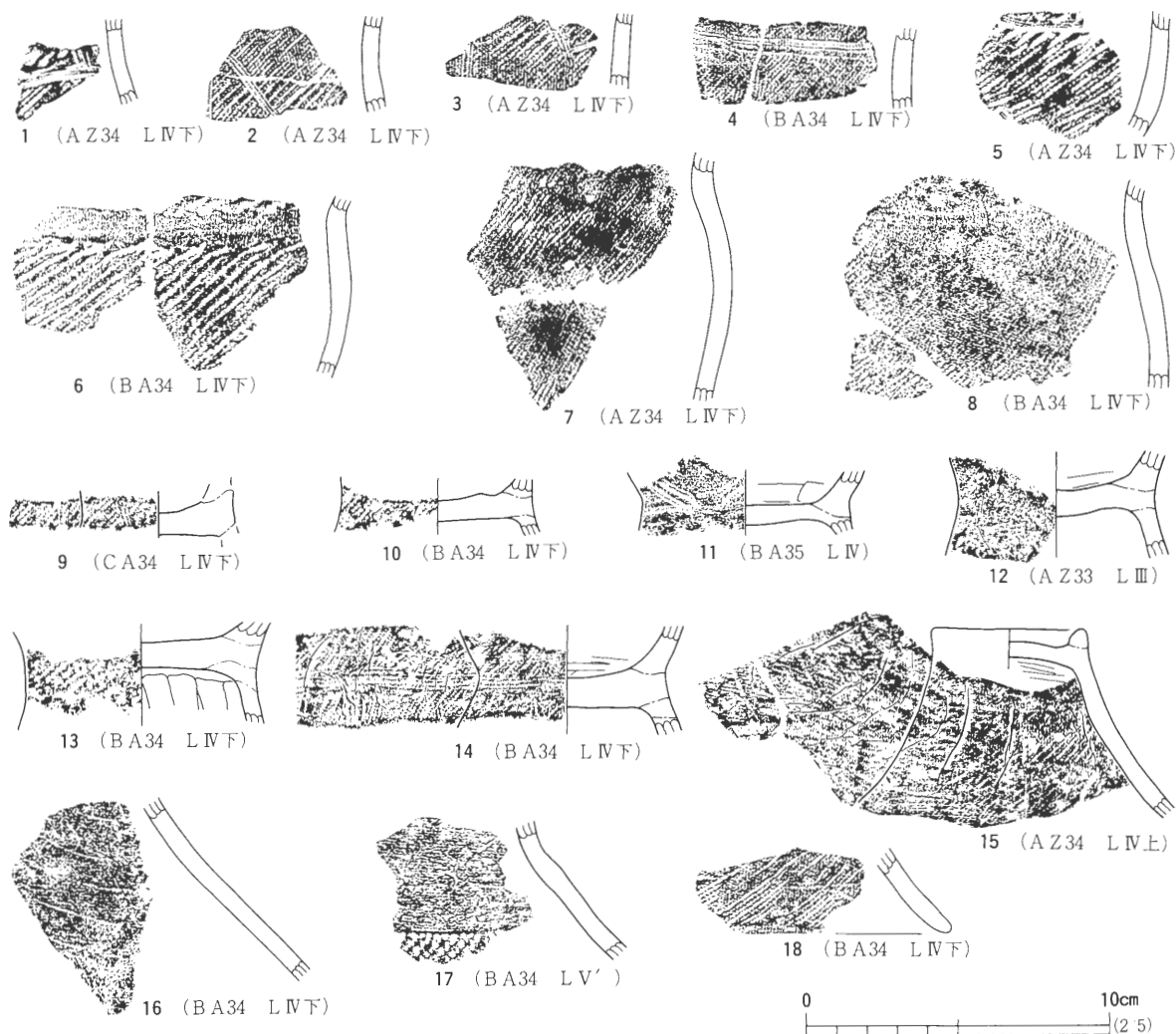


図146 4号遺物包含層出土弥生土器 (3)

や大型に属するものと考えられる。9・11・14は底部と脚部の堺に束線具によって横走る多条沈線を加えているもので、11には三角形の文様を描画している。内面調整は全体的に丁寧なミガキやナデ調整が施されているが、脚部側となる内面は雑な調整である。12は二次加熱を受け赤変。

5類土器 蓋形土器で146-15~18が該当する。15のみ遺存状態が良く、他は破片である。器面調整は他と比して整麗で、内面に丁寧なナデ調整が施されている。15は束線具を用いて浅く格子状の文様を描画しているもので、内面に丁寧なミガキ・ナデ調整が施されている。地文は撚糸文を施文している。天井径は推定5.2cmを測る。16は二次加熱を受け若干摩滅しているため詳細は不明であるが、束線具によって同心円状の渦文が描画されている。18は内面に丁寧なミガキ調整が施されており、口縁部に沿って先端部が摩滅している。

7類土器 147, 148-1~16は胴部片で、器種分類できない。1~8は施文原体や胎土が酷似し、同一個体とみられる。幅3mm程の1本工具によって円文か渦文を描画している。沈線の深さは浅く一定しており、断面凹状を呈している。地文には附加条縄文が施文されている。147-9~18は束線具によって多条沈線が描画され、147-19~30, 148-1~16は地文のみ観察される。地文に

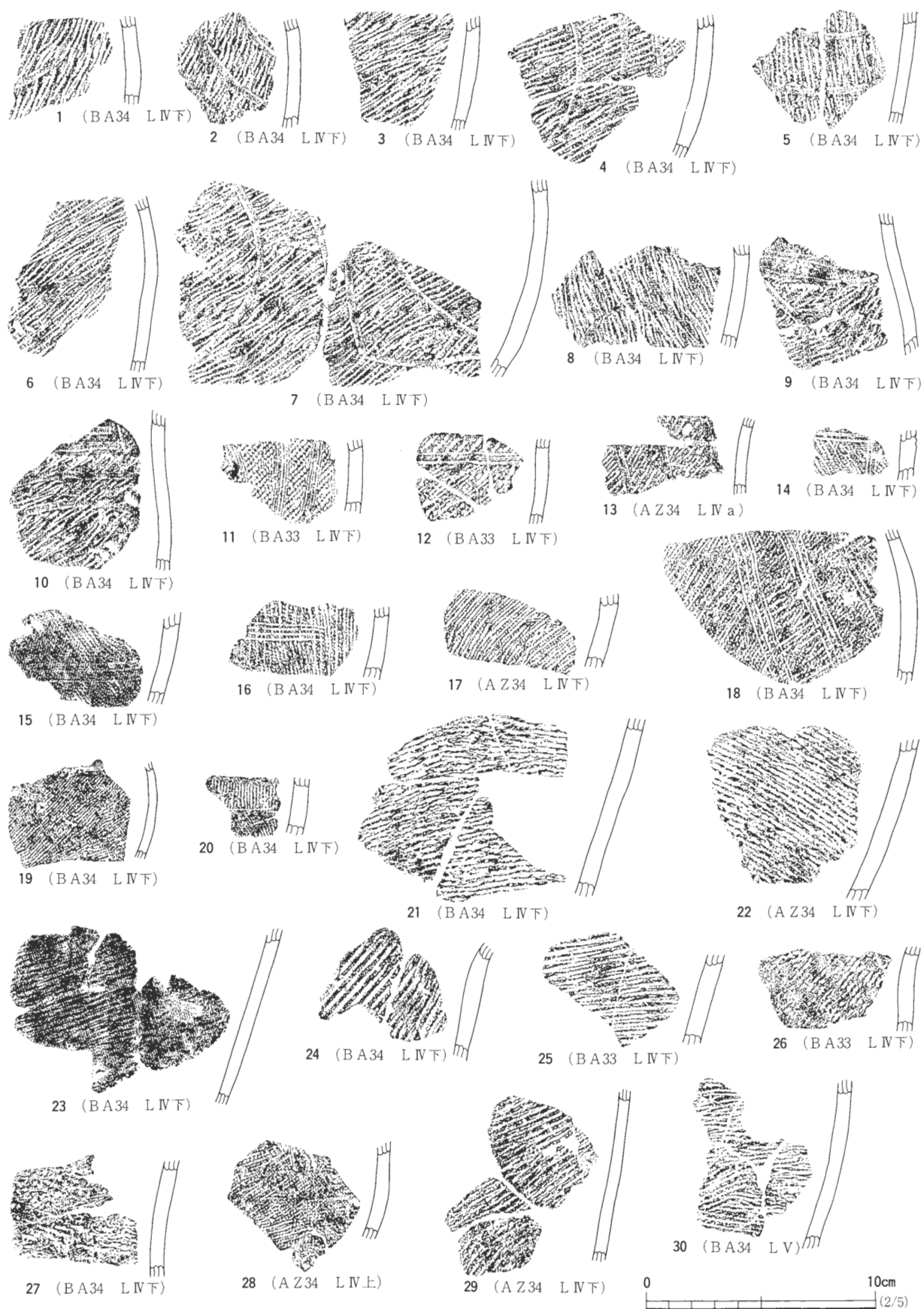


図147 4号遺物包含層出土弥生土器 (4)

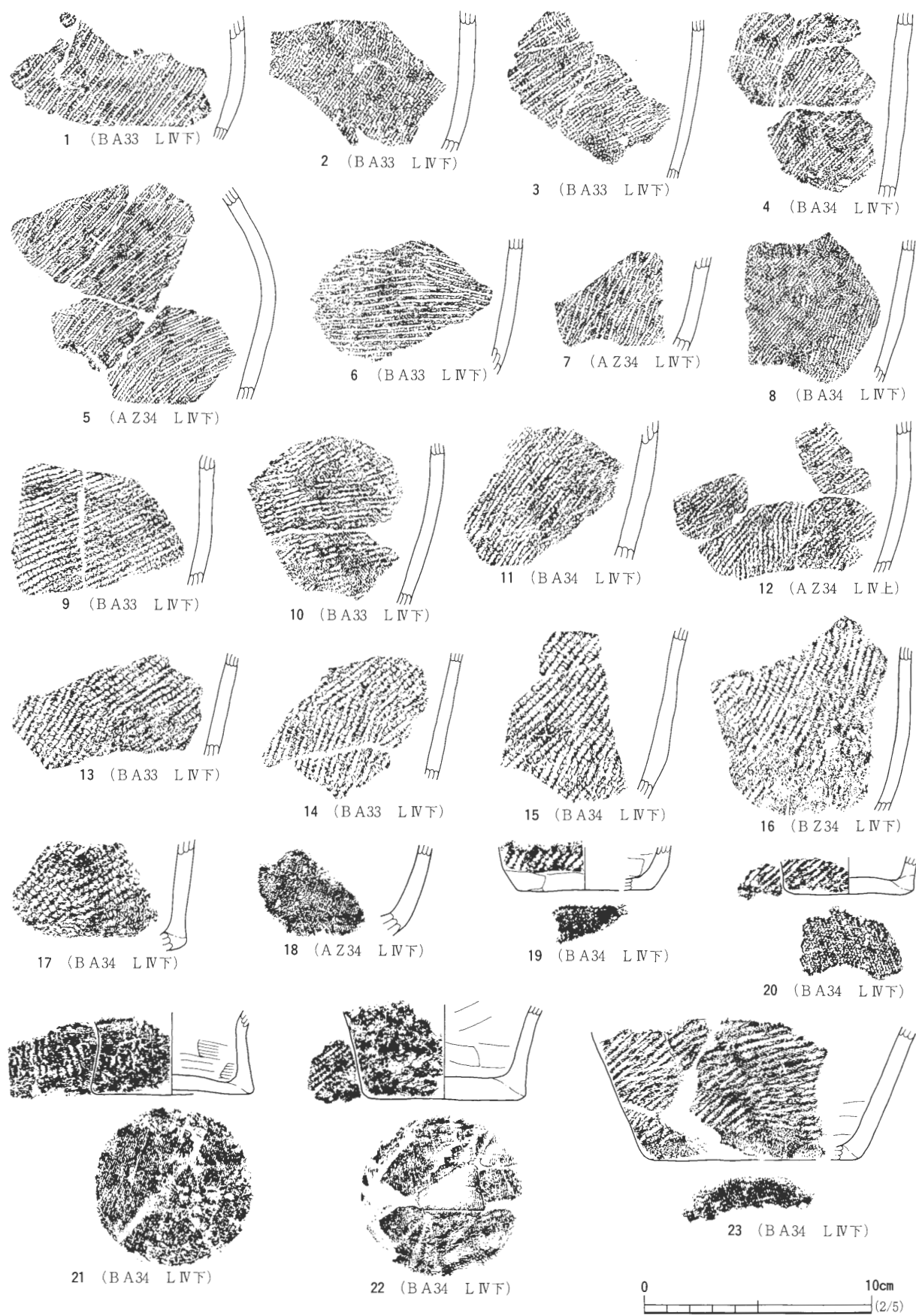


图148 4号遺物包含層出土弥生土器 (5)

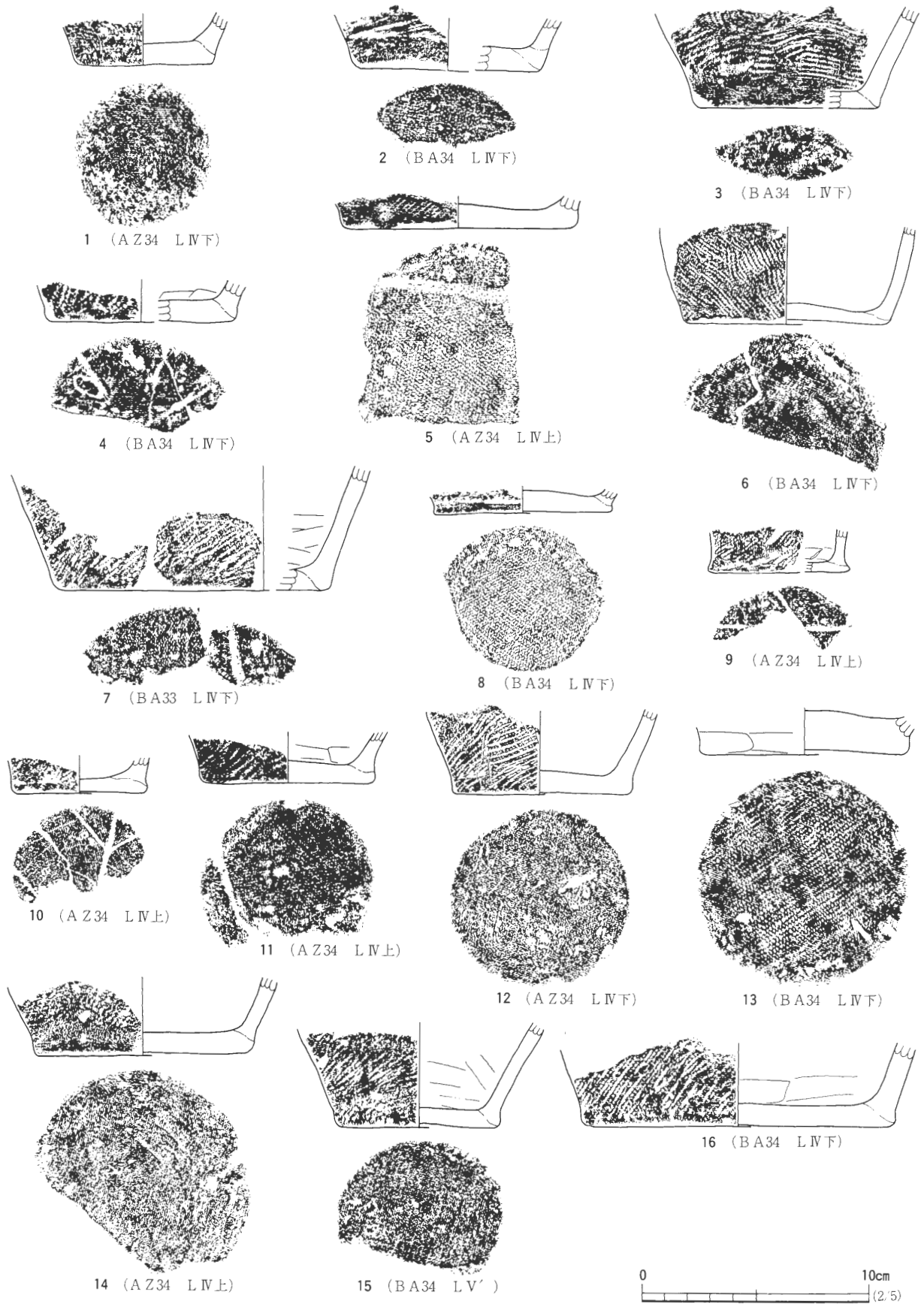


図149 4号遺物包含層出土弥生土器 (6)

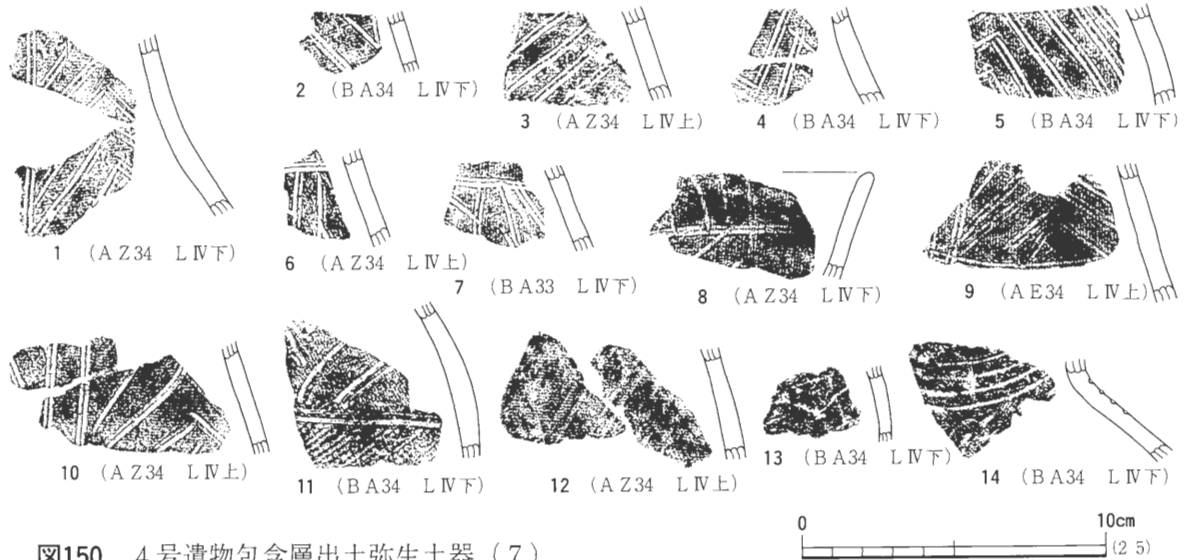


図150 4号遺物包含層出土弥生土器（7）

は147-9・10・12-18・22・28-30, 148-1~7・10-12が附加条, 147-21・23が撚糸文, 147-24・25が0段多条, 147-11, 148-9・13-16が斜縄文で, 147-26・27は判然としないが直前段多条かもしくは附加条を回転施文している。147-12・13, 148-5の器面には煤状の付着物が認められる。147-20は判然としないが, ハケメ調整と先細の工具による沈線文が描画され, 器面に赤彩と煤状の付着物が認められる。本群に含まれない可能性がある。器厚は平均して6 mm程で, 147-13・19, 148-3はやや薄手である。

8類土器 148-17-23・149は底部片である。23点を図示した。149-5・7・16が底径10~13.8 cmで大型, 148-19・20, 149-1・9・10が底径5.6~6.2 cmで小型であり, 底径7~9 cm代の中型のことが多い。底部側縁は, 側面が突出するもの(149-9~16)と突出しないもの(148-19-23)があり, 直線的に外傾するものが多い。比較的小型の148-18・19・21・22, 149-9・10は他と異なる器形を呈し, 内面調整も丁寧なミガキやナデ調整が施されているもので, 鉢形土器(3類)の可能性もある。148-22, 149-1~4・6・12・14の胴部下半から底部には二次加熱を受けて赤変し, 149-11の器面には煤状の付着物がみられる。地文は判然としないが148-20-23, 149-3・5-12・14-16が附加条かあるいは直前段多条, 148-17・19が斜縄文を回転施文しているものと思われる。底面は平織り状の布圧痕が観察されるもの(148-20, 149-2・5・7・8・11-13・15), 木葉痕が観察されるもの(148-21・22, 149-4・9・10), ナデ状の調整が施されているもの(148-23, 149-6・14・16)がある。

第Ⅲ群土器 150-1~12が該当する。全体の器形を把握できる資料はなく, 全て破片資料である。本包含層内から出土した弥生土器総数の約0.7%にあたり, 1類土器のみ判断できた。

1類土器 1~12が該当する。1~7は先細の工具により2本同時施文の重層山形文や三角形文が描画されているもので, 1は縦位, 6・7は横位の区画沈線が施されている。二線間の距離は1 mm程で, 断面形はV字状を呈し, 沈線の深さは一定している。8~12は2本同時施文によって重層

山形文や三角形文を描画しているが、使用工具がやや太めで沈線の深さは不揃いである。

第Ⅳ群土器 150-13・14がある。壺形土器(1類)の頸部付近の破片資料と思われ、第Ⅰ・Ⅲ群土器同様に非常に出土量が少ない。13・14は先端が尖った工具により二本同時施文によって13が連弧状、14が頸部を巡るように円文が描画されている。二線間の距離は共に4mm程で、断面形はV字状を呈する。沈線の深さはほぼ一定しており、13はやや浅く、14は深めに施されている。

石 器 (図151・152, 写真215~217)

出土した石器・剥片類は71点である。そのうち、剥片・石核は64点に上り、遺存状態が良く図示したものは8点である。内訳は挟り入り両刃石器1点、扁平片刃石斧3点、環状石器1点、不定形石器2点、剥片1点である。相対的に他の包含層と比して土器の出土量に対する石器出土量(約3%)が少ない傾向がある。

挟り入り両刃石器 151-1が該当する。器形的には太型蛤刃石斧に類似するが、両側縁部に明瞭な挟り部と背腹両面に凹みを有するものである。両側縁には背腹面の研磨後に叩き整形による挟り部分が作出されており、磨製石斧(太型蛤刃石斧等)からの転用品の可能性もある。両側縁の挟り及び背腹両面の凹み部分には磨耗痕が認められ、その範囲を網点によって表記した。遺存する法量は最大長11.4cm、最大幅6.4cm、最大厚4.2cmを測る。石質は安山岩である。

扁平片刃石斧 151-2~4がある。素材剥片の両側縁に1次剥離調整を施しているもので、全

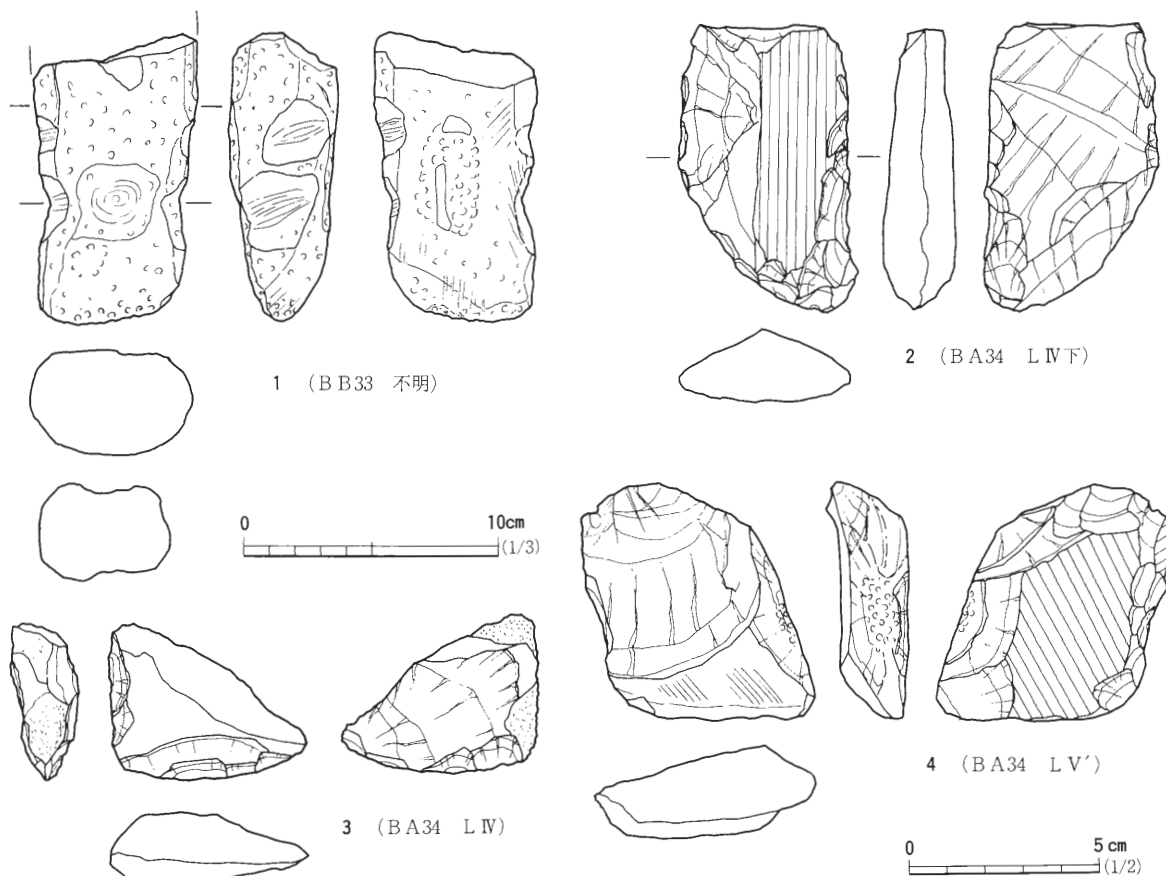


図151 4号遺物包含層出土石器(1)

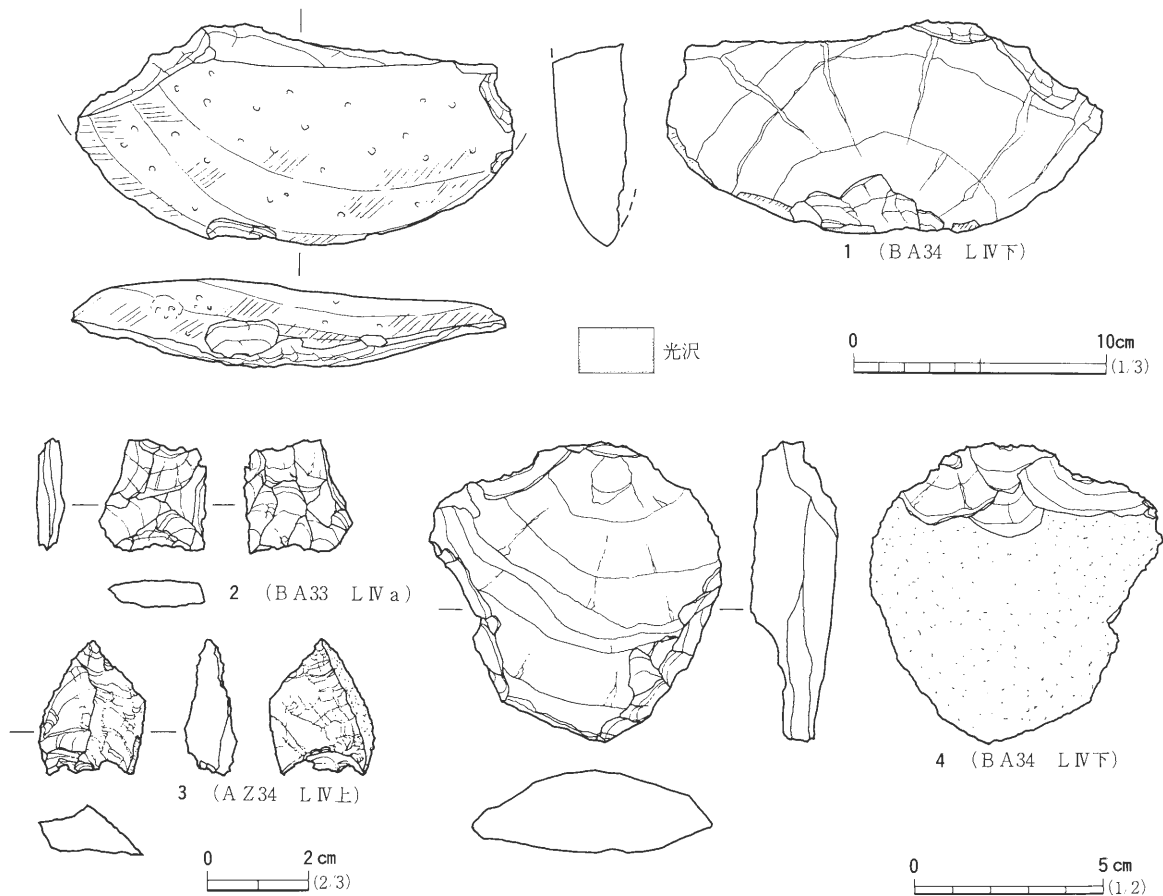


図152 4号遺物包含層出土石器(2)

て未成品と思われる。2は刃部側が欠損しており、両側縁から基部にかけて1次整形を加えているもので、基部には狭い平坦面が見られる。敲打や研磨等の二次調整は施されていない。3は一部自然面を残すもので、刃部と側縁に1次調整を施している。4は素材剥離面と節理面によってできた鋭角な部分を刃部としているもので、両側縁に1次剥離調整を加えている。石質は2・4が泥岩、3が蛇紋岩である。

環状石器 152-1は環状の素材剥片の縁辺部を研磨によって刃部としているもので、環状石器の欠損品の可能性がある。刃部は両面からの研磨が加えられ、刃こぼれが認められる。刃部には1回の敲打による剥離痕が観察され、使用時か再利用した際のものと考えられる。石質は比較的大型の石器に多く使用されている閃緑岩である。

不定形石器 152-2・3は二次加工を施した不定形石器である。共に小型の剥片石器で、楔形石器のように両極同時剥離が行われた可能性がある。石質は2・3とも鉄石英である。

剥片・石核 本包含層からは剥片50点、石核14点が出土している。そのうち、剥片1点について図示した。剥片・石核の石質はともに流紋岩が多く約75%を占めている。これらの中には火熱による剥離痕や赤褐色の火熱痕が観察されるものが約10%ある。152-4は自然面を残す不定形の剥片で、比較的大型のものである。刃こぼれ状の使用痕は認められない。石質は流紋岩である。

ま と め

本包含層は丘陵西側の急斜面窪地に若干の時間差はあるが、ほぼ一定期間内に形成された物である。包含層の規模や遺物の出土量は比較的小規模のものであるが、本来は6号遺物包含層と同時期に形成された一連のものと考えられる。遺物は総出土点数の約10%にあたり、他の包含層同様に弥生時代中期末葉頃に形成されたものと考えられる。(井)

5号遺物包含層 SH05

遺 構 (図153・154, 写真116・117)

5号遺物包含層は、調査区中央を南北に延びる丘陵部の南西向き斜面に位置する。標高31~40mほどの地形的に入り組んだ急斜面に形成されていた。調査区BN~BR・36~39グリッドに認められ、その規模は東西10m, 南北22m程の範囲である。同丘陵部には近接して1号土器埋設遺構や5~7号住居跡等が存在する。基盤層までの層厚は、斜面上位では薄く30cm前後を測り、斜面下位では厚く約50cmの堆積がみられる。遺物は斜面下位に堆積したLⅣに特に多く包含されており、斜面への廃棄、あるいは流れ込みによって形成されたものと考えられる。

出土遺物を層位別・グリッド別に見ると、斜面地形に対応した密度の分布が窺え、弥生土器はBQ~BR37・38グリッドから多く出土している。特に、BQ37・38グリッドからは300点以上の土器片が出土している。遺物包含層から出土した遺物は、LⅡが99点、LⅢが471点、LⅣが712点である。石器類は土器の出土分布と比例しており、斜面上位に位置するB039グリッドと斜面下位に位置するBQ36・37グリッドからの出土量が相対的に多い。

遺 物 (図156~160, 写真218~224)

遺物は弥生土器片1,274点、石器類90点、土師器片152点、須恵器片53点、鉄製品1点が出土している。本遺跡から出土した遺物総数(35,126点)の約5%にあたる。このうち、抽出して図示した遺物は、弥生土器38点、石器類6点、須恵器3点である。弥生土器は、その大半が中期末葉のものであり、石器も該期に属するものと考えられる。図示した6点の石器類は、器種別にみると抉り入り両刃石器1点、両刃石器1点、扁平片刃石斧1点、ノミ形石器1点、敲打器2点である。

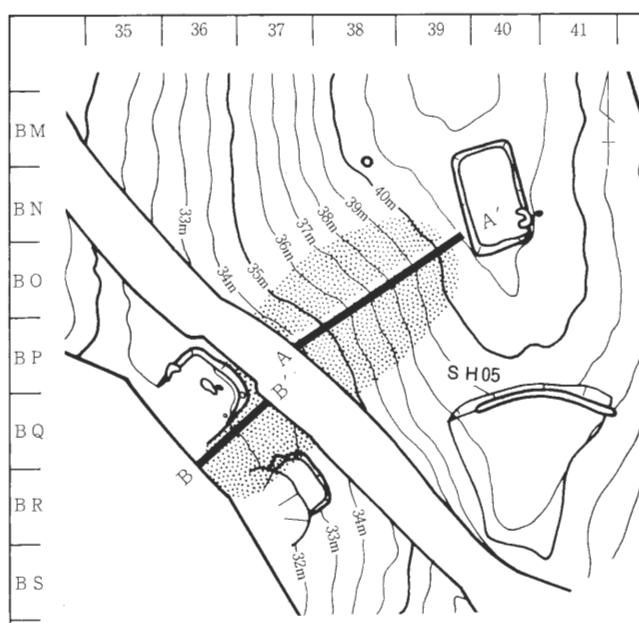


図153 5号遺物包含層

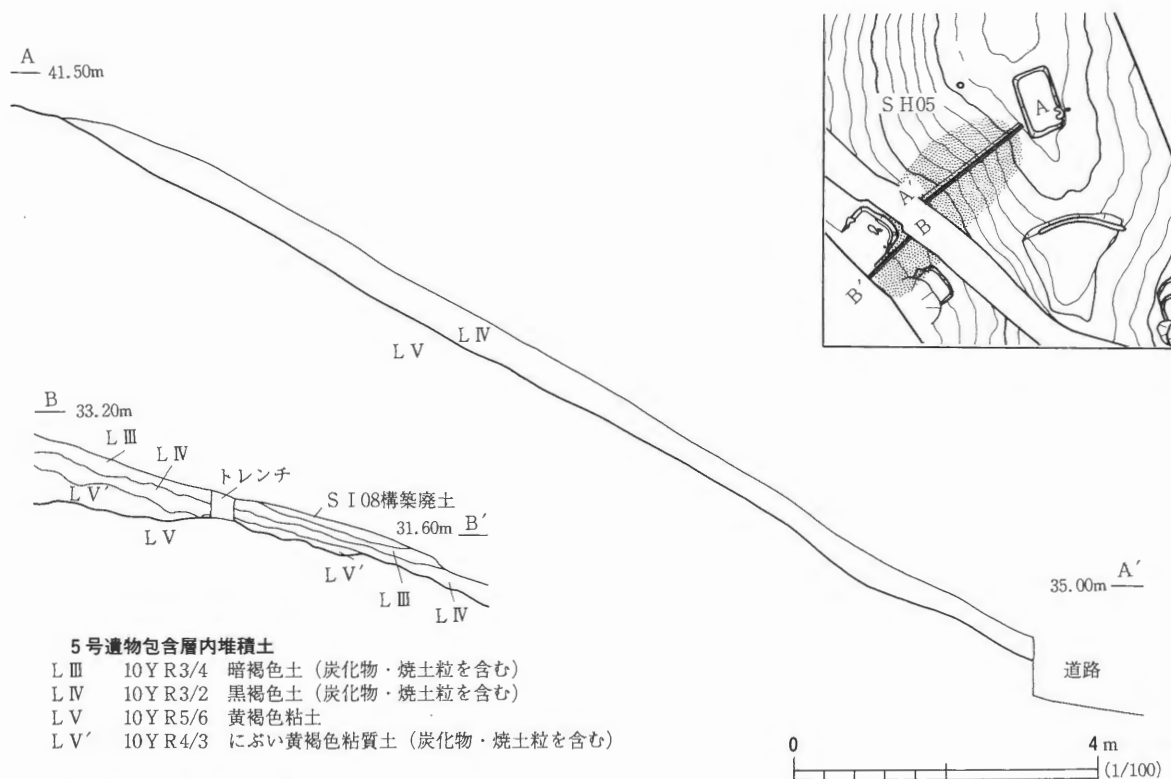


図154 5号遺物包含層断面

弥生土器 (図156・157, 写真218～221)

本遺構より出土した弥生土器は第Ⅱ・Ⅲ群土器である。全体の器形を把握できる資料はなく、器種組成では1～3類のみ判断できた。以下弥生土器から各群ごとに説明する。

第Ⅱ群土器 この中には群分けや器種選定が困難なものもあるが、本群内でまとめて報告する。

1類土器 壺形土器である。156-1～7は壺形土器の口縁部から頸部にかけての破片資料で、主幹文様構成からa～c・f種が認められる。1～5は束線具を用いて文様を描画しているもので、1・2は円文(a種)、3・4は連続山形文(b種)、5は格子文を施文している。沈線の深さは比較的一定している。6・7の地文には明確に判然し得ないが附加条かあるいは直前段多条が回転施文されており、口唇部にも同一原体で施文している。器厚は平均して6mm程である。

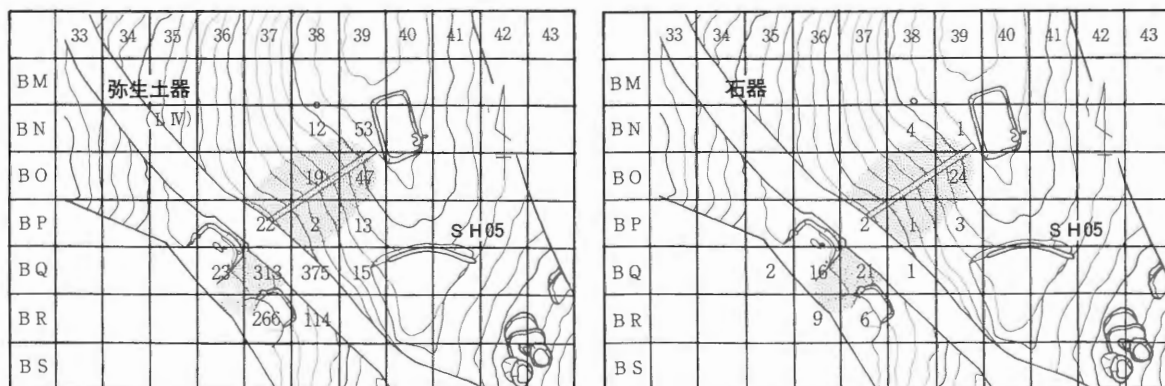


図155 5号遺物包含層出土遺物分布図

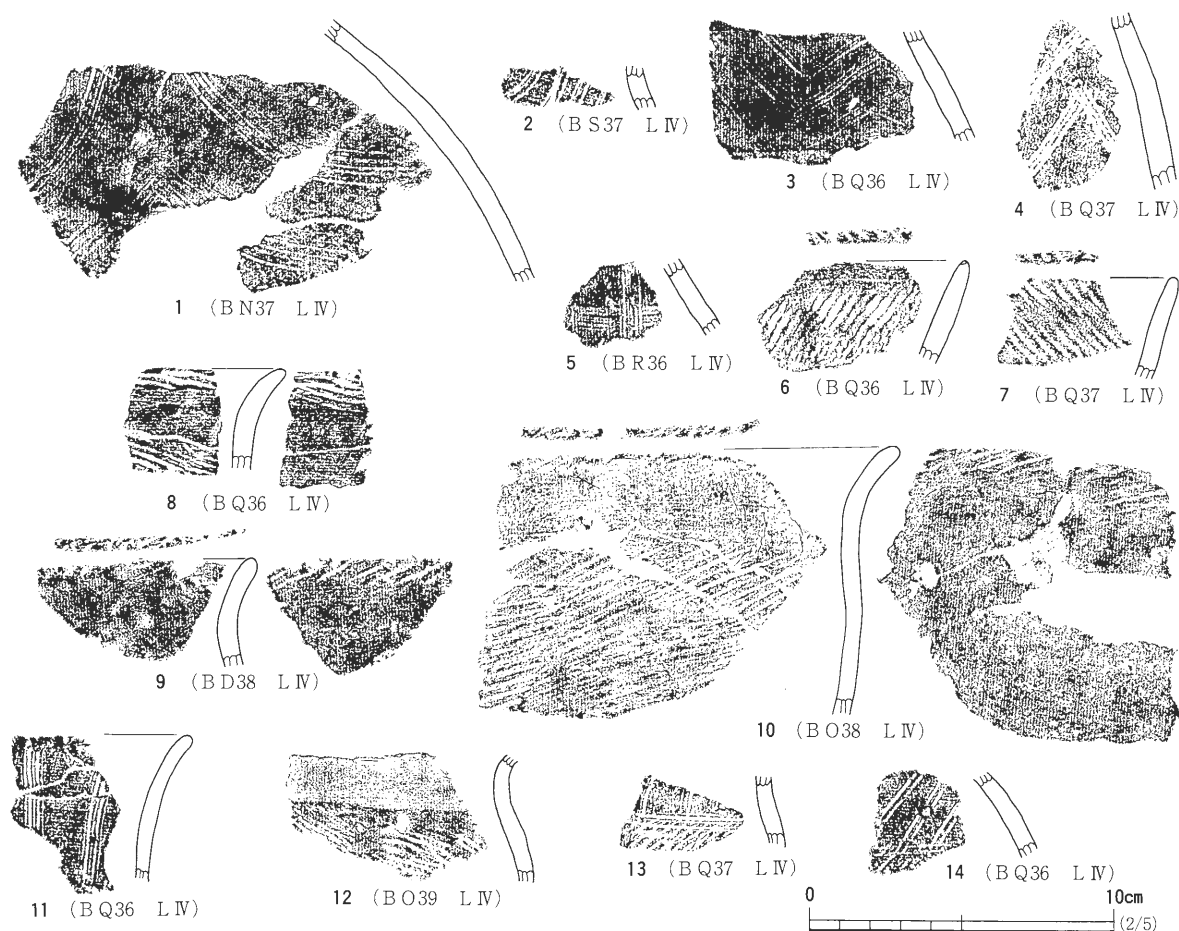


図156 5号遺物包含層出土弥生土器(1)

2類土器 甕形土器の口縁部から頸部付近の破片資料で、156-8~13が該当する。甕形土器は比較的中型のものが多い傾向にあり、13は小型の甕と思われる。口縁部の形態では短頸で短く屈曲するもの(8~10・12)と長頸で緩やかに外反するもの(11・13)がある。前者の器形には地文または頸部付近が無文、後者の器形には文様を描画する場合が多い。地文には8が0段多条、10が附加条文を施文しているものと思われる、8~10の口縁部内面にも同一の原体を回転施文している。10の器面には煤状の付着物が認められる。11・13は束線具を用いた多条沈線が描画されており、13には横位の区画線が施文されている。器厚は8の口唇部付近がやや肥厚しているが、平均して6mm程である。

3類土器 157-1・2は小型の鉢形土器と判断した。胴部下半から底部にかけての破片資料で、器面調整が整麗で器厚が薄手である。2の地文には撚糸文施文後に横位の沈線文が描画されており、底部には木葉痕が観察される。2は復元底径5.4cmを測る。

7類土器 157-3~14は胴部破片資料で、明確には器種選別できないものである。3は束線具によって多条沈線が描画されたもので、それ以外は地文のみが観察される。地文に施されている原体は4~6・9~12・14が附加条、7が撚糸文、8が0段多条、13は判然としないが直前段多条かもしくは附加条を回転施文しているものと思われる。器厚は平均して6mm程である。

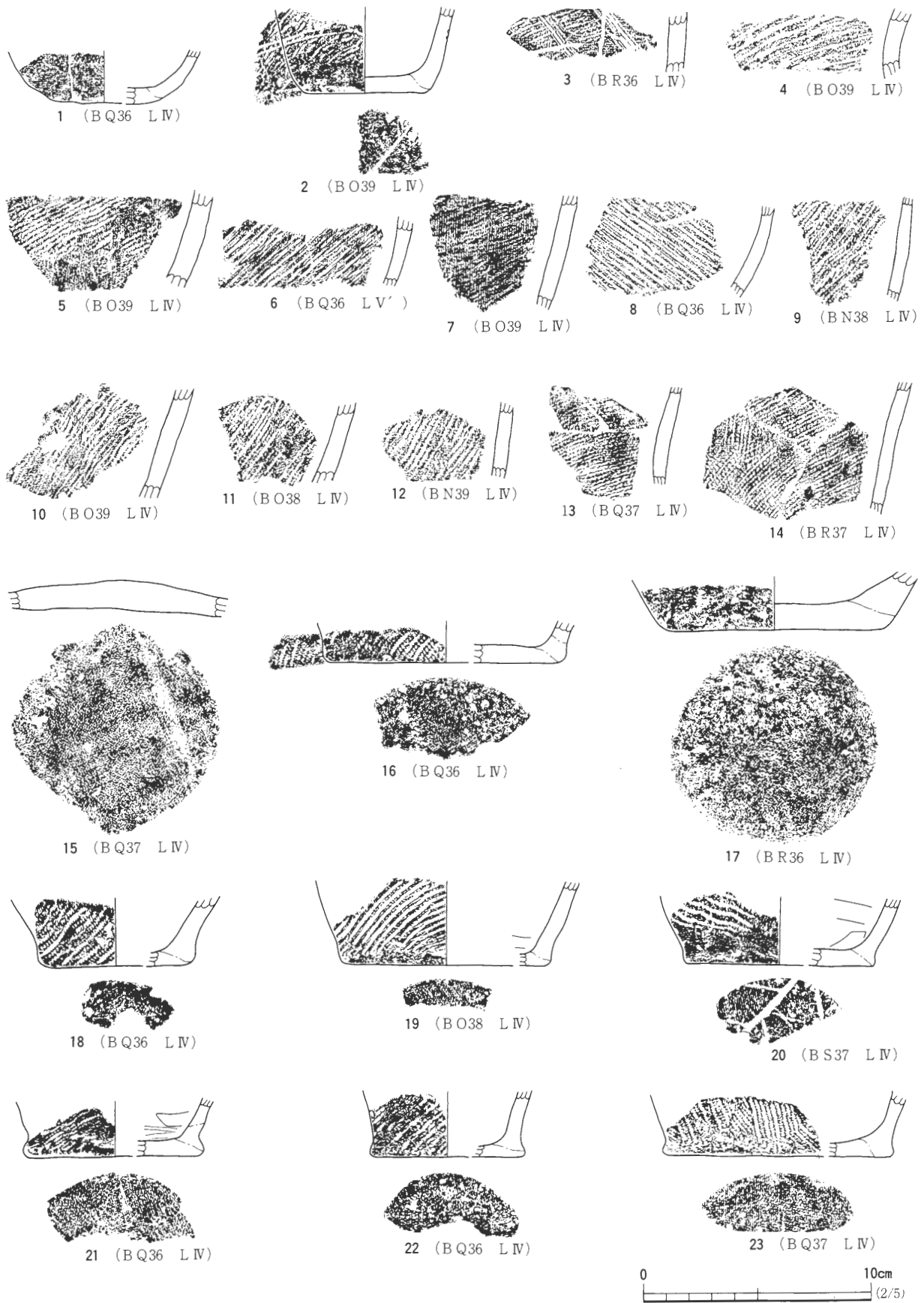


図157 5号遺物包含層出土弥生土器 (2)

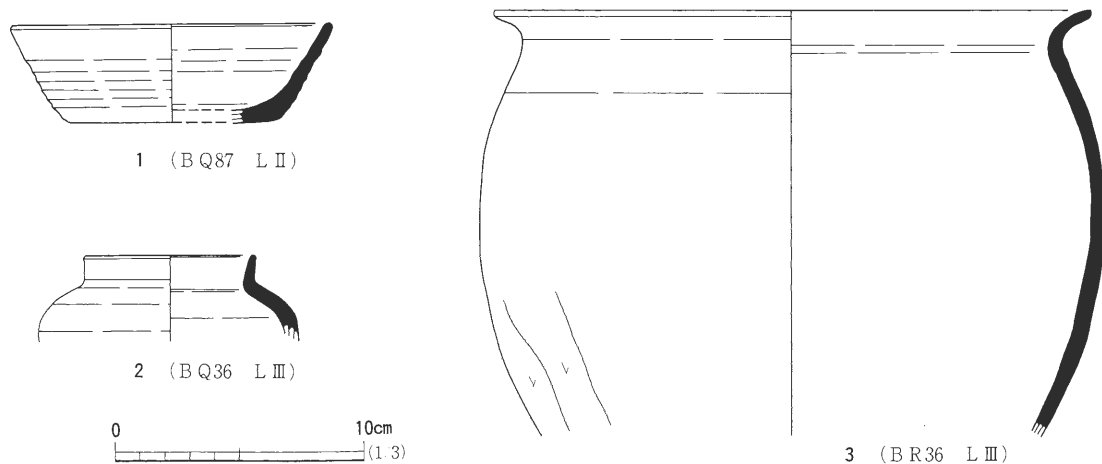


図158 5号遺物包含層出土須恵器

8類土器 157-15~23は底部資料である。比較的遺存状態の良い9点について図示した。器形的に15・17は器厚が厚く底径9 cm以上を測り大型で、16・18~20・24は8.4~10cmを測り中型で、21・22は6.8~7.6cmを測り小型であり、比較的中型のものが多い傾向にある。形態的には底部側面が突出するもの(21~23)、突出しないもの(16~20)がある。胴部下位の地文は16・18が附加条かあるいは直前段多条、19・20が0段多条、23が斜縄文、17・22は摩滅が著しく不明である。19・21・23の胴部下端には原体末端部の結節が認められ、19は原体の多方向からの施文により一部条が絡み合っている。17・20・21の胴部下半から底部には二次加熱を受けて赤変した痕跡が認められる。底面は平織り状の布圧痕が観察されるもの(15・16・19・23)、木葉痕が観察されるもの(20)、ナデ状の調整が施されているもの(17・18・21・22)がある。

第Ⅲ群土器 全体の器形を把握できる資料はなく、1点のみ図示した。156-14は壺形土器(1類)の頸部付近の破片資料と思われる。比較的先端が尖った工具により、二本同時沈線によって三角文もしくは重層山形文が描画されたものである。沈線間の距離は1 mm程で、沈線の深さは比較的一定している。器面には焼成後に穿孔された径2 mm程の貫通孔が認められる。

須恵器 (図158)

本包含層から出土した弥生土器・石器以外の遺物は205点である。その内訳は土師器片152点、須恵器片53点で、図示できたのは須恵器3点である。1は底部欠損の須恵器杯である。底部から口縁部にかけて直線的に外傾する器形で、復元口径12.9cm、復元底径8.8cm、器高3.9cmを測り、口径／底径比は0.66である。2は胴部下半を欠損する小型の須恵器短頸壺である。胴部上半が膨らみ、頸部から口縁部にかけて垂直気味に短く立ち上がる。復元口径6.8cmを測る。3は胴部下半を欠損する須恵器甕である。胴部上半に最大幅を持ち、口縁部が「く」の字状に屈曲する器形である。外面には平行叩き痕と胴部下半に縦位のケズリ調整、内面にアテ具痕が部分的に認められる。復元口径23.8cmを測る。

石 器 (図159・160, 写真222~224)

出土した石器・剥片類は96点である。そのうち、遺存状態が良く図示したものは6点である。内

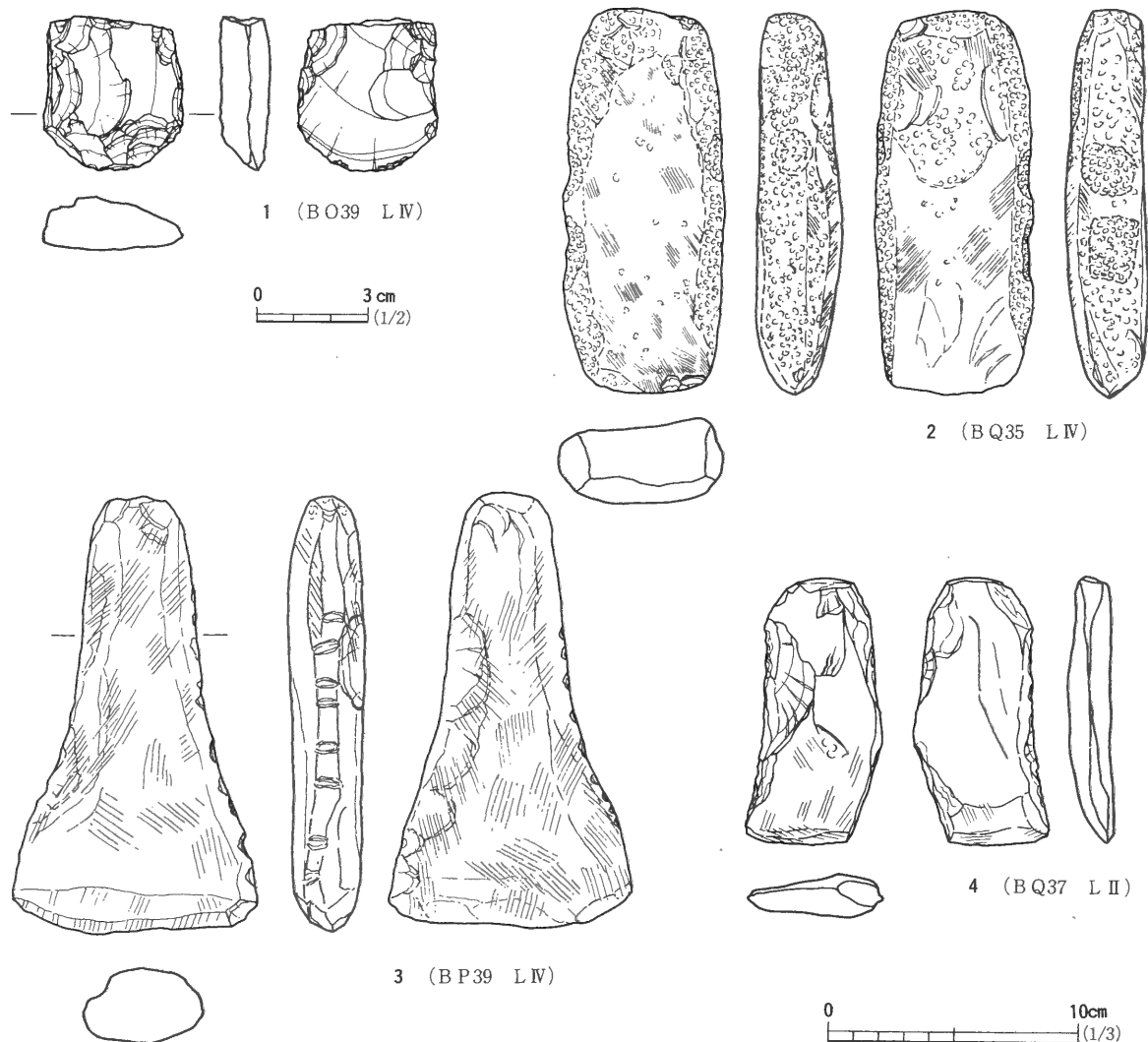


図159 5号遺物包含層出土石器（1）

訳は抉り入り両刃石器1点、扁平片刃石斧1点、ノミ形石器1点、両刃石器1点、敲打器2点である。この他に剥片66点、石核24点が出土しているが図示しなかった。剥片・石核の石質はともに流紋岩が多く約88%を占めている。

抉り入り両刃石器 159-2が該当する。器形的には太型蛤刃石斧に類似するが、両側縁部に抉り部を有するものである。両側縁には背腹面の研磨後に密な叩き整形が加えられており、太型蛤刃石斧等からの転用品の可能性はある。法量は最大長15.5cm、最大幅6.6cm、最大厚3.4cmを測り、刃角70°である。石質はヒン岩である。

扁平片刃石斧 159-4は板状節理を持つ素材を加工したもので、両側縁から基部にかけて1次調整痕が残っているものである。側縁には1次整形の剥離後に叩き調整が加えられ、基部に研磨による狭い平坦面が見られる。刃部は丁寧な研磨調整が加えられているが、使用痕や刃こぼれは認められない。形態的にやや大型に属し、法量は最大長10.7cm、最大幅5.5cm、基部幅4.3cm、厚さ1.8cmを測り、刃角は約39°である。石質は泥岩である。

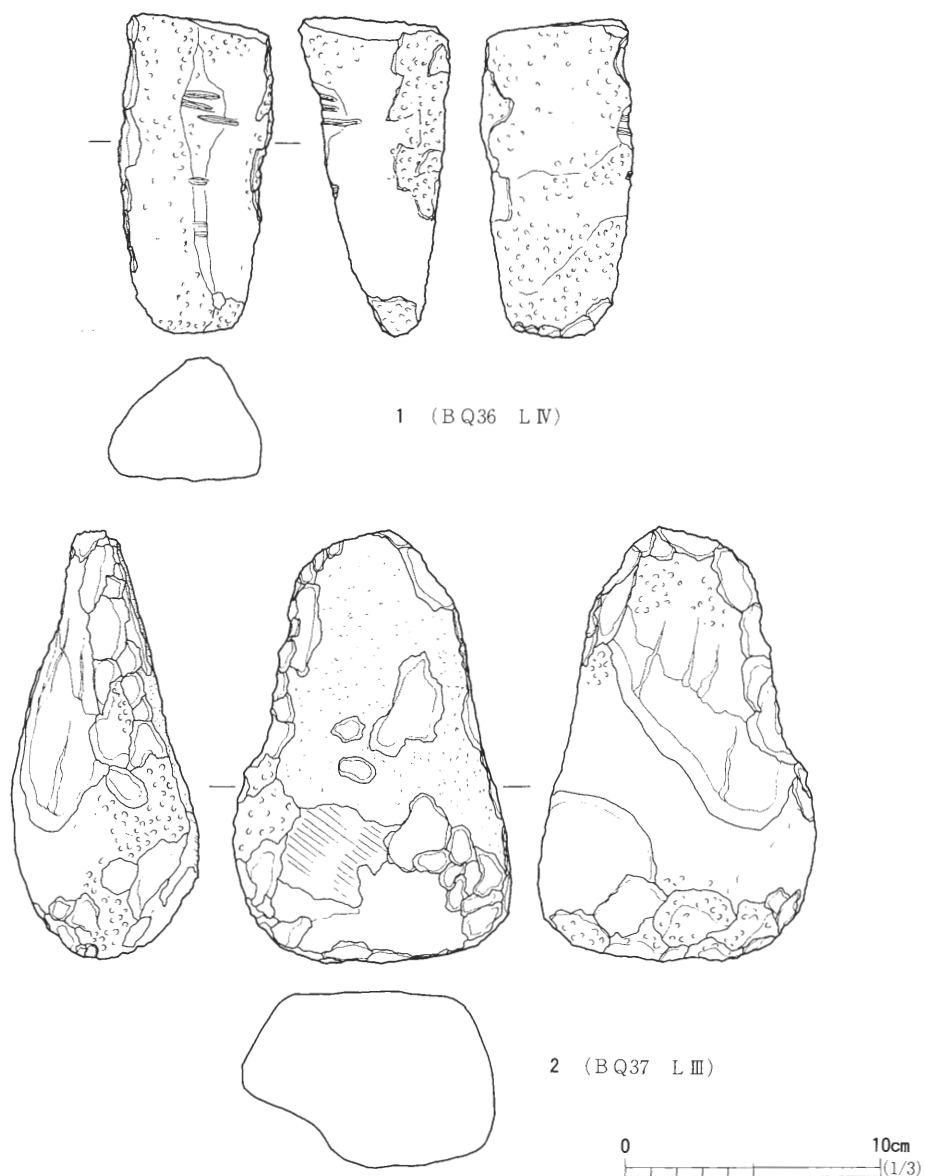


図160 5号遺物包含層出土石器(2)

両刃石器 159-3 が該当する。形態的に撥状を呈し、大型の形態である。側縁には一次整形時の剥離痕と側縁に対して直交するように敲打整形された線條痕が認められる。器面全体には研磨が加えられ、一次整形時の剥離痕は研磨によって整形されている。刃部は丁寧な研磨による再調整が施され、両刃を作出している。

ノミ形石器 159-1 はノミ形石器の未成品と思われる。約 1/2 以上欠損しており、比較的大きく剥離した素材剥片の両側縁に剥離調整を施しているものである。石質は泥岩である。

敲打器 160-1・2 は自然面を残し、先端部に敲打痕が認められるものである。1 は大きく採取した素材の縁辺部に剥離が認められるもので、断面三角形の先端部には直交する線條痕が認められる。2 はハンマーストーンと思われ、全面に自然面を残す非常に大型のものである。縁辺部には雑な剥離痕が認められる。重量は 1 が 480 g, 2 が 1,450 g で、石質は 1 が花崗岩質砂岩, 2 が閃緑

岩である。

ま と め

本包含層の規模・遺物の出土量ともに小規模のものである。遺物は総出土点数の約5%にあたり、土器組成や石器種が他の包含層と比して少ない傾向にある。包含層が形成された時期は、他の包含層同様に弥生時代中期末葉頃と考えられる。(井)

6号遺物包含層 SH06

遺 構 (図161・162, 写真118・119)

本包含層は、調査区の南東部、標高21~23mの北側丘陵南東斜面裾部に形成されている。調査区BE26~30, BF27~33, BG28~33, BH29~33, BI30~33, BJ30グリッドに位置し、その広がり東西45m, 南北20mの範囲である。

BI31~33グリッド内に幅約2.0m, 長さ約15m, 深さ約0.8~2.4mのトレンチ(5号トレンチ)を掘り下げ、土層の断面観察を行った。その結果、調査区水田跡基本土層のLⅡaに相当する堆積土の上に、弥生土器を包含する層を確認した。さらに土層の断面観察を行ったところ、基本土層のLⅣに相当する堆積土が、LⅡaの上層に6層に確認され、いずれも遺物を含む堆積土であることが判明した。そのため、BH30グリッドからBG34グリッドを東西に結ぶラインに、土層観察用ベルト(4号トレンチ)を設定し、本包含層の調査を進めた。

調査の結果、本包含層の層厚は4号トレンチの斜面裾部では10~20cm, 水田跡付近のBH30グリッドでは30~50cmの堆積がみられ、5号トレンチの斜面裾部では30~50cm, 水田跡付近のBI31グリッ

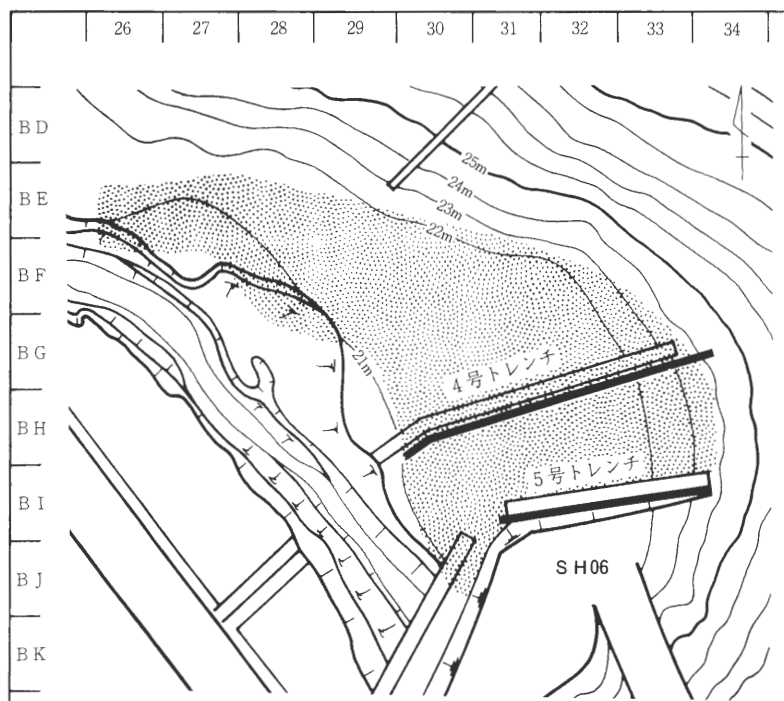


図161 6号遺物包含層

ドでは、0.8~1.0mほどの堆積がみられた。土層名はLⅣに算用数字を組み合わせLⅣ1~LⅣ6とし、遺物の取り上げに関しては、基本土層名に準じLⅣとした。以下、各層の特徴について述べていく。LⅣ1は礫を微量に含む黒褐色土であり、土は柔らかいが出土遺物は少ない。LⅣ2は礫を微量に含む暗褐色土である。LⅣ1同様に土は柔らかいが、出土遺物は少ない。LⅣ3は礫を含む黒褐色土で、土は硬く締まりがあるが、遺

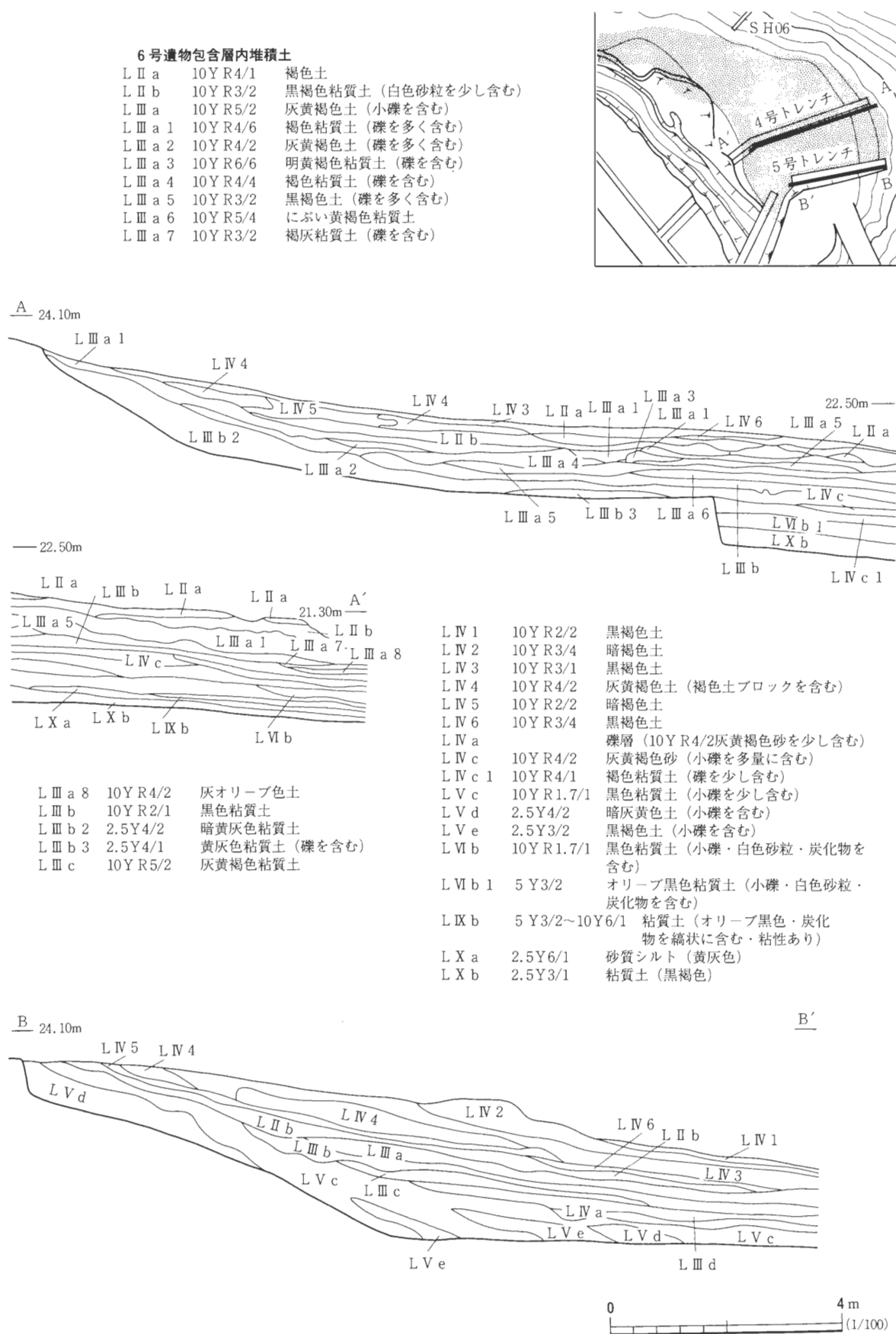


図162 6号遺物包含層断面

物が多く出土した層である。LⅣ4は褐色土ブロックを含む灰黄褐色土で、礫を含み土は硬いが、遺物が多く出土した層である。LⅣ5は礫を含む黒褐色土で、上層は礫を含み土は硬く締まりがあり、最も遺物が多く出土した。下層は礫を多量に含み土はとても硬く、出土遺物も少ない。LⅣ6は礫を多量に含む暗褐色土で、土はとても硬くツルハシでようやく掘れるくらいの硬さであり、出土遺物も少ない。出土遺物をグリッド別にみると、裾部の上位から中位付近に集中しており、弥生土器は、BE27～29, BF28～32, BG30～33グリッドからの出土が多く、BE27グリッドから441点、BE29グリッドから430点、BF29グリッドから474点、BF32グリッドから419点、BF30グリッドから627点、BG30グリッドから328点、BF31グリッドから1,232点、BG32グリッドから1,810点の弥生土器片が出土している。また、BG32グリッドからは、完形の壺形土器（170－7・8）が2個体、BF30, BG31グリッドからは、蓋形土器（171－1・2）が出土している。また、BE28グリッドから1点、BE29グリッドから4点、BF29グリッドから41点の土師器片、BE29グリッドから1点、BF28グリッド2点、BF29グリッド6点、BF30グリッド1点、BG30グリッド2点、BG31グリッド1点の須恵器片が出土している。これは、斜面上位にある2・4・14号住居跡から流入したものと考えられる。

本包含層は上部に弥生時代の遺構が検出されていないことから、おそらく斜面上部にあったと考えられる弥生時代の遺構が地滑り等で崩壊し、斜面裾部に堆積したのではないかと考えられる。

（佐 藤）

遺 物（図165～180、写真225～249）

本包含層から出土した遺物は、弥生土器片8,103点、石器類222点、土師器片56点、須恵器片34点が出土している。遺物包含層から出土した総数の36.7%にあたり、2号遺物包含層とほぼ同数の出土である。抽出して図示したものは弥生土器318点、石器15点である。出土した弥生土器はほとんどが中期末葉のもので、石器も該期に属するものと考えられる。図示した石器を器種別にみると、扁平片刃石斧5点、大型板状石器2点、打製石斧5点、環状石器1点、敲打器1点である。以下、弥生土器、石器の順で説明を行う。

弥生土器（図165～178、写真225～243）

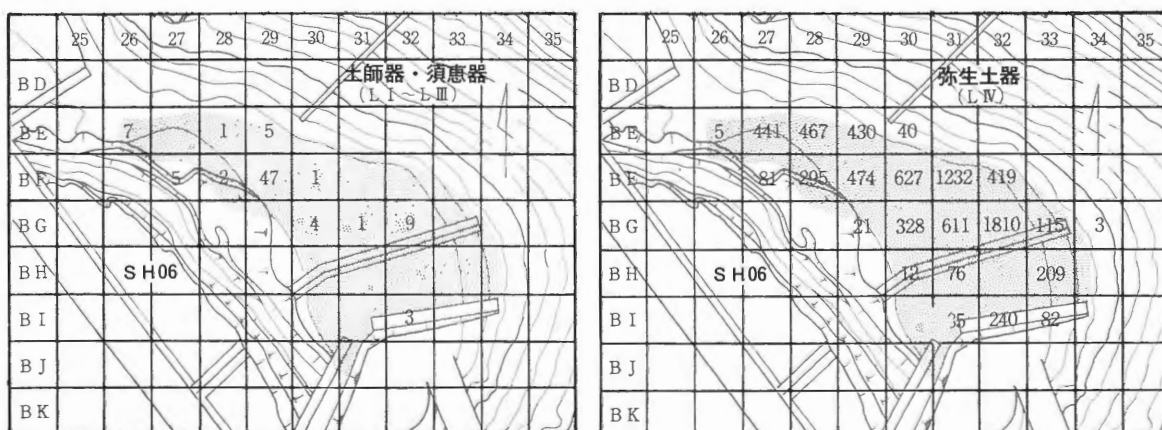


図163 6号遺物包含層出土遺物分布図（1）

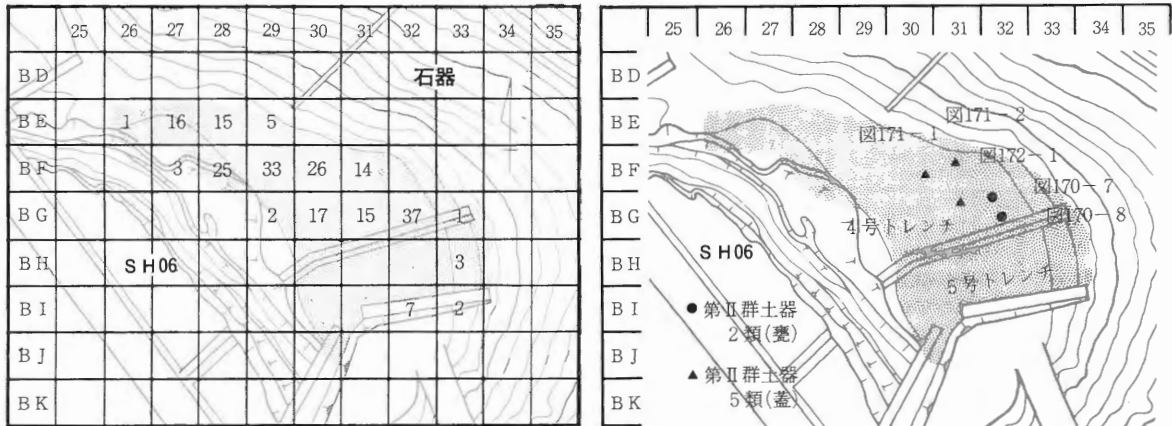


図164 6号遺物包含層出土遺物分布図(2)

本包含層より出土した弥生土器は第Ⅰ～Ⅲ群土器である。全体の器形を把握できる資料は少なく、器種組成では6類(手捏土器)が欠落している。以下、弥生土器から各群ごとに説明するが、群分けや器種選定が困難なものについては第Ⅱ群土器内において一括して報告する。

第Ⅰ群土器 165-1・2が該当する。口縁部から底部までの器形全体を把握できる資料はなく、1類のみ判断できた。

1類土器 165-1・2は壺形土器の頸部付近の破片資料で、主幹文様構成はa種(円文・渦文)が認められる。共にやや先端が尖った工具により、1は1本、2は2本同時施文によって同心円状の渦文が描画されている。沈線間の距離は1は広く1.7cm、2が約1cmを測り、沈線の深さは比較的一定している。

第Ⅱ群土器 165-3～24、166～178が該当し、最も出土量が多い。この中には群分けや器種選定が困難なものも含まれ、本群内でまとめて報告する。

1類土器 165-3～24、166～167が該当する。壺形土器の口頸部の破片資料で、主幹文様構成より、a～d種等が認められる。

a種(円文・渦文)は165-3～10がある。3・4は地文に先端が尖った1本の工具によって描画されているものである。沈線の深さは浅く、線間の幅は広い。5は2本、6～10は束線具によって描画されている。地文には5～7・10が附加条、8・9が斜縄文が回転施文されている。

b種(山形文・三角文・菱形文)には165-11～18が該当する。11・12は3本工具、13～18は束線具によって文様が施されている。11・12・15の沈線の深さは比較的深く、他は浅い。

c種(格子文・肋骨文)は165-21～24・166-1～14で、縦線後に横線文を施し、肋骨状に描画するものが多い。本種は無文地に描画されているものが多い。

d種(連弧文・波状文)には166-15～28が認められ、15～24は連弧文、25～28は小波状文が描画されている。束線具によって文様が施され、沈線の深さは165-22・166-14はやや深い他は浅く、ほぼ一定している。165-19・166-29～32は縦線文、166-36～40・167-1～5は横線文を束線具を用いて施文している(e種)。166-30・31は長頸で緩やかに外反する口頸部に文様を描画してい

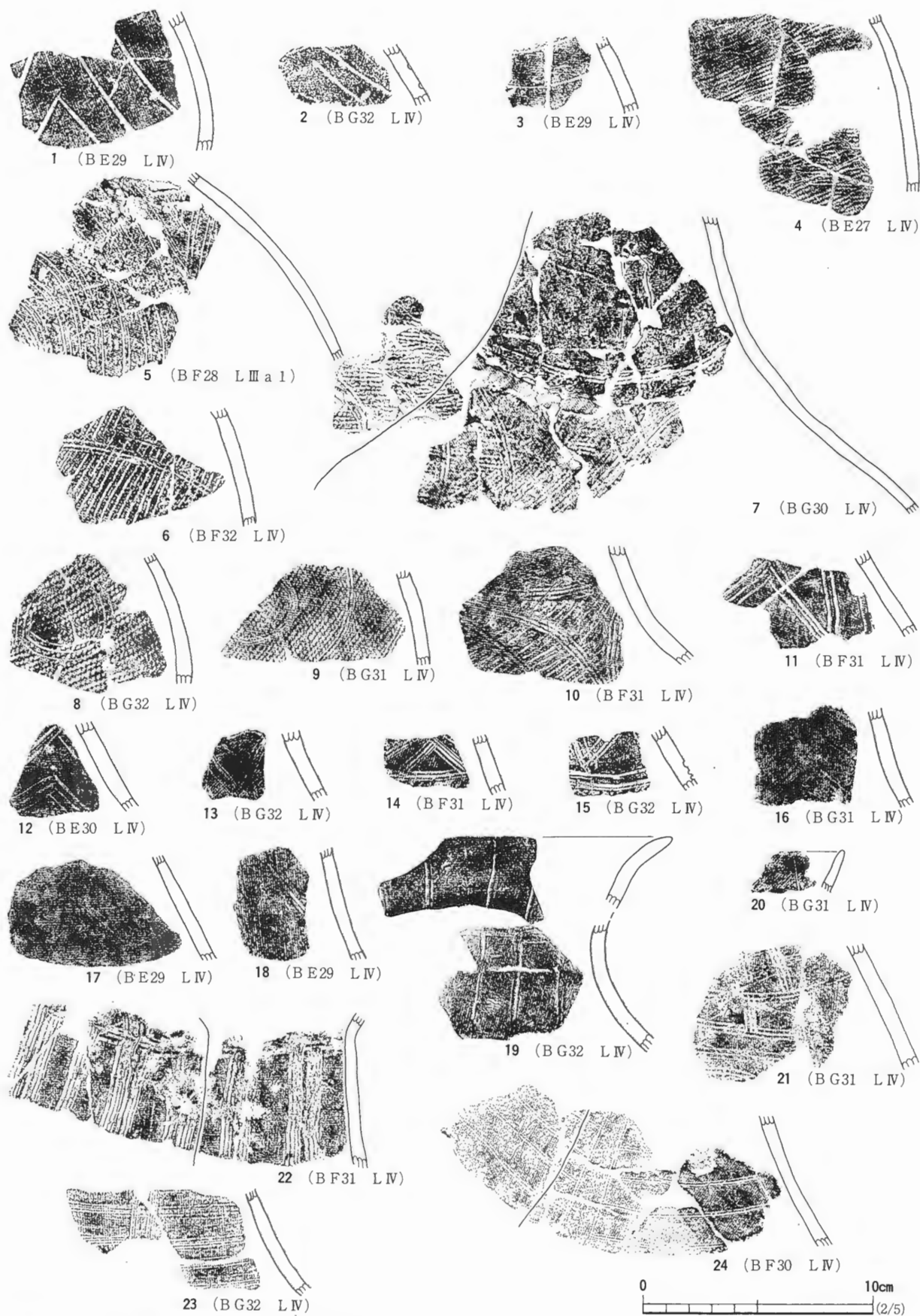


図165 6号遺物包含層出土弥生土器 (1)

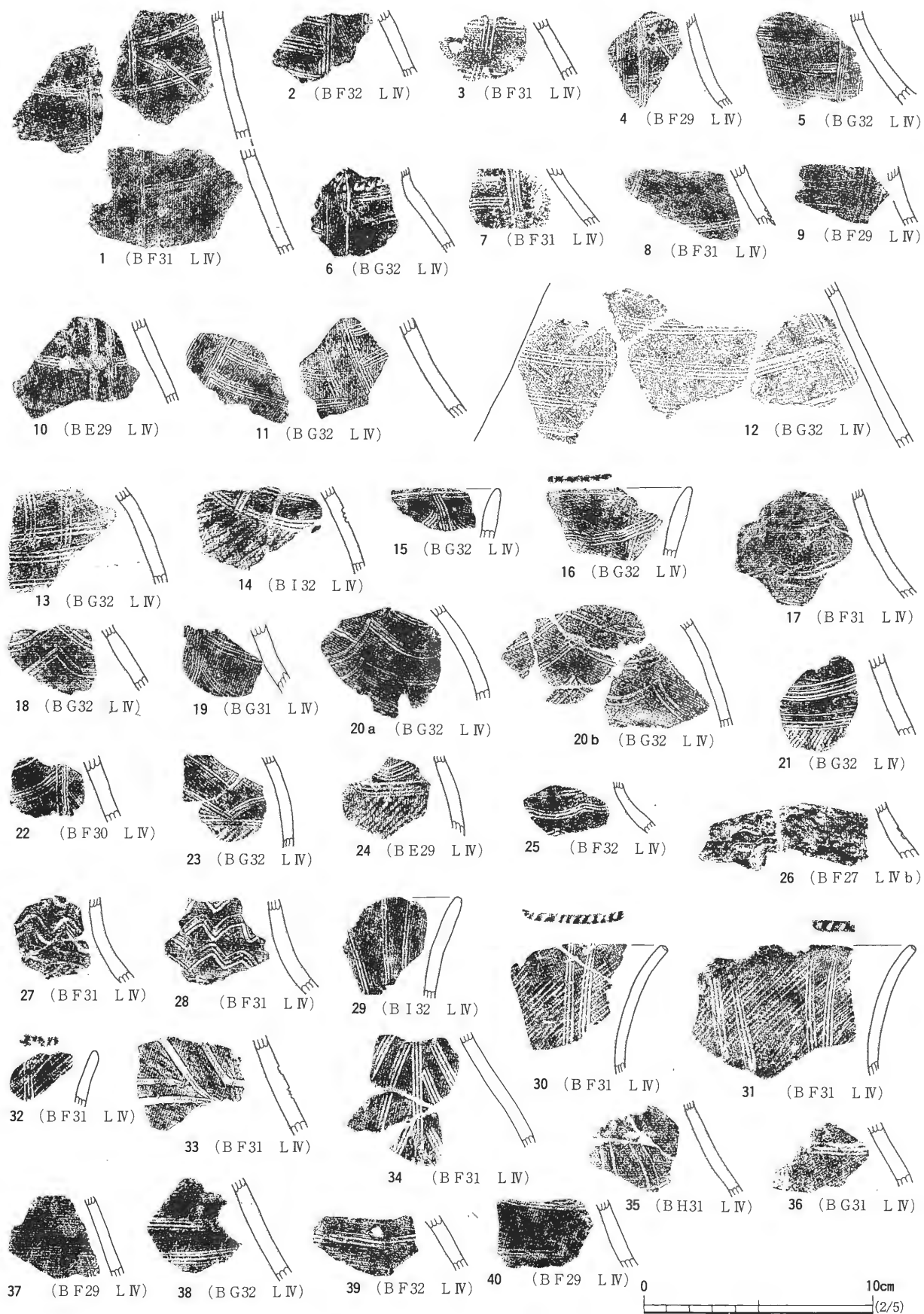


図166 6号遺物包含層出土弥生土器(2)

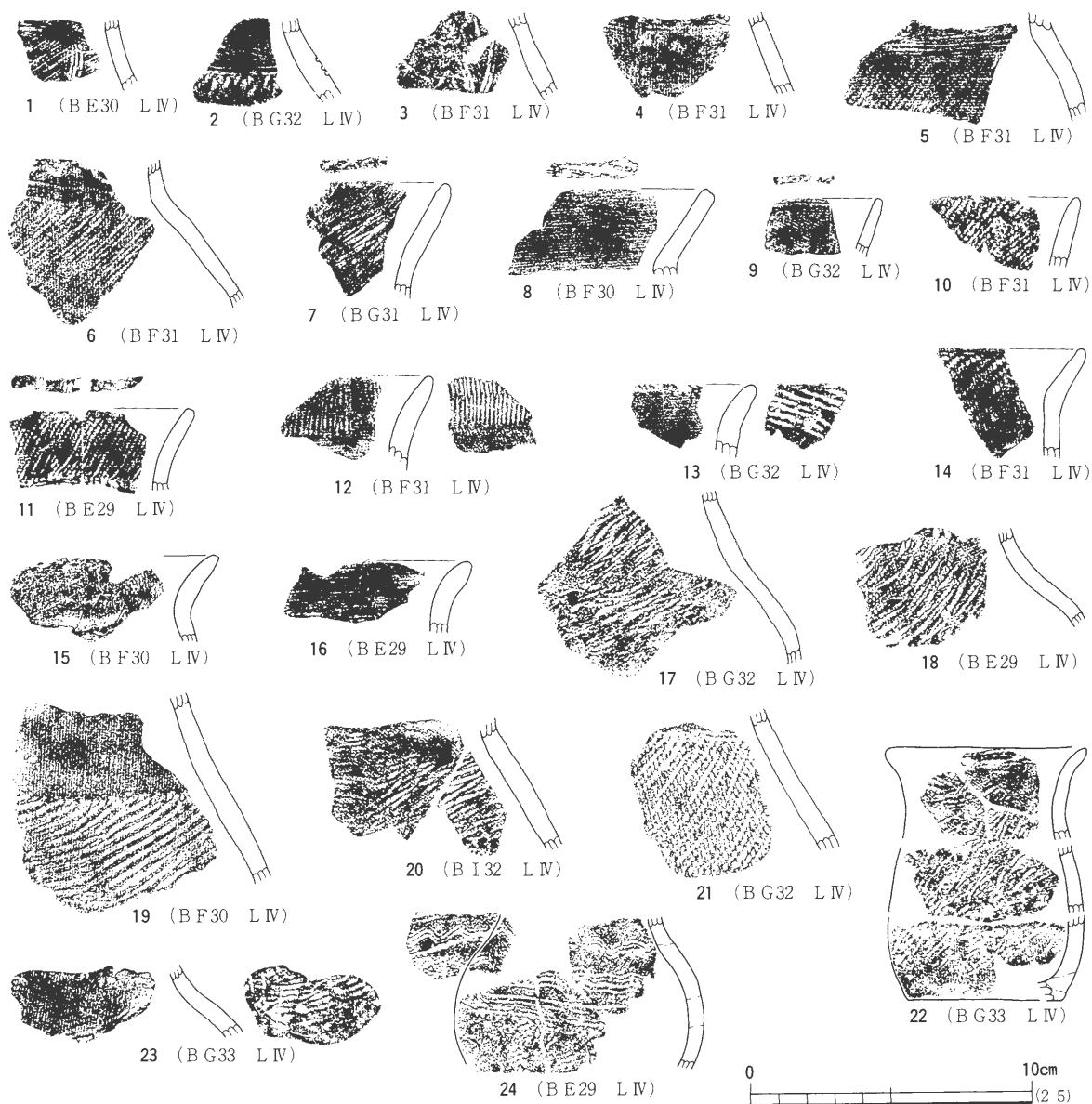


図167 6号遺物包含層出土弥生土器(3)

るもので、口唇部には刻みが加えられている。166-4は鋸歯状に描画したものである。

167-7~16は無文(g種)及び地文のみ(f種)が観察される壺形土器の口縁部資料、17~21・23・24は頸部片である。7・8は若干内湾気味に、13~16は短く「く」字状に屈曲するものである。9は器厚が薄く小型の器形かもしれない。地文には7・10・11・18・20・21が附加条、14が直前段多条、13・19が0段多条、12・17が撚糸文を回転施文しているものと思われる。19の頸部には原体末端部の結節が認められる。22・24は胴部中央が膨らみ、器形的に小型壺である。22は復元で口径7cm、底径5.6cm、器高8.9cmを測る。24の胴部中央には横位の区画線が施され、上半部に小波状文が数段巡らされ、下半の地文には附加条縄文が施文されている。

2類土器 甕形土器の口縁部から頸部片で、168・169・170-1~8が該当する。甕形土器は口径15~20cm程の中型のものが比較的多く、170-7は小型の甕と思われる。7は底径6.9cmを測る。

170-8は底径9cmを測る。口縁部の形態では短頸で短く「く」字状に屈曲するもの(168-1~4), 長頸気味で「く」字状に屈曲するもの(168-5・6・168-7), 長頸で緩やかに外反するもの(167-7~23・170-8)がある。

短頸で「く」字状に屈曲するものは無文及び地文のみで、長頸で緩やかに外反するものは縦位への多条沈線を描画している。167-13・168-1は連続山形文を数段巡らせ、168-5~12・169-4~12・19・21~23・25・26・170-7・8は縦線文を束線具を用いて施文している。地文に施されている原体は明確でないが、168-1・2・4・6・10・11・16~23・169-4~7・9・11~16・19~24・29~31が附加条文かあるいは直前段多条、168-3・7~9・169-8・26~28が斜縄文の原体を回転施文している。

168-21・22, 169-27~30には原体末端部の結節が認められる。器高は平均して6mmである。168-8-21~23は口径18.6~20.8cmを測る。

3類土器 170-9・10は鉢形土器の口縁部資料と判断した。出土数が極端に少なく、2点図示している。9は緩やかに外反する口縁部片で、束線具による横走区画線間に連続山形文を描画している。口唇部には刻みが施され、器面調整が整麗である。2号遺物包含層出土の126-23に器形・文様構成が近似するものである。170-10は直線的に外傾する口縁部片で、地文に附加条文が施され、口唇部に刻みが加えられている。

4類土器 170-11~15は高杯で、底部から脚部にかけての資料である。11は底部と脚部の境に束線具によって波状文を描画されている。内面には丁寧なナデ調整が加えられ、地文には12が直前段多条、11・13~15は判然し得ないが附加条の原体を回転施文しているものと思われる。

5類土器 蓋形土器で170-16~19, 171, 172-1・2が該当する。171-1・2は遺存状態が良く全体の形状が分かるもので、その他は破片資料である。170-16~18は蓋の摘み部分と思われ、内面には非常に丁寧なナデ調整、16の外面にはケズリ調整が施されている。17は横線文が施されており、やや窄まる器形で、鉢形土器の可能性もある。171-1・2は緩やかに末広がりとなる器形で、縦線間に横線文を施して格子状に描画している。1の天井部外面には木葉痕、2には平織り状の布圧痕が認められ、底部が穿たれている。内面の器面調整は整麗で、口縁部外縁には付着物が認められる。1の法量は復元口径16.8cm, 天井径6.1cm, 器高10.2cm, 2は天井径6.3cm, 遺存器高9.4cmを測る。3の口縁部外面には横位のナデ調整が施され、内面は煤状の付着物が認められる。4~6の口縁部付近の内面には変色して黒色化している部分が認められる。172-1は口縁部付近の資料で、内面の屈曲部分に付着物が認められる。171-1・2等とは異なり、口縁部近辺には顕著に認められない。法量は復元口径19.2cm, 遺存器高6.2cmを測る。地文には170-18, 171-1が附加条, 171-4・6が0段多条, 171-5, 172-2が直前段多条, 170-19, 171-3・7が斜縄文を施している。焼成は他と比して良好で堅質である。

7類土器 172-3~26, 173, 174-1~11は甕もしくは壺の胴部片で、器種分類できない。172-12~20は円文状, 172-11は連弧状, 172-21~26, 173-1・2は横位に, 173-3~11は縦位に

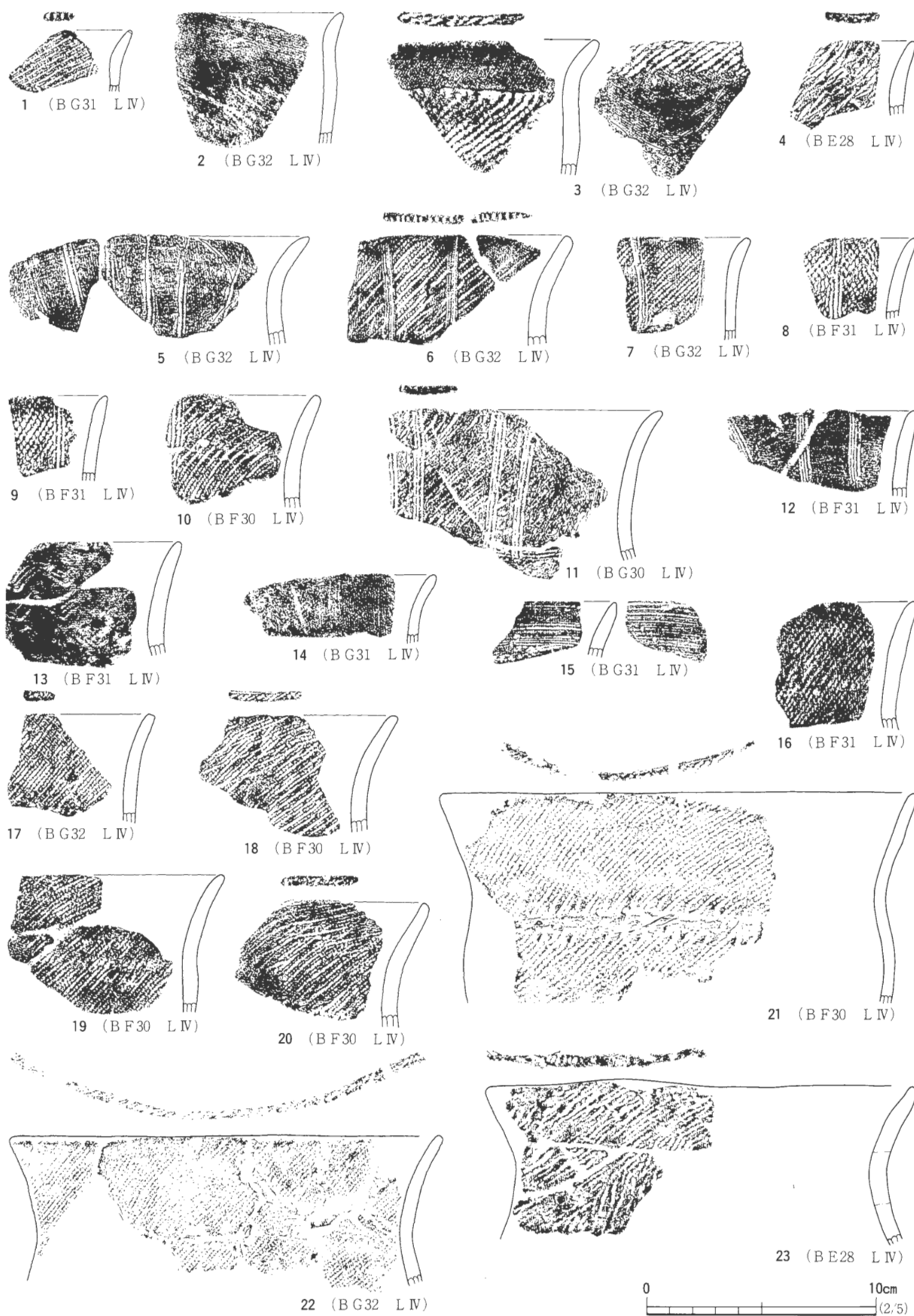


図168 6号遺物包含層出土弥生土器(4)

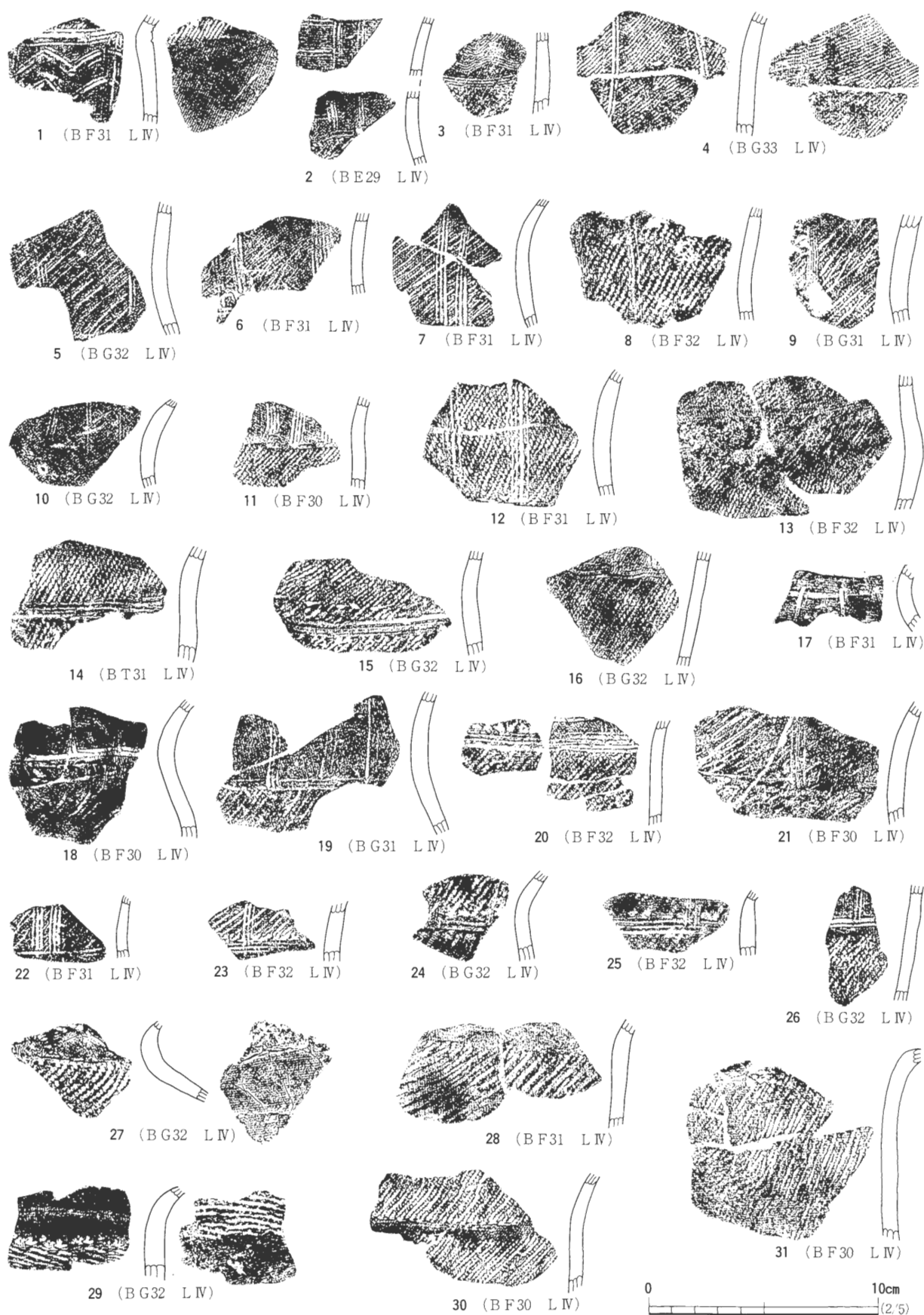


図169 6号遺物包含層出土弥生土器 (5)

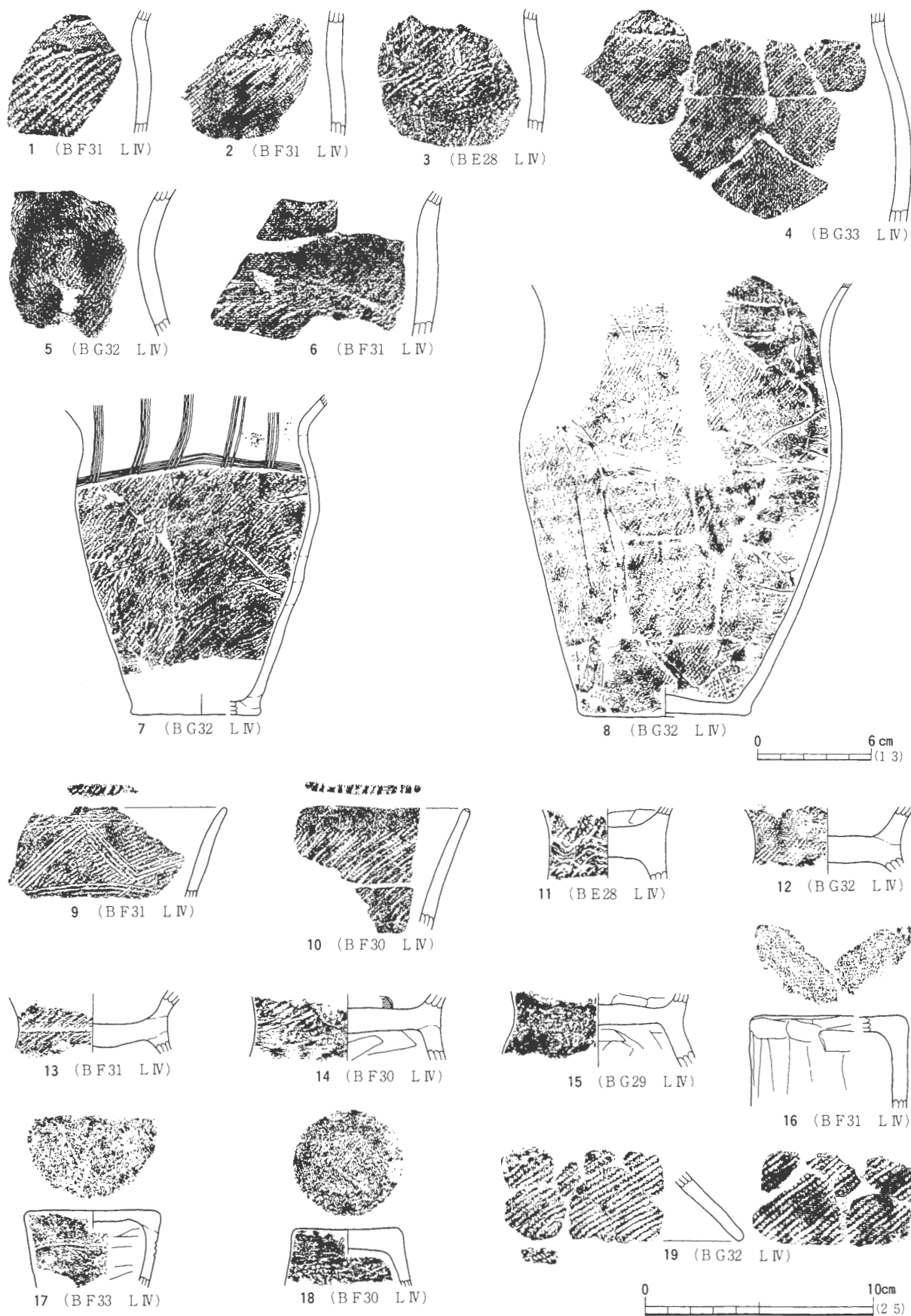


図170 6号遺物包含層出土弥生土器 (6)

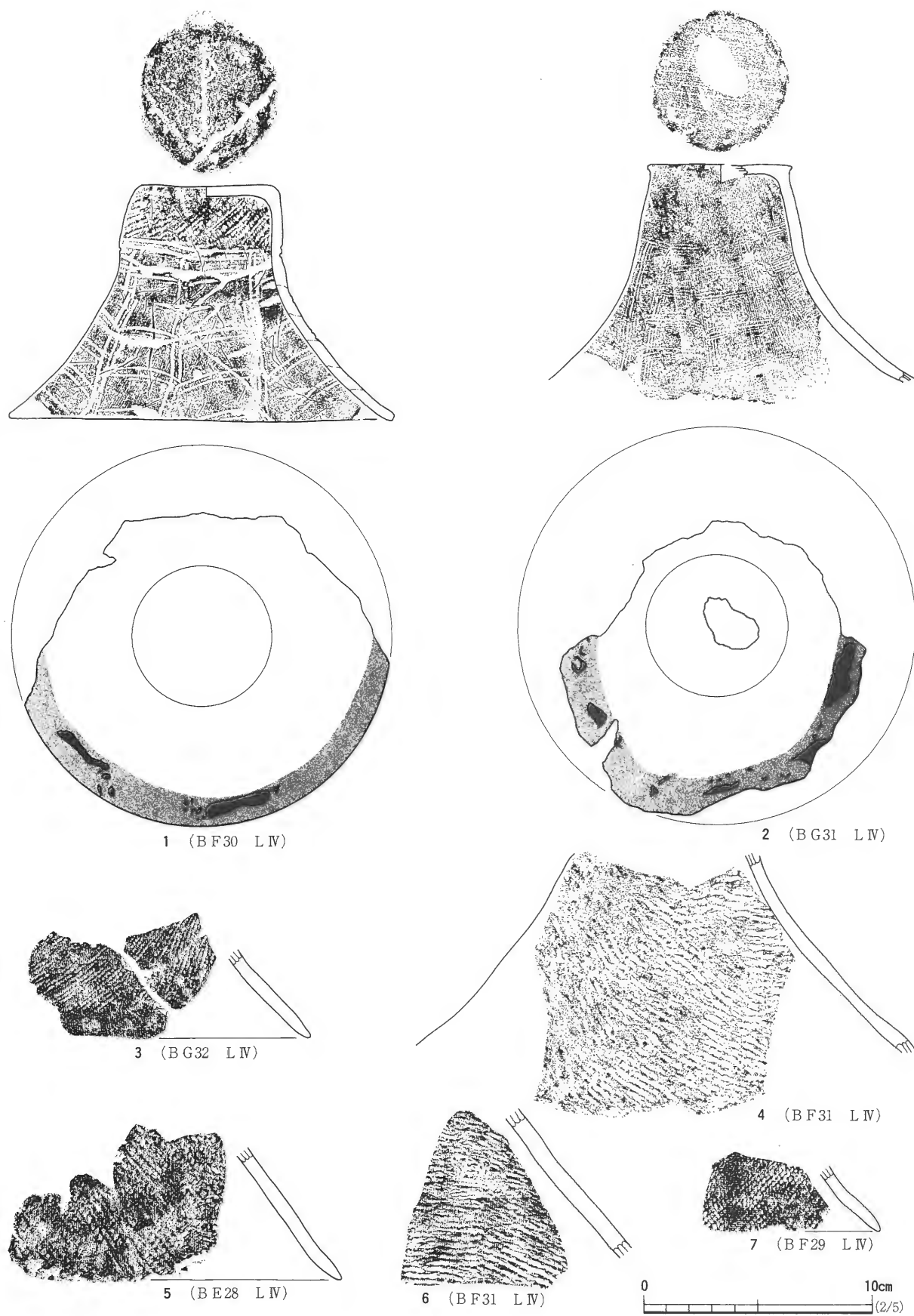


図171 6号遺物包含層出土弥生土器 (7)

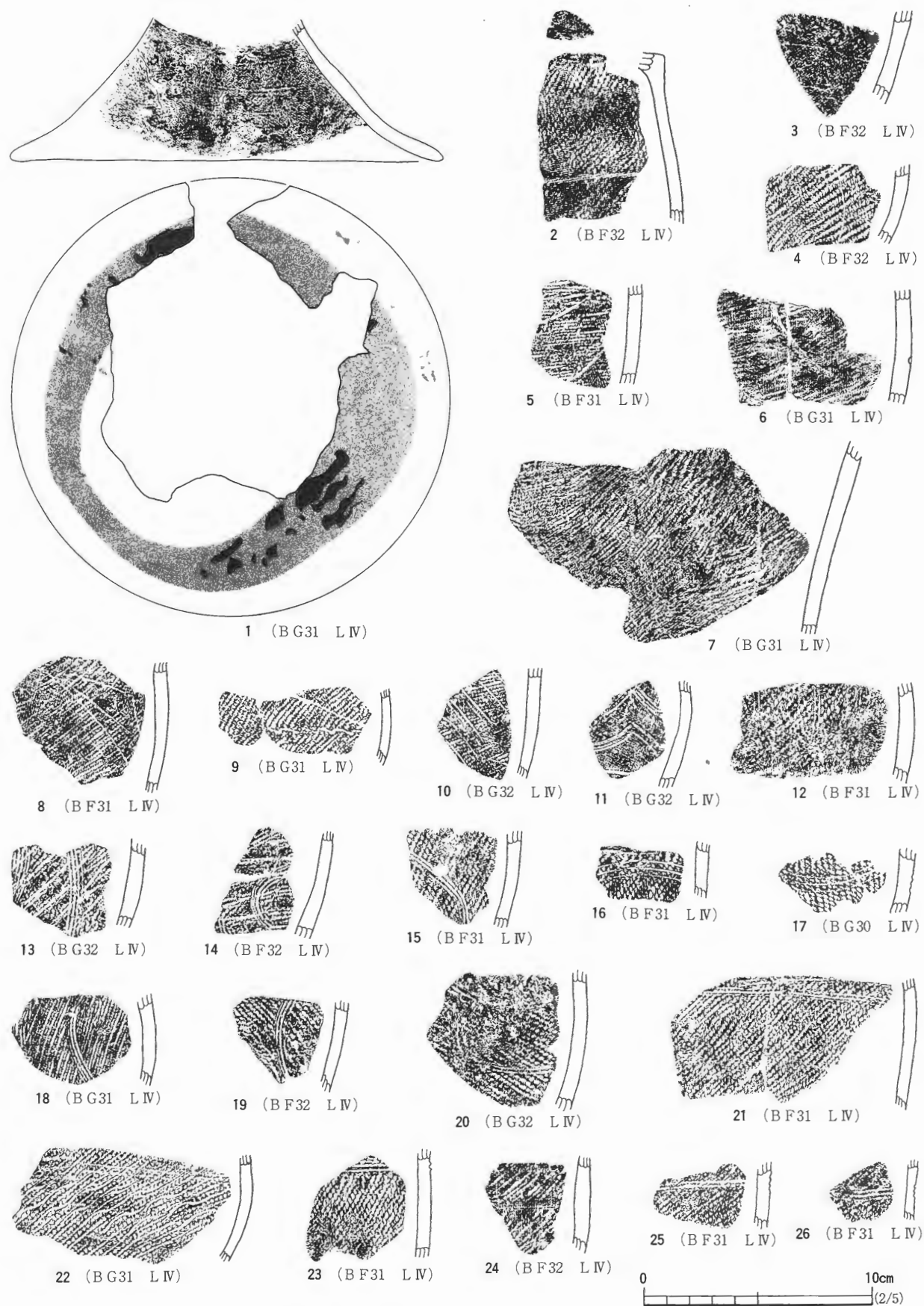


图172 6号遺物包含層出土弥生土器 (8)

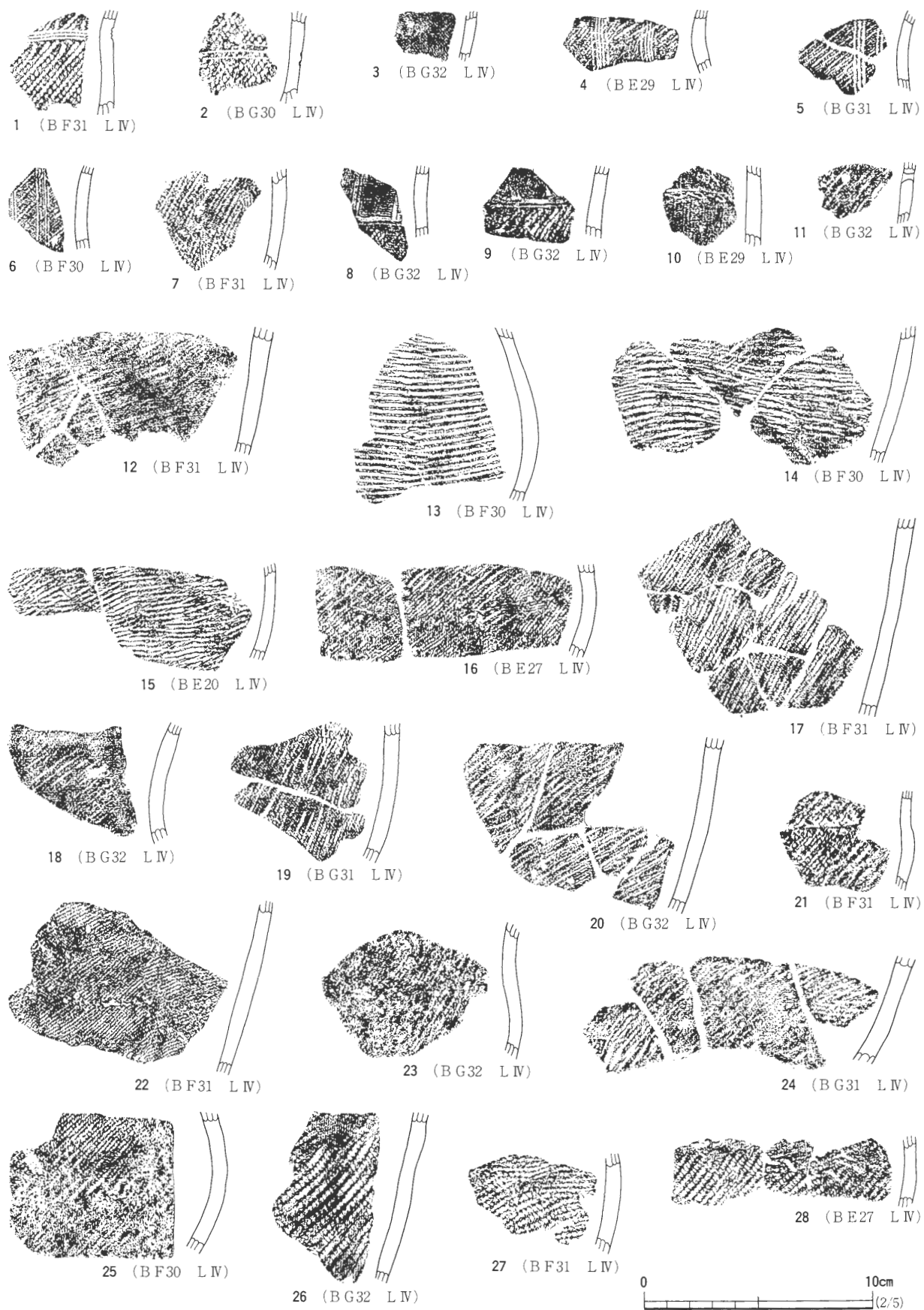


図173 6号遺物包含層出土弥生土器(9)

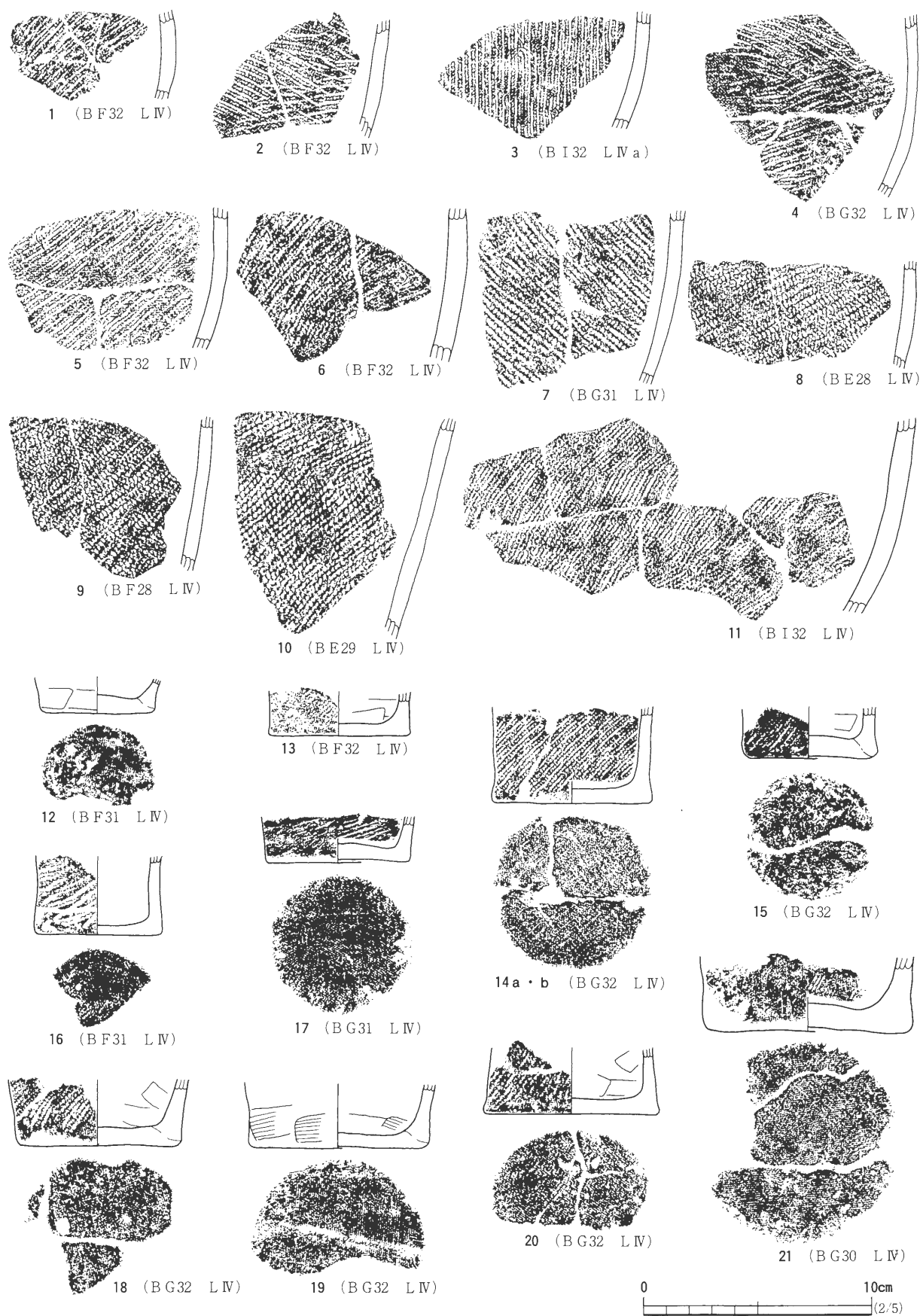


図174 6号遺物包含層出土弥生土器 (10)

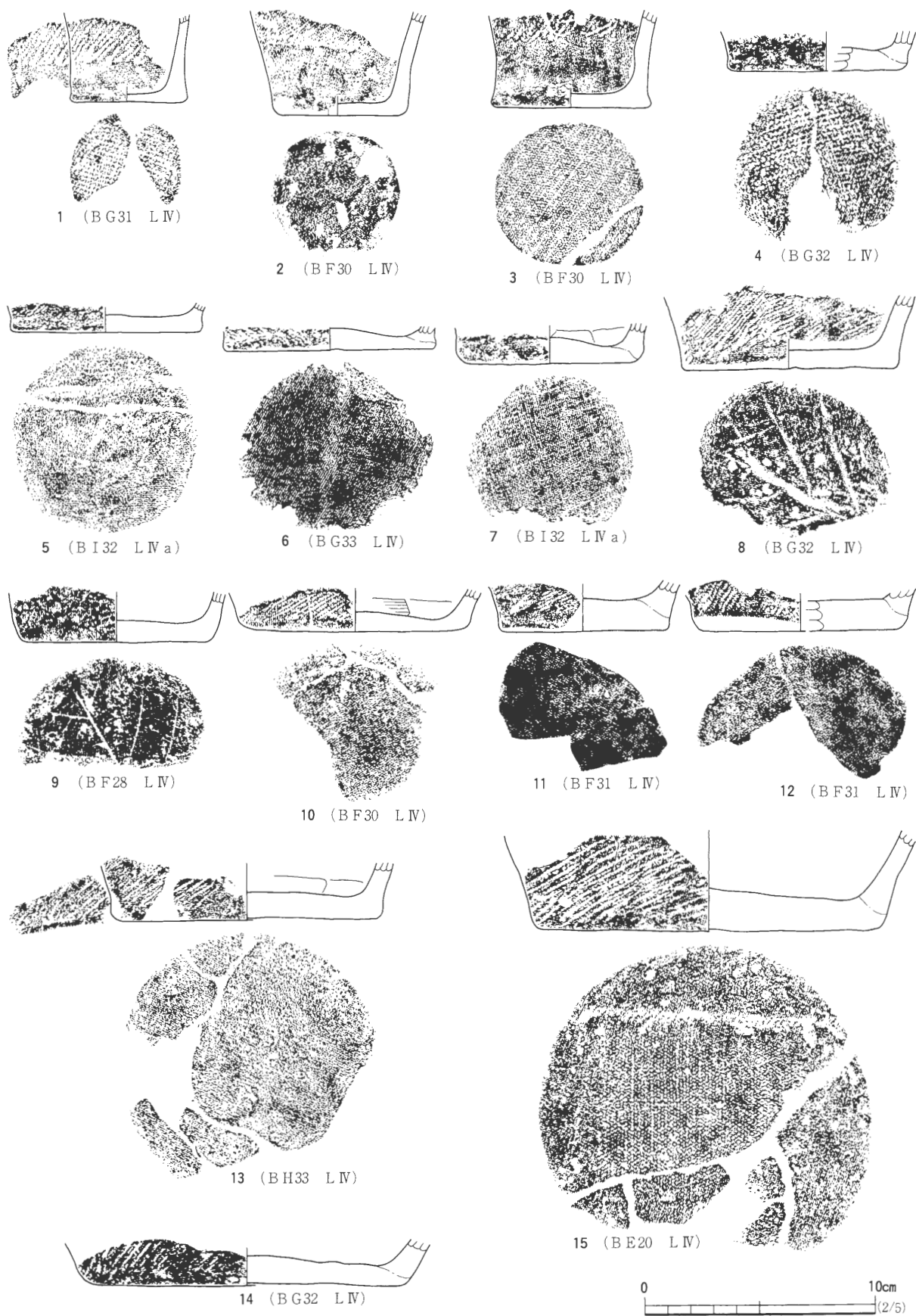


図175 6号遺物包含層出土弥生土器 (11)

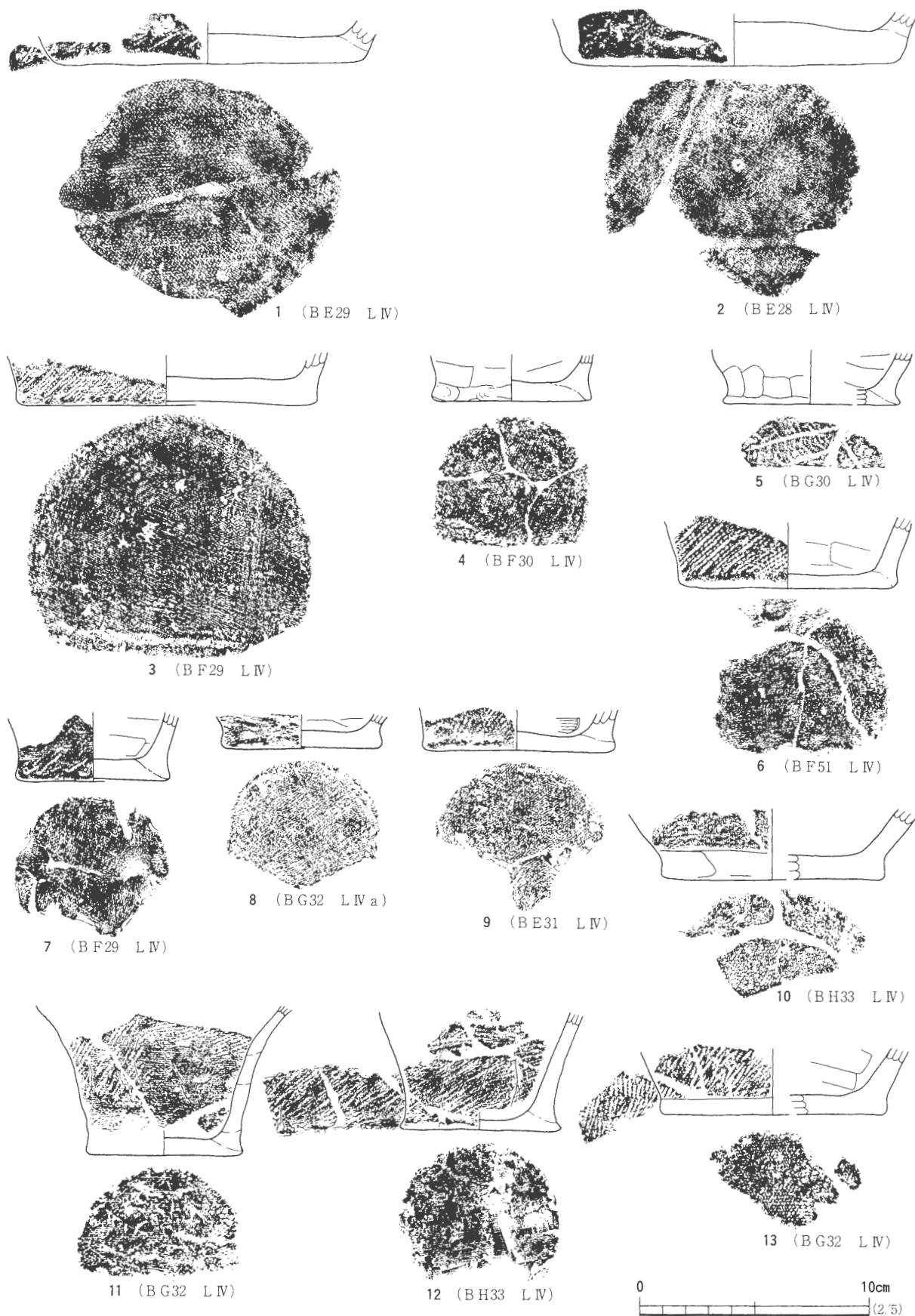


図176 6号遺物包含層出土弥生土器 (12)

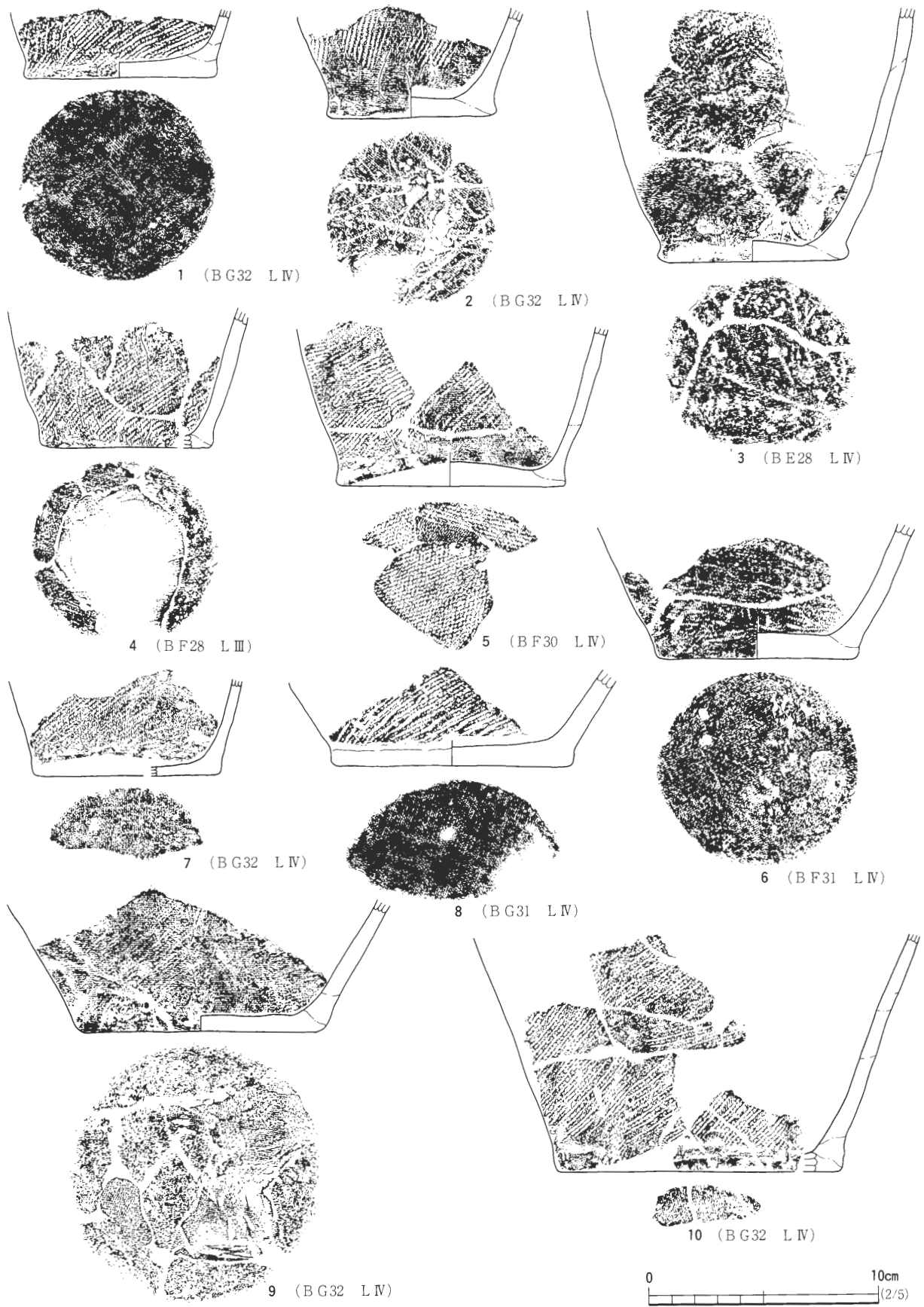


図177 6号遺物包含層出土弥生土器 (13)

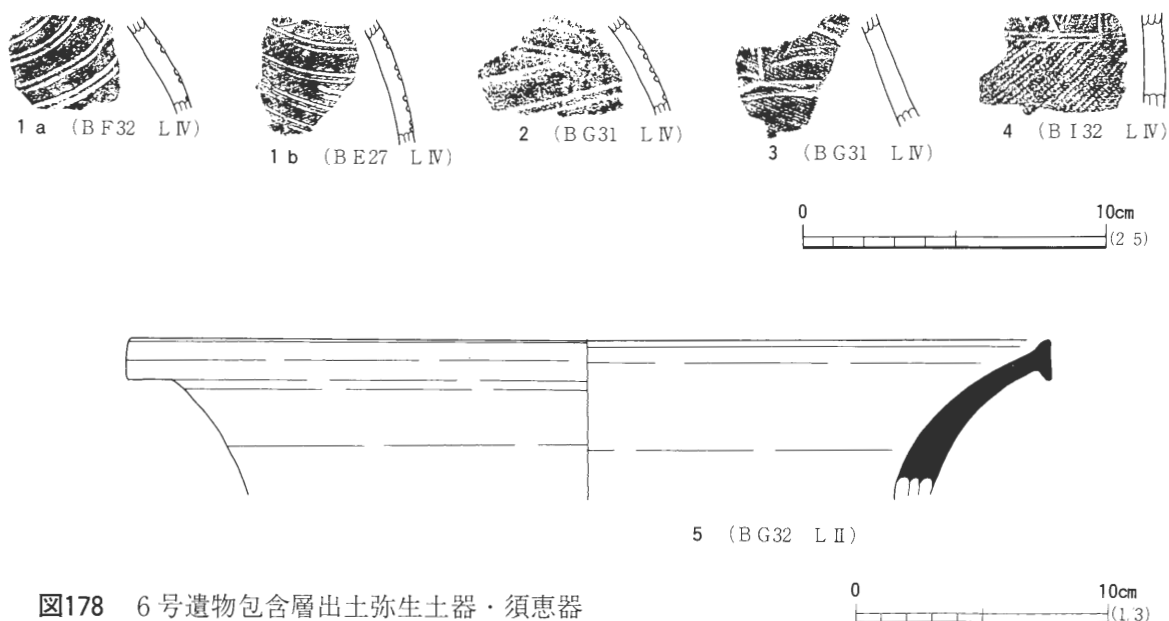


図178 6号遺物包含層出土弥生土器・須恵器

描画しているもので、173-8・10は幾何学的文様が施されている。173-5は先端が尖った工具、173-3は極細の工具により多条沈線が施されている。束線具状の工具は173-4が5本引き、173-5は3本引き、173-6が4本引きであるが、173-8・9は軟質の太めの工具によって2本引き沈線が施されている。173-1・5の沈線の深さは他と比して深い。地文には172-5・7~10・13・14・18・22・24、173-1・4・5・8・9・16・18~21、174-1~5・11は直前段多条かもしくは附加条縄文、172-6、173-13~15・22が0段多条、173-4・15~17・19~21・23・25・26が斜縄文を回転施文している。172-10・11・23・24は摩滅が著しく不明。173-22の原体は一部巻いた条が緩んでおり、172-9、173-21・28には原体末端の結節が認められる。173-16・28、174-4・5・10・11の外面には煤状の付着物があり、172-21、173-11は二次加熱を受け赤変。173-11の器面には焼成後の穿孔があり、173-24・174-5・8は内面のナデ調整が顕著である。173-3・27は焼成が良好で、内面調整や胎土が他と異なる。器厚は平均して6mmである。

8類土器 174-12~21、175~177は底部である。遺存状態の良い48点について図示した。器形的には174-12・15、175-1・2などは底径5cm代で小型、175-13~15、176-1~3などは底径11~13cmを測り大型に属し、底径7~10cmの中型のものが多い傾向にある。形態的には底部側面が突出するもの（176-4~13、177-1~5）、突出しないで垂直気味に立ち上がるもの（174-13~21、175-1~3）、底部側縁から直線的に外傾するもの（175-8~15・176-1~3、177-6~10）などがある。胴部の地文には174-13・14・16・17、175-8・15、176-3・12、177-1・7・9・10が附加条文かもしくは直前段多条、174-13・175-2・5・6が0段多条、174-15・18・20、175-10~12、176-6・11・13、177-4・8が斜縄文を回転施文したと思われる。174-13・21、175-5・6・9、176-1、177-3・6・9は摩滅が著しく不明瞭である。174-13、175-2・3の外面には煤状の付着物が認められ、174-13、175-7・11、176-9・12、177-3・5

・6は二次加熱を受け赤変している。胴部下位が無文となり原体末端部の結節が認められる175-1～3や、比較的小型で垂直気味に立ち上がる174-13・17・20などは、内面調整が他と比して丁寧に施されており、形態的に3類(鉢形土器)や5類(蓋)の可能性もある。

底面は平織り状の布圧痕が観察されるもの(174-14・16～19・21, 175-1・3・4・6・7・11・15, 176-1・4・7～10・13, 177-1・4・5・8), 木葉痕が観察されるもの(175-8・9, 176-5・11, 177-2・3), ナデ状の調整が施されているもの(174-12・15・20, 175-5・12, 176-2・6, 177-6・7・9・10), 平織り状の布圧痕とナデ状の調整が観察されるもの(175-2・10・13, 176-3), 摩滅が著しく判然し得ないもの(174-13, 175-14, 176-12)がある。

第Ⅲ群土器 178-1～4が該当する。全て破片資料であり、全体の形状を把握できるものはない。第Ⅰ・Ⅳ群土器同様に出土点数は極く僅かで、1類のみ判断できた。

1類土器 1a・bは施文原体や胎土が酷似し、同一體とみられる。先端が凹状の工具によって二本同時に円文が描画されている。二線間の距離は1mm程で、沈線の深さは一定している。2は比較的先端が尖った工具によって二本同時に三角形の文様が描画されている。二線間の距離は1.5mm程で、沈線の深さはほぼ一定している。3は二本同時施文によって幾何学的な文様を描画しているもので、施文具の両側縁がやや深く食い込んで二沈線の深さが異なっている。器面には文様を描画する前のナデ調整が認められる。4は二本同時施文による横走沈線によって文様帯を区画しているものである。二線間の距離は1mm程で、断面凹状を呈し、沈線の深さはほぼ一定している。胴部には附加条文が回転施文されている。器厚は平均して5mm程であるが、4はやや厚手である。

須恵器 (図178)

178-5は須恵器甕の口縁部で、緩く外反する口縁部から、断面T字形の口縁端部に至る形態で、復元口径36.6cmを測る。

石器 (図179・180, 写真 244～249)

出土した石器・剥片類は238点である。そのうち、剥片・石核は223点に上り、遺存状態が良く図示できたものは14点である。土器の出土量に対する石器出土量が少ない(約2.6%)傾向がある。図示しなかったが剥片136点、石核72点が出土している。石質はともに流紋岩が多く約83%を占めている。この中には火熱による剥離痕や赤褐色の火熱痕が観察されるものが約15%ある。

扁平片刃石斧 179-1～5である。最も出土量が多く、5点出土している。全体の形状が分かるものは3点(1・2・5), 他は刃部や基部側を欠損するものである(3・4)。すべて刃部に最大幅を持ち、両側縁から基部にかけて一次調整痕が残っている。1は自然面を有する長方形の素材剥片を使用し、両側縁から基部にかけて一次整形の剥離調整を加えている未成品である。法量は最大長6.1cm, 最大幅3.1cm, 基部幅2.6cm, 厚さ1.2cmを測る。2は刃部をやや欠損し、両側面と基部のみに敲打が僅かに行われているもので、一次整形後に研磨による調整が加えられている。法量は最大長6.7cm, 最大幅3.4cm, 基部幅2.5cm, 厚さ1.8cmを測る。3は背腹面に自然面を残す基部側欠損

品で、側縁一次整形後の敲打と背面に研磨による調整が加えられている。刃部には使用による線条痕が認められる。遺存する法量は最大長5.7cm，最大幅3.4cm，厚さ2.0cmを測り，刃角は約62°である。4は自然面を有する大型の未成品で，長方形の素材剥片の側縁部に一次整形を施しているものである。遺存する法量は最大長10.9cm，最大幅8.1cm，厚さ2.9cmを測る。5は刃部側を欠損する中型に属するものである。両側面と基部に一次整形を施し，背腹面には一次整形後の研磨が加えられている。遺存する法量は最大長7.7cm，最大幅3.8cm，基部幅3.2cm，厚さ1.7cmを測る。石質は1・2が泥岩，3がシルト岩，4が頁岩，5緑色片岩である。

大型板状石器 179-6・7は刃部の長さに対し，身幅がほぼ同等かあるいはやや小さいものである。比較的大きく剥離した薄手の素材剥片に簡単な一次調整を施しているもので，断面が板状を呈し，直線的な刃部を持つものである。刃部は自然面をそのまま利用し，両面から細かい剥離調整を行っている。7の刃部両面にはコーングロスが認められ，基部側には磨耗痕が観察される。遺存する法量は6が最大長7.4cm，最大幅14.8cm，最大厚3.2cmを測り，7が最大長14.0cm，最大幅9.3cm，最大厚3.8cmで，7の刃角は約53°である。石質は6・7とも閃緑岩である。

打製石器 180-1～5があり，側縁に抉りを有するもの(1・2)と有しないもの(3～5)がある。3・5は自然面を有する素材剥片の側縁部に一次整形を施しているものである。3の片側縁には一次整形後の敲打が認められ，3・5の背面には研磨調整が加えられている。1・2は共に素材剥片に一次整形を施し，両側縁に抉りを有するものである。1はほぼ中央，2はやや上部の両側縁に抉りを作出し，形態的に1は小型，2はやや大型に属するものである。敲打や研磨による二次調整や，使用痕等は認められない。遺存する法量は1が最大長4.0cm，最大幅5.2cm，最大厚1.0cm，2が最大長10.1cm，最大幅8.5cm，最大厚2.3cm，5が最大長8.1cm，最大幅9.3cm，最大厚2.6cmを測る。石質は1・2が緑色片岩，3～5が閃緑岩である。

環状石器 180-6は大きく採取された素材剥片の縁辺部に研磨後の剥離調整や使用痕が認められるもので，転用品の可能性はある。片側縁と研磨後の刃部には使用による線条痕が認められ，石質は比較的大型の石器に多く使用されている閃緑岩である。

敲打器 180-7は縦長の素材剥片の縁辺部に剥離痕が認められるもので，両側縁のほぼ中央には2つの抉り部が作出されている。背面には縁辺部の剥離調整以前の弱い研磨痕が認められ，器形的に石斧から抉り入り石器への転用品の可能性はある。遺存する法量は最大長14.1cm，最大幅5.5cm，最大厚2.4cmを測り，石質は花崗岩質砂岩である。

まとめ

本包含層は丘陵西側の裾部に再堆積を繰り返しながら形成された遺物包含層で，4号遺物包含層の下位にあたる。検出された包含層中では2号遺物包含層と同様に遺構の規模・遺物の出土量ともに最大規模のものである。遺物は総出土点数の約46%を占め，弥生時代中期末葉の極限られた時間幅内に制約されるものである。遺物包含層が形成された最終的な時期は，再堆積が著しく明確には判断し得ないが，他の遺物包含層と同時期の弥生時代中期末葉頃と考えられる。(井)

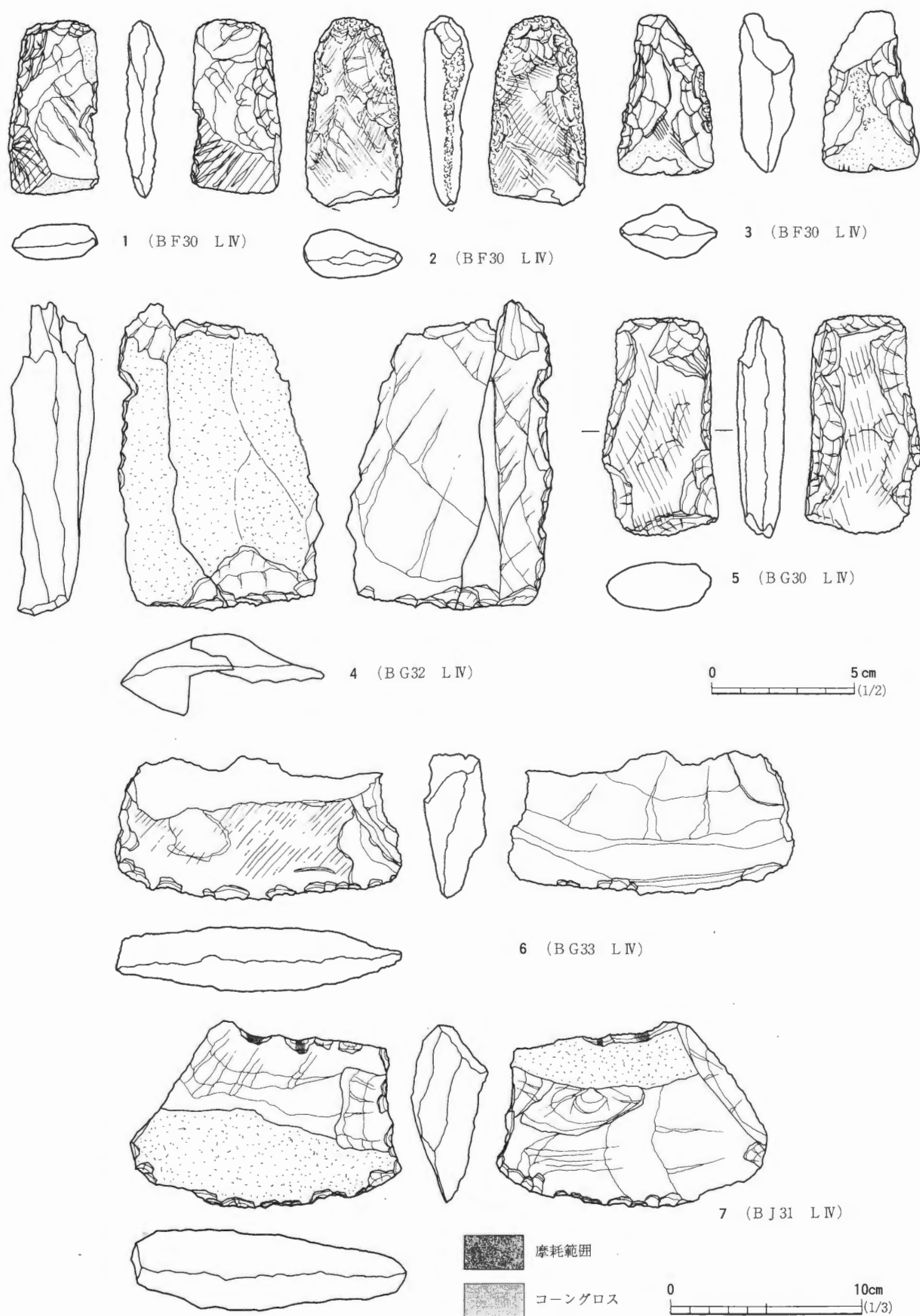


図179 6号遺物包含層出土石器 (1)

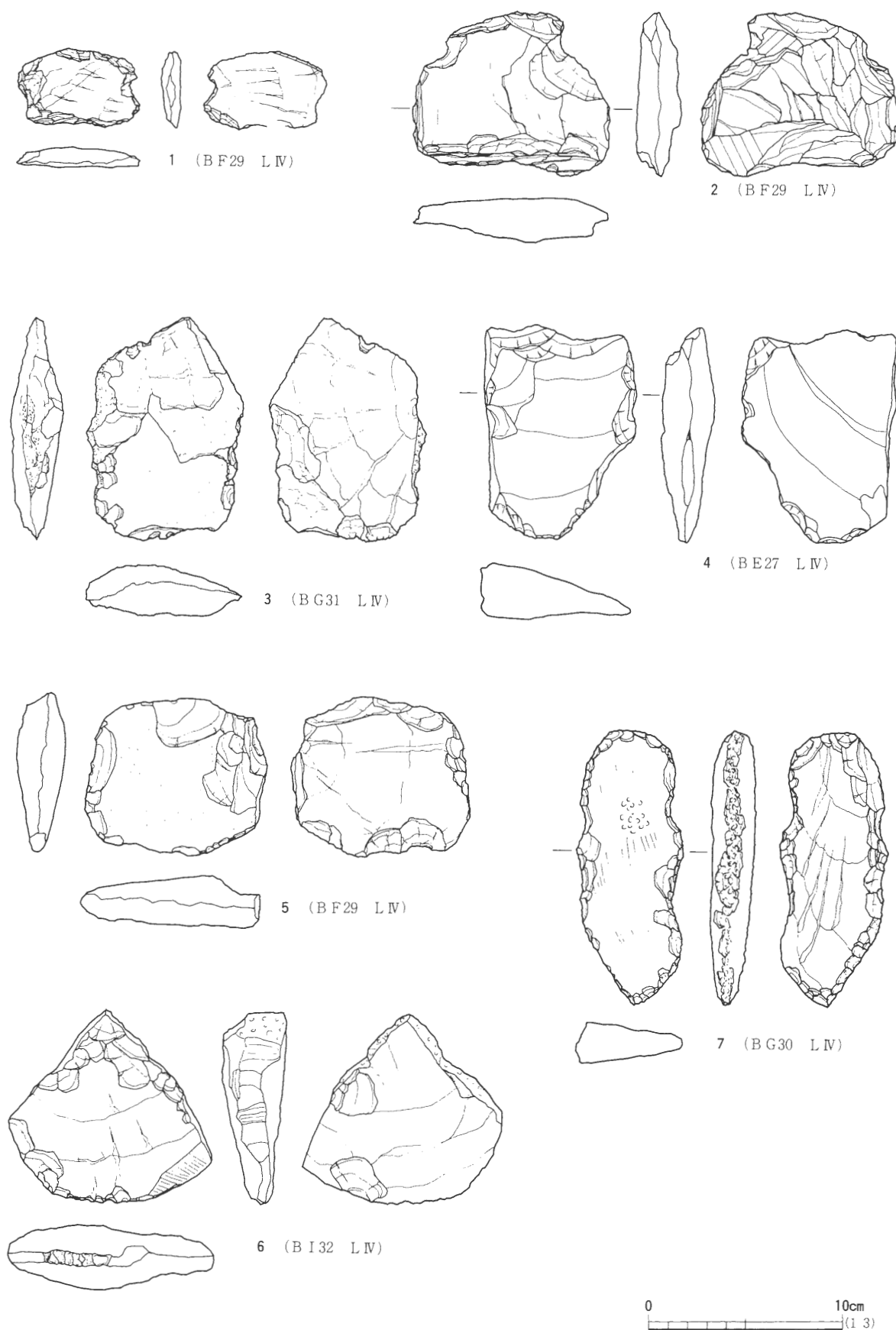


図180 6号遺物包含層出土石器 (2)

第10節 その他の遺構と遺物

今回の調査で検出されたその他の遺構としては、1・2号性格不明遺構、1・2号畑跡がある。性格不明遺構は調査区西端部中腹と南側の南東丘陵部の南向き斜面の縁辺部から確認されたものであり、住居跡・土坑が隣接する位置に構築されていた。1・2号畑跡は調査区北東端の南に開く狭い沢の最奥部から検出され、LⅢが堆積した比較的平坦な緩斜面に造られていた。周囲には2～9・14号土坑、1・2・4号溝跡などの近世の遺構が検出されている。遺構外出土遺物はこれら畑跡が検出された近辺からの出土数が多く、縄文土器1個体、弥生土器片2,614点、石器類151点、土師器片796点、須恵器片255点、陶器片312点、鉄製品61点、銭貨4点が出土している。いずれも付近の丘陵部からの流れ込みによるものである。

1号性格不明遺構 SX01

遺 構 (図181)

本遺構は調査区南側の南東に迫り出した丘陵縁辺部、BU55グリッドに位置する。遺構が構築されている丘陵全体は、近代の粘土採掘のため大きく削平され、標高29mほどの平坦部を形成している。重複する遺構はないが、隣接して北東に13号住居跡・8号溝跡が存在する。検出面はLV上面である。堆積土は2層に分層され、壁側の三角堆積が見られることから、斜面上位からの自然堆積と思われる。

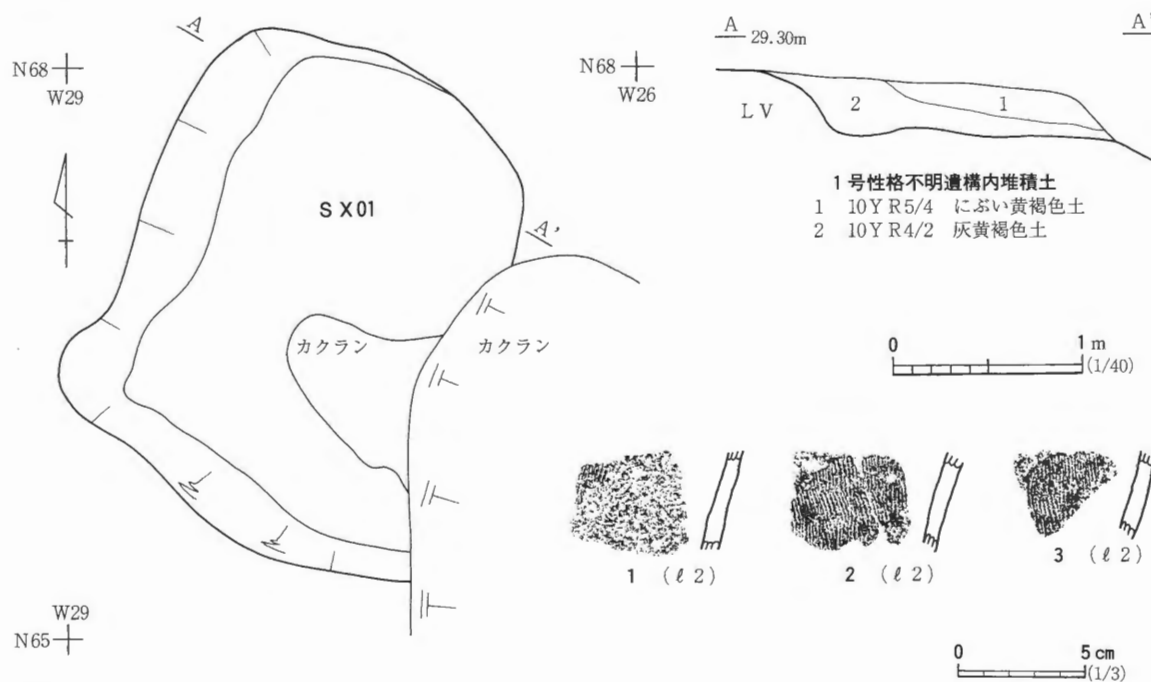


図181 1号性格不明遺構、出土土師器

平面形は遺存状況は悪く南東部が消失しているが、隅丸長方形を呈する。規模は上端で長軸2.55m、短軸1.70m、検出面からの深さは最深部で35cmを測る。周壁は南西壁が緩やかに立ち上がり、北西壁は急な立ち上がりを見せ上部は緩やかである。底面は平坦であるが、北西壁と接する部分は凹凸である。底面南東側は攪乱を受けている。

遺 物 (図181)

遺物は土師器片31点、石器類4点が出土しており、細片で摩滅が著しいため図示できたのは土師器3点である。181-1～3は同一個体の非ロクロ成形の土師器甕片である。器面にはハケメ調整が施されており、焼成は良好である。

ま と め

本遺構の性格は明確には判断し得ないが、所属時期は出土した土器などから隣接する13号住居跡とほぼ近接する時期と考えられる。(佐久間ふく子)

2号性格不明遺構 SX02

遺 構 (図182)

本遺構は調査区北側の南北に延びる丘陵先端部、AP14グリッドに位置する。遺構が構築されている付近は、標高24mほどの比較的緩やかな斜面部で、等高線に沿うように平坦部となっている。16号住居跡と重複しており、本遺構の方が新しく、隣接して10号土坑が存在する。検出面はLV上面で、攪乱や流出により斜面南半部は遺存状態が良くない。

遺構内堆積土は、褐色系の2層に分層される。ℓ1・2ともに木炭粒・焼土粒を多く混入する。平面形は明確には不明であるが、粘質土が確認出来た範囲で、長軸70cm、短軸60cmの不整楕円形を呈する。粘質土内及び南東付近は2cmほどの範囲で窪んでおり、約2cmの厚さで焼土化している部分が確認された。底面は緩やかに南東に向かって傾斜しており、凹凸はあるがほぼ平坦である。

遺 物 (図182)

出土した遺物は土師器18点、須恵器1点で、全て焼土粒・木炭粒が散布する粘土範囲内に集中して検出された。そのうち、図示できたのは土師器・須恵器片各1点である。

土師器 182-1は口頸部遺存の土師器甕で、器形的には短頸壺に類似する。頸部が「く」字状に屈曲する器形を呈し、外面口縁部には横位へのナデ調整、胴部には刷毛目調整が施されている。

須恵器 182-2は須恵器甕の胴部片で、器面には格子状のタタキ痕が認められる。器厚が厚く、大甕の可能性はある。

ま と め

本遺構は斜面の流出や攪乱・削平等により遺存状態が悪く、その性格は不明である。しかし、粘質土の範囲や焼土粒・木炭粒等の散在状況などを踏まえると、住居跡のカマド跡であった可能性が考えられる。所属時期は出土した遺物から、奈良時代頃の所産と考えられる。(井)

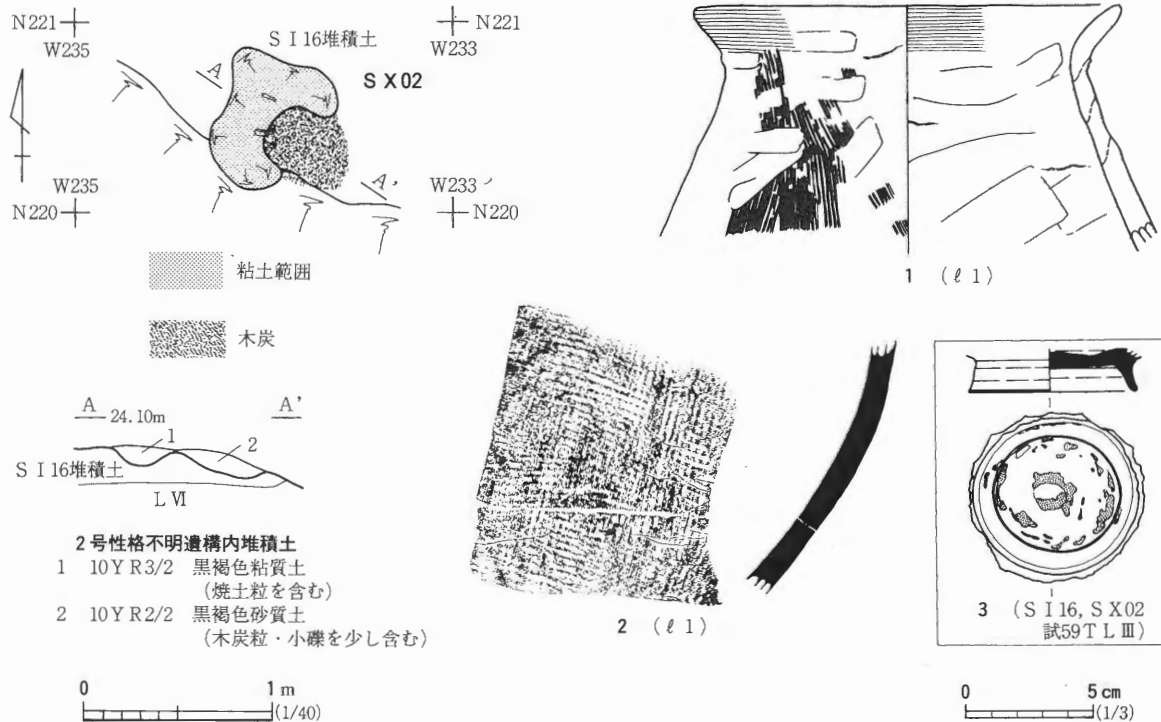


図182 2号性格不明遺構、出土土師器・須恵器

1・2号 畑 跡

遺 構 (図183, 写真120・121)

本遺構はAY55・56, AZ55・56グリッドに位置し、南西部南向きの緩斜面に立地する。検出面はLⅢ上面であり、主軸方向の異なる2種類のにぶい黄褐色土の溝状のプランを10列検出した。これらの溝跡はほぼ一定の間隔で平行して存在するため、畑のすき込み溝の可能性が高いと判断した。土層観察用基本ベルトの東側にも広がっていたと思われるが、遺構検出面を掘り下げ過ぎプランを確認できなかった。西側に4号溝跡が隣接している。

1号畑跡はc・d・e・f・g・h列で2号畑跡と重複する。本遺構が新しい。遺構内堆積土はにぶい黄褐色土の単層である。主軸方向N71°Eで、0.3~0.5mの間隔で平行に9本の列を成す。長さ0.2~2.4m, 幅0.1~0.7mを測る。検出面からの深さは、0.1~0.2mを測る。底面には凹凸が見られる。周壁は、すり鉢状に立ち上がるものが多い。

2号畑跡はb'・c'・d'・e'・f'・g'列で1号溝跡と重複する。遺構内堆積土は暗褐色土の炭化物を含む単層である。主軸方向N86°Wで、0.2~0.5mの間隔で平行に7本の列を成す。長さ0.4~1.5m, 幅0.2~0.5mを測る。検出面からの深さは、3~15cmを測る。底面には凹凸がみられる。周壁はすり鉢状に立ち上がる。

本遺構からは1号畑跡a・b・d列の堆積土から弥生土器が1点ずつ、d列から陶磁器1点、2号畑跡b'列から陶磁器1点、c'列から須恵器1点が出土しているが、細片で摩滅が著しいため図示できなかった。いずれも細片であることから、耕作によって掘り上げられた遺物が溝の中に入

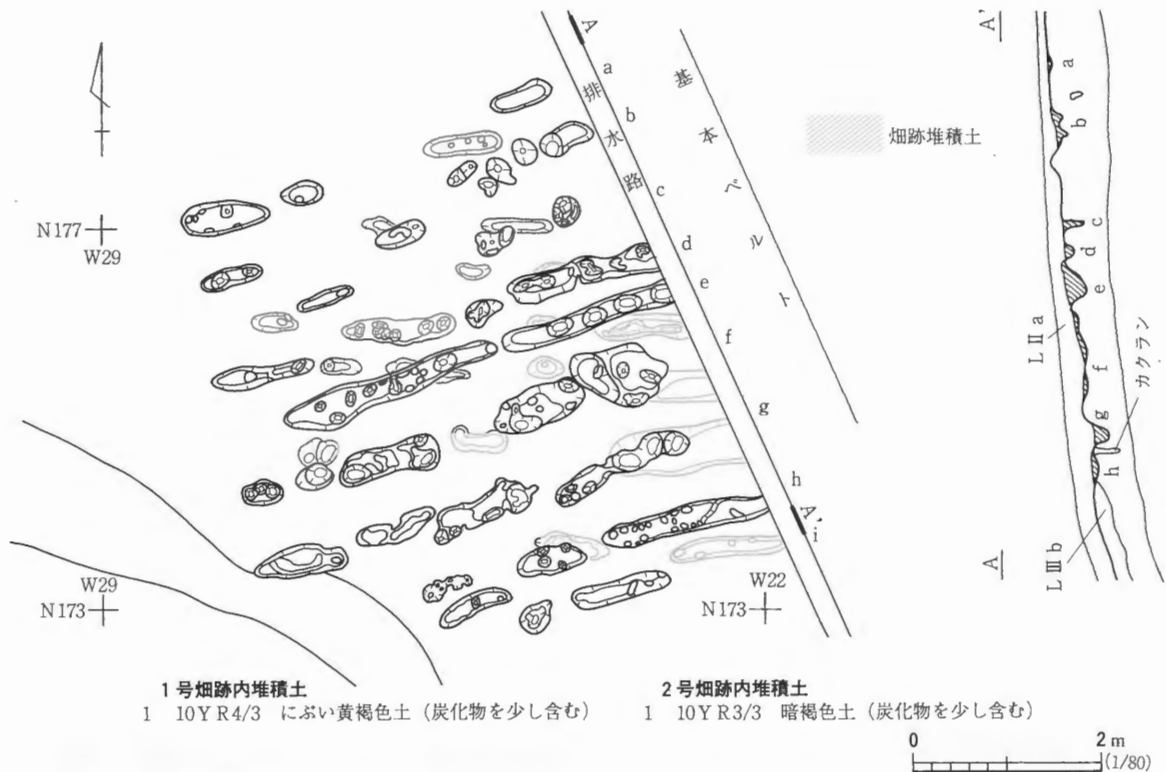


図183 1・2号畑跡

り込んだものと考えられる。このため、本遺構に伴うものではないと考えている。

まとめ

本遺構の明確な所属時期は不明であるが、掘り込み面や出土遺物などから、近世末から近代の所産と考えられる。

(鈴木)

遺構外出土遺物 (図184～191, 写真250～259)

本遺跡から出土した遺構外出土遺物は、縄文土器1個体、弥生土器片2,614点、石器類151点、土師器片796点、須恵器片255点、陶磁器片312点、銭貨4点である。抽出して図示したものは縄文土器1個体、弥生土器片55点、石器類9点、土師器片6点、須恵器片12点、陶器片1点、銭貨5点である。出土した遺物はLⅢから土師器・須恵器が、LⅣから弥生土器・石器が多く出土している。以下、土器・石器の順で説明を行う。

縄文土器 縄文土器は調査区東側奥(AV56グリッド)から出土しており、この近辺では溝内からも数点出土している。184-1は胴部上半に最大径をもつ深鉢である。内外面ともに二次加熱を受け摩滅が著しいため詳細は不明であるが、口縁部付近に横走沈線を巡らし、胴部には縦位への沈線が施されている。遺存する法量は復元口径21cm、復元胴部最大径26cm、復元底径12cm、推定器高31.2cmを測り、器形や文様構成などから縄文後期の所産(網取式期)と考えられる。

弥生土器 遺構外から出土した弥生土器(184-2～12・185～187)は第Ⅱ群土器を主体とし、第Ⅲ群土器を僅かに含む。全体の器形を把握できる資料は少なく、土器の大半は斜面下位に流れ込ん

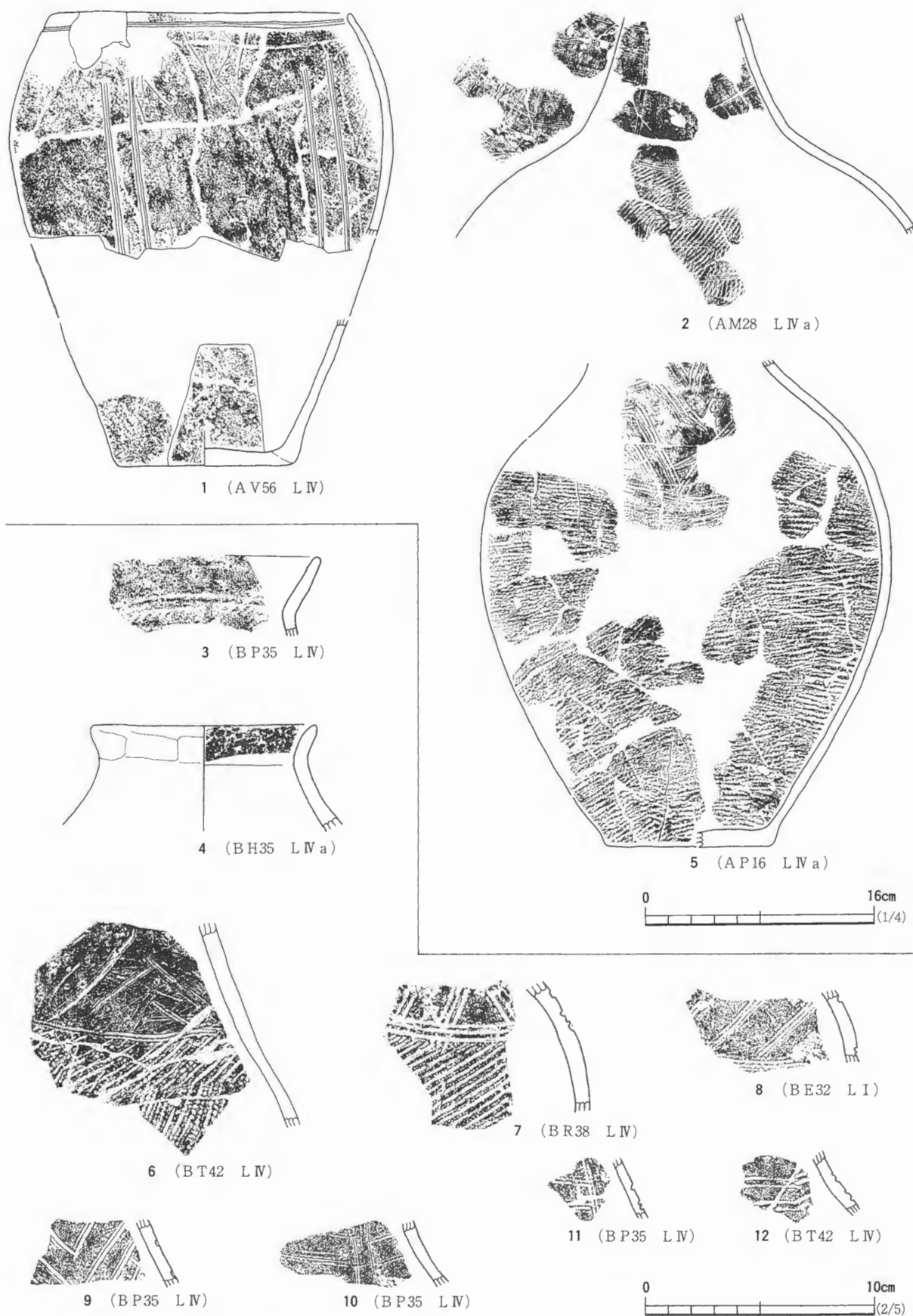


図184 遺構外出土縄文土器・弥生土器（1）

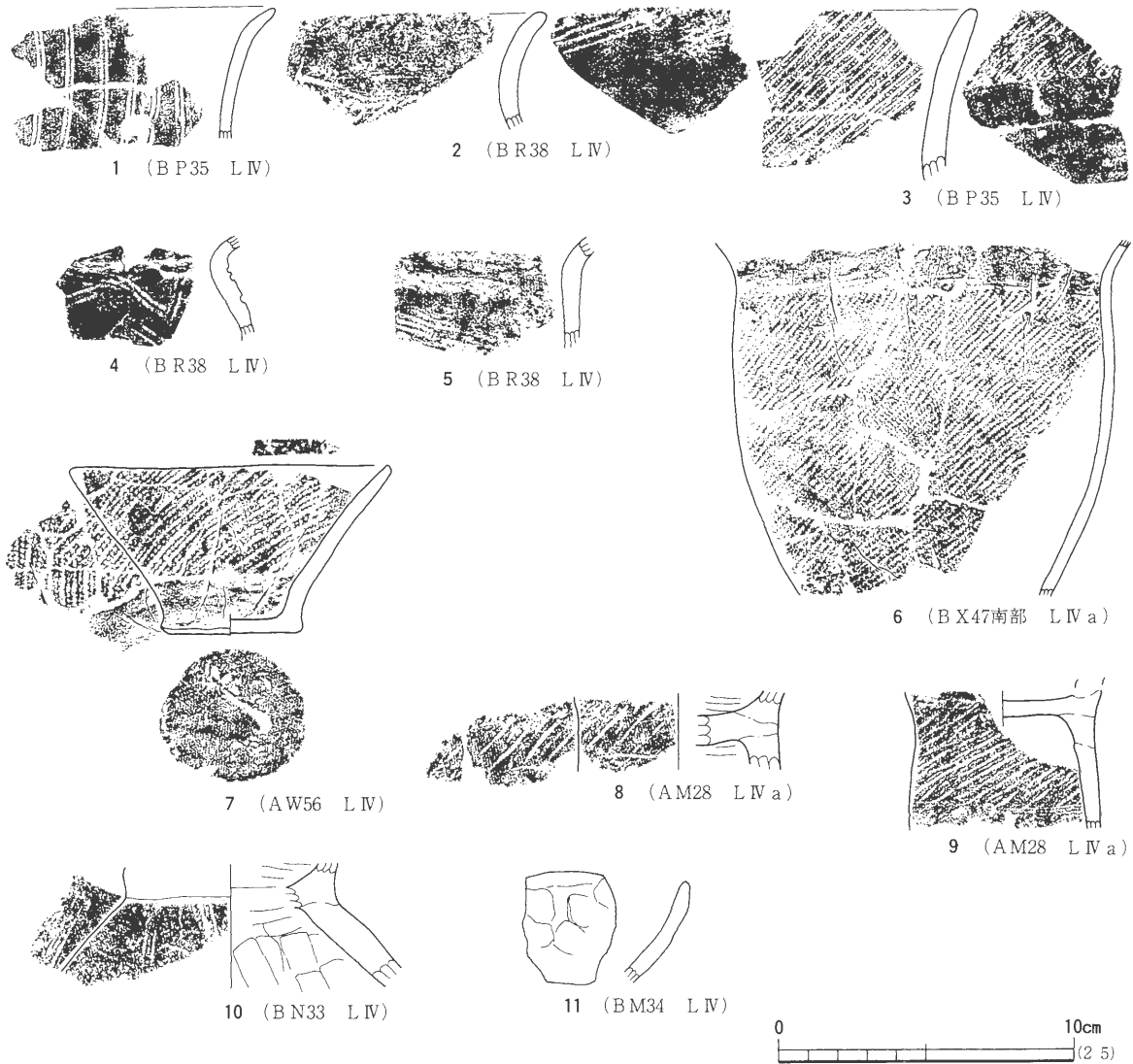


図185 遺構外出土弥生土器（2）

だLIVからの出土である。

1類土器 壺形土器で、184-2～12が該当する。9・12は第Ⅲ群土器、他は第Ⅱ群土器と考えられる。主幹文様構成は頸部から胴部上半に認められ、2・10・11の頸部には束線具による格子文、5・6・8には重層山形文が描画されている。7は断面凹状の太めの工具によって3本同時による重層山形文が描かれている。9・12は2本同時施文によって9が深さが異なる太めの工具で山形状に、12が小連弧状に描画。4は比較的器厚が厚く、広口の小型短頸壺と思われる。地文には2が直前段多条、7が附加条、3・5・6が斜縄文を回転施文し、3の頸部には原体末端部の結節が認められる。器厚は平均して6mm前後である。5は復元底径11.8cm、遺存器高33.5cmを測る。

2類土器 185-1～6は甕形土器の口頸部付近の破片資料である。器形的には中型のものが多い傾向にあるが、4・6は比較的器厚が薄手で小型のものである。口縁部の形態では短頸で短く「く」の字状に屈曲するもの(185-4・5)、短頸気味で緩やかに屈曲するもの(185-2・6)、長頸で緩やかに外反するもの(185-1・3)などがある。1の口縁部にはやや太めの工具によって2

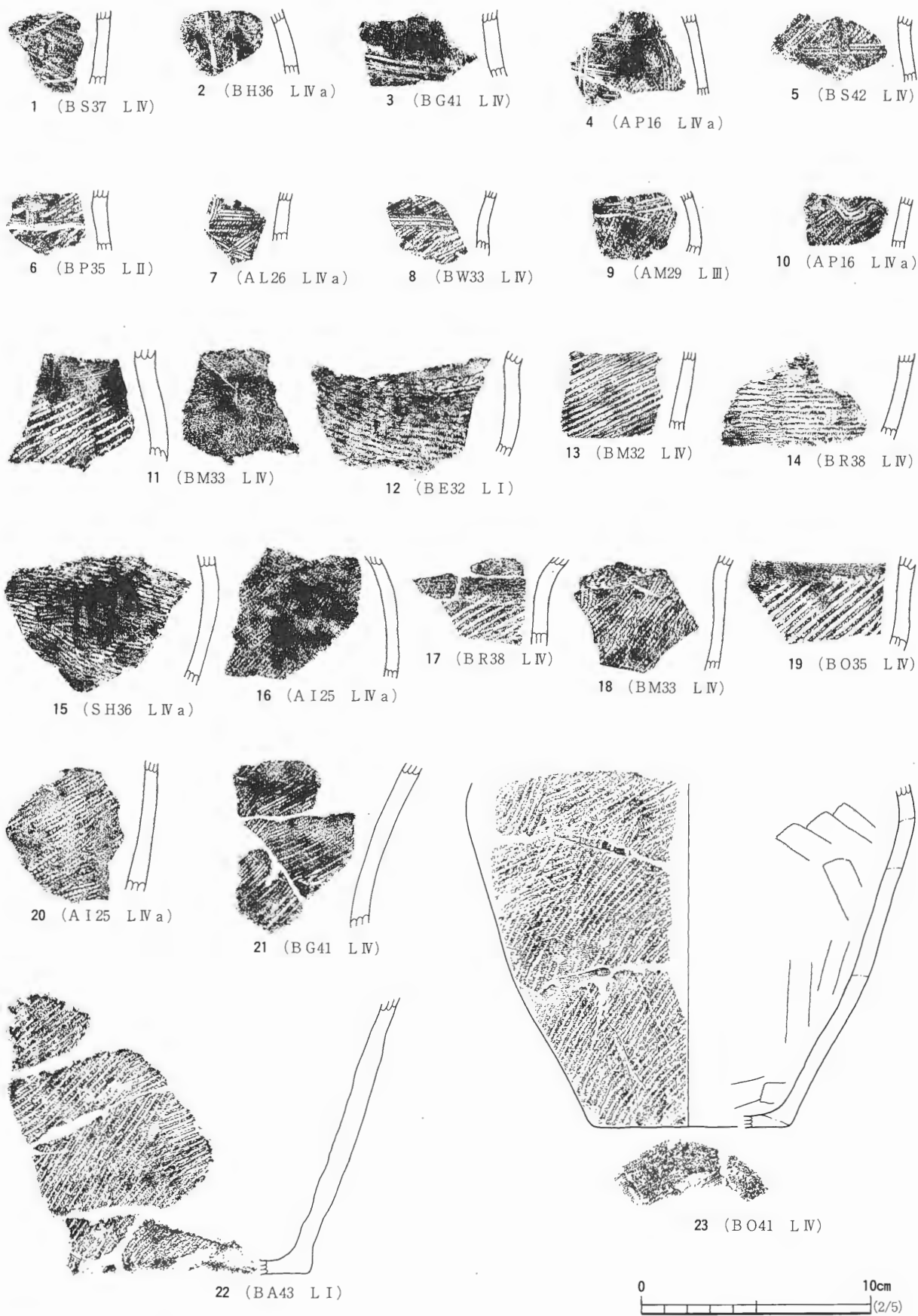


図186 遺構外出土弥生土器 (3)

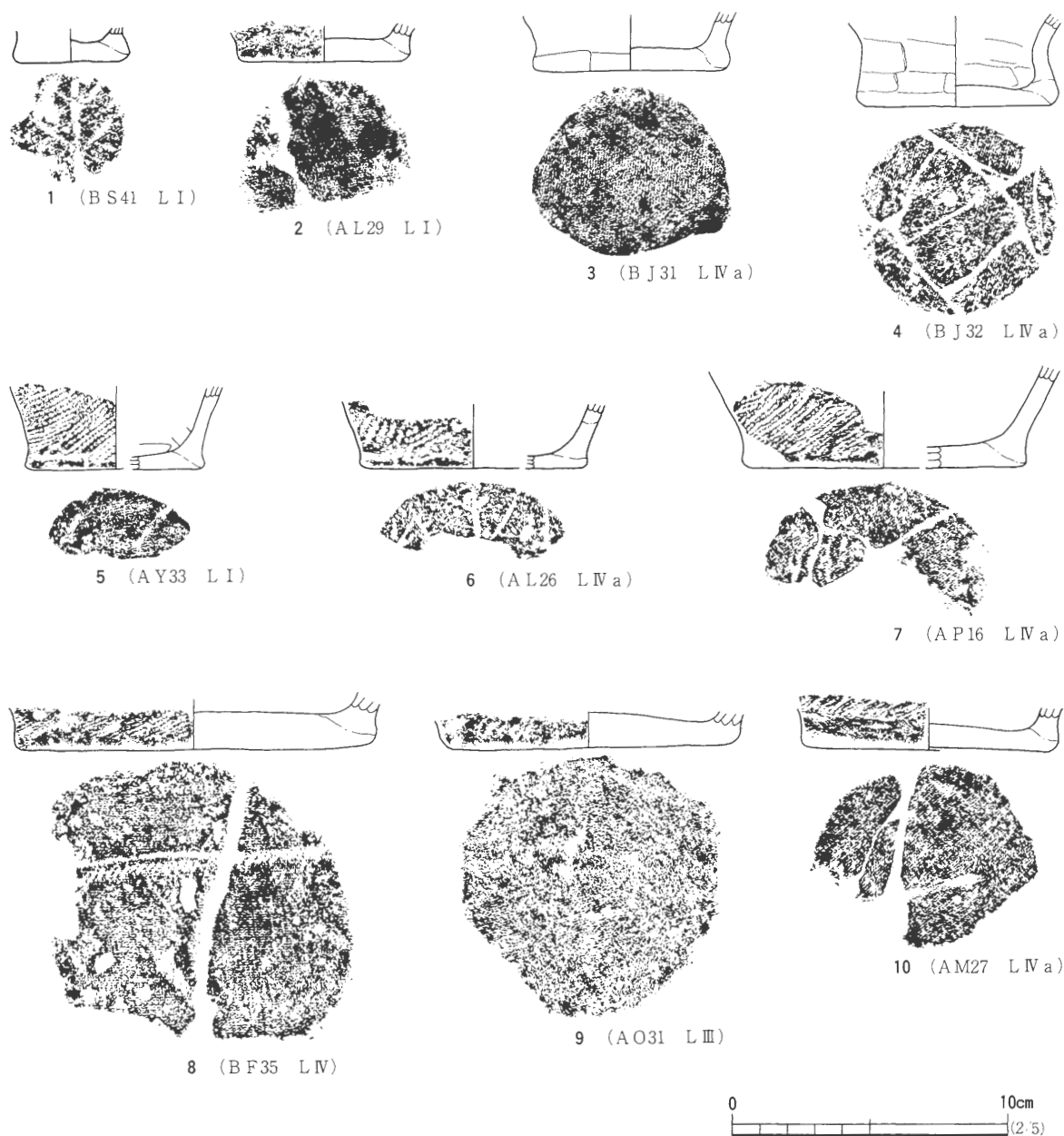


図187 遺構外出土弥生土器（4）

本同時施文が縦位へ施されている。4の頸部には束線具による山形文が描画されている。6の口縁部は無文となり、頸部下位に地文を施している。地文には直前段多条が施され、頸部には原体末端部の結節が認められる。2は摩滅が著しく不明であるが、2・3の口縁部内面には地文が回転施文されている。3の内面には若干の朱色の付着物が認められる。

3類土器 185-7は鉢形土器のほぼ完形品である。出土数が極端に少なく、1点のみ図示した。7は底部から口縁部に向かって緩やかに外反する器形を呈し、胴部地文には附加条文が施文されている。口唇部には胴部地文と同一原体が施文され、胴部下位にはナデ調整が加えられている。内面の器面調整は比較的整麗で、底部には平織り状の布圧痕が観察される。法量は口径10.6cm、底径4.8cm、器高5.8cmを測る。

4 類土器 185-8・9は高杯で、底部から脚部にかけての資料である。内面には丁寧なナデ調整が加えられており、地文には判然とし得ないが附加条の原体を回転施文している。

5 類土器 185-10は蓋形土器の破片資料と思われる。地文には2本同時施文による工具によって縦位に描画されており、線間幅は2mm程である。内面の器面調整は丁寧なナデ・ミガキ調整が施されている。器厚は1cm程でやや厚く、焼成は他の器種と比してやや良好である。

6 類土器 185-11は手捏土器の破片資料である。器面には指頭圧痕が顕著に認められ、器厚は約5mmでやや薄い。

7 類土器 186は明確に器種選別できない胴部破片資料である。1は先端が尖った1本工具によって渦文が描画され、2は断面凹状の軟質の工具によって沈線文が施されている。4は束線具によって格子文、10は小波状文が施されており、3～6・8・9・11には横位の区画文が描画されている。3の内面は他と比して丁寧なミガキ調整が認められ、22の内面は摩滅が著しい。地文には判然としないものもあるが1・6～11・16～23は直前段多条かもしくは附加条文、12～15が0段多条文を回転施文したものと思われる。3・16・17・19の外面には煤状の付着物が認められ、8～10は器厚がやや薄く形態的に小型を呈する。23は復元底径9.6cm、遺存器高15cmを測る。

8 類土器 187は底部資料である。遺存状態の良い10点について図示した。法量的には1～5などは3～7cm代と小型、7～10は9～13cm代と大型に属する。形態的には底部側面が突出し、直線的に外傾するものが多く、4のように「く」字状に屈曲するものもある。胴部の地文には5・7・8・10が附加条文かもしくは直前段多条、6が斜縄文を回転施文し、1・3・9は二次加熱を受け摩滅が著しい。10の胴部下位には原体末端部の結節が認められる。底面は平織り状の布圧痕が観察されるもの(3・8・10)、木葉痕が観察されるもの(1・4～6)、ナデ状の調整が施されているもの(7・9)、平織り状の布圧痕とナデ状の調整が観察されるもの(2)がある。

土師器 土師器は824片出土しており、遺存状態が良い7点を図示した。188-1は壺形土器の完形品である。丸味をもった胴部やや上位に最大径を持ち、頸部が強く屈曲し、直線的に外反する器形である。外面の口縁部には横位へのナデ調整、胴部にはミガキ・ナデ調整、胴部下位にはケズリ調整が施されている。法量は口径9.3cm、胴部最大径15cm、器高15.4cmを測る。器形や調整技法などから5世紀後半頃(引田式)の所産と考えられる。3・4は土師器杯の破片資料である。188-3・4共に底部回転糸切り後、体部下端にヘラケズリ再調整が施されている。

188-5～7はロクロ整形の土師器甕である。5は頸部が短く「く」の字状に屈曲し、口縁部付近でやや内湾気味に立ち上がる器形を呈する。復元口径20.2cmを測る。6・7は胴部下半から底部遺存の小型の土師器甕で、6の底部は回転ヘラ切り、7は回転糸切りである。

須恵器 188-8～15、189-1～4が該当する。8～10は須恵器杯で、8・9はほぼ完形品である。8は底部回転糸切り後、体部下端にヘラケズリ再調整が施され、内外面に火樨が認められる。9は底部回転糸切り無調整、10は底部ヘラ切り後、体部下端から底部にかけてヘラケズリ再調整が施されている。法量は8が復元口径14.6cm、底径7.2cm、器高4.2cm、9が復元口径13.6cm、底径

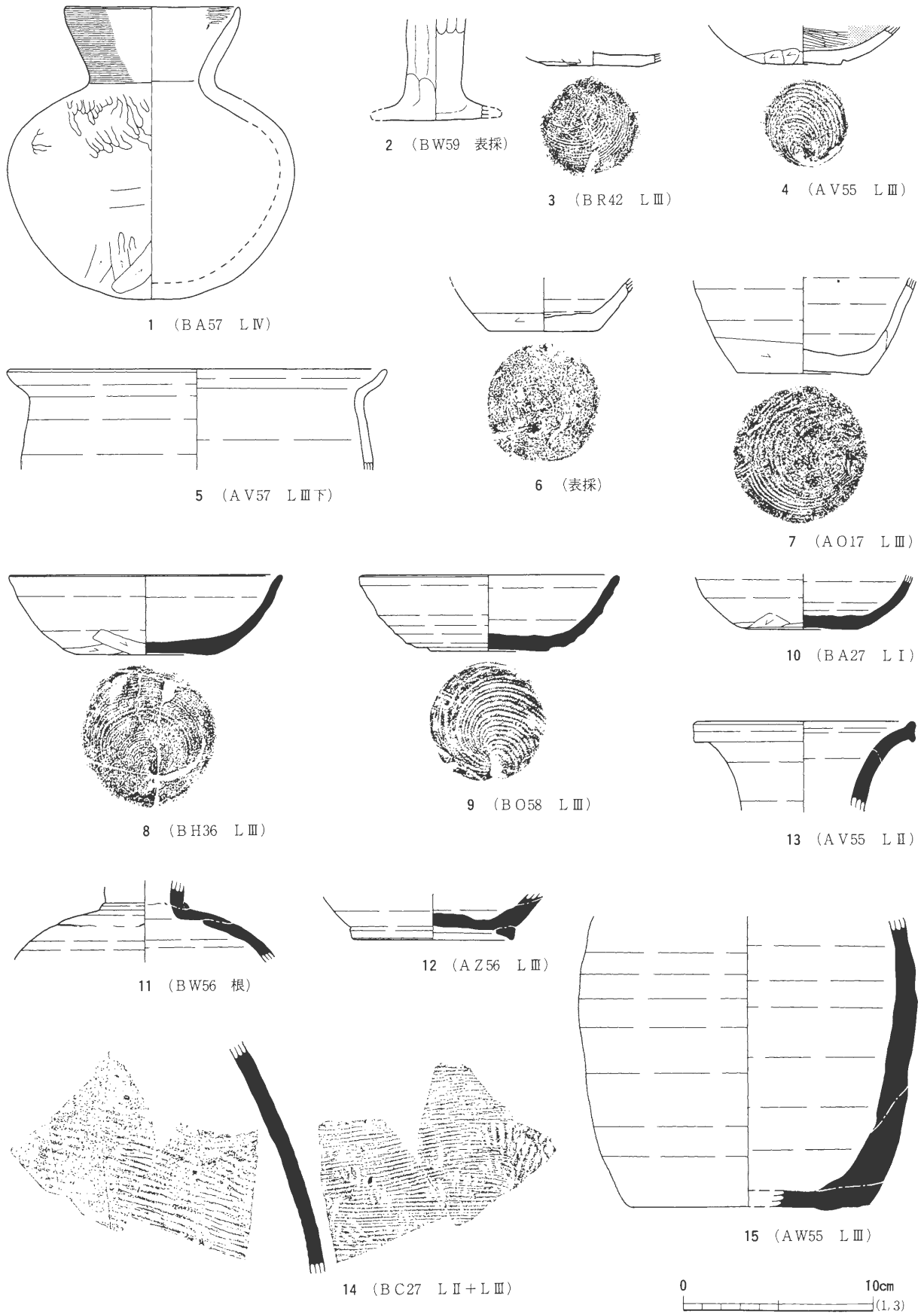


図188 遺構外出土土師器・須恵器・陶器

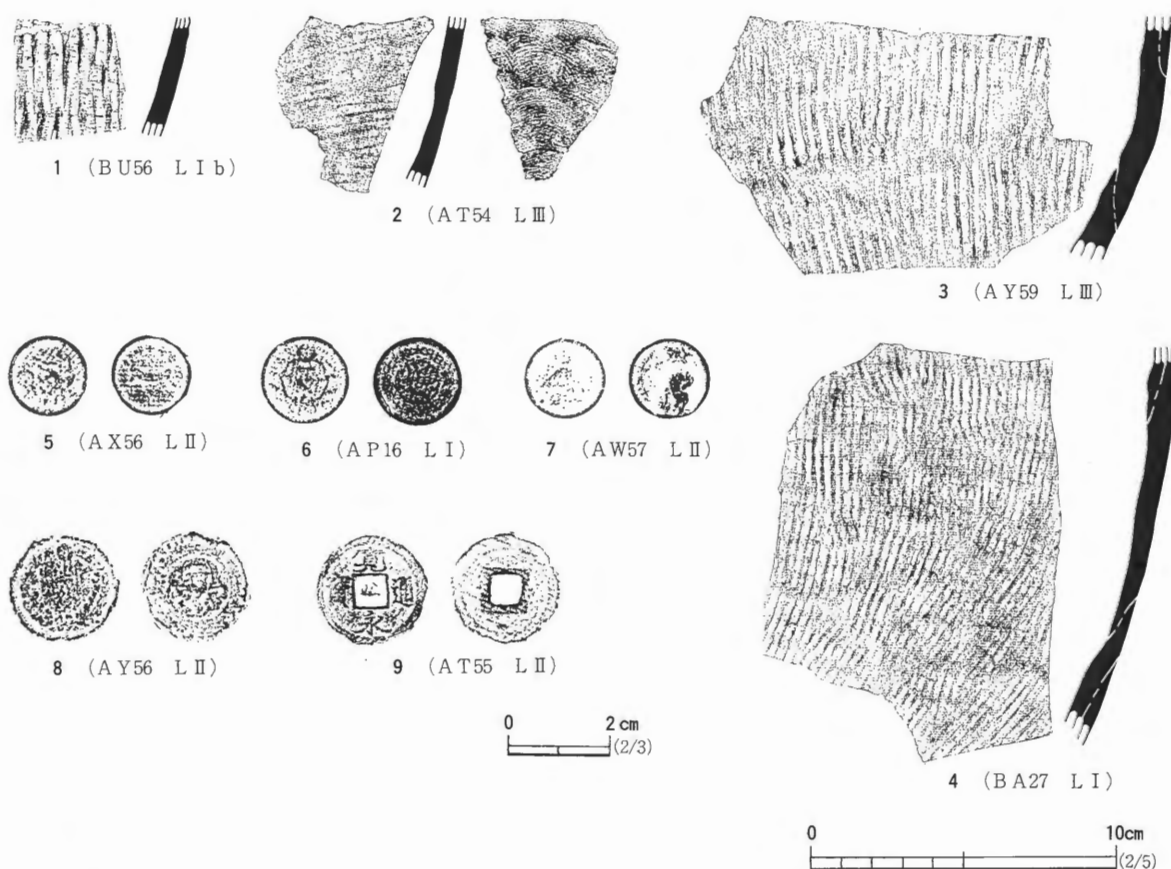


図189 遺構外出土須恵器・銭貨

6.3cm, 器高4cmを測る。口径／底径比は8が0.53, 9が0.48である。

11・13は長頸瓶の口頸部片である。11の頸部には二段のリング状の凸帯が認められ、会津若松市大戸窯産と考えられる。13は長頸瓶の口縁部片で、口端部が上下に摘み出されている。12は瓶類の底部で、復元底径8.6cmを測る。188-15は須恵器壺・甕類で、ロクロ調整で、底部に焼き膨らみと熔着痕が観察される。底径12.6cm, 遺存器高15.2cmを測る。188-14, 189-1～4は須恵器大甕の体部片資料で、外面に平行タタキ, 188-14の内面にはナデ調整, 2にアテ具痕がある。

陶器 188-2は陶器窯道具で、トチンである。近世以降の所産である。

銭貨 189-5～9がある。5～7は一銭アルミニウム貨で、5の図案は表面に桐章・海波・八咫鏡, 裏面に八咫烏・瑞雲, 7の図案は表面に富士山, 裏面に「一」があらわれている。5は昭和15年(昭和13～15年), 7は昭和17年(昭和16～18)製造のものである。6の図案は摩滅しており判読できないが、裏面に「一」が認められることから、7と同類のものと考えられる。8は劣化や摩滅が著しいが表面に竜図, 裏面に「半□」の字が認められることから半銭銅貨(明治6～10, 12～21)と思われる。9は寛永通寶で、裏面は無文である。画一性が強く、文字がやや細くて小さいことから寛永期以後(新寛永)のものと考えられる。出土した銭貨は調査区北側や東側奥近辺からのものが大半であり、明確に伴う遺構は認められなかったが、この地区には明治から昭和40年代頃まで常磐セメントにより採掘された粘土採掘坑が散在している。

石器 出土した石器・剥片類は151点である。そのうち、遺存状態が良く図示できた石器は9点である。内訳は扁平片刃石斧1点、打製石器3点、敲打器1点、砥石4点である。剥片は101点、石核は41点が出土しているが図示しなかった。剥片・石核の石質はともに流紋岩が多くを占め、この中には火熱による剥離痕や赤褐色の火熱痕が観察されるものもある。

扁平片刃石斧 190-1は刃部に最大幅を持ち、両側縁から基部にかけて一次調整痕が残っている。比較的器厚が薄く、敲打や研磨による二次調整や使用痕等は認められない。法量は最大長6.9cm,

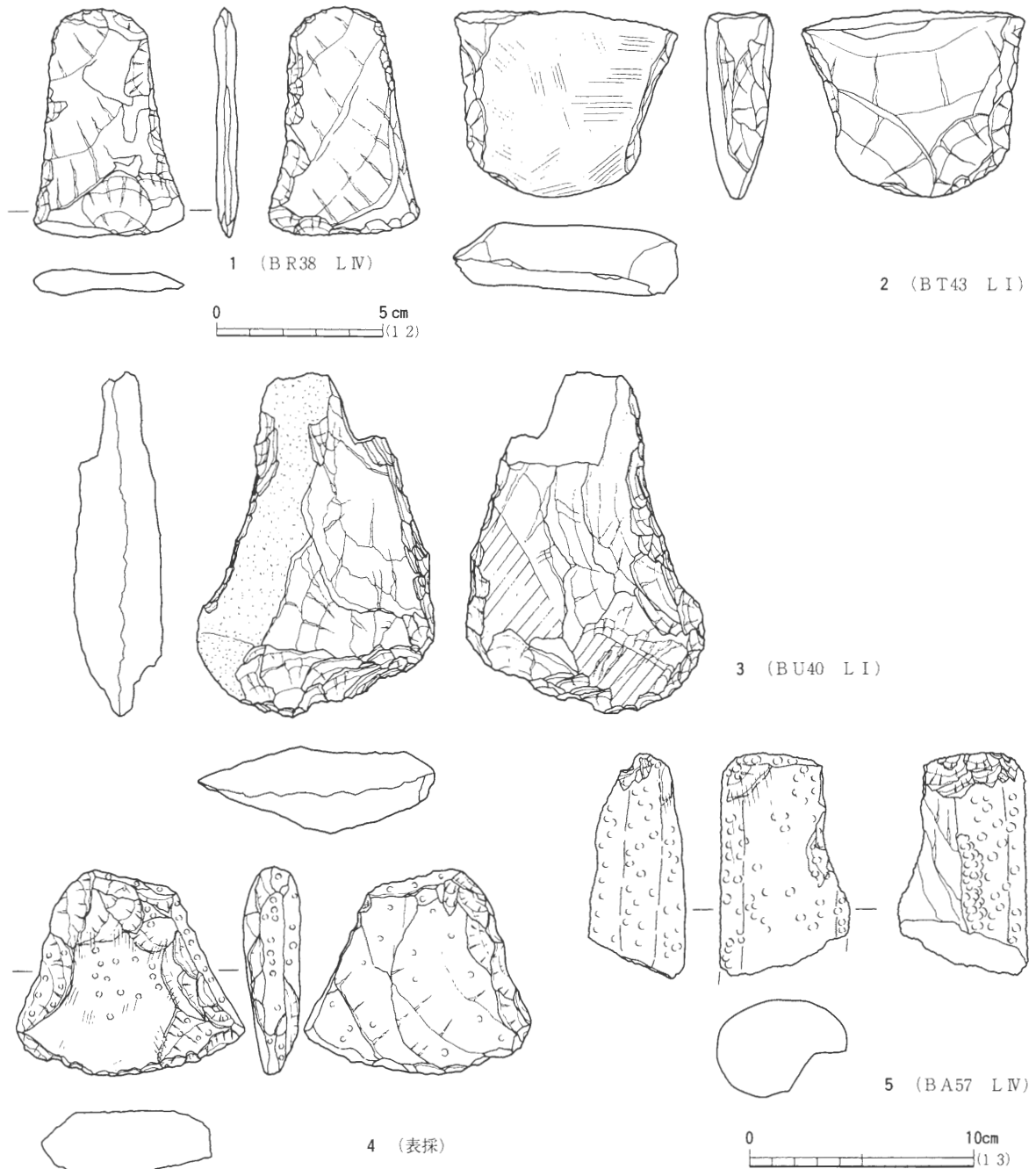


図190 遺構外出土石器 (1)

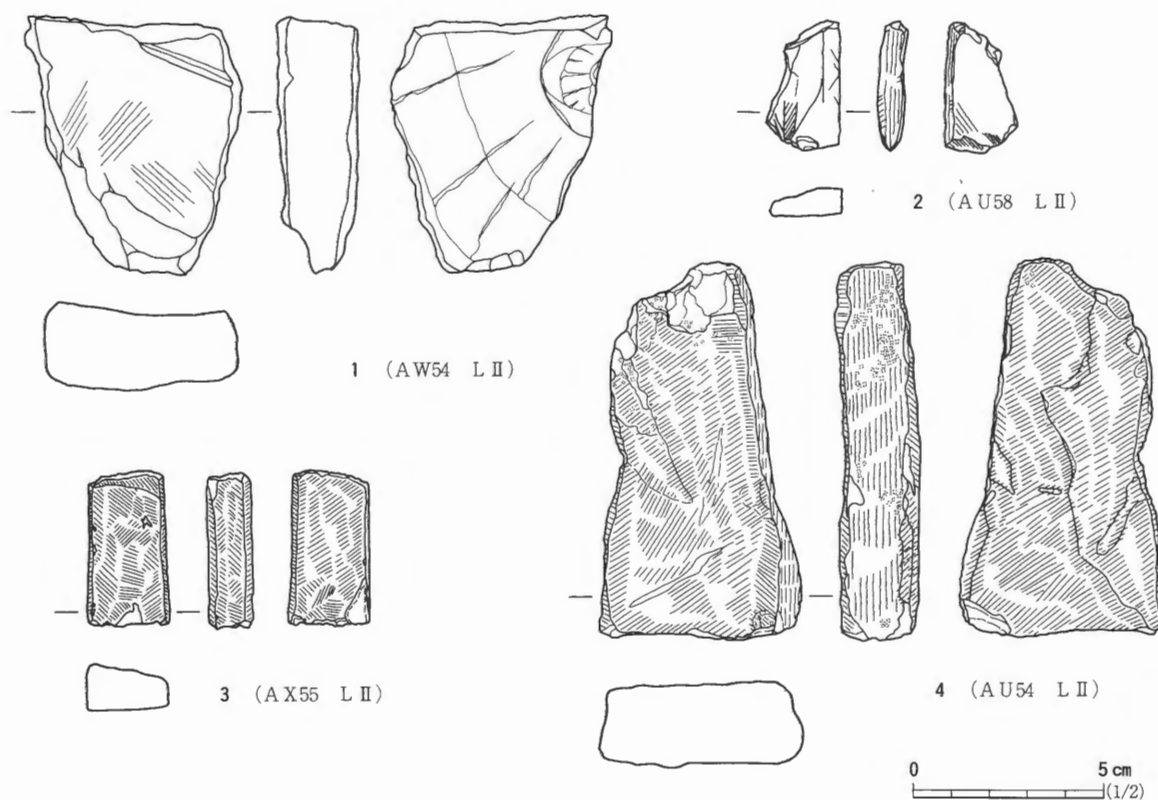


図191 遺構外出土石器（2）

最大幅4.5cm，基部幅2.9cm，厚さ0.7cmを測る。石質は泥岩である。

両刃石器 190-4は，一次整形後，側縁部や背面に敲打や研磨による二次調整が施されている。二次調整後の剥離調整が一部認められることから転用品の可能性はある。

打製石器 190-2・3が該当する。全て素材剥片の側縁部に一次整形を施しているもので，2の背面には研磨，3には敲打や研磨による二次調整や使用痕等は認められない。

敲打器 190-5は縦長の素材剥片の縁辺部に剥離調整が施されているもので，両側縁のほぼ中央には2つの抉り部が作出されている。背面には縁辺部の剥離調整以前の弱い研磨痕が認められ，器形的に太型蛤刃石斧などから叩き石へ転用された可能性がある。遺存する法量は最大長10.0cm，最大幅5.8cm，厚さ4.3cmを測り，石質は緑色片岩である。

砥石 191-1～4が該当する。全面に顕著な研磨痕が認められる欠損品で，2・3は小型，1・4はやや大型に属する。研磨痕は側縁部と背腹面がほぼ直交もしくは斜行するように認められる。遺存する法量は3が最大長4.1cm，最大幅2.2cm，厚さ1.2cm，重量18g，4が最大長10.0cm，最大幅5.4cm，厚さ2.2cm，重量138gを測る。石質は1・4が細粒砂岩，2が泥岩，3が流紋岩である。

（井）

試掘調査出土遺物 (図192・193)

平成5年12月の試掘調査で出土した弥生時代の遺物について、192・193に掲載した。これは既に、『常磐自動車道遺跡分布調査報告3』(大越ほか;1994)に掲載済みである。出土トレンチから本調査で検出された遺構と対比すると、1・2・4・6号遺物包含層からの出土遺物が主となる。今回、参考に掲載することとした。以下、遺物の種別毎に略述する。

弥生土器 192-1~3はⅡ群土器1類で、壺形土器の頸部片である。192-1はb種と考えられ、2本同時の平行沈線文で、山形文を描いている。192-2はa種と考えられ、5本同時の平行沈線文で同心円状の渦巻文を描いている。192-3はc種と考えられ、2本同時の平行沈線文で格子文を描いている。192-4は2類A2で甕形土器の口縁部である。口縁端部まで縄文が押捺されている。

192-5は2類B3と考えられ、甕形土器の頸部である。縄文の地文に重ねて、束線具でe種の縦線文と頸部を区画する横線文が描かれている。192-6は2類B3と考えられる甕形土器の頸部片である。d種と考えられる波状文が縦位に束線具で描かれている。192-7は2類B1と考えられる甕形土器で、頸部に平行沈線で文様が描かれている。文様構成は不明である。

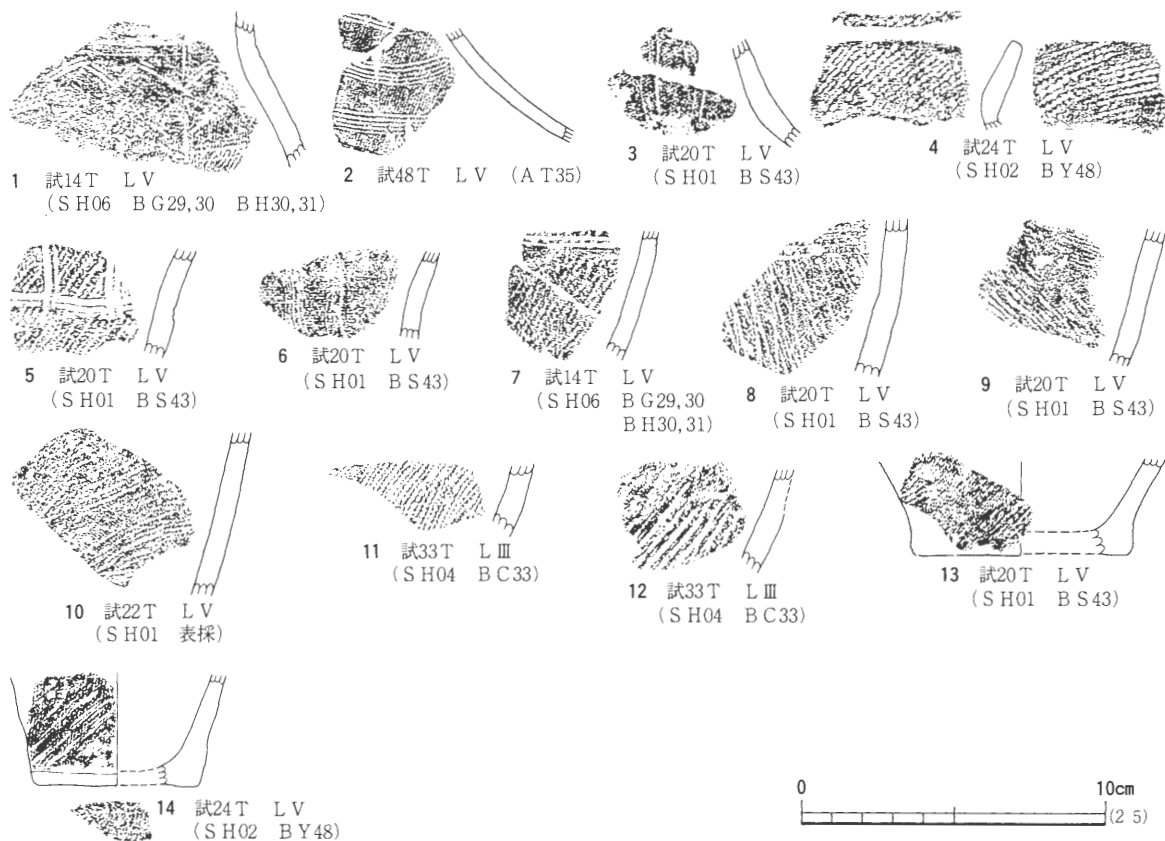


図192 試掘調査出土弥生土器

192-8~12は7類であり、地文のみが施文されている胴部資料である。壺形土器ないしは甕形土器と考えられるが、断定はできない。192-13~14は8類の底部資料であり、壺形土器・甕形土器ないしは蓋形土器の可能性も検討する必要がある。

石器 193-1は太型蛤刃石斧で、腹縁・側縁・刃部には敲打調整痕や研磨調整痕が明瞭に観察できる。基部と刃部の一部は使用のためか、欠損している。石質はヒン岩である。193-2は扁平片刃石斧で、全面に丁寧な研磨調整痕が観察できる。形態は撥形を呈し、刃部と基部の一部は欠損している。石質はヒン岩である。

193-3は扁平片刃石斧で、基部を大きく欠損している。撥形を呈する形態で、刃部の偏平度は

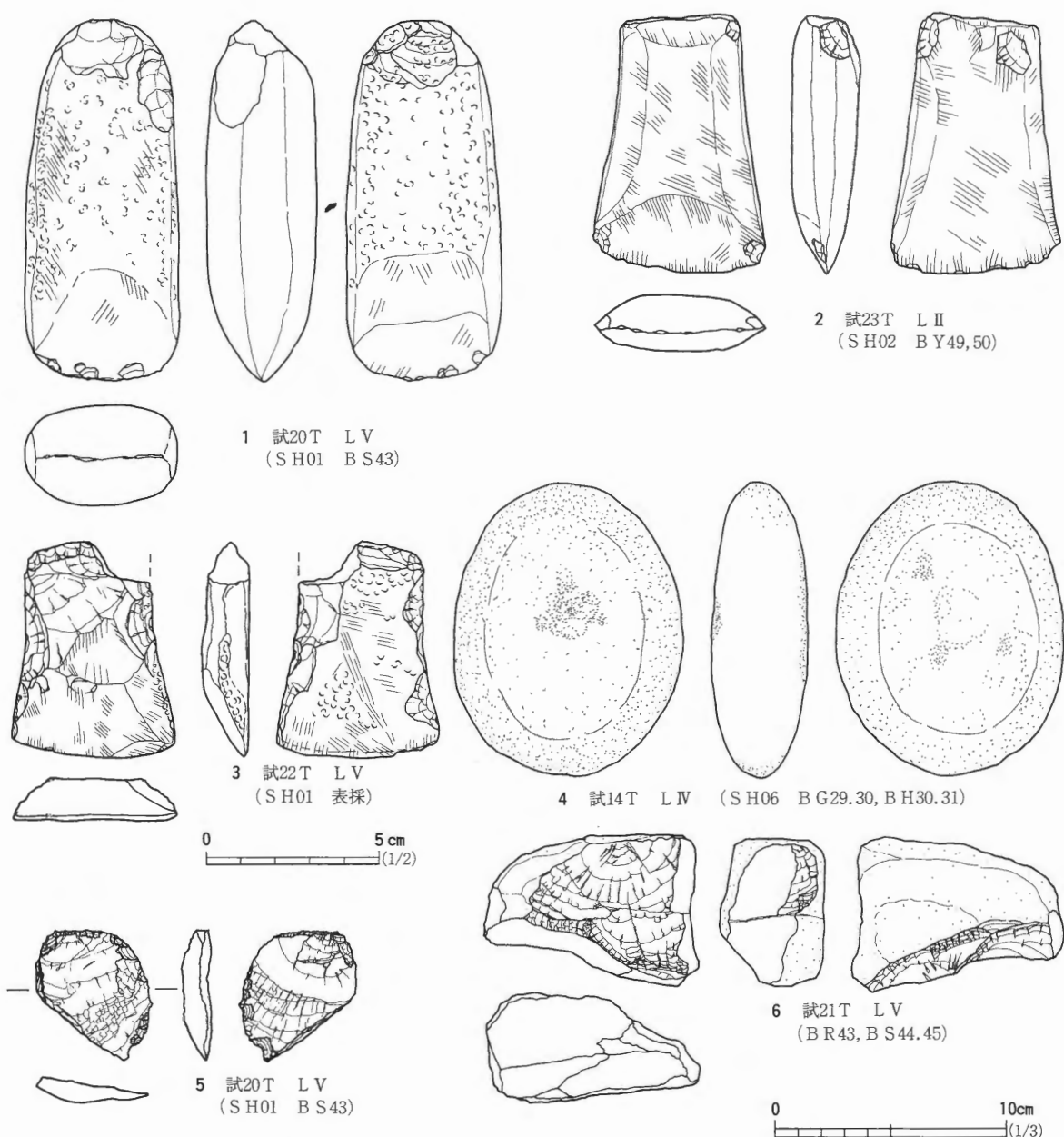


図193 試掘調査出土石器

強い。基部と側縁には剥離調整が観察でき、器面には2次調整痕と考えられる敲打痕が部分的に腹部に観察される。最終調整と考えられる研磨痕も刃部・腹部に観察される。石質は安山岩である。193-4は叩き石・磨石で、偏平な楕円形の自然礫の腹部中央に、叩いた痕跡が観察できる。全面が磨られてツルツルである。石質は細粒砂岩である。193-5は剥片石器で、剥離面を残す下縁に細かい剥離が部分的に加えられ、刃部として機能したと考えられる。石質は流紋岩である。193-6は石核と考えられ、大きな剥離面が2面確認でき、他は自然面を残す。石質は流紋岩である。

(井)

第3章 考察

第1節 弥生時代の遺構と遺物

今回の調査で弥生時代の所産の可能性が高い遺構及び遺物は、丘陵頂部の縁辺やそれよりも一段下がった中腹からその斜面にかけて集中して検出されている。本編の第2章第2～10節で述べてきたように、該期に属する遺構は竪穴住居跡6軒(S I 03・05～07・11・16)，土坑5基(S K 03・10～13)，土器埋設遺構4基(S M 01～04)，遺物包含層6か所(S H 01～06)である。弥生時代の遺物は遺構内外から総数29,696点出土し、その大半が丘陵部斜面に形成されていた遺物包含層出土のものである。遺跡内で出土した弥生土器の85%以上が弥生時代中期末葉に比定されるため、出土した石器の大半も該期の所産と判断している。ここでは、第2章遺構と遺物の冒頭で前述した土器分類基準に則しながら本遺跡における弥生時代中期末葉の特徴をまとめ、若干の考察を試みたい。

1. 弥生時代の遺物について

遺構内外から出土した遺物は、弥生土器27,713点、石器類1,983点で、遺物包含層からの出土数が約80%を占めている。これらの遺物の大部分は、弥生時代中期末葉に属するものであり、石器類を含め非常に一括性の高い資料である。ここでは、比較的まとまって出土した遺物包含層を中心に、特に器種組成に主眼を置きながら本遺跡における弥生土器・石器についてまとめていく。

弥生土器

本遺跡から出土した弥生土器は、第2章遺構と遺物の冒頭で述べた通り、大きくは4群に大別することができる。これら大別した第Ⅰ～Ⅳ群土器のうち、本遺跡で最も多く出土しているのが第Ⅱ群土器(天神原式)であり、弥生土器出土量の80%以上を占めている。第Ⅰ～Ⅳ群土器の器種組成では、壺(1類)・甕(2類)・鉢(3類)・高杯(4類)・蓋(5類)・手捏土器(6類)等が認められ、胴部(7類)や底部(8類)資料を除けば壺・甕が圧倒的に多い傾向にある。出土した土器の大半は破片資料であるため、全体の形状や明確な個体数は判断し得ないが、口縁部(約190点)や底部(約1,500点)など、ある程度器種識別ができたもの(1,081点)についてその比率をみると、壺が406点(37%)、甕が484点(45%)、鉢が31点(3%)、高杯が27点(2.5%)、蓋が128点(12%)、手捏土器が5点(0.5%)である。また、第Ⅰ～Ⅳ群土器は住居跡等の遺構の重複や遺物包含層等において層位的に分層して出土しているのではなく、全て混在して出土したものである。各包含層ごとの土器群及び器種組成の差異については図199に示した。調査区南側の南東向き斜面に形成されている1号遺物包含層からは第Ⅰ～Ⅲ群土器が出土し、3類(鉢)が欠落、2号遺物包含層からは全ての土器群が確認され、4類(高杯)が欠落している。調査区ほぼ中央の丘陵先端付近に形成されていた5号遺物包含層からは第Ⅱ・Ⅲ群土器が出土し、3・4・6類が欠落している。丘陵北側の南西向き斜面には3・

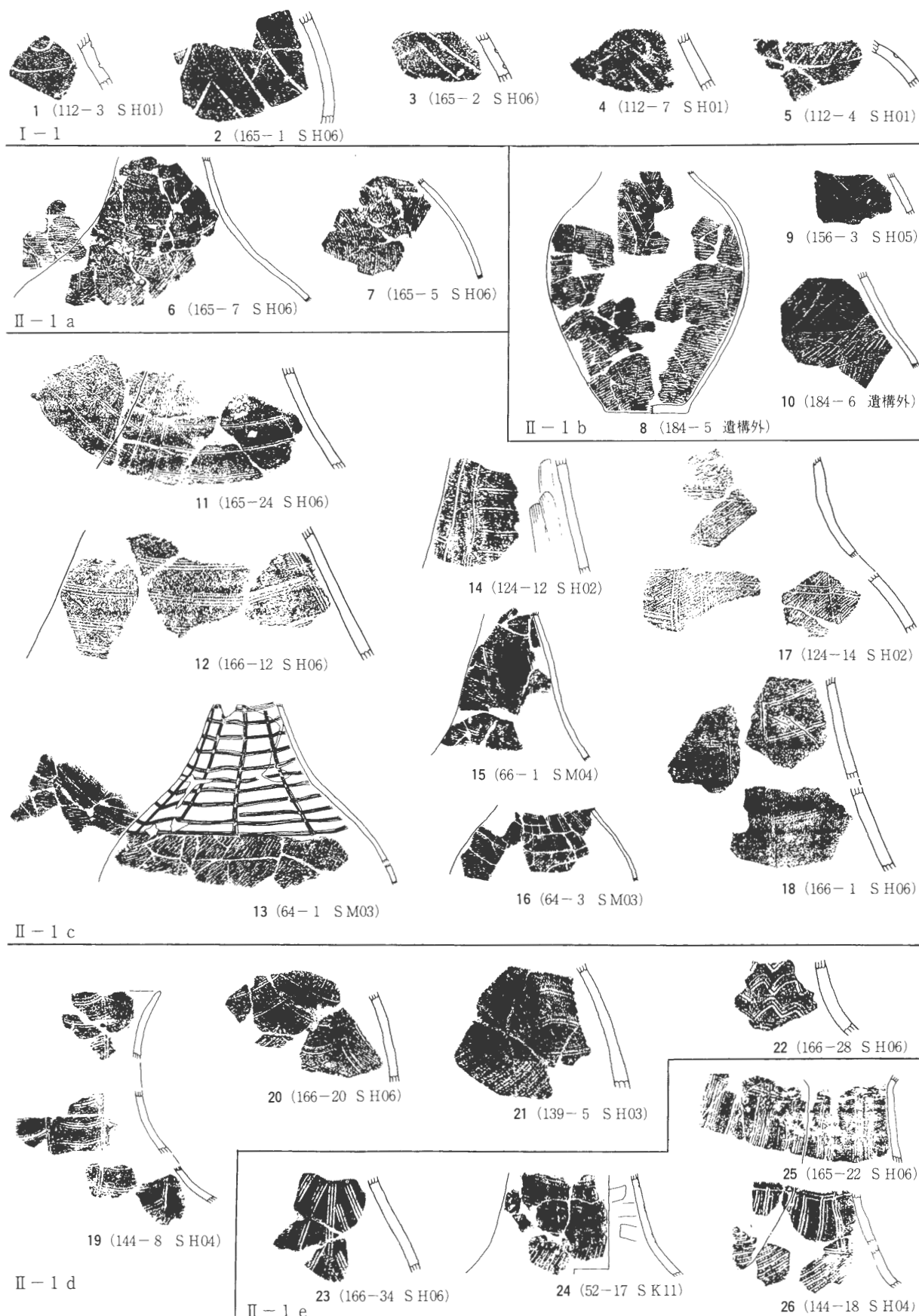


図194 壺形土器 (1)

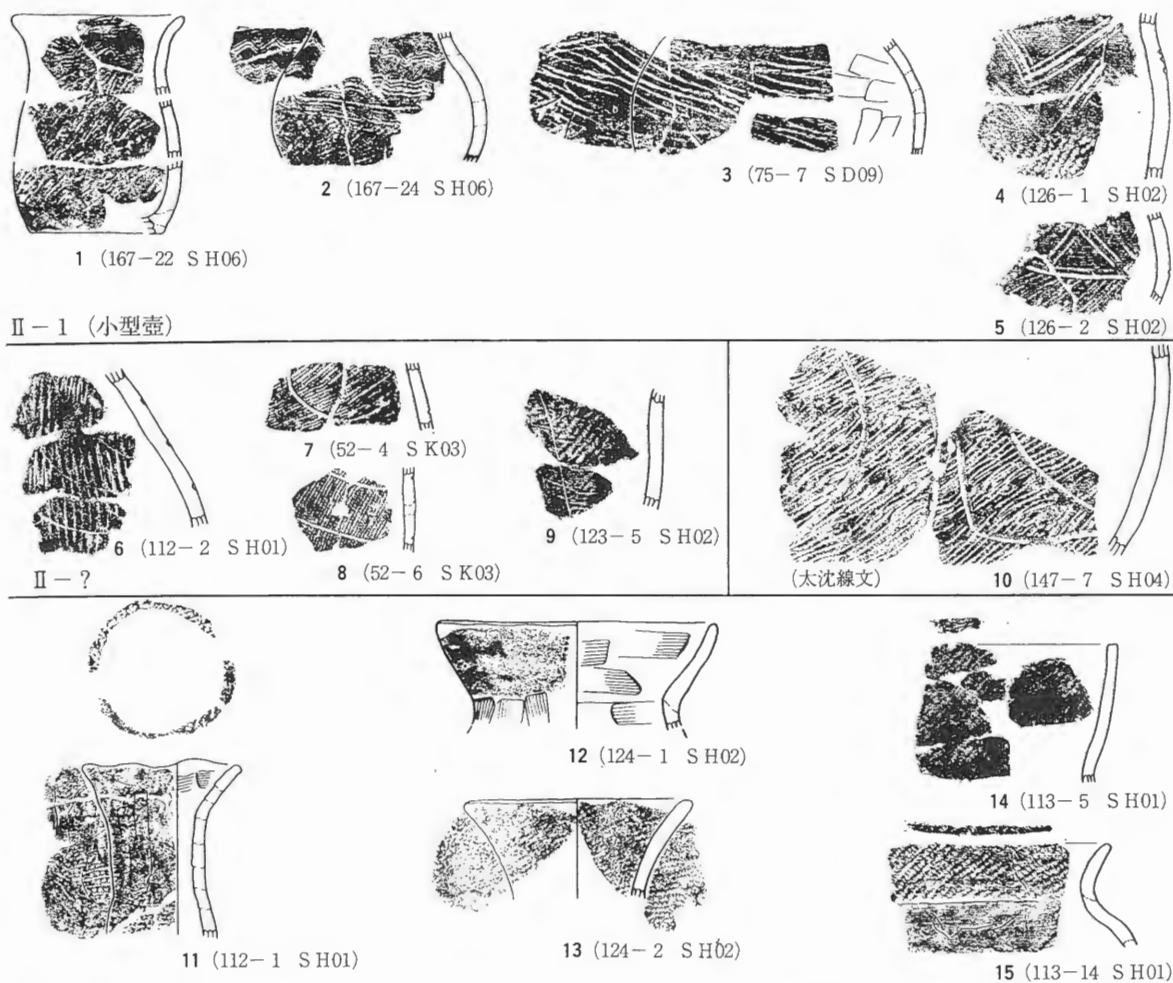


図195 壺形土器 (2)

※縮尺は任意

4・6号遺物包含層が形成されており、3号遺物包含層からは第Ⅱ群土器のみが少数出土し、3・4・6類が欠落、4号遺物包含層からは第Ⅱ～Ⅳ群土器が出土し、3・6類が欠落、6号遺物包含層からは第Ⅰ～Ⅲ群土器が出土し、6類が欠落している。以下では、遺跡内及び全包含層から主体的に出土した第Ⅱ群土器を中心に各群の特徴をまとめ、土器様相が類似する浜通り地域等の資料と比較検討を加える。

〔第Ⅰ群土器〕

比較的先細の工具により、胴部上半から口縁部にかけて沈線で描出されているもので、関東の足洗1・2式に比定される。本遺跡からの出土数は極端に少なく、1・2・6号遺物包含層から18点出土しているにすぎない。器種では1類(壺)のみ判断でき、代表的なものを図194に示した。

1類 壺形土器は全て胴部上半から口頸部にかけての破片資料(194-1～5, 165-3)である。施文技法・文様等から194-1・2が足洗1式、194-3～5が足洗2式に比定されるものと思われる。194-1は篋状工具によって単線渦文、194-2は2本同時施文による円文・渦文が描画され、線間幅が比較的広い。194-3～5は194-1・2より線間幅が狭く、三角形状の文様が描画されている。いずれも沈線の断面形はV字状を呈する。

[第Ⅱ群土器]

壺・甕形土器の主幹文様構成は口縁部から胴部上半に集約され、地文地に多条沈線及び軟質の束線具によって平行沈線文が描画されるもので、天神原式に比定されるものである。本遺跡では本群土器の出土数が最も多く、全体の約85%を占めている。1～6類の各器種が認められ、代表的なものを図194～198に示した。破片資料が多く、全体の形状を把握できるものはほとんどない。

1類 壺形土器は形態的に口径が小さく細長い頸部をもつもの(194-6・8・11-19・24-26, 195-11)が多くを占め、比較的口径が大きく幅広の口頸部文様帯をもつもの(195-14, 124-29, 125-8), 頸部が比較的短く、地文のみが施されるもの(195-15, 125-13, 144-16)など大きく3種類が認められる。いずれも胴部上位に最大径をもつものであり、口唇部や口縁部内面に同一原体で施文するものが多い。また、口縁部形態では短く外反する(A2)のものが多く、やや内湾気味・受口状となる(A1)もの(195-12・14)は極僅かの出土である。a～g種に分類した本類土器群の主幹文様帯は、横位の区画沈線や地文等によって口縁部文様帯・頸部文様帯・胴部文様帯に区分される。口縁部から胴部上半にかけては文様が施され、口縁部にはナデ調整等による無文帯や地文を施す場合が多く、頸部から胴部上半には先細の工具や束線具によって多条沈線を描画している場合が多い。頸部の主幹文様構成には束線具や多条沈線でc種(格子文・肋骨文)・d種(連弧文・波状文)・e種(縦位沈線文など)が施文されている。多条沈線(3本沈線)によって重菱文を描く124-15や、鋸歯状に縦の沈線を施す194-23, 124-21の施文技法はほとんどみられない。胴部文様帯は横走沈線によって明確に区画された胴部上半にa～e種、胴部下半にf種(地文)が施されている。胴部上半の文様にはc・d・e種が多く、a種(円文・渦文)やb種(山形文・三角形文・菱形文)は少ない傾向にある。これら胴部上半に描画される施文順序は、(縄文⇨)口縁部・頸部・胴部の区画横線文⇨a～e種文様であり、c種(格子文)の場合縦線が先行するものが多い。また、184-2は天神原遺跡第一号土器棺上方土器、第10号土器棺下方土器のように頸部の無文地と胴部上位の縄文地に束線具によって文様を施しているもので、希有の資料である。165-24は壺形土器の頸部に縦線区画文を施し(格子文)、その中に波状文を描画するものであるが、本例のような資料は伊勢林前遺跡(馬目; 1972: 1976)で僅かに知られる。胴部下半の施文原体には単軸絡条体・附加条・0段多条などが認められるが、附加条文の破片資料が多い点は特徴的である。また、口縁部外面や口唇部には胴部文様帯と同一原体で施文しているものも多いが、124-4のように口縁部内面に束線具による縦線文が施されたものは1点のみである。

この他に、1類土器としては195-1～5のような小型壺形土器がある。いずれも最大径が胴部下半にあり、下脹状の器形を呈する。大・中型の壺形土器の最大径が胴部上半にあるのとは顕著に異なり、資料の量的には僅かな出土である。文様は器面全体に地文を施したもの(195-1・3), 胴部上半に軟質の束線具で小波状文を施したもの(195-2), 胴部上半に深さの異なる多条沈線で三角文を施したもの(195-4・5)などがある。

2類 甕形土器は、形態的には中型のものが多く、小型のもの(196-2・15・17・19), 比較的

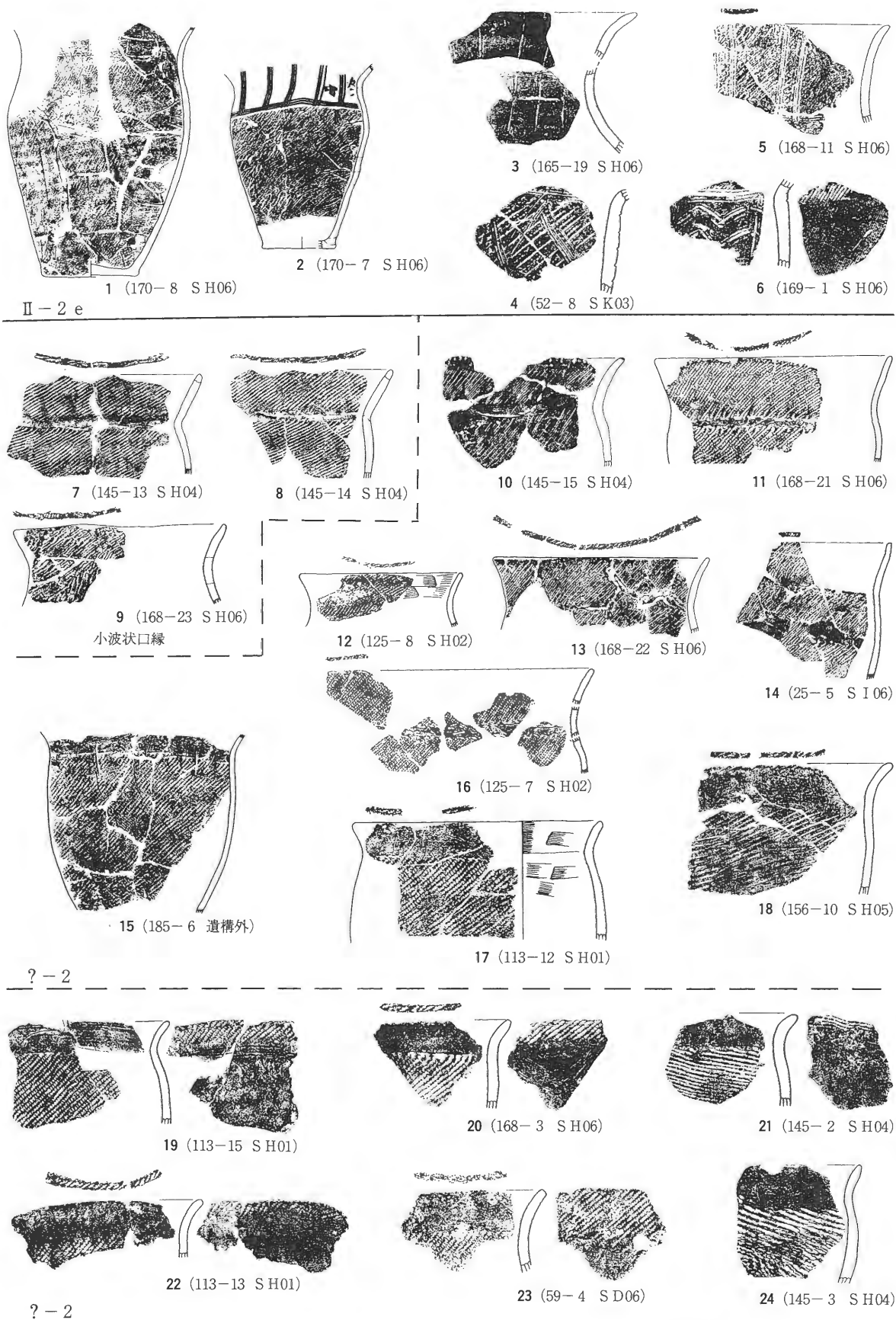


図196 甕形土器

※縮尺は任意

大型のもの(196-7~11・13・16)は少ない傾向にある。法量的には大半が口径13~20cm、底径5~12cmに集約され、器高が40cmを超えるものはないものと思われる。口縁部は大半が平縁で、口唇部に胴部文様帯と同一原体を施文しているものが多いが、196-7~9のような波状口縁を呈するものも僅かに認められる。口縁部形態は①短頸でやや内湾気味となるもの(A1)、②短頸で頸部の屈曲が強いもの(A2)、③長頸でやや内湾気味になるもの(B1)、④長頸で頸部の屈曲が強いもの(B2)、⑤長頸で頸部の屈曲が弱く、直線的になるもの(B3)など5形態が認められ、大きくは短頸のもの(①・②)より長頸のもの(⑤)が多い傾向にある。文様は長頸で幅広の口頸部を有する⑤に描画されている場合が多く、束線具や多条沈線によって縦線文や横線文が施文されている(196-1・2)。また、明確な文様帯を持たず、頸部の屈曲部に幅狭い無文部をもち、その上下に地文を施すもの(196-7~11・13・16)がある。口縁部を無文とし、頸部以下に地文を施す196-15・17~22・24などは頸部が短い②；A2に多く認められる。胴部文様は地文に縄文・撚糸文・附加条文・0段多条による斜縄文などを施しており、附加条文が多い傾向にある。この中には胴部器面に煤状の付着物が認められるもの(146-6~8、196-18)や8類同様に二次加熱を受け赤変しているものもある。

3類 鉢形土器は量的に少ないが数例認められた(197-1~5)。出土量が極端に少なく、器形的に不明な点も多いが、全体の形状がわかるものに197-1の小型の鉢がある。底部から直線的に外傾する器形を呈し、胴部には附加条文を施すが、全面には至らず、胴部下位は無文となっている。胴部下位を無文とする本例のような資料は1・2類には認められず、3類(鉢)や5類(蓋)に多く認められる傾向がある。8類(底部)の中には胴部下位を無文とする資料(198-27・29~32)も認められることから、これらについては本類の可能性も推測される。197-2・4は多条沈線によって横位に区画された沈線間に連続山形文を描画するもので、このような文様構成をとるものは他にない。4類(高杯；口縁部)や5類(蓋)の可能性もあるが、器形や調整技法、付着物等の有無により一応本類に含めた。197-3の胴部下位の資料も文様的に他器種には認められないもので、胴部下位の地文後に一巡する横走沈線を施すものである。

4類 高杯は3・5類同様量的に少ないものの、22点出土している。全て底部から脚部付近の破片資料のため、全体の形状を把握できるものはない。器形的に小型のもの(197-8・10、146-9)、中型のもの(197-6・9・12・13)、やや大型のもの(197-7・14・15)があり、裾部が大きく広がるものはない。文様は杯部と脚部の変曲部を境として地文が施される場合が多く、束線具による横走区画沈線(197-6~8)や、三角文(197-9)・波状文(197-10)を施すものもある。

5類 蓋と判断できたのは128点で、3・4・6類同様量的に少ない資料である。全体の形状がある程度復元できたものに197-19~24があるが、他は口縁部資料や摘み部から器種を判断した。197-19・20は緩やかな末広がりとなり、上部が直線的に立ち上がる器形を呈する。文様構成は共に束線具によって格子文を描画するが、197-19の方が太い工具によって深く施文している。197-19の底部は木葉痕、20は平織り状の布圧痕が認められ、底部が穿たれている。内面は非常に丁寧な

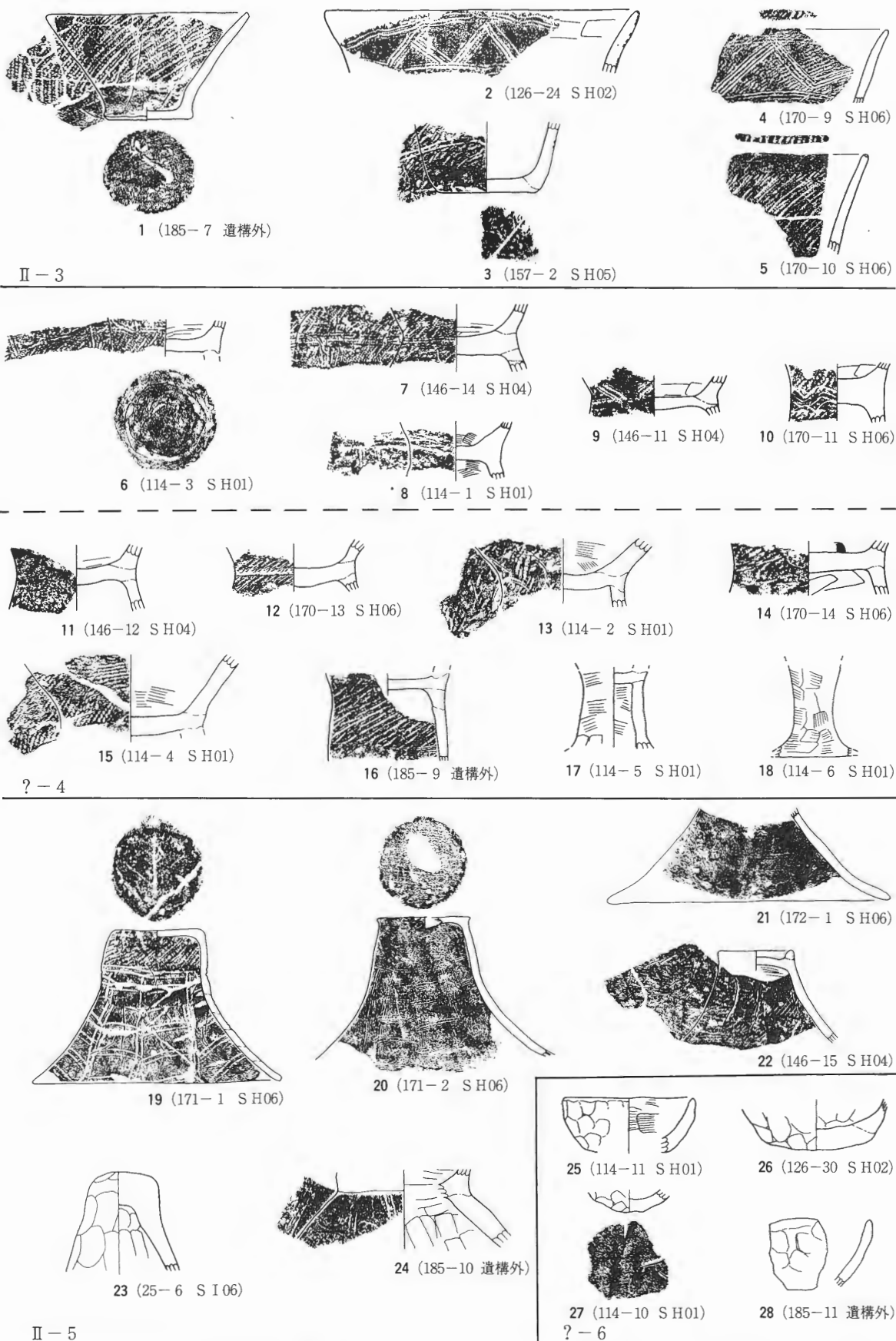
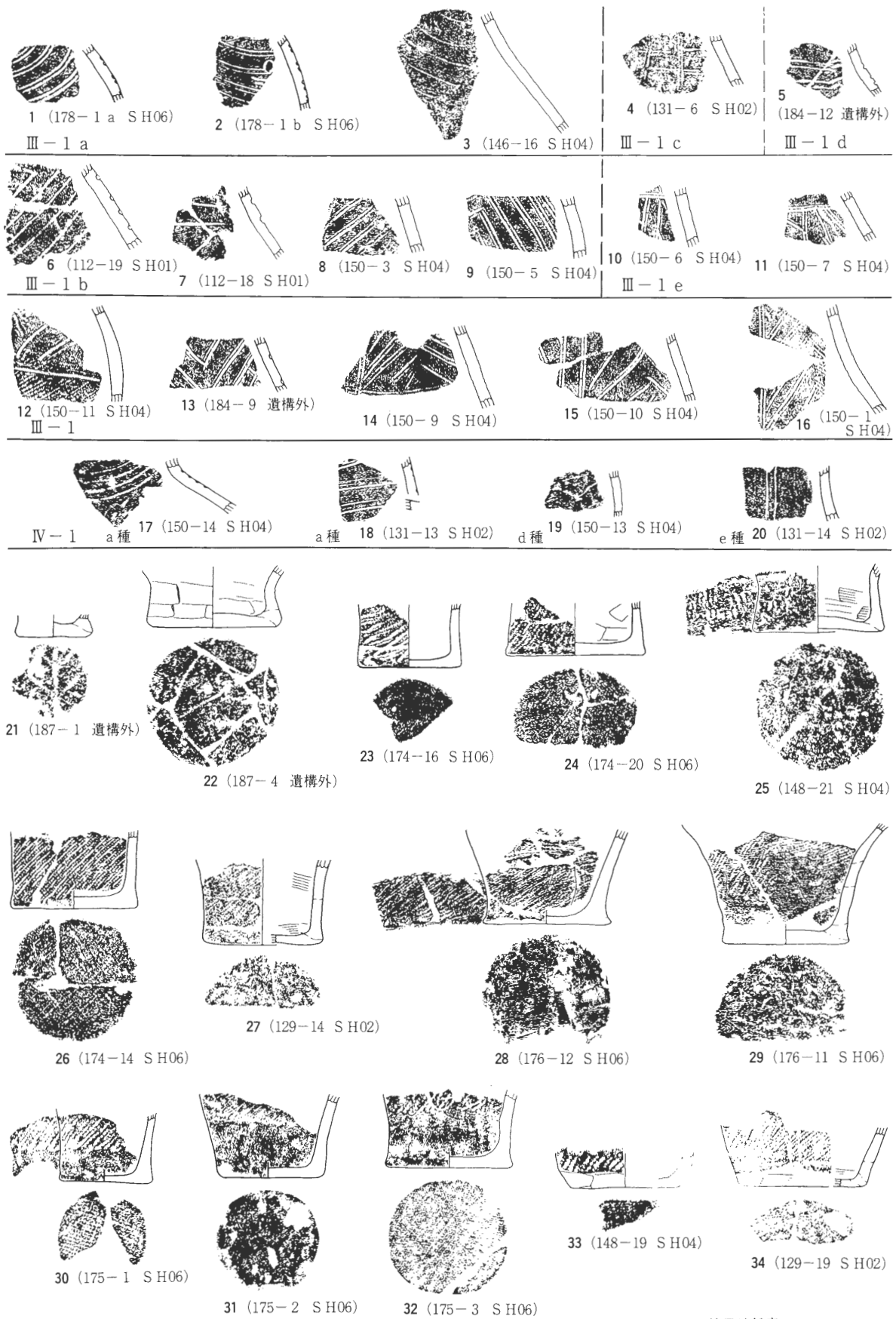


図197 鉢・高杯・蓋・手捏土器



※縮尺は任意

図198 III・IV群土器，底部資料

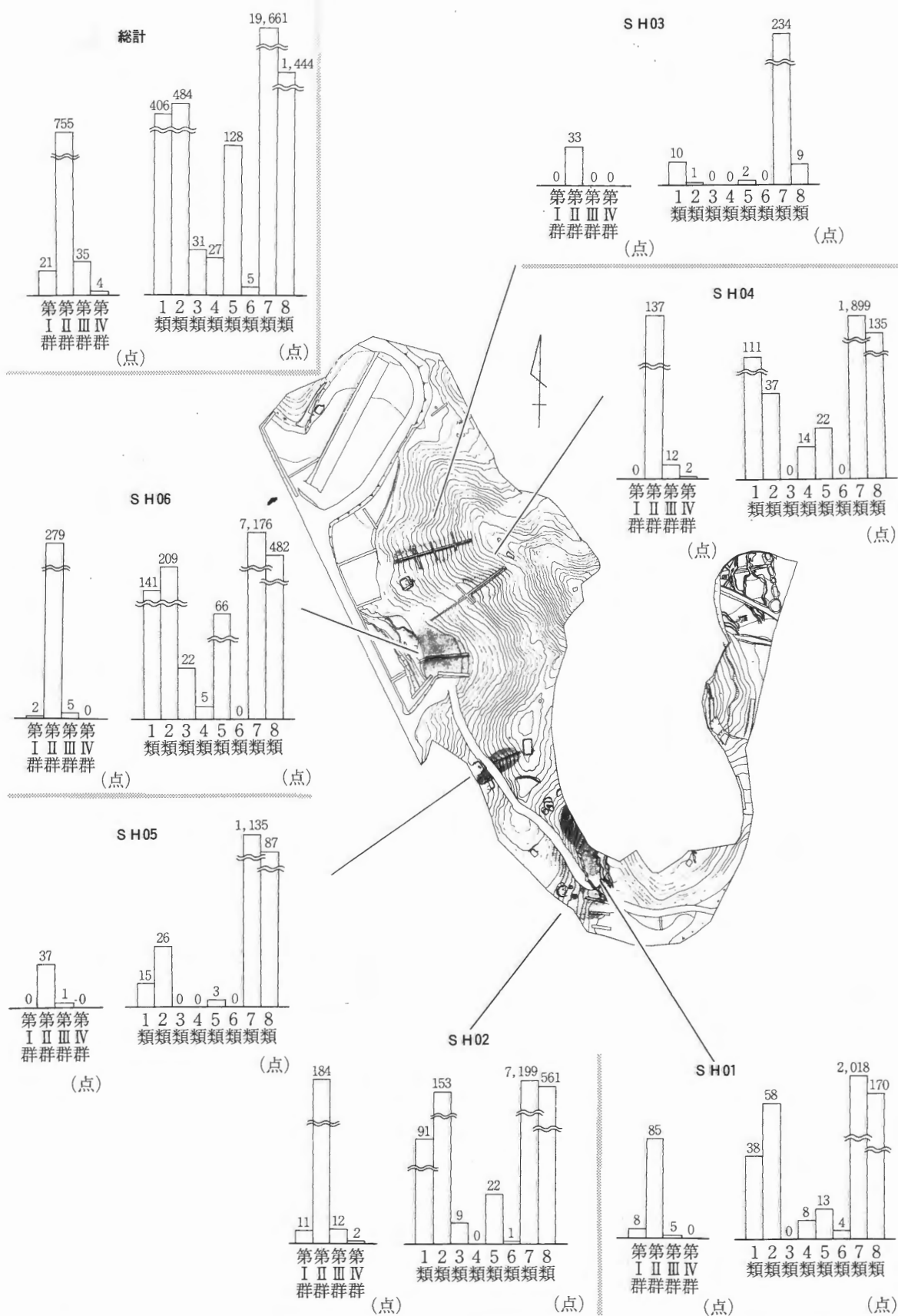


図199 遺物包含層出土弥生土器器種・組成率

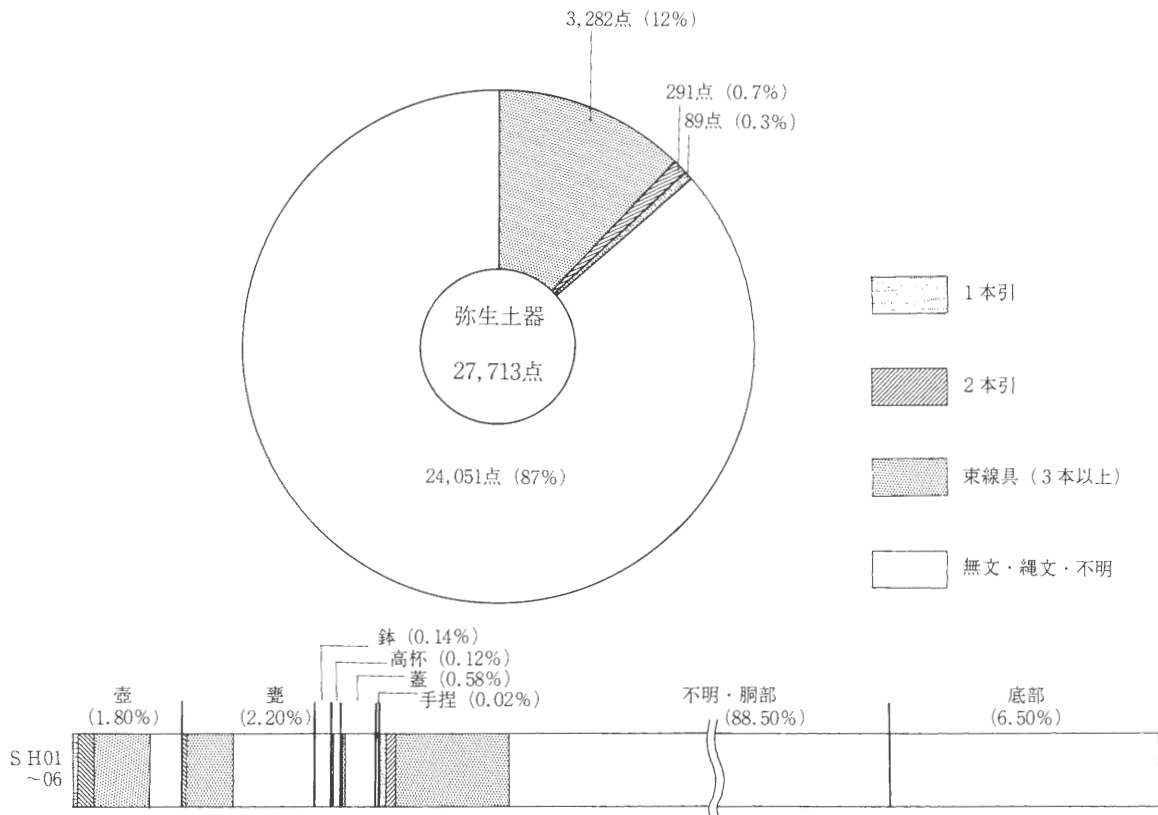


図200 施文具別比率と器種組成の割合

ナデ調整が施され、1～4類土器と比べて胎土・焼成共に良好である。また、口縁部内面には煤状の付着物が認められ、その範囲は内径で12～14cmを計る。この範囲の口径を持つものは中型の甕形土器とほぼ一致するため、同口径の甕形土器(中型)の蓋として使用された可能性が高い。

6類 手捏土器は4点出土している。手捏土器には皿形を呈するもの(197-26)、碗形を呈するもの(197-25・27・28)などがある。

【第Ⅲ群土器】

二本同時施文により、平行沈線文を描画するもので、桜井式に比定されるものである。本遺跡からの出土量は第Ⅰ・Ⅳ群土器同様に僅かである。全て破片資料のため1類のみ判断でき、代表的なものを図198に示した。

1類 壺形土器の頸部資料が大半を占め、比較的先細の工具によって二本同時施文が施されている。文様構成はa種(渦巻文・円文; 198-1～3), b種(重菱文・三角形文; 198-6～9, 150-1・2・9～12, 184-9), c種(格子文; 198-4)などが認められ、b種が多く、a・c種は僅かである。線間幅からみれば、大半の資料は沈線間2mm内外であるが、198-6のように線間幅が6mm前後とやや広いものもある。文様構成では131-8～12, 150-8～12のように施文文様はa・b種が認められ類似するが、二本の沈線の深さが異なるやや太めの工具(断面凹状)によって文様を描くものもあり、従来の明確な桜井式とは異なる。このような沈線の深さが異なる二本引きの資料は、同浜通り北部の南入A遺跡(井; 1994)等でも僅かに認められ、桜井式土器の模倣と捉えられる。

また、線間幅がやや狭いものの、末端部がずれて二本引きの連弧状の文様が施されている184-12や、重菱文や山形文などの中央に縦線文を施文している150-1・9・10は希であり、第Ⅳ群土器(川原町口式)に含められる可能性があるため注意を要する。

〔第Ⅳ群土器〕

川原町口式に比定されるもので、壺形土器では第Ⅲ群土器同様に二本同時施文具による平行沈線文を主体とするが、文様帯と無文部の割合がほぼ同じ間隔となる意匠文を特徴とする。本遺跡からの出土量は極僅かであり、最も少ない。全て破片資料のため1類のみ判断できた(198-17~20)。

以上、遺物包含層出土の土器を中心に、各土器群及び器種ごとの特徴をまとめてきたが、今回の調査で出土した弥生土器は、器形や施文技法・主幹文様構成などからみて多様な在り方を示していた。前述したように、第Ⅰ~Ⅳ群土器は混在して出土したものであり、層位別・遺構の重複関係によって明確な時期差を示す在り方を示していない。ここでは第Ⅰ~Ⅳ群土器にみられる器形や主幹文様構成、施文工具や技法について概観し、本遺跡における土器様相をまとめてみたい。

本遺跡に於いて主体を成す土器は第Ⅱ群土器(天神原式)であり、第Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ群土器は僅かの出土量である。部位別に器種組成を集計した結果では、各群ともに壺・甕形土器が主体を占め、他(鉢・高杯・蓋・手捏土器)は極僅かの出土量である。本遺跡第Ⅲ群土器(桜井式)を主体的に出土した南入A遺跡では、同組成が認められ、本遺跡同様に壺・甕形土器が主体を占めている。鉢・高杯・蓋・手捏土器は僅かに認められ、本遺跡の方が高杯・蓋の出土量がやや多い傾向がある。

器形的には壺形土器の特徴として、細口長頸壺が多く、広口壺はほとんど出土していないことが上げられ、第Ⅳ群土器(川原町口式)に認められるような口縁部形態が椀状に内反するものは少ない。甕形土器では、口頸部の形態からみれば①・②・④が吉田のいう甕形土器A種、③・⑤がB種に各々該当しよう(吉田;1990)。いずれも胴部上半に最大径をもち、圧倒的に⑤が多い傾向がある。概観的にみれば②は第Ⅲ群土器(桜井式)に、⑤は第Ⅱ群土器(天神原式)に占める割合が多いような傾向が窺われる。法量的にある程度復元できた3号土器埋設遺構の場合、遺存胴部径約32cm、遺存高22cm、器厚0.7cmを測り、土器棺墓の形式分類では天神原遺跡でCタイプと分類された第5号土器棺墓上方土器に類似する。天神原遺跡では壺形土器は最大胴部径32~40cm(35cm前後に集中)、器高45.8~53.3cm(50cm前後に集中)、甕形土器は最大胴部径27~41cm(35cm前後に集中)、器高33.5~46.4cm(40cm以下に集中)であり(馬目;1982)、本遺跡の方が法量的に小型に属するものが多い。型式大別や器種分類が困難な胴部資料や地文のみの資料、底部資料などについては第Ⅱ群土器に於いて一括して報告したが、他の土器群の可能性も比定できない。底部資料の場合、5~10cmの大・中・小の大きさが認められ、10cm前後が多い傾向にはあるが、天神原遺跡に於いて集計した最大胴径と底径との関係については、必ずしも底部の大きさがそのまま器形の大きさや最大胴径に比例してくる結果は得られていない。胴部資料では僅かであるが、先太の断面凹状の1本沈線によって描画される147-7などは施文技法的には天神原遺跡第14号土器棺上方土器の壺形土器胴部上半に類似する資料である。また、胴部下位が無文で直立気味に立ち上がる129-14、175-1~3、176-

11は、鉢・蓋などの可能性がある特異な資料である。

壺・甕形土器の主幹文様構成となった施文手法別の集計を図200に示した。これを見ると口縁部から胴部文様帯としては無文・縄文・不明のものが87%を占め、他の13%が口縁部から胴部上半に施された文様である。全組成をみると量は少ないが、器種の解ったもの、あるいは沈線が施されたもののみの結果では、束線具が圧倒的に多い(92%以上)ことがよくわかり、次いで2本同時施文によるもの(5.7%)、1本引きによるもの(2.3%)である。ただ、これら束線具のうち、傾向的に多いのは3本同時施文による平行沈線文と茎状の軟質工具によるものである。文様では前段階からの規制する重要な文様要素である渦文・円文は各群ともに比較的少ない傾向にあり、逆に格子文や肋骨文・縦線文など後出的要素が強い文様が多い。

以上、各土器群の土器様相を述べてきたが、これらを壺・甕形土器についてまとめると次の様になる。壺形土器では渦文土器の終末や細口長頸壺の消失、縦位区画文の出現から横帯区画文の成立など、甕形土器では精製土器が組成から消失し、単略化の傾向を示すようになること、主要文様構成が器形の上半分に限られ、沈線の多条化現象が認められることなどがあり組成や文様構成の変遷が認められる。このような中期末葉の土器様相の在り方は、土器組成の確立や分布域を含めて、浜通り地方では普遍的に認められ、桜井式・天神原式・川原町口式の各土器型式が主体的土器と客体的土器として明瞭な分布圏を形成したためとする考えがある(吉田;1995)。また、大畑E遺跡(1990;佐藤他)で佐藤典邦は天神原式を否定しつつも足洗3式と足洗1・2式を時間軸の差として認識している。本遺跡では第Ⅱ群土器(天神原式)が主体を占めるものの、第Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ群土器が僅かに認められ、全体的な傾向からすれば古くは足洗1式から始まり、天神原式で主体を占め、伊勢林前式で終焉するように窺える。本遺跡と同様の傾向が第Ⅱ群土器で見られたのは南入A遺跡である。南入A遺跡は本遺跡設定の第Ⅲ群土器を主体としているが、他の土器群を含めて、ほぼ本遺跡の第Ⅱ群土器を主体とする土器組成率が第Ⅲ群土器に置換された傾向を示している。このような状況を示唆する資料として、双葉町陣場沢遺跡(大竹;1993)例がある。陣場沢遺跡は、第Ⅱ群土器と第Ⅲ群土器の標式遺跡中間地点付近に所在し、1軒の住居跡から桜井式と天神原式の土器が共伴している。また、双葉・南迫遺跡(鈴木他;1994)や南入A遺跡(井;1994)等では第Ⅲ群土器が沈線の施文間隔から細分が困難であることが知られる。これらの事を考慮すると、弥生時代中期後半の土器様相はいまだ不明な部分が多く、本遺跡出土の土器群は、南入A遺跡等とほぼ同じ傾向を示すことが認められた。時間差・分布差を考慮すると、向山遺跡(中山他;1986)や大畑E遺跡(佐藤他;1990)、タタラ山遺跡1・2次(安田・今野他;1995)などいわき地方を始めとする福島県浜通り地方南部の各資料とも共通しており、土器の器種組成の変遷・時間軸の設定ばかりでなく、今後は石器や木製品、鉄製品等も含め、検討していかなければならない問題であると思われる。

石 器

本遺跡は前述したように第Ⅱ群土器を主体的に出土した遺跡であり、石器類もそのほとんどが該期に属するものと考えている。石器類は遺物包含層及び遺構内外から1,983点出土し、そのうち比

較的遺存状態の良い115点について図示している。出土した石器を器種別にみると、定型的な石器としての内訳は石鏃2点、ドリル1点、太型蛤刃石斧7点、抉り入り両刃石器4点、扁平片刃石斧25点、ノミ形石器4点、板状石器5点、石庖丁1点、敲打器6点、環状石器4点、磨石2点、砥石5点、石皿2点、スクレイパー2点その他の石斧類(打製・磨製石斧含む)15点、である。この他、遺物包含層から剥片・不定形石器が871点、石核が391点出土しており、剥片・不定形石器19点、石核11点について掲載した。石器出土総数のうち(1,983点)、製品関係(欠損品・未製品含めて)は僅か91点(約4.5%)であり、その他の大半は剥片や石核である(約95.5%)。以下、大陸系磨製石器を中心に主な器種ごとの特徴を述べながら、石器組成や石質等の様相についてまとめていく。

太型蛤刃石斧は7点出土しており、ある程度全体の形状がわかるものは201-4・8のみで、他は欠損品と未成品(59-9, 100-8, 118-3)である。刃部には使用痕が認められるもの(201-4・5)、刃部に刃こぼれ状の痕跡が認められるもの(201-8)がある。刃部付近には敲打後の研磨が比較的丁寧に施されているが、側縁部や基部側には研磨による明確な調整は認められないものが多い。未成品を除いた製品や欠損品の形態をみると、201-7のようにやや大型に属するものもあるが、大半は最大長11.5~12.2cm, 最大幅5.1~6.8cm, 最大厚3.3~4.5cmの中型に属するものであり、桜井・天神沢遺跡で最も多い長幅関係範囲内に全て収まる。

抉り入り両刃石器(4点)は、全体の形状がわかるものに201-10・11がある。両側縁部中央に対応する2か所の抉りと、背腹面中央にも敲打・■転手法によって施された2か所の窪みが特徴的である。器面には敲打による一次調整後、研磨による調整が部分的に加えられているが、研磨痕を切って両側縁に敲打による抉りを作成する201-10は太型蛤刃石斧からの転用品の可能性が高いと考えられる。法量的には最大長11.3~15.5cm, 最大幅5.6~6.6cm, 最大厚3.2~4.2cmを測り、太型蛤刃石斧とはほぼ類似する。刃部には敲打痕が観察されることから、叩く道具である可能性が高いが、その用法については不明な点が多い石器である。龍門寺遺跡やタタラ山遺跡等のいわき地方でのみ散見される特有の石器(いわき型石器)で、弥生時代中期後半に伴う可能性が高い。

両刃石器に該当するものは3点で、両刃を作成しているものである。133-8は刃部側約1/2を欠損しているが、太型蛤刃石斧や抉り入り両刃石器よりもやや小型に属するもので、203-4は板状石器からの転用品と考えられる。203-5は形態的に揆状を呈し、最大長17.5cm, 最大幅9.7cm, 最大厚3.2cmの大型の製品である。側縁には一次整形時の剥離痕と側縁に対して直交する線条痕が認められる。器面全体には研磨が加えられ、一次整形時の敲打痕は研磨によって整形されている。刃部は丁寧な研磨による再調整が施され、使用痕等は認められなかった。

扁平片刃石斧は試掘調査時のものを含めると全部で26点出土している。出土した石器種のうち、剥片・石核以外の定型的な石器としては最も出土量が多く、未成品が約40%にあたる点が特筆される。全体の形状がわかるものは9点(202-1~3・5~7・9・10・13)で、基部側及び側縁部を欠損するもの(202-11・12・14, 151-3, 179-3)、未成品のもの(202-4・8・14, 119-1, 133-6, 151-2~4, 179-5)9点である。刃部と器面には研磨痕が認められるが、全面には至

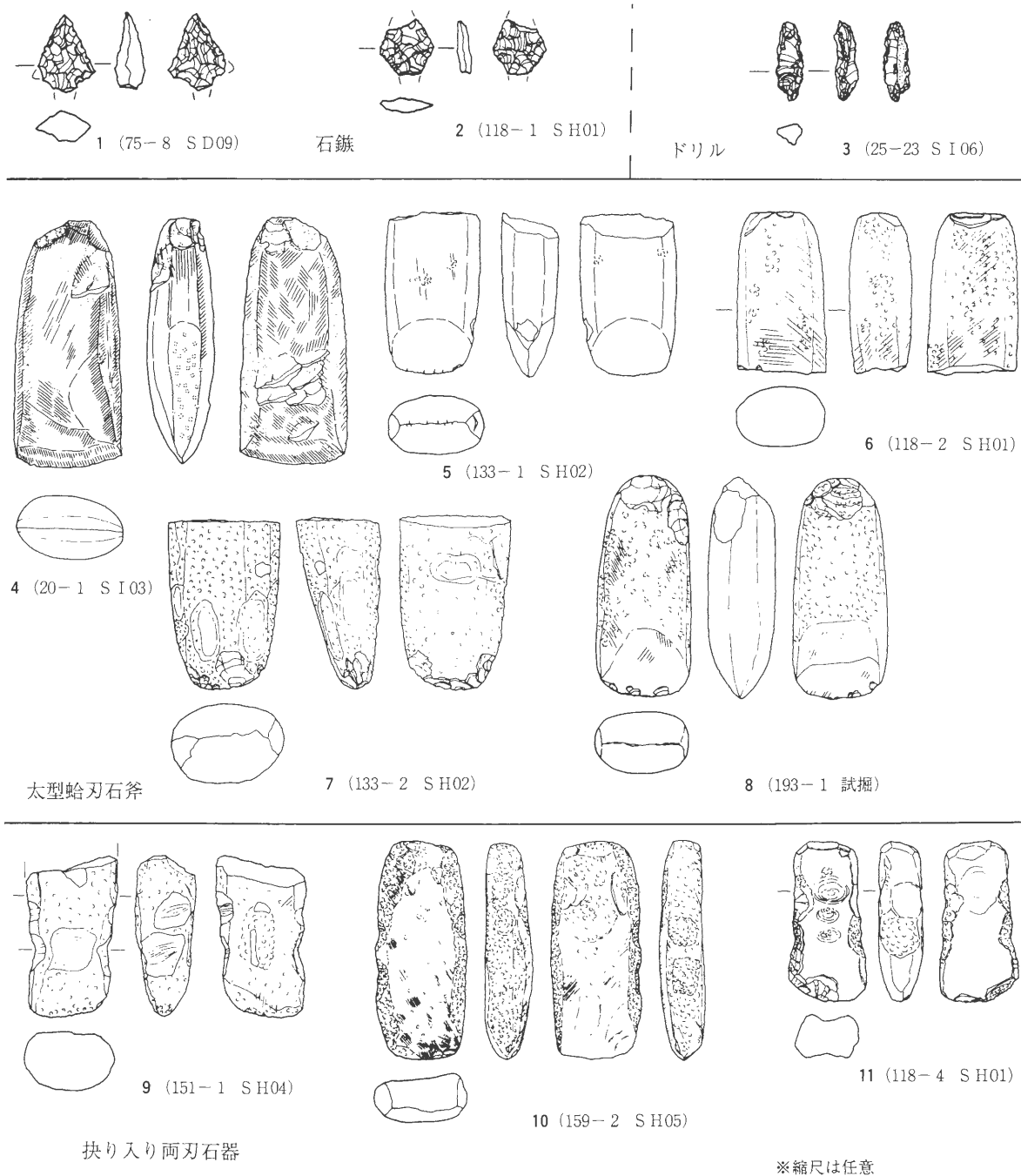


図201 出土石器（1）

っていないものが多く、形態的に大・中・小の3形態が認められる。最大長が7cm以下の小型のもの(202-1～4)，10cm以上の大型に属するもの(202-12～14)などがあり，中型に属するものが最も多い。桜井・天神沢遺跡では最大長4～8cm，最大幅3～5cm，最大厚1～3cmの中型に属する一群の範疇に入り，長幅関係範囲内に全て収まる。

ノミ形石器は4点出土している。全体の形状がわかるものは203-2で，203-1は刃部欠損品，203-3，159-1は未成品である。器面全体には敲打による整形後の研磨が施され，203-2の刃部には使用痕が観察される。最終調整である研磨は，他の器種と比して丁寧である。法量は最大長

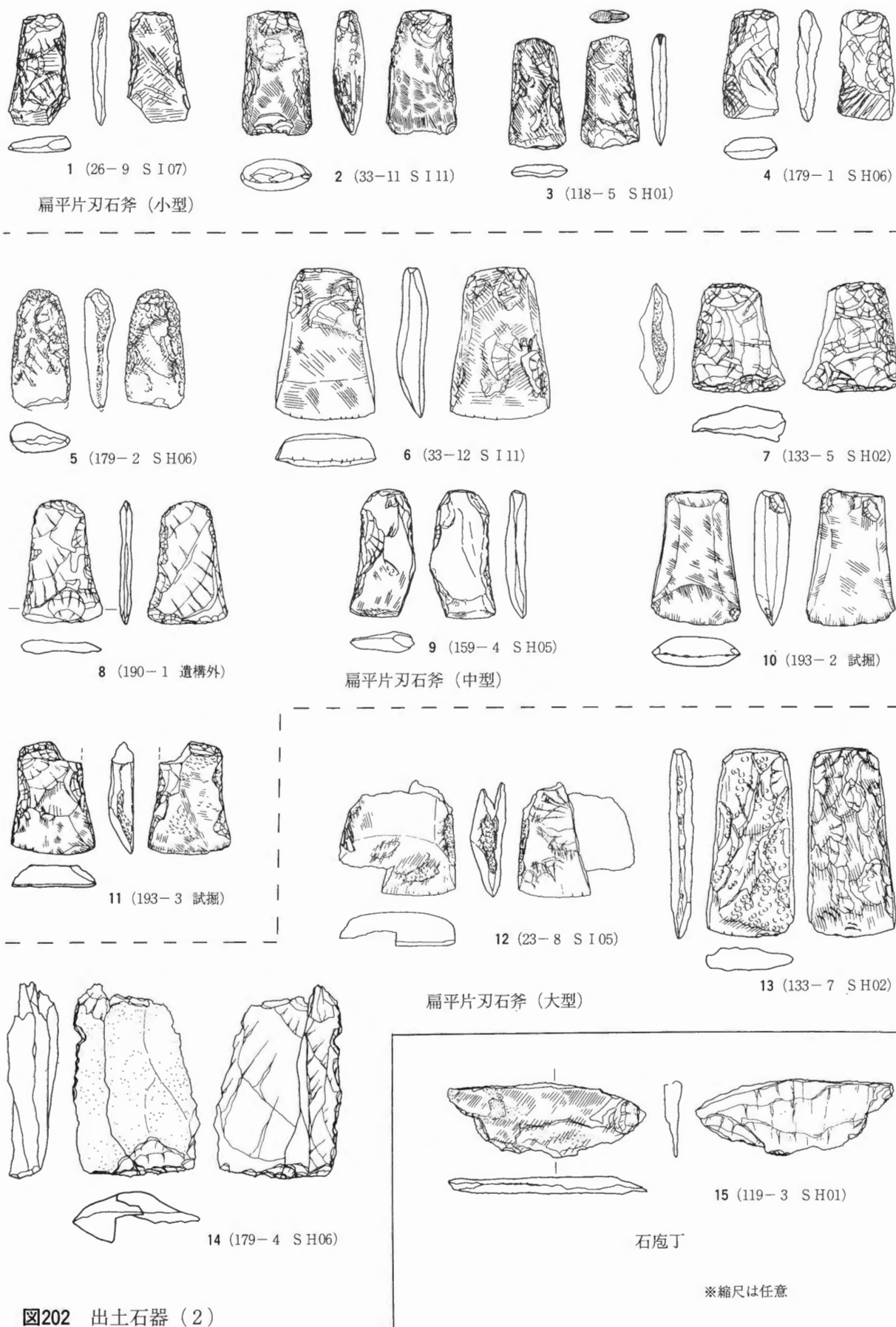
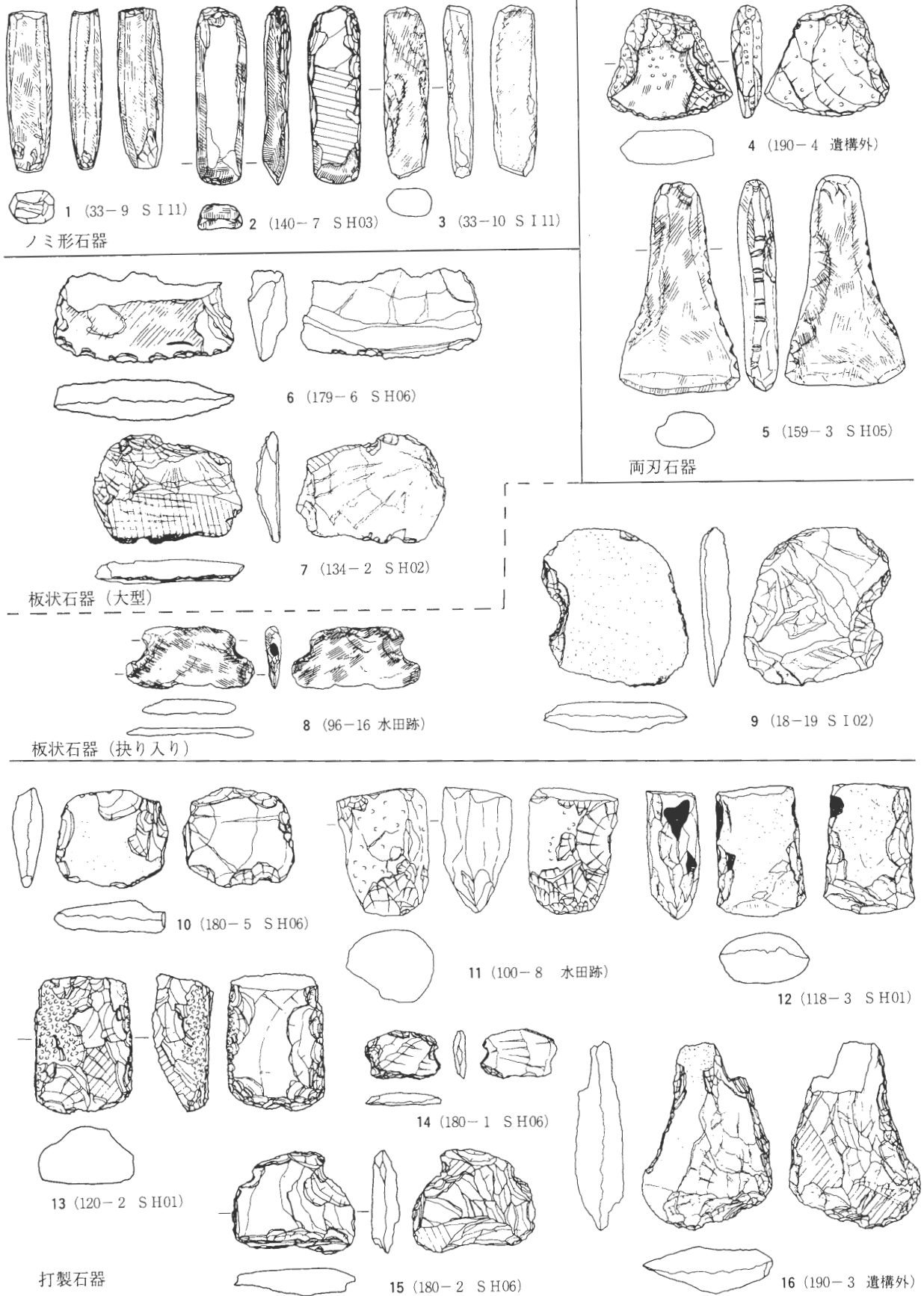


図202 出土石器 (2)



※縮尺は任意

図203 出土石器 (3)

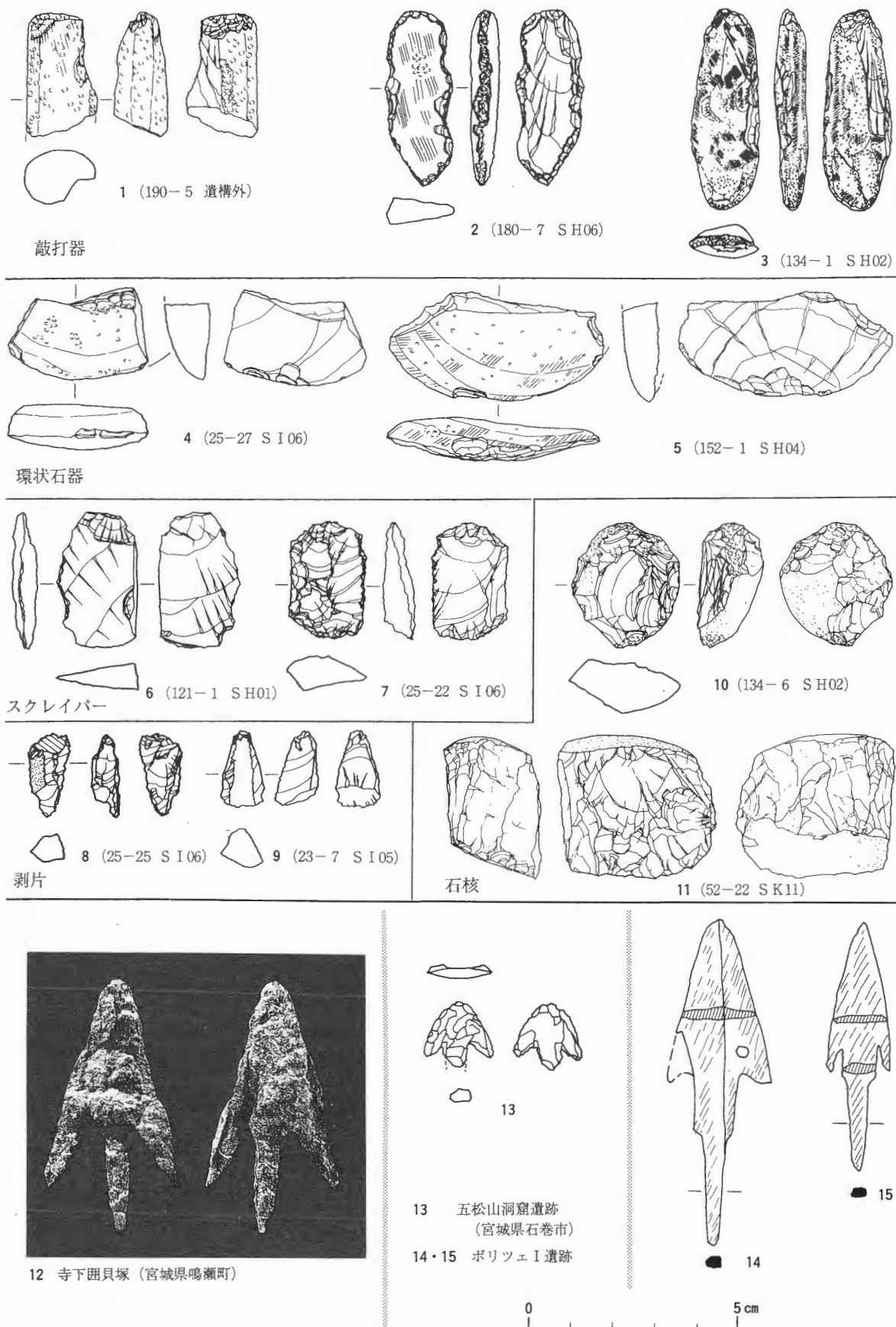


図204 出土石器 (4), 鉄製品

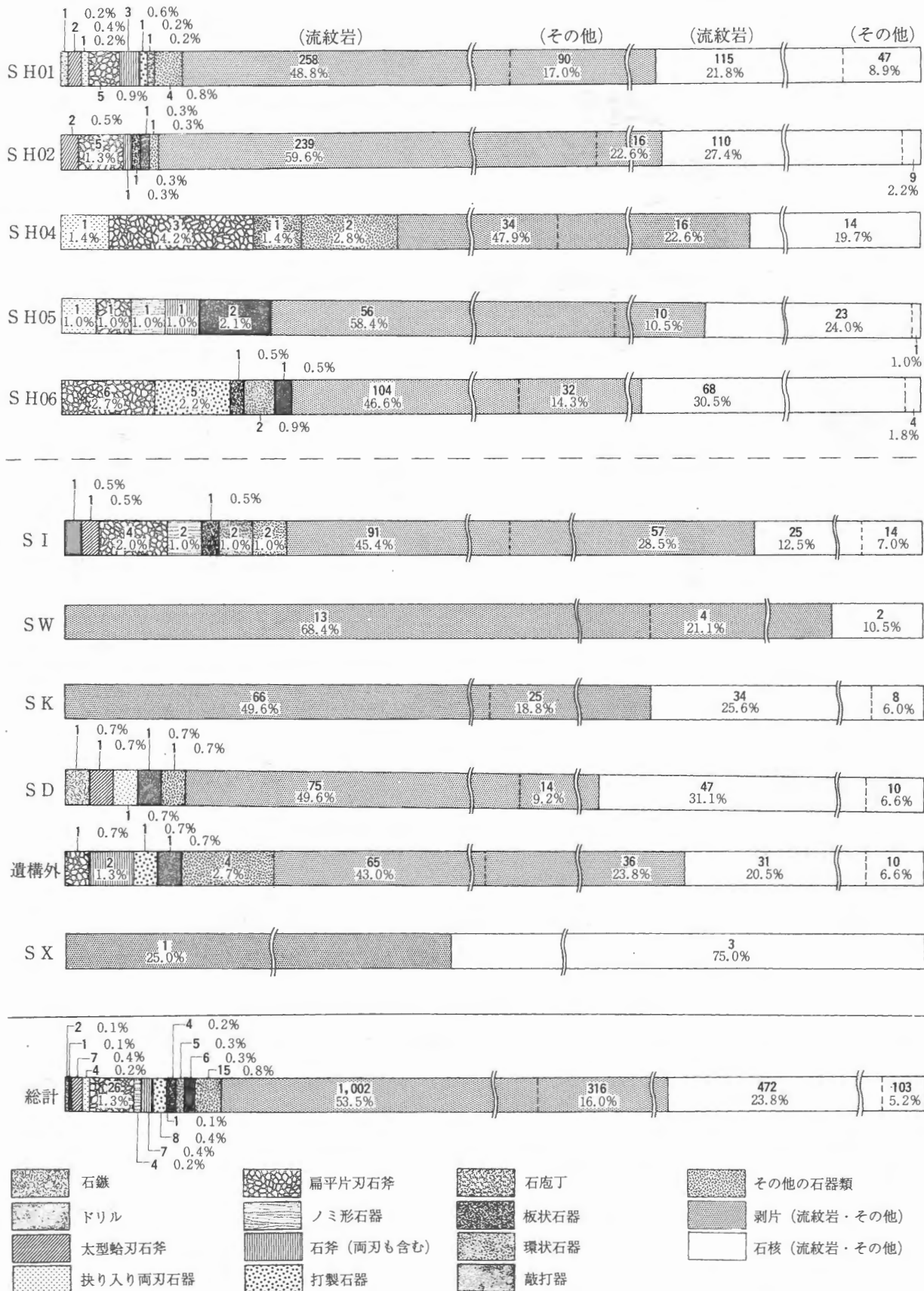


図205 石器組成率

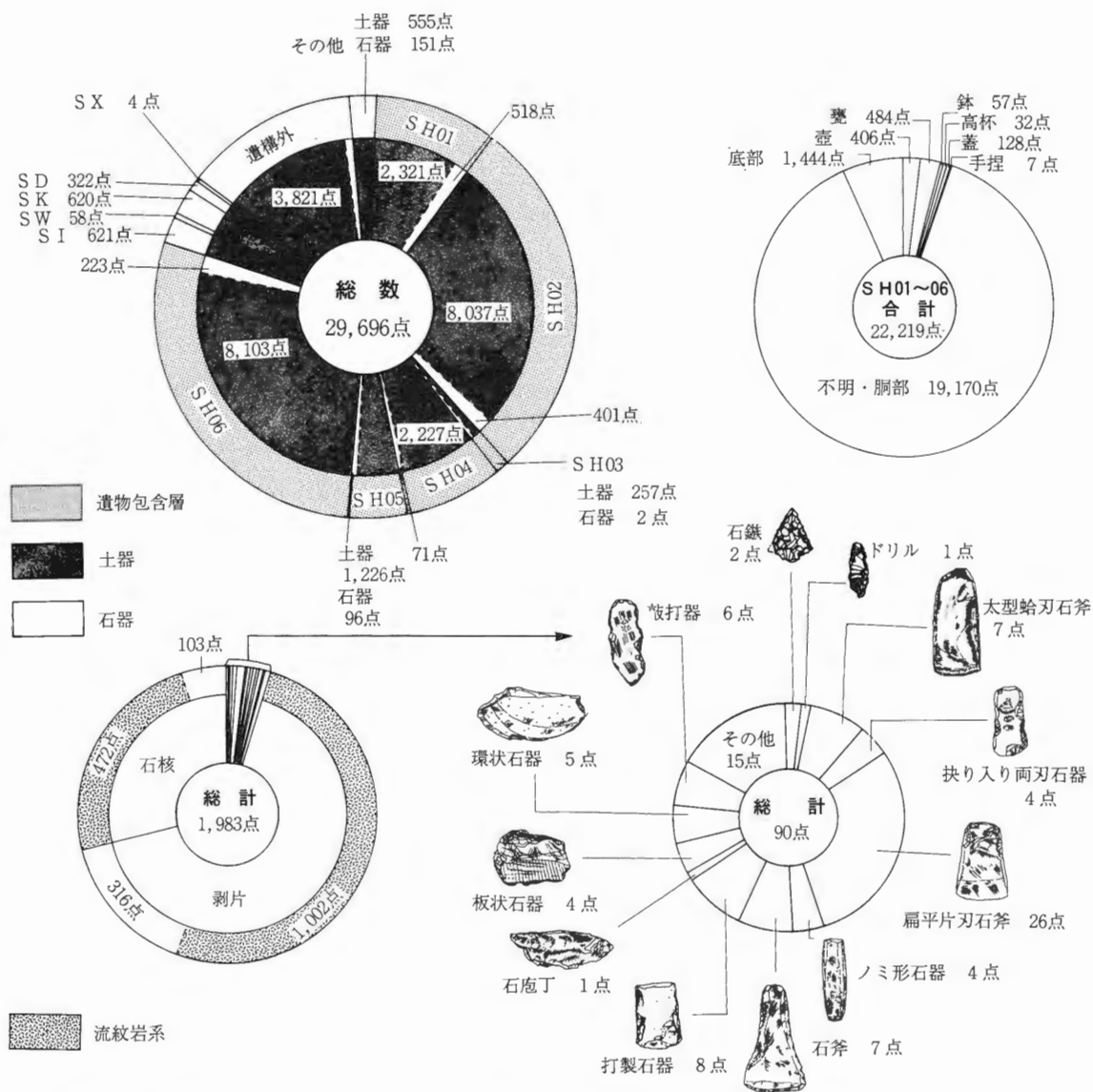


図206 遺構別遺物出土率と土器・石器の組成率

8.9~9.8cm, 最大幅2.5~2.9cm, 最大厚1.3~1.8cmで, 桜井・天神沢遺跡例に類似する。

以上のように本遺跡の大陸系磨製石器は, 桜井式期の資料が多く確認されている桜井・天神沢遺跡と同じ規範であることがわかる。また, 磨製石器の最大の特徴である研磨の技法は局部的に行われる傾向が強い。これらの傾向は向山遺跡・上ノ内遺跡・桜井・天神沢遺跡・南入A遺跡などでも認められるため, 浜通り地方の弥生時代中期の石器は各種法量や規格性・技法等に同じような規範があったものと思われる。図206には本遺跡における石器の組成率を示したが, 一特徴として扁平片刃石斧の占める比率が非常に高いということが上げられる。これらの扁平片刃石器やノミ形石器などの工具類は, 大陸系磨製石器等に使用する柄や, 鋤・鍬などの農耕具の作成, あるいは近畿地方や北陸地方, 日本海岸で多く出土している木庖丁などの稲作に関わる木製品の製作に使用した可能性も比定できなくない。石庖丁は転用品(26-9)を含め2点のみの出土であったが, それらの背潰し用の工具と考えられる敲打器(204-2)も出土していることや, 稲科植物の切断・伐採に使用

されたと推定される203-6・7のような大型板状石器(大型板状安山岩製石器・大型直縁刃石器：斉野；1993)が相伴していることを考慮(穂積具と根刈り具のセット)すれば谷水田等を行っていた根拠の一つになろう。ただ、水田跡や用排水路などの遺構が検出されていない点や、それら木製品の欠損品や未製品も合わせて出土していないため、ここでは石器と併用した木製品の存在を推測する程度で止めたい。

次に各石器種の石質についてみると、本遺跡では比較的大きい太型蛤刃石斧・抉り入り両刃石器・両刃石器などはヒン岩が多く、扁平片刃石斧やノミ形石器、環状石器などは泥岩・緑色片岩の占める割合が多い。器厚が比較的薄型の板状石器や打製石器などは角閃岩・ヒン岩・泥岩などが多い傾向にある。器種によって石質を区別し、製作・使用している傾向が窺え、欠損・破損した石器を再利用などにより転用する際にも、使用目的によって石質を重要選択視しているものと推察される。いわき地方の他遺跡例では、本遺跡とは若干傾向は異なるものの、太型蛤刃石斧・抉り入り両刃石器・扁平片刃石斧・ノミ形石器・板状石器などは角閃岩が最も多く、次いでヒン岩・硬質凝灰岩・砂岩の順である。出土した石器総数(1,983点)のうち、剥片(66.5%)・石核(29%)は出土石器類総数の95.5%と非常に多くを占め、そのうち流紋岩系が76%である。ただ当地域の特徴である流紋岩製の石器が前段階の遺跡からも非常に多く出土しているのに対し、本遺跡では流紋岩製の剥片・石核の出土量の割にはこの流紋岩系の石材を使用した製品がほとんどないこと、またそれら流紋岩製の石核からは意図的な剥離が行われている点、そして約1～2割程度であるが火熱を受けた痕跡がある点などが指摘される。本遺跡出土の流紋岩製の石核は亀甲状に剥離するものが多くみられるが、縦位剥離を行っているものが若干鉄石英製の石核に認められる。勝口前畑遺跡にはこうした小型剥片の中に縦割剥離を行っているものがあり、管玉等の製作を想定している(斉藤；1995)。これまでの分析からは、一般的に石器製作地であるならば、石核や大型剥片・チップ類が多いはずであり、当地区の場合も石核や大型剥片類が非常に多いことが窺える。しかしながら、同石質の製品・欠損品・未製品がほとんど出土していない点や、剥片・チップ類があるまとまった集中域から検出されていないことから、当遺跡内で製品を作成し、他の地域に製品等を搬入していたとは考え難い。石器製作地というよりは、何らかの行為がおこなわれた場所、例えば祭祀・儀礼に関わる行為が上げられようか。

以上の石器組成をみると、本遺跡における石器組成の特徴は、前述したように石庖丁や石鋤、さらにコーングロスなどの付着した剥片石器や大型の板状石器類等の農具類が僅か数点と少ない傾向に対し、扁平片刃石斧(器種別の比率で27%)・ノミ形石斧等の大陸系磨製石器を中心とした工具類が多く出土している点(約59%)、流紋岩系の剥片・石核が多く出土しているがその製品はほとんど出土していない点が上げられる。このような現象は、いわき市向山遺跡(中山；1990)・大畑E遺跡(佐藤；1990)等でも同様な傾向が認められ、農耕具はほとんどなく、扁平片刃石斧などの工具類が多くを占め、生活遺跡としての性格は一応示しているものの、やや特異な状況を示していると考えられる。同浜通り北部に所在する南入A遺跡や桜井・天神沢遺跡等では、石庖丁や打製石器の石材

として近くの相馬古生層に含まれる粘板岩系の原石を採取し、製作を行っていた可能性が指摘されており（藤原；1991）、同石材が仙台平野や中通り地方の遠隔地に運ばれた可能性も高い。いわき地方ではこうした粘板岩系の石材を使用する石器はほとんど認められず、明確に石材の選択が異なる傾向がある。組成的にも浜通り北部で認められなかった挟り入り両刃石器の作出は、いわき地方特有の石器種（いわき型石器）と考えられる。石器組成の在り方からは、本遺跡の生活様相は植物採集や谷水田等を利用した稲作農耕を推測しているが、漁労具や農具類が極端に少ないことから山に依存した生活であったものと判断している。

鉄製銚について

117-1は1号遺物包含層LⅣより出土した鉄製銚と考えられる。錆化が著しいが比較的遺存状態が良く、X線写真の結果、身の中央部に三角形の透かしが入る大型の有茎三角式である。遺存する法量は全長11.4cm、銚身8cm、最大幅4.3cm、を測り、中央の透かしの長さ2.8cm、幅1cmである。逆刺の部分は2.4cmを測り、先端部がやや鋭利となる。銚身の断面は薄い板状を呈し、刃先は錆の劣化が著しく詳細は不明である。分析の結果からは原料比定に至る結果は得られていない。県内では会津大塚山古墳から出土した四世紀の鉄製の太刀類が最古であり、形態的にも古墳時代の鉄製銚に類似するが、時期的に供伴する遺物から弥生時代中期末に属するものと考えている。弥生時代に属する鉄製品の類例としては、宮城県石巻市五松山洞窟遺跡（三宅他；1988）や詳細は不明であるが同県鳴瀬町寺下囲貝塚（加藤他；1968）出土の鉄銚、岩手県一関市谷起島遺跡（林他；1977）、青森県大間貝塚（橘他；1974）などが知られる。いずれも本例よりも小型のもので、透かしが入らないものである。弥生時代の鉄器で金属鉄の調査例は少なく、その実態は不鮮明な点が多い。国内での鉄生産の開始が古墳時代以降と考えられており、また、朝鮮半島や中国・西日本の銚の鉄製品がみられないことから、おそらくは北方のものではないかと考える。東アジア、特に中国・朝鮮半島は直接我が国に影響を及ぼした地域であるが、カムチャッカ半島～アムール川下流のポリツェ文化（紀元前6～前2・1世紀）にも類例があり、北の大陸文化からの影響が強かったのではないかと推察される。用途的には刃先の劣化が著しく、詳細は不明であるが、漁労具というよりは儀器（祭祀）としての可能性が高いものと思われる。今後、本県及び東北地方の鉄の普及や文化を考える上で、武器の生産と需要・供給の関係も踏まえながら、鉄器のみならずさらに土器や石器も考慮しながらどのように把握していくかが課題といえる。

（井）

2. 弥生時代の遺構について

今回の調査で検出された遺構数は、屋外柱穴等の小穴類を除くと69遺構に上る。これらのうち、弥生時代の所産の可能性が高いことを示唆した遺構は、竪穴住居跡6軒、土坑5基、土器埋設遺構4基、遺物包含層6か所などである。ここでは、僅かに生活域として痕跡を残す住居跡や土器埋設遺構等について、該期の遺構の立地状況や在り方についてまとめていきたい。

本遺跡において調査区内に遺構が形成されるのは、縄文時代後期からの出土遺物例が僅かに認め

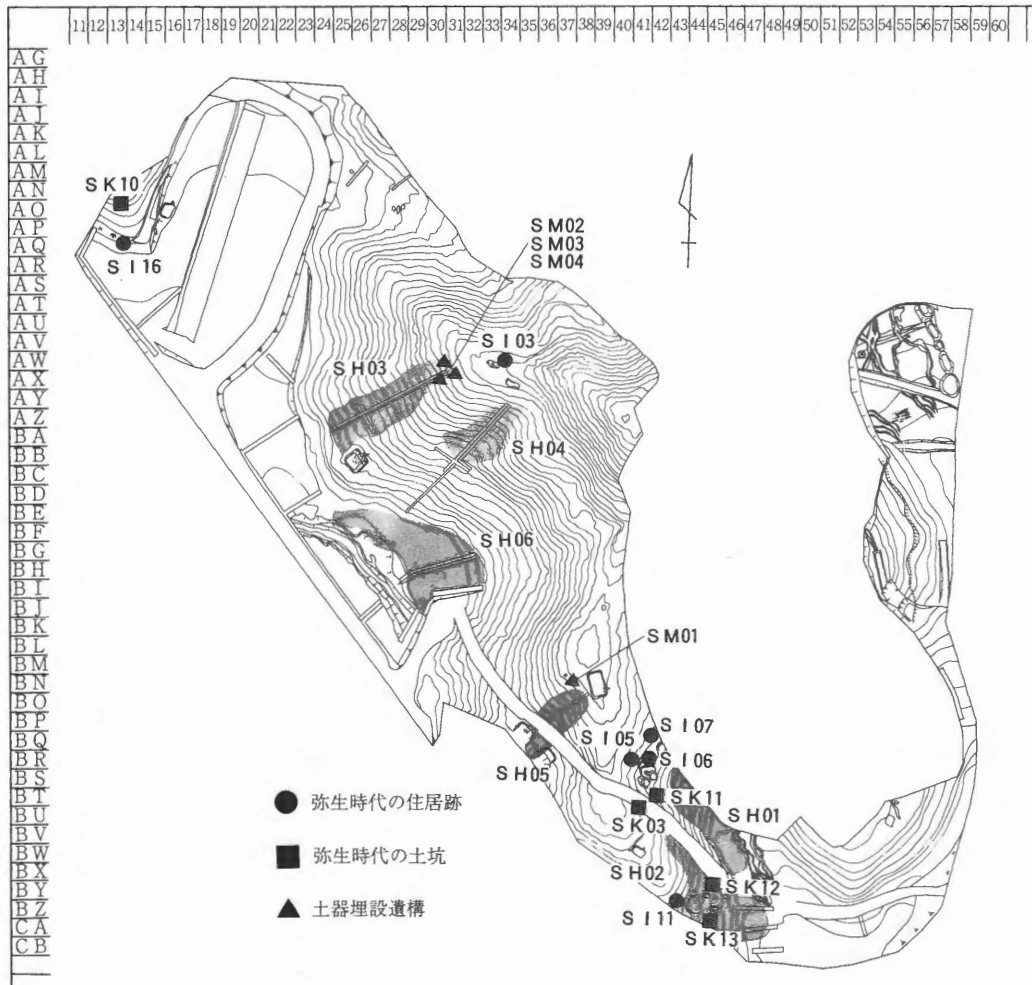


図207 弥生時代の遺構配置図

られたが、弥生時代中期末頃からである。図207に示した遺構の分布状況を見ると、これらは①標高42m前後の細尾根丘陵上（S I 03, S M01～04）、あるいは②丘陵頂部から一段下降した狭小の平坦地（S I 05～07・11・16, S K03・10～13）に住居跡・土坑などの居住域を形成している。遺跡全体では散在的であるが、基本的にはこの2つの在り方が認められ、遺物包含層（S H01～06）はこれら遺構が構築されていた斜面下位に形成されている。遺構別にみると、住居跡では調査区中央付近を南に延びる丘陵部に多く検出され、土坑や土器埋設遺構等も同様な分布域を示している。

検出された弥生時代の住居跡は丘陵頂部から1軒（S I 03）、丘陵頂部から一段降下した狭小の平坦地から5軒（S I 05～07・11・16）である。平面形はやや歪むが楕円形を基調とし、3号住居跡のように地床炉や柱穴が認められ、住居跡の要条件を備え、確実に住居跡と認定できたものもあるが、一方で5・7・16号住居跡のように炉や柱穴が伴わない住居跡も存在する。6・11号住居跡は炉が確認できなかったが、柱穴が認められ、土器や石器類を多く出土している。規模的には16号住居跡が2.5m程とやや小規模であるが、他は4m前後で近似しており、周壁も遺存状態のよい場所で25～70cm認められた。検出された土坑では、多くの住居跡が構築されていた丘陵頂部から一段降

下した狭小の平坦地から、該期の3・10～13号土坑を5基確認している。全て住居跡と隣接及び重複しており、住居跡よりやや下位に構築されている場合が多い。規模的には3号土坑のように大規模である遺構は、5・7・16号住居跡のように炉や柱穴が伴わない住居跡と形態的に類似する場合もあることから、住居跡の可能性も比定できないが、大半は2m未満のものである。これら土坑は、住居跡とはほぼセットになって存在したようにも窺え、11号土坑からは石材の原料となる石核、12号土坑からは粘土が多く確認され、住居跡に隣接して作られた貯蔵的要因が強いものと推察される。

土器埋設遺構は南西方向に連なる標高43m前後の丘陵縁辺部に4基(SM01～04)確認されている。遺存状態が悪く、上部が流出・欠損しているものや本来の状態を止めていないものであるが、埋設土器内からは別個体の資料等も出土しており、いわゆる土器棺墓としての性格を有するものである。これら埋設土器内堆積土の科学分析を行った結果、人骨の埋納を積極的に検証付ける結果は得られなかったが、出土した土器埋設遺構の大半は遺存状態が悪く、埋納土器も欠損品であることを考慮すると、リン・カルシウム含量が土器外部に流出した可能性が高い。各土器埋設遺構は土器の埋設位置や状況(正位・倒位)、器種に違いが認められるが、復元資料及び土器内から出土した資料により、壺・甕形土器による数個体(2個体)構成の合蓋土器棺墓の可能性が非常に高いものである。ここでは、本遺跡同様に標高40m前後の丘陵平坦地に立地し、多様な合蓋土器棺墓(33基)および土坑墓(47基)が確認された天神原遺跡と比較してみよう。

天神原遺跡では、土器棺の構成及び埋設状況から5形式(A～E)に分類している。ここでは正位の棺身(下方土器)に倒立した伏位の蓋(上方土器)が覆うAタイプのものが多く、壺形土器(下方土器)を倒立の状態に埋設するCタイプやEタイプ(1個体)のものは少ない傾向がある。本遺跡での土器埋設状況は3号土器埋設遺構の下方土器である埋設土器(壺形土器)が倒立の状態である他は、1・2・4号土器埋設遺構は正位あるいは正立斜位に埋設されていた可能性が非常に高い。1号土器埋設遺構の埋設土器は、壺形土器の頸部(61-1)や胴部上半の資料、蓋などの破片資料(61-6)等から数個体構成によるものと判断され、下方土器が壺か甕の胴部下半、上方土器が壺形土器によって覆置された数個体構成によるものと判断される。4号土器埋設遺構も同器種・埋設状態が類似することから、天神原遺跡Bタイプに類似しよう。壺形土器に描画された主幹文様構成からみれば、1号土器埋設遺構61-1は1本引きによる渦巻状の文様を描画し、頸部にケズリ調整を施している点で天神原遺跡13号土器棺上方土器に、4号土器埋設遺構66-1は束線具による格子文が描画されており、第1号土器棺上方土器・第10号土器棺下方土器に各々類似しようか。2号土器埋設遺構は壺か甕の胴部(62-1)を埋設している点で天神原遺跡A・B・Dタイプが想定されるが、土器内から別個体の破片資料が出土していない点で、1個体の土器を正位あるいは正立斜位において棺身としたDタイプの可能性が指摘される。3号土器埋設遺構は壺形土器の2個体構成による資料(64-1・3)で、下方土器(壺形土器)が倒立の状態に埋設されている点でCタイプと判断される。壺形土器の資料は束線具による格子文が描画され、天神原遺跡では希有の例である第5号土器棺墓に類似しよう。

本遺跡で確認された1～4号土器埋設遺構は、細尾根丘陵頂部の縁辺部のほぼ同一標高で検出されている。丘陵縁辺部で検出されたため、流出による欠損や後世の攪乱が著しく、不明な点も多いが、天神原遺跡では下方土器に壺形土器が多く使用されているのに対し、本遺跡では明確に下方土器を壺形土器としているものは3号土器埋設遺構のみである。浜通り地方では武井地区遺跡群や金沢遺跡群でも同様な傾向が認められ、大規模な墓地としての性格をもつ天神原遺跡とは異なり、土器棺墓構成内でも比較的少ないタイプのものが僅かに知られる。

次に、該期の遺構が起因する立地と遺物の出土状況についてみてみよう。遺構の立地と遺物出土状況を示した図111・137・143・155・163・164・207をみると、前述したように遺構は全て丘陵頂部及び丘陵頂部から一段降下した狭小の平坦地に立地し、調査区のほぼ中央を南に延びる丘陵を境とし、南東斜面に1・2号遺物包含層、南西斜面に3～6号遺物包含層が形成されている。遺物包含層の出土量からみれば、東・西ともにほぼ同じ遺物の出土量であるのに対し、遺構の割合は西側が少ない傾向を示し、調査区内では東・西に分離した状況を呈する。しかし、4・6号遺物包含層が形成されていた丘陵部は二次堆積が顕著で、地形的にも急斜面であるため、遺構が流出した可能性が非常に高く、これらを考慮すれば遺物包含層の分布に対応した在り方を示していたものと推察されよう。

調査区内では遺構の希有・集中部分はあるが、住居跡等の遺構がある程度集中する分布域はやはり丘陵頂部や、丘陵頂部から一段降下した狭小の平坦地である。丘陵地を中心とするこのような遺跡の在り方は、いわき地方では該期の遺物包含層の調査例は認められているものの、集落遺跡としての類例はなく、まだ明確には解明されていない。浜通り地方では本遺跡第Ⅲ群土器（桜井式）を伴う遺構が検出された武井地区遺跡群や金沢地区遺跡群の成果を基に、能登谷・小暮が詳細に論じている(1991, 1995)ように、本例のような遺跡・遺構の在り方が一般的な傾向として普遍的に存在するようである。本遺跡においては、遺構の検出状況や立地条件、調査区外を含めても継続的且つ大規模な集落構成は想定できない。

以上のように本遺跡では、遺跡中央を南に延びる丘陵頂部及び丘陵頂部から一段降下した狭小の平坦地に弥生時代の遺構が検出され、その丘陵の南西・南東向き斜面から弥生時代の遺物包含層が確認された。出土遺物は既に述べたように第Ⅰ～Ⅳ群土器に大別しているがほぼ弥生時代中期末頃に集約され、生活遺跡としての様相を示している。これら遺物の組成や立地的要因は大畑E遺跡や向山遺跡と非常に類似するものであり、特に石器組成を重視すれば、石庖丁や石鍬などの農具類が極僅かであるのに対し、扁平片刃石斧などを中心とする工具類の出土量や流紋岩系の石核・剥片の出土が際立つ。本遺跡の特徴としては遺跡全体が丘陵地であるため、地形・地質等の自然的要因に起因する部分が大きく、特に限られた狭小の平坦地を選定して2～4軒程の集落を構成し、谷部において小規模な稲作農耕などを営み、山に関わる生業を主とした弥生時代の様相が想定できよう。

(井)

第2節 古墳時代以降の遺構と遺物

本章では最初に、本遺跡の古墳時代以降の土器の変遷を検討し、さらに集落の変遷も概観する。次に、水田跡についてその時期や変遷を検討し、その意義を考えてみたい。本遺跡は隣接する大猿田遺跡や、いわき市教育委員会で調査した白岩堀ノ内遺跡(県道白岩バイパス用地調査部分)とも密接に関連していることも考慮する必要がある。

出土土器の変遷 (図208)

いわき地方における古墳時代以降の土器の研究は、中山雅弘氏によって要領良くまとめられている(中山;1996)ので、ここでは詳述しない。近年、常磐自動車道遺跡発掘調査などの大規模な調査により、飛躍的に調査例は増加している。いわき市大久保A遺跡では9～10世紀の遺構・遺物が調査され、菅原祥夫により出土土器の詳細な検討が行われている(菅原ほか;1996)。同じ四倉地区のタタラ山遺跡では、6～9世紀の遺構・遺物が調査され、安田稔・国井秀紀によって詳細な検討が行われている(安田ほか;1996)。隣接する大猿田遺跡1次調査では6～9世紀の遺構・遺物が調査され、吉野滋夫により検討されている(吉野ほか;1995)。

以上のような調査成果を踏まえて、出土土器の変遷を概観する。古墳時代以降の土器群のうち、共伴関係の明らかな土器群を中心に3時期に区分したのが、図208である。古代1期とした13号住居跡は貯蔵穴(P1)のみが遺存し、土師器甕4個体と土師器甑1個体が共伴している。食膳具を欠くので断言はできないが、長胴で頸部に稜を形成して外反する器形の甕と、球胴に近い器形の単孔の甑が共伴することから、広岡敏編年のⅥ期、栗罎式古段階併行期に対比できる(広岡;1988)。また、同じ四倉地区ではタタラ山遺跡2次調査の国井秀紀による分類の古墳時代Ⅳb群(安田ほか;1996)に対比できる。タタラ山遺跡では国井の古墳時代Ⅳa期に、TK10(田辺;1981)の須恵器が伴うことから、Ⅳa期が6世紀前半とされている。したがって、国井分類のⅣb群に並行する本遺跡の古代1期は、6世紀後半を中心とした時期と推定できる。

古代2期は1号住居跡出土土器であるが、食膳具のみで、煮炊具・調理具を欠く。丸底で底部と体部の境に段・稜を有し、内湾気味に収まる口縁部に至る器形であり、底径が小さく、平底気味の底部が特徴的である。広岡編年に単純に対比できないが、強いて言えばⅦからⅧ期、栗罎式中・新段階に比定できる(広岡;1988)。タタラ山遺跡では14号住居跡出土の土師器杯に類似し、国井分類のⅣe群に比定できる(安田ほか;1996)。したがって、7世紀後半を中心とした時期と考えられる。

古代3期はロクロ土師器出現以降の土器群である。該期の土器については常磐地域の土器を検討した中山雅弘の研究と、タタラ山遺跡の土器を検討した安田稔の研究、大猿田遺跡1次調査の土器を検討した吉野滋夫の研究を参考とした。

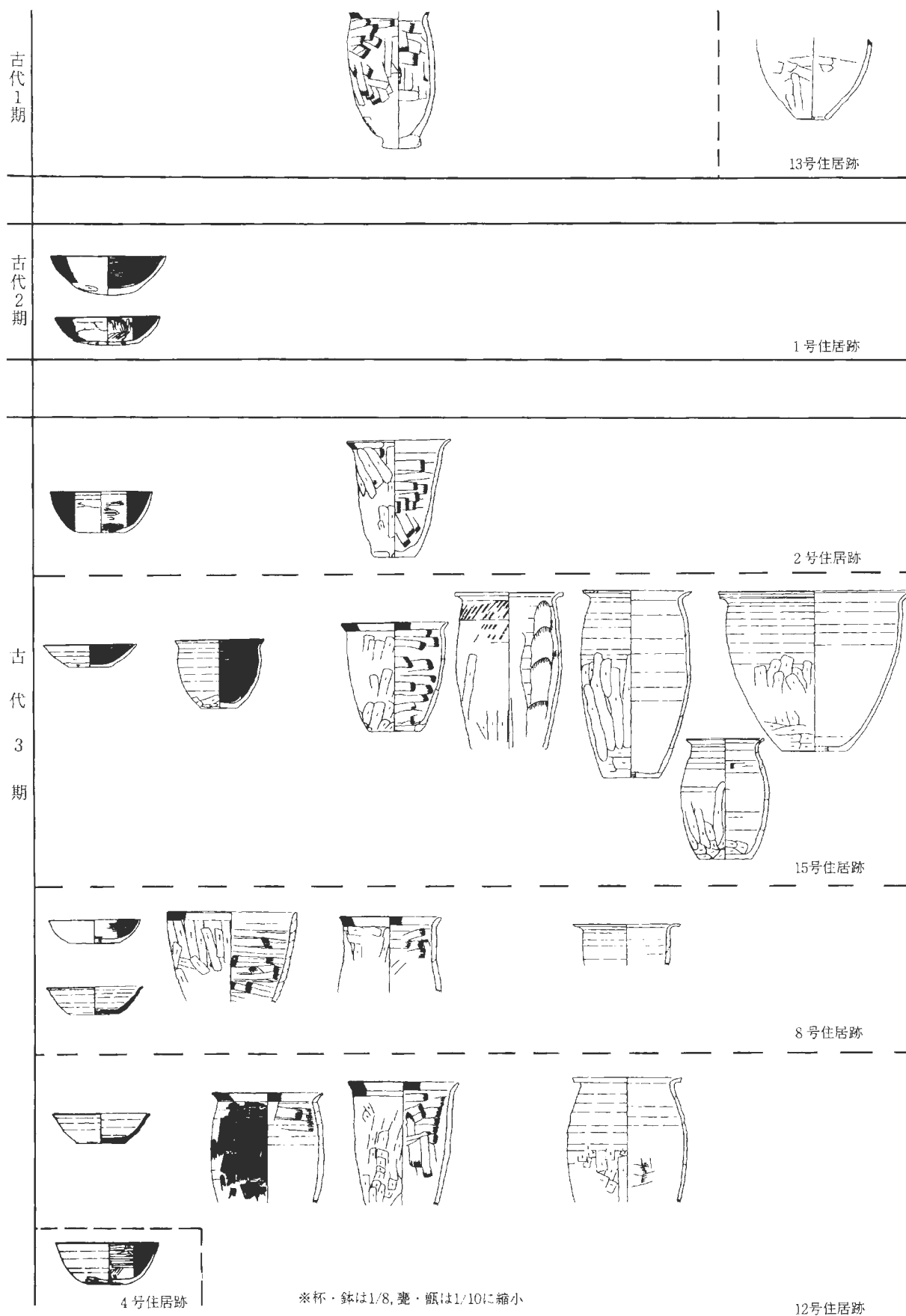


図208 古代の土器変遷

本遺跡は2・15・9・8・4号住居跡が本時期に該当する。土器組成はロクロ整形の土師器杯・大型杯、非ロクロの土師器甕、ロクロ調整の土師器甕、須恵器杯で構成される。しかし、遺構毎には欠ける器種が多く、先後関係は推定し難い。したがって、図示した序列も同時期性をはらんでいることを、断りおきたい。2号住居跡は、ロクロ整形の土師器大型杯とロクロ不調整土師器甕で構成され、大型杯は碗形を呈する器形である。15号住居跡出土では、土師器杯、ロクロ不調整の土師器甕、ロクロ調整の土師器甕で構成され、煙道に転用された土師器甕ではあるが、ロクロ調整の土師器甕が卓越する。タタキ整形痕を残す土師器甕や、大型の土師器甕もあり、多様である。

8号住居跡では土師器杯と須恵器杯、ロクロ整形の土師器甕、ロクロ不調整の土師器甕で構成される。このうち、土師器杯は器面が荒れているので断定はできないが、タタラ山遺跡4・7・8号住居跡出土土師器杯(本間ほか;1995)に類似する。8・15号住居跡出土土師器杯については、いずれもロクロ土師器出現期の形態を持つことが確認でき、土師器甕はロクロ調整と不調整の土師器甕が共存し、器形も多様性がみられる段階と評価できる。

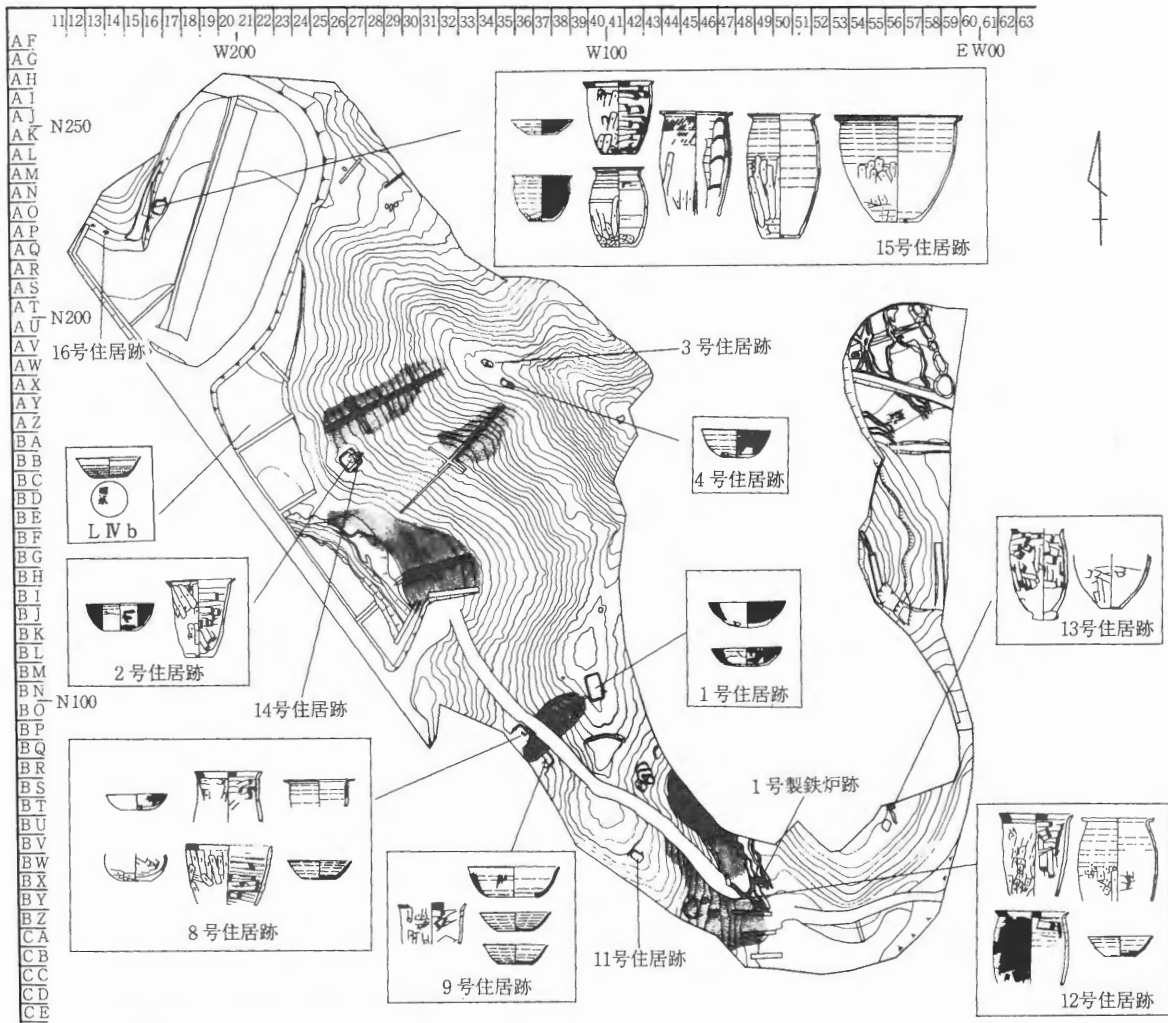
12号住居跡段階でも、ロクロ調整と不調整の土師器甕が混在するが、須恵器杯のみが伴う。須恵器杯は遺存状態が悪く、遺構も遺存状態が悪いことから、共伴関係についても確定はできなかった。4号住居跡は土師器大型杯のみで、須恵器高台付杯が共伴しているが、硯に転用されている。共伴土器が少なく、時期は確定し難い。しかし、土師器杯の形態から本遺跡では、比較的新しい時期と推定した。

ロクロ土師器の出現時期について、中山雅弘は1期－8世紀前半から中葉－と推定し(中山;1996)、安田稔は「一般に斉一化されたロクロ土師器が流布するのはやや遅れる」と断りながら、「律令制施行初期の生産地及びその近接地と生産管掌地において出土する可能性」があるとして、タタラ山遺跡では8世紀中葉と推定している(安田;1996)。したがって、古代3期は8世紀中葉を上限とすることが分かる。

下限については、「赤焼き土器」が共伴しないことから、中山編年4期を下る可能性は低く、9世紀中～後葉を下限とできる(中山;1996)。また、大猿田遺跡1次調査の吉野分類の第3土器群(吉野;1995)に対比でき、タタラ山遺跡の安田編年のVb・c期に対比(安田;1996)できる。したがって、9世紀中葉を下限とできる可能性が高い。以上の検討から、古代3期は8世紀中葉を上限とし、9世紀中葉を下限とすると推定できる。

以上、丘陵部から検出できた土器群を検討したが、最後に水田跡から出土した土器群について、共伴関係に問題はあるが、水田跡の時期を考える意味で、簡単に検討したい。既述のように、LⅢb・Ⅳbから出土した土師器・須恵器は8世紀後半から9世紀前半に比定でき、奈良・平安時代の水田跡である。それ以下の層では、LⅥbからのみ遺物が出土している。

LⅥb出土土師器は、大型壺・小型壺・甕・高杯・器台で構成され、LⅥb中の近接位置から出土したことから、共伴関係にあるものと判断した。大型壺は複合口縁になると推定され、同一個体と考えられる体部片にはヘラミガキが観察され、最大径は80cm前後と推定される。



古代の住居跡の分布と出土遺物

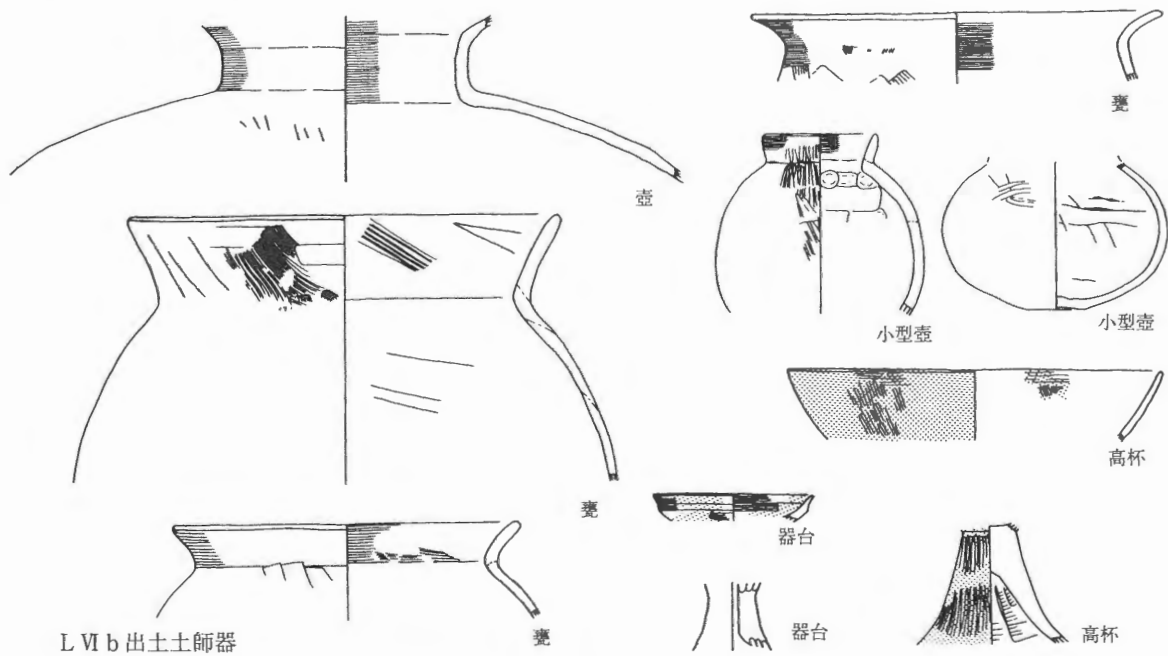


図209 古代の住居跡の分布と出土遺物，L VI b 出土土師器

甕は球形に近い体部から「く」字形に緩く外反する器形で、丁寧なハケメ調整が観察できる。小型壺は球形の体部から、直線的に外傾する口縁部に至る器形で、丁寧なヘラミガキ調整が観察できる。高杯は大型の身に裾開きの脚部が付く器形で、器面は丁寧なヘラミガキが観察でき、黒色漆・赤彩が観察される。器台は小型で口縁部が屈曲する身と、穿孔された脚部であり、裾開きの器形が想定される。器面は丁寧なヘラミガキと赤彩が観察できる。

欠落する器種があり、全形を知り得る資料は少なく、しかもいわき地方では類例の少ない土器群である。したがって、編年的な検討は十分できないが、いわき市龍門寺遺跡3号住居跡(猪狩ほか；1985)より明らかに後出的であり、夕日長者遺跡67号住居跡(鈴木ほか；1981)に並行ないしは前後する時期と推定され、内宿遺跡2号住居跡(檜村ほか；1982)まで下らないと判断される。以上から、辻秀人の編年のⅡ期からⅢ－1期(辻；1993・94)に比定できると考えられ、4世紀後半の土器群と推定される。したがって、LVIbは4世紀後半を主体として堆積したものと推定できる。

遺構の変遷 (図209)

出土土器の時期区分に基づき、遺構の時期を推定すると、以下のようになる。

古代1期	6世紀後半	13号住居跡
古代2期	7世紀後半	1号住居跡
古代3期	8世紀中葉～9世紀中葉	2・4・8・9・10・12・14・15・16号住居跡 1号製鉄炉跡, 1・16・17・18・19・20号土坑, 1号焼土跡

古代1期には谷開口部の南東向き斜面に13号住居跡が単独で存在する。連続する丘陵の大半が調査区外であるので断定はできないが、単独ないしは数軒の小規模な集落であったと推定できる。後述するようにFA(Hr-S)・FP(Hr-I)を混入する堆積層は、調査区西側水田跡でも確認はしているが、水田跡とは断定できなかった。また、調査区南側でも、水田跡は検出できなかった。したがって、古代1期の段階では水田跡は存在しなかった可能性が高い。

本遺跡は丘陵斜面に立地するという点では、同時期の集落を検出したタタラ山遺跡と共通するが、継続的な集落を形成しない点で異なる。タタラ山遺跡の性格について、安田稔は「住居の火災による終焉と石製模造品の製作を重視すれば、集落の特殊性が際立つ」とし、御城古墳群との関連を推定している(安田；1996)。本遺跡の集落は、小規模で単期的であり、既述のように水田跡が検出できなかったことは立地・環境を考慮すると、農耕ではなく「山」に関わる生業を主としていた可能性も考えられる。

古代2期についても南向き尾根上に単独で存在し、立地を考えると、調査区外を含めても継続的・大規模な集落を想定できない。該期の水田跡についても明確に検出できなかったことから、やはり主たる生業を別に求めざる得ない。したがって、古代1期と同様に立地・環境を考えると、「山」に関わる生業を想定できるが、具体的には不明である。

古代3期になると集落は調査区の南・東向き斜面・尾根上に広く展開し、水田跡が広く営まれる

一方、鉄生産も導入される。時期的にはまさに律令国家期であり、古代磐城郡における開発の進展を窺うことができる。

古代3期は、後述するようにⅢb・Ⅳb水田跡と同時期と推定され、位置関係からすると、2・4・8・9・14号住居跡との直接的な関連が推定される。したがって、住居跡群は調査区西側のⅢb・Ⅳb水田跡の経営に直接的に深く関わったものと推定される。4号住居跡では転用硯が出土し、2号住居跡付近では鍛冶炉の可能性のある1号焼土跡が検出されている。水田経営を生業としながら、多様な生活の様子が窺える。

15・16号住居跡は丘陵裾部に立地し、15号住居跡は火災に遭った住居で、土師器甕を連結して煙道に転用しており、特異な住居跡である。本住居跡の西側には、調査で検出できなかったが、プラントオパール分析(付章2)の結果、水田跡の存在が推定されている。したがって、15・16号住居跡も調査区西側の水田経営に直接関与した住居跡で、そのために特異な立地・構造にも関わらず、本住居跡群が営まれたものと判断した。

12号住居跡は1号製鉄炉跡に近接しており、製鉄炉との重複関係はないので、調査区内で判断する限りでは、1号製鉄炉と共存した可能性がある。しかし、伴出遺物がなく断定はできない。1号製鉄炉跡は縦置き of 長方形箱型炉で、踏みふいごは伴わず、羽口は少量出土し、排滓量は1t以下である。地域が異なるので単純に援用するのに問題はあがあるが、相馬地方や原町地方の製鉄炉の編年(吉田ほか;1989, 安田ほか;1990~95)を援用すると、8~9世紀代に見られる形態である。したがって、古代3期に比定される12号住居跡と共存した可能性は高い。

1号製鉄炉は製錬炉であり、生産量は少ないが、鉄生産が本調査区に導入されたことを示し、12号住居跡はそれに伴う工房跡の可能性が指摘できる。製錬炉に伴う木炭燃料生産は、本調査区では確認できないが、近接してある大猿田遺跡1次調査では3基の窖窯構造の木炭窯が調査され、8世紀中葉から後葉に比定されている。本遺跡の古代3期に対応する時期で、本遺跡の1号製鉄炉との関連性が注目される。もちろん、近接した調査区外にも木炭窯が存在する可能性がある。

10号住居跡は約3×2mと小型で、尾根上の東向き傾斜面に立地し、粘土層が掘り込まれている。出土遺物は皆無で時期を特定し難いが、規模・構造・形態から一応、古代3期に比定した。その規模や構造・立地を考慮すると、やや特異な性格の住居と考えるが、具体的には明らかにできない。

ほかに木炭焼成遺構も6基調査され、伴出遺物がなく断定はできないが、一応古代3期と推定した。鍛冶や製錬の燃料生産と推定される。この木炭焼成遺構が製錬炉・鍛冶炉などと同時期に出現してくることは、興味深い。

以上のように、古代3期―律令国家期―となると本遺跡では、水田が積極的に開発・経営され、同時に、手工業生産―鉄生産―が導入される。この律令国家期における水田開発・手工業生産の導入は、同じ四倉地区の大猿田遺跡(吉野ほか;1996)やタタラ山遺跡(本間ほか;1995, 安田ほか;1996)でも見られる現象であり、古代「磐城郡玉山郷」擬定地と考えられる本地域の歴史的な性格を考える上で、示唆的である。

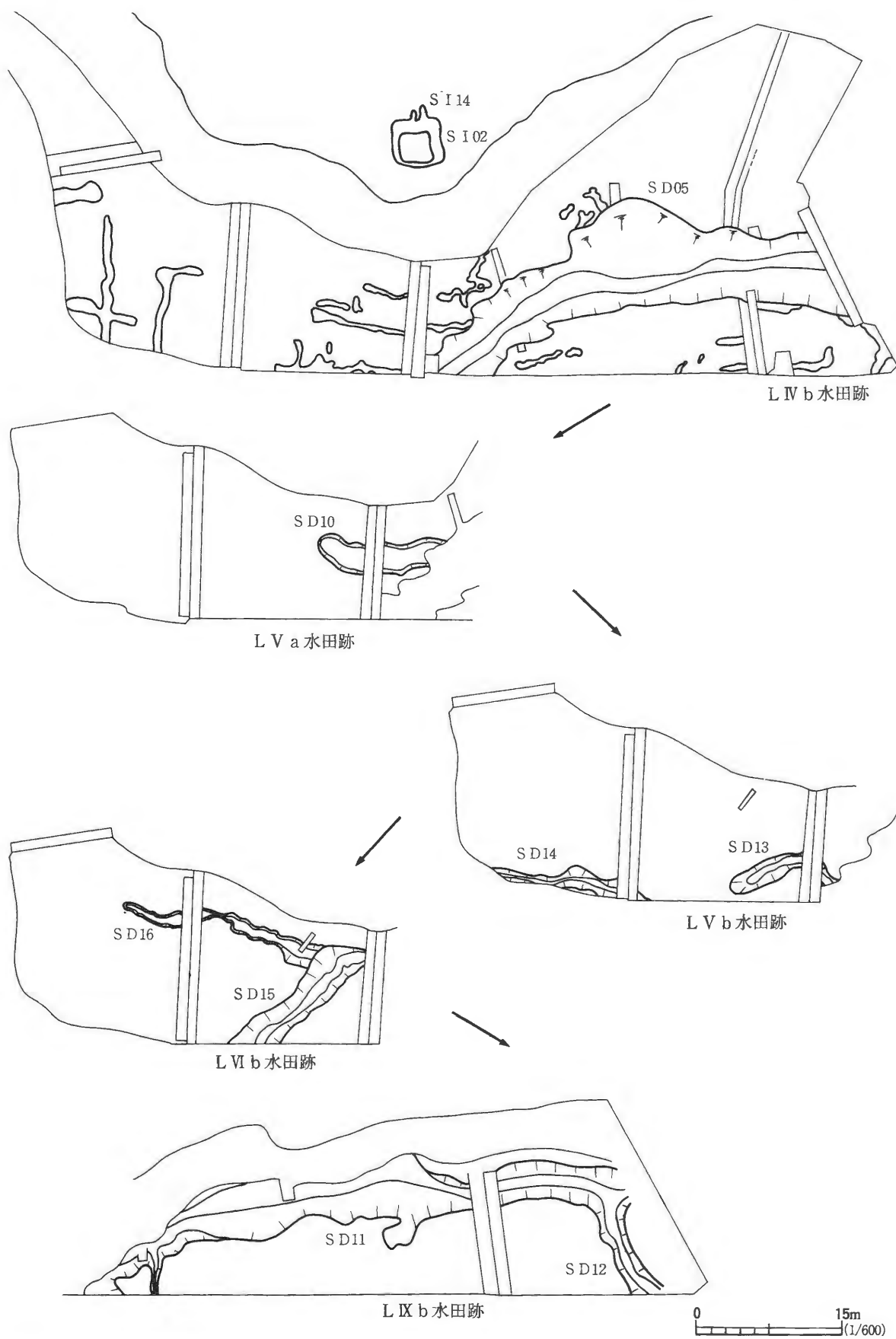


図210 水田跡変遷図

水田跡の変遷 (図210)

以上の検討から水田跡の時期を推定すると、

L Ⅲ b	8 世紀末～9 世紀前半
L Ⅳ b	8 世紀後半～9 世紀前半
L V a・b	4～8 世紀
L Ⅵ b	4 世紀後半
L Ⅸ b	4 世紀以前

となる。L V・Ⅸについては共伴遺物がなく、層位的な前後関係から推定した。各水田面の特質と変遷を以下略述する。

水田跡は調査上の不手際で、L Ⅲ b 面からしか面的に調査できなかった。しかも、L Ⅲ b 面はやや掘りすぎたので、5号溝跡のみしか検出できなかった。5号溝跡は自然流路で、堆積土は18層に細分され、流路の変遷が18回以上確認できる。出土遺物から8～9世紀の流路跡と推定でき、後述するが水田跡の排水路として機能している。

本跡からは、木製品や自然木も多数出土している。ほとんどは上流(大猿田遺跡方向)から流れてきたものと判断されるが、付章3の樹種同定の結果をみると、耐水性の強い樹種が齊一的に出土しており、樹種の選択が行われていることがわかる。したがって、水田に使用された杭・用材が流れて来た可能性が考えられる。また、自然木にはほとんど人工的な切断痕がある。したがって、本溝跡機能時には上流の大猿田遺跡周辺でも水田が営まれ、用材の切り出しなども行われた可能性が高い。

L Ⅵ b 面では、疑似畦畔が一部検出され、2区画の水田跡を調査した。水田跡では多数の足跡を検出し、畦畔状の高まりも部分的に検出した。疑似畦畔はL Ⅲ b 面の畦畔を示していると考えられ、区画は方形ないしは長方形を呈し、1区画は15～40m²と、小規模である。検出面の傾斜を考慮すると、北から南へ緩く傾斜していることが窺え、5号溝跡が排水路として機能したことが想定できる。

既述のように、東側丘陵の尾根上・中腹にある2・4・8・9・14号住居跡は、L Ⅲ b・Ⅳ b 水田跡の経営を担った人々の住居跡と推定でき、特に、2・14号住居跡はその位置や機能時期から、より直接的な関係が想定できる。

水田跡については同じ四倉町の戸田条里遺跡(猪狩ほか;1991)で弥生時代、平安時代の水田跡が調査されている。水田跡の区画・形状・規模を比較すると、面的に調査された平安時代の水田跡は条里的な地割で、比較的整然とした方形を呈し、しかも100m²を越える規模を有し、本遺跡例と異なる。一方、いわき市久世原館・番匠地遺跡の奈良・平安時代の水田跡(高島ほか;1993, 和深ほか;1996)は、同じ谷地形に立地するためか、自然流路を利用した比較的小規模な、やや不整形の方形の区画であり、本遺跡例と類似する。

L V a・V b・Ⅵ b では水田跡の区画は不明で、自然流路のみを検出した。10・13～16号溝跡は

いずれも5号溝跡に連続する上流に位置することから、出土遺物はないが、5号溝跡自体も4世紀までさかのぼる可能性が高い。しかし、その段階での溝跡の形状は不明である。L V a・V b, VI bを水田土壌と考えて調査を行ったが、調査結果とプラントオパール分析の結果(付章2)を考慮すると、水田跡とは断定できなかった。

特に、L VI bでは遺存状態の良い土師器が近接した位置から出土し、器種も構成も一応整っていたことから、住居跡は検出できなかったが、平地式住居跡などを想定すれば、古墳時代前期の集落の一部の可能性を否定できない。それは、プラントオパール分析の結果(付章2)から、当時は「乾いた環境」と推定できることも、傍証となろう。

L IX bでも水田の区画は検出できず、プラントオパール分析の結果(付章2)も水田跡としては否定的である。検出された11・12号溝跡は自然流路で、5号溝跡とはほぼ同じ位置で検出され、流れの方向も同じであるので、5号溝跡以前の流路跡と考えられる。伴出遺物はなく時期の上限については不明であるが、近接してある6号遺物包含層との関係を考慮すると、弥生時代中期末まで溯る可能性は低い。

以上、水田跡の変遷を簡単に述べてきたが、L III b・IV bは8世紀後半から9世紀前半の水田跡として確実であるが、それ以下の各面については水田跡と断定できなかった。特にL VI bについては、4世紀後半の集落の一部とも考えられ、本地域における古墳時代前期の開発を考える上で興味深い。本遺跡の所在する四倉町には、全長約118mと浜通り地方最大の前方後円墳、玉山1号墳がある。5世紀初頭に推定されているが、4世紀にさかのぼる可能性も指摘されており(渡辺ほか; 1986)、本遺跡における4世紀後半の集落の成立は、この玉山1号墳の造営主体との関わりも考える必要があろう。

(飯・村)

第3節 ま と め

本遺跡の調査時期は当初平成7年度1か年の予定であったが、水田跡の新たな発見などで平成8年度5月まで現地調査を実施する結果となった。検出遺構は竪穴住居跡16軒、土坑20基、土器埋設遺構4基、製鉄炉1基、溝跡16条、水田跡6面、遺物包含層6か所、焼土跡1基、畑跡2か所、性格不明遺構2基である。

このうち、弥生時代中期後半と考えられる遺構は、竪穴住居跡6軒、土坑5基、土器埋設遺構4基、遺物包含層6か所であり、4～9世紀の遺構は竪穴住居跡10軒、土坑9基、製鉄炉1基、溝跡12条、水田跡6面、焼土跡1基である。出土遺物は総数35,196点を数える。そのうち弥生土器27,713点、石器1,983点を数え、弥生時代中期末・天神原式期の遺物が圧倒的に多くを占める。

遺跡の詳細は既述の通りであるが、ここでは遺跡の変遷を簡単に触れたい。縄文時代後期の出土遺物はあるが、調査区内に遺構を形成するのは、弥生時代中期末からである。この時期には尾根上あるいは南・東向き斜面に竪穴住居跡・土坑などで構成される居住域を形成し、その斜面下位に遺

物包含層が形成されている。土器組成を見ると、壺・甕形土器が多い。使用痕跡も観察される物も多く、生活感が高い。

また、東向きの尾根端に集落を一望できる位置に土器埋設遺構を、象徴的に構築している。石器の組成は、農耕具より伐採・加工具が主体であり、水田跡は検出できなかったことから、生業は山に関わると考えざるを得ない。この遺跡の性格や立地・環境から、1号遺物包含層から出土した鉄製銚は、漁労具などの実用品とは考え難く、祭祀・儀礼具の可能性が指摘できる。

その後、4世紀に至り低地に小規模な集落を構成し、5世紀は空白であるが、6世紀後半に再び単独の竪穴住居が出現する。いずれの時期も調査区外に集落域が延びる可能性も否定はできないが、近接して調査したタタラ山遺跡(安田ほか;1996)、大猿田遺跡(吉野ほか;1995)の6世紀の集落跡を考慮すると、小規模な集落を想定せざるを得ない。明確な水田跡を検出できなかったことから、山に関わる生業の集落が想定できる。

律令国家期である8世紀中葉に至ると、南・東向き斜面裾部、尾根上に集落は広く営まれ、水田も、西側低地に開発される。さらに、製鉄炉跡・鍛冶炉跡・木炭焼成土坑の検出は、手工業生産への関与も想定できる。竪穴住居跡は決して多いとは言えず、大規模な集落とは言えない。しかし、律令国家期になって広く集落が展開することや、水田開発や鉄生産への関与は、集落跡の性格を考える上で重要である。

LIVbから出土した「田条」と判読できる墨書土器は、大猿田遺跡2次調査(平成9年度刊行予定)で出土した墨書土器と、文字のみならず器形・技法も同じであり、遺跡間の密接な関係を示している。大猿田遺跡の調査成果を踏まえて、再評価する必要がある。集落跡は遅くとも9世紀中葉には姿を消す。中世・近世の出土遺物は少量あるが、遺構はなく、近代の磐城セメント株式会社の生産に関連する粘土採掘痕跡や住居跡を残すのみである。

本遺跡の盛期は弥生時代中期末と律令国家期であり、いずれの時期も「山」との関わりなしに集落の成因を考えることはできない。おそらく、民俗学で言う「サトヤマ」にあるという環境が、集落の成因を規定したと考える。

(井)

引用文献

- | | | |
|--------|------|--|
| 井上 義安 | 1956 | 「常陸足洗遺跡発見の弥生式甕棺」『古代』第19・20合併号 早稲田大学考古学会 |
| 渡辺 誠 | 1962 | 「岩城地方における弥生式土器(Ⅱ)―桜井・足洗式をめぐって―」『磐城考古』第19号 磐城考古同好会 |
| 加藤 孝ほか | 1968 | 「宮戸島貝塚寺下田地区出土品に見られる弥生式文化」『仙台湾周辺の考古学的研究』宮城教育大学歴史研究会 |
| 馬目 順一 | 1972 | 『伊勢林前遺跡』いわき市埋蔵文化財調査報告第1冊 |
| 橘 善光ほか | 1975 | 「第二次大間貝塚調査概報」『北海道考古学』第11輯 |

- 中村 五郎 1976 「東北地方南部の弥生式土器編年」『東北考古学の諸問題』 寧楽社
- 馬目 順一 1976 『伊勢林前遺跡B地区』 いわき市教育委員会
- 鈴木 正博 1978 『赤浜覚書』 常総台地 9
- 鈴木 重美ほか 1981 『朝日長者遺跡・夕日長者遺跡』 いわき市教育委員会・(財)いわき市教育文化事業団
- 田辺 昭三 1981 『須恵器大成』 角川書店
- 樫村 友延ほか 1982 『内宿遺跡』 いわき市教育委員会・(財)いわき市教育文化事業団
- 馬目 順一 1982 『楢葉天神原弥生遺跡の研究』 楢葉町教育委員会
- 猪狩 忠雄 1983 『四郎作遺跡』 いわき市教育委員会・(財)いわき市教育文化事業団
- 佐藤 次男ほか 1983 「関東東部」『弥生土器』Ⅱ ニューサイエンス社
- 馬目 順一 1983 「東北南部」『弥生土器』Ⅱ ニューサイエンス社
- 第16回埋蔵文化財研究会事務局 1984 「弥生時代から古墳時代初期における鉄製品をめぐって」
『埋蔵文化財研究会第16回研究集会資料』
- 猪狩 忠雄ほか 1985 『龍門寺遺跡』 いわき市教育委員会・(財)いわき市教育文化事業団
- 海老原 稔 1986 「茨城県における中期後半の弥生式土器について」『第7回三県シンポジウム東日本における中期後半の弥生土器』北武蔵古代文化研究会・千曲川水系古代文化研究会・群馬県考古学談話会
- 中山 雅弘ほか 1986 『向山遺跡』 いわき市教育委員会・(財)いわき市教育文化事業団・建設省磐城国道事務所
- 渡辺 一雄ほか 1986 『いわき市史 第1巻 原始・古代・中世』 いわき市
- 広岡 敏 1988 「福島県いわき地方の土師器」『シンポジウム「福島県に於ける古代土器の諸問題ー特に5～7世紀を中心としてー」』万葉の里シンポジウム実行委員会・鹿島町教育委員会
- 三宅 宗議ほか 1988 『五松山洞窟遺跡』 宮城県石巻市教育委員会
- 御堂島 正 1989 「挾入打製石庖丁の使用痕分析ー南信州弥生時代における打製石器の機能ー」『古代文化』41巻 第6号
- 吉田 秀享ほか 1989 『相馬地域開発関連遺跡調査報告』Ⅰ 福島県教育委員会・(財)福島県文化センター・地域振興整備公団
- 岩手県立博物館 1990 『北の鉄文化』 (財)岩手県文化振興事業団
- 佐藤 典邦ほか 1990 『大畑E遺跡』 いわき市教育委員会・(財)いわき市教育文化事業団
小名浜港湾建設事務所
- 須藤 隆 1990 「東北地方における弥生文化」『考古学古代史論及』 伊東信雄先生追悼論文集刊行会

- 安田 稔ほか 1990 『原町火力発電所関連遺跡調査報告』Ⅰ～Ⅶ 福島県教育委員会・(財)福島県文化センター・東北電力株式会社
- 猪狩 忠雄 1991 『戸田条里遺跡』 いわき市教育委員会・(財)いわき市教育文化事業団
- 藤原 妃敏 1991 「福島県浜通り地域における弥生時代石器生産の一樣相」『福島県立博物館紀要』第5号 福島県立博物館
- 田中 敏
- 竹島 國基編 1992 「桜井」 『竹島コレクション考古図録第3集』
- 大竹 憲治 1993 『双葉・陣場沢弥生遺跡の研究』 福島県双葉町教育委員会
- 川越 哲志 1993 『弥生時代の鉄器文化』 雄山閣
- 菊池 芳郎 1993 『企画展 東北からの弥生文化』 福島県立博物館
- 斉野 裕彦 1993 「弥生時代の大型直縁刃石器(上)」『弥生文化博物館研究報告』2 弥生文化博物館
- 高島 好一ほか 1993 『久世原館・番匠地遺跡』 いわき市教育委員会・(財)いわき市教育文化事業団
- 辻 秀人ほか 1993 「東北南部における古墳出現期の様相」『東日本における古墳出現過程の再検討』 日本考古学協会新潟大会実行委員会
- 石井 日出志 1994 「東日本の大陸系磨製石器—木工具と穂積み具—」『考古学研究』第41巻第2号 考古学研究会
- 井 憲治ほか 1994 「第2・8編」『原町火力発電所関連遺跡調査報告』Ⅳ 福島県教育委員会・(財)福島県文化センター
- 樫村 友延 1994 『上ノ内遺跡』 いわき市教育委員会・(財)いわき市教育文化事業団
- 鈴木 源 1994 「双葉・南迫遺跡」 福島県双葉町教育委員会
- 辻 秀人 1994 「東北南部における古墳出現期の土器編年—その1 会津盆地—」『東北学院大学 歴史学・地理学』第26号 東北学院大学
- 菊池 俊彦 1995 「東北アジア古代文化の研究」 北海道大学図書刊行会
- 小暮 伸之ほか 1995 『原町火力発電所関連遺跡調査報告』Ⅵ 福島県教育委員会・(財)福島県文化センター
- 斉藤 義弘ほか 1995 『勝口前畑遺跡』2 福島市教育委員会・(財)福島市振興公社・建設省東北地方建設局福島工事事務所
- 鈴木 源 1995 「桜井式土器論序説—いわゆる天神原式土器との関連をめぐって—」『みちのく発掘』 菅原文也先生還暦記念論集刊行会
- 吉田 秀享 1995 「弥生時代の主体的土器と客体的土器について—桜井式・天神原式・川原町口式平行沈線文土器をめぐって—」『論集しのぶ考古』論集しのぶ考古刊行委員会
- 吉野 滋夫ほか 1995 『常磐自動車道遺跡調査報告6 大猿田遺跡(1次調査)』 福島県教育委

- 員会・(財)福島県文化センター・日本道路公団
- 本間 宏ほか 1995 「第6編タタラ山遺跡(1次調査)」『常磐自動車道遺跡調査報告4』
福島県教育委員会・(財)福島県文化センター・日本道路公団
- 辻 秀人 1995 「東北南部における古墳出現期の土器編年ーその2ー」『東北学院大学歴史
学・地理学』第27号 東北学院大学
- 菅原 祥夫ほか 1996 「第3編大久保A遺跡」『常磐自動車道遺跡調査報告8』 福島県教育委員
会・(財)福島県文化センター・日本道路公団
- 中山 雅弘 1996 「古代常磐地域における土器様相」『物質文化』60 物質文化研究会
- 安田 稔ほか 1996 『常磐自動車道遺跡調査報告9 タタラ山遺跡(2次調査)』 福島県教育
委員会・(財)福島県文化センター・日本道路公団
- 和深 俊夫ほか 1996 『番匠地遺跡』 いわき市教育委員会・(財)いわき市教育文化事業団

表4 土坑一覧

() は遺存値を示す

土坑 番号	挿図 番号	規 模 (cm)			長軸方向	形 態	時 期	備 考	写 真 番 号
		上 端	下 端	深さ					
SK01	44	105×83	92×60	30	N14° E	長方形	不明	木炭焼成遺構	34
SK02	44	150×150	70×40	150	N71° E	正方形	近世末～近代	井戸跡	34
SK03	44	333×269	184×161	58	N54° W	不整形	弥生時代中期末		34
SK04	45	(468)×(318)	—	—	N80° W	不整形	近代以降	未掘	34・35
SK05	46	468×(300)	228×204	109	N68° W	不整形	近代以降		35・36
SK06	46	(516)×294	—	—	N30° W	長方形	近代以降	未掘	35・36
SK07	47	300×240	252×198	61	N22° W	不整形	近代以降		35・36
SK08	47	(672)×348	—	—	N22° W	隅丸長方形	近代以降	未掘	35・36
SK09	48	(600)×(564)	(528)×450	96	N 0° E	不整形	近代以降	底面に灰の堆積層	35・37
SK10	48	132×116	88×80	43	N68° W	楕円形	弥生時代中期末		37
SK11	49	216×196	156×140	60	N75° W	楕円形	弥生時代中期末	天神原式期	37
SK12	49	170×140	132×106	67	N83° W	長方形	弥生時代?		37
SK13	49	280×164	140×68	99	N80° W	長方形	弥生時代?		38
SK14	50	584×452	—	—	N35° W	不整形	近代以降	未掘	38
SK15	51	(85)×38	(63)×28	88	N67° E	楕円形	不明		38
SK16	51	129×80	101×50	48	N14° W	隅丸長方形	不明	木炭焼成遺構	38・39
SK17	51	109×80	92×63	35	N 8° W	隅丸長方形	不明	木炭焼成遺構	39
SK18	51	90×63	75×57	29	N61° W	楕円形	不明		39
SK19	51	144×124	128×80	24	N48° E	楕円形	奈良・平安時代		
SK20	51	216×192	180×160	35	N39° W	正方形	奈良・平安時代		

表5 出土石器一覧(1)

() : 依存値 未 : 未成品 欠 : 欠損品

挿 番 号	出土位置・層位	形 態	最大長 (cm)	基部幅 (W1, cm)	最大幅 (W2, cm)	最大厚 (cm)	重 量 (g)	石 質	写真 番号	備 考
75-8	SD09 ℓ 1	石鏃 (凸基部欠損)	(1.8)	—	(1.4)	0.7	2	流紋岩	157	
118-1	SH01 BV47 LIV a	石鏃 (凸基部欠損)	(1.5)	—	1.5	0.5	1	玉髓	183	
25-23	SI06 ℓ 2	ドリル	2.4	—	0.9	0.7	1	鉄石英	132	
20-1	SI03 床直	太型蛤刃石斧	11.7	4.4	5.1	3.3	300	ヒン岩	128	
59-9	SD06 ℓ 2	太型蛤刃石斧 (未)	7.1	—	6.0	4.0	202	泥岩	156	
118-2	SH01 BS43 LIV	太型蛤刃石斧	(11.5)	5.8	6.3	4.5	550	ヒン岩	183	
118-3	SH01 BW47 LIV a	太型蛤刃石斧 (未)	(10.7)	—	7.5	4.2	524	ヒン岩	183	
133-1	SH02 BY48 LIV a	太型蛤刃石斧 (欠)	(11.5)	—	6.8	4.1	516	ヒン岩	199	
133-2	SH02 BY48 LIV a	太型蛤刃石斧 (欠)	(12.2)	—	8.0	6.0	800	ヒン岩	199	
100-8	AZ23 LV a	太型蛤刃石斧 (未)	(13.0)	—	12.2	7.3	1,200	閃緑岩		水田跡
89-14	SD05 下層	挟り入り両刃石器	13.1	—	6.1	3.6	534	ヒン岩	160	
118-4	SH01 BT45 LIV	挟り入り両刃石器	11.3	—	5.6	3.2	338	ヒン岩	183	
151-1	SH04 BB33 不明	挟り入り両刃石器 (欠)	(11.4)	—	6.4	4.2	472	安山岩	217	刃部欠損
159-2	SH05 BQ35 LIV	挟り入り両刃石器	15.5	—	6.6	3.4	590	ヒン岩	224	太型蛤刃転用
133-8	SH02 CA48 LIV a	両刃石器 (欠)	(9.0)	3.5	5.8	2.6	240	ヒン岩	199	
159-3	SH05 BP39 LIV	両刃石器	17.5	3.3	9.7	3.2	620	ヒン岩	224	刃部再調整
190-4	表採	両刃石器	9.2	—	10.3	2.7	319	ヒン岩	261	板状石器転用
23-8	SI05 ℓ 2	扁平片刃石斧	7.2	—	(7.4)	2.2	112	緑色片岩		
26-9	SI07 ℓ 1	扁平片刃石斧	4.9	1.8	(2.8)	0.7	10	頁岩	132	小型
33-11	SI11 ℓ 1	扁平片刃石斧	6.9	2.8	3.9	1.8	63	泥岩	135	
33-12	SI11 ℓ 1	扁平片刃石斧	8.5	3.2	5.6	1.8	126	蛇紋岩	135	
118-5	SH01 BT44 LIV	扁平片刃石斧	6.2	2.1	3.2	1.1	24	泥岩	182	小型
118-6	SH01 BW47 LIV a	扁平片刃石斧	7.3	3.2	4.2	2.1	72	泥岩	182	
118-7	SH01 BS45 LIV a	扁平片刃石斧	8.0	2.2	2.8	1.5	37	シルト岩	182	
118-8	SH01 BS44 LIV	扁平片刃石斧	(4.9)	3.8	(4.6)	1.1	32	泥岩	182	
119-1	SH01 BW47 LIV a	扁平片刃石斧 (未)	10.2	—	5.1	2.4	137	シルト岩	182	赤色付着物
133-3	SH02 CB49 LIV a	扁平片刃石斧	7.8	2.1	3.4	1.3	35	緑色片岩	198	
133-4	SH02 CA48 LIV a	扁平片刃石斧 (欠)	(5.1)	—	4.4	1.5	37	緑色片岩		
133-5	SH02 CA47 LIV a	扁平片刃石斧 (欠)	(6.2)	—	(5.2)	1.9	64	緑色片岩	198	
133-6	SH02 CA48 LIV a	扁平片刃石斧 (未)	7.0	3.5	4.3	2.1	77	緑色片岩	198	
133-7	SH02 BV43 LIV a	扁平片刃石斧	10.6	3.7	4.9	1.3	100	緑色片岩	198	
140-6	SH03 AZ27 LIV	扁平片刃石斧	8.0	3.6	3.9	1.1	54	泥岩	204	
151-2	SH04 BA34 LIV下	扁平片刃石斧 (未)	7.6	4.0	(4.7)	2.0	70	泥岩	216	

表5 出土石器一覧(2)

() : 依存値 未 : 未成品 欠 : 欠損品

挿 番 号	出土位置・層位	形 態	最大長 (cm)	基部幅 (W1, cm)	最大幅 (W2, cm)	最大厚 (cm)	重 量 (g)	石 質	写真 番号	備 考
151-3	SH04 BA34 L L V	扁平片刃石斧(未・欠)	(4.2)	—	(5.2)	1.8	36	蛇紋岩	216	
151-4	SH04 BA34 L V'	扁平片刃石斧(未)	6.3	—	6.2	2.0	95	泥岩	216	
159-4	SH05 BQ37 L II	扁平片刃石斧	10.7	4.3	(5.5)	1.8	134	泥岩		
179-1	SH06 BF30 L V	扁平片刃石斧(未)	6.1	2.6	3.1	1.2	24	泥岩	244	
179-2	SH06 BF30 L V	扁平片刃石斧(欠)	(6.7)	2.5	3.4	1.8	42	泥岩	244	
179-3	SH06 BF30 L V	扁平片刃石斧(欠)	(5.7)	—	3.4	2.0	33	シルト岩	245	
179-4	SH06 BG32 L V	扁平片刃石斧(未)	(10.9)	5.5	8.1	2.9	142	頁岩	245	
179-5	SH06 BG30 L V	扁平片刃石斧(未)	7.7	3.2	(3.8)	1.7	70	緑色片岩	244	
190-1	BR38 L V	扁平片刃石斧(未)	6.9	2.9	4.5	0.7	26	泥岩	258	
33-9	SI11 ℓ 1	ノミ形石器	8.9	—	2.5	1.8	70	泥岩	135	
33-10	SI11 ℓ 1	ノミ形石器(未)	9.5	—	2.5	1.6	61	シルト岩	135	刃部欠損
140-7	SH03 AZ27 L V	ノミ形石器	9.8	—	2.9	1.3	66	泥岩	204	
159-1	SH05 BO39 L V	ノミ形石器(未・欠)	4.1	—	3.8	1.3	32	泥岩	223	
119-3	SH01 BT45 L V	石庖丁(未)	4.1	—	11.1	0.9	46	泥岩		
119-2	SH01 BS44 L V	磨製石斧(欠)	10.6	4.9	5.4	3.2	270	泥岩	184	刃部欠損
120-1	SH01 BT45 L V a	打製石器	15.5	—	12.5	6.1	1,500	閃緑岩	184	
120-2	SH01 BT45 L V a	打製石器	9.5	—	6.8	4.3	334	泥岩	184	
120-3	SH01 BT45 L V a	打製石器(未)	5.0	—	6.5	2.7	104	泥岩	184	
180-1	SH06 BF29 L V	打製石器	4.0	—	5.2	1.0	32	緑色片岩	249	
180-2	SH06 BF29 L V	打製石器(未)	10.1	—	8.5	2.3	213	緑色片岩	249	刃部欠損
180-3	SH06 BG31 L V	打製石器	11.5	—	8.1	2.8	267	閃緑岩	249	
180-4	SH06 BE27 L V	打製石器	11.0	—	7.8	2.7	237	閃緑岩	249	
180-5	SH06 BF29 L V	打製石器(未)	(8.1)	—	9.3	2.6	252	閃緑岩	249	刃部欠損
96-15	AZ23 L V a	打製石器(未)	8.9	—	7.6	3.7	254	シルト岩		水田跡
190-2	BT43 L I	打製石器	8.3	—	10.0	3.1	340	閃緑岩	259	転用品?
190-3	BU40 L I	打製石器	(15.3)	—	(10.7)	4.0	670	緑色片岩	259	
18-19	SI02 ℓ 2	大型板状石器	20.2	—	19.4	3.8	1,820	ヒン岩	125	コーングロス
179-6	SH06 BG33 L V	大型板状石器	7.4	—	14.8	3.2	338	閃緑岩	246	両端に抉り
179-7	SH06 BJ31 L V	大型板状石器	14.0	—	9.3	3.8	580	閃緑岩		コーングロス
134-2	SH02 CA49 L V a 上	板状石器	9.0	—	12.3	1.9	262	泥岩	199	刃部に光沢
96-16	BJ28 L V a	板状石器	6.5	—	13.2	1.6	156	緑色片岩		水田跡
25-27	SI06 ℓ 1	環状石器(欠)	(9.3)	—	(5.9)	3.0	222	閃緑岩		
25-28	SI06 ℓ 2	環状石器(欠)	(9.8)	—	10.0	3.3	296	閃緑岩		

表5 出土石器一覧(3)

(): 依存値 未: 未成品 欠: 欠損品

挿 番 号	出土位置・層位	形 態	最大長 (cm)	基部幅 (W1,cm)	最大幅 (W2,cm)	最大厚 (cm)	重 量 (g)	石 質	写真 番号	備 考
152-1	SH04 BA34 LIV下	環状石器 (欠)	(17.3)	—	(8.5)	(3.0)	550	閃緑岩	217	
180-6	SH06 BI32 LIV	環状石器 (未)	10.0	—	10.5	3.4	331	閃緑岩	248	
59-10	SD06a ℓ 2	敲打器	5.8	—	6.5	4.9	224	流紋岩		
134-1	SH02 BY48 LIV	敲打器	17.1	—	5.5	2.6	296	頁岩	199	
160-1	SH05 BQ36 LIV	敲打器	12.5	—	6.1	6.0	480	花崗岩質 砂岩	224	
160-2	SH05 BQ37 LIII	敲打器	16.9	—	10.9	7.6	1,450	閃緑岩	224	
180-7	SH06 BG30 LIV	敲打器	14.1	—	5.5	2.4	216	花崗岩質 砂岩	248	
190-5	BA57 LIV	敲打器	(10.0)	—	5.8	4.3	291	緑色片岩	258	太型蛤刃転用?
120-4	SH01 BS44 LIV	磨石	9.7	—	6.3	4.6	375	チャート		黒色付着物
100-7	BE25 LV	磨石/砥石	18.5	—	15.0	8.7	2,420	細粒砂岩		水田跡
37-7	SI13 カマド床面	石皿	10.8	—	11.3	5.4	805	中粒砂岩		二次加熱痕
122-3	SH01 BT45 LIVa	石皿 (欠)	(10.6)	—	(18.1)	3.6	740	閃緑岩		
134-5	SH02 CA46 LIVa	砥石 (欠)	(3.0)	—	2.5	1.6	22	鉄石英		
191-1	AW54 LII	砥石 (欠)	(6.8)	—	(5.7)	2.1	84	細粒砂岩		
191-2	AU58 LII	砥石 (欠)	(3.4)	—	(1.9)	0.8	7	泥岩		
191-3	AX55 LII	砥石 (欠)	(4.1)	—	2.2	1.2	18	流紋岩		
191-4	AU54 LII	砥石 (欠)	(10.0)	—	5.4	2.2	138	細粒砂岩		
25-22	SI06 ℓ 2	スクレイパー	5.0	—	3.3	1.5	20	流紋岩	130	
121-1	SH01 BW48 LIVa	スクレイパー	5.5	—	3.3	1.1	16	流紋岩		
121-2	SH01 BS45 不明	不定形石器	2.7	—	2.6	1.0	7	玉髄		両極同時剥離
152-2	SH04 BA33 LIVa	不定形石器	2.2	—	2.2	0.6	4	鉄石英	217	
152-3	SH04 AZ34 LIV上	不定形石器	2.7	—	2.2	1.0	5	鉄石英	217	
89-15	SD05 下層	剥片	10.9	—	13.3	3.8	610	ヒン岩	159	
23-5	SI05 ℓ 2	剥片	1.4	—	2.3	0.7	2	玉髄		
23-6	SI05 ℓ 2	剥片	1.4	—	0.6	0.6	2	玉髄		
23-7	SI05 ℓ 2	剥片	2.3	—	1.3	1.3	4	玉髄		
23-9	SI05 ℓ 1	剥片 (微細剥離)	4.0	—	3.3	0.9	10	流紋岩		(R・F)
25-24	SI06 ℓ 2	剥片	2.6	—	2.2	1.5	4	玉髄		
25-25	SI06 ℓ 1	剥片	2.8	—	1.5	1.0	4	玉髄	130	
25-26	SI06 ℓ 2	剥片	2.2	—	1.4	0.6	2	玉髄	130	
31-3	SI10 溝 ℓ 1	剥片	2.1	—	1.6	0.7	2	鉄石英		
121-3	SH01 BW47 LIVa	剥片	2.3	—	2.0	0.7	4	玉髄		
121-4	SH01 BS45 不明	剥片	2.9	—	3.4	0.8	5	流紋岩		使用痕

表5 出土石器一覧(4)

() : 依存値 米 : 未成品 欠 : 欠損品

挿 図 番 号	出土位置・層位	形 態	最大長 (cm)	基部幅 (W1, cm)	最大幅 (W2, cm)	最大厚 (cm)	重 量 (g)	石 質	写真 番号	備 考
121-5	SH01 BS45 不明	剥片	4.6	—	3.5	1.1	13	流紋岩		使用痕
121-6	SH01 BS43 LI	剥片	6.5	—	5.2	1.8	51	細粒砂岩		使用痕
134-3	SH02 CA48 LIVa	剥片 (微細剥離)	7.1	—	5.3	2.1	70	流紋岩		
134-4	SH02 CA48 LIVa	剥片 (微細剥離)	6.9	—	5.2	2.3	72	流紋岩		
152-4	SH04 BA34 LIV下	剥片	7.4	—	7.8	2.2	106	流紋岩		
23-10	SI05 ℓ1	石核	6.8	—	7.2	4.1	189	流紋岩		
52-21	SK11 ℓ1	石核	4.8	—	4.1	2.5	50	玉髓		
52-22	SK11 ℓ2	石核	4.9	—	6.9	4.0	224	黒色玉髓		
59-11	SD06 ℓ2	石核	8.2	—	7.4	6.9	458	流紋岩		
59-12	SD06a ℓ2	石核	7.5	—	5.0	2.7	85	流紋岩		
121-7	SH01 BW48 LIVa	石核	5.0	—	4.1	2.5	58	鉄石英		
121-8	SH01 BW47 LIVa	石核	4.7	—	3.1	2.1	26	鉄石英		
121-9	SH01 BW47 LIVa	石核	4.6	—	3.1	2.3	29	鉄石英		
122-1	SH01 BV49 LIVa	石核	10.0	—	7.7	4.8	372	流紋岩		
122-2	SH01 BT47 LIVa上面	石核	18.3	—	17.2	5.3	1,200	細粒砂岩		
134-6	SH02 BY48 LIVa	石核	6.8	—	5.8	3.0	135	チャート		

表6 出土木製品一覧(1)

挿 図 番 号	出 土 位 置	製 品 名 称	法 量 (cm)			木取り	樹 種	時 代 ・ 時 期	写 真 番 号
			長 さ	幅	厚 み				
88-4	AX20 LⅢb	杭	12.7	4.4	4.5	芯持ち			157
88-5	AX20 LⅢb	杭	13.8	4.4	4.6	芯持ち	マツ属複維管束亜属	奈良・平安時代	157
88-6	AW21 LⅢb	杭	18.3	3.4	3.3	芯持ち			157
88-7	BE28 LⅢb	杭	18.3	3.2	3.3	芯持ち	マツ属複維管束亜属	奈良・平安時代	157
88-8	BF28 LⅢb	杭	25.7	3.3	3.2	芯持ち	マツ属複維管束亜属	奈良・平安時代	157
88-9	AX21 LⅢb	杭	42.4	3.5	3.4	芯持ち	マツ属複維管束亜属	奈良・平安時代	156
88-10	AX20 LⅢb	杭	41.1	2.8	2.6	芯持ち	マツ属複維管束亜属	奈良・平安時代	156
88-11	AX22 LⅢb	杭	37.4	4.7	5.0	芯持ち	マツ属複維管束亜属	奈良・平安時代	156
88-12	AW21 LⅢb	杭	31.5	4.7	4.9	芯持ち	マツ属複維管束亜属	奈良・平安時代	156
88-13	AX20 LⅢb	杭	25.3	4.2	4.2	芯持ち	マツ属複維管束亜属	奈良・平安時代	156
88-14	AX21 LⅢb	杭	25.9	4.0	4.0	芯持ち	マツ属複維管束亜属	奈良・平安時代	157
88-15	AX20 LⅢb	杭	24.8	7.2	8.2	芯持ち	マツ属複維管束亜属	奈良・平安時代	157
88-16	BC28 LⅢb	板 材	24.7	2.4	1.7	柃 目	モミ属	奈良・平安時代	157
88-17	BC25 LⅢb	板 材	35.3	4.4	1.6	板 目	モミ属	奈良・平安時代	157
90-1	SD05 上層	角 材	50.0	4.7	5.4	柃 目	マツ属複維管束亜属	奈良・平安時代	159

表6 出土木製品一覧(2)

挿 図 番 号	出 土 位 置	製 品 名 称	法 量 (cm)			木取り	樹 種	時 代 ・ 時 期	写 真 番 号
			長 さ	幅	厚 み				
90-2	SD05 上層	杭	54.3	5.3	5.7	芯持ち	モミ属	奈良・平安時代	159
90-3	SD05 上層	杭	41.5	4.4	4.7	芯持ち	マツ属複維管束亜属	奈良・平安時代	159
90-4	SD05 上層	杭	71.8	7.0	7.2	芯持ち	マツ属複維管束亜属	奈良・平安時代	159
90-5	SD05 上層	杭	29.1	3.8	4.0	芯持ち	マツ属複維管束亜属	奈良・平安時代	160
90-6	SD05 上層	杭	25.1	11.1	10.9	芯持ち	マツ属複維管束亜属	奈良・平安時代	160
90-7	SD05 上層	杭	18.0	6.8	6.6	芯持ち			160
90-8	SD05 上層	杭	19.3	2.0	2.1	芯持ち	マツ属複維管束亜属	奈良・平安時代	160
90-9	SD05 上層	杭	22.3	4.6	3.1	柱目	マツ属複維管束亜属	奈良・平安時代	160
90-10	SD05 上層	杭	24.3	4.3	3.3	柱目	マツ属複維管束亜属	奈良・平安時代	160
90-11	SD05 上層	杭	35.2	3.5	3.7	芯持ち	モミ属	奈良・平安時代	159
90-12	SD05 上層	杭	31.5	3.0	3.1	芯持ち	マツ属複維管束亜属	奈良・平安時代	160
90-13	SD05 上層	杭	25.5	4.2	4.5	芯持ち	マツ属複維管束亜属	奈良・平安時代	160
91-1	SD05 下層	杭	51.2	3.3	3.4	芯持ち	広葉樹(環孔材)	奈良・平安時代	161
91-2	SD05 下層	杭	44.3	5.3	5.4	芯持ち	モミ属	奈良・平安時代	161
91-3	SD05 下層	杭	20.8	3.9	4.1	芯持ち	マツ属複維管束亜属	奈良・平安時代	161
91-4	SD05 下層	杭	25.8	4.8	5.0	芯持ち	マツ属複維管束亜属	奈良・平安時代	161
91-5	SD05 下層	不 明	31.2	8.2	6.1	芯持ち			161
91-6	SD05 下層	杭	16.1	3.4	3.6	芯持ち	マツ属複維管束亜属	奈良・平安時代	161
91-7	SD05 下層	杭	15.6	2.3	2.8	芯持ち	モミ属	奈良・平安時代	161
92-1	SD05 上層	不 明	10.5	3.0	1.8	柱目			160
92-2	SD05 上層	板 材	30.7	4.8	1.9	柱目	コナラ属アカガシ亜属	奈良・平安時代	161
92-3	SD05 上層	不 明	51.6	8.0	3.5	柱目	クリ	奈良・平安時代	160
92-4	SD05 上層	不 明	32.4	6.2	4.1	柱目			161
92-5	SD05 上層	板 材	106.5	5.3	1.5	板目	モミ属	奈良・平安時代	161
104-4	BI28 LVI b	杭	22.0	5.8	6.0	芯持ち			161
104-5	BI28 LVI b	杭	18.5	4.2	4.2	芯持ち	マツ属複維管束亜属	奈良時代	161
104-6	BH28 LVI b	杭	25.8	3.4	3.8	芯持ち	クリ	奈良時代	161
104-7	BE24 LVI b	杭	28.5	3.8	4.2	芯持ち	マツ属複維管束亜属	奈良時代	161
104-8	BH26 LVI b	杭	32.5	5.0	5.3	芯持ち	マツ属複維管束亜属	奈良時代	
104-9	BI28 LVI b	杭	32.5	9.1	8.0	芯持ち	マツ属複維管束亜属	奈良時代	
104-10	BE24 LVI b	杭	42.0	5.9	5.5	芯持ち	マツ属複維管束亜属	奈良時代	161
104-11	BH28 LVI b	杭	31.8	6.5	5.9	芯持ち	マツ属複維管束亜属	奈良時代	

付章 1 いわき市白岩堀ノ内遺跡の火山灰分析

株式会社 古環境研究所

1 はじめに

福島県域には、安達太良火山をはじめとして吾妻火山や磐梯火山さらに沼沢火山などの第四紀火山が分布している。これらの火山は少なくとも中期更新世以降を通して大量のテフラ（火山碎屑物、いわゆる火山灰）を福島県域にもたらした。さらにこの地域には、浅間火山、榛名火山、十和田火山のほか九州や中国地方の火山の噴火に由来するテフラも多く分布しており、これらのテフラを利用して地層の重なり（地質層序）を明らかにできるようになっている。これらテフラの中には、理化学的な年代測定をはじめとする多くの手法により噴出年代が明らかにされた示標テフラがあり（たとえば、早田；1993）、これらを過去の時間と空間の軸として編年を行う火山灰編年学（テフロクロノロジー）が、福島県域の考古学研究でも盛んに行われるようになってきている。

谷底平野部の地層を良好に観察できた白岩堀ノ内遺跡の土層断面でも、地質調査により土層の観察記載を行うとともに、テフラ検出分析を行って示標テフラの検出と屈折率測定を試み、土層の堆積年代に関する資料を収集することになった。調査分析の対象となった地点は、A地点（基本土層西側）、B地点（基本土層東側）、C地点（北トレンチ）の3地点である（図1）。

2 土層の層序

(1)A地点（図1）

本地点では、下位より黒泥層（層厚20cm，Ⅸ a層）、灰色砂層（層厚4 cm，Ⅶ b層）、黒灰色泥層（層厚7 cm，Ⅶ a層）、灰色シルト層（層厚9 cm，Ⅵ b層）、黒泥層（層厚7 cm，Ⅵ a層）、灰色砂層（層厚5 cm，Ⅴ b層）、暗灰色土（層厚1 cm）、白色シルト層（層厚1 cm）、黒灰色泥層（層厚5 cm）、灰白色砂層（層厚1 cm）、灰色シルト層（層厚1 cm）、白色シルト層（層厚0.5cm）、暗灰色土シルト層（層厚3 cm，以上Ⅴ a層）、灰色砂層（層厚31cm，Ⅳ a層）、砂混じり黒色土（層厚12cm，Ⅲ b層）、灰色砂層（層厚7 cm，Ⅲ a層）、暗灰色砂質土（層厚7 cm，Ⅱ b層）、灰色砂質土（層厚13cm，Ⅱ a層）、灰色砂層（層厚4 cm）、褐色砂質土（層厚11cm，Ⅰ b層）、灰色土（層厚18cm，Ⅰ a層）の連続が認められた。

(2)B地点（図1）

ここでは、下位より灰色砂層（層厚5 cm以上，Ⅸ a層）、砂混じり黒泥層（層厚11cm，Ⅶ b層）、黒灰色砂質土（層厚15cm，Ⅶ a層）、灰色土（層厚7 cm，Ⅵ a層）、黒泥層（層厚6 cm，Ⅴ a層）、暗灰色土（層厚12cm，Ⅳ a層）、亜円礫混じり灰色砂質土（層厚10cm，Ⅲ b層）、黒泥層（層厚5 cm，Ⅲ a層）、灰白色砂層（層厚4 cm）、暗灰色砂質土（層厚13cm，Ⅱ b層）、灰色砂質土（層厚11cm，Ⅱ a層）の連続が認められた。

層), 褐灰色砂質土(層厚31cm, I b 層), 灰色表土(層厚17cm, I a 層)が認められた。

(3) C 地点 (図1)

ここでは, 下位より亜円礫に富む灰色砂礫層(層厚14cm以上, V c 層), 黒泥層(層厚3cm), 白色シルト層(層厚1cm), 黒泥層(層厚5cm), 灰色シルト層(層厚0.2cm), 黒褐色泥炭層(層厚1cm, 以上V b 層), 層理の発達した灰色砂層(層厚38cm, IV a 層下部), 下部に亜円礫層を伴う灰色砂層(層厚20cm, IV a 層), 灰色砂質土(層厚5cm, III b 層), 白色砂混じり暗灰色土(層厚12cm, III a 層)が認められた。これらのうちIII b 層からは奈良時代の土器が検出されている。

(注) 本文中の層位番号とは対応するが, 土層説明は異なる。

3 テフラ検出分析

(1) 分析試料と分析方法

テフラの降灰層準を検出するために, 基本的に5cmごとに採取された試料のうち5cmおきの試料27点を対象にテフラ検出分析を行った。テフラ検出分析の手順は次の通りである。

- 1) 試料10gを秤量
- 2) 超音波洗浄装置により泥分を除去
- 3) 80℃で恒温乾燥
- 4) 実体顕微鏡下でテフラ粒子の特徴を観察

(2) 分析結果

テフラ検出分析の結果を表1に示す。A地点では試料番号13, 12, 3および1の4試料に白色の軽石が少量認められた。軽石の最大径は, 順に0.4mm, 0.4mm, 0.8mmおよび1.1mmである。いずれもスポンジ状に発泡している。B地点では試料番号8および1にスポンジ状に発泡した白色軽石が少量認められた。軽石の最大径は0.8mmおよび0.4mmである。また試料番号4にはスポンジ状に発泡した灰白色軽石(最大径0.4mm)が少量含まれている。なおC地点ではテフラ粒子を検出できなかった。

4 屈折率測定

(1) 測定試料と測定方法

軽石粒子の認められた試料のうち, 各々の地点で最下位にあるA地点の試料番号13およびB地点の試料番号8の2試料について屈折率の測定を行い, 示標テフラとの同定を試みた。測定は(新井; 1972)の位相差法による。

(2) 測定結果

屈折率の測定結果を表2に示す。A地点の試料番号13には角閃石のほか斜方輝石が少量含まれている。斜方輝石の屈折率(n)は1.708-1.711である。また角閃石の屈折率(n_2)は1.672-1.677である。一方B地点試料番号8にも, 重鉱物として角閃石や斜方輝石が少量含まれている。斜方輝石の屈折率(n)は1.708-1.711, 角閃石の屈折率(n_2)は1.672-1.676である。

これら2試料に含まれるテフラ粒子については、スポンジ状に発泡した白色軽石が含まれること、重鉱物として斜方輝石や角閃石が認められること、さらに斜方輝石と角閃石の屈折率などから、6世紀初頭に関東地方北西部の榛名火山から噴出した榛名二ツ岳渋川テフラ(Hr-FA, 新井; 1979, 坂口; 1986, 早田; 1989, 町田・新井; 1992) または6世紀中葉に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳伊香保テフラ(Hr-FP, 新井; 1962, 坂口; 1986, 早田; 1989, 町田・新井; 1992)に由来すると考えられる。現段階において、細粒のテフラ粒子のみでの両者の識別は困難である。

以上のことから、VI a層付近にHr-FAまたはHr-FPの降灰層準のある可能性が考えられる。なお新地町大森A遺跡の発掘調査では2層のテフラが各々一時堆積層として確認されている(福島県教育委員会ほか; 1990)。本遺跡においても保存状態の良い地点ではこれらのテフラの一次堆積層を検出できる可能性がある。

5 小 結

白岩堀ノ内遺跡において地質調査とテフラ検出分析さらに屈折率測定を合わせて行った。その結果、榛名二ツ岳渋川テフラ(Hr-FA, 6世紀初頭)あるいは榛名二ツ岳伊香保テフラ(Hr-FP, 6世紀中葉)に由来するテフラ粒子が検出された。そしてテフラ粒子の産状からVI a層付近にこれらの降灰層準のある可能性が指摘された。

なお福島県域には、古墳時代以降に限っても、Hr-FAやHr-FPのほか、915(延喜15)年に十和田火山から噴出した十和田a火山灰(T0-a, 町田ほか; 1981), 1128(大治3)年に浅間火山から噴出した浅間粕川テフラ(早田; 1995)さらに1888(明治21)年に磐梯火山から噴出したテフラなど多くのテフラの分布が確認されている。今後の調査においては、これらテフラを利用した火山灰編年学をさらに応用することで、より詳細な編年研究を行うことが可能である。

引用文献

- 新井房夫 1962 「関東盆地北西部地域の第四紀編年」『群馬大学紀要自然科学編』10 p.1-79
- 新井房夫 1979 「関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層」『考古学ジャーナル』No.157 p.41-52 ニューサイエンス社
- 1990 『相馬開発関連遺跡調査報告Ⅱ』福島県教育委員会・(財)福島県文化センター
地域振興整備公団
- 町田 洋・ 1992 『火山灰アトラス』東京大学出版会, p.276
- 新井房夫
- 町田 洋・ 1981 「日本海を渡ってきたテフラ」『科学』51 p.562-569.
- 新井房夫・
- 森脇 広

- 坂口 1986 「榛名二ツ岳起源FA・FP層下の土師器と須恵器」『荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡』群馬県教育委員会 p.103-119.
- 早田 勉 1989 「6世紀における榛名火山の2回の噴火とその災害」『第四紀研究』27 p.297-312.
- 早田 勉 1993 「東北日本中南部に分布するテフラと考古学」『第7回東北日本の旧石器文化を語る会』 郡山 講演資料
- 早田 勉 1995 「テフラからみた浅間火山の活動史」『御代田町誌自然編』 p.22-43.

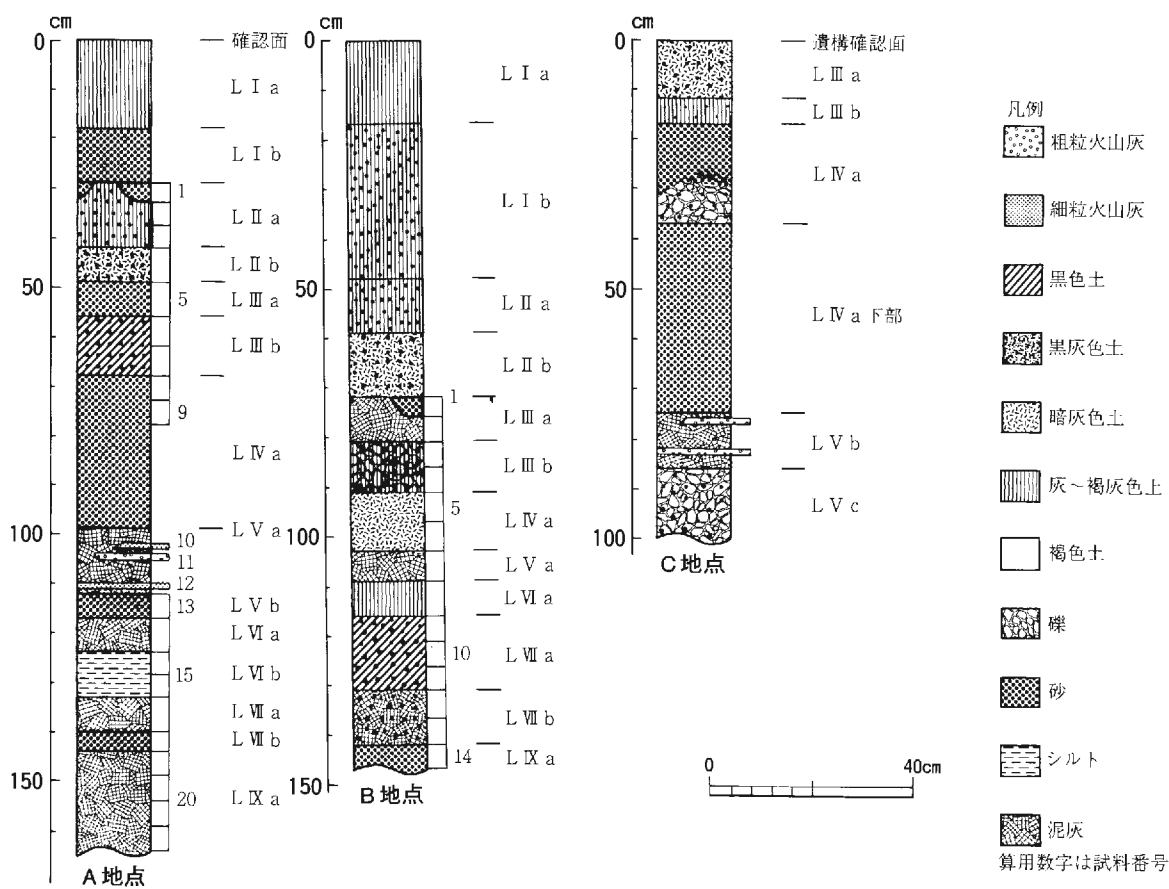
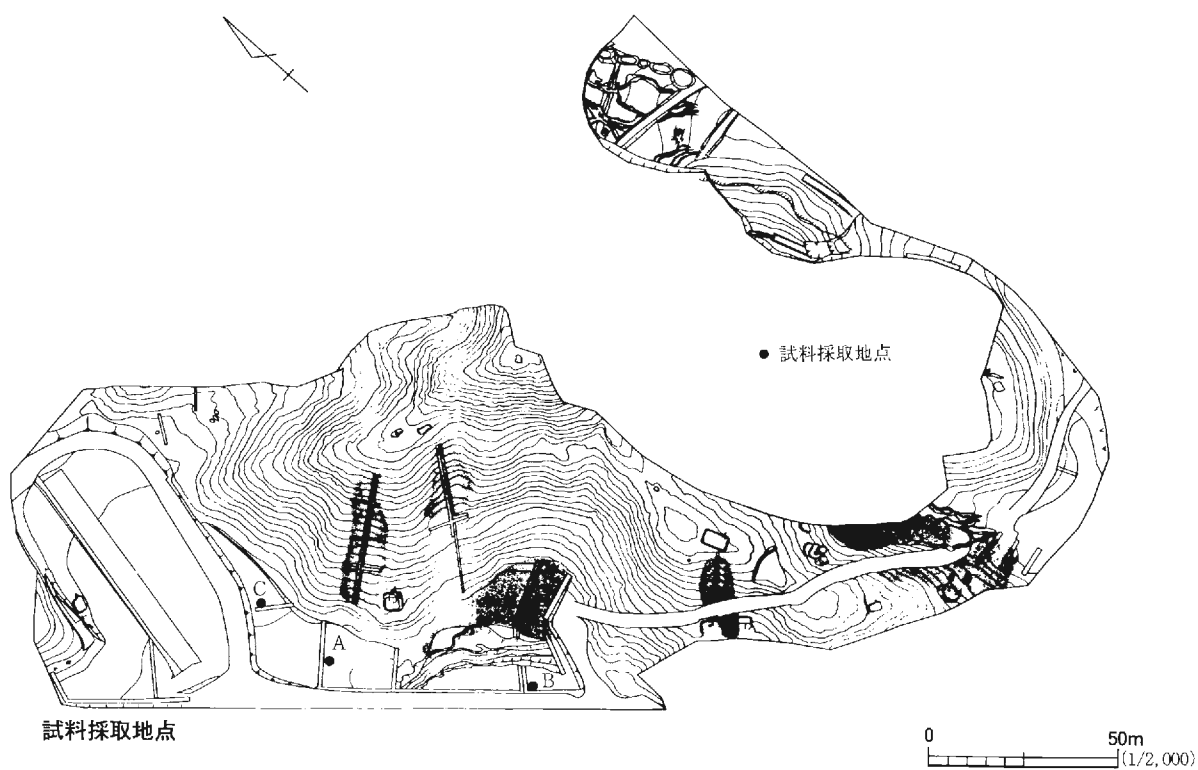


図1 試料採取地点，土層柱状図

表1 白岩堀ノ内遺跡のテフラ検出分析結果

地 点	試 料	軽 石 の 量	軽 石 の 色 調	軽石の最大径
A地点	1	—	—	—
	2	+	白	1.1
	3	+	白	0.8
	5	—	—	—
	7	—	—	—
	9	—	—	—
	10	—	—	—
	11	—	—	—
	12	+	白	0.4
	13	+	白	0.4
	14	—	—	—
	15	—	—	—
	17	—	—	—
	18	—	—	—
	19	—	—	—
	21	—	—	—
B地点	1	+	白	0.4
	2	—	—	—
	4	+	灰白	0.4
	6	—	—	—
	7	—	—	—
	8	+	白	0.8
	10	—	—	—
	12	—	—	—
C地点	1	—	—	—
	2	—	—	—

++++：とくに多い，+++：多い，++：中程度，
+：少ない，—：認められない，最大径の単位は，mm

表2 白岩堀ノ内遺跡の屈折率測定結果

地 点	試 料	重 鉱 物	屈 折 率
A地点	13	(h o > o p x)	o p x (r) : 1.708—1.711 h o (n ₂) : 1.672—1.677
B地点	8	(h o , o p x)	o p x (r) : 1.708—1.711 h o (n ₂) : 1.672—1.676

屈折率の測定は，新井（1972）による。o p x：斜方輝石，h o：角閃石

付章2 いわき市白岩堀ノ内遺跡のプラント・オパール分析

株式会社 古環境研究所

1 はじめに

植物珪酸体は、ガラスの主成分である珪酸(SiO_2)が植物の細胞内に蓄積したものであり、植物が枯死した後も微化石(プラント・オパール)となって土壤中に半永久的に残っている。プラント・オパール(植物珪酸体)分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出し、その組成や量を明らかにする方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている。

白岩堀ノ内遺跡の発掘調査では、平安時代とされる水田跡が検出された。また、下位の古墳時代とみられる堆積層も水田跡である可能性が推定された。そこで、水田跡における稲作の検証およびその他の層における水田層の探査を目的にプラント・オパール分析を行うことになった。



図1 試料採取地点

2 試 料

調査地点は、南北トレンチ西壁のBB20グリッド(Na.1 地点)、北側東西トレンチのBA21グリッド(Na.2 地点)、南側東西トレンチのBI30グリッド(Na.3 地点)、北西側調査区南北トレンチ西壁のAV15グリッド(Na.4 地点)の4 地点である(図1)。

分析試料は、Na.1 地点では上位よりⅠa層、Ⅰb層、Ⅱa層、Ⅱb層、Ⅲa層、Ⅲb層、Ⅴa層、Ⅵb層の8点、Na.2 地点ではⅢa層、Ⅲb層、Ⅳa層、Ⅴa層、Ⅴb層、Ⅵb層、Ⅶa層、Ⅶb層、Ⅸa層、Ⅸb層の10点、Na.3 地点ではⅡa層、Ⅱb層、Ⅲa 1層上下、Ⅲa 7層、Ⅲa 8層、Ⅲb層、Ⅲb 1層、Ⅳc層、Ⅵb層、Ⅵb 1層、Ⅸb層、Ⅹa層の13点、Na.4 地点では1層、2層、3層、4層、5層、8層、10層、12層、14層、15層、16層の11点の計42点である。

なお、Na.4 地点で用いた土層名は、層相の変化するごとに上位より付けられた番号である。したがって、他の地点との対応を示すものではないことに注意されたい。

3 分析法

プラント・オパールの抽出と定量は、「プラント・オパール定量分析法(藤原;1976)」をもとに、次の手順で行った。

- 1) 試料土の絶乾(105℃・24時間)
- 2) 試料土約1 gを秤量、ガラスビーズ添加(直径約40μm、約0.02 g)
※電子分析天秤により1万分の1 gの精度で秤量
- 3) 電気炉灰化法による脱有機物処理
- 4) 超音波による分散(300W・42KHz・10分間)
- 5) 沈底法による微粒子(20μm以下)除去、乾燥
- 6) 封入剤(オイキット)中に分散、プレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

検鏡は、おもにイネ科植物の機動細胞に由来するプラント・オパール(以下、プラント・オパールと略す)を同定の対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。

検鏡結果は、計数値を試料1 g中のプラント・オパール個数(試料1 gあたりのガラスビーズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスビーズの個数の比率を乗じて求める)に換算して示した。また、おもな分類群については、この値に試料の仮比重(1.0と仮定)と各植物の換算係数(機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位: 10^{-5} g)を乗じて、単位面積で層厚1 cmあたりの植物体生産量を算出し図示した。換算係数は、イネは赤米、キビ族はヒエ、ヨシ属はヨシ、ウシクサ族はススキ、タケ亜科については数種の平均値を用いた。その値は、それぞれ2.94(種実重は1.03)、8.40、6.31、1.24、0.48である(杉山・藤原;1987)。

4 分析結果

採取された試料すべてについて分析を行った結果、イネ、ヨシ属、ウシクサ族、タケ亜科の各分類群のプラント・オパールが検出された。これらについて定量を行い、その結果を表1～8、図表1・2に示した。主な分類群については巻末に顕微鏡写真を示した。以下、各地点におけるプラント・オパールの検出状況を記す。

1) No.1 地点

本地点では、Ⅰa層、Ⅰb層、Ⅱa層、Ⅱb層、Ⅲa層、Ⅲb層、Ⅴa層、Ⅵb層において採取された試料について分析を行った。イネはⅠa層、Ⅰb層、Ⅱa層、Ⅱb層、Ⅲa層、Ⅲb層より検出された。Ⅰa層とⅠb層では高い密度である。また、Ⅱa層、Ⅲa層、Ⅲb層では比較的高い密度である。ヨシ属はⅠa層、Ⅰb層、Ⅲb層、Ⅴa層、Ⅵb層より検出されたがいずれも低い密度である。ウシクサ族はⅠa層、Ⅰb層、Ⅱa層、Ⅱb層、Ⅲa層、Ⅲb層より検出された。Ⅰa層ではやや高いものの他は低い密度である。タケ亜科はⅡb層を除く各層より検出された。密度はいずれも低い値である。

2) No.2 地点

本地点では、Ⅲa層、Ⅲb層、Ⅳa層、Ⅴa層、Ⅴb層、Ⅵb層、Ⅶa層、Ⅶb層、Ⅸa層、Ⅸb層において採取された試料について分析を行った。イネはⅢa層とⅢb層より検出された。Ⅲb層では比較的高い密度である。ヨシ属はⅨa層を除く各層より検出された。Ⅶb層以外はいずれも低い密度である。ウシクサ族はⅢa層、Ⅳa層、Ⅴb層、Ⅵb層、Ⅶa層、Ⅶb層、Ⅸb層より検出された。これも全体に低い密度である。タケ亜科はすべての層より検出されたが全体に低い密度である。

3) No.3 地点

ここでは、Ⅱa層、Ⅱb層、Ⅲa 1層上下、Ⅲa 7層、Ⅲa 8層、Ⅲb層、Ⅲb 1層、Ⅳc層、Ⅵb層、Ⅵb 1層、Ⅸb層、Ⅹa層において試料が採取された。分析の結果、イネはⅡa層とⅡb層より検出されたがいずれも低密度である。ヨシ属はⅢa 7層、Ⅲa 8層、Ⅲb層、Ⅳc層、Ⅵb層、Ⅸb層より検出されたがいずれも低い密度である。ウシクサ族はⅥb層を除く各層より検出されたが全体に低い密度である。タケ亜科はすべての層より検出されたがいずれも低い密度である。

4) No.4 地点

本地点では1層、2層、3層、4層、5層、8層、10層、12層、14層、15層、16層より採取された試料について分析を行った。イネは1層～5層より検出された。1層と3層では高い密度である。ヨシ属は4層、5層、12層、15層より検出された。12層と15層では比較的高い密度である。ウシクサ族は1層、3層、4層、10層、12層、15層より検出されたがいずれも低い密度である。タケ亜科はすべての層より検出されたが全体に低い密度である。

5 考察

(1) 稲作の可能性について

稲作跡(水田跡)の検証や探査を行う場合、通常、イネのプラント・オパールが試料1 gあたりおよそ3,000個以上の密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している。また、プラント・オパール密度にピークが認められれば、上層から後代のものが混入した危険性は考えにくく、密度が基準値に満たなくても稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。以上のことを基準として、稲作の可能性について考察を行う。

1) No.1, No.2 地点

両地点は近接しており、上位層をNo.1地点で下位層をNo.2地点で分析した。イネのプラント・オパールはI a層, I b層, II a層, II b層, III a層, III b層より検出された。したがって、これら各層において稲作が行われていた可能性が考えられる。このうち、I a層とI b層は現代の水田であることから当然の結果である。II a層, III a層, III b層ではプラント・オパール密度が3,000個/g前後と高い値であることから、これら各層については水田耕作層である可能性が高いと考えられる。

2) No.3 地点

本地点では、II a層とII b層よりイネのプラント・オパールが検出された。ただし、いずれも1,000個/g未満の低密度であることから、両層の時期に本地点で稲作が行われていた可能性は考えられるものの、他所からの混入である危険性も否定できない。

3) No.4 地点

ここでは1層, 2層, 3層, 4層, 5層よりイネのプラント・オパールが検出された。したがって、これらの層準において稲作が行われていた可能性が考えられる。なお、1層と2層は現代の耕作層である。3層ではプラント・オパール密度が10,000個/g弱と非常に高い値であることから、稲作層である可能性が極めて高いと判断される。5層ではプラント・オパール密度が1,000個/g未満であることから、あるいは上層または他所からの混入である可能性も考えられる。

(2) プラント・オパール分析からみた植生・環境

一般に、ヨシ属は湿地等の湿ったところに生育し、ウシクサ族(ススキ属など)やタケ亜科は比較的乾いた環境のところに生育することが知られている。このことから、これらの植物の出現状況を検討することによって、堆積当時の環境(乾燥・湿潤)を推定することができる。

当該調査区ではヨシ属の密度は全体に低い傾向である。したがって、これらの層が堆積した間は概ね乾いた環境で推移したと推定される。また、水田層と判断された各層においてもヨシ属は低い密度であることから、ここで推定された水田跡はいずれも地下水位の低い乾田型であった可能性が推察される。

6 まとめ

白岩堀ノ内遺跡においてプラント・オパール分析を行い、稲作跡の検証および探査を試みた。その結果、平安時代の水田層であるⅡ a 層，Ⅱ b 層においてイネのプラント・オパールが高い密度で検出されたことから，両層で稲作が行われていたことが分析的に検証された。また，Ⅲ a 層，Ⅲ b 層においてもイネのプラント・オパールが検出されたことから，これらの層が稲作跡である可能性が高いと推定された。

引用文献

- 杉山真二・藤原宏志 1987 「川口市赤山陣屋跡遺跡におけるプラント・オパール分析．赤山－古環境編－」『川口市遺跡調査会報告』10 p.281－298.
- 藤原宏志 1976 「プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－」『考古学と自然科学』9 p.15-29.
- 藤原宏志 1979 「プラント・オパール分析法の基礎的研究(3)－福岡・板付遺跡（夜臼式）水田および群馬・日高遺跡（弥生時代）水田におけるイネ（*O.sativa*L.）生産総量の推定－」『考古学と自然科学』12 p.29-41.
- 藤原宏志・杉山真二 1984 「プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)－プラント・オパール分析による水田址の探査－」『考古学と自然科学』17 p.73-85.

表1 No.1 地点プラント・オパール検出密度 (単位: $\times 100$ 個/g)

分類群/試料	I a	I b	II a	II b	III a	III b	V a	VI b
イネ	49	60	34	17	27	25		
キビ族 (ヒエ属など)								
ヨシ属	5	6				20	8	6
ウシクサ族 (ススキ属など)	27	6	6	6	7	10		
タケ亜科 (おもにネザサ節)	22	24	6		27	25	16	6

表2 No.1 地点植物体推定生産量 (単位: $\text{kg}/\text{m}^2 \cdot \text{cm}$)

分類群/試料	I a	I b	II a	II b	III a	III b	V a	VI b
イネ	1.44	1.76	1.00	0.51	0.79	0.74		
(イネ籾)	0.51	0.62	0.35	0.18	0.28	0.26		
キビ族 (ヒエ属など)								
ヨシ属	0.34	0.38				1.27	0.51	0.38
ウシクサ族 (ススキ属など)	0.34	0.07	0.07	0.07	0.08	0.12		
タケ亜科 (おもにネザサ節)	0.10	0.12	0.03		0.13	0.12	0.08	0.03

表3 No.2 地点プラント・オパール検出密度 (単位: $\times 100$ 個/g)

分類群/試料	III a	III b	IV a	V a	V b	VI b	VII a	VII b	IX a	IX b
イネ	14	29								
キビ族 (ヒエ属など)										
ヨシ属	9	18	5	7	10	5	5	27		13
ウシクサ族 (ススキ属など)	9		5		5	5	11	7		7
タケ亜科 (おもにネザサ節)	19	6	16	27	19	42	48	14	20	33

表4 No.2 地点植物体推定生産量 (単位: $\text{kg}/\text{m}^2 \cdot \text{cm}$)

分類群/試料	III a	III b	IV a	V a	V b	VI b	VII a	VII b	IX a	IX b
イネ	0.42	0.86								
(イネ籾)	0.15	0.30								
キビ族 (ヒエ属など)										
ヨシ属	0.59	1.11	0.34	0.42	0.61	0.33	0.34	1.71		0.82
ウシクサ族 (ススキ属など)	0.12		0.07		0.06	0.06	0.13	0.08		0.08
タケ亜科 (おもにネザサ節)	0.09	0.03	0.08	0.13	0.09	0.20	0.23	0.07	0.10	0.16

表5 No.3 地点プラント・オパール検出密度（単位：×100個／g）

分類群／試料	Ⅱ a	Ⅱ b	Ⅲ a ₁	Ⅲ a ₇	Ⅲ a ₈	Ⅲ b	Ⅲ b ₁	Ⅳ c	Ⅵ b	Ⅵ b ₁	Ⅸ b	X a
イネ	7	5										
キビ族（ヒエ属など）												
ヨシ属				5	6	23		22	6		6	
ウシクサ族（ススキ属など）	14	5	7	15	6	14	6	17		12	12	6
タケ亜科（おもにネザサ節）	21	19	13	6	10	6	9	28	17	24	6	24

表6 No.3 地点植物体推定生産量（単位：kg／m²・cm）

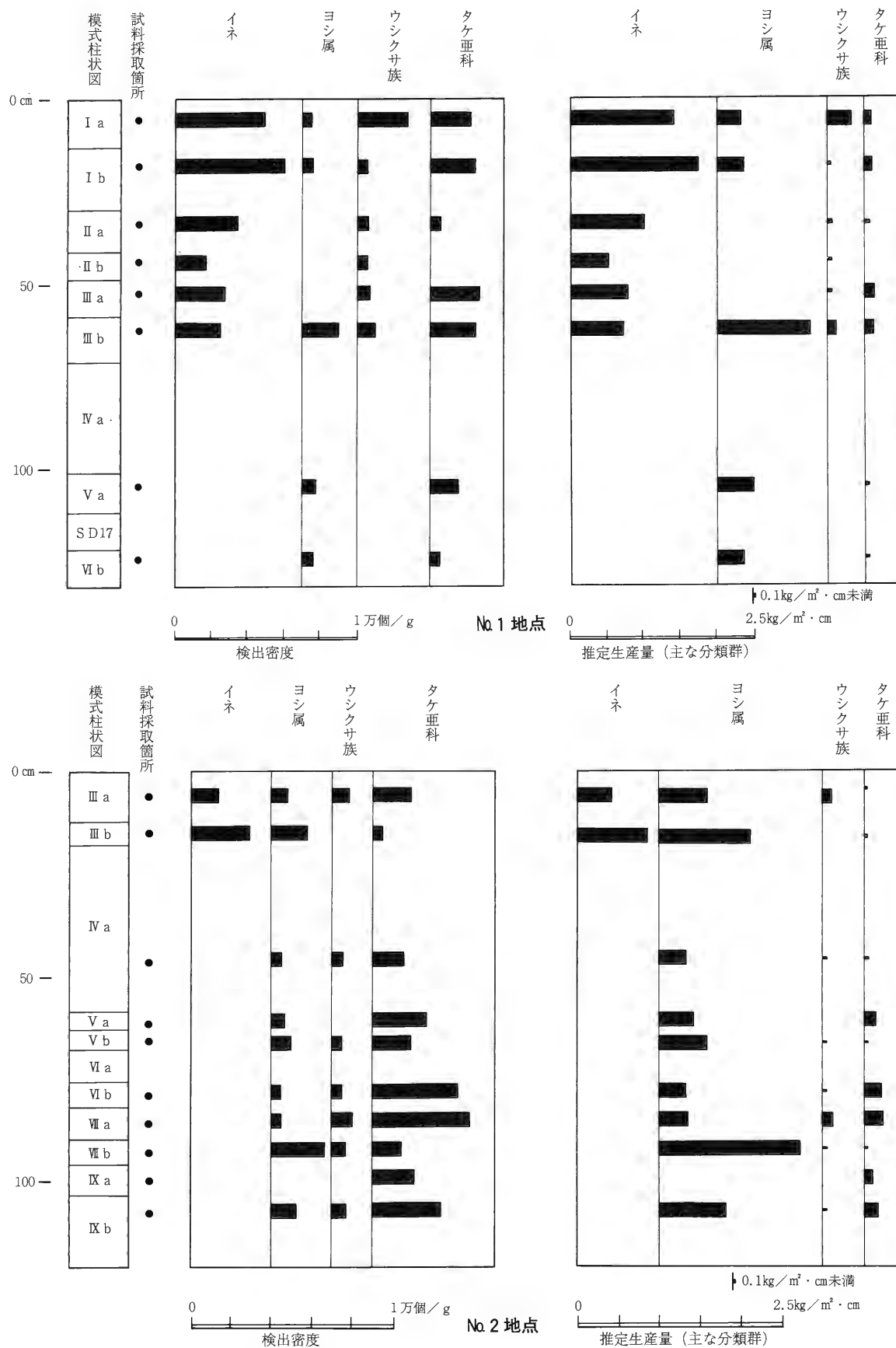
分類群／試料	Ⅱ a	Ⅱ b	Ⅲ a ₁	Ⅲ a ₇	Ⅲ a ₈	Ⅲ b	Ⅲ b ₁	Ⅳ c	Ⅵ b	Ⅵ b ₁	Ⅸ b	X a
イネ	0.21	0.14										
（イネ類）	0.07	0.05										
キビ族（ヒエ属など）												
ヨシ属				0.31	0.37	1.44		1.40	0.39		0.38	
ウシクサ族（ススキ属など）	0.18	0.06	0.08	0.18	0.07	0.17	0.07	0.21		0.15	0.15	0.08
タケ亜科（おもにネザサ節）	0.10	0.09	0.06	0.03	0.05	0.03	0.04	0.14	0.08	0.12	0.03	0.11

表7 No.4 地点プラント・オパール検出密度（単位：100個／g）

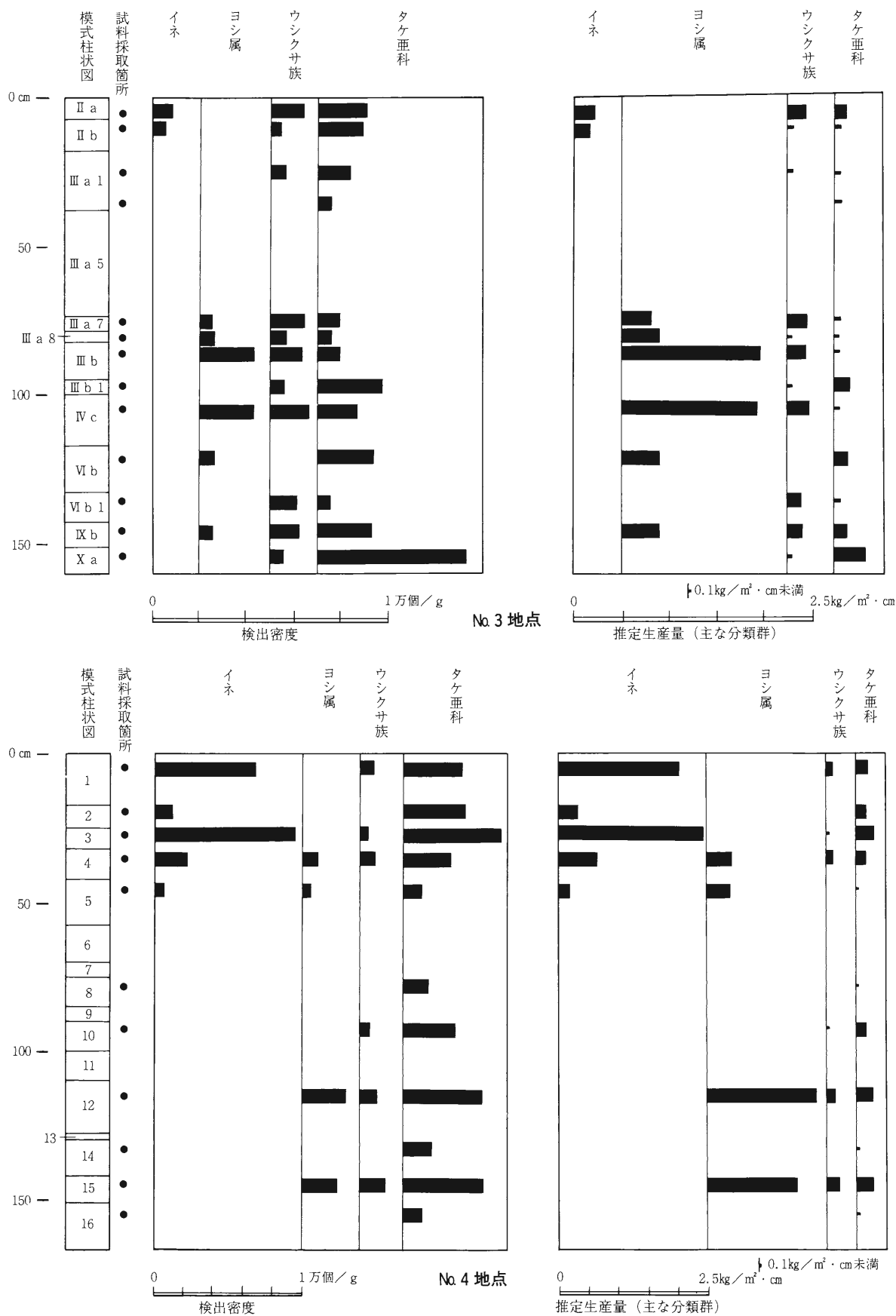
分類群／試料	1	2	3	4	5	8	10	12	14	15	16
イネ	68	12	96	22	6						
キビ族（ヒエ属など）											
ヨシ属				11	6			30		24	
ウシクサ族（ススキ属など）	10		6	11			7	12		18	
タケ亜科（おもにネザサ節）	39	42	66	32	12	17	36	53	18	54	12

表8 No.4 地点植物体推定生産量（単位：kg／m²・cm）

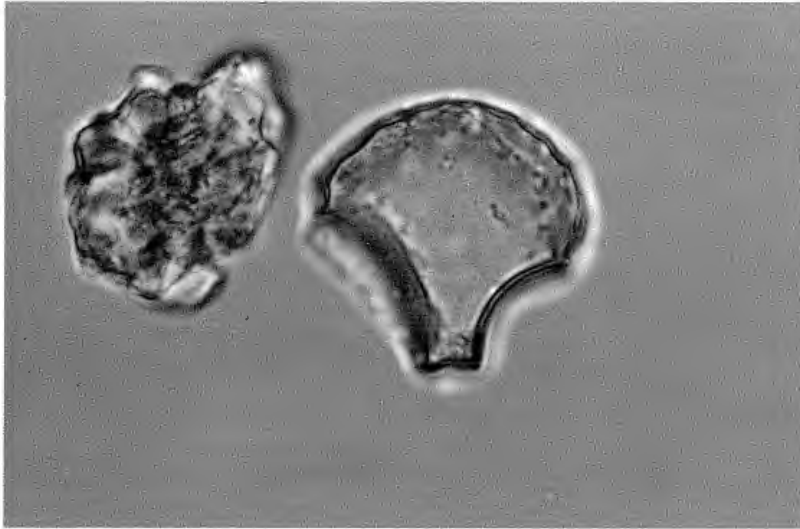
分類群／試料	1	2	3	4	5	8	10	12	14	15	16
イネ	2.01	0.35	2.83	0.64	0.18						
（イネ類）	0.70	0.12	0.99	0.22	0.06						
キビ族（ヒエ属など）											
ヨシ属				0.68	0.39			1.86		1.52	
ウシクサ族（ススキ属など）	0.12		0.07	0.13			0.09	0.15		0.22	
タケ亜科（おもにネザサ節）	0.19	0.20	0.32	0.16	0.06	0.08	0.17	0.25	0.09	0.26	0.06



図表1 No. 1・2 地点のプラント・オパール分析結果



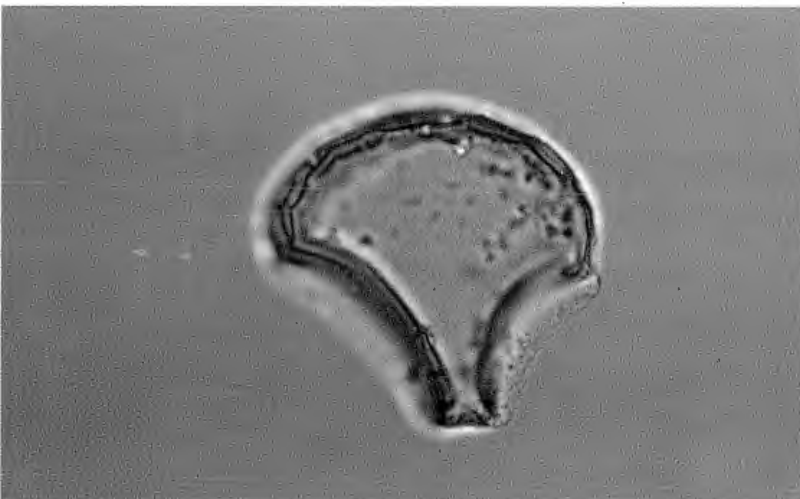
図表2 No. 3・4 地点のプラント・オパール分析結果



イ ネ
No.1 地点 L.Ⅲ b



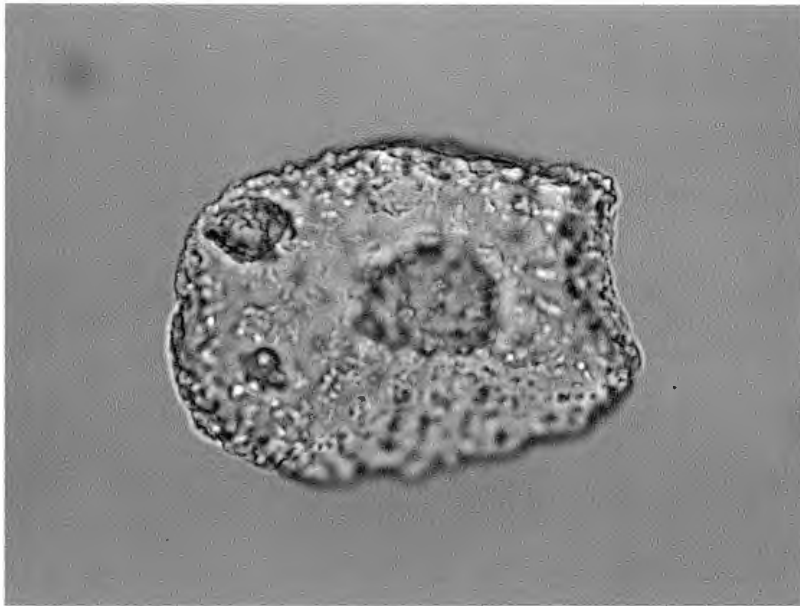
イ ネ
No.2 地点 L.Ⅲ b



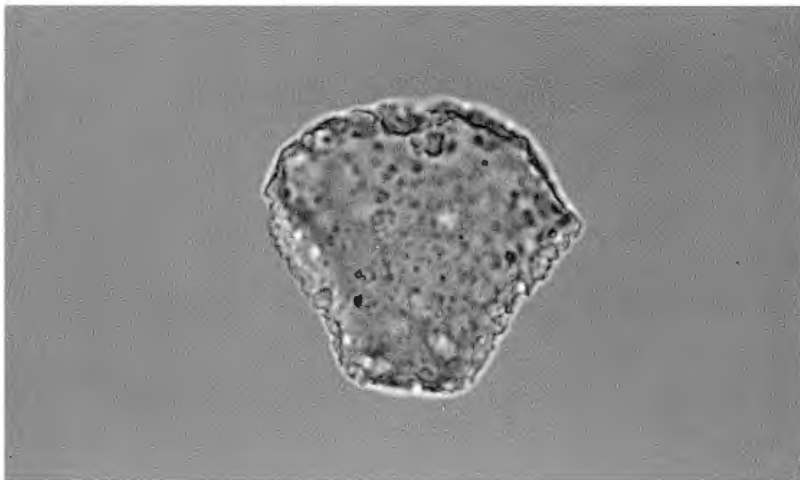
イ ネ
No.4 地点 L.4

0 50 100 μ m

1 植物珪酸体顕微鏡写真(1)



ヨ シ 属
No. 3 地点 L III b



タ ケ 亜 科
No. 3 地点 L X a



ウシクサ属(ススキ属)
No. 3 地点 L IV c

0 50 100 μm

2 植物珣酸体顕微鏡写真(2)

付章3 いわき市白岩堀ノ内遺跡における木製品・炭化材の樹種同定

パリノ・サーヴェイ 株式会社

はじめに

白岩堀ノ内遺跡は縄文時代から近代にわたる複合遺跡であり、弥生時代中期の土器埋設遺構、弥生時代から奈良・平安時代の集落跡、古墳時代および奈良・平安時代の水田跡、奈良・平安時代の製鉄炉跡などが確認されている。

今回の自然科学分析調査では、奈良・平安時代の住居構築材、同時代の製鉄炉跡および古代の木炭焼成遺構、奈良・平安時代の水田跡・自然流路から検出された材の樹種を明らかにして、用材選択について検討する。

いわき市周辺における過去の燃料材や構築材等については、いわき市タタラ山遺跡・駒込遺跡・馬場A遺跡・大猿田遺跡・小野町落合遺跡などで樹種を明らかにした例が知られている（パリノ・サーヴェイ株式会社；1995，1996 a，1996 b）。これらの調査結果から、過去の用材選択の一端が明らかになっている。

1. 試料

試料は、各遺構から出土した木製品40点（F B T 960001～960040）と、燃料材や住居構築材と考えられる炭化材95点（F B C 960001～960095）である。各試料の詳細については、樹種同定結果とともに表1・表2に記した。

2. 方法

剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラル（抱水クロラル，アラビアゴム粉末，グリセリン，蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。プレパラートは、生物顕微鏡で木材組織を観察し、その特徴から種類を同定する。

炭化材は、木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

3. 結果

樹種同定結果を表1・表2に示す。木製品試料のうち、F B T 960016は保存状態が悪いために樹種の同定に至らず、広葉樹（環孔材）とした。また炭化材試料のF B C 960081は樹皮であった。その他の試料は、針葉樹2種類（マツ属複維管束亜属・モミ属），広葉樹4種類（コナラ属コナラ亜属ク

ヌギ節・コナラ属コナラ亜属コナラ節・コナラ属アカガシ亜属・クリ)に同定された。各種類の解剖学的特徴などを以下に記す。

・マツ属複維管束亜属 (*Pinus* subgen. *Diploxylon* sp.) (写真1) マツ科

早材部から晩材部への移行は急～やや緩やかで、晩材部の幅は広い。垂直樹脂道および水平樹脂道が認められる。放射組織は仮道管、柔細胞とエピセリウム細胞よりなり、分野壁孔は窓状、仮道管内壁には顕著な鋸歯状の突出が認められる。放射組織は単列、1～15細胞高のものと水平樹脂道をもつ紡錘形のものがある。

・モミ属 (*Abies* sp.) (写真1) マツ科

早材部から晩材部への移行は比較的緩やかで、晩材部の幅は薄い。傷害樹脂道が認められる試料がある。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は粗く、じゅず状末端壁が認められる。分野壁孔はスギ型で1～4個。放射組織は単列、1～20細胞高。

・コナラ属コナラ亜属クヌギ節 (*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Cerris* sp.) (写真2)

ブナ科

環孔材で孔圏部は1～2列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら放射状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものと複合放射組織とがある。柔組織は周囲状および短接線状。

・コナラ属コナラ亜属コナラ節 (*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Prinus* sp.) (写真2)

ブナ科

環孔材で孔圏部は1～2列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものと複合放射組織とがある。柔組織は周囲状および短接線状。

・コナラ属アカガシ亜属 (*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* sp.) (写真2) ブナ科

放射孔材で、管壁厚は中庸～厚く、横断面では楕円形、単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高のものと複合放射組織とがある。柔組織は短接線状および散在状。

・クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) (写真3) ブナ科

環孔材であるが、いずれも年輪界付近で割れているため孔圏部の列数は不明。小道管は漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高。柔組織は周囲状および短接線状。

4. 考 察

(1) 杭材の樹種について

杭材には2種類の針葉樹(マツ属複維管束亜属・モミ属)と広葉樹3種類(アカガシ亜属・クリ・環孔材)が認められた。これらの結果を遺構別にみると、いずれの遺構も複維管束亜属が多くを

占め、特に遺構による樹種構成の違いは認められない。

いわき市では、久世原館・番匠地遺跡や戸田条里遺跡における、花粉分析結果から過去の植生復元が試みられている(パリノ・サーヴェイ株式会社;1991, 1993)。それらの結果では、平安時代頃にマツ属複維管束亜属(以下「複維管束亜属」とする)の花粉化石は認められるものの、その出現率は低い。複維管束亜属の花粉化石の出現率が高くなるのは中世以降であり、同時にスギの花粉も増加すること等から、森林の開発や植林などが考えられる。また、いわき市内の各遺跡から出土した木製品や種実遺体の分析調査結果(パリノ・サーヴェイ株式会社;1986, 1987, 1990, 1991, 1993, 1995a, 1996a;嶋倉;1990a)をみても、奈良～平安時代において複維管束亜属が確認された例は知られていない。複維管束亜属の木材や種実が出土するのは花粉化石が増加する中世以降である。これらの結果をまとめれば、奈良～平安時代の頃複維管束亜属は花粉分析の結果から生育していたことは推定できるが、広く分布していたとは考えにくい。また、その材などを利用することはほとんどなかったと推定される。同様の傾向は、いわき市以外にも相馬市や原町市周辺で行われた調査結果(嶋倉;1988, 1990b, 1990c, 1992;伊東;1990;パリノ・サーヴェイ株式会社;1995b, 1995c)にもみることができる。

今回の結果は、杭材に複維管束亜属が多数使用されており、これまで得られてきた結果とは異なっている。複維管束亜属は松脂を多く含むため、耐水性・耐朽性が高い。また、クリやアカガシ亜属もタンニンを多く含むために耐水性は比較的高い。これらの点を考慮すると、複維管束亜属を中心として、耐水性の高い木材を選択的に杭材に使用していた可能性がある。

本地域の平安時代の古植生については、調査事例がまだ少なく、その詳細は不明である。また、杭材についても他に類例がなく、今回と同様の用材選択が広く行われていたか否かは不明である。そのため、今後古植生や杭材の樹種に関する資料をさらに蓄積していく必要がある。

(2)住居構築材の用材について

住居構築材の多くはクヌギ節であり、他にコナラ節・クリが認められた。遺構別にみると、奈良時代のS I 02とS I 08は同様の樹種構成であり、クヌギ節を主として、コナラ節が少数混じる。一方、平安時代のS I 15ではクヌギ節・コナラ節・クリがほぼ同じ割合で使用されている。平安時代の住居跡からクリが出土した例は、石坂遺跡でも確認されている(パリノ・サーヴェイ株式会社;1987)。これらのことから、時代によって住居構築材の用材が異なっていた可能性がある。

住居構築材は、関東地方で行われた調査結果から、遺跡周辺に生育している中から強度・長さ・形状などが適した樹木を選択したことが指摘されている(高橋・植木;1994)。このことを考慮すると、時代による用材の違いは遺跡周辺の植生が変化した可能性を示唆する。しかし、古墳時代の住居跡や木炭窯などからは、クリが多く出土する(パリノ・サーヴェイ株式会社;1990, 1995a)。このことは、奈良時代に一時的にクリが少なくなったとも考えられるが、現時点では植生変化の詳細は明確ではないために断定には至らない。また、群馬県中筋遺跡の調査例では、同じ火砕流によって埋没した複数の住居跡から出土した構築材の樹種同定が継続的に行われている(高橋;1988;

橋本ほか；1993, 1996)。この調査結果からは、住居の構造(建築方式)や建物の使用目的等によって樹種構成が異なる可能性が指摘されている。本遺跡でも同様の使い分けが行われていた可能性があり、周辺地域で継続的に資料を蓄積していくことが必要である。

また本地域において、海岸近くの遺跡からはアカガシ亜属の花粉化石や木材が確認されているが(パリノ・サーヴェイ株式会社；1993, 1995a)、内陸部の小野町落合遺跡等ではアカガシ亜属は全く出土しない(パリノ・サーヴェイ株式会社；1996a)。これは、現在のアカガシ亜属の分布(宮脇；1987)とも調和的であり、地域による植生の差が用材の差として現れていることが推定される。現在までの調査結果では、どの付近を境界に用材や植生が変化するのかは明らかではない。そのため、今後本地域では調査地点をさらに増やしていくことが必要である。

(3)木炭焼成遺構出土炭化材について

古代の木炭焼成遺構から出土した炭化材は、製炭する際の燃料材が残存したと考えられている。その樹種は、1点が樹皮である以外は全てクヌギ節であった。本地域では、タタラ山遺跡において今回と同時期の炭窯から出土した製炭材と考えられる炭化材が全点クリに同定されている(パリノ・サーヴェイ株式会社；1995a)。このことから、焼成する際の燃料材と焼成する木炭とで樹種が異なっていた可能性がある。しかし、今回の結果のみでは断定できない。原町市や相馬市周辺で行われた分析調査では、平安時代の炭窯から出土した炭化材にクヌギ節やコナラ節が多い結果が得られている(パリノ・サーヴェイ株式会社；1995b, 1995c)。また、クヌギ節・コナラ節とクリとでは、焼成された木炭の性質が異なること(岸本；1984)を考慮すれば、古代においても樹種による使い分けが行われていた可能性もある。本地域では、古代の製鉄などに使用された燃料材の樹種に関する資料が少なく、用材選択の詳細が不明である。現時点では資料の蓄積段階と言えよう。

(4)製鉄燃料材の樹種について

奈良・平安時代の製鉄炉から出土した炭化材は、1点がコナラ節であった以外は全てクヌギ節であった。製鉄燃料材については、江戸時代に編纂された「鉄山秘書」のなかでコナラ亜属が適しているとされている(窪田；1987)。兵庫県坂遺跡および山平B遺跡、群馬県大胡町乙西尾引遺跡から出土した平安時代の製鉄燃料材は、クヌギ節を主とする樹種構成であった(パリノ・サーヴェイ株式会社；1992；高橋・鶴原；1994)。また、群馬県渋川市金井製鉄遺跡では、平安時代の炭窯や製鉄炉から出土した炭化材が肉眼鑑定からナラもしくはクヌギとされている(大澤；1975)。これらの結果から、平安時代には広い地域で最適の木材が選択されていたことが推定され、今回の結果はその一例とみることができる。

福島県では、原町市や相馬市周辺地域で平安時代の製鉄炉等から出土した炭化材の樹種が明らかにされている(嶋倉；1988, 1990, 1992；パリノ・サーヴェイ株式会社；1995b, 1995c)。それらの結果では、クヌギ節・コナラ節が多い点は共通している。しかし、コナラ節の比率が高いこと、クヌギ節・コナラ節以外にも多くの樹種が確認できること等の点で、今回の結果とは異なっている。

このことから、福島県内においても地域によって用材選択が異なっていた可能性がある。このよ

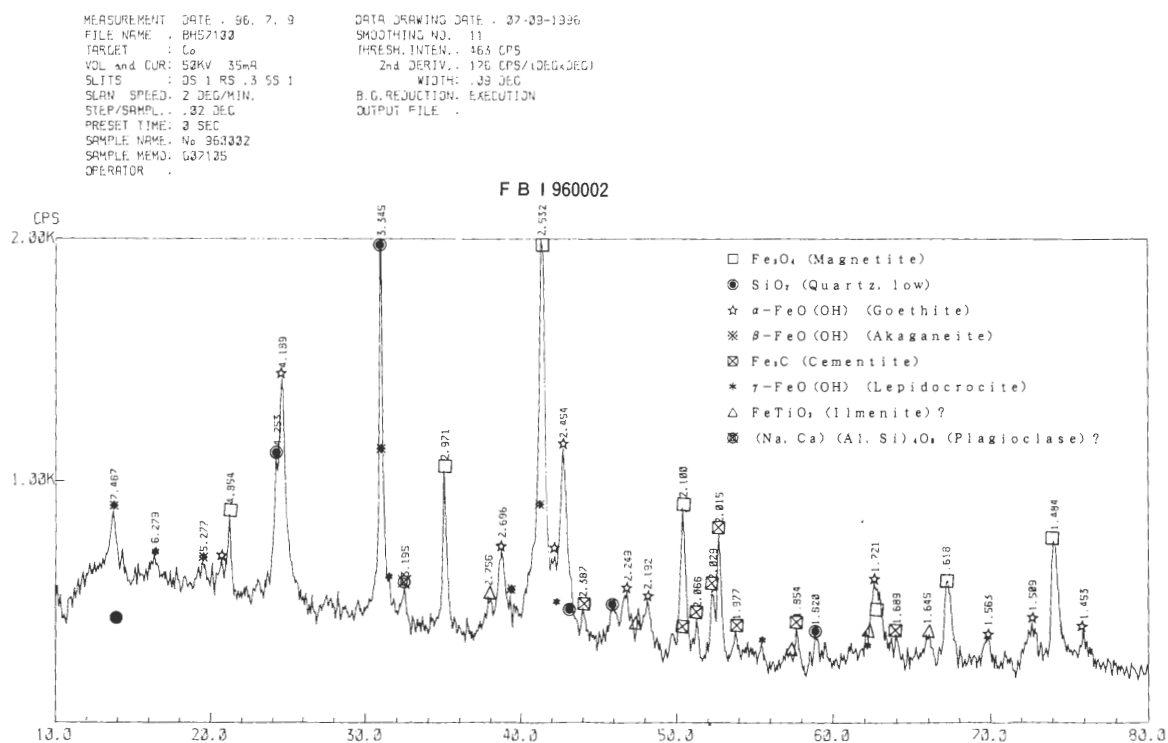
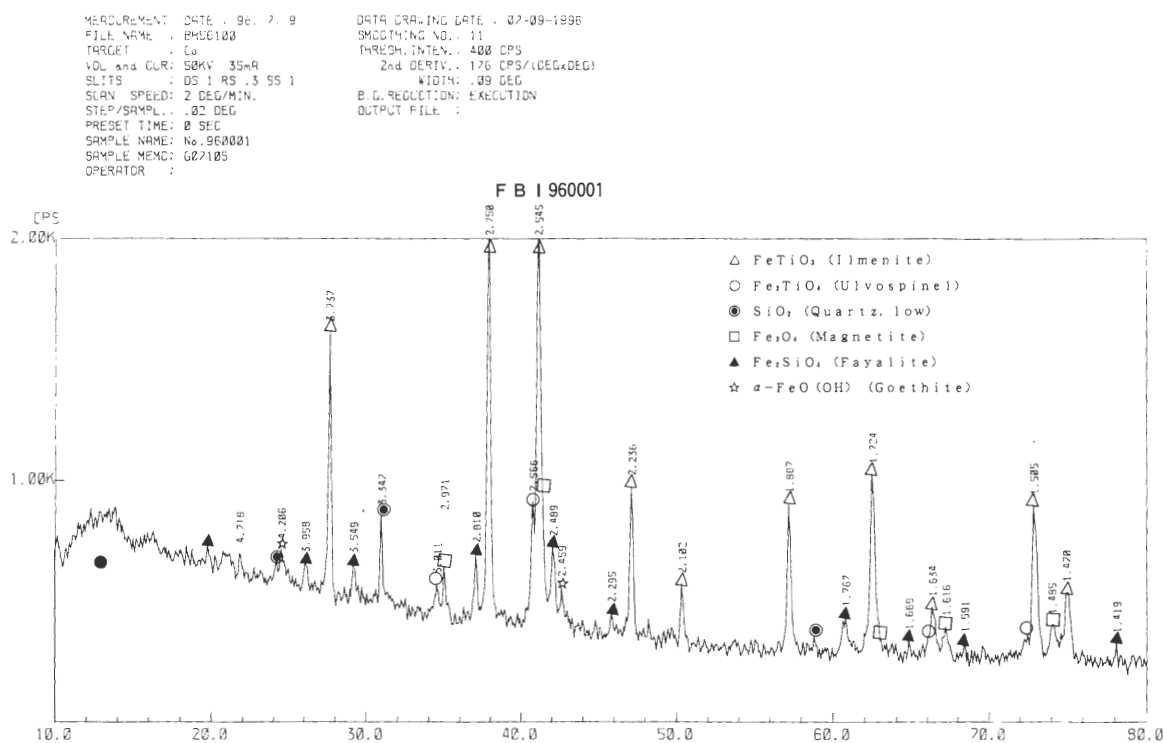


図1 粉末X線回折 (1)

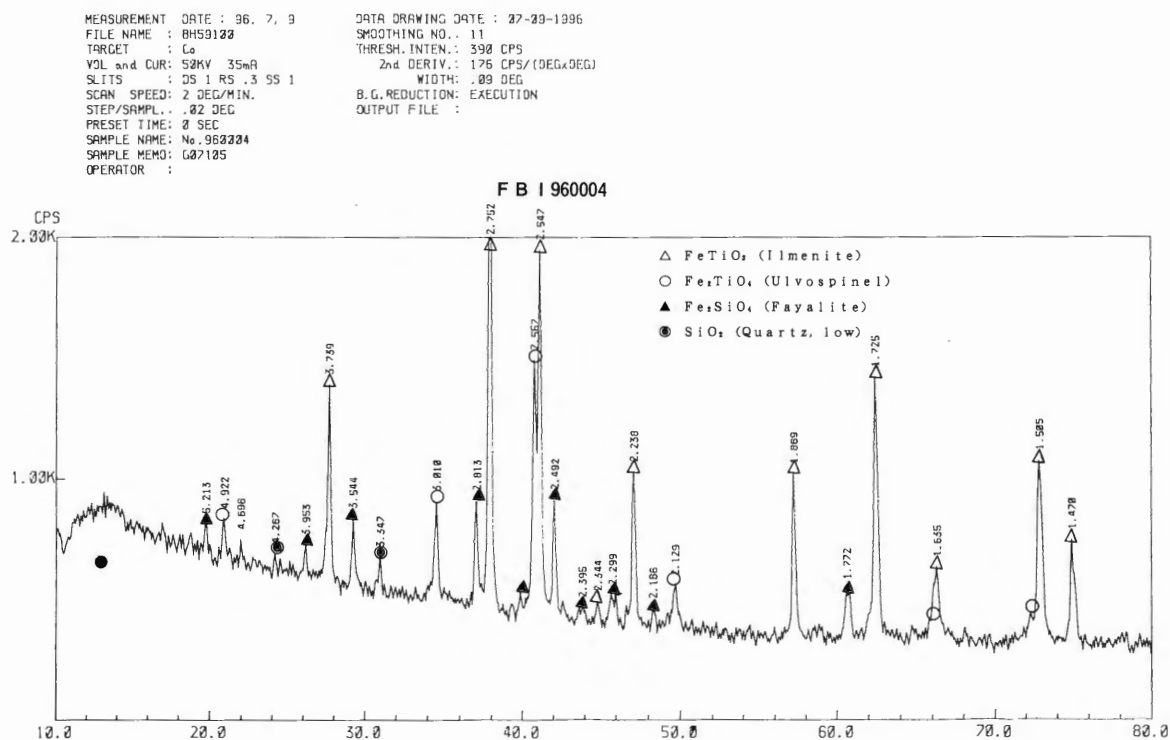
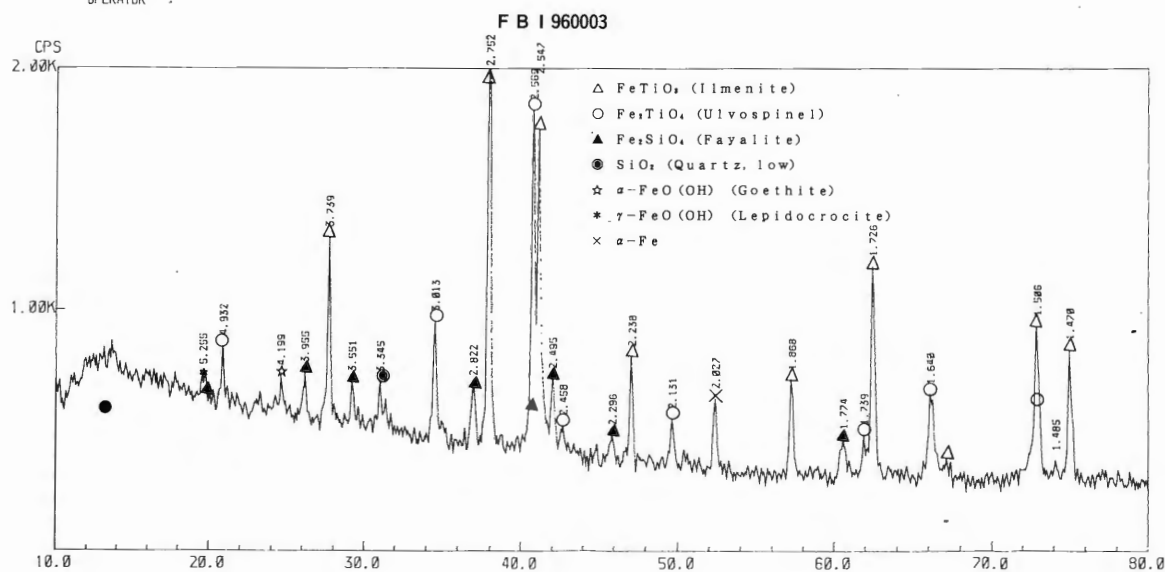


図2 粉末X線回折 (2)

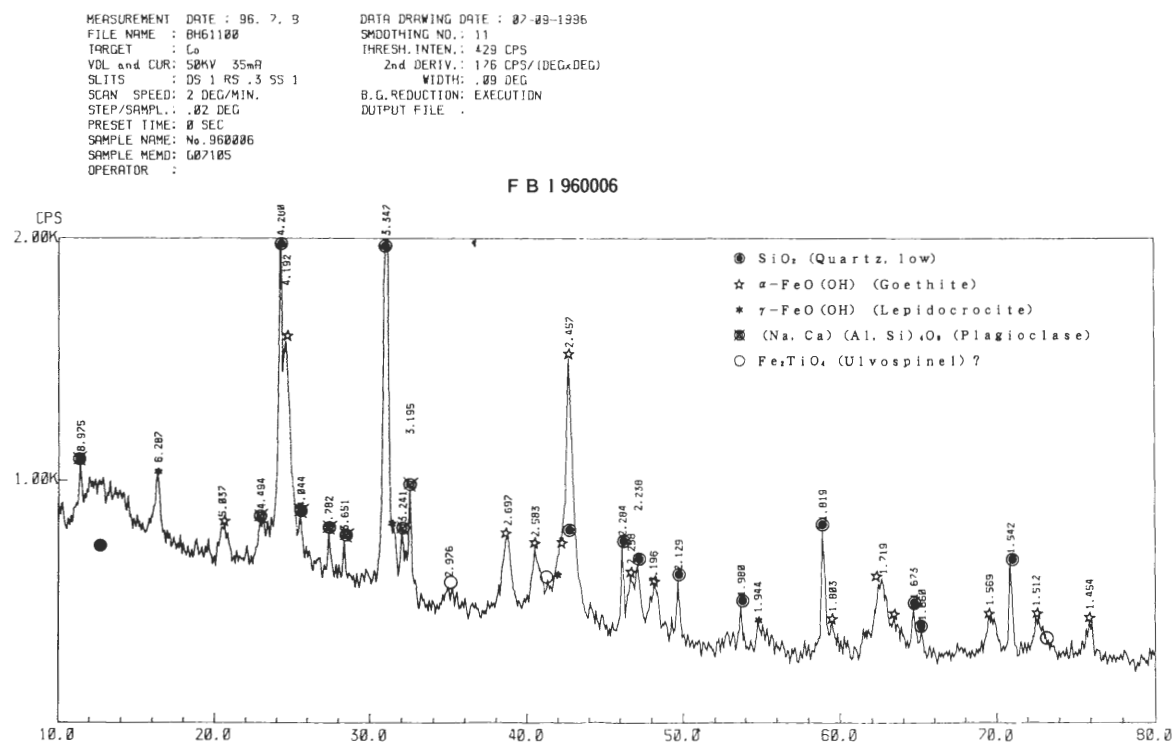
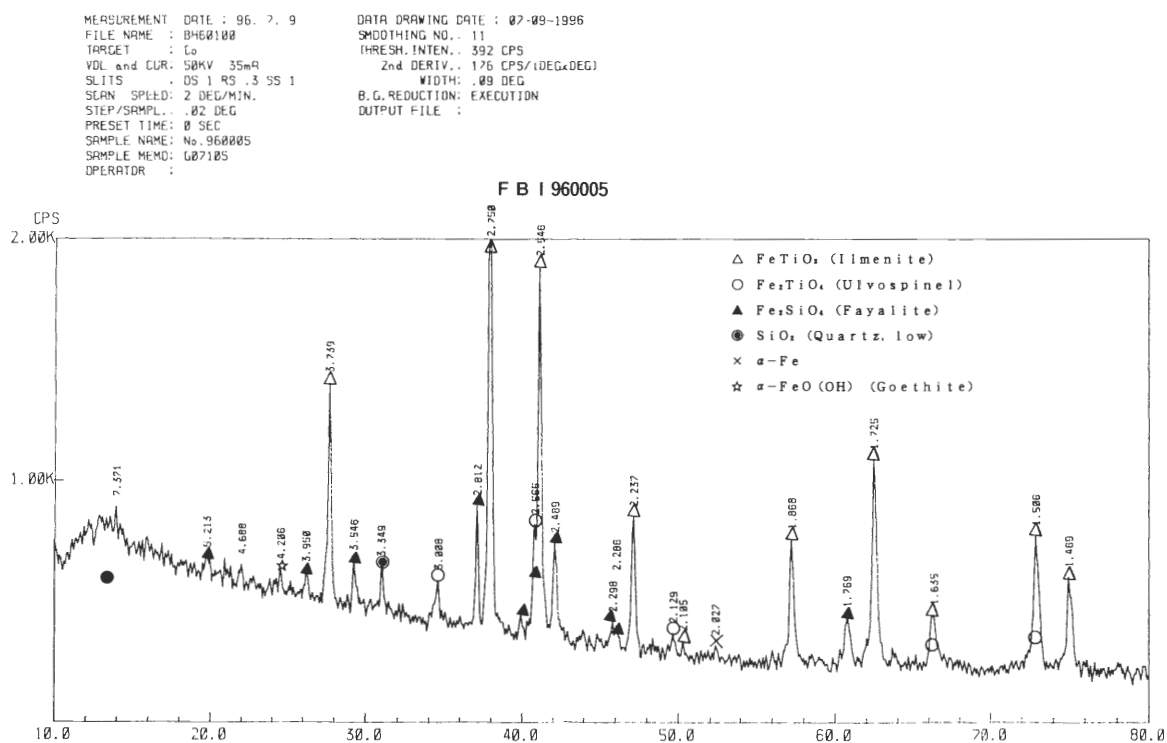
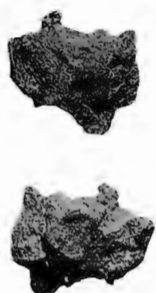
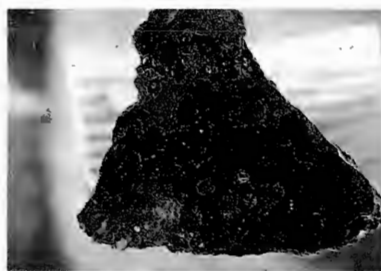


図3 粉末X線回折 (3)



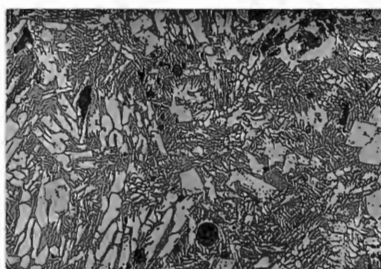
F B I 960001



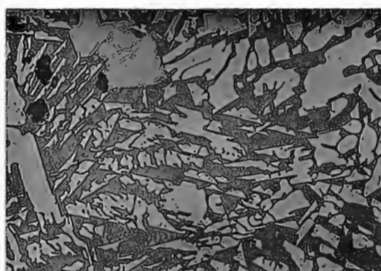
(×10)



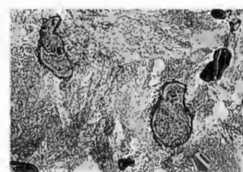
(×20)



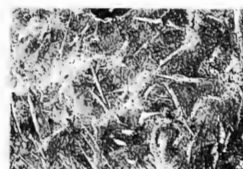
(×100)



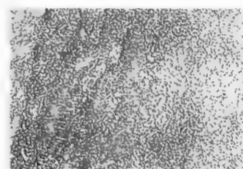
(×400)



エッチング (×100)



エッチング (×100)



エッチング (×400)



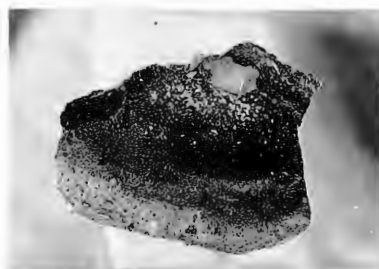
エッチング (×400)

1 外観写真・顕微鏡組織写真(1)

(各倍率写真を2/5に縮小)



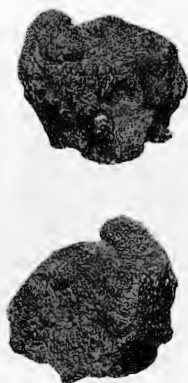
F B I 960002



(×10)



(×10)



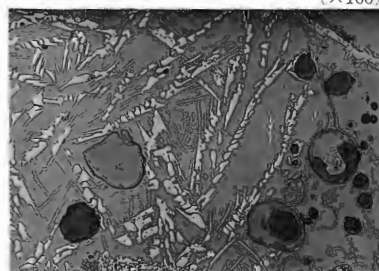
F B I 960003



(×10)

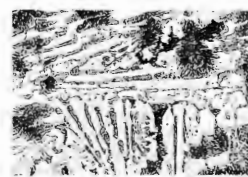


(×100)



(×100)

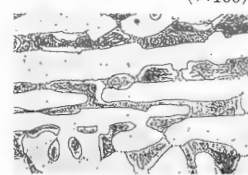
F B I 96002



(×100)



(×100)

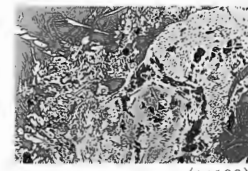


(×400)



(×400)

F B I 96003



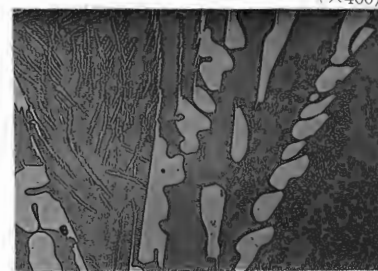
(×100)



(×400)



(×400)



(×400)

2 外観写真・顕微鏡組織写真(2)

(各倍率写真を2/5に縮小)



F B I 960004



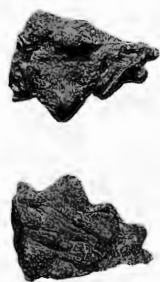
(×10)



(×100)



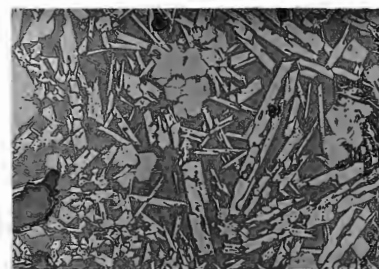
(×400)



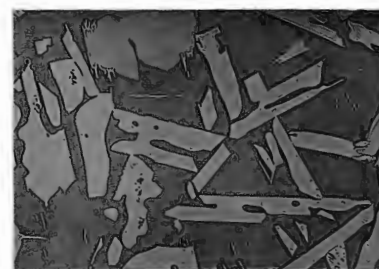
F B I 960005



(×10)



(×100)



(×400)

3 外観写真・顕微鏡組織写真(3)

(各倍率写真を2/5に縮小)



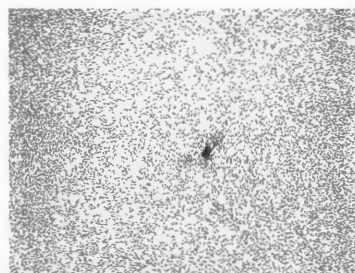
S E



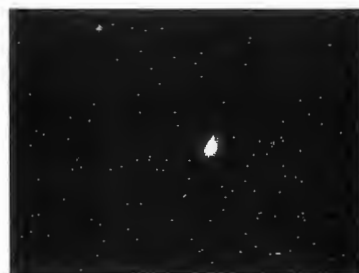
T i



V



F e



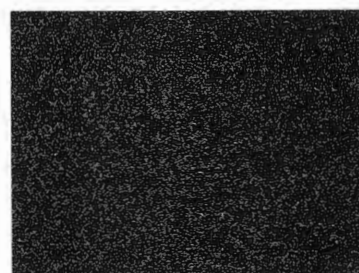
S i



P



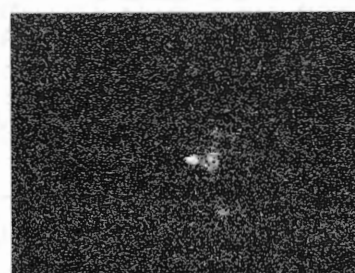
S



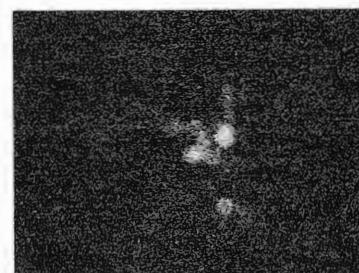
C a



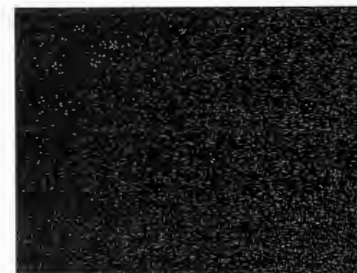
M g



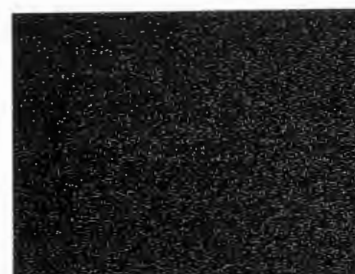
A l



O



C u

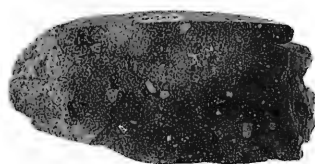


N i

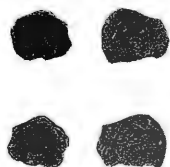
100μm

(×400写真を1/2に縮小)

5 E P M Aによる非金属介在物調査(1) F B I 960001



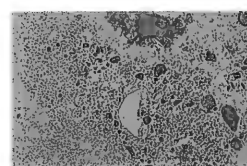
(×10)



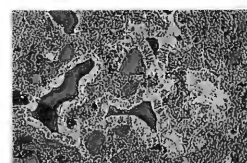
F B I 960006



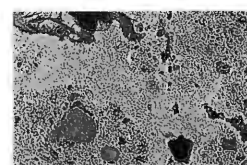
※



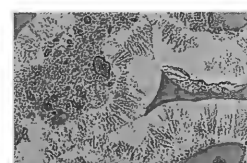
(×100)



(×100)



(×400)

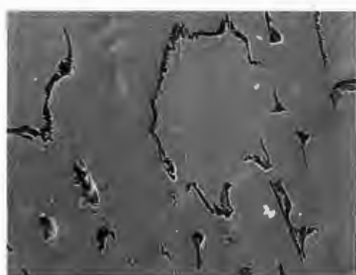


(×400)

4 外観写真・顕微鏡組織写真・X線透過写真

※は福島県立博物館提供

(各倍率写真を2/5に縮小)



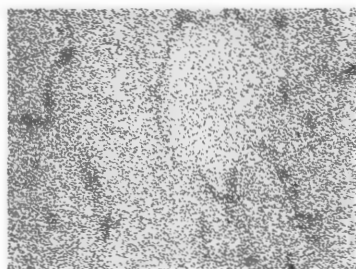
S E



T i



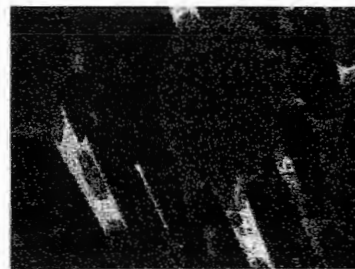
V



F e



S i



P



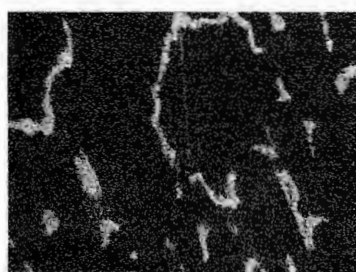
S



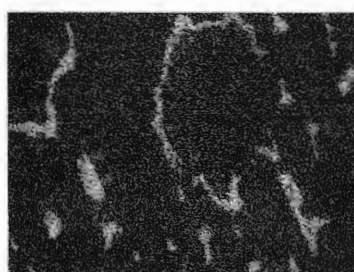
C a



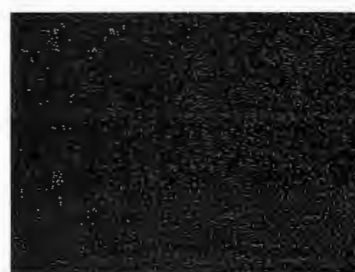
M g



A l



O



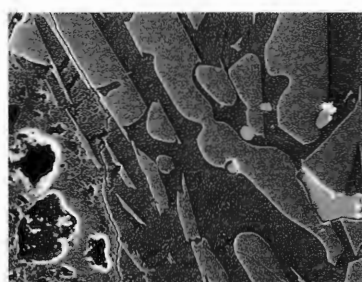
C u



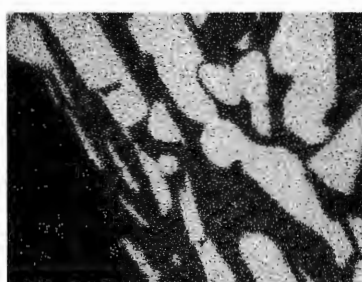
N i

100μm

(×400写真を1/2に縮小)



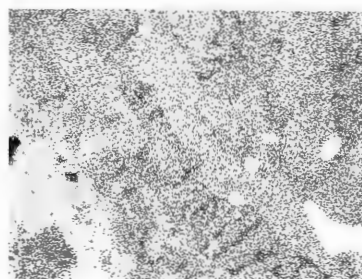
S E



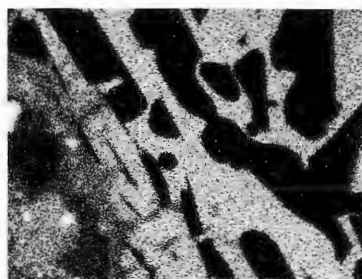
T i



V



F e



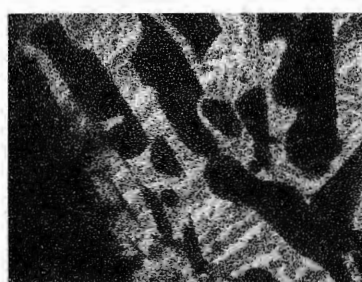
S i



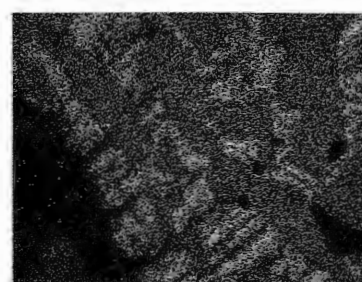
P



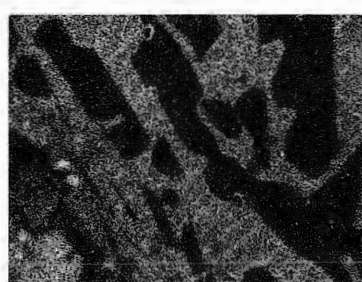
S



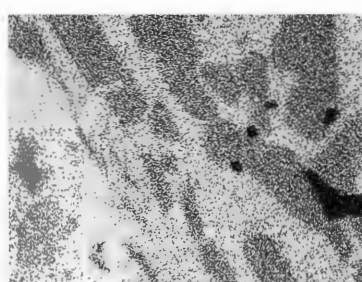
C a



M g



A l



o



C u



N i

200μm

(×200写真を1/2に縮小)

報告書抄録

ふりがな	じょうばんじどうしゃどういせきちょうさほうこく							
書名	常磐自動車道遺跡調査報告10							
シリーズ名	福島県文化財調査報告書							
シリーズ番号	第332集							
編著者名	佐久間ふく子 安田稔 佐久間芳雄 内村勝男 飯村均 福島稔 鈴木孝秀 吉田功 宮田安志 佐藤祐雄 酒井優 井憲治 石井洋光							
編集機関	財団法人福島県文化センター 遺跡調査課							
所在地	〒960 福島県福島市春日町5-54				TEL 0245-34-2733		FAX 0245-36-3781	
発行年月日	西暦 1997年 2月 28日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積㎡	調査原因
収所遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "			
しらいわほりのうち 白岩堀ノ内	ふくしまけん 福島県いわき市 よつらまらななま 四倉町中島 あどさんたんた 字三反田 ほか	07204	1025	37 07 24	140 57 01	19950412～ 19951222 19960403～ 19960521	34,300 1,500	道路(常磐自動車道) 建設に伴う事前調査
所有遺跡名	種類	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
白岩堀ノ内	集落跡 生産跡	弥生・古墳 ↓ 平安・近代	竪穴住居跡 (16) 土坑 (20) 土器埋設遺構 (4) 溝跡 (16) 製鉄炉 (1) 水田跡 (6) 焼土跡 (1) 遺物包含層 (6)		縄文土器・弥生土器・土 師器・須恵器・陶磁器・ 石器・石製品・羽口・炉 壁・鉄滓・鉄製品・銭貨 ・鉄製品・木製品・木炭		弥生時代中期末の集落跡、古墳時 代前・中期の小規模な集落跡、奈 良・平安時代の集落跡・水田跡・ 製鉄炉跡、近代の粘土採掘跡・畑 跡・流路など。弥生時代中期末の 鉄製銚の出土は注目される。	

福島県文化財調査報告書第332集

常磐自動車道遺跡調査報告10

白岩堀ノ内遺跡

本文

平成9年2月28日発行

編集 財団法人福島県文化センター(遺跡調査課)

発行 福島県教育委員会 (〒960) 福島市杉妻町2-16

財団法人福島県文化センター(〒960) 福島県春日町5-54

日本道路公団東北支社いわき工事事務所

(〒973) いわき市内郷高坂町八反田28-1

印刷 株式会社山川印刷所 (〒960-21) 福島市庄野清水尻1-10

本報告書は中性紙を使用しています。

(本文 年史用紙 80kg)
(写真版 ニューVマット 90kg)